

3. 所長を委員長とする。
4. 運営委員会は、委員長、原子炉主任技術者、電気主任技術者、ボイラー・タービン主任技術者及び各室長に加え、委員長が指名した者で構成する。

第3節 主任技術者

(原子炉主任技術者の選任)

第8条 社長は、原子炉主任技術者及び代行者を、原子炉主任技術者免状を有する者であつて、以下の(1)から(4)のいずれかの業務に通算して3年以上従事した経験を有する者の中から選任する。

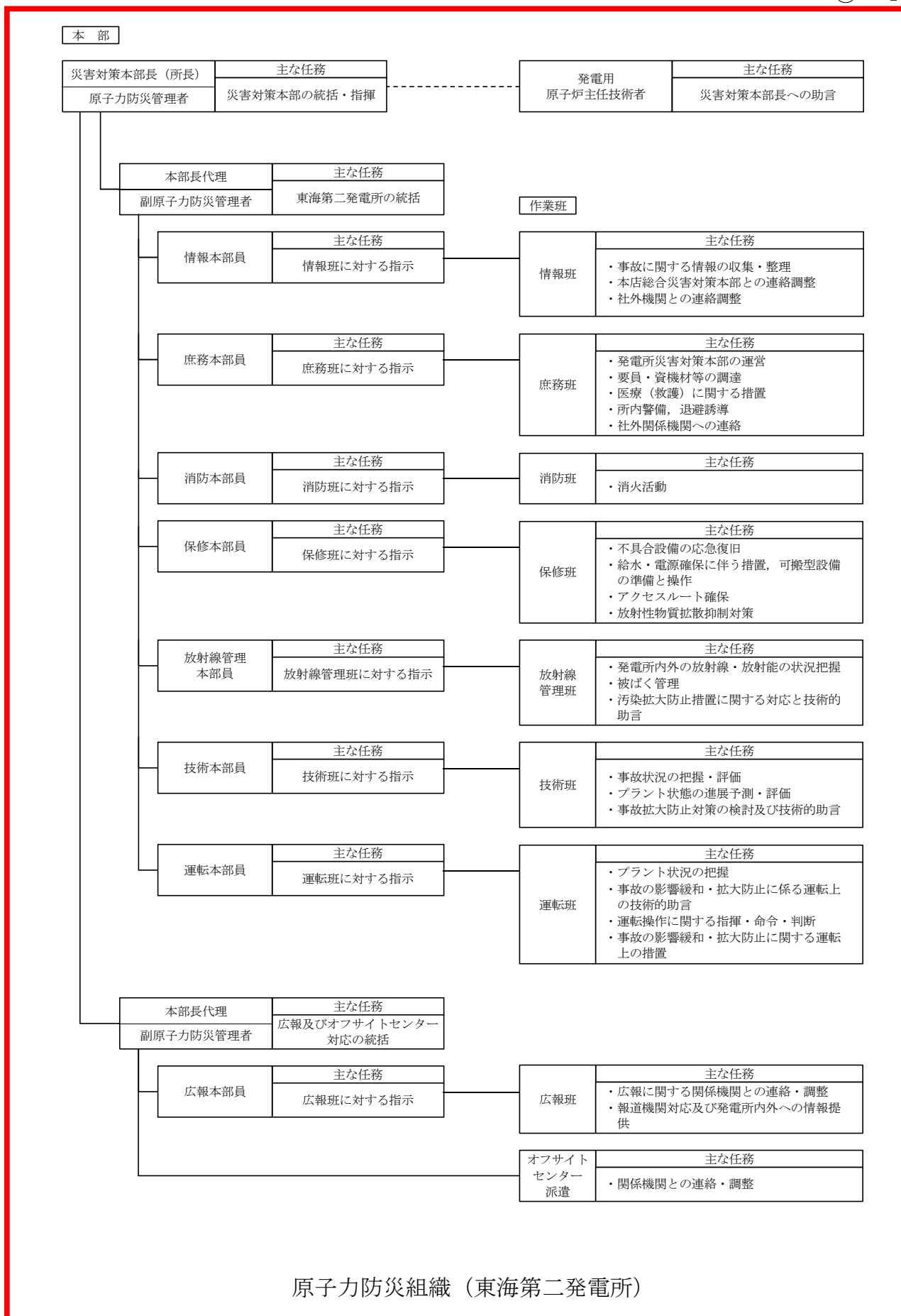
- (1) 原子炉施設の工事又は保守管理に関する業務
 - (2) 原子炉の運転に関する業務
 - (3) 原子炉施設の設計に係る安全性の解析及び評価に関する業務
 - (4) 原子炉に使用する燃料体の設計又は管理に関する業務
2. 原子炉主任技術者は、原子炉毎に選任する。
 3. 原子炉主任技術者は、能力等級特3級以上又は役割ランク3号以上に格付けされた者から選任する。
 4. 原子炉主任技術者は、発電管理室に所属し、発電所に駐在して、第9条（原子炉主任技術者の職務等）に定める職務を専任する。
 5. 代行者は、能力等級特4級以上又は役割ランク4号以上に格付けされた者から選任する。
 6. 原子炉主任技術者が職務を遂行できない場合は、代行者と交代する。ただし、職務を遂行できない期間が長期にわたる場合は、第1項から第3項に基づき、原子炉主任技術者を選任し直す。

(電気主任技術者及びボイラー・タービン主任技術者の選任)

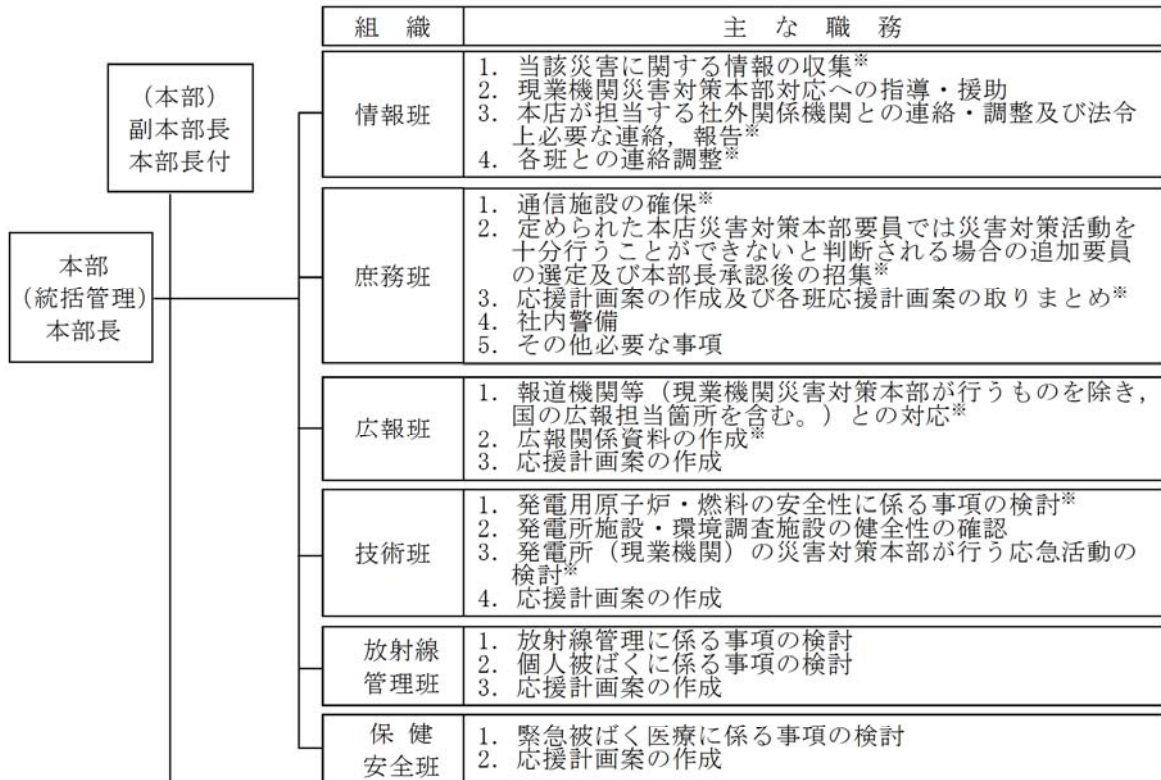
第8条の2 社長は、電気主任技術者及び代行者を第一種電気主任技術者免状を有する者の中から、ボイラー・タービン主任技術者及び代行者を第一種ボイラー・タービン主任技術者免状を有する者の中から選任する。

2. 電気主任技術者及びボイラー・タービン主任技術者は、電気工作物^{※1}の保安の監督を行ううえで必要な責任と権限を有する者とし、能力等級特3級以上又は役割ランク3号以上に格付けされた者から選任する。ただし、該当者がいない場合はこれに準じる者から選任する。
3. 代行者は、能力等級特4級以上又は役割ランク4号以上に格付けされた者から選任する。
4. 電気主任技術者及びボイラー・タービン主任技術者が職務を遂行できない場合は、それぞれの代行者と交代する。ただし、職務を遂行できない期間が長期にわたる場合は、第1項及び第2項に基づき、電気主任技術者及びボイラー・タービン主任技術者を選任し直す。

※1：電気工作物とは、当社の設置する電気事業の用に供する電気工作物（原子力発電工作物）、及び電気事業の用に供する電気工作物（原子力発電工作物）を監督する主任技術者が、同工作物と一括して監督する自家用電気工作物をいう。以下、第9条の2（電気主任技術者及びボイラー・タービン主任技術者の職務等）において同じ。



(別紙 1 - 4 は変更を予定している原子力防災組織の現時点における変更案を添付する。)



※ 警戒事態宣言時の主な職務を示す。なお、本店警戒本部の体制は、発生した事象に応じ本店警戒本部長がこの組織から必要要員をその都度指名する。

[本部長は、必要に応じ以下の組織を設置する]

組織	主な職務
原子力施設事態 即応センター	<ol style="list-style-type: none"> 1. 原子力規制委員会、緊急時対策監等の対応
原子力緊急時 後方支援班	<ol style="list-style-type: none"> 1. 状況把握・拠点選定・運営 2. 資機材調達・受入 3. 輸送計画の作成 4. 調達資機材の管理 5. 要員の入退管理 6. 要員・資機材の放射線管理 7. 住民避難行動等状況把握 8. スクリーニング計画作成 9. 避難住居要請対応計画作成 10. 国、自治体と連携した汚染検査、除染計画作成
原子力災害被災者 対応チーム	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自治体との連携 2. 避難所対応 3. 被災者対応 4. 地域モニタリングの計画作成
原子力損害賠償 チーム	<ol style="list-style-type: none"> 1. 補償相談・広報計画作成 2. 初期の補償窓口 3. 本格体制の準備 4. 法令手続き

原子力防災組織（本店）

(別紙 1 - 4 は変更を予定している原子力防災組織の現時点における変更案を添付する。)

東海第二発電所
原子力事業者防災業務計画

(抜 粋)

平成29年3月

日本原子力発電株式会社

6. 緊急事態応急対策

原子力緊急事態宣言があったときから原子力緊急事態解除宣言があるまでの間において、原子力災害（原子力災害が生ずる蓋然性を含む。）の拡大の防止を図るため実施すべき応急の対策をいう。

7. 原子力災害中長期対策

原子力緊急事態解除宣言があったとき以後において、原子力災害（原子力災害が生ずる蓋然性を含む。）の拡大の防止又は原子力災害の復旧を図るため実施すべき対策（原子力事業者が原子力損害の賠償に関する法律の規定に基づき、同法第 2 条第 2 項に規定する原子力損害を賠償することを除く。）をいう。

8. 原子力事業者

次に掲げる者（原子力災害対策特別措置法施行令（平成 12 年政令 195 号）で定めるところにより、原子炉の運転のための施設を長期間にわたって使用する予定がない者であると原子力規制委員会が認めて指定した者を除く。）をいう。

- (1) 核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律（昭和 32 年法律第 166 号。以下「規制法」という。）第 13 条第 1 項の規定に基づく加工の事業の許可（承認を含む。本節において同じ。）を受けた者
- (2) 規制法第 23 条第 1 項の規定に基づく試験研究用等原子炉の設置の許可（承認を含む。船舶に設置する試験研究用等原子炉についての許可を除く。）を受けた者
- (3) 規制法第 43 条の 3 の 5 第 1 項の規定に基づく発電用原子炉の設置の許可（承認を含む）を受けた者
- (4) 規制法第 43 条の 4 第 1 項の規定に基づく貯蔵の事業の許可を受けた者
- (5) 規制法第 44 条第 1 項の規定に基づく再処理の事業の指定（承認を含む。）を受けた者
- (6) 規制法第 51 条の 2 第 1 項の規定に基づく廃棄の事業の許可を受けた者
- (7) 規制法第 52 条第 1 項の規定に基づく核燃料物質の使用の許可を受けた者（同法第 56 条の 3 第 1 項の規定により保安規定を定めなければならないとされている者に限る。）

9. 原子力事業所

原子力事業者が原子炉の運転等を行う工場又は事業所をいう。

②-6

10. 原子力防災管理者

原災法第 9 条第 2 項の規定に基づき、発電所を統括管理する東海第二発電所長をいう。

(2) 本店

- ① 発電管理室長は、本店に別図 2 - 3 に示す本店総合災害対策本部（以下「本店対策本部」という。）の組織を整備する。
- ② 本店対策本部の組織は、この計画に従い、本店における緊急事態応急対策活動を実施し、かつ原子力災害の発生又は拡大等を防止するために発電所が行う対策活動を支援する。
- ③ 社長は、発電所対策本部長が非常事態宣言をした場合、指定行政機関等と連携して緊急事態応急対策等を実施する。

② - 6

3. 原子力防災管理者、副原子力防災管理者の職務

(1) 原子力防災管理者の職務は、次のとおりとする。

- ① 原子力防災組織の統括
- ② 警戒事象発生に伴う連絡
- ③ 原災法第 10 条第 1 項の規定による通報
- ④ 原災法第 25 条第 1 項の規定による応急措置
- ⑤ 第 2 章に規定する原子力災害事前対策の実施、第 3 章に規定する緊急事態応急対策等の実施及び第 4 章に規定する原子力災害中長期対策の実施（①から④までの職務を除く。）
- ⑥ 第 5 章に規定する他原子力事業所等への協力

(2) この計画において、原子力防災管理者の職務として記載している事項については、あらかじめ定めるところにより他の者に実施させ、その結果の確認をもって原子力防災管理者が実施したものとみなす。

(3) 副原子力防災管理者は、原子力防災管理者があらかじめ別表 2 - 4 のとおり任命する者とし、その職務は次のとおりとする。

- ① 原子力防災管理者の補佐
- ② 原子力防災管理者が発電所にいないときの原子力防災組織の統括

(4) 原子力防災管理者は、旅行又は疾病その他の事故のためその職務を行うことができない場合、副原子力防災管理者に別表 2 - 4 に定める代行順位に従って、原子力防災管理者の職務を代行させる。

(5) 原子力防災管理者、副原子力防災管理者を選任又は解任したときは、原子力防災管理者は、様式 3 を用いて、選任又は解任した日から 7 日以内に原子力規制委員会、茨城県知事及び東海村長に届け出る。

(6) 原子力防災管理者は、他の原子力事業所において原子力災害が発生した場合、その評価及び事象の原因究明結果を踏まえ、必要に応じ再発防止対策を講じることにより、原子力災害の未然防止に努める。

第2節 原子力防災組織等の運営方法

1. 宣言及び解除の方法

②-5

(1) 警戒事態の宣言

① 発電所

- a. 原子力防災管理者は、前節1.(1)に該当する事象が発生した場合には、直ちに警戒事態を宣言する。
- b. 原子力防災管理者は、警戒事態を宣言した場合、直ちに別図2-1の原子力防災組織に準じて発電所警戒本部を設置し、自ら発電所警戒本部長として発電所警戒本部を統括管理する。原子力防災管理者は、警戒事態を宣言した場合、別図2-5に準じて直ちに発電管理室長に報告する。

② 本店

発電管理室長は、発電所における警戒事態宣言の報告を受けた場合、直ちに社長に報告するとともに、別図2-5に準じて社内関係箇所を招集する。また、報告を受けた社長は、直ちに別図2-3に準じた本店警戒本部を設置し、自ら本店警戒本部長として、本店警戒本部を統括管理する。

(2) 警戒事態の解除

① 発電所

発電所対策本部長は、次の場合、本店対策本部と協議のうえ、警戒事態を解除し、発電所警戒本部を解散することができる。

- a. 原子力規制委員会原子力事故警戒本部が設置されている場合にあっては、当該本部が廃止され、かつ、地方公共団体等の警戒本部が廃止された後、設備の復旧等の復旧対策が終了して通常組織で対応可能と判断した場合
- b. 原子力規制委員会原子力事故警戒本部が設置されていない場合にあっては、設備の復旧等の復旧対策が終了して通常組織で対応可能と判断した場合

② 本店

本店対策本部長は、発電所対策本部長から警戒事態の解除について上申があった場合、本項(2)①a. 又はb. の条件に合致していることを確認したうえで、通常組織で対応可能と判断した場合、警戒事態を解除することができる。

(3) 非常事態の宣言

②-5

① 発電所

- a. 原子力防災管理者は、前節1.(2)に該当する事象が発生した場合には、直ちに非常事態を宣言する。
- b. 原子力防災管理者は、非常事態を宣言した場合、直ちに別図2-1の原子力防災組織による発電所対策本部を設置し、自ら発電所対策本部長として発電所対策本部を統括管理する。原子力防災管理者は、非常事態を宣言した場合、別図2-5により直ちに発電管理室長（発電所が輸送物の安全に責任を有する事業所外運搬の場合は、災害が発生した場所に応じて、経理・資材室

②-5

長又は発電管理室長、以下同じ。)に報告する。

- c. 原子力防災管理者は、不測の事態が発生した場合（遠隔操作可能な装置を使用する場合等を含む。）、発電所対策本部の要員の中から必要に応じて特命班を編成させるとともに、本部員等から特命班を指揮する者を指名して必要な対応にあたらせる。

② 本店

発電管理室長又は経理・資材室長は、発電所における非常事態宣言の報告を受けた場合、直ちに社長に報告するとともに別図 2-5 により社内関係箇所を招集する。また、報告を受けた社長は、直ちに別図 2-3 に定める本店対策本部を設置し、自ら本店対策本部長として、本店対策本部を統括管理する。

(4) 非常事態の解除

① 発電所

発電所対策本部長は、次の場合、本店対策本部と協議のうえ、非常事態を解除し、発電所対策本部を解散することができる。

- a. 原子力緊急事態宣言が発出されていた場合にあっては、原子力緊急事態解除宣言が公示され、かつ、原災法第 22 条により設置された地方公共団体の災害対策本部が廃止された後、原子力災害中長期対策が終了して通常組織で対応可能と判断した場合
- b. 原子力緊急事態宣言が発出されていない場合にあっては、原子力災害の原因の除去及び被害範囲拡大防止の措置を講じ、原子力防災専門官の助言を受けて、第 1 章第 4 節 1. (2) の地域防災計画を有する地方公共団体の意見も聴いたうえで、事象が収束したと判断した場合

② 本店

本店対策本部長は、発電所対策本部長から非常事態の解除について上申があった場合、本項(4)① a. 又は b. の条件に合致していることを確認したうえで、通常組織で対応可能と判断した場合、非常事態を解除することができる。

2. 権限の行使

- (1) 警戒事態又は非常事態が宣言された場合、発電所の緊急事態応急対策等の活動に関する一切の業務は、発電所警戒本部又は発電所対策本部のもとで行う。
- (2) 発電所対策本部長は、職制上の権限を行使してこの計画に基づく緊急事態応急対策等の活動を行う。ただし、権限外の事項であっても、緊急に実施する必要があるものについては、臨機の措置をとることとする。なお、権限外の事項については、行使後速やかに所定の手続きをとるものとする。
- (3) 発電所対策本部の要員は、発電所対策本部長及び班長等の指揮のもとで、自己の属する班の業務、自己の役割・任務等に基づき緊急事態応急対策等の活動に従事する。

3. 要員の非常招集の方法

- (1) 原子力防災管理者は、警戒事態又は非常事態を宣言した場合、別図 2 - 1 に示す発電所対策本部の要員を非常招集するため、別図 2 - 6 に示す非常招集連絡経路を整備する。

なお、原子力防災管理者は、あらかじめ発電所対策本部の要員の動員計画を策定し、これを原子力防災組織の構成員に周知する。また、各室長は、平常時より緊急時に備え、休祭日・夜間における原子力防災要員の動向を把握する。

- (2) 発電管理室長は、発電所から警戒事態又は非常事態宣言の連絡があった場合、別図 2 - 3 に示す本店対策本部組織の要員を非常招集するため、別図 2 - 7 に示す非常招集連絡経路を整備する。また、あらかじめ本店対策本部の要員の動員計画を策定し、これを本店対策本部組織の構成員に周知する。また、本店の各室長は、平常時より、緊急時に備え、休祭日・夜間における本店対策本部の組織要員の動向を把握する。

4. 通報連絡先の一覧表の整備

原子力防災管理者は、通報連絡に万全を期するため以下の通報連絡先の一覧表を整備しておく。

- (1) 別図 2 - 9 - 1 に示す警戒事象に基づく連絡経路
- (2) 別図 2 - 5 に示す非常事態宣言時の連絡
- (3) 別図 2 - 8 に示す発電所対策本部が設置された後の連絡
- (4) 別図 2 - 9 - 2 及び別図 2 - 9 - 3 に示す原災法第 10 条第 1 項に基づく通報（報告）経路
- (5) 別図 2 - 9 - 4 及び別図 2 - 9 - 5 に示す原災法第 10 条第 1 項に基づく通報後の報告（連絡）経路

第 3 節 放射線測定設備及び原子力防災資機材の整備

1. 周辺監視区域付近の放射線測定設備の設置、検査

原子力防災管理者は、原災法第 11 条第 1 項に基づき別図 2 - 10 に示す放射線測定設備（以下「モニタリングポスト」という。）を設置し、次の各項に定める各担当マネージャーに次の措置を講じさせる。

- (1) 電気・制御グループマネージャーは、モニタリングポストをその検出部、表示及び記録装置その他の主たる構成要素の外観において、放射線量の適正な検出を妨げるおそれのない状態を維持するために年 1 回点検する。また、設置している地形の変化その他周辺環境の変化により、放射線量の適正な検出に支障を生ずるおそれのない状態を維持するために年 1 回点検する。

2. 体制の整備

原子力防災管理者は、当社が運搬を委託した者の協力を得て、事業所外運搬において事故が発生した場合に次に掲げる措置を的確に実施するための体制を整備する。

- (1) 立入り禁止区域の設定及び退避等の措置
- (2) 環境放射線モニタリングの実施
- (3) 消火、延焼防止措置の実施
- (4) 負傷者等の救出
- (5) 輸送物の安全な場所への移動
- (6) 漏えいの拡大防止措置の実施及び汚染の除去、遮へい対策の実施
- (7) 国、都道府県、市町村、海上保安部及び原子力緊急時支援・研修センターへの迅速な通報、連絡
- (8) その他、必要な措置の実施

第3章 緊急事態応急対策等の実施

第1節 通報、連絡等

②-8

1. 警戒事態及び非常事態の宣言

(1) 警戒事態の宣言

原子力防災管理者は、第2章第1節1.(1)に該当する事象が発生した場合、第2章第2節の「原子力防災組織等の運営方法」に基づき、直ちに警戒事態を宣言し、社内連絡の実施及び発電所警戒本部の要員の非常招集を行うとともに発電所警戒本部における指揮等を行う。

(2) 非常事態の宣言

- a. 原子力防災管理者は、第2章第1節1.(2)に該当する事象が発生した場合、第2章第2節の「原子力防災組織等の運営方法」に基づき、直ちに非常事態を宣言し、社内連絡の実施及び発電所対策本部の要員の非常招集を行うとともに発電所対策本部における指揮等を行う。
- b. 原子力防災管理者は、本節3.により通報（事業所外運搬に係るものを除く。）を行った場合、SPDSによる原子力規制委員会へのデータ伝送状態に異常がないことを確認する。

2. 原子力防災施設等の立上げ

- (1) 原子力防災管理者（発電所に対策本部が設置されたときは発電所対策本部長。

- ④ 発電所敷地周辺における放射線及び放射性物質の測定結果
 - ⑤ 放出放射性物質の種類、量、放出場所及び放出状況の推移等
 - ⑥ 気象状況
 - ⑦ 収束の見通し
 - ⑧ 放射性物質影響範囲の推定結果
 - ⑨ その他必要と認める事項
- (2) 発電所対策本部情報班長は、前号により収集した事故状況を様式10にまとめ、別図2-9-4に定める報告（連絡）経路により、内閣総理大臣、原子力規制委員会、茨城県知事、東海村長、原子力防災専門官、原子力緊急時支援・研修センター及び各関係機関に報告する。（事業所外運搬に係る事象の発生の場合にあっては、様式11に必要事項を記入し、別図2-9-5に示す報告（連絡）経路により報告する。）
- (3) 発電所対策本部情報班長は、本章第1節. から第3節. に掲げる通報及び報告を行った場合、その内容を記録として1年間保存する。

5. 通話制限

発電所対策本部庶務班長は、緊急事態応急対策等の活動時の保安通信を確保するため、必要と認めるときは、通話制限その他の必要な措置を講じる。

6. 原子力事業所災害対策支援拠点の活動

本店対策本部長は、事態に応じ第3章第1節2. (2) で設置した原子力事業所災害対策支援拠点に、復旧作業における放射線管理の実施、復旧資機材の受入等、発電所における事故復旧作業の支援を指示する。

第2節 応急措置の実施

②-7

1. 応急措置の実施の報告

発電所対策本部長は、本節の2. から13.（事業者外運搬に係る事象の発生の場合にあっては14.）に掲げる応急措置の実施にあたり、優先順位を考慮して、措置の内容及び実施担当者を明確にしたうえで、以下の事項に関する措置の実施計画を策定する。

- (1) 施設や設備の整備及び点検
- (2) 故障した設備等の応急の復旧
- (3) その他応急措置の実施に必要な事項

発電所対策本部情報班長は、その実施状況の概要を様式10に記入し、別図2-9-4に示す報告（連絡）経路により内閣総理大臣、原子力規制委員会、茨城県知事、東海村長、原子力防災専門官、原子力緊急時支援・研修センター及び各関係機関にファクシミリ装置及び電話で報告する。（事業所外運搬に係る事象の

発生の場合にあつては、様式 1 1 に記入し、別図 2 - 9 - 5 に示す報告（連絡）経路により報告する。）

2. 退避誘導及び構内入構制限

- (1) 発電所対策本部庶務班長は、発電所敷地内の原子力災害対策活動に従事しない者及び来訪者等（以下「発電所退避者」という。）を退避させるため退避誘導員を配置し、その業務にあたらせる。
- (2) 発電所対策本部庶務班長は、発電所退避者に対して、所内放送装置及びページング等により別図 2 - 2 3 に示す集合・退避場所へ退避すること及びその際の防護措置を周知する。なお、退避にあたっては関係機関と調整を行う。この際、来訪者に対しては、発電所対策本部広報班長と協力して災害状況の説明を行い、バス等による輸送もしくは退避誘導員の誘導により、退避場所への退避が迅速かつ適切に行えるよう特に配慮する。
- (3) 発電所対策本部長は、必要と認めたときは発電所退避者を発電所敷地外に退避させるよう指示する。また、この際、発電所対策本部庶務班長は、退避誘導員に発電所敷地外への発電所退避者の氏名を記録するよう指示する。
- (4) 発電所対策本部庶務班長は、非常事態の宣言中においては、発電所敷地内への入構を制限するとともに、発電所敷地内における原子力災害対策活動に関係のない車両の使用を禁止する。

3. 放射性物質影響範囲の推定及び避難の要請

- (1) 発電所対策本部放射線管理班長は、発電所内及び発電所敷地周辺の放射線並びに放射性物質の測定（以下「発電所緊急時モニタリング」という。）を行う。
- (2) 発電所対策本部放射線管理班長は、排気筒モニタのデータ等から外部に放出された放射性物質の量の評価を行う。
- (3) 発電所対策本部放射線管理班長は、発電所緊急時モニタリングのデータ、前号の評価結果、気象観測データ等から放射性物質影響範囲を推定する。
- (4) 発電所対策本部長は、オフサイトセンターの運営が開始される前において、放射性物質影響範囲の推定結果、発電所敷地外の周辺住民の避難等が必要と判断したとき直ちに茨城県知事、東海村長及び関係する市町村長へ周辺住民の避難等の措置を要請する。

4. 消火活動

原子力災害時に火災が発生した場合、発電所対策本部庶務班長及び運転班長は、速やかに火災の発生状況を把握し、安全を確保しつつ迅速に初期消火活動を行うとともに、ひたちなか・東海広域事務組合消防本部に火災の現場状況等を速やかに連絡する。

5. 原子力災害医療

- (1) 発電所対策本部保健安全班長は、負傷した者及び放射線による障害が発生した者又はそのおそれのある者（以下「負傷者等」という。）がいる場合は、速やかに負傷者等を放射線による影響の少ない場所に救出し、必要に応じ別図 2-24 に示す応急措置室に搬送する。
- (2) 発電所対策本部保健安全班長は、負傷者等に別図 2-24 に示す発電所内の応急処置室での応急処置及び除染等必要な措置を講じるとともに、必要に応じて初期被ばく医療機関である独立行政法人国立病院機構茨城東病院等 5 医療機関、二次被ばく医療機関である独立行政法人国立病院機構水戸医療センター、茨城県立中央病院及び茨城県（災害対策本部又は災害対策本部が設置されないときは原子力災害医療所管部課）並びに三次被ばく医療機関である国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構 放射線医学総合研究所に事前に負傷者等の状態、受けた放射線の種類、被ばく線量及び身体等に附着している放射性物質の核種、量等の情報を可能な限りにおいて連絡のうえ、医療機関への移送及び治療の依頼等の必要な措置を講じる。

なお、発電所対策本部長は、移送及び治療の際に放射線管理の知識を有する原子力防災組織の構成員を同行させる等の必要な措置を講じる。

6. 二次災害防止に関する措置

発電所対策本部の庶務班長、保健安全班長、放射線管理班長は、防災関係機関に負傷者等の治療や消火活動等を要請する場合には、事故の概要及び負傷者等の放射性物質による汚染の状況等、二次災害の防止のために必要な情報を伝達する。また、防災関係者到着時も、同じとする。

7. 汚染拡大の防止

- (1) 発電所対策本部放射線管理班長は、発電所内での不要な被ばくを防止するため、立入りを禁止する区域を標識により明示するほか必要に応じ所内放送装置又はページング等により周知する。また、発電所対策本部保修班長は、応急措置を実施する場所において放出放射性物質による汚染が確認された場合には、速やかに汚染の拡大防止及び放射性物質の除去に努める。
- (2) 発電所対策本部放射線管理班長は、必要に応じて原子力災害対策活動等に従事する者に対し、防護マスクの着用及び線量計の携帯等の防護措置を講じる。また、発電所対策本部保健安全班長は、発電所対策本部放射線管理班長の協力を得て、原子力災害対策活動等に従事する者に対し、安定ヨウ素剤を服用させる。

8. 線量評価

発電所対策本部放射線管理班長は、発電所退避者及び緊急事態応急対策等の活動を行う発電所対策本部の要員の線量評価を行う。

②-7, ②-9

9. 要員の派遣、資機材の貸与

発電所対策本部長は、発電所に係る事象が発生した場合、指定行政機関の長及び指定地方行政機関の長並びに地方公共団体の長その他の執行機関の実施する発電所敷地外における応急の対策が的確かつ円滑に行われるようにするため、本店対策本部長の協力を得て、別表3-3に定める要員の派遣、資機材の貸与その他必要な措置を講じる。

10. 広報活動

- (1) 発電所対策本部長は、オフサイトセンターの運営が開始されるまでに報道機関から発電所での取材要請を受けた場合、もしくは当社から緊急記者発表を行う必要があると認めた場合、その状況に応じて茨城県と協議のうえ、別図3-4に記載した場所に現地プレスセンターを開設する。
- (2) 発電所対策本部広報班長は、別図3-4に示す連絡経路により公表する内容を取りまとめ、定期的に記者発表を行う。
- (3) 発電所対策本部広報班長は、公表する内容を各関係箇所に連絡する。
- (4) 発電所対策本部長は、オフサイトセンターの運営が開始された場合は、同センター内の活動に必要な要員を派遣し、発電所の状況及び実施している応急措置の概要等周辺住民に役立つ正確かつきめ細かな情報を随時報告させることにより、同センターにおいて実施される合同記者発表に協力する。
- (5) 発電所対策本部長は、原子力災害に係る住民からの問い合わせに備え、必要に応じて、住民広報窓口を設置する。

11. 応急復旧

- (1) 発電所対策本部運転班長及び保修班長は、中央制御室の計器等による監視及び巡視点検の実施により、発電所設備の異常の状況、機器の動作状況等の把握に努める。
- (2) 本店対策本部長は、プラントメーカー及び協力会社への協力を要請するとともに、発電所が作成する応急復旧計画作成の支援を実施する。また、必要な資機材の確保及び応急復旧要員の派遣等を行う。
- (3) 発電所対策本部長は、応急復旧のための計画を作成し、当該計画に基づき速やかに復旧対策を実施する。

12. 原子力災害の拡大防止を図るための措置

発電所対策本部長は、各班長に対し以下に示す事項を指示し、原子力災害（原子力災害の生じる蓋然性を含む。）の拡大防止を図るための措置を講じる。

- (1) 発電所対策本部技術班長は、運転データにより発電用原子炉施設（以下「原子炉施設」という。）の運転状態を把握し、炉心の健全性を推定する。
- (2) 発電所対策本部運転班長及び放射線管理班長は、工学的安全施設等の動作状況

を把握し、事故の拡大の可能性を予測するとともに、放射性物質が外部へ放出される可能性を評価する。

- (3) 発電所対策本部技術班長及び放射線管理班長は、施設内の放射線量の推移等から、外部へ放出される放射性物質の量の予測を行う。
- (4) 発電所対策本部運転班長は、事故の拡大のおそれがある場合には、事故拡大防止に関する運転上の措置を検討する。
- (5) 発電所対策本部各班長は、その他の原子炉施設について、施設の保安維持を行う。
- (6) 発電所対策本部放射線管理班長は、環境への放射性物質の放出状況及び気象状況から、事故による周辺環境への影響を予測する。

13. 被災者相談窓口の設置

本店対策本部長は、原子力緊急事態解除宣言前であっても、可能な限り速やかに被災者の損害賠償請求等に対応するため、相談窓口を設置する。

14. 事業所外運搬に係る事象の発生における措置

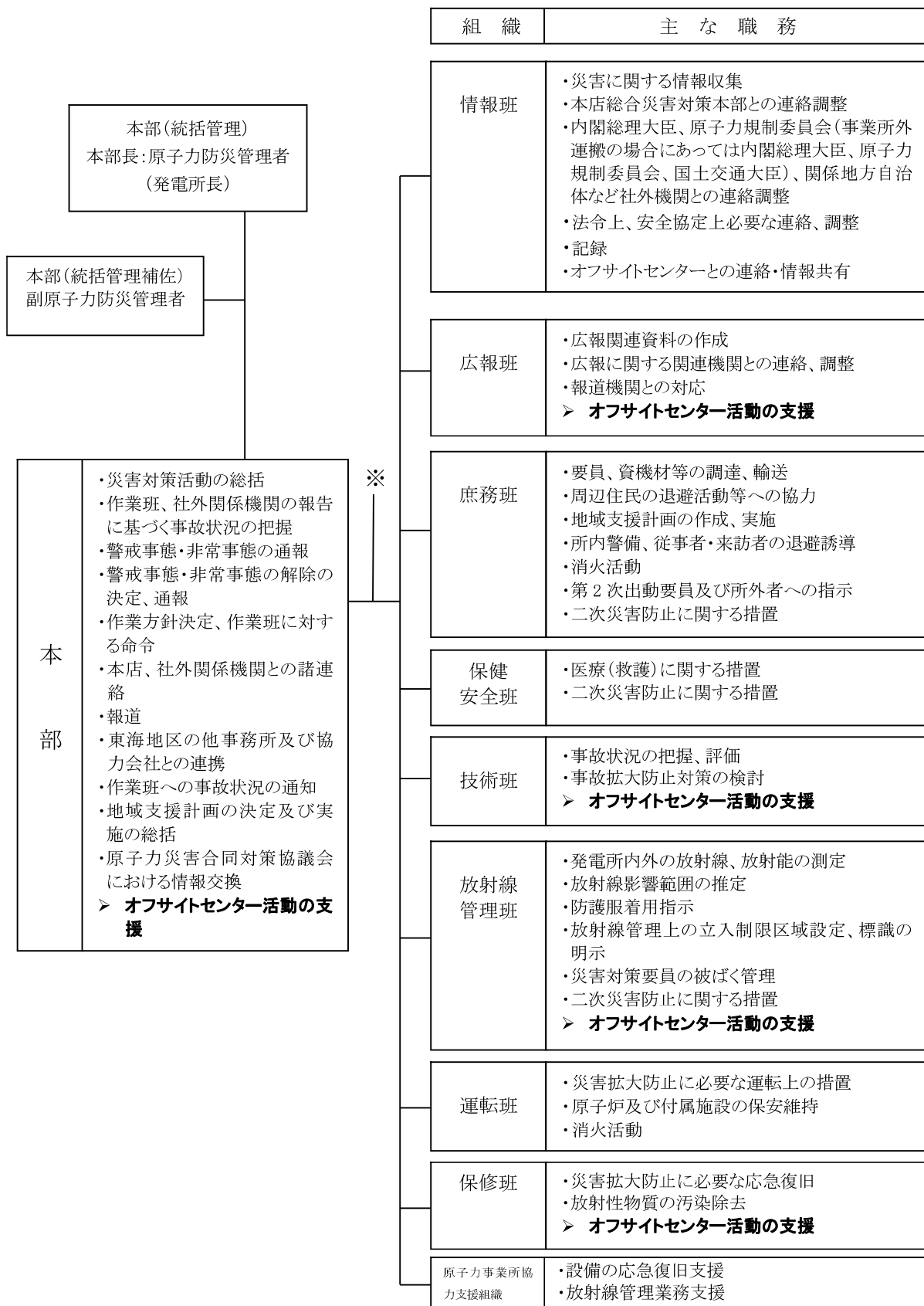
- (1) 発電所対策本部長は、事業所外運搬に係る応急措置を行う場合、本店等の協力を得て、直ちに別表 3 - 3 に定める要員の派遣、資機材の貸与等必要な措置を講じる。
- (2) 現地に派遣された要員は、当社が運搬を委託した者、最寄りの消防機関、警察及び海上保安部と協力して、事象の状況を踏まえ、次に掲げる措置を講じ、原子力災害の発生の防止を図る。
 - ①立入り禁止区域の設定及び退避等の実施
 - ②環境放射線モニタリングの実施
 - ③消火、延焼防止措置の実施
 - ④負傷者等の救出
 - ⑤輸送物の安全な場所への移動
 - ⑥漏えいの拡大防止措置の実施及び汚染の除去、遮へい対策の実施
 - ⑦その他、必要な措置の実施

第 3 節 緊急事態応急対策の実施

1. 該当事象発生時の報告

発電所対策本部長は、原災法第 15 条第 1 項に基づく別表 3 - 5 に定める報告基準に至った場合は、様式 1 2 を用いて、別図 2 - 9 - 4 (事業所外運搬の場合にあっては様式 1 3 を用いて、別図 2 - 9 - 5) に示す報告 (連絡) 経路に基づき、内閣総理大臣、原子力規制委員会、茨城県知事、東海村長、原子力防災専門官、原子力緊急時支援・研修センター及び各関係機関にファクシミリ装置及び電話で

原子力防災組織及び職務

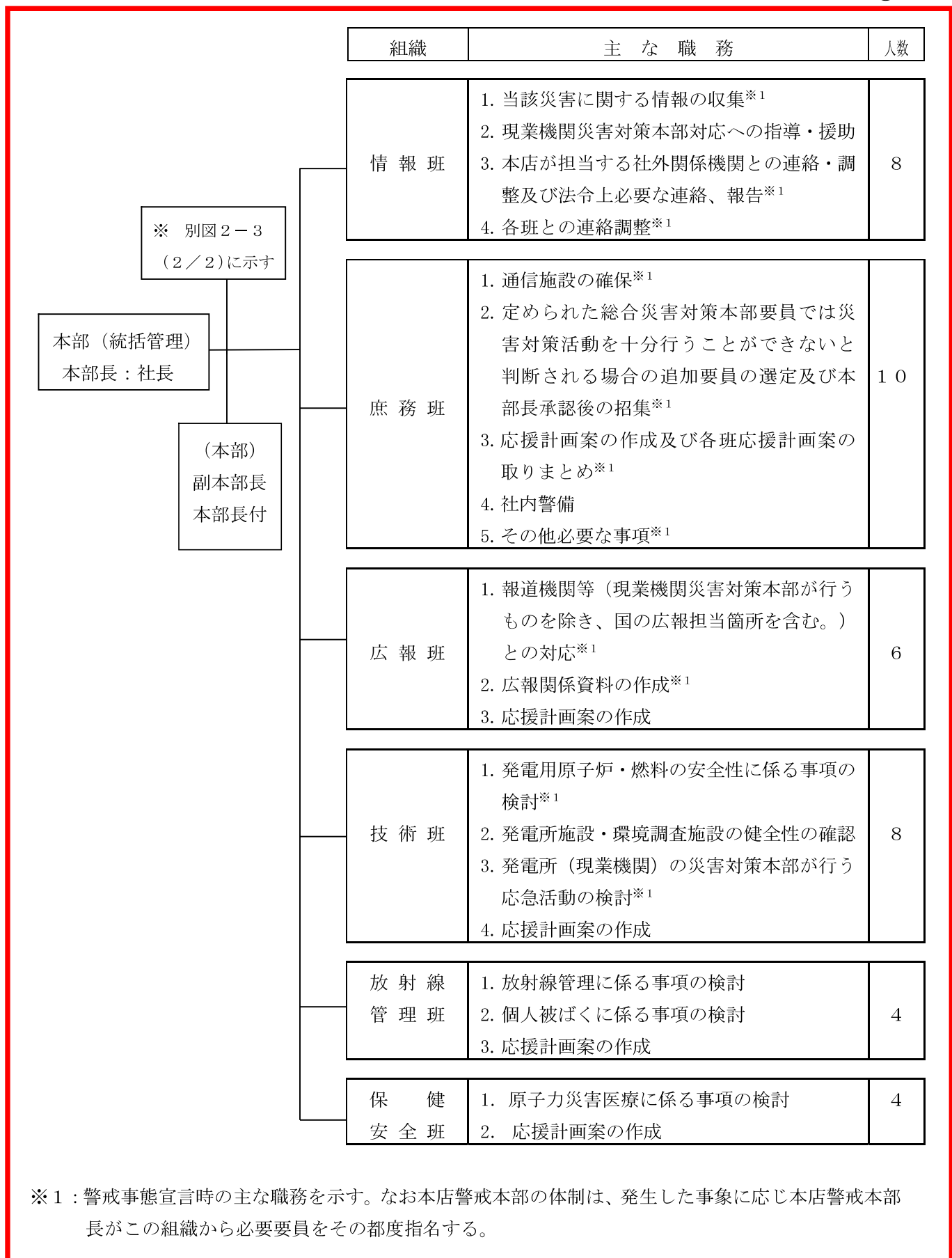


※:不測の事態に対応するため、本部長が必要に応じて特命班を設置(遠隔操作が可能な装置等の操作を含む)する。

注:太字は、第10条通報後に付加される職務

本店総合災害対策本部の組織及び職務

②-8



別図2-3

(2/2)

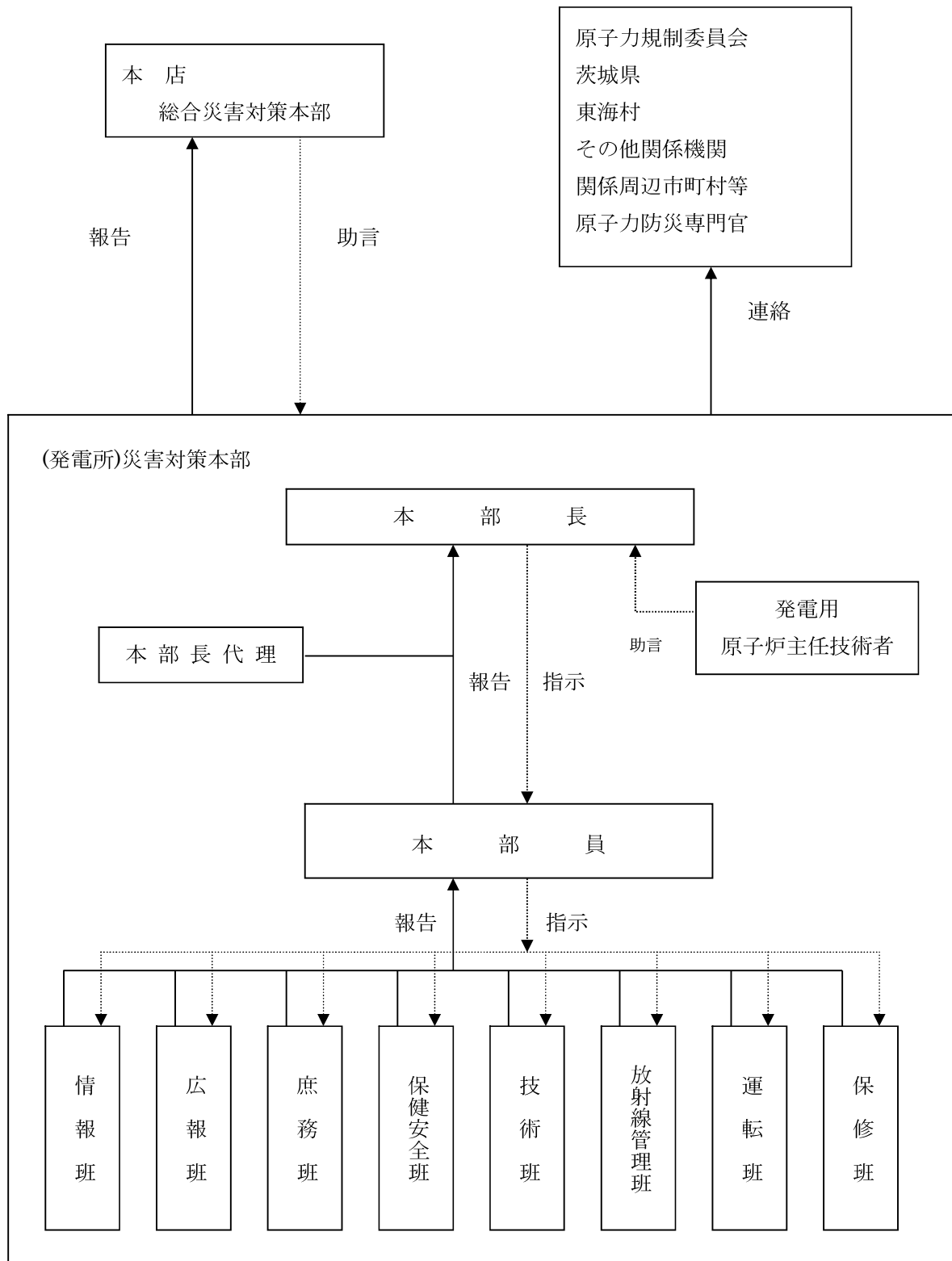
②-8

本部長は、必要に応じ以下の組織を設置する。

組 織	主 な 職 務	人 数
原子力施設事態即応センター班	1. 原子力規制委員会、緊急時対策監等の対応	4
原子力緊急時後方支援班	1. 状況把握・拠点選定・運営 2. 資機材調達・受入 3. 輸送計画の作成 4. 調達資機材の管理 5. 要員の入退管理 6. 要員・資機材の放射線管理 7. 住民避難行動等状況把握 8. スクリーニング計画作成 9. 避難住居要請対応計画作成（空社宅提供等） 10. 国、自治体と連携した汚染検査、除染計画作成	10
原子力災害被災者対応チーム	1. 自治体との連携 2. 避難所対応 3. 被災者対応 4. 地域モニタリングの計画作成	30
原子力損害賠償チーム	1. 補償相談・広報計画作成 2. 初期の補償窓口 3. 本格体制の準備 4. 法令手続き	20

本
部
長

発電所災害対策本部設置後の報告連絡経路



原子力防災組織の改善に関する考え方

1. 重大事故等の収束に向けた原子力防災管理者等の役割の明確化，原子力防災組織の増員及び発電用原子炉主任技術者の原子力防災組織内における位置付けの明確化

重大事故等の事故収束に向けて，原子力防災管理者，副原子力防災管理者及び機能班について役割を明確にするとともに人数を増加させた原子力防災組織を確立する。

また，発電用原子炉主任技術者については，既に号炉ごとに選任し保安監督させるとともに発電所の組織とは独立した立場としているが，東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故において災害対応が長期化したことを踏まえ，原子力防災管理者へ助言及び指示する位置付けとすべく原子力防災組織内に位置付け，確実な事故収束を図る。

2. 原子力事業所災害対策支援拠点に関する事項（候補地の選定，必要な要員及び資機材の確保）

東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故において，発電所外からの支援に係る対応拠点を活用したことを踏まえ，東海第二発電所においても同様な機能を分散して有する候補地をあらかじめ選定し，必要な要員及び資機材を確保する。候補地点の選定にあたっては，原子力災害発生時における風向等を考慮し，東海第二発電所からの方位，距離（約 20km 圏内外）が異なる地点を複数選定する。

3. 原子力緊急事態支援組織に関する事項（他の原子力事業者と共同で組織を設置，定期的な訓練の実施，組織のさらなる拡充に向けての検討）

東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故において，放射性物質による汚染により災害対策要員が発電所内に立ち入ることができず，ロボット，無人機等遠隔操作が可能な資機材を活用して発電所の災害状況を確認した事を踏まえ，東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故対応で使用した資機材と同様な資機材をあらかじめ確保し，訓練により操作に習熟する。現在，原子力事業者共同で支援組織を運用しており，平成 28 年 3 月に要員及び資機材を増強し，平成 28 年 12 月より美浜原子力緊急事態支援センターとして本格的に運用を開始している。

4. シナリオ非提示型の原子力防災訓練の実施

東京電力株式会社福島第一原子力発電所事故において，従来から原子力防災訓練で実施してきたシナリオ通りには事態が進行せず，事態の進展が早かった事などから混乱を生じたことを踏まえ，防災訓練参加者に対しシナリオを非提示とする訓練形式を加えることにより，訓練参加者が自ら考え，活動する原子力防災訓練を実施していく。

品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通：7-2-3

原子炉施設保安委員会及び原子炉施設保安運営委員会要項

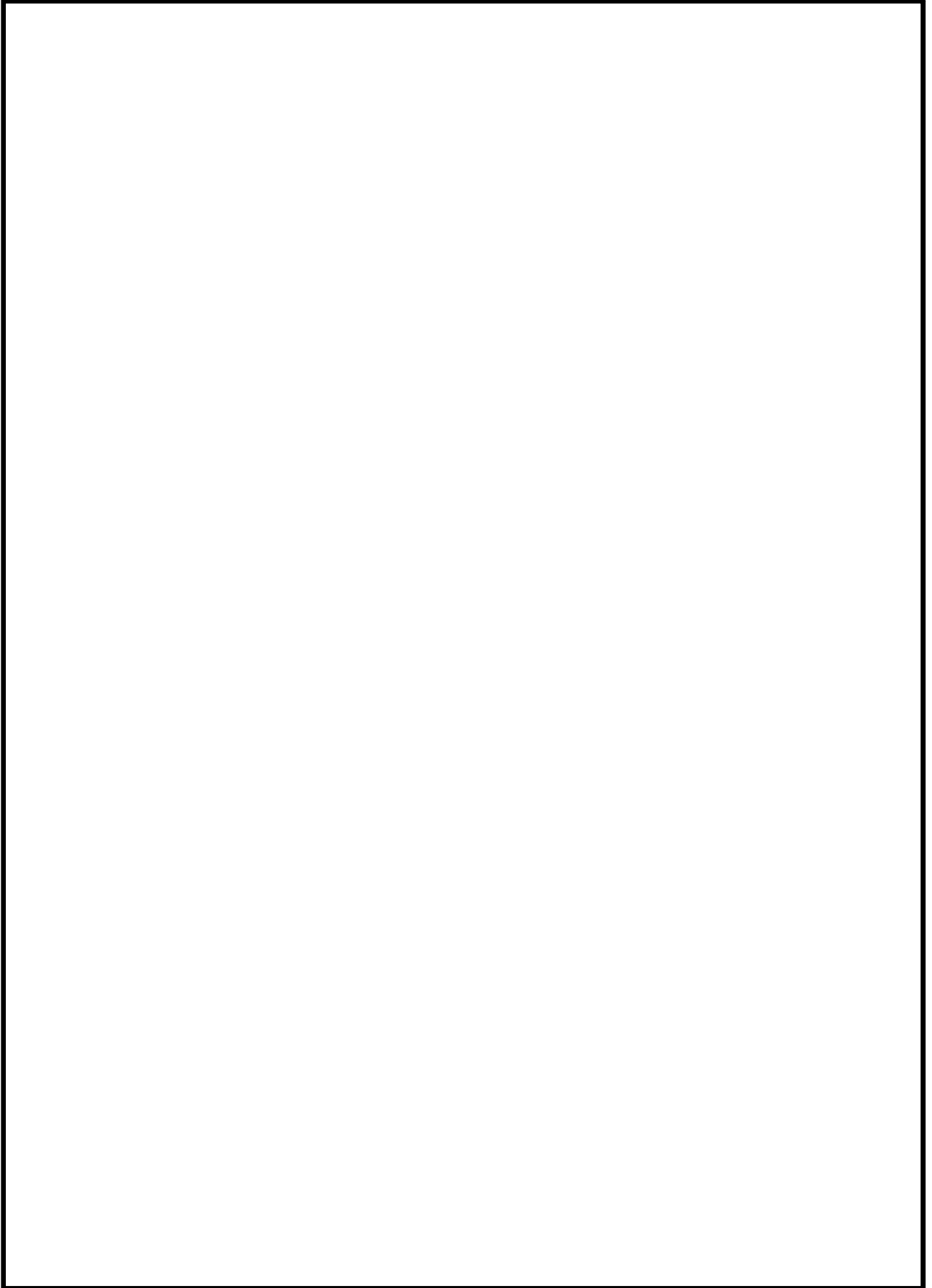
(抜 粋)

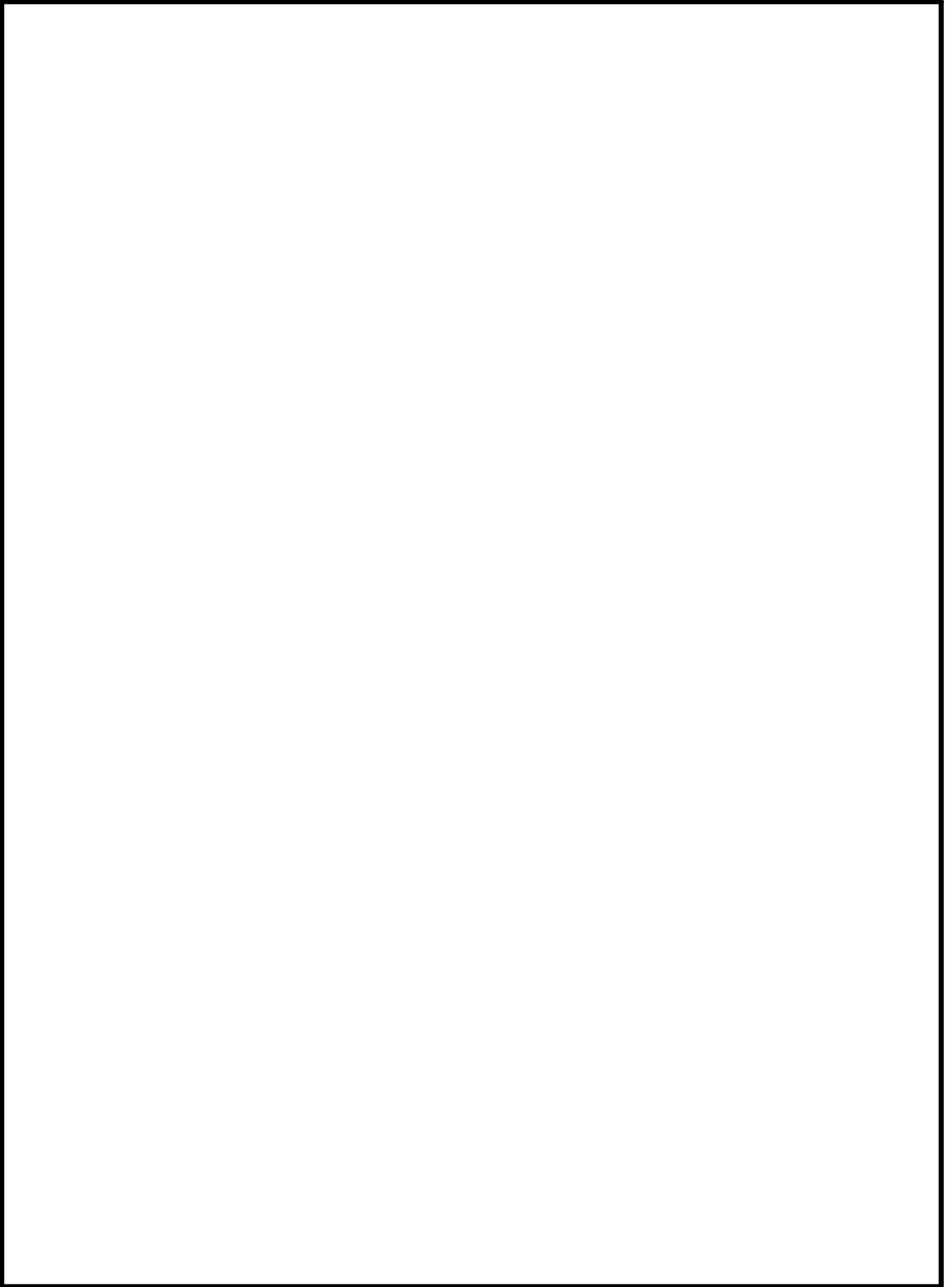
制定	平成18年 6月28日	発室規則第188号, 廃室規則第50号
最終改正	平成29年 4月19日	発室規則第762号, 廃室規則第463号
主管箇所	本店	発電管理室

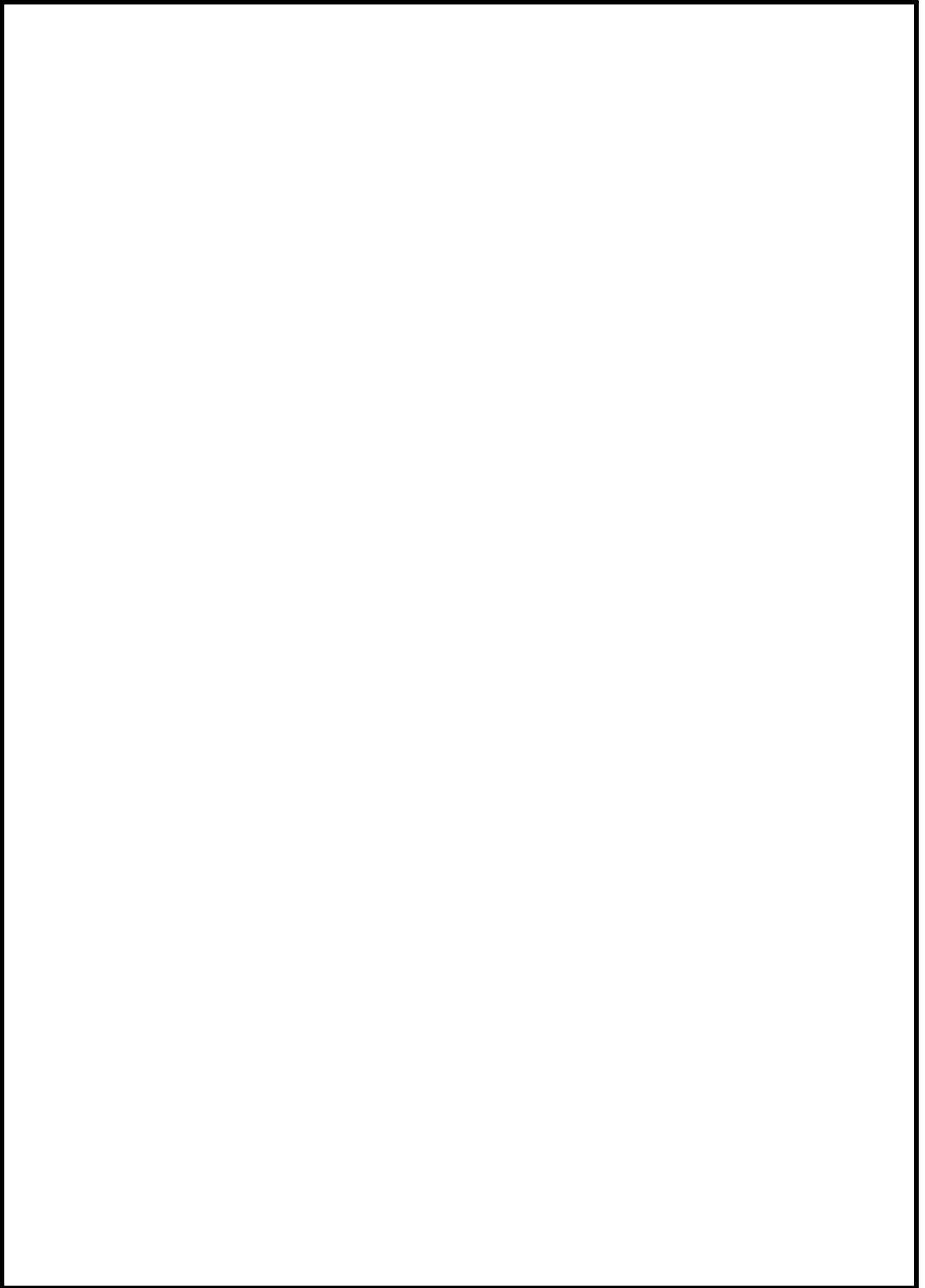
日本原子力発電株式会社

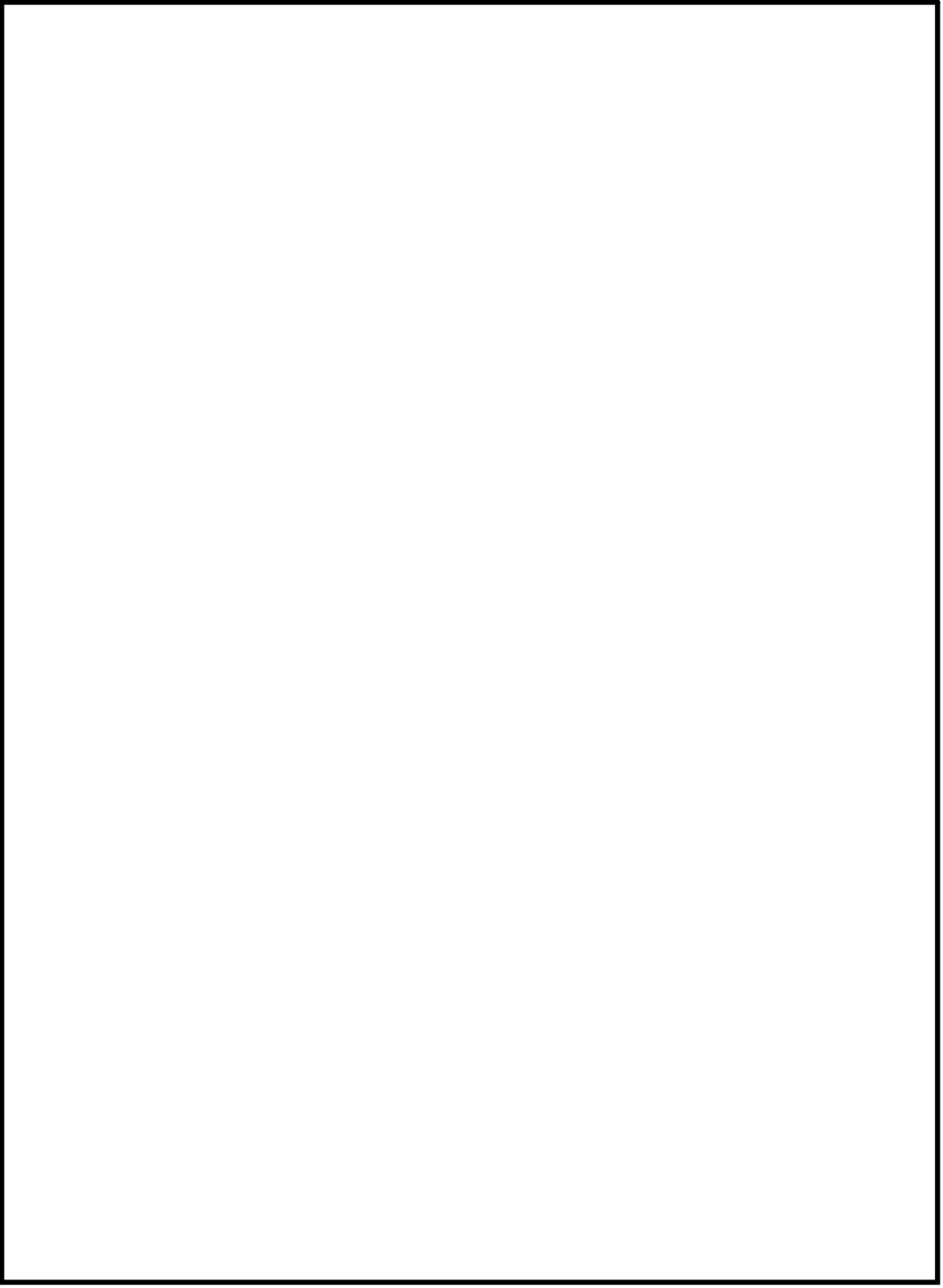
発 電 管 理 室

廃止措置プロジェクト推進室









品質マネジメントシステム規程管理番号

QM東Ⅱ：7-2-3-1

原子炉施設保安運営委員会運営要領

(抜 粋)

制定	平成15年12月17日	東二発所則第301号
最終改正	平成26年 6月27日	東二発所則第821号
主管箇所	東海第二発電所 運営管理室	

平成26年6月

東海第二発電所
運営管理室

原子炉施設保安委員会の開催実績（平成 28 年度）

②-14

月	日	審議内容	備考
4	25	・敦賀発電所 1 号炉において用いた資材等に含まれる放射性物質の放射能濃度の測定及び評価方法の認可の申請について	
5	23	・敦賀発電所 1 号炉において用いた資材等に含まれる放射性物質の放射能濃度の測定及び評価方法の認可の申請について	
7	21	・東海第二発電所 廃棄物処理棟中地下 1 階タンクベント処理装置室内における液体の漏えいに伴う立入制限区域の設定について（原因と対策）	
8	19	・敦賀発電所 原子炉施設保安規定の変更について（敦賀 1 号炉廃止措置に伴う変更）	
8	25	・敦賀発電所 原子炉施設保安規定の変更について（敦賀 1 号炉廃止措置に伴う変更）	
12	5	・東海第二発電所 廃棄物処理棟中地下 1 階タンクベント処理装置室内における液体の漏えいに伴う立入制限区域の設定について（原因と対策の補正）	
1	26	・敦賀発電所 1 号炉に係る廃止措置計画の認可の申請について（補正）[使用済燃料の未臨界性評価に係る部分以外]	
2	7	・敦賀発電所 1 号炉に係る廃止措置計画の認可の申請について（補正）[使用済燃料の未臨界性評価に係る部分]	
3	2	<ul style="list-style-type: none"> ・原子炉施設保安委員会及び保安運営委員会要項の変更について ・放射線障害予防規程の変更について ・保守管理業務要項の変更について ・運転管理業務要項の変更について ・廃止措置管理業務要項の変更について ・燃料管理業務要項の変更について ・放射性廃棄物管理業務要項の変更について ・放射線管理業務要項の変更について ・原子力災害対策業務要項の変更について ・運転責任者の合否判定等業務等に関する要項の変更について 	
3	16	・敦賀発電所 2 号機 B 非常用ディーゼル発電機シリンダ冷却水ポンプ軸の曲がりについて（原因と対策）	

東海第二発電所 原子炉施設保安運営委員会の開催実績 (平成 28 年度)

②-15

月	日	審議内容	備考
4	27	・東海第二発電所 日立造船製ドライキャスク支持構造物耐震補強工事に伴う使用済燃料乾式貯蔵容器移動時の燃料管理について	
5	25	・東海第二発電所 所則「災害対策要領」の改正について ・東海第二発電所 細則「災害対策要領に基づく要員の教育要領」の制定について ・東海第二発電所 日立造船製ドライキャスク支持構造物耐震補強工事に伴う使用済燃料乾式貯蔵容器移動時の燃料管理について	
6	17	・東海第二発電所 事故・故障トラブル情報の水平展開実施状況について ・東海第二発電所 定期事業者検査と自主検査の扱いについて ・東海第二発電所 所則「災害対策要領」の改正について (再審議) ・東海第二発電所 細則「災害対策要領に基づく要員の教育要領」の制定について	
7	25	・東海第二発電所 不適合事象「R/W 中地下 1 階タンクベント処理装置室溢水」に係る根本原因分析実施の要否について	
8	9	・東海第二発電所 細則「液体廃棄物系運転手順書」の改正について	
8	15	・東海第二発電所 細則「液体廃棄物系運転手順書」, 細則「化学管理基準」, 取扱書「水質分析マニュアル」の改正について	
10	20	・東海第二発電所 細則「高経年化対策実施手引書」の改正について	
11	21	・東海第二発電所 取扱書「定期試験実施取扱書」他の改正について	
12	20	・東海第二発電所 所則「線量管理要領」及び細則「管理区域立入許可手順書」の改正について ・東海第二発電所 電気ペネトレーションの高経年化評価における長期健全性評価手法等の見直しについて ・根本原因分析の実施結果の報告について (東海第二発電所 管理区域での放射性廃液の漏えいに関する通報連絡の遅れ)	
1	17	・東海第二発電所 30 年時高経年化技術評価書の評価条件の見直しについて	
2	9	・東海第二発電所 サービス建屋ランドリー設備配管取替工事の内ランドリーボイラー室トレンチ内配管等撤去に伴う一時的な管理区域の設定及び解除について	

②-15

月	日	審議内容	備考
2	23	・東海第二発電所 細則「原子炉施設の定期安全レビュー実施手引書」の改正について	
3	17	・東海第二発電所 2017 年度（平成 29 年度）東海第二発電所保安教育実施計画の策定について ・東海第二発電所 所則「災害対策要領」及び細則「災害対策要領に基づく要員の教育要領」の改正について	

③-1, ④-1

本店及び東海第二発電所における有資格者等の人数

③-2, ④-2

(平成 29 年 10 月 1 日現在)

	技術者の総人数	技術者のうち管理職の人数※1	技術者のうち有資格者の人数					運転責任者の基準に適合した者の人数
			有資格者の人数 原子炉主任技術者	主任技術者有資格者の人数 第一種ボイラー・タービン	有資格者の人数 第一種電気主任技術者	有資格者の人数 第一種放射線取扱主任者	有資格者の人数	
本店	発電管理室	152	66 (66)	11	3	1	36	0
	開発計画室	57	32 (21)	1	1	1	6	0
	その他各室	102	58 (55)	9	1	3	22	0
③-3, ④-3 東海第二 発電所※2	203※3	83※3 (81)	3	8	2	18	11	

※1 () 内は、管理職のうち、技術者としての経験年数が 10 年以上の人数を示す。

※2 東海第二発電所の人数には、東海発電所専任の者は含まない。

※3 東海第二発電所の技術者については、運転に必要な要員（重大事故等発生時に継続して対応可能な要員を含む）を設置許可の運用開始時期までに主に本店より技術者を異動させる等の方策により確保する計画である。

③-4, ④-4

採用人数について

平成 29 年 10 月 1 日現在

年度	採用人数 (会社全体)	前年比の増減率
平成 19 年度	35	—
平成 20 年度	39	11%
平成 21 年度	55	41%
平成 22 年度	61	11%
平成 23 年度	80	31%
平成 24 年度	45	▲44%
平成 25 年度	17	▲62%
平成 26 年度	0	—
平成 27 年度	0	—
平成 28 年度	5	—
平成 29 年度	5	0%

③-5, ④-5

有資格者の人数の推移 (至近5ヶ年)

資格	所属	平成25年 7月	平成26年 7月	平成27年 7月	平成28年 7月	平成29年 10月	
【参考】 技術者	本店	発電管理室	116	136	133	141	152
		開発計画室	47	60	54	59	57
		その他各室	116	126	103	109	102
	東海第二	229	213	189	191	203	
	合計	508	535	479	500	514	
主任技術者 原子炉	本店	発電管理室	11	11	12	10	11
		開発計画室	3	2	0	2	1
		その他各室	13	11	15	9	9
	東海第二	3	2	2	3	3	
	合計	30	26	29	24	24	
取扱主任者 第1種放射線	本店	発電管理室	25	30	34	34	36
		開発計画室	2	7	7	7	6
		その他各室	27	23	33	24	22
	東海第二	19	18	15	17	18	
	合計	73	78	89	82	82	
主任技術者 第1種ボイラー・タービン	本店	発電管理室	2	3	2	4	3
		開発計画室	4	2	2	1	1
		その他各室	3	2	1	0	1
	東海第二	9	8	9	8	8	
	合計	18	15	14	13	13	

③ - 5, ④ - 5

資格	所属		平成 25 年 7 月	平成 26 年 7 月	平成 27 年 7 月	平成 28 年 7 月	平成 29 年 10 月
第 1 種 電気主任 技術者	本店	発電管理室	3	1	2	1	1
		開発計画室	1	1	1	1	1
		その他各室	3	3	4	3	3
	東海第二		3	3	2	2	2
	合計		10	8	9	7	7
運転責任者基準 適合者	本店	発電管理室	0	0	0	0	0
		開発計画室	0	0	0	0	0
		その他各室	0	0	0	0	0
	東海第二		10	10	10	10	11
	合計		10	10	10	10	11
技術士	本店	発電管理室	4※1	4※5	4※5	4※5	4※5
		開発計画室	3※3	3※2	1※6	1※6	0
		その他各室	6※8	6※4	3※4	3※4	3※4
	東海第二		1※7	1※7	2※4	1※7	2※4
	合計		14	14	10	9	9

※1 機械部門, 原子力部門, 総合技術監理部門

※2 機械部門, 原子力部門, 建設部門

※3 機械部門, 電気・電子部門, 建設部門

※4 電気・電子部門, 原子力部門

※5 原子力部門, 総合技術監理部門

※6 機械部門

※7 電気・電子部門

※8 原子力部門

東海第二発電所における自然災害及び重大事故等対応に関する有資格者数

重大事故等対応に関する資格及びその取得者数を以下に示す。重大事故等対応に必要な資格取得に必要な車両台数は、以下のとおり。

重大事故等の対応に必要な資格に対し、有資格者数を確保している。今後も、引き続き重大事故等対応に必要な有資格者を確保していく。③-6, ④-6

資格名	主な用途	必要台数 ^{※3}	取得者数 ^{※1}
大型自動車	可搬型代替注水大型ポンプ 可搬型代替注水中型ポンプ 大型ポンプ用送水ホース運搬車 大型ポンプ用送水ホース運搬車（放水用） 中型ポンプ用送水ホース運搬車 水槽付消防ポンプ自動車 化学消防自動車 可搬型高圧窒素供給装置の運搬 ^{※2} 可搬型整流器運搬車 ^{※2} 放水砲／泡消火薬剤運搬車 ^{※2} 汚濁防止膜運搬車 ^{※2} 小型船舶運搬車 ^{※2} 予備電動機運搬用トレーラー ^{※2}	2 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	30
けん引	小型船舶運搬車 ^{※2} 予備電動機運搬用トレーラー ^{※2}	1 1	8
大型特殊	ホイールローダ 油圧ショベル ブルドーザ	1 1 1	13
小型移動式クレーン	可搬型代替注水大型ポンプ 可搬型代替注水中型ポンプ 予備電動機交換用クレーン 小型船舶運搬車 ^{※2}	2 1 1 1	76
危険物取扱者 （乙種第4類）	燃料給油 タンクローリ	1 1	141
玉掛け	可搬型代替注水大型ポンプ 可搬型代替注水中型ポンプ 予備電動機交換用クレーン 小型船舶運搬車 ^{※2}	2 1 1 1	118
車両系建設機械	ホイールローダ 油圧ショベル ブルドーザ	2 1 1	31
中型自動車	可搬型ケーブル運搬車 可搬型代替低圧電源車 タンクローリ	2 2 2	11
普通自動車	放射能観測車	1	—
小型船舶操縦士	小型船舶	1	9
特定高圧ガス取扱主任者	可搬型高圧窒素供給装置 ^{※2}	1	3

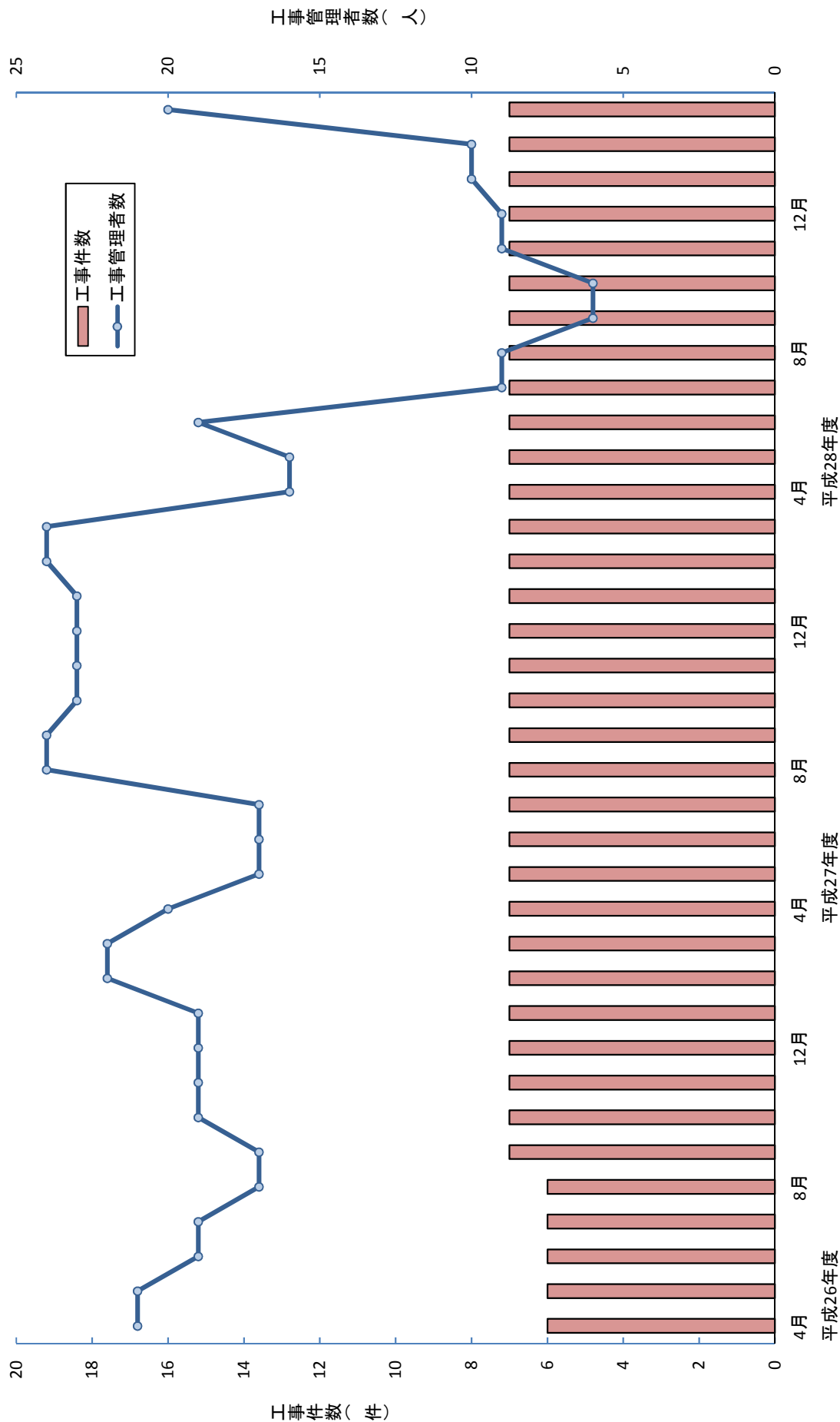
※1：平成29年10月1日現在における東海第二発電所の当社社員の有資格者数。

※2：各設備に必要な資格については、今後の検討結果等により変更となる可能性がある。

※3：各設備の必要台数については、今後の検討結果等により変更となる可能性がある。

③-7

重大事故等対応に係る工事件数と工事管理者数



東海総合研修センターにおける不具合事例の展示

③-8, ④-7



展示状態

タービン中間塞止弁のテスト電磁弁からの制御油漏洩

設備名	タービン中間塞止弁のテスト電磁弁	評価: レベル0
発電所名	日本原子力発電(株) 東海第2発電所	
発生年月日	平成28年8月10日 03:07	
状況	100%出力運転中、「タービン制御油タンク高/低」警報発報した。現場調査したところタービン中間塞止弁のテスト電磁弁付近から制御油の漏洩が認められたため、出力降下、手動停止した。	
調査結果	① 電磁弁取り付け面の隙間が広がっている。 ② 取り付けボルト4本に緩みがある。 ③ ボートOリング切損、切断、割れがある。	
原因	① 電磁弁の取り付けに於いて、取り付けボルトとOリングが干渉したことで「ほみ出し」が発生し、一部が切断した。この状態でボルトを締め付けたことから、その後の運転経過によりOリングの損傷に至ったもの。	
対策	① Oリングの取替を実施した。 ② 当該テスト電磁弁の取替をした。 ③ 電磁弁取付時には位置決め用ガイドボルト使用する手順とする。	

電磁弁概要図

タービン中間塞止弁

テスト電磁弁構造図

<パネル拡大>



<展示品拡大>

(例：東海第二 タービン中間塞止弁のテスト電磁弁からの制御油漏洩)

東海総合研修センター及び敦賀総合研修センターを活用した訓練実績
(平成28年度)

1. 共通研修

	研修名	対象者	受講者数 (東海第二発電所員)
社員研修	特3級研修	特3級昇格者	東海研修センター受講：2名
	特4級研修	特4級昇格者	東海研修センター受講：3名
	新任管理職研修	新任管理職昇格者	敦賀研修センター受講：4名
	6級研修	6級昇格者	東海研修センター受講：9名
	7級研修	7級昇格者	東海研修センター受講：11名
	8級研修	8級昇格者	東海研修センター受講：7名
	新入社員研修	新入社員	東海研修センター(前期) 敦賀研修センター(後期)} 2名

研修コース名	主な内容	受講者数 (東海第二発電所員)
ヒューマンファクター基礎コース	ヒューマンファクターの基礎習得	東海研修センター受講：5名
ヒューマンファクター応用コース	ヒューマンファクターの基礎的知識を有している人を対象 エラー防止の施策の実践力向上	東海研修センター受講：1名
労働安全衛生教育(一般)	入社1～3年程度を対象とする 労働安全衛生の基礎	東海研修センター受講：8名
品質保証コース	品質保証の考え方及び品質保証の方法を理解	東海研修センター受講：5名
プラントシステムコース (BWR 東2, BWR 公開)	運転員以外の技術系社員(入社 2～3年)を対象とする東海第二 発電所の主要システムの構成と機能, 運転操作, 及び事故・故障時の 状況の理解	東海研修センター受講：3名
根本原因分析手法(SAFER) コース	根本原因分析手法の考え方及び 活用する方法取得	東海研修センター受講：6名
リスクマネジメントコース	室長, マネージャ, 発電長の 現職管理職層及びそれらの候補者 を対象とするマネージャとしての 業務運営上必須の知識の習得	東海研修センター受講：2名

2. 運転部門・保守部門・放射線関連部門・安全対策部門研修

研修コース		主な内容	受講者数 (東海第二発電所員)
運転部門	初級運転員	原子力に関する基礎的知識の習得	東海研修センター受講：7名 敦賀研修センター受講：2名
	運転管理者	運転管理者の資質向上	東海研修センター受講：3名 敦賀研修センター受講：2名
保守部門 (電気)	初級保修員	無停電電源装置，低圧開閉装置の動作原理，構造及び機能の保守技術	東海研修センター受講：1名
	中上級保修員	電動機，電動弁，保護継電器の保守専門技術・知識・理論	東海研修センター受講：2名
	電気設備全般	電気設備の施工の知識，電気工事の実技能向上，感電事故・設備事故防止	東海研修センター受講：1名
	資格取得	電気工事に必要な専門技術及び施工等の知識の習得	東海研修センター受講：7名
保守部門 (機械)	初級保修員	タンク配管熱交，配管補修工法，回転機械の振動診断業務の遂行に必要な基本的実務知識の習得及び実技訓練	東海研修センター受講：12名 敦賀研修センター受講：1名
	保修業務全般	原子力鋼材，配管設計，設計解析の基本的実務知識の取得	東海研修センター受講：2名
	資格取得	振動・潤滑油・設備診断員，法定事業者検査員として必要な検査の専門技術及び品質管理等知識の習得	東海研修センター受講：18名
保守部門 (計装)	初級保修員	空気作動弁に関する構造・原理・点検手法など基本的実務知識と技能を習得	東海研修センター受講：1名
	中上級保修員	各種プロセス計器の計測，記録，点検等を自ら実施する技能の習得	東海研修センター受講：2名
放射線関連	事務系及び技術系社員	放射線管理業務等の基礎知識，実務的技術等の習得	東海研修センター受講：19名
	放管及び化学管理員	放射能評価にかかる専門技術の理解	東海研修センター受講：5名
	初級保修員	工事監理担当者の放射線防護上必要な基礎的技能	東海研修センター受講：3名

研修コース		主な内容	受講者数 (東海第二発電所員)
放射線 関連	資格取得	放射線管理主任技術者として 必要な専門技術及び知識の習 得	東海研修センター受講：13名
安全対策 関連研修	耐震設計に係る 内容を含む者	原子力安全，耐震設計，PRA 及 び炉心溶融等の基礎知識と概 要の理解	東海研修センター受講：33名
重大事故等発生時における 現場作業を想定した訓練		放射線測定，電気機材取扱等訓 練	東海研修センター受講：11名

※ 初級：入社5年未満，中級：入社5年～10年未満，上級：入社10年以上

3. 運転関係(所内シミュレータ訓練)研修

研修名		受講者数
重大事故訓練	SA/AM コース	東海研修センター受講：31名
チーム連帯訓練	ファミリー訓練コース	東海研修センター受講：95名

4. その他

研修名	受講者数
原子炉施設廃止措置コース	東海研修センター受講：2名
プラントシステムコース (PWR)	東海研修センター受講：1名
JEAC4111 内部監査員養成コース	敦賀研修センター受講：2名
消防設備士受験講習コース (甲4)	東海研修センター受講：5名

安全性向上対策設備を反映したシミュレータ訓練の実績について

1. 平成 27 年度

(1) 平成 27 年度 B T C 特別訓練実績

東海第二発電所運転員及び発電室員（運転責任者資格保有者）について、「S A 訓練コース（上級）」による訓練を実施。

平成 27 年

4 月 5 日～ 7 日	副発電長	1 名
7 月 3 日～ 5 日	マネージャー	1 名
7 月 17 日～19 日	副発電長	1 名
9 月 1 日～ 3 日	副発電長	1 名
9 月 1 日～ 3 日	マネージャー	1 名

合計 5 名

(2) 東海総合研修センターにおける訓練実績

- a. 東海第二重大事故シーケンスについて、事故を模擬したシミュレータによる訓練を実施。

重大事故シーケンスについては平成 27 年度における訓練実績なし。

（平成 26 年度に重大事故シーケンス 14 項目に対して延べ 79 名訓練実施）

- b. 全交流動力電源喪失事象について、当直員連絡訓練を実施。

運転員 32 名， 災対要員 38 名参加

2. 平成 28 年度

(1) 平成 28 年度 B T C 特別訓練実績

東海第二発電所運転員及び発電室員（運転責任者資格保有者）について、「S A 訓練コース（上級）」による訓練を実施。

平成 28 年

4 月 17 日～19 日	副発電長	1 名
7 月 19 日～21 日	副発電長	1 名
7 月 19 日～21 日	副室長	1 名
9 月 9 日～11 日	副発電長	1 名

合計 4 名

(2) 東海総合研修センターにおける訓練実績

- a. 東海第二重大事故シーケンスについて、事故を模擬したシミュレータによる訓練を実施。

重大事故シーケンスについては平成 28 年度における訓練実績なし。

(平成 26 年度に重大事故シーケンス 14 項目に対して延べ 79 名訓練実施)

- b. 全交流動力電源喪失事象について、当直員連絡訓練を実施。
運転員 44 名参加

品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通：4-2

品質保証規程

(抜 粋)

制定	平成 4年 6月29日	社規第 590号
最終改正	平成29年 4月19日	社規第1223号
主管箇所	本店	安全室

日本原子力発電株式会社

品質マネジメントシステム規程管理番号
QM東Ⅱ：8-5-1-1
QM敦2：8-5-1-1

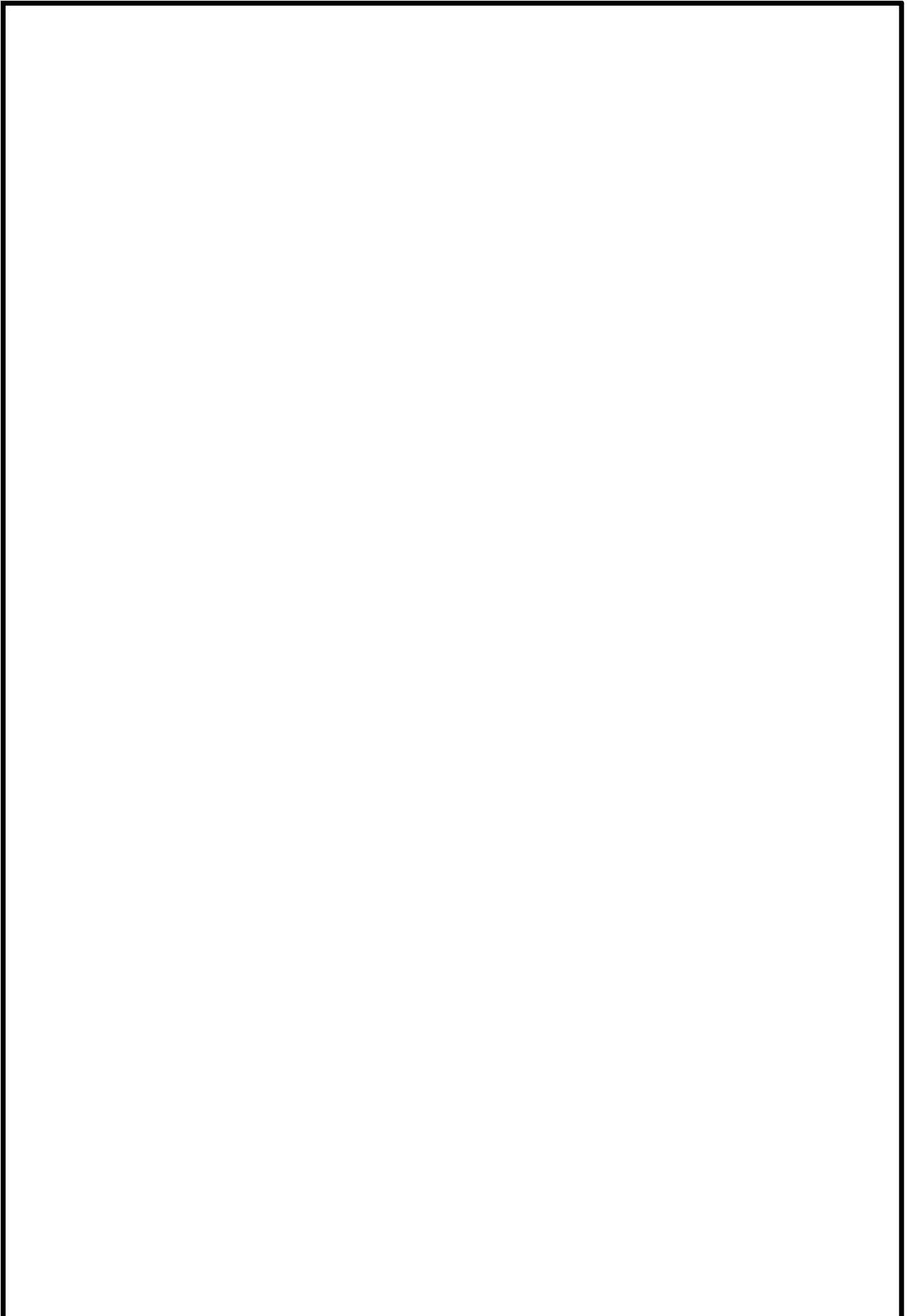
予防処置対応要領

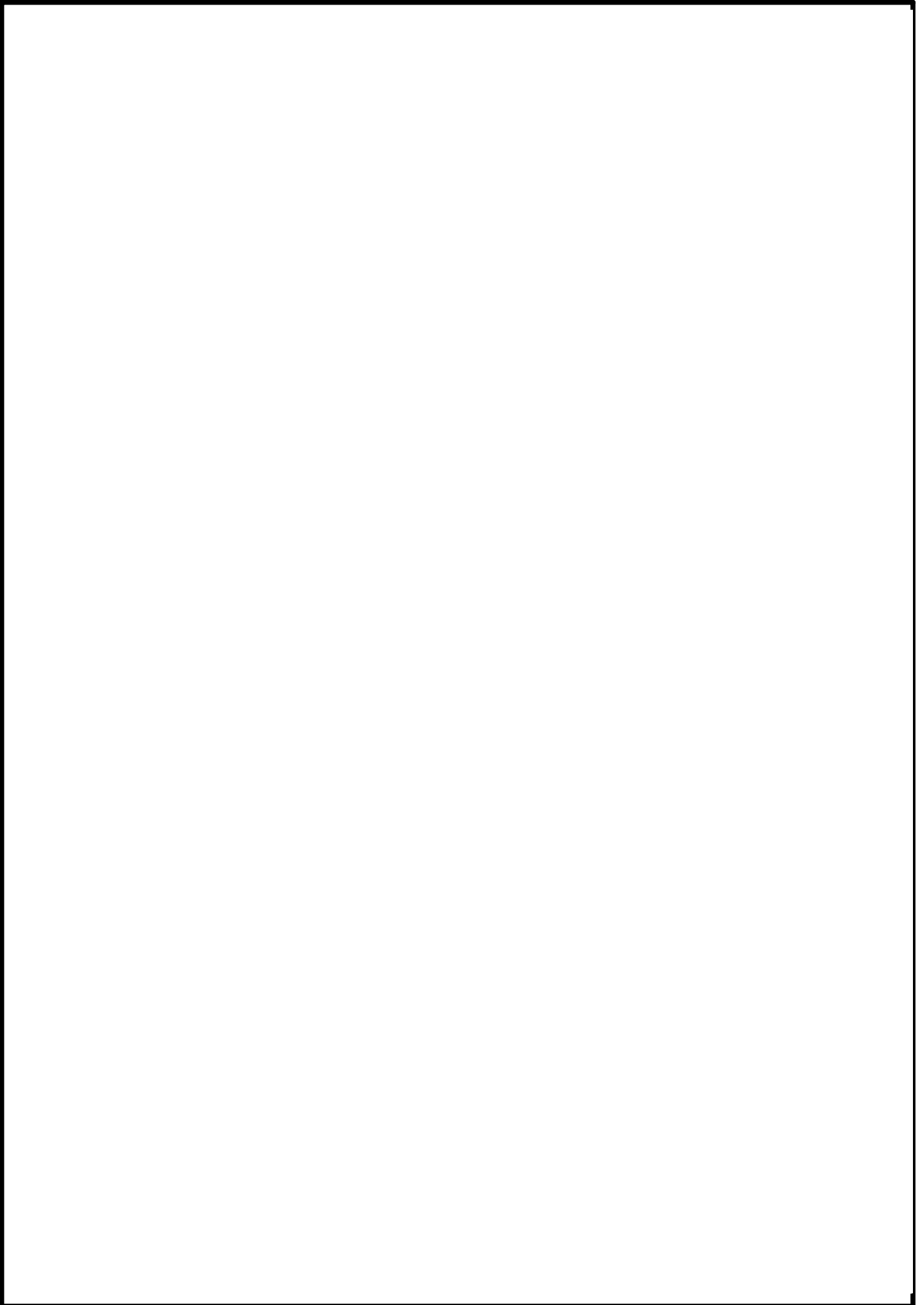
(抜 粋)

制定	平成17年3月30日	発室規準第124号
最終改正	平成29年6月29日	発室規準第465号
主管箇所	本店	発電管理室

日本原子力発電株式会社

発 電 管 理 室





⑤ - 4, ⑥ - 5

本店 情報検討会の開催実績 (平成 28 年度)

月	日	内容	備考
8	1	本店及び発電所における予防処置活動の取り組み状況	
10	26		
3	30		

東海第二発電所 トラブル検討会の開催実績 (平成 28 年度)

月	日	内容	備考
4	20	発電所における予防処置活動の取り組み状況	
5	31		
8	19		
9	23		
9	28		
12	19		
12	21		
2	10		
2	20		
3	7		
3	10		

過去 3 年間の海外派遣者実績について

⑤ - 5, ⑥ - 6

年度 (人数)	件名	派遣者数
平成 26 年度 (8 名)	世界原子力発電事業者協会 (WANO) ロンドン事務所出向	1
	ハノイ (当社ベトナム連絡事務所) 駐在	1
	AP1000 セミナー	2
	三門発電所現場視察	2
	米国エクセロン社, バイロン原子力発電所の現地調査	2
平成 27 年度 (7 名)	世界原子力発電事業者協会 (WANO) ロンドン事務所出向	1
	IAEA ワークショップカザフスタンへの専門家派遣	1
	仏国高速炉基本設計移行に伴う技術情報調査	3
	米国 iRobot 社における同社製ロボットの保守技術訓練	1
	米国アイダホ国立研究所における乾式キャスクのガスサンプリングに関する打合せ及び関連研究所施設の視察	1
平成 28 年度 (8 名)	Zion 発電所 (米国) 駐在	4
	Energy Solutions 社 Oak Ridge 事務所 (米国) 駐在	1
	中国 AP1000 の視察	1
	アレバ社製水素濃度計に関する調査	1
	I-GALL/WG2 会議参加 (ケーブル劣化に関する海外最新知見収集)	1

工認審査基準を踏まえた品質保証計画について

当社における品室保証活動については、新規制基準施行前まではJ E A C4111-2009 に基づき品質保証活動を実施してきた。今回の工認審査基準の施行（平成25年7月8日）を踏まえ、J E A C4111-2009 から追加された要求事項について品質マニュアル（平成25年7月8日）および保安規定の品質保証計画（平成25年9月24日）に反映した。

主な変更内容は以下の通りである。

本審査資料 3. (4)品質保証活動	本審査資料に係る工認 審査基準の 追加要求事項	品質マニュアルの 変更内容	保安規定第3条(品質保 証計画)の変更内容
a. (a)及び(b) 品質マネジメントシス テム	第二条第2項第一号 QMSに安全文化を醸 成するための活動を行 う仕組みを含めること。	第1条(趣旨) J E A C4111-2009 に基 づいた QMS に,安全文化 を醸成するための活動 を行う仕組みを含めた QMS とすることに変更し た。	1. 目的 J E A C4111-2009 に基 づいた QMS に,安全文化 を醸成するための活動 を行う仕組みを含めた QMS とすることに変更し た。
a. (c)及び〔d〕 文書及び記録管理	第六条及び第七条 追加要求事項なし	同左	同左
a. (e) 品質保証活動に係る体 制	該当条項なし	同左	同左
a. (f)及び(g) 品質方針及び品質目標	第十条及び第十一条 品質方針は,組織運営に 関する方針と整合的な ものであること。	第11条(品質方針) (6)項として追加要求内 容を追加した。	5.3 品質方針 f)項として追加要求内 容を追加した。
a. (h)及び(i) マネジメントレビュー	第十七条,第十八条及び 第十九条 マネジメントレビュー のインプットとして,品 質目標の達成状況,安全 文化の醸成及び関係法 令遵守の実施状況を追 加。	第18条(マネジメント レビューへのインプッ ト) (3), (5) 及び (6) 項に追 加要求内容を追加した。	5.6.2 マネジメントレ ビューへのインプット c), e) 及び f) 項に追加要 求内容を追加した。
a. (j) 内部コミュニケーション	第十六条 追加要求事項なし	同左	同左
b. (a)及び(b) 調達管理	第三十六条,第三十七条 及び第三十八条 調達要求事項として,不 適合の報告及び処理,安 全文化醸成活動に関す る必要な事項及び調達 要求事項への適合状況 を記録した文書の提出 等を追加。	第36条(調達要求事 項) 第1項(4), (5) 及び第3 項等に追加要求内容を 追加した。	7.4.2 調達要求事項 (1) d), e) 及び(3)項等に 加要求内容を追加した。
b. (c) 不適合管理及び是正処 置	第五十一条及び第五十 四条 追加要求事項なし	同左	同左

東海第二発電所原子炉施設保安規定

(抜 粋)

制定	昭和52年12月20日	社規第 299号
最終改正	平成28年 3月31日	社規第1175号
主管箇所	本店	発電管理室

平成 28 年 3 月

日本原子力発電株式会社

第 2 章 品質保証

(品質保証計画)

第 3 条 第 2 条 (基本方針) に係る保安活動のための品質保証活動を実施するにあたり、次のとおり品質保証計画を定める。

⑦-1, ⑧-1

1. 目的

本品質保証計画は、発電所の安全を達成・維持・向上させるため、「原子力発電所における安全のための品質保証規程 (JEAC4111-2009)」(以下「JEAC4111」という。)に従った品質マネジメントシステムに、安全文化を醸成するための活動を行う仕組みを含めた発電所における保安活動に係る品質マネジメントシステム(以下「品質マネジメントシステム」という。)を確立し、実施し、評価確認し、継続的に改善することを目的とする。

2. 適用範囲

本品質保証計画は、発電所の保安活動に適用する。

3. 定義

本品質保証計画における用語の定義は、以下を除き JEAC4111 に従う。

(1) 原子炉施設

原子力発電所を構成する構築物、系統及び機器等の総称をいう(以下、本条において同じ。)

(2) 実施部門

発電所の保安に関する組織のうち、発電管理室、安全室、地域共生・広報室、総務室(本店)、経理・資材室、開発計画室及び発電所をいう(以下、本条、第 4 条(保安に関する組織)及び第 5 条(保安に関する職務)において同じ。)

(3) 原子力施設情報公開ライブラリー

原子力施設の事故又は故障等の情報並びに信頼性に関する情報を共有し活用することにより、事故及び故障等の未然防止を図ることを目的として、一般社団法人 原子力安全推進協会が運営するデータベースのことをいう(以下「ニューシア」という。)

(4) BWR 事業者協議会

国内 BWR プラントの安全性及び信頼性を向上させるために、電力会社とプラントメーカーとの間で情報を共有し、必要な技術的検討を行う協議会のことをいう(以下、本条及び第 107 条(保守管理計画)において同じ。)

4. 品質マネジメントシステム

4.1 一般要求事項

(1) 第 4 条(保安に関する組織)に定める組織(以下「組織」という。)は、本品質保証計画に従って、品質マネジメントシステムを確立し、文書化し、実施し、維持する。また、その品質マネジメントシステムの有効性を継続的に改善する。

(2) 組織は、次の事項を実施する。

a) 品質マネジメントシステムに必要なプロセス及びそれらの組織への適用を、表 3-1 (2) 及び

(3)に示す二次文書、「品質管理要項」に定める三次文書（以下「三次文書」という。）で明確にする。

- b) これらのプロセスの順序及び相互関係を図 3 - 1 に示す。
- c) これらのプロセスの運用及び管理のいずれもが効果的であることを確実にするために必要な判断基準及び方法を明確にする。
- d) これらのプロセスの運用及び監視を支援するために必要な資源及び情報を利用できることを確実にする。
- e) これらのプロセスを監視し、適用可能な場合には測定し、分析する。
- f) これらのプロセスについて、計画どおりの結果を得るため、かつ、継続的改善を達成するために必要な処置をとる。
- g) これらのプロセス及び組織を品質マネジメントシステムとの整合をとれたものにする。
- h) 社会科学及び行動科学の知見を踏まえて、品質マネジメントシステムの運用を促進する。

(3) 組織は、品質マネジメントシステムの運用において、発電用軽水型原子炉施設の安全機能の重要度分類に関する審査指針（以下「重要度分類指針」という。）に基づく重要性に応じて、「原子力施設の重要度分類基準要項」を定め、品質マネジメントシステム要求事項の適用の程度についてグレード分けを行う。また、これに基づき資源の適切な配分を行う。なお、グレード分けの決定に際しては、重要度分類指針に基づく重要性に加えて以下の事項を考慮することができる。

- a) プロセス及び原子炉施設の複雑性、独自性、又は斬新性の程度
- b) プロセス及び原子炉施設の標準化の程度や記録のトレーサビリティの程度
- c) 検査又は試験による原子力安全に対する要求事項への適合性の検証可能性の程度
- d) 作業又は製造プロセス、要員、要領、及び装置等に対する特別な管理や検査の必要性の程度
- e) 運転開始後の原子炉施設に対する保守、供用期間中検査及び取替えの難易度

⑦-10

(4) 組織は、これらのプロセスを本品質保証計画に従って運営管理する。

(5) 原子力安全の達成に影響を与えるプロセスをアウトソースすることを決めた場合には、組織は調達（7.4 参照）に従ってアウトソースしたプロセスに関して管理を確実にする。これらのアウトソースしたプロセスに適用される管理の方式及び程度は、「調達管理要項」に定める。

4.2 文書化に関する要求事項

4.2.1 一般

(1) 品質マネジメントシステムの文書には、次の事項を含める。なお、記録は適正に作成する。

- a) 文書化した、品質方針及び品質目標の表明
- b) 品質マニュアル
 - イ. 本品質保証計画、工事計画認可申請の品質保証計画及び表 3 - 1 (1) に示す「品質保証規程」
- c) JEAC4111 が要求する“文書化された手順”及び記録
 - イ. 文書化された手順は、「表 3 - 1 (2) JEAC4111 が要求する“文書化された手順”である二次文書」に示す。
 - ロ. 記録は、「表 3 - 2 JEAC4111 の要求事項に基づき作成する記録」に示す。
- d) 組織内のプロセスの効果的な計画、運用及び管理を確実に実施するために、組織が必要と決定した記録を含む以下の文書

⑦-2

⑧-2

⑦-3

⑧-3

イ. 表 3 - 1 (3) に示す二次文書

ロ. 三次文書

ハ. 一次文書, 二次文書及び三次文書に基づき作成する社内文書

ニ. 外部文書 (組織外が作成する文書のうち, 品質マネジメントシステムで必要とされる文書。
調達プロセスにおいて供給者が作成する文書, 及び法令, 基準等の社外文書を含む。)

ホ. 上記イ. からニ. で規定する記録

⑦ - 2

⑧ - 2

⑦ - 3

⑧ - 3

(2) 品質マネジメントシステムの文書の保安規定上の位置付けを, 次の事項により明確にする。

- a) 一次文書及び二次文書と保安規定の条項との関係を表 3 - 1 に示す。
- b) 三次文書と一次文書及び二次文書との関係を「品質管理要項」に定める。
- c) 一次文書, 二次文書及び三次文書に基づき作成する社内文書は, それぞれ関係する一次文書, 二次文書及び三次文書に定める。
- d) 外部文書は, それぞれ関係する一次文書, 二次文書及び三次文書に定める。

(3) 品質マネジメントシステムの文書体系を図 3 - 2 に示す。

4.2.2 品質マニュアル

組織は, 次の事項を含む品質マニュアルとして, 本品質保証計画, 工事計画認可申請の品質保証計画及び「品質保証規程」を作成し, 維持する。なお, 「品質保証規程」の作成にあたっては, 本品質保証計画及び工事計画認可申請の品質保証計画との整合をとる。

- a) 品質マネジメントシステムの適用範囲
- b) 品質マネジメントシステムについて確立された“文書化された手順”又はそれらを参照できる情報
- c) 品質マネジメントシステムのプロセス間の相互関係に関する記述

4.2.3 文書管理

(1) 組織は, 品質マネジメントシステムで必要とされる文書を遵守するために, 保安活動の重要度に応じて管理する。ただし, 記録は文書の一つではあるが, 4.2.4 に規定する要求事項に従って管理する。

(2) 次の活動に必要な事項を「文書取扱要項」に定め, 管理する。

- a) 発行前に, 適切かどうかの観点から文書をレビューし, 承認する。
- b) 文書をレビューする。また, 必要に応じて更新し, 再承認する。
- c) 文書の変更の識別及び現在有効な版の識別を確実にする。
- d) 該当する文書の適切な版が, 必要なときに, 必要なところで使用可能な状態にあることを確実にする。
- e) 文書は, 読みやすくかつ容易に識別可能な状態であることを確実にする。
- f) 品質マネジメントシステムの計画及び運用のために組織が必要と決定した外部からの文書を明確にし, その配付が管理されていることを確実にする。
- g) 廃止文書が誤って使用されないようにする。また, これらを何らかの目的で保持する場合には, 適切な識別をする。

4.2.4 記録の管理

- (1) 組織は、要求事項への適合及び品質マネジメントシステムの効果的運用の証拠を示すために適正に作成する記録の対象を明確にし、管理する。
- (2) 組織は、記録の識別、保管、保護、検索、保管期間及び廃棄に関して必要な事項を「品質記録管理要項」に定め、管理する。
- (3) 記録は、読みやすく、容易に識別可能かつ検索可能とする。

⑦ - 3
⑧ - 3

5. 経営者の責任

5.1 経営者のコミットメント

社長は、品質マネジメントシステムの構築及び実施、並びにその有効性を継続的に改善することに対するコミットメントの証拠を、次の事項によって示す。

- a) 法令・規制要求事項を満たすことは当然のこととして、原子力安全の重要性を組織内に周知する。
- b) 品質方針を設定する。
- c) 品質目標が設定されることを確実にする。
- d) マネジメントレビューを実施する。
- e) 資源が使用できることを確実にされる。
- f) 安全文化を醸成するための活動を促進する。

⑦ - 5
⑧ - 5⑦ - 6
⑧ - 6

⑦ - 8, ⑧ - 8

5.2 原子力安全の重視

原子力安全を最優先に位置付け、社長は、業務・原子炉施設に対する要求事項が決定され、満たされていることを確実にする(7.2.1 及び 8.2.1 参照)。

5.3 品質方針

社長は、品質方針について、次の事項を確実にする。

- a) 組織の目的に対して適切である。
- b) 要求事項への適合及び品質マネジメントシステムの有効性の継続的な改善に対するコミットメントを含む。
- c) 品質目標の設定及びレビューのための枠組みを与える。
- d) 組織全体に伝達され、理解される。
- e) 適切性の持続のためにレビューされる。
- f) 組織運営に関する方針と整合がとれている。

⑦ - 5
⑧ - 5

⑦ - 6, ⑧ - 6

5.4 計画

5.4.1 品質目標

- (1) 社長は、組織内のしかるべき部門及び階層で、業務・原子炉施設に対する要求事項を満たすために必要なものを含む品質目標(7.1(3) a)参照)が設定されていることを確実にする。
- (2) 品質目標は、その達成度が判定可能で、品質方針との整合がとれていること。

5.4.2 品質マネジメントシステムの計画

社長は、次の事項を確実にする。

- a) 品質目標に加えて 4.1 に規定する要求事項を満たすために、品質マネジメントシステムの構築と維持についての計画を策定する。
- b) 品質マネジメントシステムの変更を計画し、実施する場合には、その変更が品質マネジメントシステムの全体の体系に対して矛盾なく、整合性が取れている。

5.5 責任・権限及びコミュニケーション

5.5.1 責任及び権限

社長は、組織権限規程を踏まえ第 5 条（保安に関する職務）及び第 9 条（原子炉主任技術者の職務等）並びに第 9 条の 2（電気主任技術者及びボイラー・タービン主任技術者の職務等）に責任（保安活動の内容について説明する責任を含む。）及び権限が定められ、組織全体に周知されていることを確実にする。

⑦-7, ⑧-7

5.5.1 の 2 プロセス責任者

社長は、プロセス責任者に対し、所掌する業務に関して、次に示す責任及び権限を与えることを確実にする。

- a) プロセスが確立され、実施されるとともに、有効性を継続的に改善する。
- b) 業務に従事する要員の、業務・原子炉施設に対する要求事項についての認識を高める。
- c) 成果を含む実施状況について評価する(5.4.1 及び 8.2.3 参照)。
- d) 安全文化を醸成するための活動を促進する。

5.5.2 管理責任者

(1) 社長は、安全室を担当する取締役（以下「安全室担当取締役」という。）及び考査・品質監査室長を管理責任者に任命する。

(2) 安全室担当取締役は、与えられている他の責任とかかわりなく、次に示す管理責任者としての責任及び権限をもつ。

- a) 品質マネジメントシステムに必要なプロセスの確立、実施及び維持を確実にする。
- b) 品質マネジメントシステムの成果を含む実施状況及び改善の必要性の有無について、社長に報告する。
- c) 組織全体（考査・品質監査室を除く。）にわたって、関係法令の遵守及び原子力安全についての認識を高めることを確実にする。

(3) 考査・品質監査室長は、与えられている他の責任とかかわりなく、次に示す管理責任者としての責任及び権限をもつ。

- a) 内部監査プロセスを通じて、品質マネジメントシステムに必要なプロセスの確立、実施及び維持を確実にする。
- b) 内部監査プロセスを通じて、品質マネジメントシステムの成果を含む実施状況及び改善の必要性の有無について、社長に報告する。
- c) 内部監査プロセスを通じて、組織全体にわたって、関係法令の遵守及び原子力安全についての認識を高めることを確実にする。

⑦-7
⑧-7

5.5.3 内部コミュニケーション

社長は、「品質保証規程」に基づき組織内にコミュニケーションのための適切なプロセスが確立されることを確実にする。また、品質マネジメントシステムの有効性に関する情報交換が行われることを確実にする。

5.6 マネジメントレビュー

5.6.1 一般

- (1) 社長は、組織の品質マネジメントシステムが、引き続き、適切、妥当かつ有効であることを確実にするために、「マネジメントレビュー要項」に基づき、あらかじめ定められた間隔で品質マネジメントシステムをレビューする。 ⑦-8
⑧-8
- (2) このレビューでは、品質マネジメントシステムの改善の機会の評価、並びに品質方針及び品質目標を含む品質マネジメントシステムの変更の必要性の評価も行う。
- (3) 管理責任者は、マネジメントレビューの結果の記録を維持する(4.2.4 参照)。

5.6.2 マネジメントレビューへのインプット

管理責任者は、マネジメントレビューへのインプットに次の情報を含める。

- a) 監査の結果
- b) 原子力安全の達成に関する外部の受けとめ方
- c) プロセスの成果を含む実施状況（品質目標の達成状況を含む。）並びに検査及び試験の結果 ⑦-7
⑧-7
- d) 予防処置及び是正処置の状況
- e) 安全文化を醸成するための活動の実施状況
- f) 関係法令の遵守状況
- g) 前回までのマネジメントレビューの結果に対するフォローアップ
- h) 品質マネジメントシステムに影響を及ぼす可能性のある変更
- i) 改善のための提案

5.6.3 マネジメントレビューからのアウトプット

社長は、マネジメントレビューからのアウトプットに、次の事項に関する決定及び処置すべてを含める。

- a) 品質マネジメントシステム及びそのプロセスの有効性の改善 ⑦-8
⑧-8
- b) 業務の計画及び実施にかかわる改善
- c) 資源の必要性

6. 資源の運用管理

6.1 資源の提供

組織は、原子力安全に必要な資源を明確にし、提供する。

6.2 人的資源

6.2.1 一般

原子力安全の達成に影響がある業務に従事する要員は、適切な教育、訓練、技能及び経験を判断の根拠として力量を有すること。

6.2.2 力量、教育・訓練及び認識

組織は、次の事項を「力量設定管理要項」に定め、実施する。

- a) 原子力安全の達成に影響がある業務に従事する要員に必要な力量を明確にする。
- b) 必要な力量が不足している場合には、その必要な力量に到達することができるように教育・訓練を行うか、又は他の処置をとる。
- c) 教育・訓練又は他の処置の有効性を評価する。
- d) 組織の要員が、自らの活動のもつ意味及び重要性を認識し、品質目標の達成に向けて自らがどのように貢献できるかを認識することを確実にする。
- e) 教育、訓練、技能及び経験について該当する記録を維持する(4.2.4 参照)。

6.3 原子炉施設及びインフラストラクチャー

組織は、原子力安全の達成のために必要な原子炉施設を「保守管理業務要項」に定め、維持管理する。また、原子力安全の達成のために必要なインフラストラクチャーを明確にし、提供し、維持する。

6.4 作業環境

組織は、原子力安全の達成のために必要な作業環境を業務の計画(7.1 参照)にかかわる関連する文書、及び「作業環境測定管理要項」に定め、運営管理する。

7. 業務の計画及び実施

7.1 業務の計画

- (1) 組織は、一次文書、二次文書、三次文書に基づき、保安活動に関する業務に必要なプロセスを計画し、構築する。
- (2) 業務の計画は、品質マネジメントシステムのその他のプロセスの要求事項と整合がとれていること(4.1 参照)。
- (3) 組織は、業務の計画に当たって、次の各事項について適切に明確化する。
 - a) 業務・原子炉施設に対する品質目標及び要求事項
 - b) 業務・原子炉施設に特有な、プロセス及び文書の確立の必要性、並びに資源の提供の必要性
 - c) その業務・原子炉施設のための検証、妥当性確認、監視、測定、検査及び試験活動、並びにこれらの合否判定基準
 - d) 業務・原子炉施設のプロセス及びその結果が、要求事項を満たしていることを実証するために必要な記録(4.2.4 参照)
- (4) この計画のアウトプットは、組織の運営方法に適した形式にする。

⑦ - 3
⑧ - 3

7.2 業務・原子炉施設に対する要求事項に関するプロセス

7.2.1 業務・原子炉施設に対する要求事項の明確化

組織は、次の事項を業務の計画(7.1 参照)において、明確にする。

- a) 業務・原子炉施設に適用される法令・規制要求事項
- b) 明示されていないが、業務・原子炉施設に不可欠な要求事項
- c) 組織が必要と判断する追加要求事項すべて

7.2.2 業務・原子炉施設に対する要求事項のレビュー

- (1) 組織は、業務・原子炉施設に対する要求事項をレビューする。このレビューは、その要求事項を適用する前に実施する。
- (2) レビューでは、次の事項を確実にする。
 - a) 業務・原子炉施設に対する要求事項が定められている。
 - b) 業務・原子炉施設に対する要求事項が以前に提示されたものと異なる場合には、それについて解決されている。
 - c) 組織が、定められた要求事項を満たす能力をもっている。
- (3) このレビューの結果の記録、及びそのレビューを受けてとられた処置の記録を維持する(4.2.4参照)。
- (4) 業務・原子炉施設に対する要求事項が書面で示されない場合には、組織はその要求事項を適用する前に確認する。
- (5) 業務・原子炉施設に対する要求事項が変更された場合には、組織は、関連する文書を修正する。また、変更後の要求事項が、関連する要員に理解されていることを確実にする。

7.2.3 外部とのコミュニケーション

組織は、原子力安全に関して外部とのコミュニケーションを図るための効果的な方法を「官庁定期報告書作成及び官庁対応業務要項」に定め、実施する。

7.3 設計・開発

組織は、次の事項を「設計管理要項」に定め、実施する。

7.3.1 設計・開発の計画

- (1) 組織は、原子炉施設の設計・開発の計画を策定し、管理する。
- (2) 設計・開発の計画において、組織は、次の事項を明確にする。
 - a) 設計・開発の段階
 - b) 設計・開発の各段階に適したレビュー、検証及び妥当性確認
 - c) 設計・開発に関する責任（保安活動の内容について説明する責任を含む。）及び権限
- (3) 組織は、効果的なコミュニケーション並びに責任及び権限の明確な割当てを確実にするために、設計・開発に関与するグループ間のインタフェースを運営管理する。
- (4) 設計・開発の進行に応じて、策定した計画を適切に更新する。

7.3.2 設計・開発へのインプット

- (1) 原子炉施設の要求事項に関連するインプットを明確にし、記録を維持する(4.2.4参照)。インプットには、次の事項を含める。
 - a) 機能及び性能に関する要求事項
 - b) 適用される法令・規制要求事項

- c) 適用可能な場合には、以前の類似した設計から得られた情報
 - d) 設計・開発に不可欠なその他の要求事項
- (2) 原子炉施設の要求事項に関連するインプットについては、その適切性をレビューし、承認する。要求事項は、漏れがなく、あいまい(曖昧)でなく、相反することがないようにする。

7.3.3 設計・開発からのアウトプット

- (1) 設計・開発からのアウトプットを、設計・開発へのインプットと対比した検証を行うのに適した形式とする。また、リリースの前に、承認を受ける。
- (2) 設計・開発からのアウトプットは、次の状態とする。
 - a) 設計・開発へのインプットで与えられた要求事項を満たす。
 - b) 調達、業務の実施（原子炉施設の使用を含む。）に対して適切な情報を提供する。
 - c) 関係する検査及び試験の合否判定基準を含むか、又はそれを参照している。
 - d) 安全な使用及び適正な使用に不可欠な原子炉施設の特性を明確にする。

7.3.4 設計・開発のレビュー

- (1) 設計・開発の適切な段階において、次の事項を目的として、計画されたとおりに（7.3.1 参照）体系的なレビューを行う。
 - a) 設計・開発の結果が、要求事項を満たせるかどうかを評価する。
 - b) 問題を明確にし、必要な処置を提案する。
- (2) レビューへの参加者には、レビューの対象となっている設計・開発段階に関連する部門を代表する者及び当該設計開発に係る専門家を含める。このレビューの結果の記録、及び必要な処置があればその記録を維持する(4.2.4 参照)。

7.3.5 設計・開発の検証

- (1) 設計・開発からのアウトプットが、設計・開発へのインプットで与えられている要求事項を満たしていることを確実にするために、計画されたとおりに（7.3.1 参照）検証を実施する。この検証の結果の記録、及び必要な処置があればその記録を維持する(4.2.4 参照)。
- (2) 設計・開発の検証は、原設計者以外の者又はグループが実施する。

7.3.6 設計・開発の妥当性確認

- (1) 結果として得られる原子炉施設が、指定された用途又は意図された用途に応じた要求事項を満たし得ることを確実にするために、計画した方法（7.3.1 参照）に従って、設計・開発の妥当性確認を実施する。
- (2) 実行可能な場合にはいつでも、原子炉施設の使用前に、妥当性確認を完了する。
- (3) 妥当性確認の結果の記録、及び必要な処置があればその記録を維持する(4.2.4 参照)。

7.3.7 設計・開発の変更管理

- (1) 設計・開発の変更を明確にし、記録を維持する(4.2.4 参照)。
- (2) 変更に対して、レビュー、検証及び妥当性確認を適切に行い、その変更を実施する前に承認する。

- (3) 設計・開発の変更のレビューには、その変更が、当該の原子炉施設を構成する要素及び関連する原子炉施設に及ぼす影響の評価を含める。
- (4) 変更のレビューの結果の記録、及び必要な処置があればその記録を維持する(4.2.4 参照)。

7.4 調達

組織は、次の事項を「調達管理要項」に定め、実施する。

7.4.1 調達プロセス

- (1) 組織は、規定された調達要求事項に、調達製品が適合することを確実にする。
- (2) 供給者及び調達製品に対する管理の方式及び程度は、調達製品が原子力安全に及ぼす影響に応じて定める。 ⑦-12
- (3) 組織は、供給者が組織の要求事項に従って調達製品を供給する能力を判断の根拠として、供給者を評価し、選定する。選定、評価及び再評価の基準を定める。
- (4) 評価の結果の記録、及び評価によって必要とされた処置があればその記録を維持する(4.2.4 参照)。
- (5) 組織は、調達製品の調達後における、維持又は運用に必要な保安に係る技術情報を取得するための方法及びそれらを他の原子炉設置者と共有する場合に必要な措置に関する方法を定める。

7.4.2 調達要求事項

- (1) 調達要求事項では調達製品に関する要求事項を明確にし、次の事項のうち該当する事項を含める。 ⑦-11
- a) 製品、手順、プロセス及び設備の承認に関する要求事項
 - b) 要員の適格性確認に関する要求事項
 - c) 品質マネジメントシステムに関する要求事項
 - d) 不適合の報告及び処理に関する要求事項 ⑦-15, ⑧-11
 - e) 安全文化を醸成するための活動に関する必要な要求事項
- (2) 組織は、供給者に伝達する前に、規定した調達要求事項が妥当であることを確実にする。
- (3) 組織は、調達製品を受領する場合には、調達製品の供給者に対し、調達要求事項への適合状況を記録した文書を提出させる。

7.4.3 調達製品の検証

- (1) 組織は、調達製品が、規定した調達要求事項を満たしていることを確実にするために、必要な検査又はその他の活動を定めて、実施する。 ⑦-13
- (2) 組織が、供給者先で検証を実施することにした場合には、組織は、その検証の要領及び調達製品のリリースの方法を調達要求事項の中で明確にする。

7.5 業務の実施

組織は、業務の計画(7.1 参照)に基づき、次の事項を実施する。

7.5.1 業務の管理

組織は、業務を管理された状態で実施する。管理された状態には、次の事項のうち該当するものを含む。

- a) 原子力安全との係わりを述べた情報が利用できる。
- b) 必要に応じて、作業手順が利用できる。
- c) 適切な設備を使用している。
- d) 監視機器及び測定機器が利用でき、使用している。
- e) 監視及び測定が実施されている。
- f) 業務のリリースが実施されている。

7.5.2 業務の実施に関するプロセスの妥当性確認

- (1) 業務の実施の過程で結果として生じるアウトプットが、それ以降の監視又は測定で検証することが不可能で、その結果、業務が実施された後でしか不具合が顕在化しない場合には、組織は、その業務の該当するプロセスの妥当性確認を行う。
- (2) 妥当性確認によって、これらのプロセスが計画どおりの結果を出せることを実証する。
- (3) 組織は、これらのプロセスについて、次の事項のうち該当するものを含んだ手続きを確立する。
 - a) プロセスのレビュー及び承認のための明確な基準
 - b) 設備の承認及び要員の適格性確認
 - c) 所定の方法及び手順の適用
 - d) 記録に関する要求事項 (4.2.4 参照)
 - e) 妥当性の再確認

7.5.3 識別及びトレーサビリティ

- (1) 必要な場合には、組織は、業務の計画及び実施の全過程において適切な手段で業務・原子炉施設を識別する。
- (2) 組織は、業務の計画及び実施の全過程において、監視及び測定の要求事項に関連して、業務・原子炉施設の状態を識別する。
- (3) トレーサビリティが要求事項となっている場合には、組織は、業務・原子炉施設について一意の識別を管理し、記録を維持する(4.2.4 参照)。

7.5.4 組織外の所有物

組織は、組織外の所有物について、それが組織の管理下にある間、注意を払い、必要に応じて記録を維持する(4.2.4 参照)。

7.5.5 調達製品の保存

組織は、調達製品の検証後、受入から据付(使用)までの間、要求事項への適合を維持するように調達製品を保存する。この保存には、該当する場合、識別、取扱い、包装、保管及び保護を含める。保存は、取替品、予備品にも適用する。

7.6 監視機器及び測定機器の管理

組織は、業務の計画(7.1 参照)に基づき、次の事項を実施する。

- (1) 業務・原子炉施設に対する要求事項への適合性を実証するために、組織は、実施すべき監視及び

測定を明確にする。また、そのために必要な監視機器及び測定機器を明確にする。

- (2) 組織は、監視及び測定の要求事項との整合性を確保できる方法で監視及び測定が実施できることを確実にするプロセスを確立する。
- (3) 測定値の正当性が保証されなければならない場合には、測定機器に関し、次の事項を満たす。
- a) 定められた間隔又は使用前に、国際又は国家計量標準にトレーサブルな計量標準に照らして校正若しくは検証、又はその両方を行う。そのような標準が存在しない場合には、校正又は検証に用いた基準を記録する(4.2.4 参照)。
 - b) 機器の調整をする、又は必要に応じて再調整する。
 - c) 校正の状態を明確にするために識別を行う。
 - d) 測定した結果が無効になるような操作ができないようにする。
 - e) 取扱い、保守及び保管において、損傷及び劣化しないように保護する。
- さらに、測定機器が要求事項に適合していないことが判明した場合には、組織は、その測定機器でそれまでに測定した結果の妥当性を評価し、記録する(4.2.4 参照)。
- 組織は、その機器及び影響を受けた業務・原子炉施設すべてに対して、適切な処置をとる。校正及び検証の結果の記録を維持する(4.2.4 参照)。
- (4) 規定要求事項にかかわる監視及び測定にコンピュータソフトウェアを使う場合には、そのコンピュータソフトウェアによって意図した監視及び測定ができることを確認する。この確認は、最初に使用するのに先立って実施する。また、必要に応じて再確認する。

8. 評価及び改善

8.1 一般

- (1) 組織は、次の事項のために必要となる監視、測定、分析及び改善のプロセスを計画し、実施する。
- a) 業務・原子炉施設に対する要求事項への適合を実証する。
 - b) 品質マネジメントシステムの適合性を確実にする。
 - c) 品質マネジメントシステムの有効性を継続的に改善する。
- (2) これには、統計的手法を含め、適用可能な方法、及びその使用の程度を決定することを含める。

8.2 監視及び測定

8.2.1 原子力安全の達成

組織は、品質マネジメントシステムの成果を含む実施状況の測定の一つとして、原子力安全を達成しているかどうかに関して外部がどのように受けとめているかについての情報を監視する。この情報の入手及び使用の方法を「官庁定期報告書作成及び官庁対応業務要項」に定める。

8.2.2 内部監査

考査・品質監査室は、客観的な評価を行う組織として、次の事項を「内部監査要項」に定め、実施する。

- (1) 品質マネジメントシステムの次の事項が満たされているか否かを明確にするために、あらかじめ定められた間隔で内部監査を実施する。
- a) 品質マネジメントシステムが、業務の計画(7.1 参照)に適合しているか、JEAC4111の要求事

- 項に適合しているか、及び組織が決めた品質マネジメントシステム要求事項に適合しているか。
- b) 品質マネジメントシステムが効果的に実施され、維持されているか。
- (2) 監査の対象となるプロセス及び領域の状態及び重要性、並びにこれまでの監査結果を考慮して、監査プログラムを策定する。監査の基準、範囲、頻度及び方法を規定する。監査員の選定及び監査の実施においては、監査プロセスの客観性及び公平性を確保する。監査員は、自らの業務を監査しない。
- (3) 監査の計画及び実施、記録の作成及び結果の報告に関する責任及び権限、並びに要求事項を規定する。
- (4) 監査及びその結果の記録を維持する(4.2.4 参照)。
- (5) 監査された領域に責任をもつ管理者は、検出された不適合及びその原因を除去するために遅滞なく、必要な修正及び是正処置すべてがとられることを確実にする。フォローアップには、とられた処置の検証及び検証結果の報告を含める(8.5.2 参照)。

8.2.3 プロセスの監視及び測定

- (1) 組織は、品質マネジメントシステムのプロセスの監視、及び適用可能な場合に行う測定には、適切な方法を適用する。
- (2) これらの方法は、プロセスが計画どおりの結果を達成する能力があることを実証するものとする。
- (3) 計画どおりの結果が達成できない場合には、適切に、修正及び是正処置をとる。

8.2.4 検査及び試験

- (1) 組織は、原子炉施設の要求事項が満たされていることを検証するために、「試験・検査管理要項」に従って、原子炉施設を検査及び試験する。検査及び試験は、業務の計画(7.1 参照)に従って、適切な段階で実施する。検査及び試験の合否判定基準への適合の証拠を維持する(4.2.4 参照)。
- (2) 検査及び試験要員の独立の程度を定める。
- (3) リリース(次工程への引渡し)を正式に許可した人を、記録する(4.2.4 参照)。
- (4) 業務の計画(7.1 参照)で決めた検査及び試験が完了するまでは、当該原子炉施設を据え付けたり、運転したりしない。ただし、当該の権限をもつ者が承認したときは、この限りではない。

8.3 不適合管理

- (1) 組織は、業務・原子炉施設に対する要求事項に適合しない状況が放置されることを防ぐために、それらを識別し、管理することを確実にする。
- (2) 不適合の処理に関する管理及びそれに関連する責任及び権限を「不適合管理要項」に定める。
- (3) 該当する場合には、組織は、次の一つ又はそれ以上の方法で、不適合を処理する。
- a) 検出された不適合を除去するための処置をとる。
- b) 当該の権限をもつ者が、特別採用によって、その使用、リリース、又は合格と判定することを正式に許可する。
- c) 本来の意図された使用又は適用ができないような処置をとる。
- d) 外部への引渡し後又は業務の実施後に不適合が検出された場合には、その不適合による影響又は起こり得る影響に対して適切な処置をとる。

⑦-14

⑧-10

- (4) 不適合に修正を施した場合には、要求事項への適合を実証するための再検証を行う。
- (5) 不適合の性質の記録、及び不適合に対してとられた特別採用を含む処置の記録を維持する(4.2.4 参照)。
- (6) 組織は、原子炉施設の保安の向上を図る観点から、公開の基準を定めた「不適合管理要項」に従って、不適合の内容をニューシアへ登録することを含め、情報の公開を行う。

8.4 データの分析

- (1) 組織は、品質マネジメントシステムの適切性及び有効性を実証するため、また、品質マネジメントシステムの有効性の継続的な改善の可能性を評価するために「データ分析要項」を定め、適切なデータを明確にし、それらのデータを収集し、分析する。この中には、監視及び測定の結果から得られたデータ並びにそれ以外の該当する情報源からのデータを含める。
- (2) データの分析によって、次の事項に関連する情報を提供する。
 - a) 原子力安全の達成に関する外部の受けとめ方 (8.2.1 参照)
 - b) 業務・原子炉施設に対する要求事項への適合 (8.2.3 及び 8.2.4 参照)
 - c) 予防処置の機会を得ることを含む、プロセス及び原子炉施設の、特性及び傾向 (8.2.3 及び 8.2.4 参照)
 - d) 供給者の能力 (7.4 参照)

8.5 改善

8.5.1 継続的改善

組織は、品質方針、品質目標、監査結果、データの分析、是正処置、予防処置及びマネジメントレビューを通じて、品質マネジメントシステムの有効性を継続的に改善する。

8.5.2 是正処置

組織は、次の事項を「不適合管理要項」に定め、実施する。

- (1) 組織は、再発防止のため、不適合の原因を除去する処置をとる。
- (2) 是正処置は、検出された不適合のもつ影響に応じたものとする。
- (3) 次の事項に関する要求事項 (JEAC4111 附属書「根本原因分析に関する要求事項」を含む。) を規定する。
 - a) 不適合のレビュー
 - b) 不適合の原因の特定
 - c) 不適合の再発防止を確実にするための処置の必要性の評価
 - d) 必要な処置の決定及び実施
 - e) とった処置の結果の記録 (4.2.4 参照)
 - f) とった是正処置の有効性のレビュー

⑦-14
⑧-10

8.5.3 予防処置

組織は、次の事項を「不適合管理要項」に定め、実施する。

- (1) 組織は、起こり得る不適合が発生することを防止するために、保安活動の実施によって得られた知見及び他の施設から得られた知見 (BWR 事業者協議会で取り扱う技術情報及びニューシア登録

情報を含む。)の活用を含め、その原因を除去する処置を決める。この活用には、保安活動の実施によって得られた知見を他の原子炉設置者と共有することも含む。

(2) 予防処置は、起こり得る問題の影響に応じたものとする。

(3) 次の事項に関する要求事項（JEAC4111 附属書「根本原因分析に関する要求事項」を含む。）を規定する。

- a) 起こり得る不適合及びその原因の特定
- b) 不適合の発生を予防するための処置の必要性の評価
- c) 必要な処置の決定及び実施
- d) とった処置の結果の記録（4.2.4 参照）
- e) とった予防処置の有効性のレビュー

表3-1 品質マネジメントシステムの文書

(1) 一次文書

第3条 関連項	管理番号	文書名	所管箇所	関連条
—	—	品質保証計画	安全室	第3条
4.2.1	QM共通:4-2	品質保証規程	安全室	

(2) JEAC4111 が要求する“文書化された手順書”である二次文書

第3条 関連項	管理番号	文書名	所管箇所	関連条
4.2.3	QM共通:4-2-1	文書取扱要項	総務室(本店)	第3条
4.2.4	QM共通:4-2-2	品質記録管理要項	発電管理室	第3,120条
8.2.2	QM共通:8-2-1	内部監査要項	考査・品質 監査室	第3条
8.3 8.5.2 8.5.3	QM共通:8-3-1	不適合管理要項	安全室	第3,107条
8.5.2 8.5.3	QM共通:8-3-3	根本原因分析実施要項	安全室	第3条

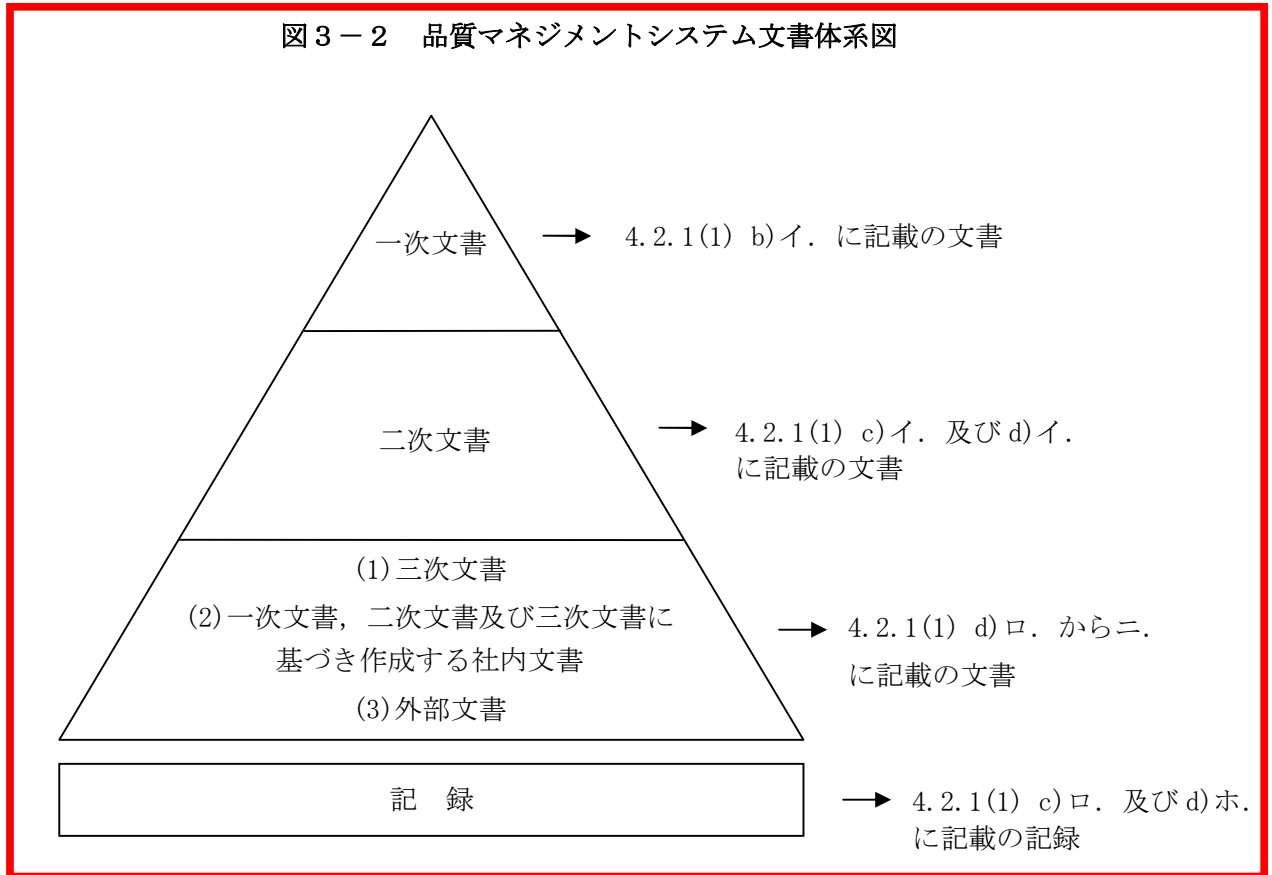
(3) 二次文書

第3条 関連項	管理番号	文書名	所管箇所	関連条
4.1	QM共通:4-1-1	原子力施設の重要度分類基準要項	発電管理室	第3,107条
	QM共通:4-1-2	品質管理要項	安全室	第3,4,5条
5.4.1	QM共通:5-4-1	品質目標及び品質保証計画管理要項	安全室	第3条
5.5.3	QM共通:5-5-1	品質保証委員会及び品質保証検討 会運営要項	安全室	
5.6	QM共通:5-6-1	マネジメントレビュー要項	安全室	
6.2.2	QM共通:6-2-1	力量設定管理要項	総務室(本店)	第3,118,119条
	QM東Ⅱ:6-2-2	運転責任者の合否判定等業務等に 関する要項	発電管理室	第3条
	QM東Ⅱ:6-2-3	原子炉主任技術者の選任及び職務 要項	総務室(本店)	第3,8,9条
6.3	QM東Ⅱ:7-1-1	保守管理業務要項	発電管理室	第3,107条, 107条の2
6.4	QM共通:6-4-1	作業環境測定管理要項	総務室(本店)	第3条
7.1	QM東Ⅱ:7-1-2	運転管理業務要項	発電管理室	第3,11-78条
	QM東Ⅱ:7-1-3	燃料管理業務要項	経理・資材室 発電管理室	第3,79-86条
	QM共通:7-1-5	放射性廃棄物管理業務要項	発電管理室	第3,87-91条
	QM共通:7-1-6	放射線管理業務要項	発電管理室	第3,92-106条
	QM東Ⅱ:7-1-1	保守管理業務要項	発電管理室	第3,107条, 107条の2
	QM共通:7-1-4	原子力災害対策業務要項	発電管理室	第3,108-117条
	QM共通:7-1-7	コンプライアンス・安全文化醸成活 動要項	安全室	第2条の2, 第2 条の3, 第3条

第3条 関連項	管理番号	文書名	所管箇所	関連条
7.2.1	QM共通:7-2-1	官庁申請手続取扱要項	総務室(本店)	第3条
	QM共通:7-2-2	対外約束事項管理要項	発電管理室	
7.2.2	QM共通:7-2-3	原子炉施設保安委員会及び原子炉施設保安運営委員会要項	発電管理室	第3, 6, 7条
7.2.3	QM共通:7-2-4	官庁定期報告書作成及び官庁対応業務要項	発電管理室	第3条
	QM東Ⅱ:7-2-5	事故・故障時等対応要項	発電管理室	
7.3	QM共通:7-3-1	設計管理要項	発電管理室	第3, 107条
7.4	QM共通:7-4-1	調達管理要項	発電管理室	
		QM共通:7-4-2	重要設備取引先登録要項	経理・資材室 発電管理室
7.5.4	QM共通:7-5-1	組織外所有物管理要項	発電管理室	
7.5.5	QM共通:7-5-2	予備品・貯蔵品取扱要項	経理・資材室 発電管理室	
8.2.1	QM共通:7-2-4	官庁定期報告書作成及び官庁対応業務要項	発電管理室	
8.2.3	QM共通:8-2-2	業務プロセスレビュー要項	安全室	
8.2.4	QM共通:8-2-3	試験・検査管理要項	発電管理室	第3, 107条
8.3	QM共通:8-3-2	原子力施設情報公開ライブラリー「ニューシア」登録管理要項	発電管理室	第3条
8.4	QM共通:8-4-1	データ分析要項	安全室	第3, 10条

⑦-2, ⑧-2 ⑦-3, ⑧-3

図3-2 品質マネジメントシステム文書体系図



品質マネジメントシステム規程管理番号

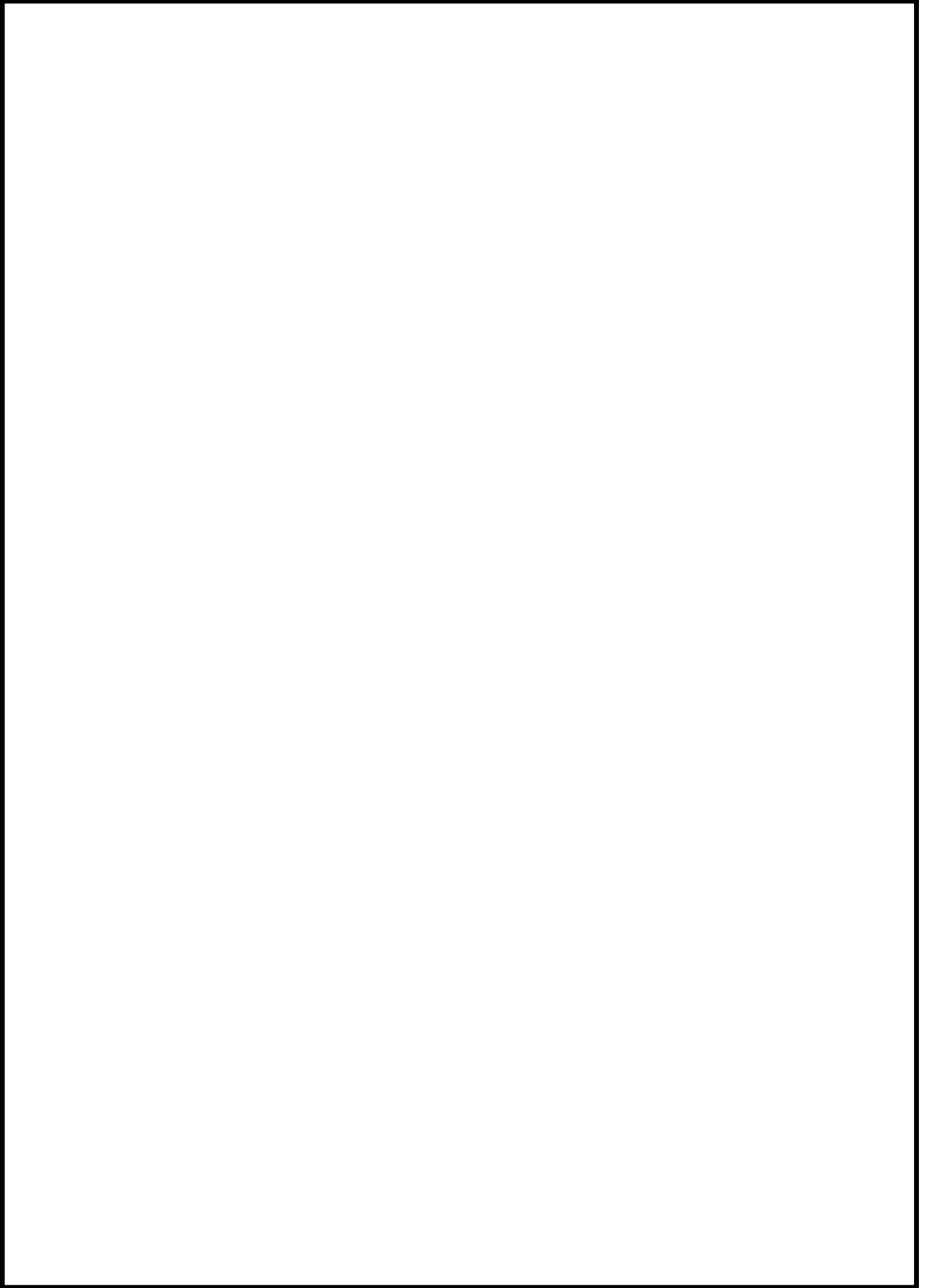
QM共通：4-2

品質保証規程

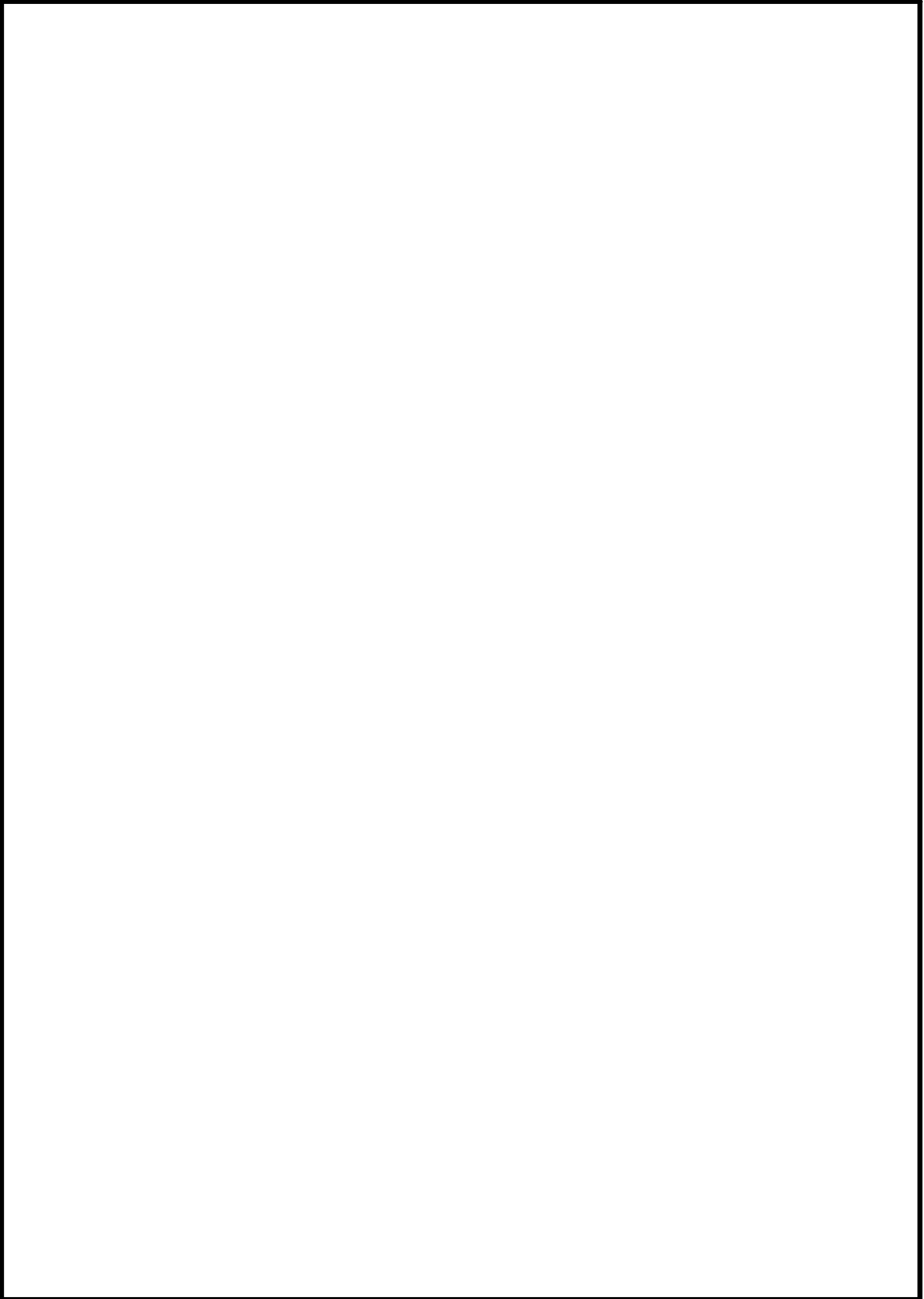
(抜粋)

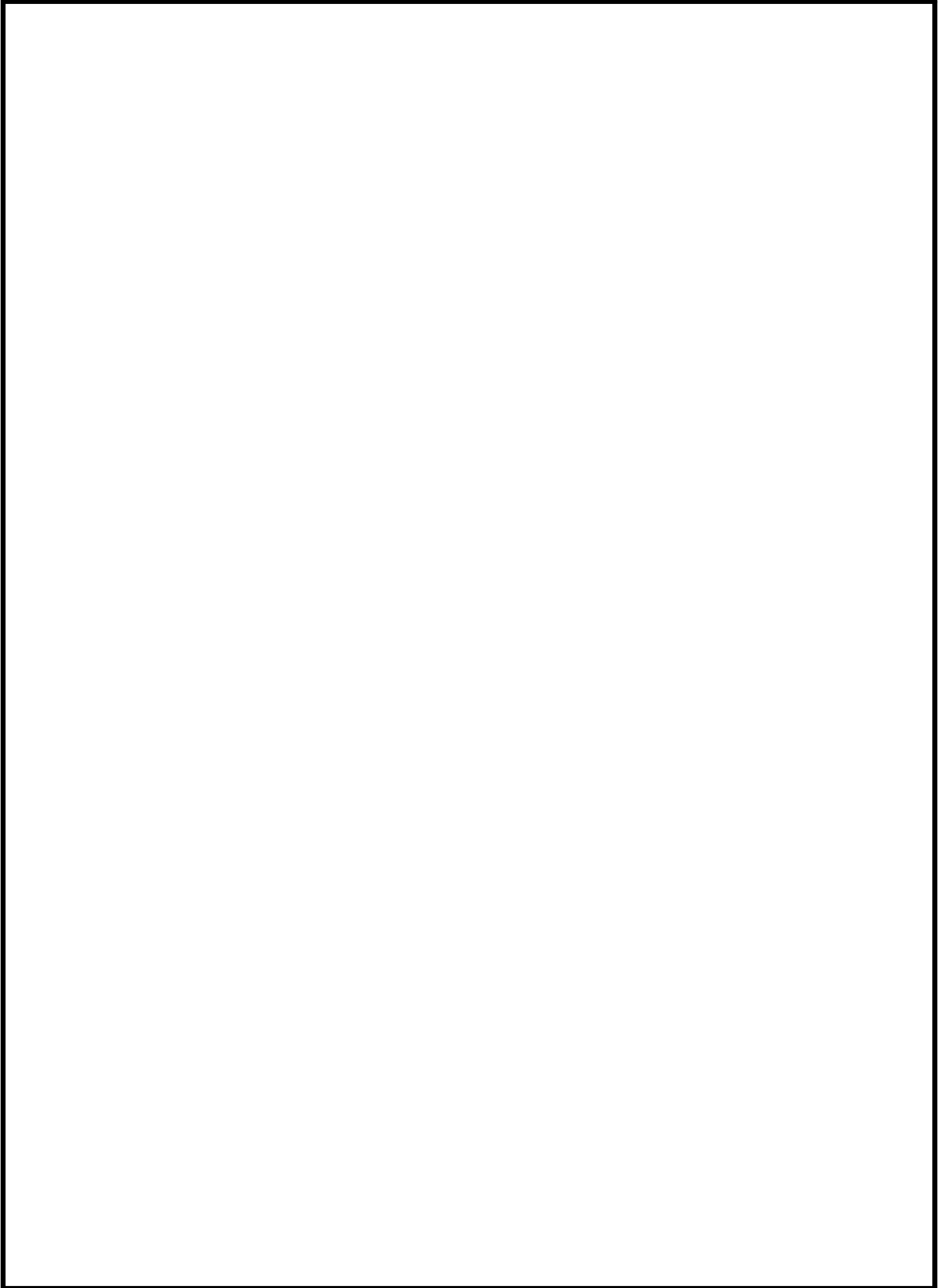
制定	平成4年6月29日	社規第590号
最終改正	平成29年4月19日	社規第1223号
主管箇所	本店	安全室

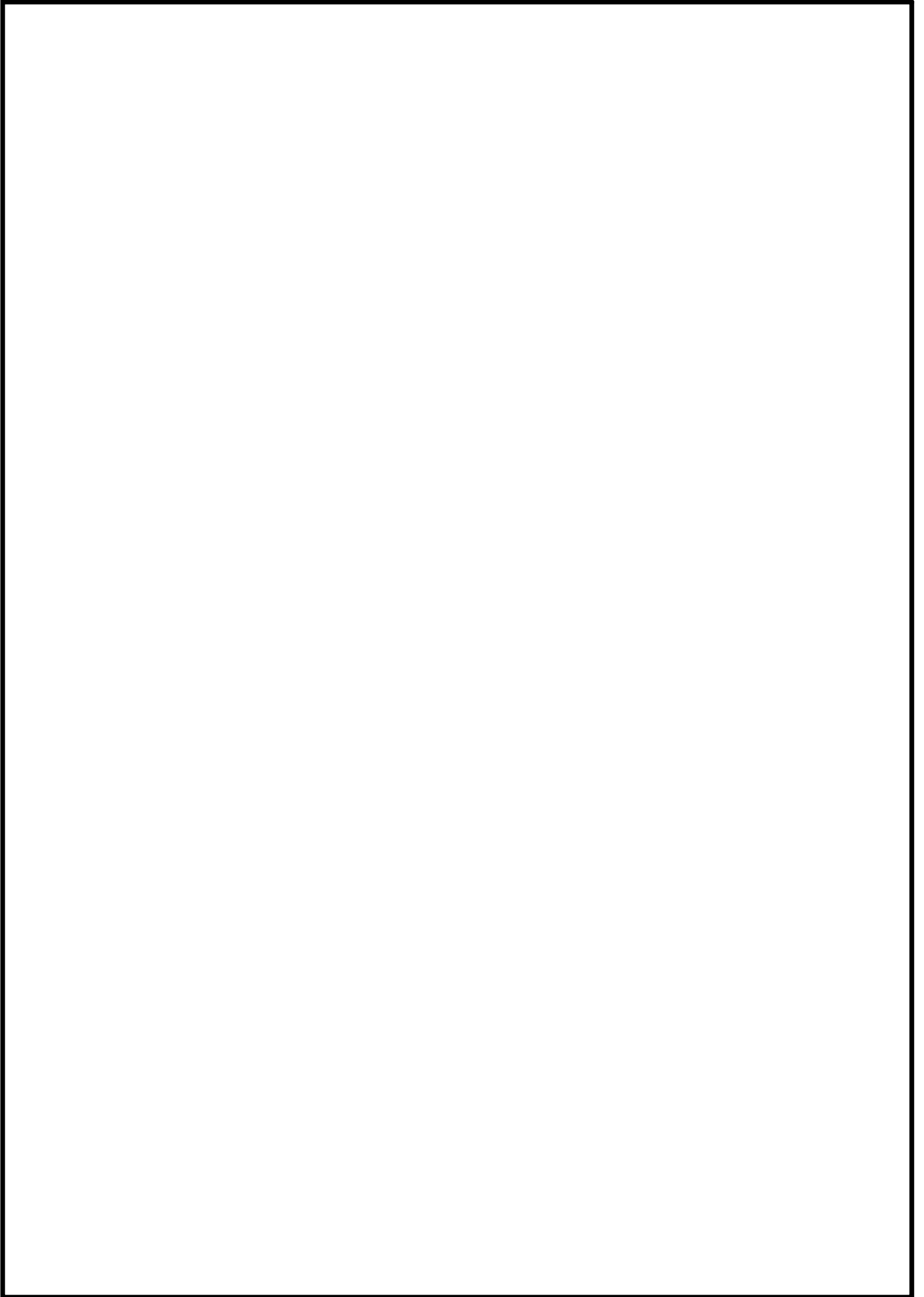
日本原子力発電株式会社

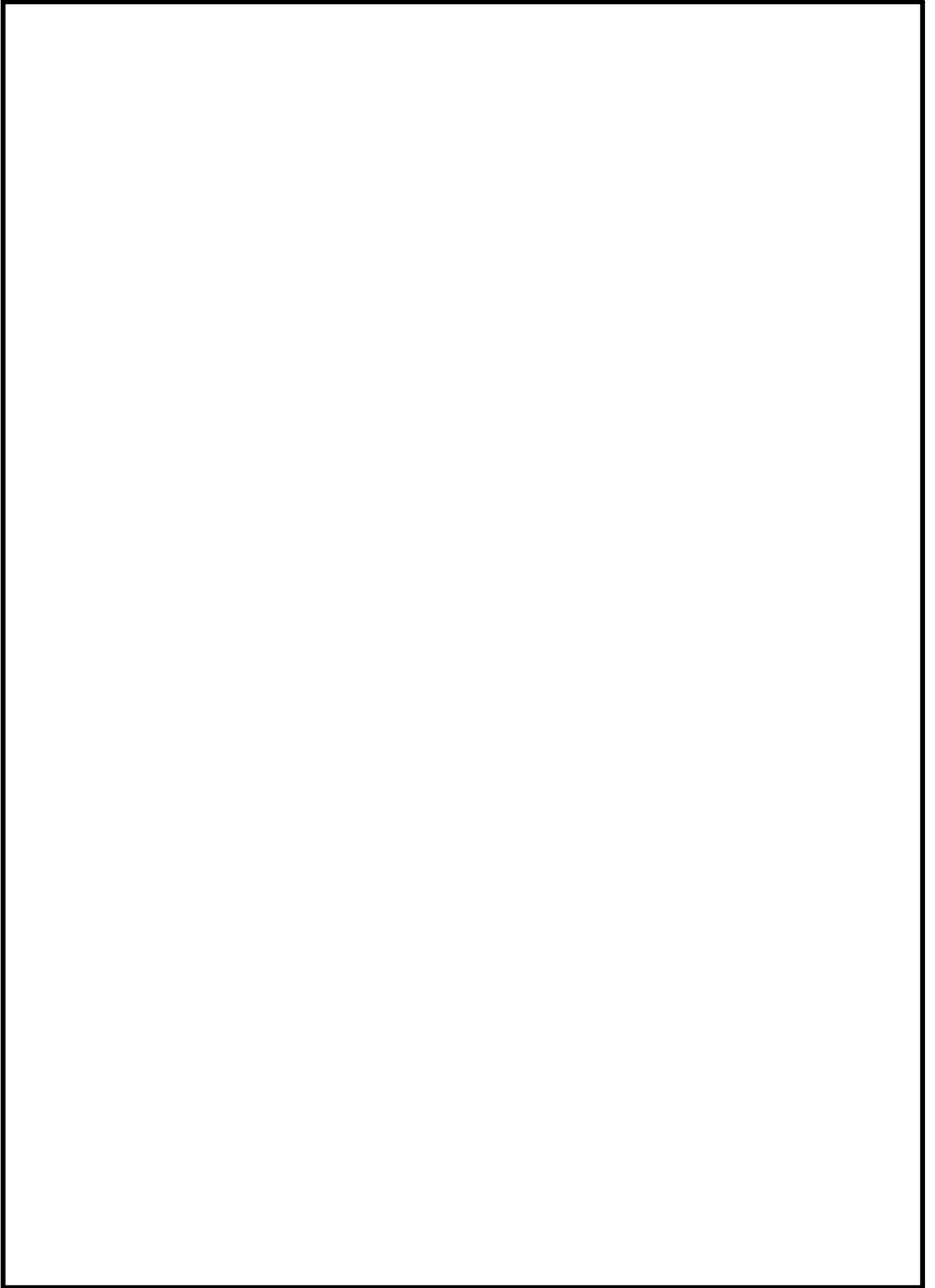


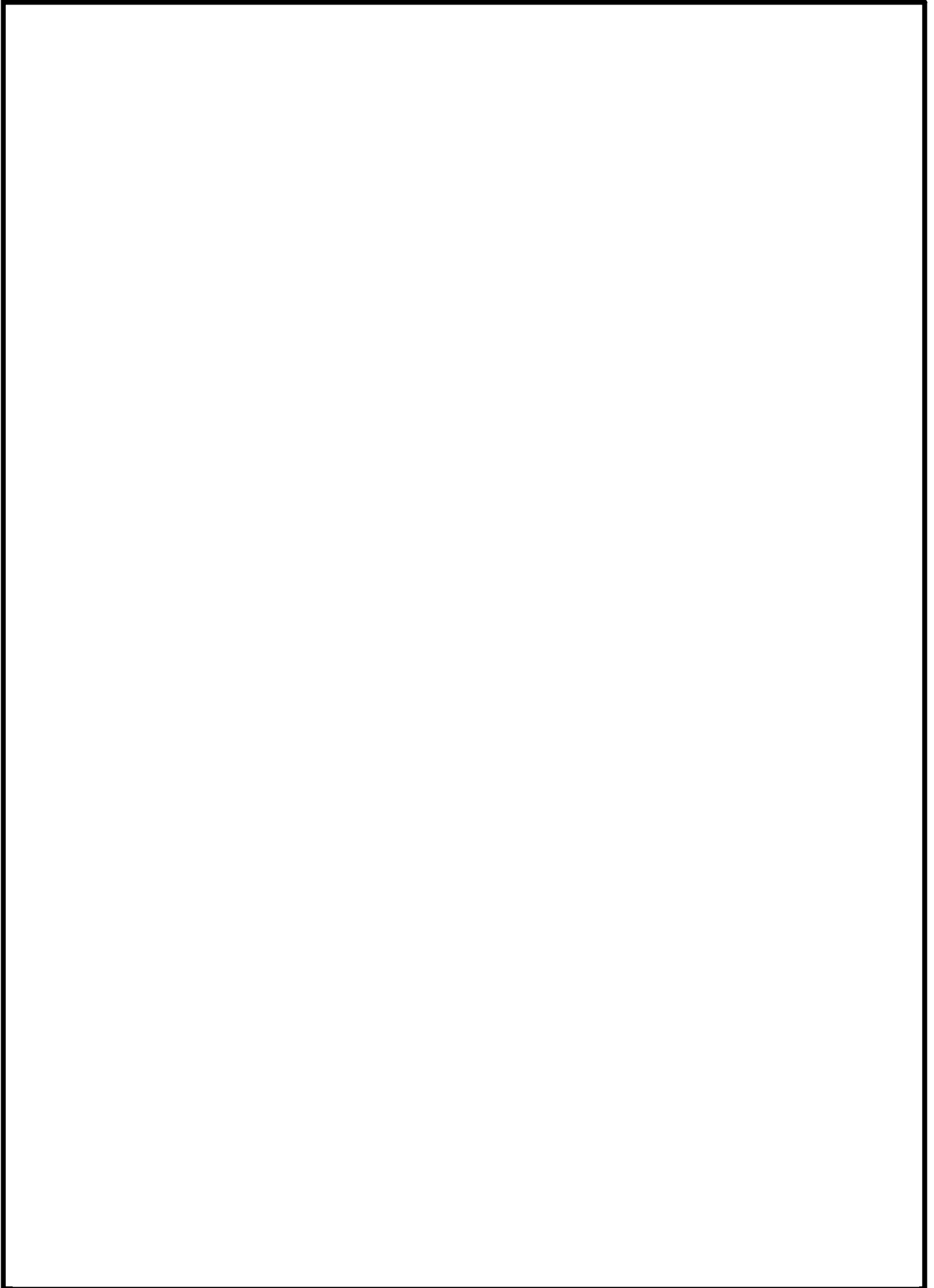












品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通：4-1-2

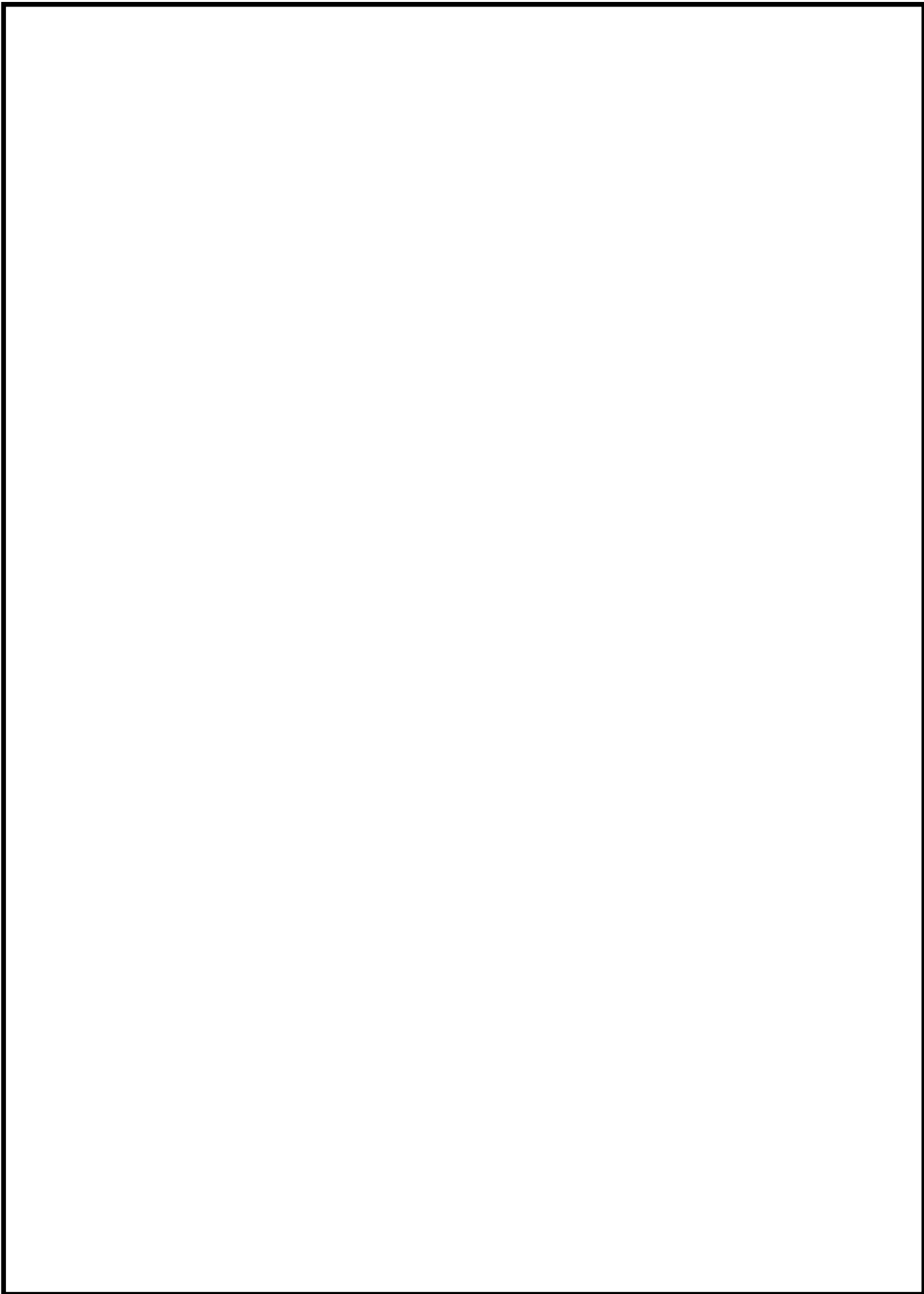
品質管理要項

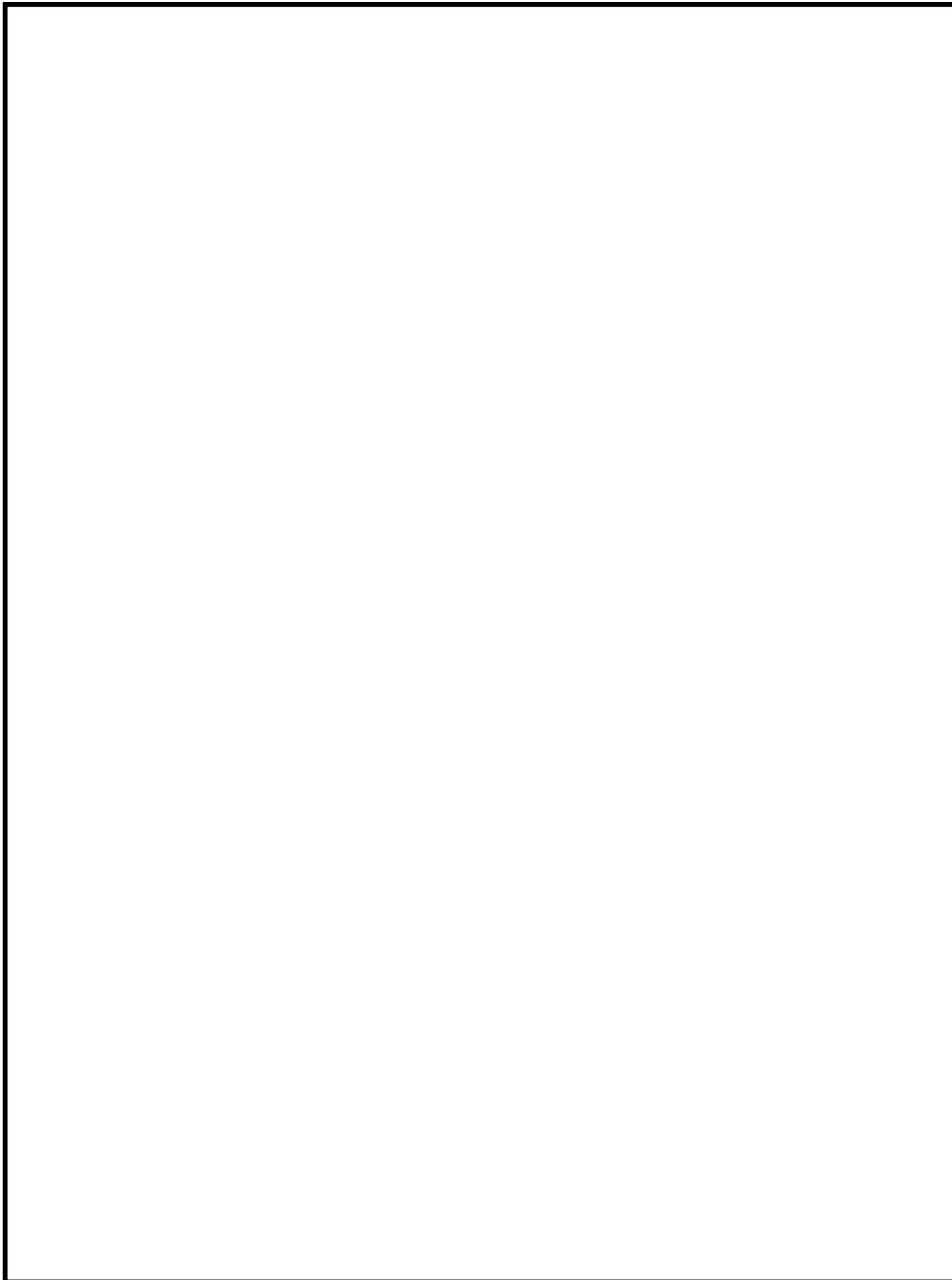
(抜 粋)

制定	平成26年 6月30日	安室規則第 2号
最終改正	平成29年 6月29日	安室規則第68号
主管箇所	本店	安全室

日本原子力発電株式会社

安 全 室





品質方針

原子力施設のリスクを強く認識し、公衆と環境に対して放射線による有害な影響を及ぼすような事故を起こさないという強い決意のもと、

○安全の確保 ○品質の向上 ○企業倫理の浸透 ○透明性の確保

を基本として、原子力発電に従事する者としての責任と誇りをもって、社会から信頼され、安心される原子力発電事業を目指し、積極的に知見や経験を蓄積・活用しながら、以下の方針に基づいて活動する。

全てにおいて「安全第一」を最優先に、

(1) 原子力発電のパイオニアとして期待される役割を十分認識し、以下の業務において品質の高い業務を遂行すること。

- ・ 東海第二発電所、敦賀発電所2号機においては、安全運転の達成に向けた運転・保守を行うこと。東海第二発電所、敦賀発電所2号機においては、長期保守管理方針を反映した保守を行うこと。
- ・ 東海発電所、敦賀発電所1号機においては、廃止措置を安全・着実に推進するための、工事の計画・実施、廃棄物の処理処分及び維持施設の運転・保守を行うこと。
- ・ 敦賀発電所3、4号機においては、安全性及び信頼性を確保した発電所を建設するための設計・施工を行うこと。

(2) 法令・保安規定及び安全協定を遵守すること。また、社内規程については、業務の実態と整合をとりつつ、適切に定め、維持管理し、遵守すること。

(3) 常に問いかける姿勢を意識し、安全性向上活動に自主的、先取的、継続的に取り組むこと。

(4) 社会の声に耳を傾け、開かれた会社を目指し、積極的に情報を社会に発信するとともに、情報を共有し報告・連絡・相談できる風通しの良い職場をつくること。

(5) 品質マネジメントシステムの有効性を継続的に改善すること。

また、(2)をコンプライアンス活動の方針、(3)及び(4)を安全文化醸成活動の方針、並びに東海発電所、東海第二発電所、敦賀発電所1、2号機においては、(1)の保守に係る方針を保守管理の実施方針とする。

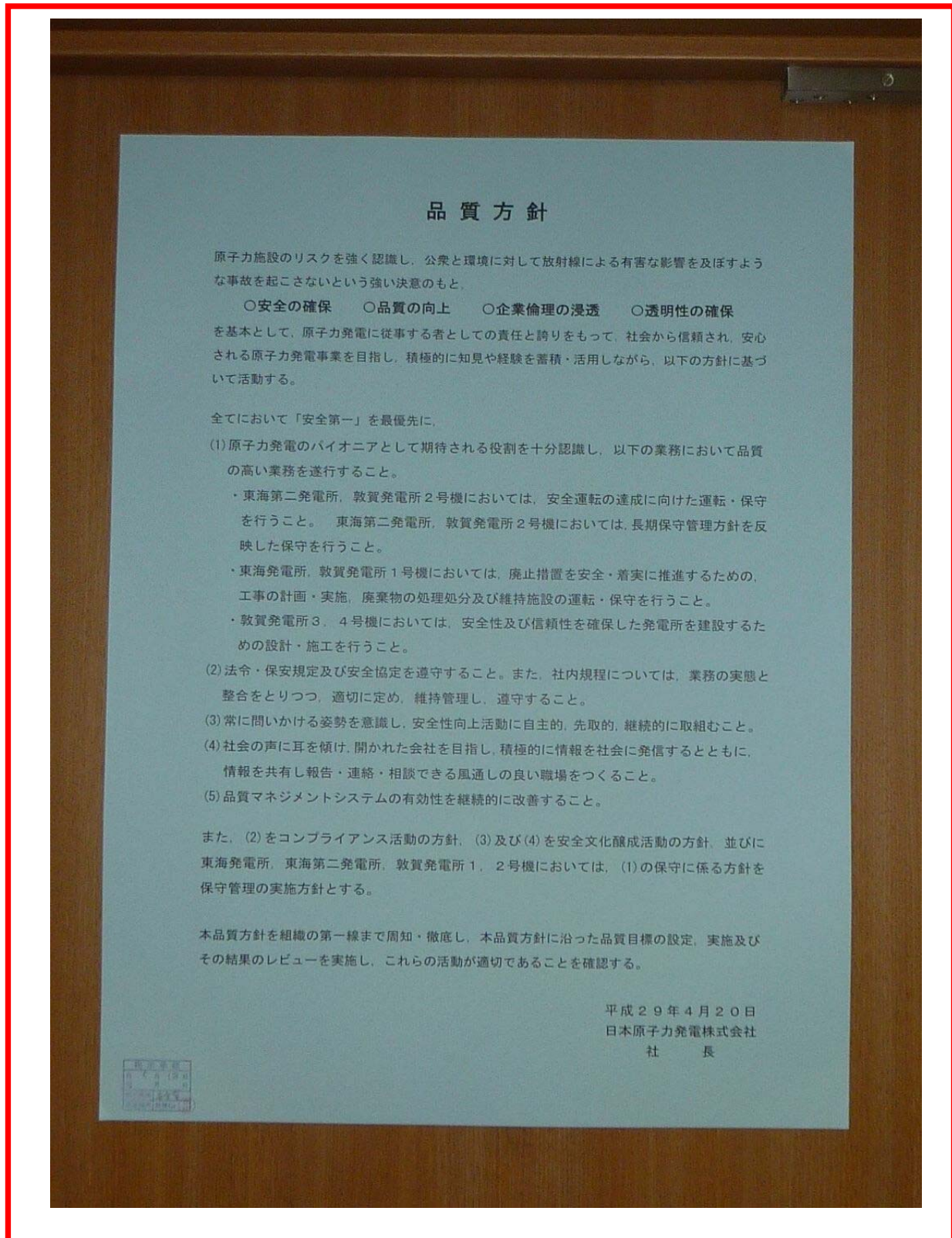
本品質方針を組織の第一線まで周知・徹底し、本品質方針に沿った品質目標の設定、実施及びその結果のレビューを実施し、これらの活動が適切であることを確認する。

平成29年4月20日
日本原子力発電株式会社
社長

品質方針の組織内への伝達方法

(執務室掲示：A2サイズ)

⑦-6, ⑧-6



品質方針の組織内への伝達方法

(品質方針 携帯用カードの配布)

⑦-6, ⑧-6

品質方針

原子力施設のリスクを強く認識し、公衆と環境に対して放射線による有害な影響を及ぼすような事故を起こさないという強い決意のもと、

○安全の確保 ○品質の向上 ○企業倫理の浸透 ○透明性の確保

を基本として、原子力発電に従事する者としての責任と誇りをもって、社会から信頼され、安心される原子力発電事業を目指し、積極的に知見や経験を蓄積・活用しながら、以下の方針に基づいて活動する。

全てにおいて「安全第一」を最優先に、

(1) 原子力発電のパイオニアとして期待される役割を十分認識し、以下の業務において品質の高い業務を遂行すること。

- ・東海第二発電所、敦賀発電所2号機においては、安全運転の達成に向けた運転・保守を行うこと。東海第二発電所、敦賀発電所2号機においては、長期保守管理方針を反映した保守を行うこと。
- ・東海発電所、敦賀発電所1号機においては、廃止措置を安全・着実に推進するための、工事の計画・実施、廃棄物の処理処分及び維持施設の運転・保守を行うこと。
- ・敦賀発電所3、4号機においては、安全性及び信頼性を確保した発電所を建設するための設計・施工を行うこと。

(2) 法令・保安規定及び安全協定を遵守すること。また、社内規程については、業務の実態と整合をとりつつ、適切に定め、維持管理し、遵守すること。

(3) 常に問いかける姿勢を意識し、安全性向上活動に自主的、先取的、継続的に取り組むこと。

(4) 社会の声に耳を傾け、開かれた会社を目指し、積極的に情報を社会に発信するとともに、情報を共有し報告・連絡・相談できる風通しの良い職場をつくること。

(5) 品質マネジメントシステムの有効性を継続的に改善すること。

また、(2)をコンプライアンス活動の方針、(3)及び(4)を安全文化醸成活動の方針、並びに東海発電所、東海第二発電所、敦賀発電所1、2号機においては、(1)の保守に係る方針を保守管理の実施方針とする。

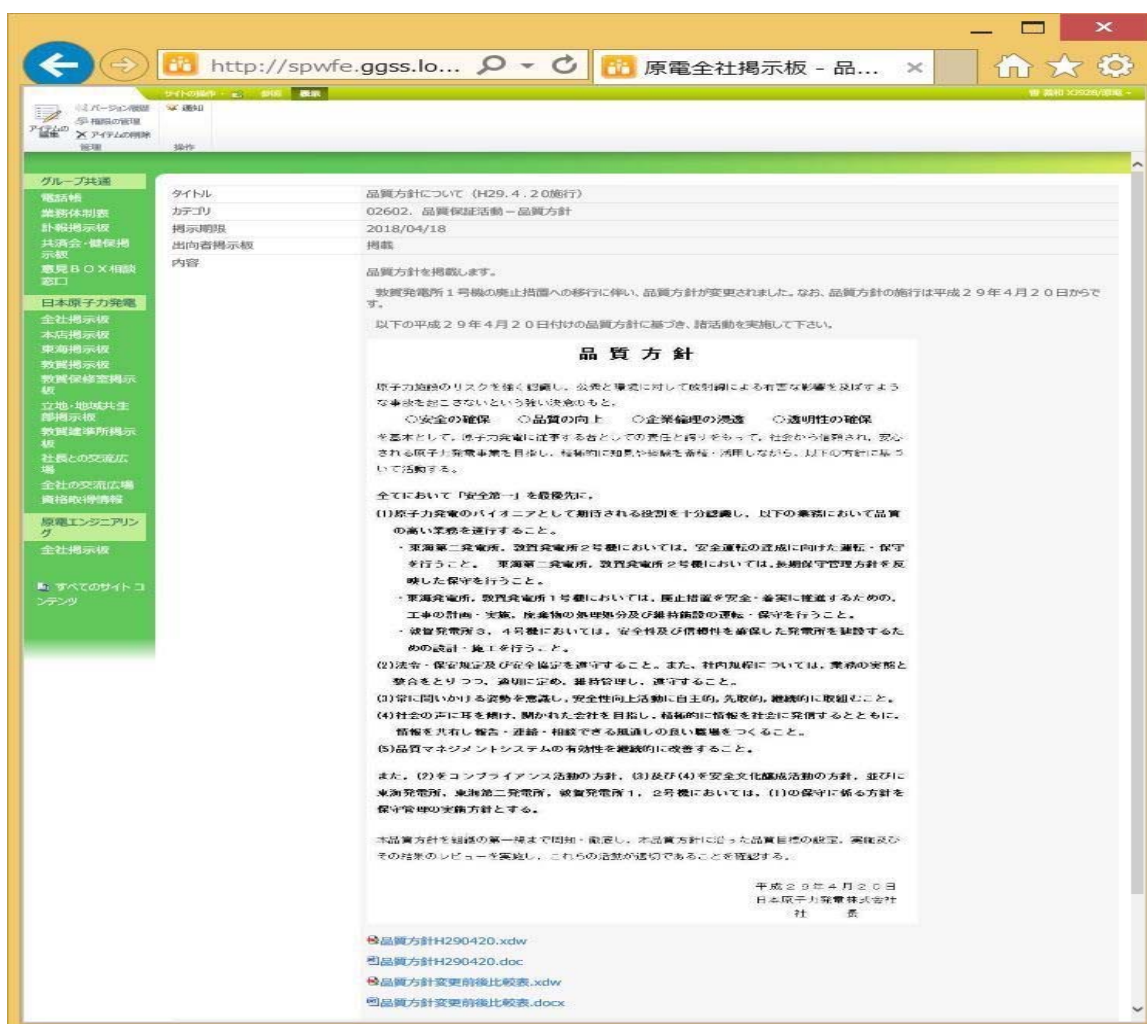
本品質方針を組織の第一線まで周知・徹底し、本品質方針に沿った品質目標の設定、実施及びその結果のレビューを実施し、これらの活動が適切であることを確認する。

平成29年4月20日 日本原子力発電株式会社 社長

品質方針の組織内への伝達方法

(イントラネット掲載)

⑦-6, ⑧-6



品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通：5 - 6 - 1

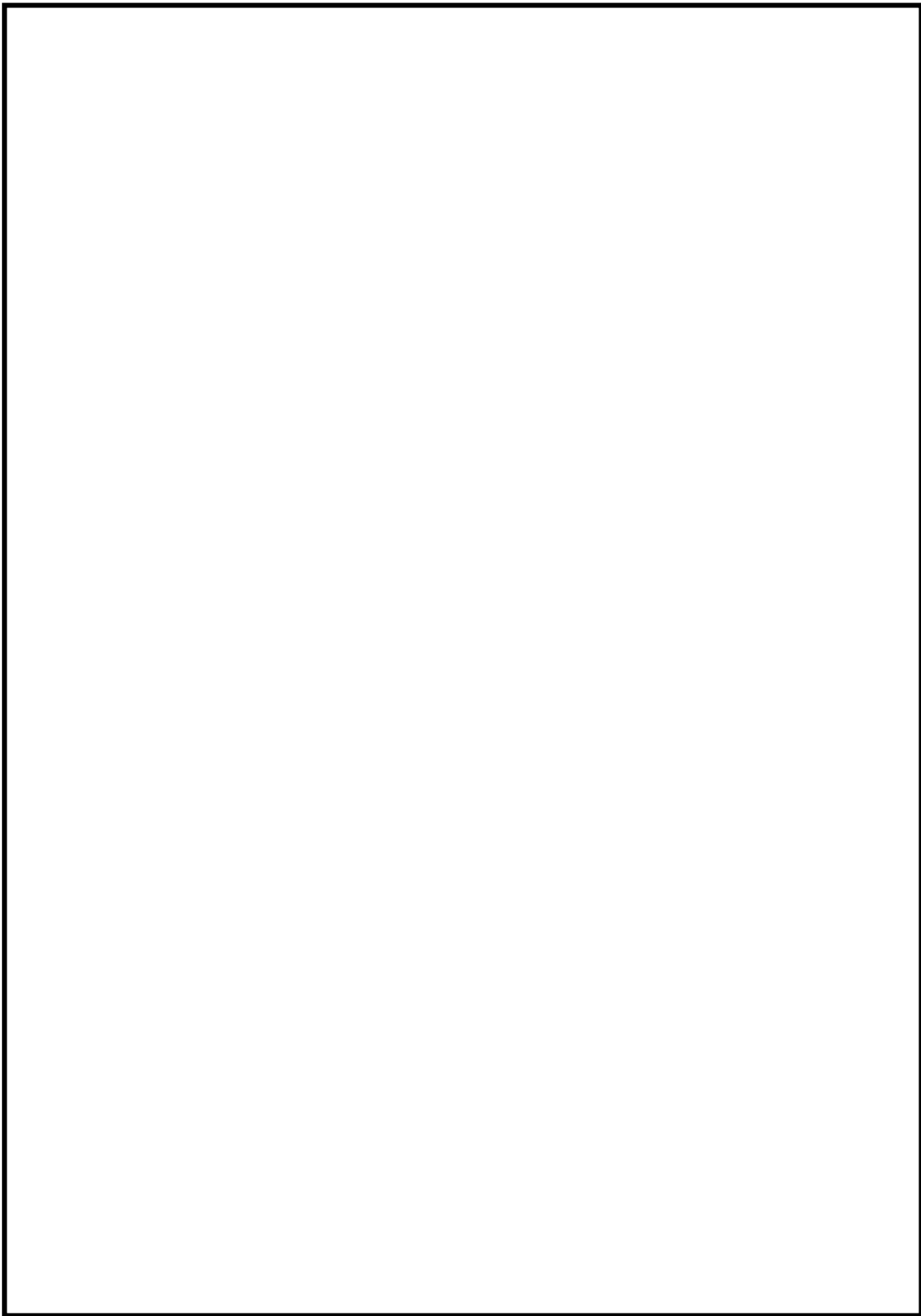
マネジメントレビュー要項

(抜 粋)

制定	平成26年 6月30日	安室規則第 5号
最終改正	平成29年 4月19日	安室規則第62号
主管箇所	本店	安全室

日本原子力発電株式会社

安 全 室



品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通：5-5-1

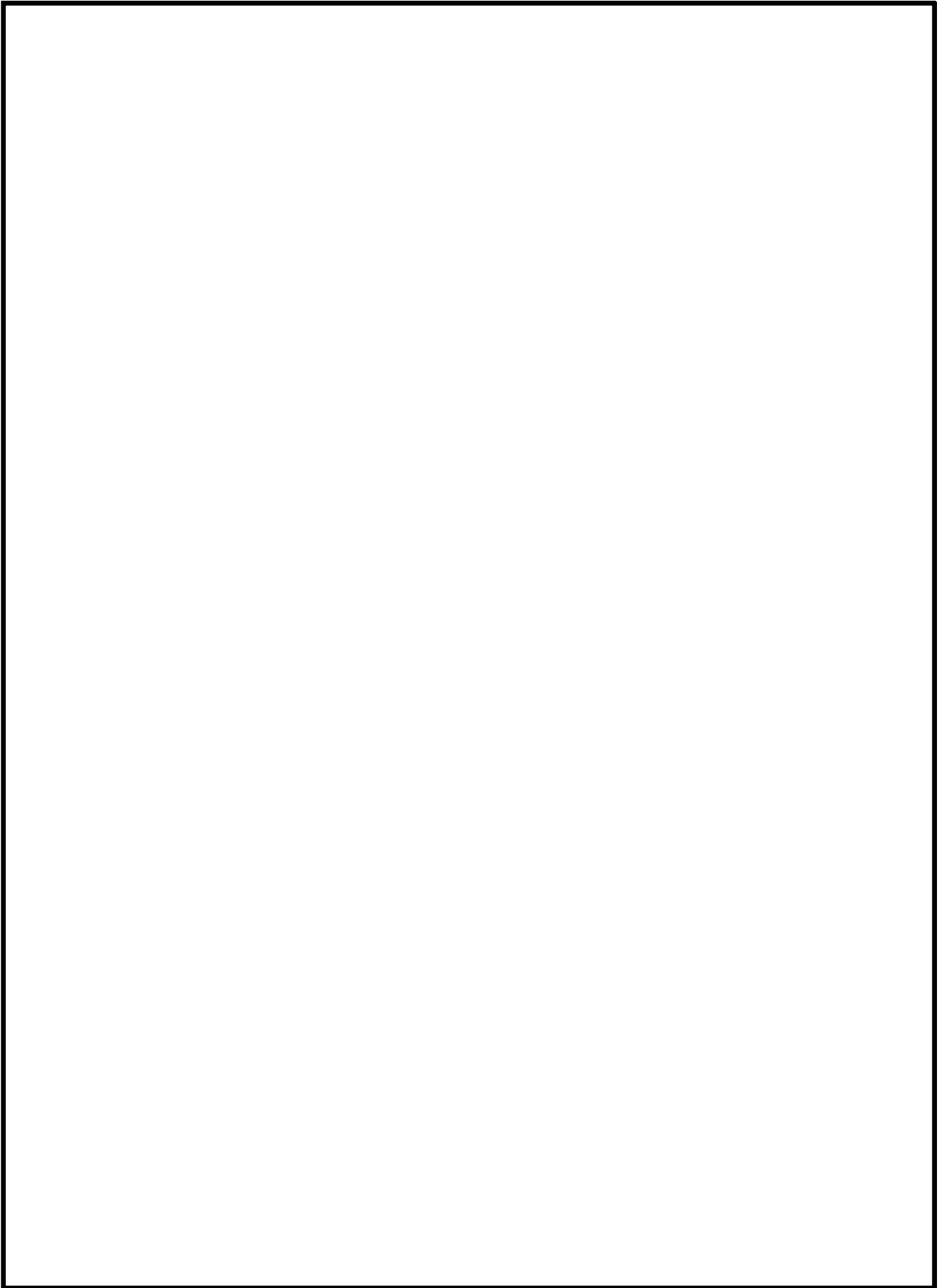
品質保証委員会及び品質保証検討会 運営要項

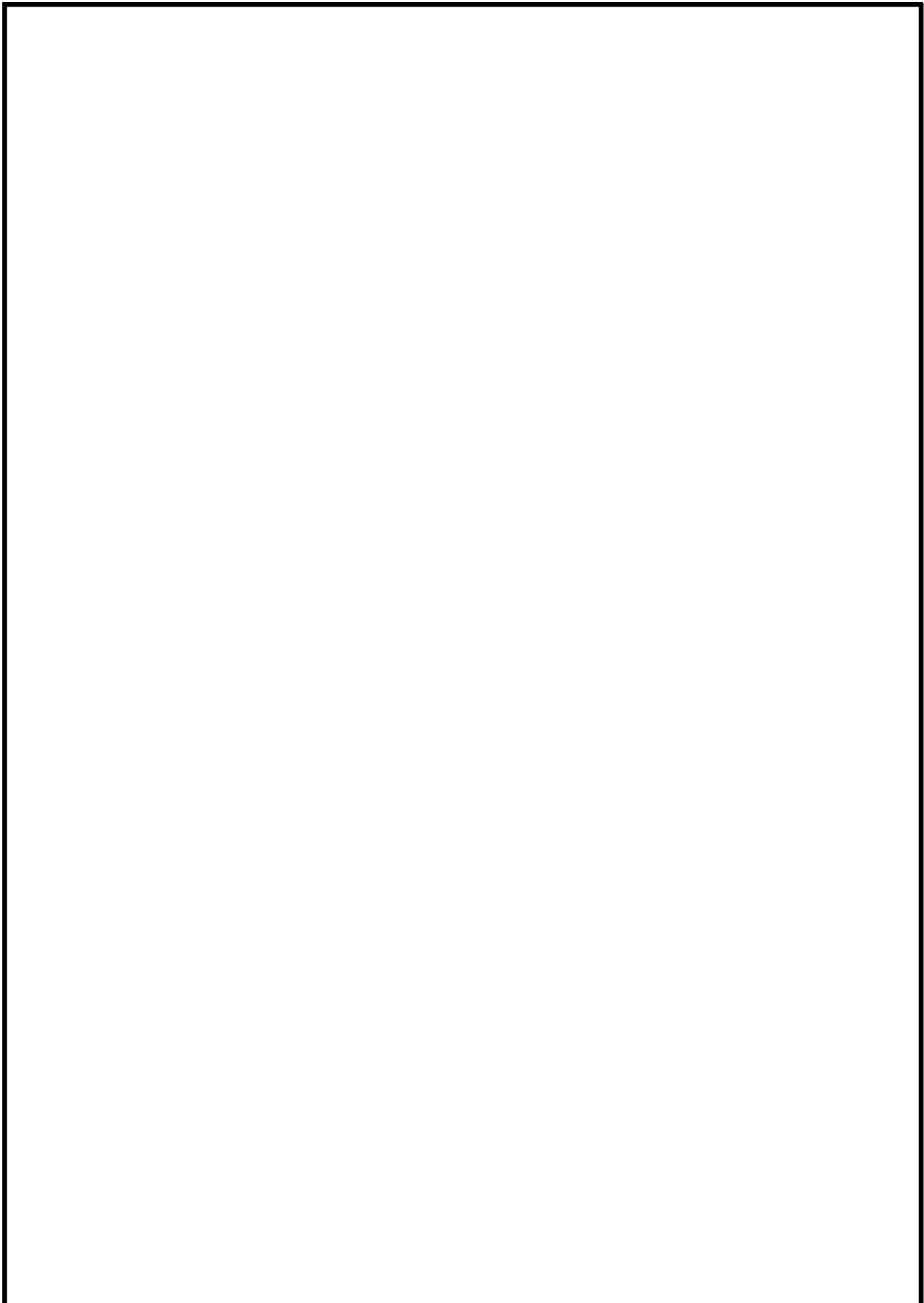
(抜 粋)

制定	平成26年 6月30日	安室規則第 4号
最終改正	平成28年 3月22日	安室規則第42号
主管箇所	本店	安全室

日本原子力発電株式会社

安 全 室





品質マネジメントシステム規程管理番号

QM東海：5-5-0-2

QM東Ⅱ：5-5-0-2

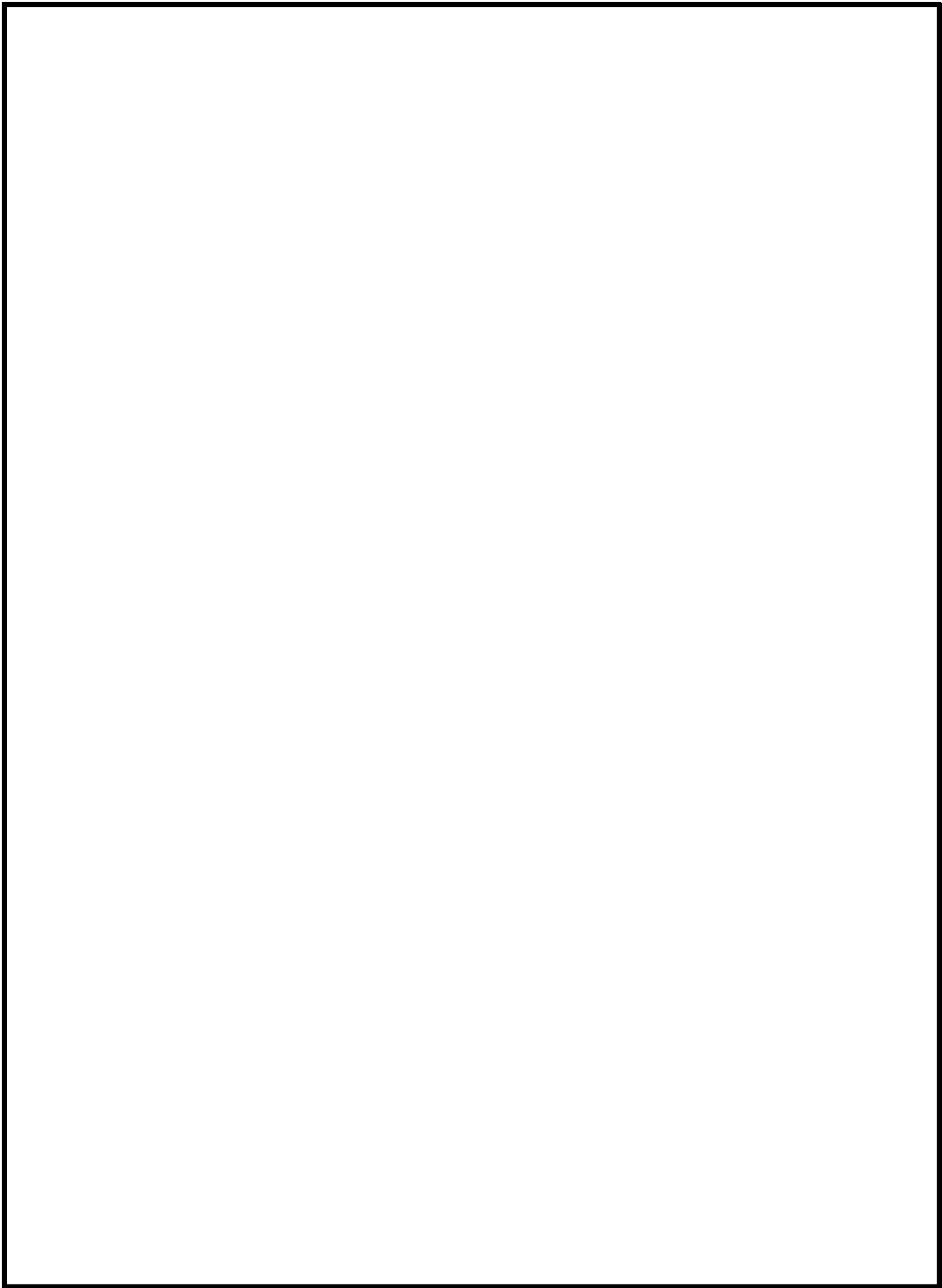
品質保証運営委員会運営要領

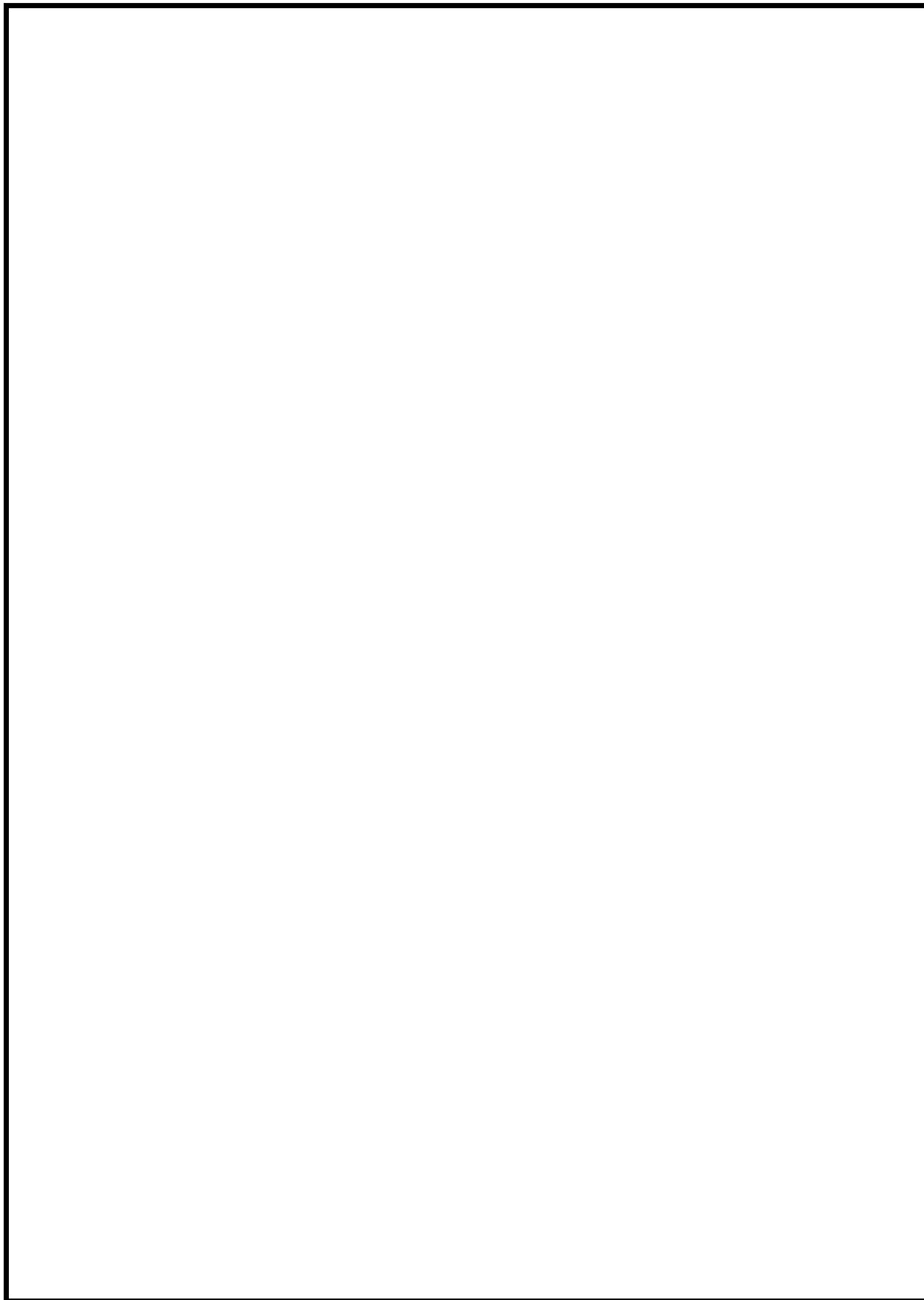
(抜 粋)

制定	平成28年 7月 8日	東海発所則第807号，	東二発所則第939号
最終改正	平成29年 5月 25日	東海発所則第827号，	東二発所則第958号
主管箇所	東海第二発電所	品質保証室	

平成29年5月

東海発電所・東海第二発電所
品質保証室





品質保証委員会及び東海第二発電所 品質保証運営委員会の開催実績

時期	平成 28 年度		平成 29 年度
	上期	下期	上期
品質保証委員会	平成 28 年 6 月 16 日	平成 28 年 11 月 17 日	平成 29 年 6 月 29 日
	—	平成 29 年 2 月 1 日	—
	—	平成 29 年 3 月 15 日	—
東海第二発電所 品質保証運営委員会	平成 28 年 4 月 7 日	平成 28 年 10 月 21 日	平成 29 年 4 月 24 日
	平成 28 年 5 月 10 日	平成 29 年 1 月 16 日	平成 29 年 5 月 18 日
	平成 28 年 5 月 13 日	平成 29 年 2 月 8 日	平成 29 年 8 月 10 日
	—	平成 29 年 2 月 9 日	—
	—	平成 29 年 2 月 27 日	—
	—	平成 29 年 3 月 21 日	—

品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通：4-1-1

原子力施設の重要度分類基準要項

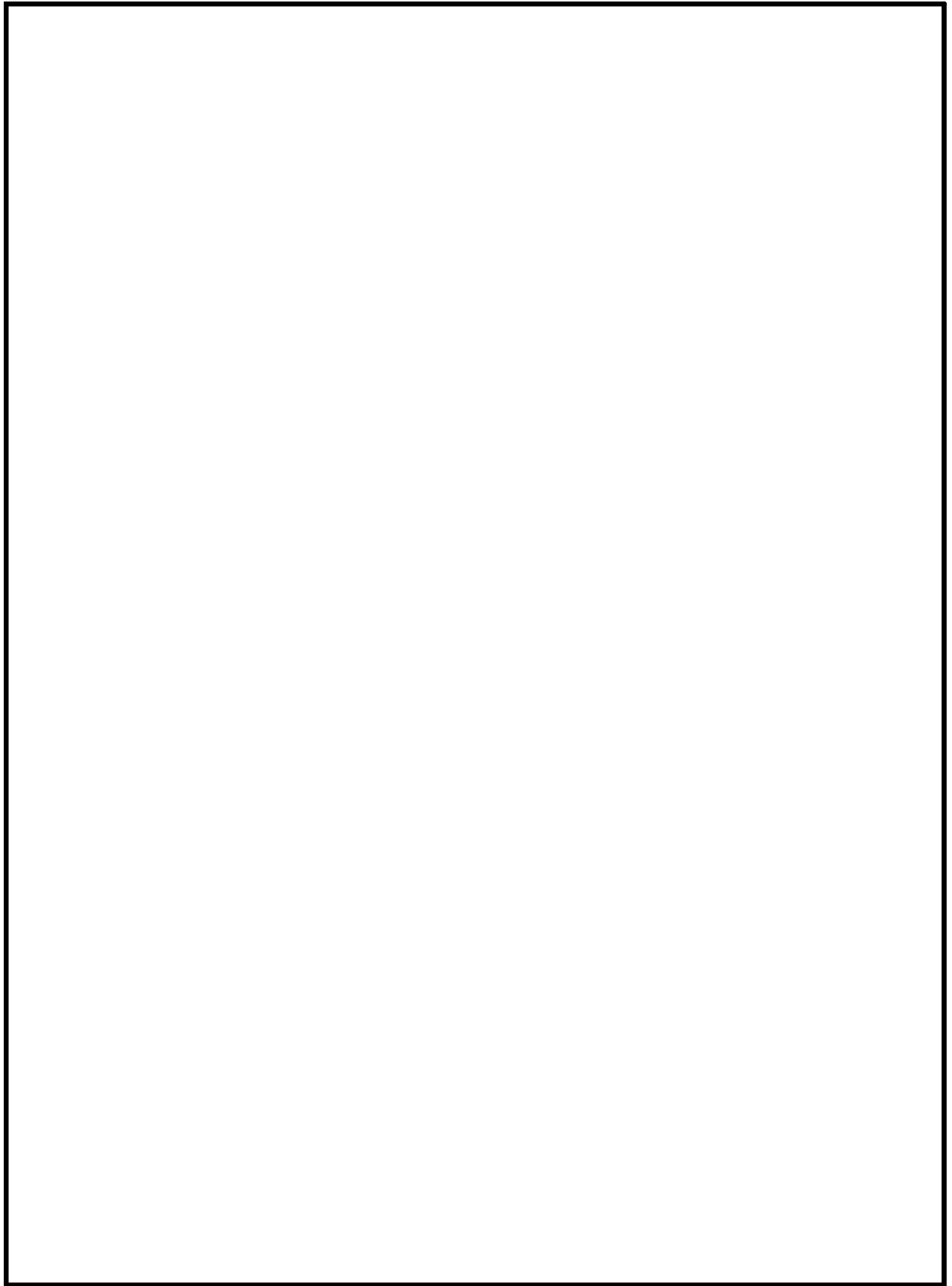
(抜 粋)

制定	平成17年 3月30日	発室規則第117号, 廃室規則第 14号
最終改正	平成29年 4月19日	発室規則第765号, 廃室規則第466号
主管箇所	本店	発電管理室

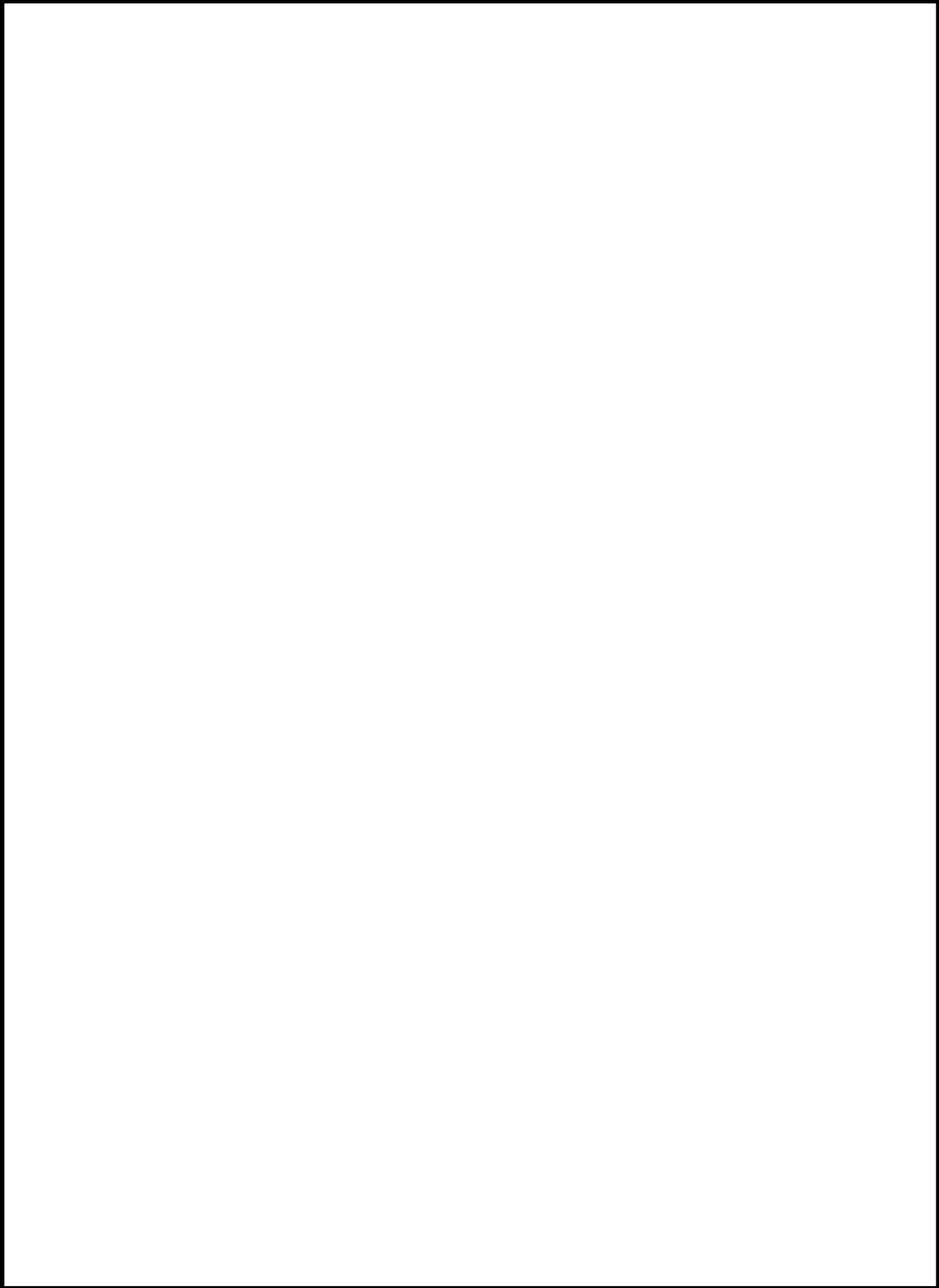
日本原子力発電株式会社

発電管理室

廃止措置プロジェクト推進室







品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通：7-4-1

調達管理要項

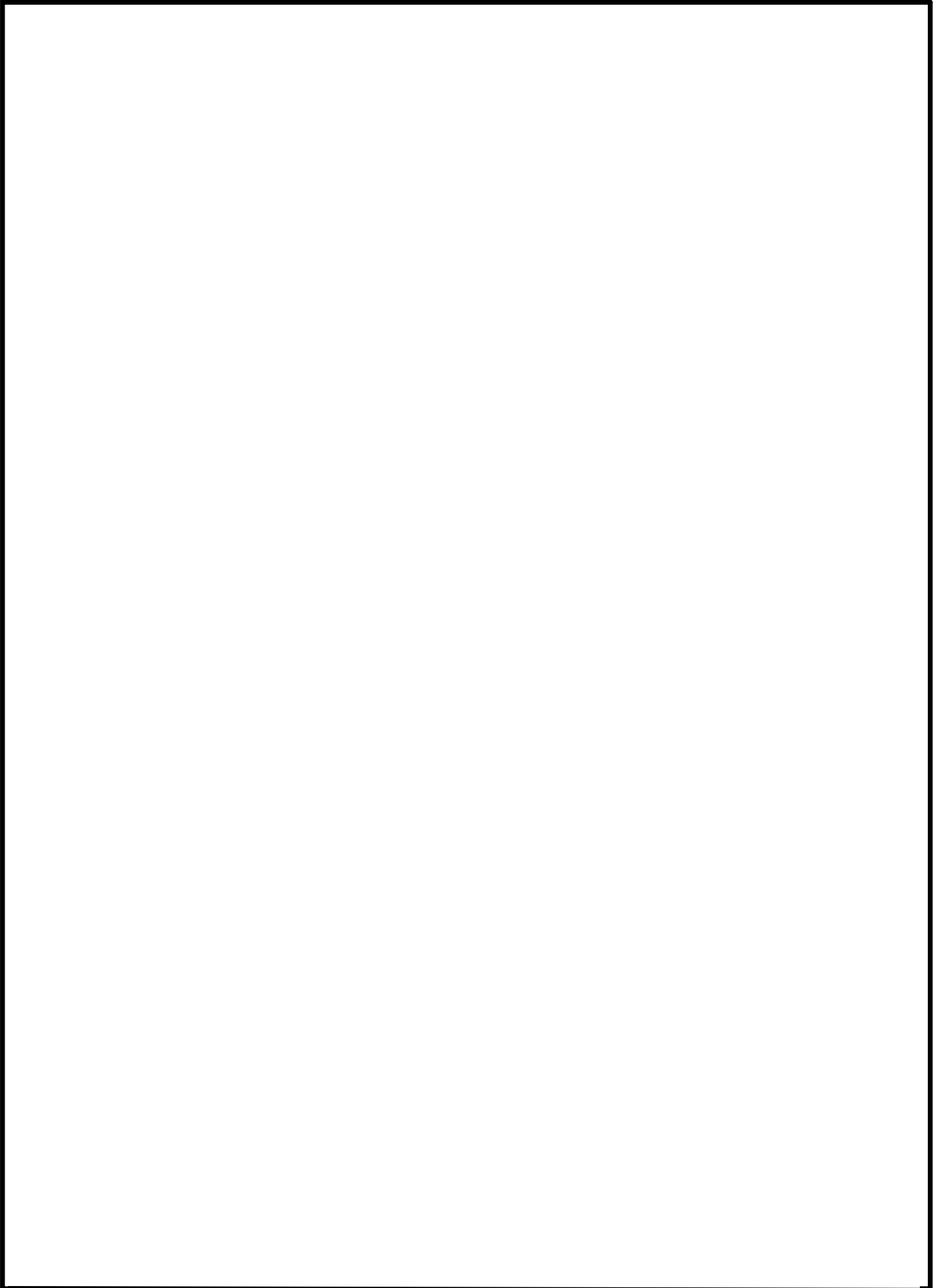
(抜 粋)

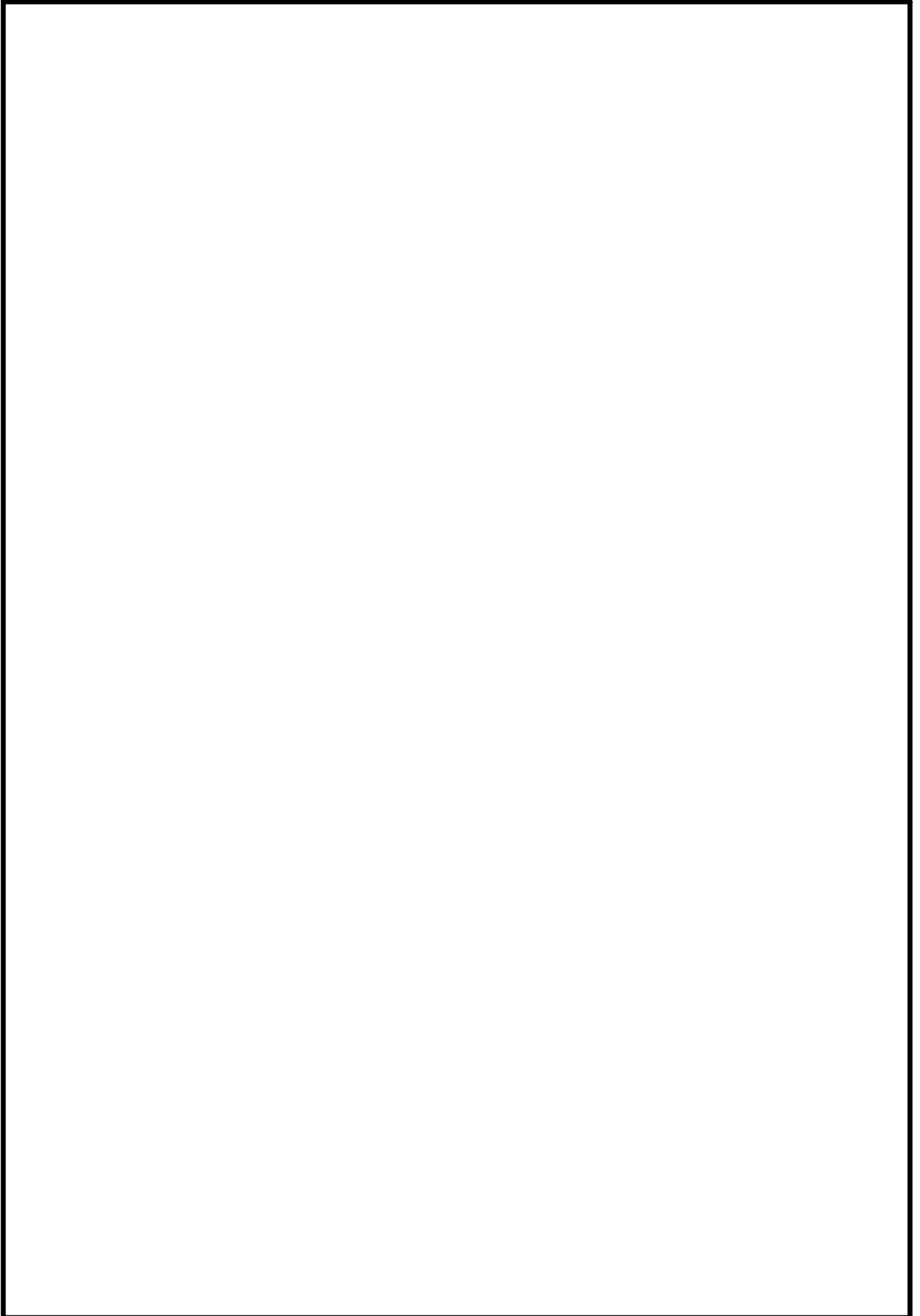
制定	平成17年 3月30日	発室規則第108号, 廃室規則第 13号
最終改正	平成29年 6月29日	発室規則第772号, 廃室規則第477号
主管箇所	本店	発電管理室

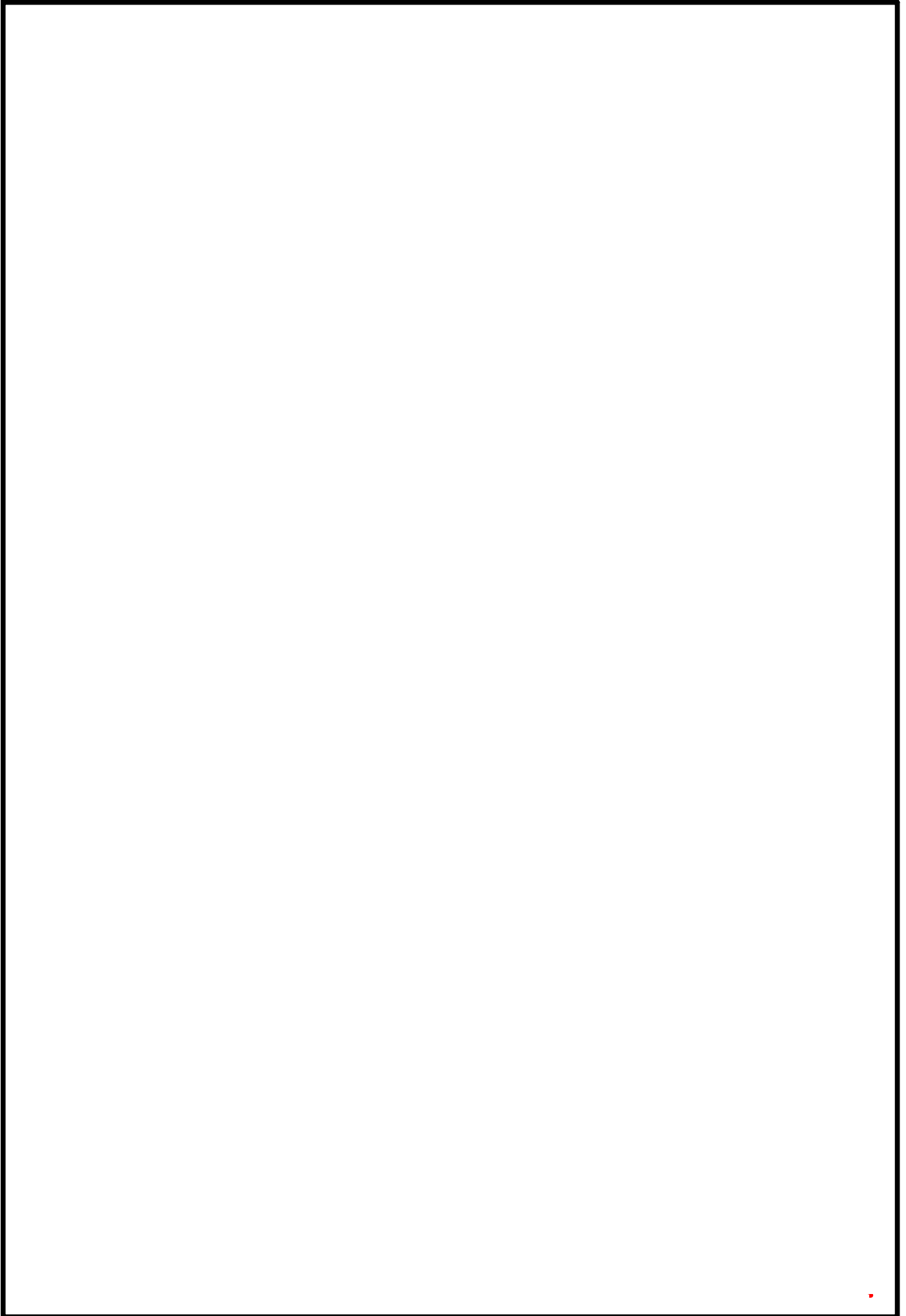
日本原子力発電株式会社

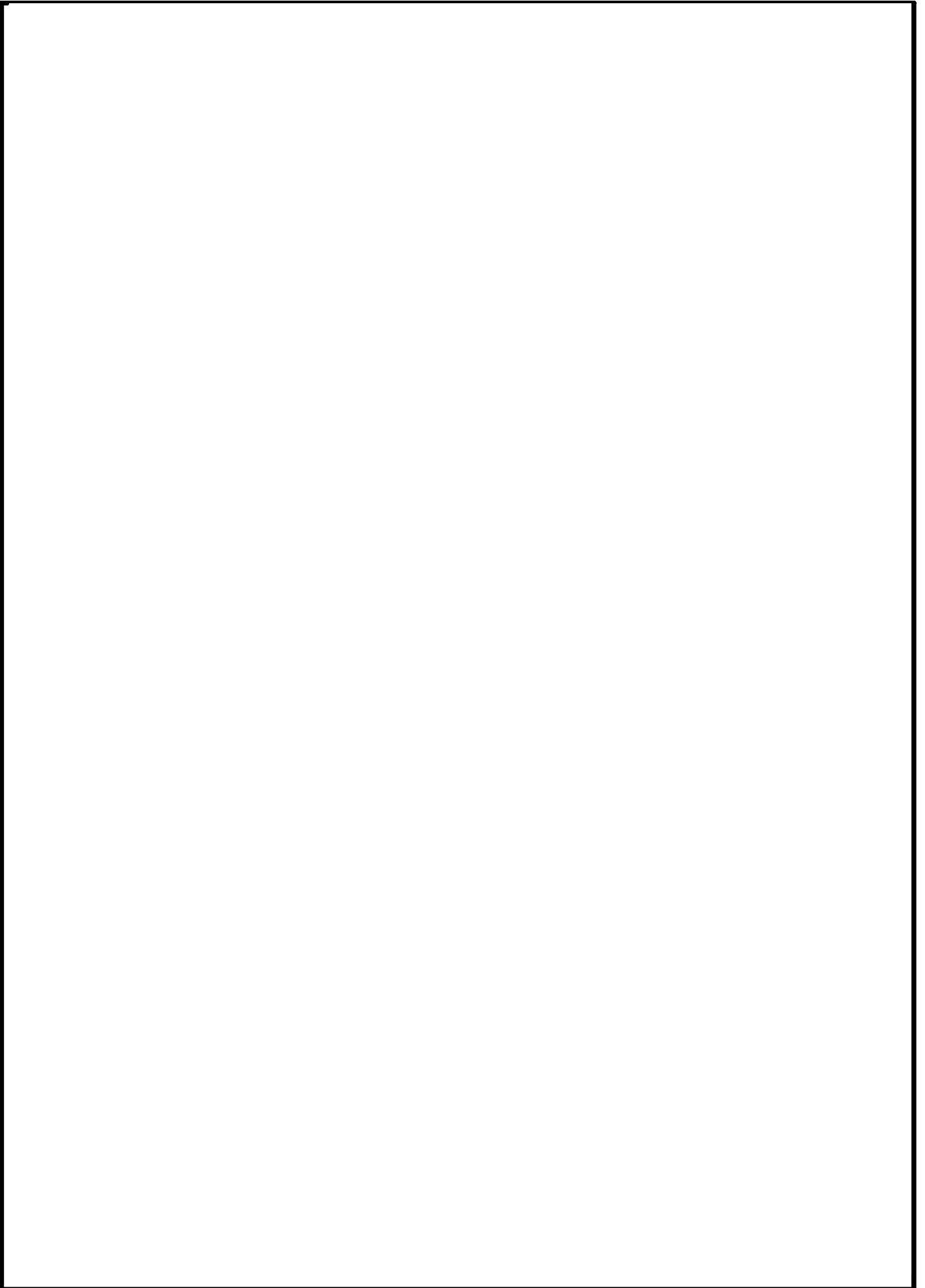
発 電 管 理 室

廃止措置プロジェクト推進室









品質マネジメントシステム規程管理番号

QM共通:8-3-1

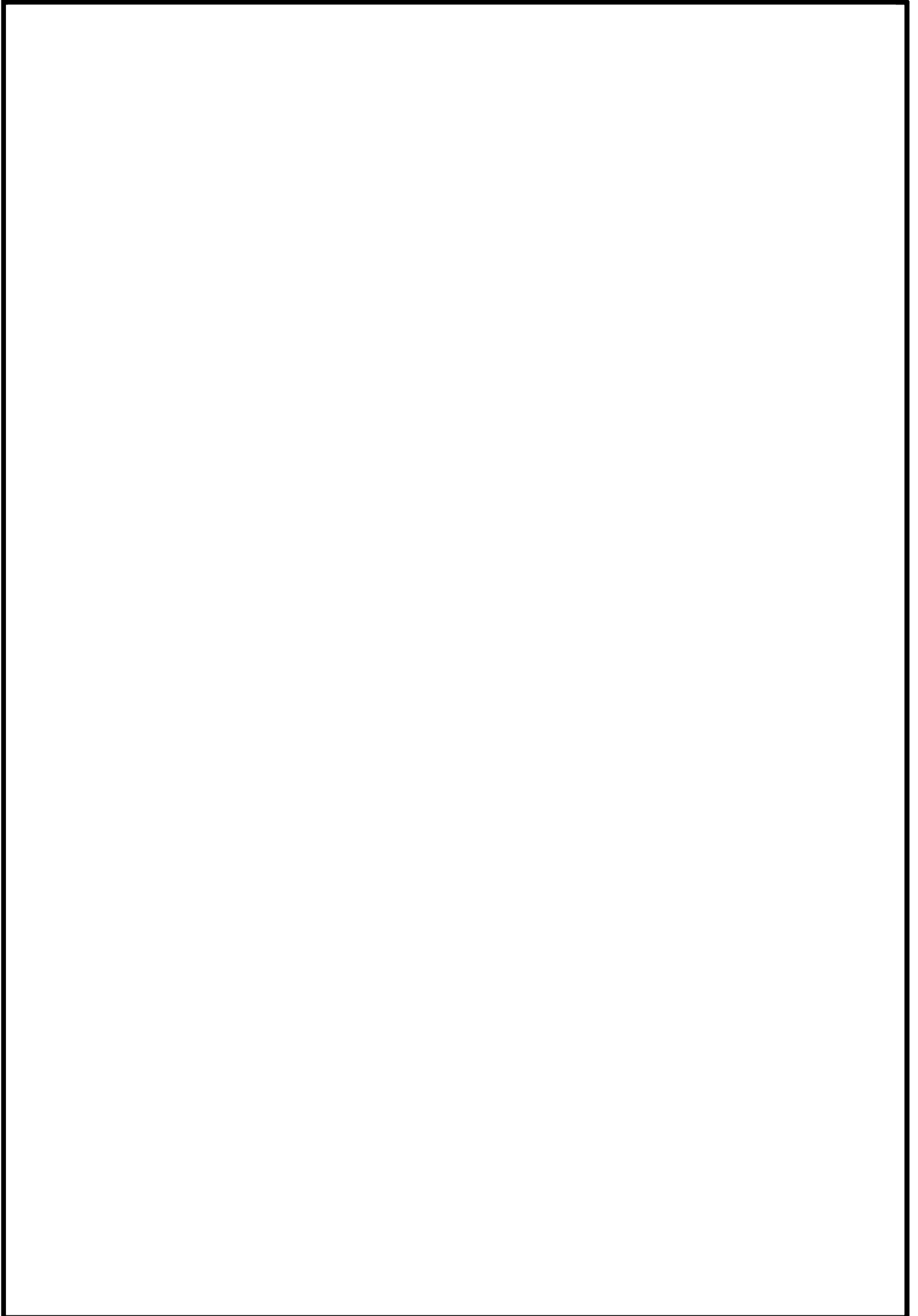
不適合管理要項

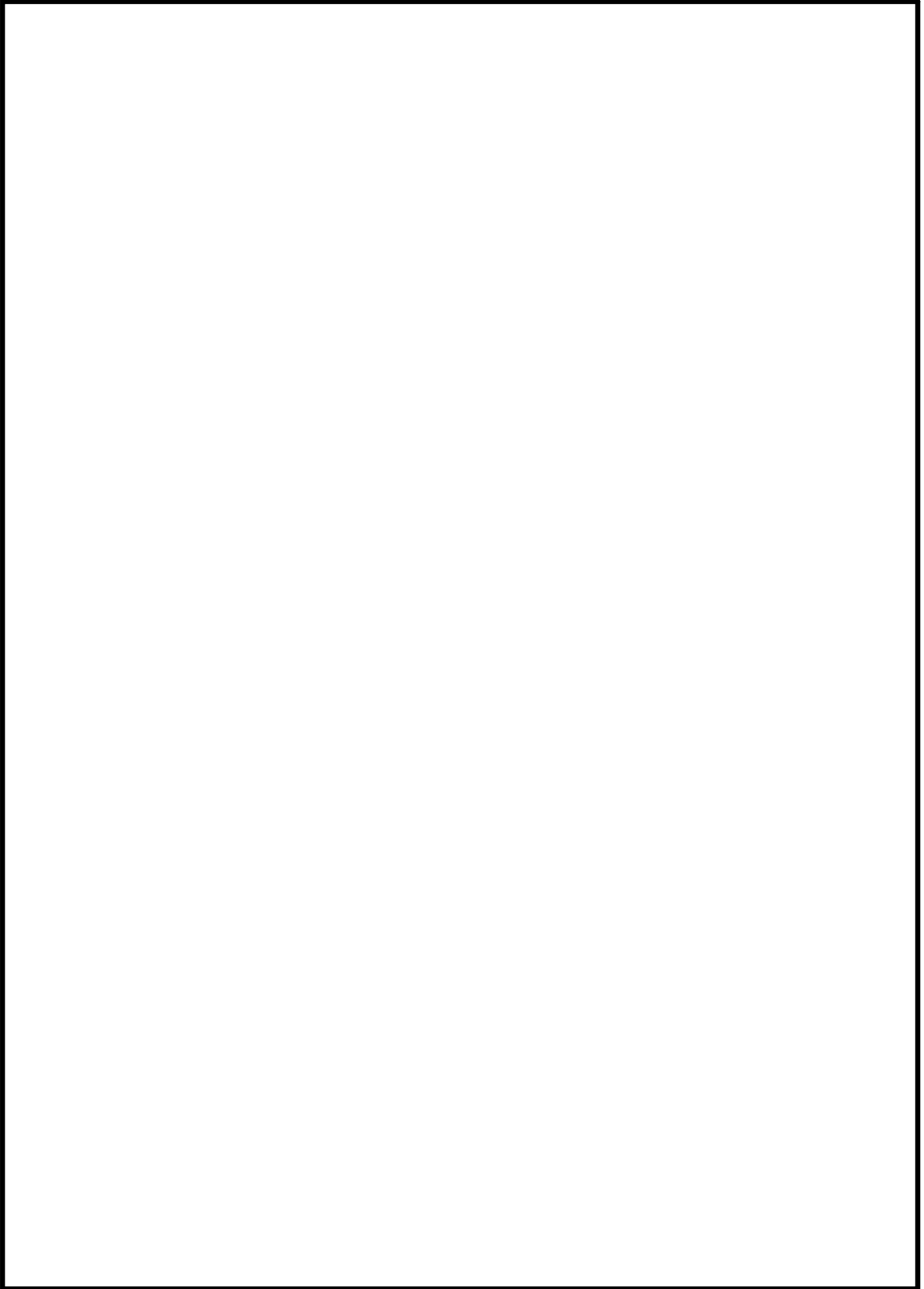
(抜 粋)

制定	平成26年6月30日	安室規則第 9号
最終改正	平成29年4月19日	安室規則第61号
主管箇所	本店	安全室

日本原子力発電株式会社

安 全 室





平成29年度 新入社員教育 年間教育スケジュール

	⑨-1	担当箇所	平成29年							平成30年			備考			
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1		2	3	
1	本店における 新入社員集合教育	本店	4/3~4/5 (3日間) □ 5/9 (1日間)													
2	東海総合研修 センターにおける 新入社員集合研修	東海総合 研修センター	4/6~4/10 (3日間) □													
3	入所時教育	東海第二発電所	4/11~4/14 (4日間) □													
4	直研修	東海第二発電所	4/15~5/8 (24日間) □													
5	【保修・放管部門】 職場OJT	東海第二発電所	5/10 □													
6	後期集合研修 (予定)	敦賀総合 研修センター												3/8~3/9 (2日間) □		
	特記事項		4/3 ▽入社式 5/10 ▽辞令交付、配属													
	定期検査計画		東海第二 敦賀2号													東海第二：H23.5/27~未定 敦賀2号：H23.8/29~未定

<参考>
中途採用者に対しては、配属先の各室において「原子炉施設保安教育手順書」に基づき保安教育及び各室で定める教育取扱書等に基づく教育を実施する。

品質マネジメントシステム規程管理番号

QM東海：6-2-1-2

QM東Ⅱ：6-2-1-3

力量運用要領

(抜 粋)

制定	平成15年12月17日	東発所則第288号，東二発所則第290号
最終改正	平成29年 3月31日	東発所則第822号，東二発所則第952号
主管箇所	東海第二発電所	総務室

平成29年3月

東海発電所・東海第二発電所

総 務 室

品質マネジメントシステム規程管理番号

QM 東海：6-2-1-6

QM 東Ⅱ：6-2-1-7

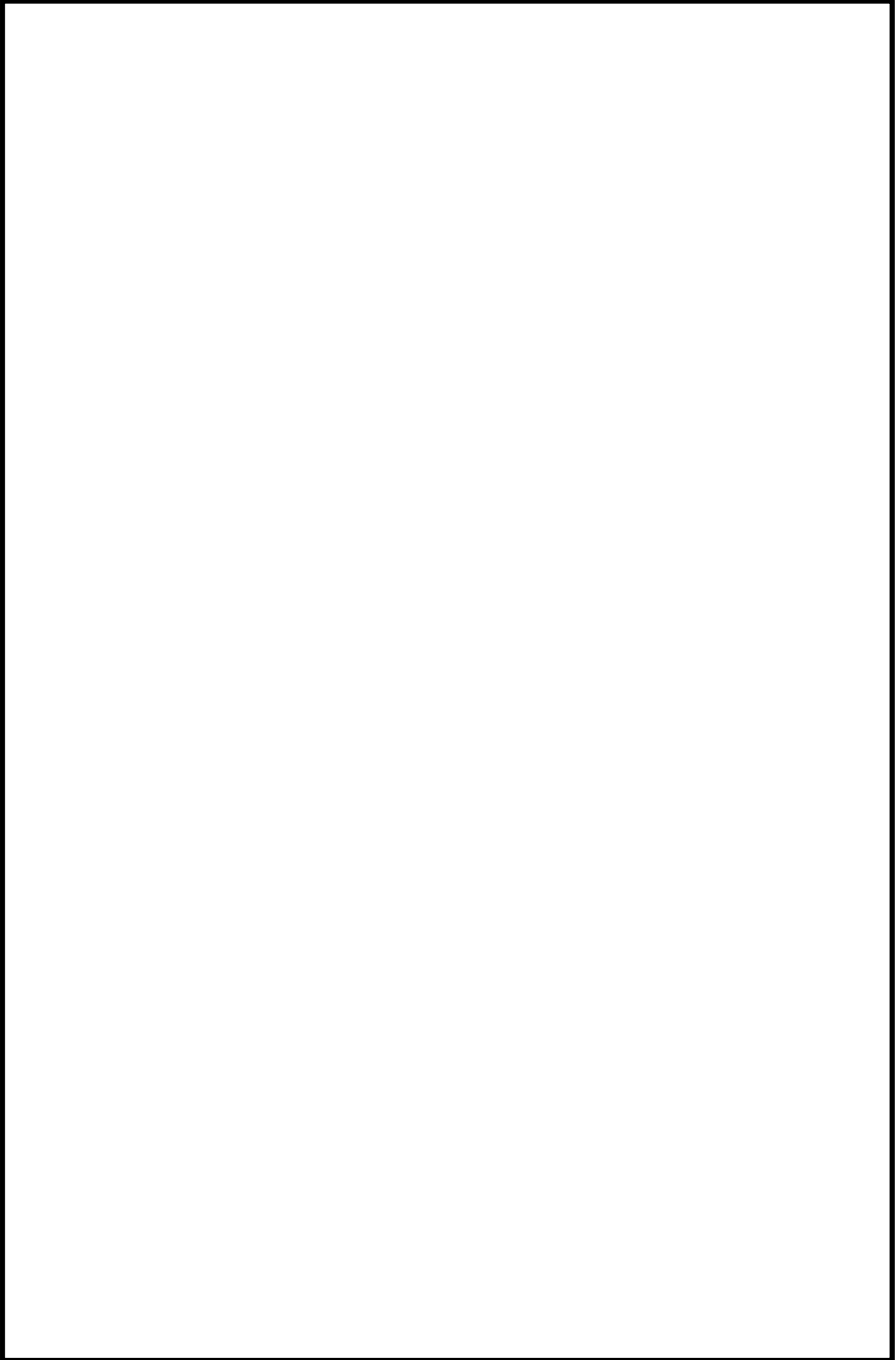
原子炉施設保安教育手順書

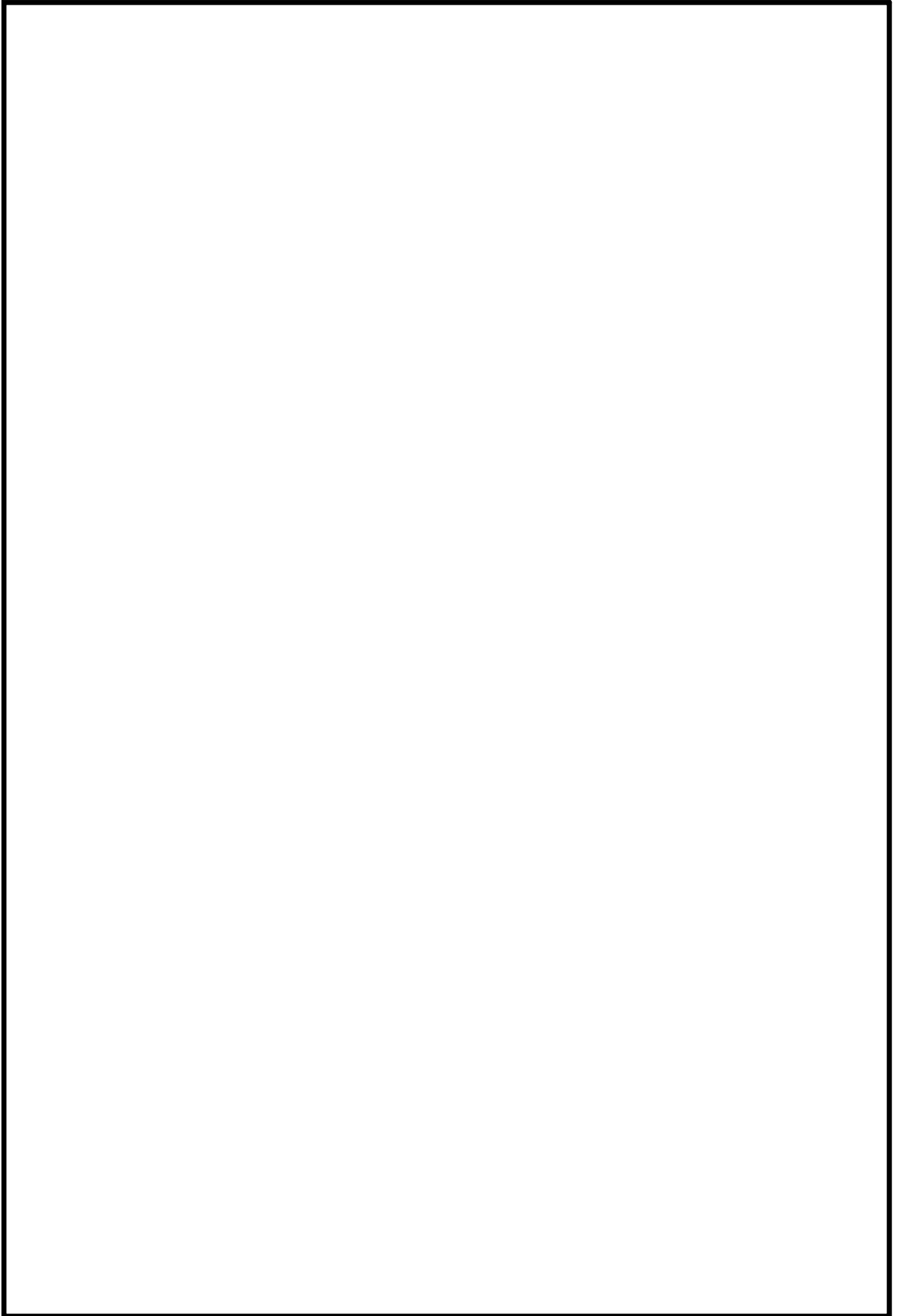
(抜 粋)

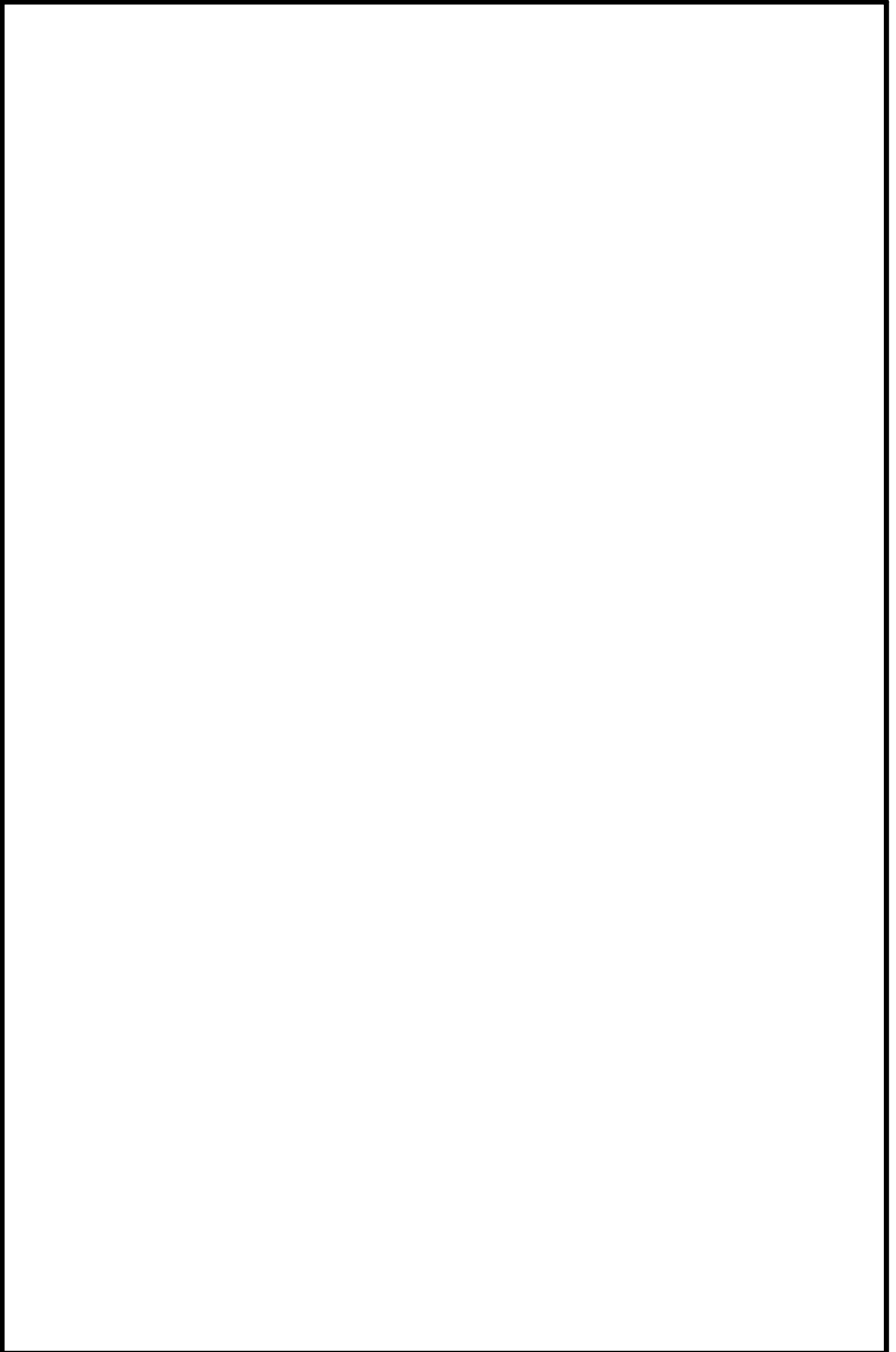
制定	昭和62年 4月 2日	東発細則第 207号, 東二発細則第 198号
最終改正	平成26年 6月27日	東発細則第3856号, 東二発細則第5919号
主管箇所	東海第二発電所 総務室	

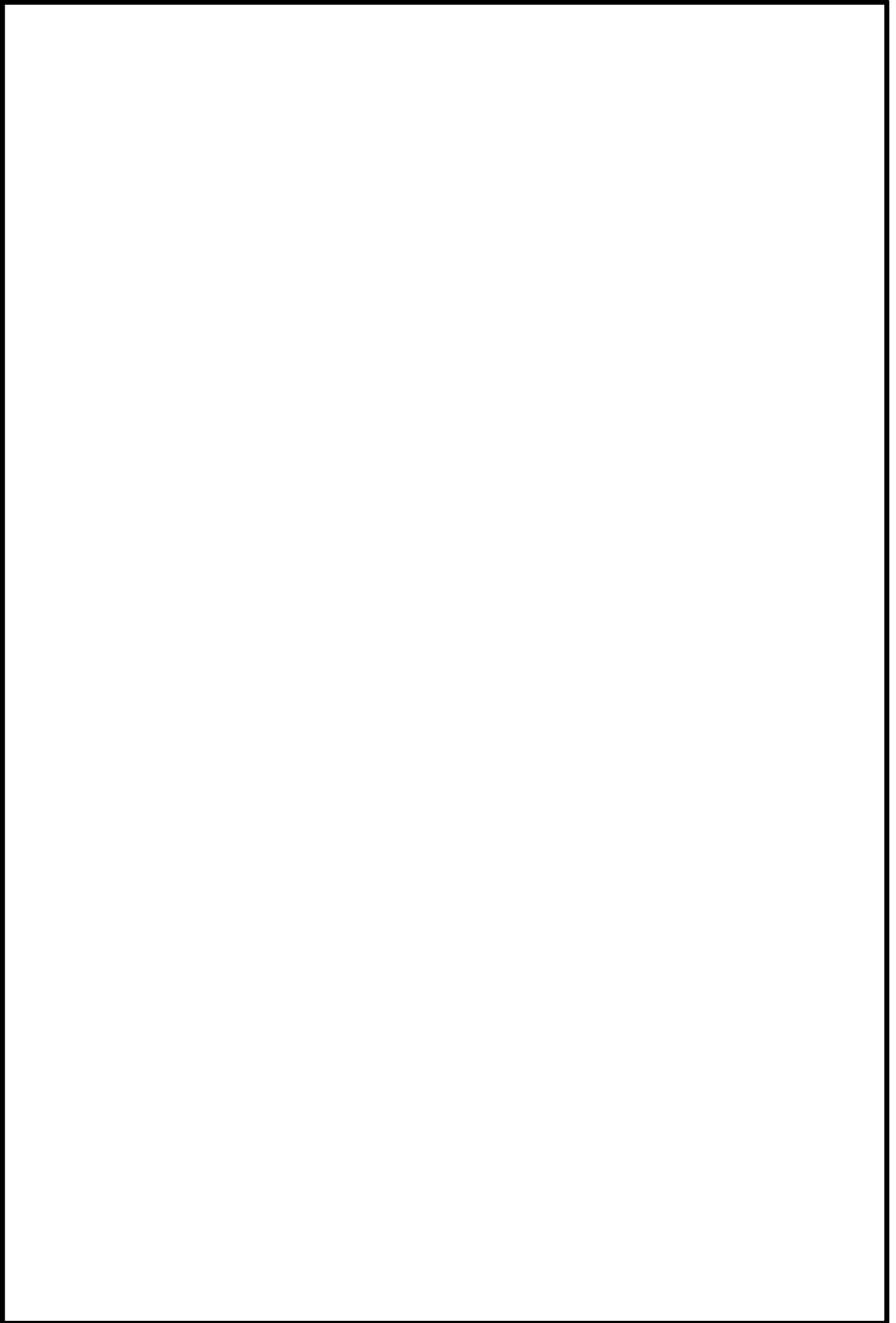
平成26年6月

東海発電所・東海第二発電所
総 務 室









品質マネジメントシステム規程管理番号

QM 東海：6-2-1-4

QM 東Ⅱ：6-2-1-5

教育・訓練計画手順書

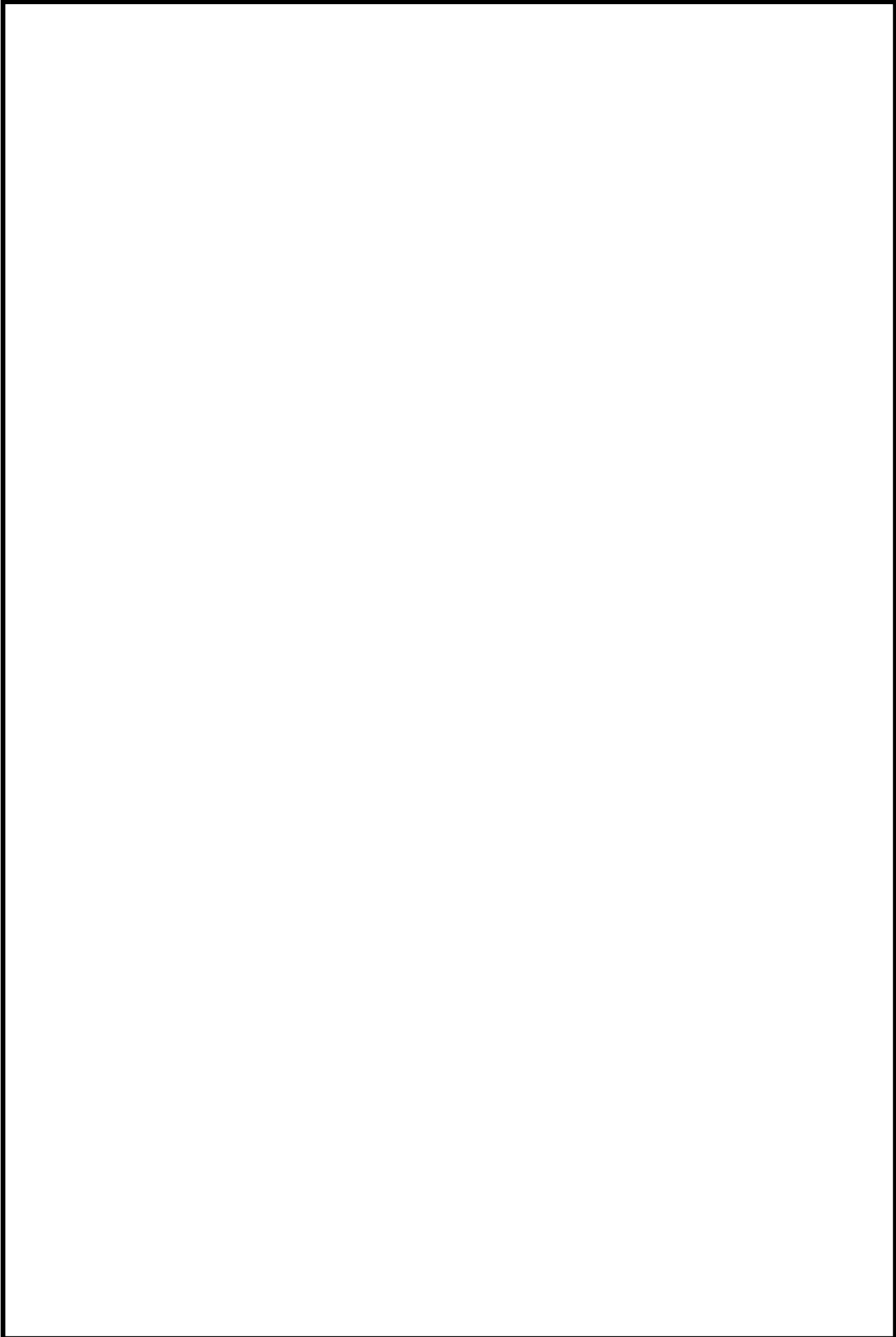
(抜 粋)

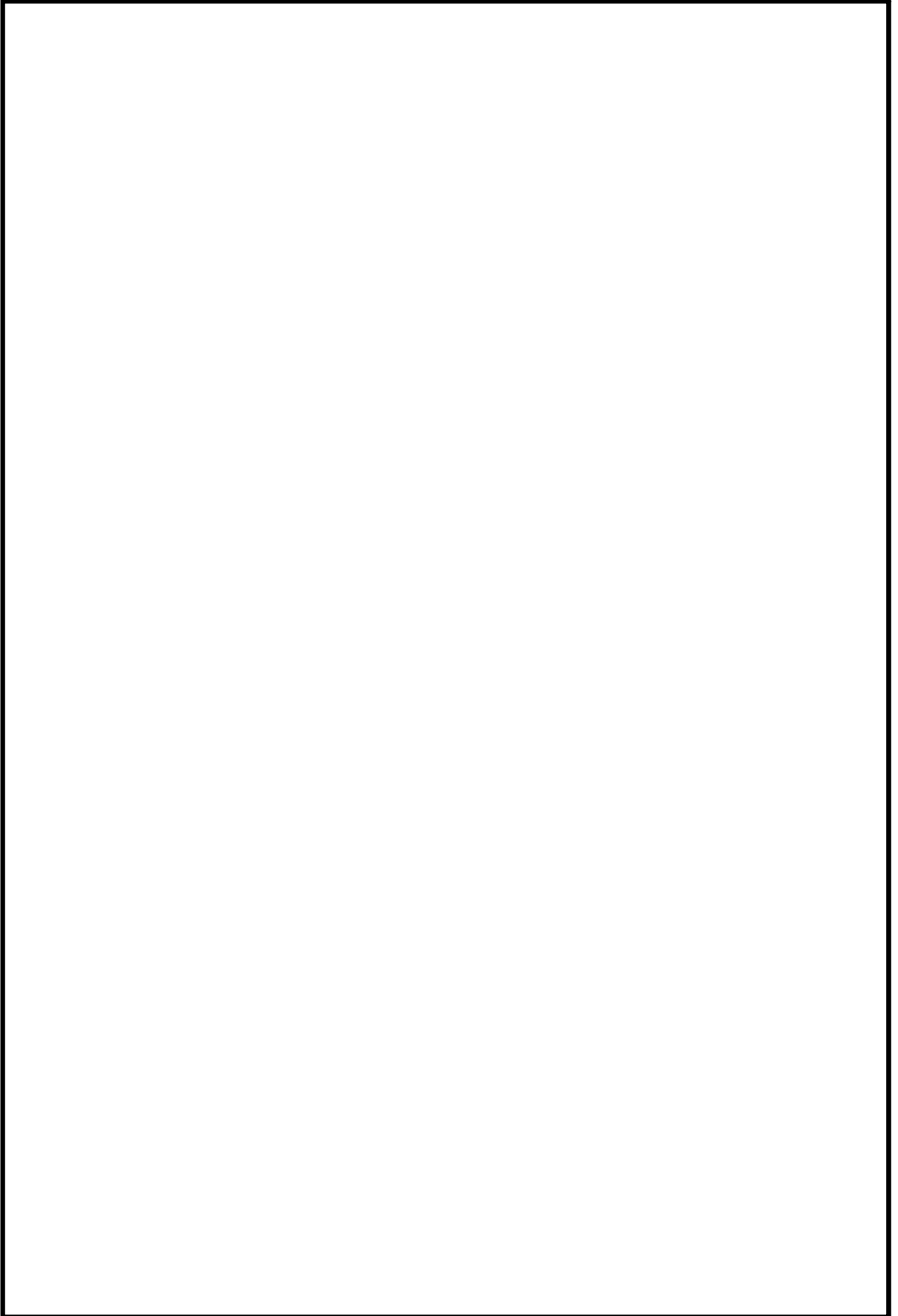
制定	平成14年3月25日	東発細則第1917号, 東二発細則第1982号
最終改正	平成26年7月31日	東発細則第3887号, 東二発細則第5953号
主管箇所	東海第二発電所	総務室

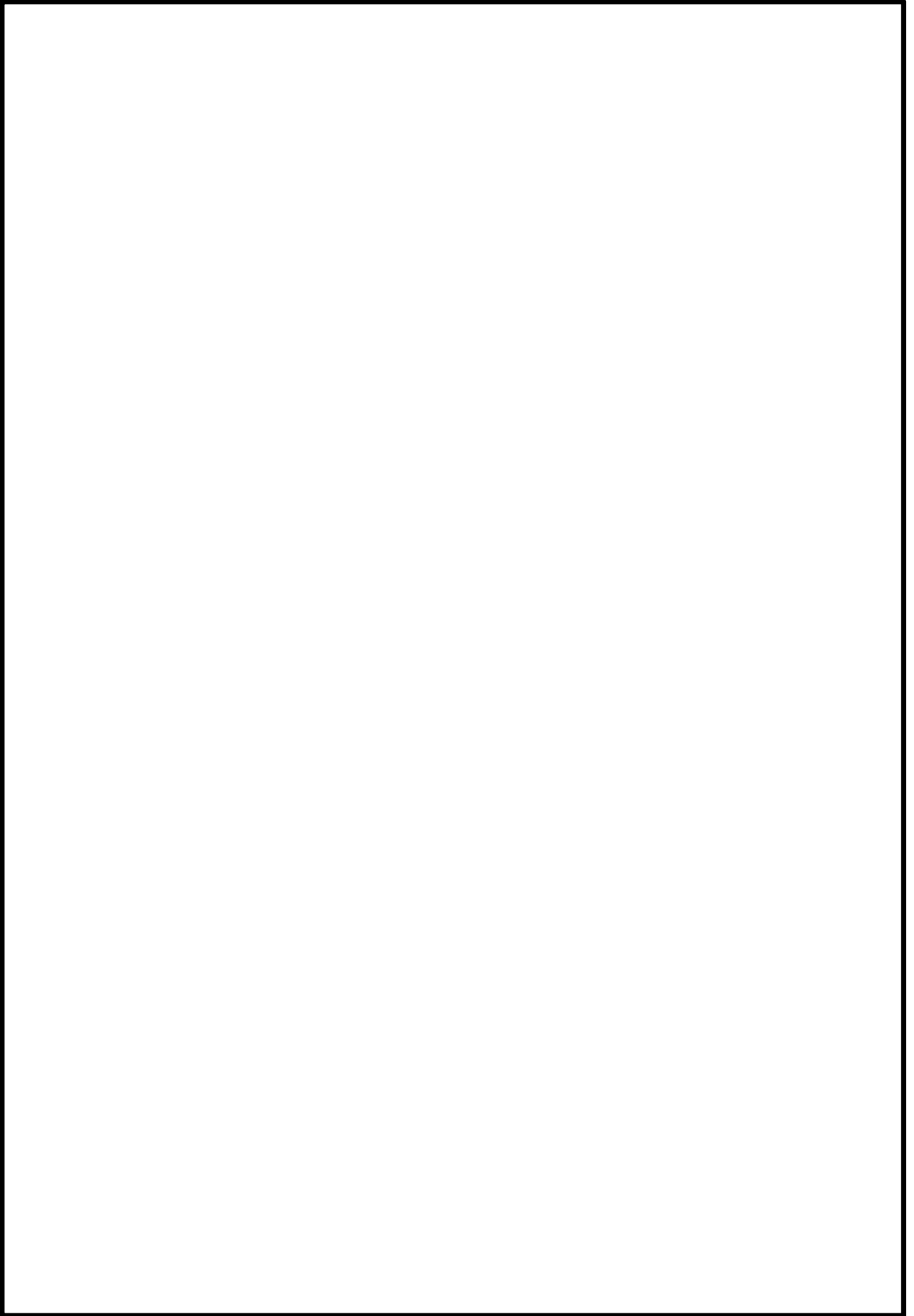
平成26年7月

東海発電所・東海第二発電所

総 務 室







東海第二発電所原子炉施設保安規定

(抜 粋)

制定	昭和52年12月20日	社規第 299号
最終改正	平成28年 3月31日	社規第1175号
主管箇所	本店	発電管理室

平成 28 年 3 月

日本原子力発電株式会社

5.5.3 内部コミュニケーション

社長は、「品質保証規程」に基づき組織内にコミュニケーションのための適切なプロセスが確立されることを確実にする。また、品質マネジメントシステムの有効性に関する情報交換が行われることを確実にする。

5.6 マネジメントレビュー

5.6.1 一般

- (1) 社長は、組織の品質マネジメントシステムが、引き続き、適切、妥当かつ有効であることを確実にするために、「マネジメントレビュー要項」に基づき、あらかじめ定められた間隔で品質マネジメントシステムをレビューする。
- (2) このレビューでは、品質マネジメントシステムの改善の機会の評価、並びに品質方針及び品質目標を含む品質マネジメントシステムの変更の必要性の評価も行う。
- (3) 管理責任者は、マネジメントレビューの結果の記録を維持する(4.2.4 参照)。

5.6.2 マネジメントレビューへのインプット

管理責任者は、マネジメントレビューへのインプットに次の情報を含める。

- a) 監査の結果
- b) 原子力安全の達成に関する外部の受けとめ方
- c) プロセスの成果を含む実施状況（品質目標の達成状況を含む。）並びに検査及び試験の結果
- d) 予防処置及び是正処置の状況
- e) 安全文化を醸成するための活動の実施状況
- f) 関係法令の遵守状況
- g) 前回までのマネジメントレビューの結果に対するフォローアップ
- h) 品質マネジメントシステムに影響を及ぼす可能性のある変更
- i) 改善のための提案

5.6.3 マネジメントレビューからのアウトプット

社長は、マネジメントレビューからのアウトプットに、次の事項に関する決定及び処置すべてを含める。

- a) 品質マネジメントシステム及びそのプロセスの有効性の改善
- b) 業務の計画及び実施にかかわる改善
- c) 資源の必要性

⑨ - 5

6. 資源の運用管理

6.1 資源の提供

組織は、原子力安全に必要な資源を明確にし、提供する。

6.2 人的資源

6.2.1 一般

原子力安全の達成に影響がある業務に従事する要員は、適切な教育、訓練、技能及び経験を判断の根拠として力量を有すること。

6.2.2 力量、教育・訓練及び認識

組織は、次の事項を「力量設定管理要項」に定め、実施する。

- a) 原子力安全の達成に影響がある業務に従事する要員に必要な力量を明確にする。
- b) 必要な力量が不足している場合には、その必要な力量に到達することができるように教育・訓練を行うか、又は他の処置をとる。
- c) 教育・訓練又は他の処置の有効性を評価する。
- d) 組織の要員が、自らの活動のもつ意味及び重要性を認識し、品質目標の達成に向けて自らがどのように貢献できるかを認識することを確実にする。
- e) 教育、訓練、技能及び経験について該当する記録を維持する(4.2.4 参照)。

6.3 原子炉施設及びインフラストラクチャー

組織は、原子力安全の達成のために必要な原子炉施設を「保守管理業務要項」に定め、維持管理する。また、原子力安全の達成のために必要なインフラストラクチャーを明確にし、提供し、維持する。

6.4 作業環境

組織は、原子力安全の達成のために必要な作業環境を業務の計画(7.1 参照)にかかわる関連する文書、及び「作業環境測定管理要項」に定め、運営管理する。

7. 業務の計画及び実施

7.1 業務の計画

- (1) 組織は、一次文書、二次文書、三次文書に基づき、保安活動に関する業務に必要なプロセスを計画し、構築する。
- (2) 業務の計画は、品質マネジメントシステムのその他のプロセスの要求事項と整合がとれていること(4.1 参照)。
- (3) 組織は、業務の計画に当たって、次の各事項について適切に明確化する。
 - a) 業務・原子炉施設に対する品質目標及び要求事項
 - b) 業務・原子炉施設に特有な、プロセス及び文書の確立の必要性、並びに資源の提供の必要性
 - c) その業務・原子炉施設のための検証、妥当性確認、監視、測定、検査及び試験活動、並びにこれらの合否判定基準
 - d) 業務・原子炉施設のプロセス及びその結果が、要求事項を満たしていることを実証するために必要な記録(4.2.4 参照)
- (4) この計画のアウトプットは、組織の運営方法に適した形式にする。

7.2 業務・原子炉施設に対する要求事項に関するプロセス

7.2.1 業務・原子炉施設に対する要求事項の明確化

組織は、次の事項を業務の計画(7.1 参照)において、明確にする。

品質マネジメントシステム規程管理番号

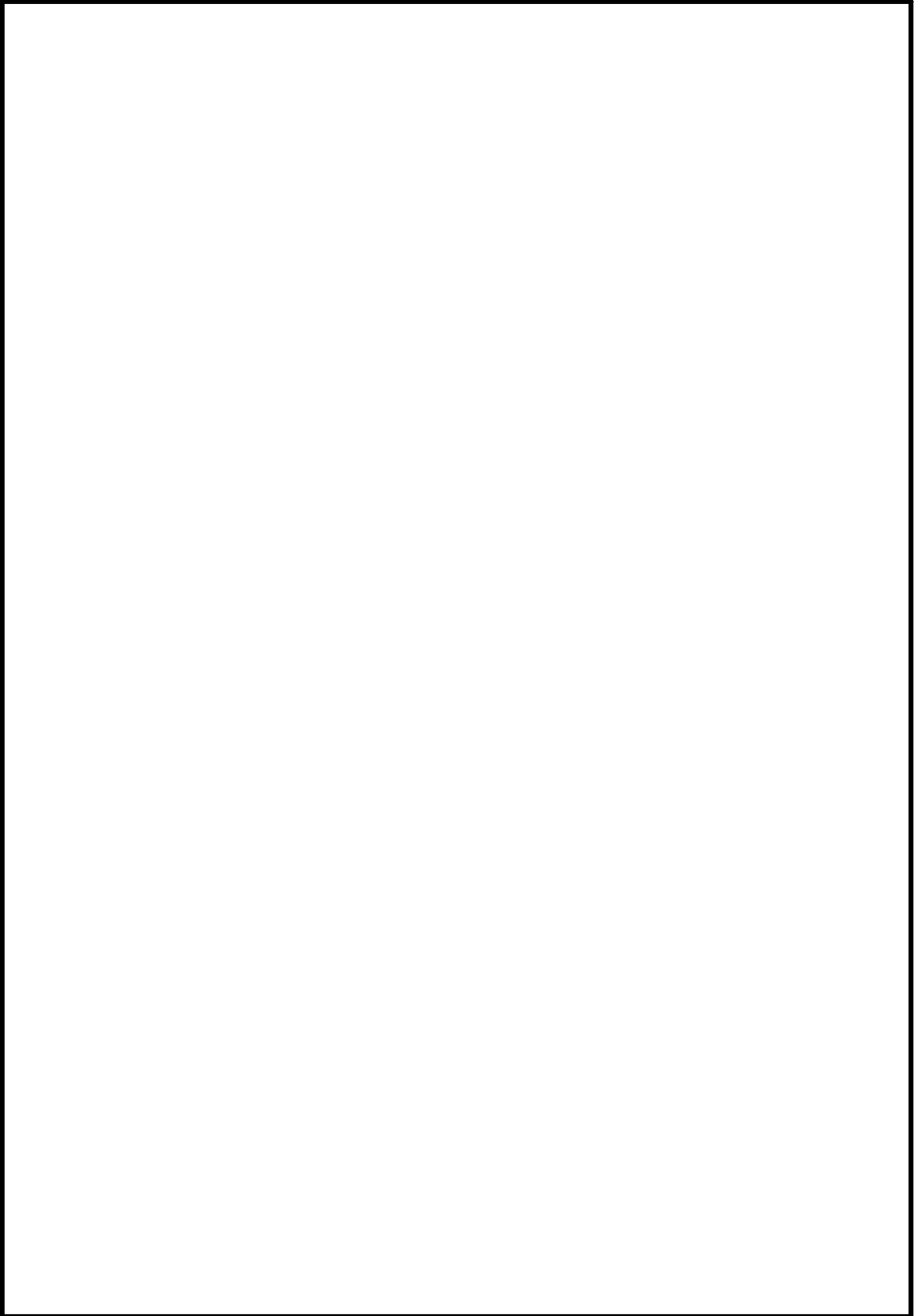
QM共通：4-2

品質保証規程

(抜粋)

制定	平成 4年 6月29日	社規第 590号
最終改正	平成29年 4月19日	社規第1223号
主管箇所	本店	安全室

日本原子力発電株式会社



東海第二発電所の教育訓練実績（平成 28 年度）

1. 共通項目

研修名		受講者数	備考
保安教育	入所時に実施する教育（入所時教育）	45 名	
	その他反復教育 （関係法令及び保安規定の遵守に関すること）	120 名	
	その他反復教育 （非常の場合に講ずべき処置に関すること）	214 名	
原子力防災教育		—	保安教育のその他反復教育（非常の場合に講ずべき処置に関すること）にて兼用
安全協定教育		45 名	
消防訓練			
	①総合火災訓練	①78 名	
	②防火訓練	②30 名	
	③公設消防との合同訓練	③7 名	
	④消防訓練	④158 名	
原子力防災訓練		146 名	

2. 運転関係（シミュレータ訓練）

研修名		受講者数	備考
ファミリー訓練コース	シミュレータ訓練（直員連携訓練）	95	
ファミリー訓練コース 上級運転コース	シミュレータ訓練 （起動停止・異常時・警報発生時対応訓練）	95	ファミリー訓練コースと重複 H28 年度は上級訓練コースへの派遣なし
ファミリー訓練コース 運転管理コース 運転責任者試験準備コース	シミュレータ訓練 （起動停止・異常時・警報発生時の対応・判断・指揮命令訓練）	97	95 名はファミリー訓練コースと重複 H28 年度は運転管理コースへの派遣なし

東海第二発電所 保安教育等実績 抜粋（平成28年度）

教育訓練名	対象者	内 容	実施時期・回数等	人員数
入所時に実施する教育 （入所時教育）	発電所に新規配属となった所員（長期研修、業務応援等による一時退所者で再入所する者を除く）	<ul style="list-style-type: none"> 原子炉等規制法に関連する法令の概要並びに関係法令及び保安規定の遵守に関すること 発電用原子炉のしくみ 原子炉容器等主要機器の構造に関すること 原子炉冷却系統等主要系統の機能・性能に関すること 非常の場合に講ずべき処置の概要 	入所時（原子力発電所新規配属時）	45名
放射線業務従事者教育	発電所の管理区域に業務上立入る者	<ul style="list-style-type: none"> 放射線防護に関する基礎的知識 放射線防護に関する実務的知識 入退域の実務 	管理区域内において核燃料物質もしくは使用済燃料又はこれらによって汚染された物を取り扱う業務に就かせる時（教育有効期限は実施後3年とし、これを経過した者に対しては再教育を行う） ※放射線管理教育要領（所則）にて再教育対象者のうち免除基準を満足する者は、教育を免除。	35名
その他反復教育 （関係法令及び保安規定の遵守に関すること）	発電所長を除く発電所員	<ul style="list-style-type: none"> 総則、品質保証、保安管理体制及び評価、保安教育、記録及び報告に関する規則の概要並びに関係法令及び保安規定の遵守に関すること 保安に関する各組織及び各職務の具体的役割と確認すべき記録（発電長／副発電長のみ） 	運転員・・・・30時間以上／3年 運転員以外・・・・1.0時間以上／3年	120名
その他反復教育 （非常の場合に講ずべき処置に関すること）	支援組織要員（東海第二発電所の発電長、副発電長、運転員Ⅰ及び「災害対策要領」で定める災害対策本部の本部長代理、本部長並びに情報班、技術班、放射線管理班及び保修班の要員）のみ	緊急事態応急対策等、原子力防災対策活動に関すること（アクションマネジメント対応を含む；支援組織要員のみのみ）	0.5時間以上／3年	214名 ^{※1}
その他反復教育 （核燃料物質及び核燃料物質によって汚染された物の取扱いに関すること）	運転員（燃料取替の業務に関わる者）	燃料の臨界管理に関すること、燃料の検査・取替・運搬及び貯蔵に関すること	30時間以上／3年	16名

※1 アクションマネジメント対応にかかる教育対象者は、支援組織要員（東海第二発電所の発電長、副発電長、運転員Ⅰ及び「災害対策要領」で定める災害対策本部の本部長代理、本部長並びに情報班、技術班、放射線管理班及び保修班の要員）のみであるが、その他の教育内容と合わせアクションマネジメント教育を実施している。

教育訓練プログラムの概要 (イメージ)

運転員の基本的な養成パターン

教育項目	配属後年数							20程度	管理・監督者	
	1	2	3	4	5	6	7			上級
直内教育	初級									
1. 知識教育										
2. 技術教育 (OJT)										
3. 基本運転動作励行確認訓練										
4. 事故訓練										
5. 保安規定勉強会										
6. 直内技術検討会										
直外教育	初級									
1. 運転技能訓練教育 (BTC)										
1. ファミリー										
2. 初級コース (I, II, III)										
3. 中級コース (I, II)										
4. 上級コース (I, II)										
2. 運転技能訓練教育										
1. 新入運転員コース										
2. 訓練運転員基本動作取得コース										
3. 現場操作対応コース										
4. プラント起動・停止コース										
5. 上級運転員コース II										
6. 上級運転員コース I										
7. SA/AMコース										
8. ファミリー訓練コース										
9. 定検時運転管理コース										
10. 運転管理コース										
11. SA/AM教育訓練コース (基礎)										
12. SA/AM教育訓練コース (応用)										
13. 運転管理者のためのH/E防止コース										
3. 原子力全般教育										
1. 総合研修センター原子力基礎研修コース										
4. 運転関連技能教育										
1. セミナー参加										
2. 資格取得研修										
5. 基本研修										
1. 新入社員教育										
2. 階層別教育										
3. 運転責任者教育 (発電長研修)										

注) 発電直に配属された高卒の新人社員を標準とする。(高専、大卒は1~2年早くなる) その他の者は、その都度東二発電室経歴を勘案して決めるものとする。

教育訓練プログラムの概要 (イメージ)

保修室員の基本的な養成パターン

区分	初級教育	中級教育	上級教育
養成パターン ^注	1～3年	4～8年	9年以上

教育体系	養成パターン	初級教育	中級教育	上級教育
室内教育	集合教育 実務教育		集合教育 実務(OJT)教育	
	部門研修 (必修教育コース等)	初級教育 (総合研修センター)	中級・上級者教育	
	メーカ研修		専門技術研修	
	社外セミナー等		セミナー参加による研修 資格取得研修	
一般教育 (参考)		社員教育 (総合研修センター)		

注：養成パターンの年数は、高等学校卒の新入社員を基準にしている。

保修室員の階層区分の考え方

実経過年数 階層及び評価年数	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年・・・
高校卒		初級					中級			上級
高専卒		初級					中級			上級
大学以上卒		初級					中級			上級

- * 保修業務 (監理員業務を含む) 経験がない一般職又は、管理職の中途配属者については、配属後1年以内は初級とし、経過後は実務経験及び職位等を考慮した階層とする。
- * 過去に保修業務 (監理員業務を含む) 経験があるか、現在、他発電所で保修業務 (監理員業務を含む) をしている一般職又は、管理職の中途配属者については、配属された時点での知識、技能等を考慮し、実務経験を総合的に評価した階層とする。

本店及び東海第二発電所における各年度の社外教育訓練受講者数

教育訓練名	平成 24年度	平成 25年度	平成 26年度	平成 27年度	平成 28年度	備考
<本店>						
JEAC4111 講習会	2	4	0	0	0	
ISO9000/9001 関係セミナー	0	4	0	3	1	
根本原因分析手法 (SAFER) 研修	3	0	0	0	0	
保障措置セミナー	1	0	0	0	0	
東京大学大学院工学系研究科原子力専攻派遣	0	0	0	0	1	
<東海第二発電所>						
BWR運転訓練センター教育 (初級Ⅰ訓練コース)	1	4	4	3	3	
〃 (初級Ⅱ訓練コース)	2	4	4	3	3	
〃 (中級Ⅰ訓練コース)	0	0	1	1	2	
〃 (中級Ⅱ訓練コース)	0	2	0	0	0	
〃 (中級Ⅲ訓練コース)	0	2	0	0	0	
〃 (中級ⅢB/C訓練コース)	0	3	0	0	0	
〃 (上級初期訓練コース)	0	2	0	0	0	
〃 (SA訓練コース(上級))	0	0	0	1	5	
〃 (上級Ⅰ訓練コース)	2	2	1	0	0	
〃 (上級Ⅱ訓練コース)	1	1	2	1	3	
JEAC4111 講習会	3	2	4	1	2	
JEAC4207 講習会	1	0	0	0	0	
ISO9000/9001 関係セミナー	2	2	3	1	6	
ISO14001 関係セミナー	1	0	4	1	8	
根本原因分析手法 (SAFER) 研修	0	3	0	2	0	
原子力保全研修会	1	1	1	0	0	
放射線取扱主任者定期・法定講習	3	1	0	1	2	
放射性物質安全輸送講習会	0	0	0	0	2	
保修技能研修 (機械)	2	0	0	1	3	
保修技能研修 (電気・計装)	13	9	5	3	6	
設備診断技術研修	0	0	3	0	0	
東京大学大学院工学系研究科原子力専攻派遣	1	0	1	0	0	

⑨-10

東海第二発電所における重大事故等対応に関する訓練実績

訓練の種類	訓練の種類	訓練内容	平成 27年度	平成 28年度
水源確保訓練	ハイドロポンプ車・ホース車取扱訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・ハイドロポンプ車の取扱訓練 (ユニット運転操作, ポンプ取出し/収納, クレーン操作, ユニットコントレナ操作等) ・ホース車取扱訓練 (ホース展張/回収, ホース着脱, 接続金物取扱い等) 	11回	36回
	緊急時送水口ホース接続訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・SFP外部注水配管へのホース接続訓練 ・RHR S系又は, DGS系緊急時送水口へのホース接続訓練 	4回	—
	ハイドロポンプ車取水・送水訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・荷揚岸壁, 地下集水池等を水源とした取水/送水訓練 	1回	—
	CSTエアブリーザ取外訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・モックアップ装置を使用したエアブリーザの取外訓練 ・現場(CST上部)確認 	4回	3回
電源確保(低圧電源車操作)訓練	低圧電源車機関操作訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・低圧電源車の機関操作等 	15回	14回
	低圧電源車ケーブル敷設・接続訓練	<ul style="list-style-type: none"> ・ケーブル搭載車からのケーブル引出し/巻取り, 電源車ケーブルの接続訓練 ・低圧電源車ケーブル接続箇所確認(水処理MCC, 開閉所MCC, CS電気室等) 	15回	18回

⑨-10

	訓練の種類	訓練内容	平成 27年度	平成 28年度
車両等運転技能 維持・向上訓練	ホイールローダ運転訓練	・ホイールローダの運転操作訓練	16回	17回
	ハイドロポンプ車（大型車両）運転訓練	・ハイドロポンプ車（マニュアル車）による構内道路走行 ・地下集水池取水箇所への寄付き停車，方向変換等 ・低圧電源車による構内道路走行（走行，方向変換等）	2回	12回
	低圧電源車（中型車）運転訓練	・低圧電源車による構内道路走行（走行，方向変換等）	—	—
	クローラ式台車（可搬式ディーゼルポンプ積載）運転訓練	・クローラ式台車の走行訓練（前進／後進，方向変換等） ・月例点検（クローラ台車）時の運転確認（訓練）	1回	5回
	原付バイク運転訓練	・原付バイクによる構内道路走行 ・原付バイクの取扱方法や走行特性の把握	—	3回
給油訓練	タンクローリ取り扱（軽油抜取）訓練	・地下軽油タンクからタンクローリへの燃料抜取り訓練	1回	—
消火活動訓練及び消防ポンプ自動車 の操作訓練	消火活動訓練	・定期的実施している自衛消防隊の消防訓練（守衛）への参加 ・消防ホース及びポンプ等の取扱訓練，放水訓練 ・消火活動における現場指揮	10回	18回
	消防ポンプ機関操作訓練	・消防ポンプの機関操作訓練 ・防火水槽等を水源としたポンプ運転（起動）操作訓練	32回	—

⑨-10

訓練の種類		訓練内容	平成 27年度	平成 28年度
防災資機材取扱 (ロボット操 作) 訓練	初期訓練	・敦賀支援センターにおける操作訓練	—	1回
	定着訓練	・敦賀支援センターにおける操作訓練 ・発電所構内における操作訓練	—	6回
その他	原子炉建屋ベント操作訓練	・R/B屋上へのアクセス方法確認 ・R/Bベント操作方法確認 ・ブローアウトパネル開放装置の取扱方法確認	2回	1回
アクシデントマ ネジメント訓練	フルスコープ連携訓練	・フルスコープシミュレータとの連携訓練	7回	1回
緊急時環境モニ タリング訓練	環境モニタリング訓練	・空間線量率測定 ・よう素・粒子状放射性物質濃度測定 ・風向・風速測定	5回	2回
	線量評価訓練	・AREDESの支援計算機能, リアルタイム計算機能等 を用いた拡散評価, 被ばく評価	8回	6回
避難訓練	—	—	—	1回

東海第二発電所

周辺監視区域，気象資料等の変更に伴う
東海第二発電所原子炉設置許可申請書の
変更について

周辺監視区域，気象資料等の変更に伴う
東海第二発電所原子炉設置許可申請書の変更について

周辺監視区域，気象資料等の変更に伴い，原子炉設置許可申請書の被ばく評価等に係る以下の記載箇所が変更となる。具体的な変更内容及び変更理由は添付資料 1～添付資料 4 のとおりである。

- ・ 本文九号（気象資料変更に伴う平常運転時の公衆の被ばく評価結果の記載変更等）・・・【添付資料 1】
- ・ 本文十号（気象資料変更に伴う設計基準事故時の公衆の被ばく評価の気象期間の記載変更等）・・・【添付資料 1】
- ・ 添付書類六（気象資料の変更に伴う記載変更等）・・・【添付資料 2】
- ・ 添付書類九（周辺監視区域，気象資料等の変更に伴う平常運転時の公衆の被ばく評価結果の記載変更等）・・・【添付資料 3】
- ・ 添付書類十（気象資料等の変更に伴う設計基準事故時の公衆の被ばく評価結果の記載変更等）・・・【添付資料 4】

また，以下については，参考資料 1～参考資料 3 に示す。

- ・ 周辺監視区域変更及びコンクリート密度変更に伴う設置許可基準規則第二十九条（工場等周辺における直接ガンマ線等からの防護）への影響について（参考資料 1）
- ・ 被ばく評価に用いた気象資料の代表性（参考資料 2）
- ・ 設計基準事故時等の周辺監視区域の変更に伴う線量評価への影響について（参考資料 3）

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（本文九号）

【添付資料1】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>九 発電用原子炉施設における放射線の管理に関する事項</p> <p>イ 核燃料物質及び核燃料物質によって汚染された物による放射線被ばくの管理の方法</p> <p>(1) 放射線防護に関する基本方針・具体的方法</p> <p>(v) 気体及び液体廃棄物の放出については、放出管理の目標値を定め、これを超えないように努める。</p> <p>なお、発電用原子炉施設（以下「原子炉施設」という。）は、通常運転時において原子炉施設からの直接ガンマ線（以下「直接線」という。）及びスカイシャインガンマ線（以下「スカイシャイン線」という。）による人の居住の可能性のある地域における空間放射線量率が十分に低減できるものとする。</p> <p>(2) 管理区域及び周辺監視区域の設定</p> <p>(i) 管理区域</p> <p>炉室、使用済燃料の貯蔵施設、放射性廃棄物の廃棄施設等の場所であって、その場所における外部放射線に係る線量、空気中の放射性物質の濃度又は放射性物質によって汚染された物の表面の放射性物質の密度が「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則の規定に基づく線量限度等を定める告示」（以下「線量限度等を定める告示」という。）に定められた値を超えるか又はそのおそれのある区域はすべて管理区域とする。</p> <p>実際には部屋、建物その他の施設の配置及び管理上の便宜も考慮して、原子炉建屋、タービン建屋及びサービス建屋の一部、固体廃棄物貯蔵庫、廃棄物処理建屋、使用済燃料乾式貯蔵建屋、給水加熱器保管庫並びに固体廃棄物作業建屋等を管理区域とする。</p> <p>なお、新燃料搬入時、使用済燃料輸送時等、上記管理区域外において一時的に上記管理区域に係る値を超えるか又はそのおそれのある区域が生じた場合は、一時管理区域とする。</p>	<p>九 発電用原子炉施設における放射線の管理に関する事項</p> <p>イ 核燃料物質及び核燃料物質によって汚染された物による放射線被ばくの管理の方法</p> <p>(1) 放射線防護に関する基本方針・具体的方法</p> <p>(v) 気体及び液体廃棄物の放出については、放出管理の目標値を定め、これを超えないように努める。</p> <p>なお、発電用原子炉施設（以下「原子炉施設」という。）は、通常運転時において原子炉施設からの直接γ線及びスカイシャインγ線による人の居住の可能性のある地域における空間放射線量率が十分に低減できるものとする。</p> <p>(2) 管理区域及び周辺監視区域の設定</p> <p>(i) 管理区域</p> <p>炉室、使用済燃料の貯蔵施設、放射性廃棄物の廃棄施設等の場所であって、その場所における外部放射線に係る線量、空気中の放射性物質の濃度又は放射性物質によって汚染された物の表面の放射性物質の密度が「核原料物質又は核燃料物質の製錬の事業に関する規則の規定に基づく線量限度等を定める告示」（以下「線量限度等を定める告示」という。）に定められた値を超えるか又はそのおそれのある区域はすべて管理区域とする。</p> <p>実際には部屋、建物その他の施設の配置及び管理上の便宜も考慮して、原子炉建屋、タービン建屋及びサービス建屋の一部、固体廃棄物貯蔵庫、廃棄物処理建屋、使用済燃料乾式貯蔵建屋、給水加熱器保管庫並びに固体廃棄物作業建屋等を管理区域とする。</p> <p>なお、新燃料搬入時、使用済燃料輸送時等、上記管理区域外において一時的に上記管理区域に係る値を超えるか又はそのおそれのある区域が生じた場合は、一時管理区域とする。</p>	<p>備考</p> <ul style="list-style-type: none"> ・記載の適正化 ・省略記載の削除 ・法令の改正に伴う記載の適正化

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（本文九号）

【添付資料1】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>ハ 周辺監視区域の外における実効線量の算定の条件及び結果</p> <p>「線量目標値に関する指針」に基づき、気体廃棄物中の希ガスからのγ線、液体廃棄物中に含まれる放射性物質（よう素を除く。）並びに気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素に起因する実効線量を、「線量目標値に対する評価指針」に従って評価する。</p> <p>(1) 線量の評価条件</p> <p>(i) 気体廃棄物中の放射性希ガスのγ線に起因する実効線量</p> <p>b. 気象条件</p> <p>気象条件は、現地における1981年4月から1982年3月までの観測による実測値を使用する。</p> <p>c. 計算地点</p> <p>実効線量の計算は、将来の集落の形成を考慮し、排気筒を中心として16方位に分割したうちの9方位、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれの外側において行い、希ガスのγ線による実効線量が最大となる地点での線量を求める。</p> <p>(iii) 気体廃棄物中に含まれる放射性よう素に起因する実効線量</p> <p>c. 計算地点</p> <p>吸入摂取及び葉菜摂取については将来の集落の形成を考慮し、排気筒を中心として16方位に分割したうちの9方位、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については独立行政法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれの外側において、年平均地上空気中濃度が最大となる地点とする。また、牛乳摂取については実在する乳牛飼養地点のうち年平均地上空気中濃度が最大となる地点とする。</p> <p>(2) 線量の評価結果</p> <p>人の居住の可能性のある地点における気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量、液体廃棄物中の放射性物質（よう素を除く。）による実効線量並びに気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量は、それぞれ年間約3.3μSv、年間約5.2μSv及び年間約0.4μSvとなり、合計は年間約9.0μSvである。</p> <p>この値は、「線量目標値に関する指針」に示される線量目標値の年間50μSvを下回る。</p> <p>なお、原子炉施設の設計及び管理によって、通常運転時において原子炉施設からの直接線及びスカイシャイン線による空気カーマが、人の居住の可能性のある地域において年間50μGyを下回るようにする。</p>	<p>ハ 周辺監視区域の外における実効線量の算定の条件及び結果</p> <p>「線量目標値に関する指針」に基づき、気体廃棄物中の希ガスからのγ線、液体廃棄物中に含まれる放射性物質（よう素を除く。）並びに気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素に起因する実効線量を、「線量目標値に対する評価指針」に従って評価する。</p> <p>(1) 線量の評価条件</p> <p>(i) 気体廃棄物中の放射性希ガスのγ線に起因する実効線量</p> <p>b. 気象条件</p> <p>気象条件は、現地における2005年4月から2006年3月までの観測による実測値を使用する。</p> <p>c. 線量計算地点</p> <p>実効線量の計算は、将来の集落の形成を考慮し、排気筒を中心として16方位に分割したうちの11方位、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については国立研究開発法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれの外側において行い、希ガスのγ線による実効線量が最大となる地点での線量を求める。</p> <p>(iii) 気体廃棄物中に含まれる放射性よう素に起因する実効線量</p> <p>c. 線量計算地点</p> <p>実効線量の計算は、吸入摂取、葉菜摂取及び牛乳摂取の被ばく経路について将来の集落の形成を考慮し、排気筒を中心として16方位に分割したうちの11方位、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については国立研究開発法人日本原子力研究開発機構東海研究開発センター原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれの外側において、年平均地上空気中濃度が最大となる地点で行う。</p> <p>(2) 線量の評価結果</p> <p>人の居住の可能性のある地点における気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量、液体廃棄物中の放射性物質（よう素を除く。）による実効線量並びに気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量は、それぞれ年間約2.8μSv、年間約5.2μSv及び年間約0.4μSvとなり、合計は年間約8.4μSvである。</p> <p>この値は、「線量目標値に関する指針」に示される線量目標値の年間50μSvを下回る。</p> <p>なお、原子炉施設の設計及び管理によって、通常運転時において原子炉施設からの直接γ線及びスカイシャインγ線による空気カーマが、人の居住の可能性のある地域において年間50μGyを下回るようにする。</p>	<p>・①</p> <p>・②、③（周辺監視区域境界変更に伴う NNE 方位評価点の追加及び SSE 方位にある海を隔てた陸地（常陸那珂火力発電所）を評価点として追加）</p> <p>・乳牛の飼養地がなくなったため変更（葉菜摂取及び吸入摂取と同様の最大の濃度地点で代表）</p> <p>・④</p> <p>・①</p> <p>・③（周辺監視区域境界変更に伴う NNE 方位評価点の追加）</p> <p>・先行プラントの記載の反映</p> <p>・周辺監視区域の変更に伴う直接線及びスカイシャイン線の評価結果への影響はないことを確認している。（参考資料1参照）</p>

①気象期間の変更、②周辺監視区域の変更、③線量計算地点の追加、④組織名称の変更

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（本文十号）

【添付資料1】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>十 発電用原子炉の炉心の著しい損傷その他の事故が発生した場合における当該事故に対処するために必要な施設及び体制の整備に関する事項</p> <p>ロ 設計基準事故 事故に対処するために必要な設備並びに発生すると想定される事故の程度及び影響の評価を行うために設定した条件及びその評価の結果</p> <p>(2) 解析条件</p> <p>(iii) 環境への放射性物質の異常な放出</p> <p>a. 放射性気体廃棄物処理施設の破損</p> <p>(f) 大気中に放出される希ガスは換気空調系の作動を考慮するので排気筒から放出されるものとする。放出された希ガスによるγ線空気カーマは、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>b. 主蒸気管破断</p> <p>(v) 主蒸気隔離弁閉止後、主蒸気隔離弁を通して大気へ放出される核分裂生成物による非居住区域境界外で地表空气中濃度は、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>また、非居住区域境界外での希ガス及びハロゲン等によるγ線空気カーマは、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガス及びハロゲン等の全放出量を乗じて求める。</p> <p>c. 燃料集合体の落下</p> <p>(l) 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>(m) 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>d. 原子炉冷却材喪失</p> <p>(o) 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>(p) 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>e. 制御棒落下</p> <p>(l) 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p>	<p>十 発電用原子炉の炉心の著しい損傷その他の事故が発生した場合における当該事故に対処するために必要な施設及び体制の整備に関する事項</p> <p>ロ 設計基準事故 事故に対処するために必要な設備並びに発生すると想定される事故の程度及び影響の評価を行うために設定した条件及びその評価の結果</p> <p>(2) 解析条件</p> <p>(iii) 環境への放射性物質の異常な放出</p> <p>a. 放射性気体廃棄物処理施設の破損</p> <p>(f) 大気中に放出される希ガスは換気空調系の作動を考慮するので排気筒から放出されるものとする。放出された希ガスによるγ線空気カーマは、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>b. 主蒸気管破断</p> <p>(v) 主蒸気隔離弁閉止後、主蒸気隔離弁を通して大気へ放出される核分裂生成物による非居住区域境界外で地表空气中濃度は、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>また、非居住区域境界外での希ガス及びハロゲン等によるγ線空気カーマは、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガス及びハロゲン等の全放出量を乗じて求める。</p> <p>c. 燃料集合体の落下</p> <p>(l) 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>(m) 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>d. 原子炉冷却材喪失</p> <p>(o) 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>(p) 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>e. 制御棒落下</p> <p>(l) 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p>	<p>・①</p>

添付1-3

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（本文十号）

【添付資料1】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>(m) 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、現地における1981年4月から1982年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>(3) 評価結果</p> <p>(v) 非居住区域境界外での実効線量については、主蒸気管破断の場合が最も大きく、約1.8×10^{-1} mSvであり、周辺の公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えることはない。</p>	<p>(m) 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、現地における2005年4月から2006年3月までの気象観測による実測値及び実効放出継続時間より求めた相対濃度に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>(3) 評価結果</p> <p>(v) 非居住区域境界外での実効線量については、主蒸気管破断の場合が最も大きく、約1.8×10^{-1} mSvであり、周辺の公衆に対し、著しい放射線被ばくのリスクを与えることはない。</p>	<p>・①</p>

①気象期間の変更，②周辺監視区域の変更，③線量計算地点の追加，④組織名称の変更

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>5. 気象</p> <p>5.2 最寄りの気象官署の資料による一般的气象</p> <p>5.2.3 最寄りの気象官署における一般的气象⁽²⁾⁽³⁾</p> <p>(1) 一般的な気象</p> <p>水戸地方気象台、銚子地方気象台及び小名浜測候所における一般的気象に関する統計を第5.2-2表～第5.2-4表に示す。</p> <p>年平均気温、最高気温、最低気温、降水量、風速とも水戸地方気象台と小名浜測候所ではほぼ同様な値を示しているが、銚子地方気象台では冬期の最低気温がわずかに高くなっている。</p> <p>(2) 極値</p> <p>第5.2-2表～第5.2-4表に示した、最寄りの気象官署の気候表によると、この地域は必ずしも厳しい気象条件が現われる所ではなく、温和な気候を示している。</p> <p>これらの気象官署における観測開始から1980年までの極値を第5.2-5表～第5.2-31表に示す。これによれば各官署とも同程度の極値を示している。</p> <p>水戸地方気象台の観測記録によれば、日最高気温36.6℃（1967年8月11日）、日最低気温-12.7℃（1952年2月5日）、日最大降水量276.6mm（1938年6月29日）、最大積雪の深さ32cm（1945年2月26日）、最大瞬間風速44.2m/s（1939年8月5日）である。</p> <p>銚子地方気象台は、日最高気温35.3℃（1962年8月4日）、日最低気温-6.2℃（1970年1月17日）、日最大降水量311.4mm（1947年8月28日）、最大積雪の深さ17cm（1936年3月2日）、最大瞬間風速49.0m/s（1971年9月8日）である。</p> <p>（記載なし）</p>	<p>5. 気象</p> <p>5.2 最寄りの気象官署の資料による一般気象</p> <p>5.2.3 最寄りの気象官署における一般気象（5.2.4に係るものを除く。）⁽²⁾⁽³⁾</p> <p>(1) 一般的な気象</p> <p>水戸地方気象台、銚子地方気象台及び小名浜測候所における一般的気象に関する統計を第5.2-2表～第5.2-4表に示す。</p> <p>年平均気温、最高気温、最低気温、降水量、風速とも水戸地方気象台と小名浜測候所ではほぼ同様な値を示しているが、銚子地方気象台では冬期の最低気温がわずかに高くなっている。</p> <p>(2) 極値</p> <p>第5.2-2表～第5.2-4表に示した、最寄りの気象官署の気候表によると、この地域は必ずしも厳しい気象条件が現われる所ではなく、温和な気候を示している。</p> <p>これらの気象官署における観測開始から1980年までの極値を第5.2-5表～第5.2-31表に示す。これによれば各官署とも同程度の極値を示している。</p> <p>水戸地方気象台の観測記録によれば、日最高気温36.6℃（1967年8月11日）、日最低気温-12.7℃（1952年2月5日）、日最大降水量276.6mm（1938年6月29日）、最大積雪の深さ32cm（1945年2月26日）、最大瞬間風速44.2m/s（1939年8月5日）である。</p> <p>銚子地方気象台は、日最高気温35.3℃（1962年8月4日）、日最低気温-6.2℃（1970年1月17日）、日最大降水量311.4mm（1947年8月28日）、最大積雪の深さ17cm（1936年3月2日）、最大瞬間風速49.0m/s（1971年9月8日）である。</p> <p>5.2.4 発電用原子炉設置許可申請書（総室発第31号）に係る最寄りの気象官署における一般気象</p> <p>(1) 一般気象</p> <p>水戸地方気象台、銚子地方気象台及び小名浜特別地域気象観測所における一般気象に関する統計を第5.2-32表から第5.2-34表に示す。</p> <p>3官署のうち、年平均気温は水戸地方気象台と小名浜特別地域気象観測所の2官署はほぼ等しい値を示すが、銚子地方気象台は他の2官署よりも約2℃高く、年間降水量は250～300mm程度多い。また、年平均風速は水戸地方気象台と小名浜特別地域気象観測所はそれぞれ2.2m/s及び2.8m/sであるが、銚子地方気象台は5.7m/sと他の2官署の2倍以上の大きさとなっている。</p> <p>(2) 極値</p> <p>第5.2-35表から第5.2-52表に示す最寄りの気象官署の観測記録からみれば、この地域は比較的温暖であるがやや風が強い気象条件である。</p> <p>水戸地方気象台の観測記録によれば、最高気温38.4℃（1997年7月5日）、最低気温-12.7℃（1952年2月5日）、日最大降水量276.6mm（1938年6月29日）、積雪深さの月最</p>	<p>・③</p> <p>・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））</p>

①：気象期間の変更，②：気象設備の変更，③：記載の適正化

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>(記載なし)</p>	<p>大値 32cm (1945 年 2 月 26 日) 及び最大瞬間風速 44.2m/s (1939 年 8 月 5 日) である。 銚子地方気象台の観測記録によれば、最高気温 35.3℃ (1962 年 8 月 4 日)、最低気温 -7.3℃ (1893 年 2 月 13 日)、日最大降水量 311.6mm (1947 年 8 月 28 日)、積雪深さの月最大値 17cm (1936 年 3 月 2 日) 及び最大瞬間風速 52.2m/s (2002 年 10 月 1 日) である。 小名浜特別地域気象観測所の観測記録によれば、最高気温 37.7℃ (1994 年 8 月 3 日)、最低気温 -10.7℃ (1952 年 2 月 5 日)、日最大降水量 227.2mm (1966 年 6 月 28 日)、積雪深さの月最大値 28cm (1945 年 2 月 26 日)、及び最大瞬間風速 48.1m/s (2002 年 10 月 1 日) である。</p> <p>5.2.5 その他の資料による一般気象</p> <p>5.2.5.1 竜巻</p> <p>気象庁「竜巻等の突風データベース」(1961～2012 年)によれば、「竜巻」及び「竜巻又はダウンバースト」の被害状況から推定した竜巻の規模は、茨城県において、最大で F3 である。</p> <p>5.2.5.2 森林火災</p> <p>森林火災検討に係る発電所の最寄りの気象観測所(水戸地方気象台)の気象データ(最高気温、最大風速、最大風速記録時の風向、最小湿度)(2007 年～2016 年)及び発電所の位置する茨城県の「消防防災年報」(茨城県 2006 年～2015 年)について、第 5.2-53 表に示す。また、森林火災発生件数の多い 12 月～5 月における最寄りの気象観測所(水戸地方気象台)及び発電所の気象データ(卓越風向)について、第 5.2-54 表に示す。</p>	<p>・①(新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記(2012 年までのデータに更新))</p> <p>・新規制基準の適合性に係る竜巻及び森林火災における記載の反映</p>

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>5.3 敷地での気象観測</p> <p>本発電所の安全解析に使用する気象条件を決める際の資料を得るため、本発電所敷地内に「発電用原子炉施設の安全解析に関する気象指針」（以下「気象指針」という。）に基づき、気象設備を設置し、風向、風速、日射量、放射収支量、気温差等の観測を行っている。</p> <p>以上の観測に使用した気象測器の種類、設置位置及び観測期間を第5.3-1表に、観測点の配置を第5.3-1図及び第5.3-2図に示す。</p> <p>5.3.1 気象観測点の状況</p> <p>(1) 排気筒高さ付近を代表する風向風速の観測点</p> <p>東海第二発電所の排気筒高さ付近を代表する風向風速の資料を得るため、敷地内の平坦地（標高約8m）にある高さ約132m（標高約140m）の排気筒支持鉄塔を利用して、風向風速の観測を行った。</p> <p>なお、風向風速計は、排気筒の影響を考慮して、三方向に取付台を設け約8m排気筒から離れた位置に、それぞれ設置している。</p> <p>また、東海発電所の排気筒高さ付近を代表する風向風速の資料を得るため、東海発電所原子炉建屋屋上（標高約61m）に、高さ約10m（標高約71m）の支柱を設置し、風向風速の観測を行った。</p> <p>(2) 地上風を代表する観測点</p> <p>敷地を代表する地上風の資料を得るため、敷地内の平坦地（標高約8m）に高さ約10m（標高約18m）の鉄塔を設置し、風向風速の観測を行った。</p> <p>(3) 大気安定度を求めるための風速、日射量及び放射収支量の観測点（露場）</p> <p>大気安定度を求めるためには、平地での風速、日射量、放射収支量が必要である。</p> <p>風速については、地上風を代表する観測点で測定した風速を使用する。</p> <p>また、日射量及び放射収支量については、地上風を代表する観測点付近の平坦地（標高約8m）に設置した露場で観測を行った。なお、露場では降水量の観測も行った。</p> <p>(4) 気温差観測点</p> <p>高さ約132m（標高約140m）の排気筒支持鉄塔を利用して、気温、気温差の観測を行った。</p>	<p>5.3 敷地における気象観測</p> <p>発電所の安全解析に使用する気象条件を決める際の資料を得るため、「発電用原子炉施設の安全解析に関する気象指針」（以下「気象指針」という。）に基づき、発電所敷地内で風向、風速、日射量、放射収支量等の観測を行っている。</p> <p>以上の観測に使用した観測位置、気象測器の種類及び観測期間を第 5.3-1 表に、気象観測設備配置を第 5.3-1 図及び第 5.3-2 図に示す。</p> <p>5.3.1 気象観測点の状況</p> <p>(1) 排気筒高さ付近の風向風速を代表する観測点（A点、D点）</p> <p>排気筒高さ付近を代表する風向風速の資料を得るため、敷地内の平坦地（標高 8m）にドップラーソーダを設置し、東海発電所の排気筒高さに相当する標高 89m（地上高 81m）及び東海第二発電所の排気筒高さに相当する標高 148m（地上高 140m）の風向風速の観測を行った。この観測点は周囲の障害物の影響を受けることなく、排気筒高さ付近の風向風速を代表している。</p> <p>(2) 地上風を代表する観測点（A点、D点）</p> <p>敷地を代表する地上風の資料を得るため、敷地内の平坦地（標高 8m）に高さ 10m の観測柱を設置し、標高 18m（地上高 10m）の風向風速の観測を行った。この観測点は周囲の障害物の影響を受けることなく、平坦地であるので、敷地の地上風を代表している。</p> <p>(3) 大気安定度を求めるための風速、日射量及び放射収支量の観測点（A点、D点）</p> <p>大気安定度を求めるには、平地での風速、日射量及び放射収支量が必要である。</p> <p>風速については、地上風を代表する観測点（A点、D点）で観測した値を使用した。</p> <p>また、日射量及び放射収支量については、敷地内の平坦地に設置した露場の観測点（A点、D点）で観測した値を使用する。</p> <p>(削 除)</p>	<p>・③（先行プラント記載参考に反映）</p> <p>・②（気温差計の撤去（H6年に気象指針の観測項目から削除））</p> <p>・③（先行プラント記載参考に反映）</p> <p>・②（防潮堤設置に伴う気象観測設備の移設（A点⇒D点）しているため2地点を記載）</p> <p>・③（超音波風向風速計（排気筒風）からドップラーソーダへ変更）</p> <p>・②（気温差計の撤去（H6年に気象指針の観測項目から削除））</p>

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>5.3.2 気象観測項目</p> <p>風 向 風 速：標高約140m（地上約132m）、標高約71m（地上約63m）及び標高約18m（地上約10m）</p> <p>気温及び気温差：標高約139m（地上約131m）、標高約110m（地上約102m）、標高約62m（地上約54m）、標高約17m（地上約9m）及び標高約10m（地上約1.5m）</p> <p>日 射 量：露 場</p> <p>放 射 収 支 量：露 場</p> <p>降 水 量：露 場</p> <p>（各観測、点の位置については、第5.3-1 図及び第5.3-2図を参照）</p> <p>5.3.3 気象測器</p> <p>観測に使用した気象測器は、「気象業務法」に基づく検定に合格したものである。</p> <p>なお、放射収支計及び温度差計は、気象庁の検定項目にないため、定期的に校正、検査を行っている。</p>	<p>5.3.2 気象観測項目</p> <p>風向、風速：A点、D点</p> <p>日 射 量：A点、D点</p> <p>放射収支量：A点、D点</p> <p>降 水 量：A点、D点</p> <p>気 温：A点、D点</p> <p>（各観測点の位置については第 5.3-1 図及び第 5.3-2 図参照）</p> <p>5.3.3 気象測器</p> <p>第 5.3-1 表に示す観測に使用した気象測器は、「気象業務法」に基づく気象庁検定に合格したものである。</p> <p>なお、放射収支計及びドップラーソーダについては、気象庁の検定項目にないため、放射収支計については年 1 回黒体炉による校正、ドップラーソーダについては年 1 回校正器による校正を行っている。</p>	<p>・②（防潮堤設置に伴う気象観測設備の移設（A点⇒D点）しているため2地点を記載）</p> <p>・③（先行プラント記載を参考に反映）</p> <p>・②（超音波風向風速計（排気筒風）からドップラーソーダへ変更）</p>

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書
<p>5.4 敷地における気象観測結果</p> <p>昭和56年4月から昭和57年3月までの1年間の敷地における観測結果を以下に示す。</p> <p>5.4.1 風向・風速</p> <p>標高約140m、標高約71m及び標高約18mの高さにおける1年間の風向、風速の観測結果を以下に示す。</p> <p>(1) 風向</p> <p>第5.4-1図～第5.4-9図に標高約140m、標高約71m及び標高約18mにおける年間及び月別の風配図を示す。</p> <p>各点とも年間を通し北東よりの風が多いとともに、標高約140m、標高約71mでは北西、標高約18mでは西北西を中心とする風の出現が多くなっている。季節的にみると、4月～9月は北東、10月～3月は北西を中心とする風が多く、夏季には南よりの風も多い。</p> <p>海から陸へ向かう海風はさほど発達しないが、陸から海へ向う陸風は比較的顕著である。</p> <p>(2) 風速</p> <p>第5.4-10図～第5.4-18図に、標高約140m、標高約71m及び標高約18mにおける年間及び月別の風速階級別出現頻度と、年間の風速階級別累積出現頻度を示す。</p> <p>各点の年平均風速は、標高約140mで約6.0m/s、標高約71mで約5.1m/s、標高約18mで約3.7m/sである。風速は2.5～5.4m/sの階級で出現が多く、高所ほど出現の中心が強風側に偏っている。</p>	<p>5.4 敷地における気象観測結果</p> <p>2005年4月から2006年3月までの1年間の敷地における観測結果を以下に示す。なお、観測結果は観測点A点のものである。</p> <p>5.4.1 敷地を代表する風</p> <p>敷地の地上風を代表する観測点（第5.3-2図、A点）の標高18m（地上高10m）における1年間の観測結果と、東海発電所の排気筒高さ付近の風を代表する観測点（第5.3-2図、A点）の標高89m（地上高81m）及び東海第二発電所の排気筒高さ付近の風を代表する観測点（第5.3-2図、A点）の標高148m（地上高140m）における1年間の観測結果を以下に示す。</p> <p>なお、風向、風速の観測値を統計整理するに当たって、風速が0.5m/s未満のものは静穏として取り扱っている。</p> <p>(1) 風向</p> <p>標高18m（地上高10m）、標高89m（地上高81m）及び標高148m（地上高140m）における年間及び月別の風配図を第5.4-1図から第5.4-5図に示す。</p> <p>標高18m（地上高10m）における風向は、年間を通じておおむね北東及び西北西が多くなっている。</p> <p>標高89m（地上高81m）及び標高148m（地上高140m）における風向は、年間を通じて北東及び北西が多くなっている。</p> <p>標高18m（地上高10m）、標高89m（地上高81m）及び標高148m（地上高140m）における年間の低風速（0.5～2.0m/s）時の風配図を第5.4-6図に示す。</p> <p>標高18m（地上高10m）における年間の低風速時の風向分布は、西北西が多くなっている。</p> <p>標高89m（地上高81m）及び標高148m（地上高140m）における年間の低風速時の風向分布に、顕著な卓越風向はみられない。</p> <p>(2) 風速</p> <p>標高18m（地上高10m）、標高89m（地上高81m）及び標高148m（地上高140m）における年間の風速別出現頻度及び風速別出現頻度累積を第5.4-7図に、月別の風速別出現頻度を第5.4-8図から第5.4-11図に示す。</p> <p>標高18m（地上高10m）における年平均風速は3.1m/sで、1.5～2.4m/sの風速が最も多く、9.5m/s以上の風速は少ない。</p> <p>標高89m（地上高81m）における年平均風速は5.1m/sで、3.5～4.4m/sの風速が最も多く、9.5m/s以上の風速は8.8%である。</p> <p>標高148m（地上高140m）における年平均風速は5.4m/sで、2.5～3.4 m/sの風速が最も多いが、3.5～4.4m/sの風速も同程度多い。9.5m/s以上の風速は13.0%で、3高度中最も多い。</p> <p>また、標高18m（地上高10m）、標高89m（地上高81m）及び標高148m（地上高140m）における静穏（風速0.5m/s未満）の年間出現頻度は、それぞれ1.7%、0.7%及び1.1%である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・① ・②（防潮堤設置に伴う気象観測設備の移設（A点⇒D点）しているため2地点を記載） ・③（先行プラント記載を参考に反映）

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書
<p>(3) 静穏状態 風速0.5m/s未満の静穏状態の出現は、標高約140mで約0.7%、標高約71m及び標高約18mではともに約0.5%である。 同期間における静穏継続時間の出現頻度を第5.4-19図～第5.4-21図に示す。 これらの図から明らかなように、静穏状態の継続時間は、1時間が各標高でそれぞれ約92%、約93%及び約97%と多い。</p> <p>5.4.2 大気安定度 (1) 大気安定度の分類と出現頻度 日射量、放射収支量及び標高約18mの風速の観測資料をもとに、「気象指針」に従って大気安定度の分類を行った。第5.4-1表にこの分類表を示す。 なお、第5.4-1表中の「-」は、便宜上G型とし、A-B型はB型、B-C型はC型及びC-D型はD型として扱った。 年間及び月別の大気安定度出現頻度及び大気安定度別の標高約140m、標高約71m、標高約18mの風配図を第5.4-22図及び第5.4-23図～第5.4-25図に示す。 年間の出現頻度はA型～C型は約22%、D型が約56%、E型～G型は約22%となっている。 D型は年間を通じて出現が多く、A型～C型は春季と夏季に多い。また、E型～G型は年間を通じて20%前後の出現であるが、5月～7月にかけてやや出現が少ない。 A型～C型の時は陸側に吹く風が多く、E型～G型の時は海に吹く風が多くなっている。 D型の時は北東、北々東の風が多い。</p>	<p>(3) 同一風向継続時間 標高 18m (地上高 10m)、標高 89m (地上高 81m) 及び標高 148m (地上高 140m) における年間の同一風向の継続時間別出現回数を第 5.4-1 表から第 5.4-3 表に示す。 標高 18m (地上高 10m) において同一風向が継続する時間は、2 時間以内が全体の約 81%、6 時間以内が全体の約 97% を占めている。長時間継続する傾向の強い風向は、北北東、北東及び西北西で、最長継続時間は北東の 18 時間である。 標高 89m (地上高 81m) において同一風向が継続する時間は、2 時間以内が全体の約 83%、6 時間以内が全体の約 98% を占めている。長時間継続する傾向の強い風向は、北東及び北西で、最長継続時間は北東の 30 時間である。 標高 148m (地上高 140m) において同一風向が継続する時間は、2 時間以内が全体の約 84%、6 時間以内が全体の約 98% を占めている。長時間継続する傾向の特に強い風向は北東で、最長継続時間は北東の 35 時間である。 また、標高 18m (地上高 10m)、標高 89m (地上高 81m) 及び標高 148m (地上高 140m) における静穏状態の継続時間は、1 時間以内がそれぞれ約 82%、約 89% 及び約 92% で、静穏状態からの継続時間はすべて 4 時間以内である。</p> <p>5.4.2 大気安定度 (1) 大気安定度の分類及び出現頻度 日射量、放射収支量及び標高 18m (地上高 10m) の風速の観測資料を基に「気象指針」に従って大気安定度の分類を行った。 年間及び月別の大気安定度出現頻度を第 5.4-12 図に、標高 18m (地上高 10m)、標高 89m (地上高 81m) 及び標高 148m (地上高 140m) における年間の大気安定度別風配図を第 5.4-13 図から第 5.4-15 図に示す。 D型は年間を通じて出現頻度が多く、特に10月が60.3%で最も多く、7月及び9月も50%を超えている。A型からC型は5月、6月及び8月に、E型からG型は11月から1月にかけて多くなっている。 標高 18m (地上高 10m) における安定度別の風向の出現頻度は、不安定のA・B・C型は北東、南東から南南東及び西北西が 10% を超えている。中立のD型は北北東及び北東が多く、北東は 20% を超えている。安定のE・F・G型は西北西が多い。 標高 89m (地上高 81m) における安定度別の風向の出現頻度は、A・B・C型は北東から東、南南東から南及び西北西から北西が 10% 前後で、D型は北東が特に多く、E・F・G型は北西が特に多い。 標高 148m (地上高 140m) における安定度別の風向の出現頻度は、A・B・C型は東及び南が 10% を超えている程度で特に多い風向はない。D型は北東が特に多くなっている。E・F・G型は西北西から北北西が 10% を超えているが、目立って多い風向はない。 大気安定度の継続時間別出現回数を第 5.4-4 表に示す。 不安定なA・B・C型が 10 時間以上継続する頻度は 9.5%、中立のD型が 10 時間以上継続する頻度は 10.3%、安定なE・F・G型が 10 時間以上継続する頻度は 32.0% である。</p>	<p>既許可申請書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・① ・②（防潮堤設置に伴う気象観測設備の移設（A点⇒D点）しているため2地点を記載） ・③（先行プラント記載を参考に反映）

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書
<p>(2) 気温差</p> <p>地表から排気筒出口付近までの気温差出現頻度を第5.4-26図～第5.4-28図に示す。気温差の観測点は標高約139m－標高約110m、標高約110m－標高約62m及び標高約62m－標高約17mである。</p> <p>これによると、標高約139m－標高約110mでは$-0.5^{\circ}\text{C}/100\text{m}$程度の気温減率の出現が多く、標高約110m以下の層では$-1.0^{\circ}\text{C}/100\text{m}$程度の出現が多い。</p> <p>また、標高約110mに対して標高約139mがてい増側（逆転）にある頻度は約44%、標高約62mに対して標高約110mがてい増側にある頻度は約37%及び標高約17mに対して標高約62mがてい増側にある頻度は約36%である。</p> <p>5.4.3 観測結果からみた敷地の気象特性</p> <p>敷地における気象観測資料を解析した結果によると、敷地の気象特性として次のような点が挙げられる。</p> <p>(1) 敷地付近は北東及び西～北西よりの風の出現が多い。</p> <p>(2) 静穏が発生しても、それが継続することは少ない。</p> <p>(3) 低風速（$2\text{m}/\text{s}$以下）の出現は少なく、風は比較的強い。</p> <p>(4) 海風はさほど発達しないが、陸風は比較的顕著である。</p> <p>(5) 大気安定度はD型の出現が多く、比較的拡散幅の小さいE型、F型、G型の時は、海に向って吹く風が多い。また、拡散幅の大きいA型、B型、C型の時には、陸に向って吹く風が比較的多い。</p>	<p>(削 除)</p> <p>5.4.3 観測結果からみた敷地の気象特性</p> <p>敷地における気象観測資料を解析した結果によると、敷地の気象特性として次のような点があげられる。</p> <p>(1) 風向分布は、地上付近は西北西及び北東が、排気筒高さ付近は北西及び北東が多い。</p> <p>(2) 風速は、地上付近、排気筒高さ付近とも、北東が強い。</p> <p>(3) 地上付近、排気筒高さ付近とも静穏の出現頻度は少なく、また継続時間は短い。</p> <p>(4) 大気安定度は、D型の出現頻度が多い。また大気安定度ごとの風向は、地上付近ではA・B・C型は西北西及び南東が、D型は北東が多く、E・F・G型は西北西が多い。排気筒高さ付近ではA・B・C型は特に卓越した風向はなく、D型は北東が多い。E・F・G型は標高89m（地上高81m）では北西が多いが、標高148m（地上高140m）では特に多い風向はない。</p>	<p>既許可申請書</p> <ul style="list-style-type: none"> ・②（気温差計の撤去（H6年に気象指針の観測項目から削除）） ・③ ・①

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書
<p>5.5 安全解析に使用する気象条件 安全解析に使用する気象条件は「5.3 敷地での気象観測」に述べた気象資料を使用し、「気象指針」により求める。</p> <p>5.5.1 観測期間の気象資料の代表性の検討 敷地において観測した昭和56年4月～昭和57年3月の1年間の気象資料により安全解析を行うに当たり、観測を行った1年間が、長期間の気象状態を代表しているかどうかの検討を行った。 代表性の検討は本発電所の近傍の気象官署の観測結果から、上記観測期間の1年間と過去10年間(昭和46年4月～昭和56年3月)の資料により検定を行った。検定法は、不良標本の棄却検定に関するF分布検定の手順に従った。 なお、気象官署は水戸地方気象台、銚子地方気象台、小名浜測候所を選び、検定項目は、風向出現頻度と風速階級出現頻度とした。 その結果を第5.5-1表～第5.5-4表に示すが、有意水準5%で棄却されたものは4個であり、2ヶ所以上の気象官署で同時に棄却されたものはなかった。これにより、安全解析に使用した気象資料はほぼ長期間の気象状態を代表している。</p> <p>5.5.2 放出源の有効高さ 平常運転時及び想定事故時に排気筒から放出される放射性物質の敷地周辺に及ぼす影響を評価するに当たって、大気拡散の計算に使用する放出源の有効高さは、建屋及び敷地周辺の地形の影響を考慮するため、以下のような風洞実験により求める。 風洞実験においては、縮尺1/2,000の建屋及び発電所周辺の地形模型を用い、平常運転時には、排気筒の地上高さに吹上げ高さを加えた高さから、また、想定事故時には、排気筒の地上高さからガスを排出し、風下地点における地表濃度を測定する。 その模型実験で得られた地表濃度の値が、線量等量評価地点以遠において平地実験による地表濃度の値を上回らない平地実験の排気筒高さを、放出源の有効高さとする。 排気筒の地上高さは設計では約140mであるが、以上の風洞実験により線量等量評価に用いる放出源の有効高さは、第5.5-5表のとおりとする</p> <p>5.5.3 平常運転時の被ばく評価に使用する気象条件 発電所の平常運転時に放出される放射性気体廃棄物の敷地周辺に及ぼす影響を評価するに当たっては、敷地内における昭和56年4月から昭和57年3月までの1年間の風向、風速及び大気安定度の観測資料から以下に示すパラメータを求めこれを用いる。</p>	<p>5.5 安全解析に使用する気象条件 安全解析に使用する気象条件は、「5.3 敷地における気象観測」に述べた気象資料を使用し、「気象指針」に従って統計整理し求めた。</p> <p>5.5.1 観測期間の気象条件の代表性の検討 敷地において観測した2005年4月から2006年3月までの1年間の気象資料により安全解析を行うに当たり、観測を行った1年間の気象状態が、長期間の気象状態と比較して特に異常でないかどうかの検討を行った。 風向出現頻度及び風速出現頻度について、敷地内A点の標高89m（地上高81m）及び標高148m（地上高140m）における10年間（欠測率の高い1999年4月～2000年3月の1年間を除く1994年4月～2005年3月）の資料により検定を行った。検定法は、不良標本の棄却検定に関するF分布検定の手順に従った。 その結果を第5.5-1表から第5.5-4表に示すが、有意水準5%で棄却されたものは標高89m（地上高81m）ではなし、標高148m（地上高140m）では27項目中2項目であった。これは安全解析に使用した観測期間の気象状態が長期間の気象状態と比較して特に異常でないことを示しており、この期間の気象資料を用いて平常運転時及び設計基準事故時の線量等の計算を行うことは妥当であることを示している。</p> <p>5.5.2 大気拡散の計算に使用する放出源の有効高さ (4) (5) 排気筒から放出される放射性物質が敷地周辺に及ぼす影響を評価するに当たって、大気拡散の計算に使用する放出源の有効高さは、建屋及び敷地周辺の地形の影響を考慮するため、以下のような風洞実験により求める。 風洞実験においては、縮尺1/2,000の建屋及び敷地周辺の地形模型を用い、排気筒高さに吹上げ高さを加えた高さからガスを排出し、風下地点における地表濃度を測定する。 その地形模型実験で得られた地表濃度の値が、平地実験による地表濃度の値に相当する排気筒高さを放出源の有効高さとする。 排気筒高さは、東海発電所排気筒は標高89m(地上高81m)、東海第二発電所排気筒は標高148m（地上高140m）であるが、上記の風洞実験により平常運転時の線量評価に用いる放出源の有効高さは第5.5-5表のとおりとする。 設計基準事故時において、原子炉冷却材喪失、放射性気体廃棄物処理施設の破損、燃料集合体の落下及び制御棒落下では、排気筒又は非常用ガス処理系排気筒からの吹上げを考慮せずに上記と同様の風洞実験を行い、放出源の有効高さを第5.5-5表のとおりとし、また、主蒸気管破断では地上放散とし放出源の有効高さを0mとする。</p> <p>5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件 (1) 平常運転時 発電所の平常運転時に放出される放射性気体廃棄物の敷地周辺に及ぼす影響を評価するに当たっては、敷地内における2005年4月から2006年3月までの1年間の風向、風速及び大気安定度の観測資料から以下に示すパラメータを求め、これを用いる。</p>	<p>・① ・③（先行プラント記載を参考に反映）</p> <p>・風洞実験に係る参考資料を追加 ・③（先行プラント記載を参考に反映）</p>

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書
<p>なお、風向、風速については、排気筒放出であるので、排気筒付近の風を代表する標高約140m（東海第二発電所）、標高約71m（東海発電所）の風向、風速とする。</p> <p>a. 風向別大気安定度別風速逆数の総和及び平均 風向別大気安定度別風速逆数の総和及び平均は次式により計算する。</p> $S_{ds} = \sum_{i=1}^N \frac{\delta_i}{U_i} \dots\dots\dots (5.5-1)$ $\bar{S}_{ds} = \frac{1}{N_{ds}} \cdot S_{ds} \dots\dots\dots (5.5-2)$ <p>S_{ds} : 風向別大気安定度別風速逆数の総和 (s/m) \bar{S}_{ds} : 風向別大気安定度別風速逆数の平均 (s/m) N : 年間の観測回数 (回) U_i : 毎回観測の風速 (m/s) δ_i : 風向 d, 大気安定度 s の場合 $\delta_i = 1$ その他の場合 $\delta_i = 0$ N_{ds} : 風向 d, 大気安定度 s の観測回数 (回)</p> <p>b. 風向出現頻度 風向出現頻度は (5.5-3) 式及び (5.5-4) 式によりそれぞれ計算する。</p> $f_d = \sum_{i=1}^N \frac{\delta_i}{N} \times 100 \dots\dots\dots (5.5-3)$ $f_{dr} = f_d + f_{d'} + f_{d''} \dots\dots\dots (5.5-4)$ <p>f_d : 風向 d の出現頻度 (%) N : 年間の観測回数 (回) δ_i : 風向が d の場合 $\delta_i = 1$, その他の場合 $\delta_i = 0$ $f_{d'}, f_{d''}$: 風向が d に隣接する風向 d', d'' の出現頻度 (%) f_{dr} : 風向 d, d', d'' の出現頻度の和 (%)</p> <p>静穏時については、風速は0.5m/sとし、風向別大気安定度別出現回数は、静穏時の大気安定度別出現回数を風速0.5~2.0m/sの風向出現頻度に応じて比例配分して求める。 また、欠測については、欠測を除いた期間について得られた統計が、欠測時間についても成立つものとする。</p>	<p>なお、風向、風速については東海第二発電所の排気筒高さ付近の風を代表する標高148m（地上高140m）及び東海発電所の排気筒高さ付近の風を代表する標高89m（地上高81m）の風向、風速とする。</p> <p>a. 風向別大気安定度別風速逆数の総和及び平均 風向別大気安定度別風速逆数の総和及び平均は、(5.5-1) 式、(5.5-2) 式によりそれぞれ計算する。</p> $S_{d,s} = \sum_{i=1}^N \frac{a_s \delta_i}{U_i} \dots\dots\dots (5.5-1)$ $\bar{S}_{d,s} = \frac{1}{N_{d,s}} \cdot S_{d,s} \dots\dots\dots (5.5-2)$ <p>ここで、 $S_{d,s}$: 風向別大気安定度別風速逆数の総和 (s/m) $\bar{S}_{d,s}$: 風向別大気安定度別風速逆数の平均 (s/m) N : 実観測回数 (回) U_i : 時刻 i における風速 (m/s) $a_s \delta_i$: 時刻 i において風向 d, 大気安定度 s の場合 $a_s \delta_i = 1$ その他の場合 $a_s \delta_i = 0$ $N_{d,s}$: 風向 d, 大気安定度 s の総出現回数 (回)</p> <p>b. 風向出現頻度 風向出現頻度は (5.5-3) 式及び (5.5-4) 式によりそれぞれ計算する。</p> $f_d = \sum_{i=1}^N \frac{a \delta_i}{N} \times 100 \dots\dots\dots (5.5-3)$ $f_{dr} = f_d + f_{d'} + f_{d''} \dots\dots\dots (5.5-4)$ <p>ここで、 f_d : 風向 d の出現頻度 (%) N : 実観測回数 (回) $a \delta_i$: 時刻 i において風向が d の場合 $a \delta_i = 1$ その他の場合 $a \delta_i = 0$ $f_{d'}, f_{d''}$: 風向 d に隣接する風向 d', d'' の出現頻度 (%) f_{dr} : 風向 d, d', d'' の出現頻度の和 (%)</p> <p>静穏時については、風速は 0.5m/s とし、風向別大気安定度別出現回数は、静穏時の大気安定度別出現回数を風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度に応じて比例配分して求める。 また、欠測については、欠測を除いた期間について得られた統計が、欠測期間についても成り立つものとする。</p>	<p>・③（先行プラント記載を参考に反映）</p>

添付2-9

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書
<p>以上の計算から求めた標高約140m及び標高約71mの風向別大気安定度別風速逆数の総和を第5.5-6表に、風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均を第5.5-7表に、風向出現頻度を第5.5-8表に示す。なお、第5.5-8表に風速0.5～2.0m/sの風向出現頻度も示す。</p> <p>5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件</p> <p>発電所の想定する事故時に放出される放射性物質が、発電所周辺の公衆に及ぼす影響を評価するに当たって、放射性物質の拡散状態を推定するために必要な気象条件については、現地における出現頻度からみて、これより悪い条件がめつたに現れないと言えるものを選ばなければならない。</p> <p>そこで評価に用いる放射性物質の相対濃度（χ/Q）を、敷地における昭和56年4月から昭和57年3月までの1年間の観測データ（排気筒からの放出に対しては標高約140m、地上放出に対しては標高約18m）を使用して求めた。すなわち、次式に示すように風向、風速、大気安定度及び実効放出継続時間を考慮したχ/Qを求め、方位別にその値の小さい方から大きい方へ累積頻度を求め、年間データ数に対する出現頻度（%）で表わすことにする。横軸にχ/Qを、縦軸に累積出現頻度をと、着目方位ごとにχ/Qの累積出現頻度分布を書き、この分布から、累積出現頻度が97%に相当するχ/Qを方位別に求め、そのうち最大のものを安全解析に使用する相対濃度とする。</p> <p>ただし、χ/Qの計算の着目地点は、各方位とも非居住区域（周辺監視区域及び日本原子力研究所等の周辺監視区域）境界までの距離とし、着目地点以遠でχ/Qが最大になる場合は、そのχ/Qを着目地点の当該時刻のχ/Qとする。</p> $\chi/Q = \frac{1}{T} \sum_{i=1}^T (\chi/Q)_i \cdot \delta_i$ <p>χ/Q : 実効放出継続時間中の相対濃度（s/m³） T : 実効放出継続時間（h） $(\chi/Q)_i$: 時刻 i における相対濃度（s/m³） δ_i : 時刻 i において風向が当該方位にあるとき $\delta_i = 1$ 時刻 i において風向が他の方位にあるとき $\delta_i = 0$</p> <p>ここで、原子炉冷却材喪失及び制御棒落下での$(\chi/Q)_i$の計算に当たっては、次により行う。</p>	<p>以上の計算から求めた風向別大気安定度別風速逆数の総和を第5.5-6表及び第5.5-9表に、風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均を第5.5-7表及び第5.5-10表に、風向出現頻度及び風速0.5～2.0m/sの風向出現頻度を第5.5-8表及び第5.5-11表に示す。</p> <p>(2) 設計基準事故時</p> <p>設計基準事故時に放出される放射性物質が、敷地周辺の公衆に及ぼす影響を評価するに当たって、放射性物質の拡散状態を推定するために必要な気象条件については、現地における出現頻度からみて、これより悪い条件がめつたに現れないと言えるものを選ばなければならない。</p> <p>そこで、線量等の評価に用いる放射性物質の相対濃度（以下「χ/Q」という。）を、標高18m（地上高10m）及び標高148m（地上高140m）における2005年4月から2006年3月までの1年間の観測データを使用して求めた。すなわち、(5.5-5)式に示すように、風向、風速、大気安定度及び実効放出継続時間を考慮したχ/Qを陸側方位について求め、方位別にその値の小さい方から累積頻度を年間のデータ数に対する出現頻度（%）として表わすことにする。横軸にχ/Qを、縦軸に累積出現頻度をと、着目方位ごとにχ/Qの累積出現頻度分布を描き、この分布から、累積出現頻度が97%に当たるχ/Qを方位別に求める。</p> <p>ただし、χ/Qの計算の着目地点は、各方位とも非居住区域（周辺監視区域及び原子力科学研究所等の周辺監視区域）境界までの距離とし、着目地点以遠でχ/Qが最大になる場合は、そのχ/Qを着目地点における当該時刻のχ/Qとする。</p> $\chi/Q = \frac{1}{T} \sum_{i=1}^T (\chi/Q)_i \cdot \delta_i \quad \dots\dots\dots (5.5-5)$ <p>ここで、 χ/Q : 実効放出継続時間中の相対濃度（s/m³） T : 実効放出継続時間（h） $(\chi/Q)_i$: 時刻 i における相対濃度（s/m³） δ_i : 時刻 i において風向が当該方位にあるとき $\delta_i = 1$ 時刻 i において風向が他の方位にあるとき $\delta_i = 0$</p> <p>$(\chi/Q)_i$の計算に当たっては、原子炉冷却材喪失及び制御棒落下の場合、当該方位における放射性物質の全量が一方位内のみに一様分布すると仮定して(5.5-6)式で計算し、放射性気体廃棄物処理施設の破損及び燃料集合体の落下の場合、方位内で風向軸が一定と仮定して(5.5-7)式で計算する。</p>	<p>・③（先行プラント記載を参考に反映）</p> <p>・①</p> <p>・③（先行プラント記載を参考に反映）</p> <p>・組織名称の変更</p> <p>・③（先行プラント記載を参考に反映）</p>

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書
<p> $(\chi/Q)_i = \frac{2.032}{\sigma_{y,i} \cdot U_i \cdot X} \exp\left(-\frac{H^2}{2\sigma_{z,i}^2}\right)$ $\sigma_{y,i} : \text{時刻 } i \text{ における濃度分布の } z \text{ 方向の拡がりのパラメータ (m)}$ $U_i : \text{時刻 } i \text{ における風速 (m/s)}$ $X : \text{放出点から着目地点までの距離 (m)}$ $H : \text{放出源の有効高さ (m)}$ <p>また、放射性気体廃棄物処理施設の破損及び燃料集合体の落下での $(\chi/Q)_i$ の計算に当たっては、次により行う。</p> $(\chi/Q)_i = \frac{1}{\pi \cdot \sigma_{y,i} \cdot \sigma_{z,i} \cdot U_i} \cdot \exp\left(-\frac{H^2}{2\sigma_{z,i}^2}\right)$ $\sigma_{z,i} : \text{時刻 } i \text{ における濃度分布の } y \text{ 方向の拡がりのパラメータ (m)}$ <p>更に、主蒸気管破断（主蒸気隔離弁閉止後）での $(\chi/Q)_i$ の計算に当たっては、建屋等の影響を考慮して次により行う。</p> $(\chi/Q)_i = \frac{2.032}{\Sigma_{z,i} \cdot U_i \cdot X} \cdot \exp\left(-\frac{H^2}{2\Sigma_{z,i}^2}\right)$ $\Sigma_{z,i} = (\sigma_{z,i}^2 + C \cdot A / \pi)^{1/2}$ $C : \text{形状係数}$ $A : \text{建屋等の風向方向の投影面積 (m}^2\text{)}$ <p>方位別 χ/Q の累積出現頻度の求める時、静穏の場合には風速を0.5m/sとして計算し、その風向は静穏出現前の風向を使用する。</p> <p>実効放出継続時間は、事故期間中の放射性物質の全放出量を1時間当たりの最大放出量で除することにより求められる。ここでは、想定する事故の種類によって出現率に変化があるので、放出モードを考慮して次の値を用いた。</p> </p>	<p> $(\chi/Q)_i = \frac{2.032}{\sigma_{y,i} \cdot U_i \cdot x} \exp\left(-\frac{H^2}{2\sigma_{z,i}^2}\right) \dots\dots\dots (5.5-6)$ $(\chi/Q)_i = \frac{1}{\pi \cdot \sigma_{y,i} \cdot \sigma_{z,i} \cdot U_i} \exp\left(-\frac{H^2}{2\sigma_{z,i}^2}\right) \dots\dots\dots (5.5-7)$ <p>ここで、</p> $\sigma_{y,i} : \text{時刻 } i \text{ における濃度分布の水平方向の拡がりのパラメータ (m)}$ $\sigma_{z,i} : \text{時刻 } i \text{ における濃度分布の垂直方向の拡がりのパラメータ (m)}$ $U_i : \text{時刻 } i \text{ における風速 (m/s)}$ $H : \text{放出源の有効高さ (m)}$ $x : \text{放出地点から着目地点までの距離 (m)}$ <p>さらに、主蒸気管破断（主蒸気隔離弁閉止後）の場合、建屋等の影響を考慮して (5.5-8) 式で計算する。</p> $(\chi/Q)_i = \frac{2.032}{\Sigma_{z,i} \cdot U_i \cdot x} \exp\left(-\frac{H^2}{2\Sigma_{z,i}^2}\right) \dots\dots\dots (5.5-8)$ <p>ここで、</p> $\Sigma_{z,i} = (\sigma_{z,i}^2 + C \cdot A / \pi)^{1/2}$ $C : \text{形状係数 (-)}$ $A : \text{建屋等の風向方向の投影面積 (m}^2\text{)}$ <p>方位別 χ/Q の累積出現頻度を求めるとき、静穏の場合には風速を 0.5m/s として計算し、その風向は静穏出現前の風向を使用する。</p> <p>実効放出継続時間としては、放射性よう素の事故期間中の全放出量を 1 時間当たりの最大放出量で除して求めた値を用いる。計算に使用する風向、風速は、排気筒又は非常用ガス処理系排気筒からの放出の場合は、排気筒高さ付近の風を代表する標高 148m（地上高 140m）の風向、風速とする。放出源の有効高さは、吹上げ高さを考慮せずに陸側各方位について風洞実験により求めた第 5.5-5 表の値を使用する。また、タービン建屋から直接放出される場合は、地表付近の風を代表する標高 18m（地上高 10m）の風向、風速とする。</p> </p>	<p>・③（先行プラント記載を参考に反映）</p>

添付2-11

既許可申請書	変更（案）	既許可申請書																		
<table border="1" data-bbox="300 185 875 411"> <thead> <tr> <th>事故名</th> <th>よう素</th> <th>希ガス</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>原子炉冷却材喪失</td> <td>24 h</td> <td>24 h</td> </tr> <tr> <td>放射性気体廃棄物処理施設の破損</td> <td>—</td> <td>1 h</td> </tr> <tr> <td>主蒸気管破断（主蒸気隔離弁閉止後）</td> <td>20 h</td> <td>1 h</td> </tr> <tr> <td>燃料集合体の落下</td> <td>5 h</td> <td>15 h</td> </tr> <tr> <td>制御棒落下</td> <td>24 h</td> <td>12 h</td> </tr> </tbody> </table> <p data-bbox="208 459 987 517">また、建屋等の風向方向の投影面積としては、計算の便宜上最小投影面積4,500m²を使用し、形状係数としては0.5を用いる。</p> <p data-bbox="208 528 987 624">なお、想定する事故時の放射性雲からのγ線による線量については、χ/Qの代わりに空間濃度分布とγ線による線量当量計算モデルを組み合わせたD/Q（相対線量、γ線エネルギー0.5MeV）を用いて同様に求める。</p> <p data-bbox="208 730 987 788">以上の方法により陸側方向について求めた方位別χ/Q及びD/Qの累積出現頻度を第5.5-1図（1）～（8）に示す。</p> <p data-bbox="208 799 987 857">また、想定する事故時の線量当量評価に使用するχ/Q及びD/Qは、累積出現頻度が97%に相当する方位別の値のうち最も大きい値とし、第5.5-9表に示す。</p> <p data-bbox="154 938 293 962">5.6 参考文献</p> <ol data-bbox="170 973 987 1134" style="list-style-type: none"> 「日本の気候」（昭和33年9月，和護持夫監修） 「日本気候表 その2 地点別月別平均値（1951-1980）」（昭和57年2月，気象庁編集） 「日本気候表 その3 おもな気象要素についての極値と順位（観測開始から1980年まで）」（昭和57年1月，気象庁編集） 	事故名	よう素	希ガス	原子炉冷却材喪失	24 h	24 h	放射性気体廃棄物処理施設の破損	—	1 h	主蒸気管破断（主蒸気隔離弁閉止後）	20 h	1 h	燃料集合体の落下	5 h	15 h	制御棒落下	24 h	12 h	<p data-bbox="1014 185 1211 209">（第5.5-12表に記載）</p> <p data-bbox="1039 459 1827 517">建屋等の風向方向の投影面積としては、計算の便宜上、最小投影面積である4,500m²を使用し、形状係数としては0.5を用いる。</p> <p data-bbox="1039 528 1827 651">また、放射性雲からのγ線による空気カーマについては、χ/Qの代わりに空間濃度分布とγ線による空気カーマ計算モデルを組み合わせた相対線量（以下「D/Q」という。）をχ/Qと同様な方法で求めて使用する。この場合の実効放出継続時間としては、放射性希ガスの事故期間中の全放出量を1時間当たりの最大放出量で除して求めた値を用いる。</p> <p data-bbox="1039 662 1827 719">ただし、実効放出継続時間が8時間を超える場合でも方位内で風向軸が一定と仮定して計算する。γ線による空気カーマ計算には、添付書類九の（5.1-1）式を使用する。</p> <p data-bbox="1039 730 1827 788">以上の方法により、陸側方向について求めた方位別χ/Q及びD/Qの累積出現頻度を第5.5-1図から第5.5-8図に示す。</p> <p data-bbox="1039 799 1827 857">このうち、設計基準事故時の線量の評価に用いるχ/Q及びD/Qは、線量が最大となる方位の値を使用する。安全評価に使用するχ/Q及びD/Qを第5.5-12表に示す。</p> <p data-bbox="1001 938 1140 962">5.6 参考文献</p> <ol data-bbox="1014 973 1827 1302" style="list-style-type: none"> 「日本の気候」（昭和33年9月，和達清夫監修） 「日本気候表 その2 地点別月別平均値（1951-1980）」（昭和57年2月，気象庁編集） 「日本気候表 その3 おもな気象要素についての極値と順位（観測開始から1980年まで）」（昭和57年1月，気象庁編集） 「（社）日本原子力学会標準 発電用原子炉施設の安全解析における放出源の有効高さを求めるための風洞実験実施基準」（2003年6月，社団法人 日本原子力学会） 「東海第二発電所大気拡散風洞実験報告書」（平成25年12月，三菱重工株式会社） 	<p data-bbox="1854 217 2092 274">・③（先行プラント記載を参考に反映）</p> <p data-bbox="1854 1174 2092 1198">・風洞実験実施基準を追記</p> <p data-bbox="1854 1278 2092 1302">・風洞実験報告書の追記</p>
事故名	よう素	希ガス																		
原子炉冷却材喪失	24 h	24 h																		
放射性気体廃棄物処理施設の破損	—	1 h																		
主蒸気管破断（主蒸気隔離弁閉止後）	20 h	1 h																		
燃料集合体の落下	5 h	15 h																		
制御棒落下	24 h	12 h																		

添付2-12

既許可申請書

変更（案）

備考

（記載なし）

第5.2-32表 気候表「概要」(水戸地方気象台)

気象庁資料による

要素	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	統計期間
平均気温(°C)		3.0	3.6	6.7	12.0	16.4	19.7	23.5	25.2	21.7	16.0	10.4	5.4	13.6	1981~2010年
最高気温の平均(°C)		9.0	9.4	12.2	17.5	21.3	23.8	27.6	29.6	25.8	20.8	16.0	11.4	18.7	1981~2010年
最低気温の平均(°C)		-2.2	-1.5	1.6	6.7	12.0	16.3	20.3	21.9	18.3	11.8	5.4	2.0	9.2	1981~2010年
相対湿度(%)		64	64	67	71	75	81	83	81	81	79	75	69	74	1981~2010年
日照時間(h)		4.2	5.1	6.2	6.6	7.4	8.4	8.2	7.2	7.7	6.6	5.5	4.1	6.4	1981~2010年
全天日射量 (MJ/m ²)		186.3	167.8	173.9	176.6	176.4	129.4	140.9	175.6	127.9	141.5	148.4	177.2	1921.7	1981~2010年
風速(m/s)	平均	2.0	2.3	2.5	2.6	2.4	2.3	2.2	2.3	2.2	2.0	1.8	1.9	2.2	1981~2010年
	日最大	20.8	21.7	19.6	20.7	20.0	19.0	19.3	28.1	25.5	28.3	27.3	18.5	28.3	1897~2012年
最多風向	NW	NW	NW	N	N	E	E	E	ENE	ENE	NNW	NW	NW	NW	1981~2010年
降水量(mm)		51.0	59.4	107.6	115.5	133.3	143.2	134.0	131.8	181.3	157.5	79.1	46.1	1358.8	1981~2010年
降雪の深さの合計(cm)		5	7	2	0	—	—	—	—	—	—	—	1	16	1981~2010年
日照		3.1	3.8	5.6	5.2	5.2	7.4	6.3	3.4	5.8	5.8	4.6	3.2	50.4	1981~2010年
大雪		3.6	4.2	2.6	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	1.3	12.0	1981~2010年
大気現象	霧	1.3	1.4	2.4	3.4	3.6	4.4	5.1	3.4	2.7	3.2	3.5	2.0	36.4	1981~2010年
	霜	0.1	0.2	0.5	1.5	2.3	1.9	3.4	3.5	2.0	0.8	0.2	0.3	16.7	1981~2010年

注) 露点の高さ 29.3 m
風速計の地上高 14.0 m

・①（新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更 (案)

備考

(記載なし)

第5.2-33表 気候表〔概要〕 (鈍子地方気象台)

気象庁資料による

要素	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	統計期間
平均気温(°C)	6.4	6.6	9.1	13.3	15.9	19.5	22.9	25.2	23.0	18.7	14.0	9.2	15.4	1981~2010年
最高気温の平均(°C)	9.9	9.8	12.2	16.4	19.9	22.3	25.9	28.1	25.4	21.1	16.9	12.5	18.4	1981~2010年
最低気温の平均(°C)	2.7	3.0	5.9	10.3	14.2	17.2	20.7	23.0	21.0	16.3	10.7	5.4	12.5	1981~2010年
相対湿度(%)	62	63	68	75	81	88	90	87	84	75	71	65	76	1981~2010年
雲量	5.0	5.7	6.7	6.7	7.5	8.4	8.0	6.5	7.4	6.9	6.1	4.9	6.6	1981~2010年
日照時間(hr)	173.5	154.4	161.2	176.9	173.6	135.8	165.0	220.6	156.3	140.5	138.3	165.0	1959.9	1981~2010年
全天日射量 MJ/m ²	8.9	10.9	13.0	16.4	17.9	16.3	17.7	19.1	13.8	10.6	8.5	7.9	13.4	1981~2010年
風速(m/s)														
平均	5.7	6.0	6.4	6.0	5.6	5.0	5.2	5.1	5.9	6.1	5.5	5.4	5.7	1996~2010年
最大	28.3	34.8	34.2	24.4	25.1	26.0	31.9	30.0	48.0	43.3	31.5	28.5	48.0	1837~2012年
最多風向	WNW	WNW	NNE	SSW	SSW	SSW	SSW	SSW	NNE	NNE	NNE	WNW	NNE	1986~2010年
降水量(mm)	91.6	88.9	158.0	126.7	132.8	168.7	118.9	109.6	220.7	234.6	129.6	79.9	1659.8	1981~2010年
降雪の深さの合計(cm)	0	0	0	—	—	—	—	—	—	—	0	0	1	1981~2010年
不凍	4.4	5.0	6.1	5.2	5.2	7.1	5.5	2.5	5.6	6.1	5.3	3.9	62.0	1981~2010年
雪	2.3	2.6	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	6.1	1981~2010年
霧	0.4	0.5	1.3	2.8	5.2	9.8	11.8	6.8	2.3	0.9	1.1	0.6	43.7	1981~2010年
霙	0.9	0.7	1.2	1.2	1.2	1.1	1.2	1.8	1.4	1.0	1.1	0.9	13.8	1981~2010年

注) 露点の標高 20.1 m
風速計の地上高 28.2 m

・① (新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記 (2012 年までのデータに更新))

既許可申請書

変更 (案)

備考

(記載なし)

第5.2-34表 気候表〔概要〕 (小名浜特別地域気象観測所)

気象庁資料による

要素	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年	統計期間
平均気温(°C)	3.8	4.0	6.6	11.3	15.2	18.4	22.0	24.2	21.5	16.4	11.1	6.4	13.4	1981~2010年
最高気温の平均(°C)	8.4	8.5	10.9	15.5	18.9	21.8	25.2	27.5	25.0	20.5	15.7	11.1	17.4	1981~2010年
最低気温の平均(°C)	-0.5	-0.2	2.3	7.1	11.7	15.7	19.6	21.7	18.6	12.5	6.6	1.9	9.8	1981~2010年
相対湿度(%)	58	59	63	69	77	83	86	84	80	74	68	62	72	1981~2010年
雲量	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
日照時間(hr)	189.8	177.9	185.5	188.8	188.6	142.1	147.9	185.7	139.5	152.7	160.5	183.6	2042.5	1981~2010年
全天日射量 (MJ/m ²)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
平均	3.1	3.2	3.2	3.0	2.7	2.3	2.2	2.4	2.6	2.6	2.7	2.9	2.8	1981~2010年
日最大	18.5	20.6	22.6	20.3	17.7	23.9	24.7	20.8	24.4	28.3	21.2	21.8	28.8	1910~2010年
風速(m/s)	NW	NW	NW	N	S	S	S	S	N	N	NW	NW	N	1981~2010年
最多風向	NW	NW	NW	N	S	S	S	S	N	N	NW	NW	N	1981~2010年
降水量(mm)	52.8	58.0	107.5	125.3	142.0	148.7	150.4	135.5	188.2	173.8	82.4	44.4	1408.9	1981~2010年
降雪の深さの合計(cm)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不 照	2.8	3.2	4.7	4.7	5.0	7.0	6.0	3.2	5.2	5.1	3.6	2.8	53.6	1981~2010年
雪	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
大気現象	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2008~2010年
霧	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2008~2010年

注) 霧場の標高 3.3 m
 風速計の地上高 14.9 m
 小名浜測候所は2008年(平成20年)10月1日に無人化され、小名浜特別地域気象観測所となった。

・① (新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記 (2012 年までのデータに更新))

既許可申請書

変更（案）

備考

（記載なし）

第5.2-35表 日最高・最低気温の順位（水戸地方気象台）

（気象庁資料による）
統計期間：1897年～2012年
（℃）

順位	月	年												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
最高気温	極値	23.8	24.3	25.2	31.0	32.1	34.5	38.4	38.4	36.8	33.1	26.2	25.0	38.4
	起年	1969	2009	2007	1922	1993	1987	1997	1896	2000	1979	1977	2004	1987
	日	27	14	29	28	13	6	5	15	2	1	1	5	7月5日
最低気温	極値	-11.4	-22.9	-25.0	-28.8	-32.1	-34.3	-36.4	-37.0	-36.1	-31.9	-26.2	-24.0	-38.1
	起年	1916	1893	1998	2005	1940	1983	2011	2007	2010	1984	1990	1990	1998
	日	23	7	30	29	22	29	18	16	3	3	6	1	8月16日
1	極値	19.7	22.8	24.6	28.8	32.0	33.5	36.3	36.6	35.9	31.4	25.2	22.3	37.0
	起年	1929	1987	1972	1930	1958	2011	2012	2007	1984	1915	1946	1929	2007
	日	15	12	31	19	31	30	17	15	2	9	1	18	8月16日
2	極値	-12.0	-12.7	-9.0	-3.5	-0.1	7.3	10.2	12.7	7.9	-0.5	-4.7	-8.2	-12.7
	起年	1927	1952	1926	1965	1953	1996	1976	1939	1904	1904	1921	1923	1962
	日	30	5	27	6	3	1	2	18	30	31	27	30	2月5日
3	極値	-11.7	-11.2	-8.5	-3.4	1.0	7.4	10.3	12.7	8.3	0.7	-4.5	-8.1	-12.0
	起年	1909	1862	1934	1936	1931	1921	1976	1810	2001	1984	1908	1947	1927
	日	11	20	30	1	3	3	3	19	23	31	24	21	1月30日
備考	極値	-11.5	-10.3	-8.3	-3.3	1.4	7.5	11.3	13.4	8.4	0.7	-4.4	-7.8	-11.7
	起年	1909	1945	1928	1911	1945	1945	1976	1880	1962	1946	1912	1973	1909
	日	12	24	6	2	7	3	1	10	28	29	30	25	1月11日

・①（新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

（記載なし）

(気象庁資料による)
統計期間：1887年～2012年
(°C)

第5.2-36表 日最高・最低気温の順位 (鎌子地方気象台)

順位	月	年												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
最高気温	極値	23.6	24.0	22.2	25.9	29.5	30.9	34.8	35.3	33.7	29.3	24.8	23.4	35.3
	起年	1969	2009	1968	1956	1863	1966	2005	1962	2000	1938	1977	2004	1962
	日	27	14	5	20	25	29	27	4	3	3	1	5	8月4日
最低気温	極値	19.9	21.1	21.6	24.4	27.5	30.8	34.5	35.2	33.6	29.2	24.6	22.3	35.2
	起年	2000	1990	1891	1892	2004	2011	2004	2004	1879	1998	1990	2010	2004
	日	7	18	29	9	30	30	20	20	5	2	5	3	8月20日
1	極値	19.3	21.0	21.2	24.0	27.1	30.7	33.9	35.0	33.5	28.6	24.5	21.8	35.0
	起年	1968	1930	1941	1968	1888	1990	1940	1978	1912	1890	1923	1880	1878
	日	13	24	21	23	19	22	25	24	2	2	1	8	8月24日
2	極値	-6.2	-7.3	-4.3	-0.2	4.3	10.2	13.0	15.9	11.2	4.5	-1.3	-4.6	-7.3
	起年	1970	1893	1893	1897	1894	1913	1946	1891	1896	1904	1912	1893	1893
	日	17	13	9	1	3	9	25	25	22	31	30	30	2月13日
3	極値	-5.7	-6.1	-3.6	0.1	5.2	10.3	13.8	16.9	11.3	5.9	-0.9	-4.3	-6.2
	起年	1906	1945	1977	1897	1893	1926	1966	1897	1893	1984	1892	1892	1979
	日	21	4	6	8	1	15	3	1	14	31	27	22	1月17日
極値	極値	-5.3	-5.7	-3.2	0.3	5.4	10.4	14.1	17.0	12.4	6.0	-0.5	-4.2	-6.1
	起年	1893	1893	1913	1896	1906	1888	1981	1970	1892	1904	1895	1892	1945
	日	3	12	8	5	2	5	1	13	28	30	15	26	2月4日

・①（新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

第5.2-37表 日最高・最低気温の順位（小名浜特別地域気象観測所）

（気象庁資料による）
統計期間：1910年～2012年

順位	月	年												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
最高気温	極値	20.8	24.8	23.4	27.4	28.7	33.6	34.9	37.7	34.4	31.5	25.0	25.4	37.7
	起年	1969	1962	2007	2005	1988	1991	1932	1994	2010	1979	1946	2004	1994
	日	27	11	29	29	19	27	30	3	4	1	1	5	8月3日
最低気温	極値	18.5	21.1	21.8	26.5	23.5	23.2	34.7	36.9	34.3	31.3	24.8	21.5	36.9
	起年	1929	2009	1912	2004	1946	2003	1944	2007	1992	1998	2033	2010	2007
	日	15	14	31	17	29	21	18	16	3	2	21	3	8月16日
1	極値	18.2	19.6	20.9	26.1	23.0	31.8	34.4	36.8	34.3	29.8	24.7	20.8	36.8
	起年	1967	1977	1986	2002	2011	2011	2002	1996	1958	1917	1990	1829	1996
	日	27	26	31	2	10	24	11	15	7	1	5	17	8月13日
2	極値	-9.3	-10.7	-8.5	-3.8	-0.5	4.8	9.6	11.6	7.2	0.8	-3.3	-7.1	-10.7
	起年	1940	1952	1934	1916	1953	1921	1976	1910	1913	1918	1921	1821	1952
	日	11	5	6	7	3	4	2	19	24	26	27	26	2月5日
3	極値	-9.3	-8.8	-6.9	-3.7	-0.4	5.0	11.1	11.7	7.5	1.1	-3.2	-6.7	-9.3
	起年	1927	1962	1934	1911	1945	1917	1926	1917	1916	1915	1988	1867	1940
	日	24	20	30	2	6	7	9	27	30	30	27	31	1月11日
備考	極値	-9.2	-8.8	-6.9	-3.3	0.3	6.0	11.3	12.7	7.8	1.4	-3.2	-6.5	-9.3
	起年	1967	1933	1934	1916	1957	1915	1946	1917	1962	1986	1921	1882	1927
	日	17	26	7	6	4	3	26	29	28	24	28	26	1月24日

注) 小名浜観測所に2008年（平成20年）10月1日に無人化され、小名浜特別地域気象観測所となった。

・①（新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

（記載なし）

(気象庁資料による)
統計期間：1950年～2012年
(%)

第5.2-38表 日最小相対湿度の順位（水戸地方気象台）

順位	月	順位												年
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1	極値	14	13	11	12	13	21	32	27	26	22	18	17	11
	起年	2004	1968	2004	1997	2011	2004	2001	2004	1965	1982	2010	2005	2004
2	極値	22	21	7	12	15	15	16	20	30	25	9	18	3月7日
	起年	1969	2012	1999	2000	2008	2004	1997	1990	2000	1997	2006	1999	1999
3	極値	18	2	6	1	6	4	5	14	3	27	7	20	3月6日
	起年	2003	2006	2005	2011	2005	2002	1992	2002	1992	1997	2008	1973	1997
	日	29	14	13	13	3	9	10	21	27	26	19	22	4月12日

・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

（記載なし）

(気象庁資料による)
統計期間：1950年～2012年
(%)

第5.2-39表 日最小相対湿度の順位（銚子地方気象台）

順位	月		年												
	値	起日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
1	16	1998	16	16	16	18	19	22	35	33	28	26	19	16	16
2	17	1963	17	17	18	18	20	26	35	36	31	27	21	17	16
3	20	1963	20	22	14	2	25	1	10	24	3	25	19	22	3月14日
	25	1963	25	2	20	1	20	4	27	21	17	20	19	21	1月20日
	17	1966	17	17	18	20	21	26	39	39	33	27	23	19	16
	24	1963	24	6	19	3	13	10	2000	2004	1957	1969	1979	2010	1991
									9	20	19	28	14	27	2月22日

・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

(気象庁資料による)
統計期間：1950年～2012年
(%)

第5.2-40表 日最小相対湿度の順位 (小名浜特別地域気象観測所)

順位	月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	極値	起年	17	13	12	8	15	20	32	27	26	22	20	16	8
1	2003	2004	2004	2004	2004	2008	1980	2007	2005	2002	1979	1988	2010	2005	2008
	日	日	7	7	7	22	11	16	19	21	19	23	29	18	4月22日
2	2002	2002	2002	2002	2002	2002	2006	2001	1992	2004	2003	1980	1995	1999	2004
	日	日	24	18	18	2	12	1	10	20	14	31	18	20	3月7日
3	1963	2012	2012	2002	2002	1970	2008	1972	1982	2002	2001	2011	2008	2010	2002
	日	日	2	11	11	8	6	10	14	20	22	8	21	27	4月2日

注) 小名浜観測所は2008年(平成20年)10月1日に無人化され、小名浜特別地域気象観測所となった。

・①(新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記(2012年までのデータに更新))

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

(気象庁資料による)
統計期間：1897年～2012年
(mm)

第5.2-41表 日降水量の順位 (水戸地方気象台)

順位	月		年												
	極値	起年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
1	極値	起年	83.0	120.2	92.6	115.5	136.9	276.6	144.6	244.0	202.0	176.6	168.5	141.0	276.6
	日	日	2005	1922	1907	1971	1929	1938	1899	1986	1996	1952	1970	2006	1938
2	極値	起年	74.5	90.2	81.0	79.0	122.0	225.5	132.9	167.0	200.0	163.9	103.0	83.0	244.0
	日	日	2002	1919	1969	1999	1977	1966	1941	1971	1991	1922	2009	1968	1986
3	極値	起年	58.0	72.5	76.5	74.3	110.0	188.8	126.9	159.5	196.5	158.5	102.1	76.7	225.5
	日	日	1972	1985	1988	1920	2012	1961	1951	1994	1977	1981	1930	1901	1966
			12	9	22	14	29	27	2	21	19	22	20	26	6月28日

・①（新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

第5.2-42表 日降水量の順位 (跳子地方気象台)

(気象庁資料による)
統計期間：1887年～2012年
(mm)

順位	月	年												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1	極値	205.0	113.7	117.8	107.5	138.7	211.4	151.7	311.6	228.0	238.8	134.7	215.5	311.6
	起年	2005	1937	1891	2008	1893	1938	1936	1947	1995	1922	1954	1972	1947
2	極値	103.8	101.3	113.0	85.0	102.3	178.0	140.0	240.0	206.0	208.0	105.6	127.5	240.0
	起年	1898	1898	1994	2009	1962	1958	1935	1921	1996	1992	1932	2002	1921
3	極値	25	22	23	25	23	18	7	3	22	20	14	4	8月3日
	起年	1943	1994	1977	1999	1921	1948	2007	1960	1925	1903	1959	2006	1922
	日	23	21	30	24	7	20	14	20	30	2	7	26	10月18日

・①(新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記(2012年までのデータに更新))

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

第5.2-43表 日降水量の順位（小名浜特別地域気象観測所）

(気象庁資料による)
統計期間：1910年～2012年

月 順位		(mm)												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
1	極値	88.0	107.1	89.5	178.5	225.7	227.2	158.0	225.0	209.5	196.7	192.5	95.0	227.2
	起年	2002	1937	1969	2010	1929	1966	2011	1971	1977	1929	1970	1980	1966
2	極値	71.5	89.0	83.7	125.5	151.5	185.6	150.0	194.5	189.0	195.8	95.0	86.5	225.7
	起年	2006	1985	1937	2008	1979	1938	2007	1986	1996	1919	1975	1925	1929
3	極値	68.3	78.9	83.1	118.0	149.0	161.3	141.9	156.0	157.5	186.0	92.5	80.0	225.0
	起年	1913	1922	1966	1971	1977	1938	1941	1999	1991	2006	2009	2004	1971
	日	22	17	16	29	15	30	22	14	19	6	11	5	8月31日

注) 小名浜調整所は2008年(平成20年)10月1日に無人化され、小名浜特別地域気象観測所となった。

・①(新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記(2012年までのデータに更新))

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

(気象庁資料による)
統計期間：1906年～2012年
(mm)

第5.2-44表 1時間降水量の順位（水戸地方気象台）

順位	月		順位												
	極値	起日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
1	23.0	2002	41.0	32.7	29.0	56.0	60.0	77.8	63.5	81.7	54.0	30.0	28.5	81.7	1947
			1922	1907	2009	2012	1961	1959	1994	1947	1952	1973	1959	1947	
			21	16	23	15	29	27	7	21	15	8	10	3	9月15日
2	14.5	1972	18.2	19.5	26.5	45.5	51.0	58.6	54.5	57.0	48.0	27.8	24.0	77.8	1959
			1919	1980	2000	1997	1961	1930	1986	2000	1999	1930	2006	1959	
			12	22	30	24	25	25	4	24	27	20	26	7月7日	
3	14.0	2002	14.9	17.5	26.0	45.1	50.5	56.0	53.4	50.5	43.5	27.0	21.5	63.5	1994
			1937	2004	1971	1927	1943	1913	1949	1976	1981	1990	2006	1994	
			27	2	31	29	15	18	24	10	22	4	27	8月21日	

・①（新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記(2012年までのデータに更新)）

既許可申請書

変更（案）

備考

（記載なし）

第5.2-45表 1時間降水量の順位（銚子地方気象台）
（気象庁資料による）
統計期間：1937年～2012年
(mm)

順位	月		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
	極値	起日	値	値	値	値	値	値	値	値	値	値	値	値	値
1	59.5	2005	41.0	20.0	35.5	42.0	53.0	64.8	64.8	140.0	61.0	111.6	51.5	84.0	140.0
	2005	1975	1975	1998	2011	1969	1912	1935	1935	1947	1971	1957	1977	1972	1947
	16	20	21	20	19	25	8	7	7	28	8	6	17	24	8月28日
2	47.5	1943	37.5	19.0	29.5	41.0	49.0	64.5	64.5	123.3	56.5	62.5	50.0	73.0	123.3
	1943	1986	1986	1998	1985	1951	2002	2007	2007	1921	2006	1892	1991	2002	1921
	23	21	19	21	23	23	15	14	14	3	27	20	8	4	8月3日
3	36.5	1974	30.5	19.0	28.0	39.0	47.2	55.5	55.5	52.0	56.0	58.5	44.0	33.5	111.6
	1974	1989	1989	1990	1968	1997	1958	1998	1998	2009	2000	1946	1990	2009	1957
	22	19	7	19	30	24	17	23	23	10	24	23	9	5	10月6日

・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

(気象庁資料による)
統計期間：1940年～2012年
(mm)

第5.2-46表 1時間降水量の順位 (小名浜特別地域気象観測所)

順位	月		年											
	極値	起日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	37.5	2002	31.6	28.5	50.5	44.0	44.0	49.2	69.5	47.5	48.5	34.5	21.9	69.5
		21	2	26	30	28	19	13	22	10	27	18	3	8月22日
2	18.0	1982	26.0	26.0	50.5	37.8	38.6	47.2	61.8	45.0	38.2	32.4	20.5	61.8
		5	1	1	29	29	24	2	30	7	30	7	5	8月30日
3	15.5	2006	23.5	25.5	27.5	34.5	32.2	46.5	58.0	43.0	38.0	31.9	20.0	58.0
		14	6	1	7	24	18	25	23	26	11	3	5	8月23日

注) 小名浜観測所は2008年(平成20年)10月1日に無人化され、小名浜特別地域気象観測所となった。

・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書	変更（案）	備考																																																																																																																																																																								
<p>(記載なし)</p>	<div data-bbox="1057 229 1774 708" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>第5.2-47表 積雪深さの月最大値の順位（水戸地方気象台）</p> <p style="text-align: right;">（気象庁資料による） 統計期間：1897年～2012年 (cm)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th colspan="2" rowspan="2">順位 \ 月</th> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>11</th> <th>12</th> <th>年</th> </tr> <tr> <th>極値</th> <th>23</th> <th>32</th> <th>27</th> <th>11</th> <th>—</th> <th>14</th> <th>32</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">1</td> <td>起年</td> <td>1909</td> <td>1945</td> <td>1933</td> <td>1914</td> <td></td> <td>2002</td> <td>1945</td> </tr> <tr> <td>日</td> <td>10</td> <td>26</td> <td>11</td> <td>5</td> <td></td> <td>9</td> <td>2月26日</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">2</td> <td>極値</td> <td>21</td> <td>27</td> <td>21</td> <td>8</td> <td>—</td> <td>10</td> <td>27</td> </tr> <tr> <td>起年</td> <td>1897</td> <td>1990</td> <td>1915</td> <td>1925</td> <td></td> <td>1912</td> <td>1990</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">3</td> <td>日</td> <td>14</td> <td>1</td> <td>13</td> <td>5</td> <td></td> <td>29</td> <td>2月1日</td> </tr> <tr> <td>極値</td> <td>17</td> <td>26</td> <td>19</td> <td>7</td> <td>—</td> <td>8</td> <td>27</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">起年</td> <td>2006</td> <td>1963</td> <td>1934</td> <td>1935</td> <td></td> <td>1986</td> <td>1933</td> </tr> <tr> <td>日</td> <td>21</td> <td>3</td> <td>29</td> <td>1</td> <td></td> <td>28</td> <td>3月11日</td> </tr> </tbody> </table> </div> <div data-bbox="1057 767 1774 1262" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>第5.2-48表 積雪深さの月最大値の順位（銚子地方気象台）</p> <p style="text-align: right;">（気象庁資料による） 統計期間：1887年～2012年 (cm)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th colspan="2" rowspan="2">順位 \ 月</th> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>11</th> <th>12</th> <th>年</th> </tr> <tr> <th>極値</th> <th>12</th> <th>17</th> <th>17</th> <th>—</th> <th>—</th> <th>8</th> <th>17</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">1</td> <td>起年</td> <td>1945</td> <td>1893</td> <td>1936</td> <td></td> <td></td> <td>1966</td> <td>1936</td> </tr> <tr> <td>日</td> <td>24</td> <td>12</td> <td>2</td> <td></td> <td></td> <td>27</td> <td>3月2日</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">2</td> <td>極値</td> <td>10</td> <td>15</td> <td>6</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>1</td> <td>17</td> </tr> <tr> <td>起年</td> <td>1922</td> <td>1945</td> <td>1910</td> <td></td> <td></td> <td>1931</td> <td>1893</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">3</td> <td>日</td> <td>15</td> <td>26</td> <td>12</td> <td></td> <td></td> <td>13</td> <td>2月12日</td> </tr> <tr> <td>極値</td> <td>5</td> <td>14</td> <td>5</td> <td>—</td> <td>—</td> <td>0</td> <td>15</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">起年</td> <td>1970</td> <td>1913</td> <td>1898</td> <td></td> <td></td> <td>1985</td> <td>1945</td> </tr> <tr> <td>日</td> <td>17</td> <td>11</td> <td>6</td> <td></td> <td></td> <td>16</td> <td>2月26日</td> </tr> </tbody> </table> </div>	順位 \ 月		1	2	3	4	11	12	年	極値	23	32	27	11	—	14	32	1	起年	1909	1945	1933	1914		2002	1945	日	10	26	11	5		9	2月26日	2	極値	21	27	21	8	—	10	27	起年	1897	1990	1915	1925		1912	1990	3	日	14	1	13	5		29	2月1日	極値	17	26	19	7	—	8	27	起年	2006	1963	1934	1935		1986	1933	日	21	3	29	1		28	3月11日	順位 \ 月		1	2	3	4	11	12	年	極値	12	17	17	—	—	8	17	1	起年	1945	1893	1936			1966	1936	日	24	12	2			27	3月2日	2	極値	10	15	6	—	—	1	17	起年	1922	1945	1910			1931	1893	3	日	15	26	12			13	2月12日	極値	5	14	5	—	—	0	15	起年	1970	1913	1898			1985	1945	日	17	11	6			16	2月26日	<p>・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））</p>
順位 \ 月				1	2	3	4	11	12	年																																																																																																																																																																
		極値	23	32	27	11	—	14	32																																																																																																																																																																	
1	起年	1909	1945	1933	1914		2002	1945																																																																																																																																																																		
	日	10	26	11	5		9	2月26日																																																																																																																																																																		
2	極値	21	27	21	8	—	10	27																																																																																																																																																																		
	起年	1897	1990	1915	1925		1912	1990																																																																																																																																																																		
3	日	14	1	13	5		29	2月1日																																																																																																																																																																		
	極値	17	26	19	7	—	8	27																																																																																																																																																																		
起年	2006	1963	1934	1935		1986	1933																																																																																																																																																																			
	日	21	3	29	1		28	3月11日																																																																																																																																																																		
順位 \ 月		1	2	3	4	11	12	年																																																																																																																																																																		
		極値	12	17	17	—	—	8	17																																																																																																																																																																	
1	起年	1945	1893	1936			1966	1936																																																																																																																																																																		
	日	24	12	2			27	3月2日																																																																																																																																																																		
2	極値	10	15	6	—	—	1	17																																																																																																																																																																		
	起年	1922	1945	1910			1931	1893																																																																																																																																																																		
3	日	15	26	12			13	2月12日																																																																																																																																																																		
	極値	5	14	5	—	—	0	15																																																																																																																																																																		
起年	1970	1913	1898			1985	1945																																																																																																																																																																			
	日	17	11	6			16	2月26日																																																																																																																																																																		

既許可申請書	変更（案）	備考																																																																			
(記載なし)	<p>第5.2-49表 積雪深さの月最大値の順位（小名浜特別地域気象観測所）</p> <p style="text-align: right;">（気象庁資料による） 統計期間：1916年～2012年 (cm)</p> <table border="1" data-bbox="1099 379 1767 687"> <thead> <tr> <th colspan="2" rowspan="2">順位</th> <th colspan="7">月</th> </tr> <tr> <th>1</th> <th>2</th> <th>3</th> <th>4</th> <th>11</th> <th>12</th> <th>年</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">1</td> <td>極値</td> <td>17</td> <td>28</td> <td>24</td> <td>10</td> <td>—</td> <td>15</td> <td>28</td> </tr> <tr> <td>起年 日</td> <td>1998 9</td> <td>1945 26</td> <td>1935 22</td> <td>1940 6</td> <td></td> <td>2002 9</td> <td>1945 2月26日</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">2</td> <td>極値</td> <td>15</td> <td>27</td> <td>23</td> <td>6</td> <td>—</td> <td>8</td> <td>27</td> </tr> <tr> <td>起年 日</td> <td>1961 10</td> <td>1942 25</td> <td>1933 11</td> <td>1923 6</td> <td></td> <td>1936 22</td> <td>1942 2月25日</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">3</td> <td>極値</td> <td>13</td> <td>21</td> <td>17</td> <td>3</td> <td>—</td> <td>6</td> <td>24</td> </tr> <tr> <td>起年 日</td> <td>1994 29</td> <td>1994 12</td> <td>1952 8</td> <td>1978 3</td> <td></td> <td>1928 19</td> <td>1935 3月22日</td> </tr> </tbody> </table> <p>注）小名浜観候所は2008年（平成20年）10月1日に無人化され、小名浜特別地域気象観測所となった。</p>	順位		月							1	2	3	4	11	12	年	1	極値	17	28	24	10	—	15	28	起年 日	1998 9	1945 26	1935 22	1940 6		2002 9	1945 2月26日	2	極値	15	27	23	6	—	8	27	起年 日	1961 10	1942 25	1933 11	1923 6		1936 22	1942 2月25日	3	極値	13	21	17	3	—	6	24	起年 日	1994 29	1994 12	1952 8	1978 3		1928 19	1935 3月22日	<p>・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））</p>
順位				月																																																																	
		1	2	3	4	11	12	年																																																													
1	極値	17	28	24	10	—	15	28																																																													
	起年 日	1998 9	1945 26	1935 22	1940 6		2002 9	1945 2月26日																																																													
2	極値	15	27	23	6	—	8	27																																																													
	起年 日	1961 10	1942 25	1933 11	1923 6		1936 22	1942 2月25日																																																													
3	極値	13	21	17	3	—	6	24																																																													
	起年 日	1994 29	1994 12	1952 8	1978 3		1928 19	1935 3月22日																																																													

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

(気象庁資料による)
統計期間：1937年～2012年
(m/s)

第5.2-50表 最大瞬間風速の順位 (水戸地方気象台)

月 順位	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		年	
	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	年	
1	27.6	NE	27.1	W	29.5	NE	28.3	SSW	30.6	NE	27.5	NE	29.5	E	44.2	NNE	36.6	NE	39.6	NNE	25.2	NE	29.1	SSW	44.2	NNE
	2002		1997		1986		1946		1965		1966		1944		1939		1958		1938		1938		1948		2004	1939
2	23.3	SSE	26.1	S	27.7	S	27.1	SSW	27.7	S	25.5	NE	28.0	S	31.6	NE	36.3	NNE	36.6	N	23.2	SE	26.7	N	39.6	NNE
	1970		1951		2002		1969		1999		1989		1941		1989		1996		1961		1990		1990		1980	1938
3	23.2	S	26.0	SW	27.0	SSW	27.0	SSW	25.6	SW	25.0	NE	25.5	S	27.6	ESE	35.8	SSW	32.8	S	23.1	S	26.3	N	36.6	N
	1950		1955		1955		1967		1961		1959		1958		1940		1964		1979		1941		1990		1961	1951
	31		20		18		4		29		11		23		25		25		19		28		12		10月10日	

・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記(2012年までのデータに更新)）

既許可申請書

変更（案）

備考

（記載なし）

(気象庁資料による)
統計期間：1937年～2012年
(m/s)

第5.2-51表 最大瞬間風速の順位（銚子地方気象台）

順位	月		年																																										
	極値	風向	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年																														
1	37.6	N	2001	42.8	NNE	1951	41.4	NNE	1986	35.3	NNE	1975	38.4	S	1965	34.4	S	1952	45.8	S	1985	40.5	NW	1939	51.9	NW	1996	52.2	S	2002	34.8	NNE	1954	41.0	SSW	2004	52.2	S	2012						
	27		15	23	22	27	24	24	1	5	22	1	28	5	10月1日																														
	35.1	NW	2001	37.8	NW	1994	36.4	N	1998	34.0	S	2012	33.9	NW	1996	33.5	S	1997	36.6	S	1941	39.6	S	2005	49.0	N	1971	47.4	N	1938	33.4	S	1974	39.3	NW	1955	51.9	NW	1996	33.4	S	2012			
2	33.5	N	2009	36.1	N	1968	34.9	S	2003	32.5	SSW	1944	31.9	S	1956	32.4	SSW	2012	36.3	W	2002	36.7	S	1940	46.9	NNE	1995	43.8	NE	1949	43.8	NE	1944	34.8	N	1972	49.0	N	1971	32.2	NE	1944	34.8	N	1971
	8		21	1	3	5	20	22	22	26	8	21	18	26	9月22日																														
	33.5	N	2009	36.1	N	1968	34.9	S	2003	32.5	SSW	1944	31.9	S	1956	32.4	SSW	2012	36.3	W	2002	36.7	S	1940	46.9	NNE	1995	43.8	NE	1949	43.8	NE	1944	34.8	N	1972	49.0	N	1971	32.2	NE	1944	34.8	N	1971
3	31		16	2	30	2	20	11	27	17	28	3	24	9月8日																															
	31		16	2	30	2	20	11	27	17	28	3	24	9月8日																															
	31		16	2	30	2	20	11	27	17	28	3	24	9月8日																															

・①（新規制基準の適合性に係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記（2012年までのデータに更新））

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

第5.2-52表 最大瞬間風速の順位（小名浜特別地域気象観測所）

（気象庁資料による）
統計期間：1940年～2012年
(m/s)

月 単位	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		年			
	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向	極 値	風 向		
1	29.3	N	33.5	RNW	31.1	NW	27.8	NW	26.5	WNW	26.4	N	27.5	SSE	31.0	S	35.4	ESE	48.1	SE	26.6	S	30.6	N	48.1	SE	2002	2002
	2009		1994		2003		1994		2007		1966		1968		1981		2007		2007		1990		1980		2002		10月1日	10月1日
2	28.8	NW	30.9	WNW	31.1	NNW	26.8	S	26.1	NW	24.3	SE	27.0	SSE	30.4	SE	33.0	N	37.2	S	25.8	WNW	29.7	NW	37.2	S	1979	1979
	2002		1999		1988		2012		1954		2012		1941		1989		1996		1979		2002		2005		2002		10月19日	10月19日
3	28.2	ESE	29.6	NW	31.1	NNW	26.8	NW	25.9	N	22.5	S	26.6	SE	27.1	SSE	32.4	SE	32.7	NNE	25.3	NW	28.5	NW	35.4	ESE	2007	2007
	1966		1985		1988		2005		2011		1969		1985		1985		1998		2006		1963		2005		2005		2007	9月7日

注) 小名浜潮差所は2008年(平成20年)10月1日に無人化され、小名浜特別地域気象観測所となった。

・①（新規制基準の適合性係る変更申請に関連する一般気象及び極値の追記(2012年までのデータに更新)）

既許可申請書	変更（案）	備 考																																																																																																			
(記載なし)	<p style="text-align: center;">第 5.2-53 表 気象データ（気温、風速及び湿度）及び森林火災件数</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="3" style="width: 5%;">観測所</th> <th colspan="5" style="text-align: center;">水戸地方気象台 気象観測データ^{注1)}</th> <th rowspan="3" style="width: 10%;">茨城県内の月別森林火災件数^{注2)}</th> </tr> <tr> <th rowspan="2" style="width: 10%;">月</th> <th rowspan="2" style="width: 10%;">最高気温 (°C)</th> <th rowspan="2" style="width: 10%;">最大風速 (m/s)</th> <th colspan="2" style="width: 20%;">最大風速記録時の風向</th> <th rowspan="2" style="width: 10%;">最低湿度 (%)</th> </tr> <tr> <th style="width: 10%;">第 1 位</th> <th style="width: 10%;">第 2 位</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>16.9</td><td>17.5</td><td>北東</td><td>北東</td><td>17</td><td>79</td></tr> <tr><td>2</td><td>24.3</td><td>17.5</td><td>北北東</td><td>北東</td><td>13</td><td>86</td></tr> <tr><td>3</td><td>25.9</td><td>14.3</td><td>北東</td><td>北北東, 南西</td><td>11</td><td>131</td></tr> <tr><td>4</td><td>29.3</td><td>15.1</td><td>北北東</td><td>北東</td><td>13</td><td>126</td></tr> <tr><td>5</td><td>30.8</td><td>13.5</td><td>北東</td><td>北北東</td><td>13</td><td>54</td></tr> <tr><td>6</td><td>33.5</td><td>14.2</td><td>北北東</td><td>北北東</td><td>21</td><td>10</td></tr> <tr><td>7</td><td>36.4</td><td>11.8</td><td>北北東</td><td>北北東</td><td>35</td><td>13</td></tr> <tr><td>8</td><td>37.0</td><td>12.9</td><td>北東</td><td>北北東</td><td>35</td><td>24</td></tr> <tr><td>9</td><td>36.1</td><td>13.9</td><td>北北東</td><td>南南西</td><td>29</td><td>23</td></tr> <tr><td>10</td><td>31.4</td><td>17.4</td><td>北北東</td><td>北北東</td><td>22</td><td>11</td></tr> <tr><td>11</td><td>24.5</td><td>11.8</td><td>北北東</td><td>北北東</td><td>18</td><td>4</td></tr> <tr><td>12</td><td>23.8</td><td>10.6</td><td>北東</td><td>西</td><td>17</td><td>33</td></tr> </tbody> </table> <p>注 1) 水戸地方気象台 観測記録 (2007 年～2016 年) より 注 2) 「消防防災年報」(茨城県 2006 年～2015 年) より</p>	観測所	水戸地方気象台 気象観測データ ^{注1)}					茨城県内の月別森林火災件数 ^{注2)}	月	最高気温 (°C)	最大風速 (m/s)	最大風速記録時の風向		最低湿度 (%)	第 1 位	第 2 位	1	16.9	17.5	北東	北東	17	79	2	24.3	17.5	北北東	北東	13	86	3	25.9	14.3	北東	北北東, 南西	11	131	4	29.3	15.1	北北東	北東	13	126	5	30.8	13.5	北東	北北東	13	54	6	33.5	14.2	北北東	北北東	21	10	7	36.4	11.8	北北東	北北東	35	13	8	37.0	12.9	北東	北北東	35	24	9	36.1	13.9	北北東	南南西	29	23	10	31.4	17.4	北北東	北北東	22	11	11	24.5	11.8	北北東	北北東	18	4	12	23.8	10.6	北東	西	17	33	・新規制基準の適合性に係る森林火災における記載の反映
	観測所		水戸地方気象台 気象観測データ ^{注1)}									茨城県内の月別森林火災件数 ^{注2)}																																																																																									
			月	最高気温 (°C)	最大風速 (m/s)	最大風速記録時の風向			最低湿度 (%)																																																																																												
		第 1 位				第 2 位																																																																																															
	1	16.9	17.5	北東	北東	17	79																																																																																														
	2	24.3	17.5	北北東	北東	13	86																																																																																														
	3	25.9	14.3	北東	北北東, 南西	11	131																																																																																														
	4	29.3	15.1	北北東	北東	13	126																																																																																														
	5	30.8	13.5	北東	北北東	13	54																																																																																														
	6	33.5	14.2	北北東	北北東	21	10																																																																																														
	7	36.4	11.8	北北東	北北東	35	13																																																																																														
	8	37.0	12.9	北東	北北東	35	24																																																																																														
	9	36.1	13.9	北北東	南南西	29	23																																																																																														
	10	31.4	17.4	北北東	北北東	22	11																																																																																														
	11	24.5	11.8	北北東	北北東	18	4																																																																																														
12	23.8	10.6	北東	西	17	33																																																																																															

既許可申請書	変更（案）	備 考																																																					
<p>(記載なし)</p>	<p style="text-align: center;">第 5.2-54 表 気象データ（卓越風向）</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">風 向</th> <th colspan="2">最多風向（時間単位）の出現率割合（%）^{注）}</th> </tr> <tr> <th>水戸地方気象台 気象観測データ</th> <th>発電所 気象観測データ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>北</td><td>15</td><td>3</td></tr> <tr><td>北北西</td><td>17</td><td>3</td></tr> <tr><td>北西</td><td>5</td><td>9</td></tr> <tr><td>西北西</td><td>2</td><td>23</td></tr> <tr><td>西</td><td>3</td><td>7</td></tr> <tr><td>西南西</td><td>3</td><td>2</td></tr> <tr><td>南西</td><td>4</td><td>1</td></tr> <tr><td>南南西</td><td>6</td><td>3</td></tr> <tr><td>南</td><td>3</td><td>4</td></tr> <tr><td>南南東</td><td>1</td><td>5</td></tr> <tr><td>南東</td><td>3</td><td>4</td></tr> <tr><td>東南東</td><td>4</td><td>3</td></tr> <tr><td>東</td><td>9</td><td>3</td></tr> <tr><td>東北東</td><td>9</td><td>6</td></tr> <tr><td>北東</td><td>7</td><td>14</td></tr> <tr><td>北北東</td><td>7</td><td>9</td></tr> </tbody> </table> <p>注）観測記録（2007年～2016年）より</p>	風 向	最多風向（時間単位）の出現率割合（%） ^{注）}		水戸地方気象台 気象観測データ	発電所 気象観測データ	北	15	3	北北西	17	3	北西	5	9	西北西	2	23	西	3	7	西南西	3	2	南西	4	1	南南西	6	3	南	3	4	南南東	1	5	南東	3	4	東南東	4	3	東	9	3	東北東	9	6	北東	7	14	北北東	7	9	<p>・・新規制基準の適合性に 係る森林火災における 記載の反映</p>
			風 向	最多風向（時間単位）の出現率割合（%） ^{注）}																																																			
		水戸地方気象台 気象観測データ		発電所 気象観測データ																																																			
		北	15	3																																																			
		北北西	17	3																																																			
		北西	5	9																																																			
		西北西	2	23																																																			
		西	3	7																																																			
		西南西	3	2																																																			
		南西	4	1																																																			
		南南西	6	3																																																			
		南	3	4																																																			
		南南東	1	5																																																			
		南東	3	4																																																			
		東南東	4	3																																																			
東	9	3																																																					
東北東	9	6																																																					
北東	7	14																																																					
北北東	7	9																																																					

第5.3-1表 観測事項一覧表

観測項目	観測位置		気象測器	観測期間	備考
	場所	地上高 (m)			
風向, 風速	A 点	10	超音波風向風速計	昭和52年 2月～継続	敷地を代表する地上風 東海第二発電所の排気筒高さ付近を代表する風向 風速 東海第二発電所の排気筒高さ付近を代表する 風向風速
風向, 風速	B 点	63	超音波風向風速計	昭和52年12月～継続	
風向, 風速	C 点	132	超音波風向風速計	昭和52年 2月～継続	
日射量	A 点	1.8	電気式日射計	昭和52年 1月～継続	
放射収支量	A 点	1.7	風防型放射収支計	昭和52年 1月～継続	
気温差	C 点	54	白金抵抗温度差計	昭和52年 5月～継続	
気温差	C 点	102	白金抵抗温度差計	昭和52年 5月～継続	
気温差	C 点	131	白金抵抗温度差計	昭和52年 5月～継続	
気温	C 点	9	白金抵抗温度計	昭和52年 5月～継続	
気温	C 点	1.5	白金抵抗温度計	昭和52年 5月～継続	
降水量	A 点	1	転倒まが型雨量計	昭和52年 7月～継続	

(注) 観測場所のA～C点については、第5.3.1図および第5.3.2図を参照

既許可申請書

変更 (案)

備考

第5.3-1表 観測項目一覧表

観測項目	観測位置		気象測器 又は観測方法	観測期間
	場所	地上高 (m)		
風向, 風速	敷地内D点	10	超音波風向風速計	2016年11月～継続
風向, 風速	敷地内D点	81	ドップラソナーダ	2016年11月～継続
		140		
風向, 風速	敷地内A点	10	超音波風向風速計	1977年2月～2016年10月
風向, 風速	敷地内A点	81	ドップラソナーダ	1996年10月～2016年10月
		140		
風向, 風速	敷地内B点	63	超音波風向風速計	1977年12月～1996年9月
風向, 風速	敷地内C点	132	超音波風向風速計	1977年2月～1996年9月
風向, 風速	敷地内E点	10	超音波風向風速計	移設予定地点
日射量	敷地内D点	1.8	電気式日射計	2016年11月～継続
放射収支量	敷地内D点	1.7	風防型放射収支計	2016年11月～継続
気温	敷地内D点	1.5	白金抵抗温度計	2016年11月～継続
日射量	敷地内A点	1.8	電気式日射計	1977年1月～2016年10月
放射収支量	敷地内A点	1.7	風防型放射収支計	1977年1月～2016年10月
気温	敷地内A点	1.5	白金抵抗温度計	1995年2月～2016年10月
気温	敷地内C点	1.5	白金抵抗温度計	1977年5月～1995年1月
降水量	敷地内D点	1.0	転倒まが型雨量計	2016年11月～継続
降水量	敷地内A点	1.0	転倒まが型雨量計	1977年7月～2016年10月

(注) 観測場所については、第5.3-1図を参照。

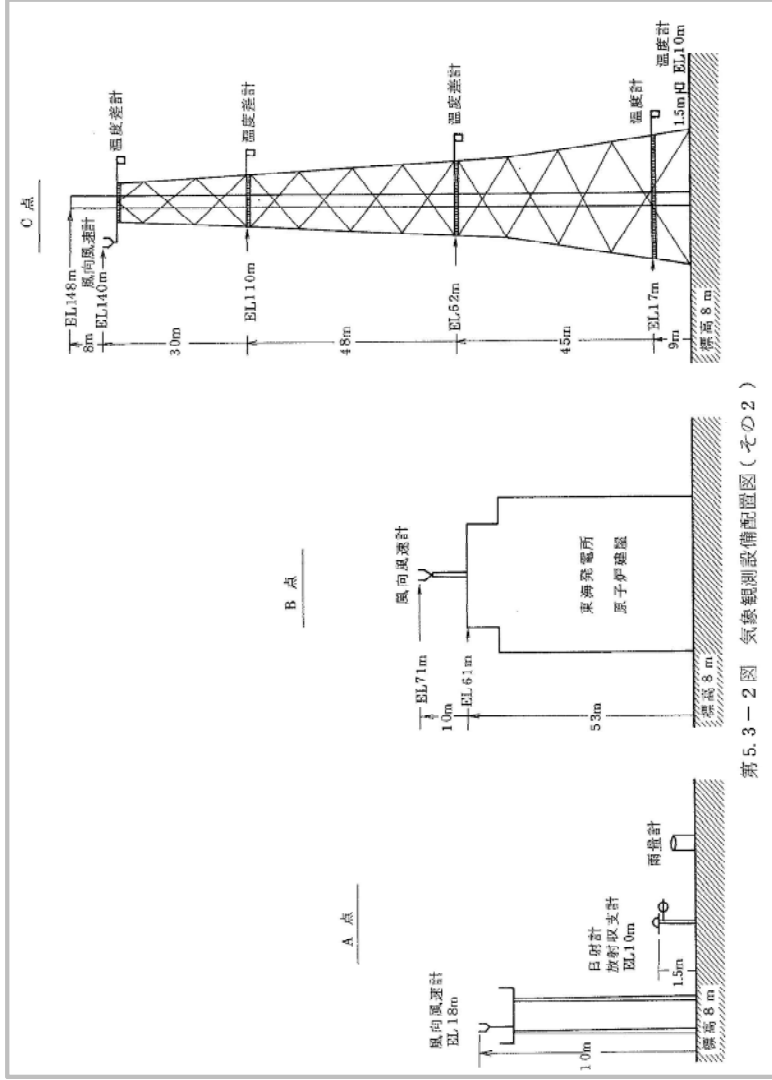
- ② (気温差計の撤去 (H6年に気象指針の観測項目から削除及び防潮堤設置に伴う気象観測設備の移設 (A点⇒D点) しているため2地点を記載)
- ③ (超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラソナーダへ変更)

既許可申請書	変更（案）	備 考
		<ul style="list-style-type: none"> ・②（気温差計の撤去（H6年に気象指針の観測項目から削除及び防潮堤設置に伴う気象観測設備の移設（A点⇒D点）しているため2地点を記載） ・防潮堤の反映

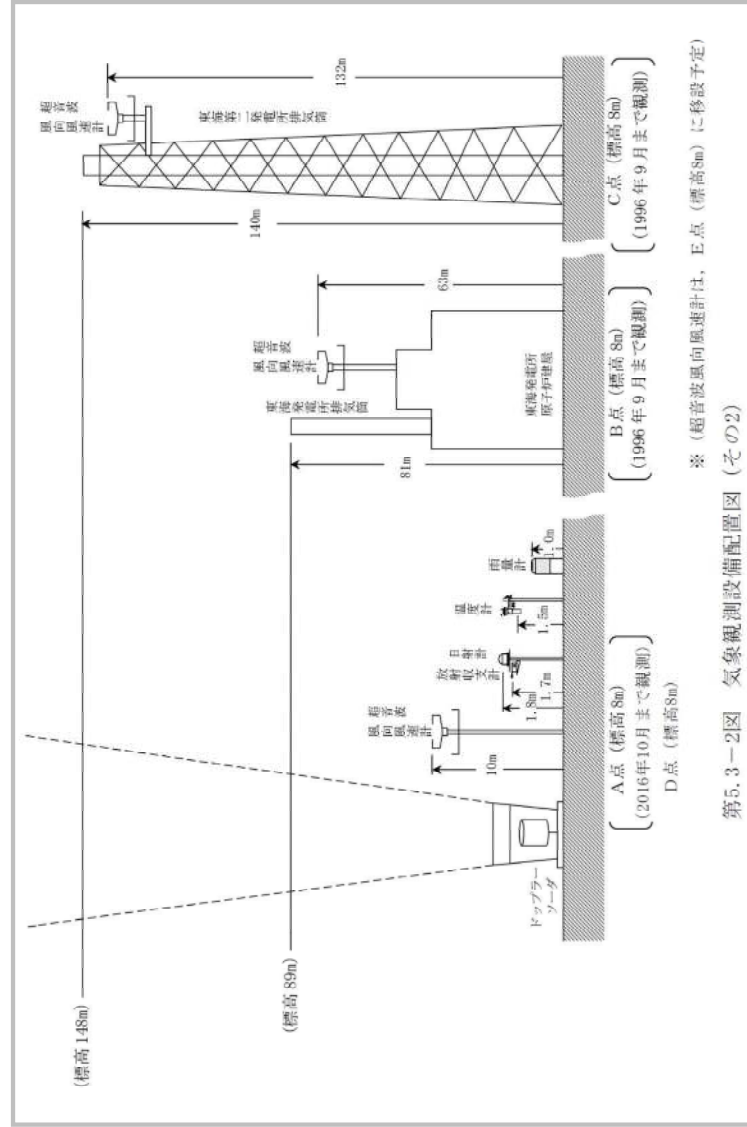
既許可申請書

変更 (案)

備考



第 5.3-2 図 気象観測設備配置図 (その 2)



第 5.3-2 図 気象観測設備配置図 (その 2)

※ (超音波風向風速計は, E 点 (標高 8m) に移設予定)

- ② (気温差計の撤去 (H6 年に気象指針の観測項目から削除及び防潮堤設置に伴う気象観測設備の移設 (A 点⇒D 点) しているため 2 地点を記載)
- ③ (超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラソナーへ変更)

既許可申請書

変更 (案)

備考

第 5.4 - 1 表(1) 大気安定度分類表

風速 (U) m/s	日 射 量 (T) cal/cm ² ·h				放射収支量 (Q) cal/cm ² ·h		
	T ≥ 50	50 > T ≥ 25	25 > T ≥ 12.5	12.5 > T	Q > -1.8	$-\frac{1.8 \geq Q}{-3.6}$	-3.6 ≥ Q
U < 2	A	A - B	B	D	D	-	-
2 ≤ U < 3	A - B	B	C	D	D	E	F
3 ≤ U < 4	B	B - C	C	D	D	D	E
4 ≤ U < 6	C	C - D	D	D	D	D	D
6 ≤ U	C	D	D	D	D	D	D

(注) 昭和 56 年 10 月までは、(1)表を用いる。

第 5.4 - 1 表(2) 大気安定度分類表

風速 (U) m/s	日 射 量 (T) kW/m ²				放射収支量 (Q) kW/m ²		
	T ≥ 0.60	$0.60 > T \geq 0.30$	$0.30 > T \geq 0.15$	0.15 > T	$Q \geq -0.020$	$-\frac{0.020 > Q}{\geq -0.040}$	$-\frac{0.040 > Q}{> Q}$
U < 2	A	A - B	B	D	D	-	-
2 ≤ U < 3	A - B	B	C	D	D	E	F
3 ≤ U < 4	B	B - C	C	D	D	D	E
4 ≤ U < 6	C	C - D	D	D	D	D	D
6 ≤ U	C	D	D	D	D	D	D

(注) 昭和 56 年 11 月以降は、(2)表を用いる。

(削 除)

・③ (先行プラントの記載に反映)

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

第5.4-1表 同一風向の継続時間別出現回数（標高18m，地上高10m）

風向	観測場所：敷地内A点（標高18m，地上高10m）(回)										備考	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10h以上		
N	124	19	5	1	0	0	1	0	0	0	0	
NNE	213	64	47	15	10	9	4	4	4	10	10×2 11×4 13 15×2 17	(6.0)
NE	216	85	62	30	20	15	13	3	8	20	10×4 11×3 12×4 13×2 14×2 15×2 16 17 18	(6.6)
ENE	195	46	16	4	2	4	0	0	0	1	10	(4.4)
E	116	24	9	5	2	1	0	0	0	0	0	
ESE	150	42	12	5	3	0	0	0	0	0	0	
SE	132	64	22	23	5	5	4	0	0	0	0	
SSE	120	38	19	14	4	6	4	1	0	0	0	
S	92	29	7	4	3	0	0	0	0	0	0	
SSW	81	16	3	5	3	1	0	0	2	2	2 12 13	(3.1)
SW	82	8	1	1	0	0	0	0	0	0	0	
WSW	111	27	8	3	0	1	0	0	0	0	0	
W	351	117	47	17	4	7	2	2	0	0	0	
WNW	377	165	92	44	30	33	12	7	10	15	10×5 11×3 12×2 13×3 16 17	(2.3)
NW	305	70	24	14	5	3	2	1	0	1	11	(3.9)
NNW	149	22	7	2	2	0	0	0	0	0	0	
CALM	98	17	4	1	0	0	0	0	0	0	0	

注) () は10時間以上継続したときの平均風速(m/s) 次測率: 0.3%

・①, ③ (先行プラントの記載を反映)

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

第5.4-2表 同一風向の継続時間別出現回数（標高89m，地上高81m）

観測場所：敷地内A点（標高89m，地上高81m）(回)

風向	継続時間										備考	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10h以上		
N	195	44	10	2	2	0	0	0	0	0	0	
NNE	220	76	19	10	10	4	1	3	0	0		
NE	244	113	53	35	16	17	12	8	6	26	10×3 11×3 12×5 13×2 15×3 16 17	(9.9)
ENE	235	88	40	15	17	2	3	2	2	3	11 12 15	(6.6)
E	163	43	15	7	1	3	1	2	1	0		
ESE	131	34	10	2	1	0	0	0	0	0		
SE	109	38	6	5	2	1	0	0	0	0		
SSE	118	35	18	14	7	2	1	0	1	0		
S	118	34	20	11	6	6	4	3	2	0		
SSW	110	21	13	1	2	1	0	0	0	0		
SW	107	25	11	3	3	1	1	0	0	0		
WSW	145	30	12	2	2	0	1	0	0	0		
W	208	42	16	8	1	1	2	0	0	0		
WNW	307	119	36	18	9	3	0	1	0	0		
NW	320	118	54	34	26	16	5	6	6	10	10×3 11×4 13 14 18	(5.6)
NNW	290	70	21	7	1	0	0	0	0	0		
CALM	48	6	0	0	0	0	0	0	0	0		

注) () は10時間以上継続したときの平均風速(m/s)

欠測率：0.5%

・①, ③ (先行プラントの記載を反映)

既許可申請書

変更 (案)

備考

(記載なし)

第5.4-3表 同一風向の継続時間別出現回数 (標高148m, 地上高140m)

観測場所: 敷地内A点 (標高148m, 地上高140m) (回)

風向	継続時間 (h)										備考
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10h以上	
N	177	35	10	3	1	2	0	0	0	0	10h以上の継続時間 (h)
NNE	245	68	21	11	4	5	1	3	1	0	
NE	272	112	57	35	21	16	9	4	7	26	10×2 11×5 12 13×2 14×3 15×3 16 (11.3)
E	296	86	46	13	11	10	4	1	0	4	10×3 13 (8.9)
ESE	182	44	29	15	4	1	3	1	0	1	11 (5.1)
SE	127	29	11	6	4	1	0	0	0	0	
SSE	130	37	13	3	5	0	1	0	0	0	
S	127	40	24	5	9	3	4	3	0	2	10×2 (8.6)
SSW	138	34	13	5	0	1	0	0	0	0	
SW	124	30	21	2	3	4	1	1	0	1	10 (4.7)
WSW	167	50	13	1	5	2	2	1	0	0	
W	218	64	16	4	5	1	0	0	0	0	
WNW	252	87	32	16	9	1	1	0	1	1	10 (6.5)
NW	267	82	47	17	12	4	5	2	2	3	10 13 14 (9.9)
NNW	227	63	33	9	5	3	3	2	0	0	
CALM	78	4	2	1	0	0	0	0	0	0	

注) () は10時間以上継続したときの平均風速(m/s) 欠測率: 0.9%

・①, ③ (先行プラントの記載を反映)

既許可申請書

変更（案）

備考

(記載なし)

第5.4—4表 大気安定度の継続時間別出現回数（標高18m，地上高10m）

観測場所：敷地内A点（標高18m，地上高10m）(回)

継続時間 大気安定度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10h以上	合計
A	74 (71.8)	18 (17.5)	7 (6.8)	3 (2.9)	1 (1.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	103 (100.0)
B	161 (33.8)	114 (23.9)	79 (16.6)	49 (10.3)	30 (6.3)	23 (4.8)	12 (2.5)	2 (0.4)	3 (0.6)	3 (0.6)	476 (100.0)
C	314 (69.2)	78 (17.2)	35 (7.7)	12 (2.6)	12 (2.6)	2 (0.4)	0 (0.0)	1 (0.2)	0 (0.0)	0 (0.0)	454 (100.0)
D	341 (38.8)	219 (24.9)	73 (8.3)	50 (5.7)	34 (3.9)	30 (3.4)	16 (1.8)	15 (1.7)	10 (1.1)	90 (10.3)	878 (100.0)
E	268 (72.2)	70 (18.9)	18 (4.9)	9 (2.4)	2 (0.5)	3 (0.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	371 (100.0)
F	254 (51.9)	94 (19.2)	60 (12.3)	28 (5.7)	17 (3.5)	14 (2.9)	12 (2.5)	3 (0.6)	1 (0.2)	6 (1.2)	489 (100.0)
G	248 (47.7)	111 (21.3)	63 (12.1)	31 (6.0)	20 (3.8)	14 (2.7)	15 (2.9)	5 (1.0)	4 (0.8)	9 (1.7)	520 (100.0)
合計	1660 (50.4)	704 (21.4)	335 (10.2)	182 (5.5)	116 (3.5)	86 (2.6)	55 (1.7)	26 (0.8)	19 (0.6)	108 (3.3)	3291 (100.0)
A・B・C	109 (25.2)	44 (10.2)	30 (6.9)	28 (6.5)	25 (5.8)	36 (8.3)	36 (8.3)	49 (11.3)	34 (7.9)	41 (9.5)	432 (100.0)
E・F・G	89 (19.9)	59 (13.2)	35 (7.8)	22 (4.9)	25 (5.6)	15 (3.4)	15 (3.4)	18 (4.0)	26 (5.8)	143 (32.0)	447 (100.0)

注) () 内の数値は出現頻度(%)

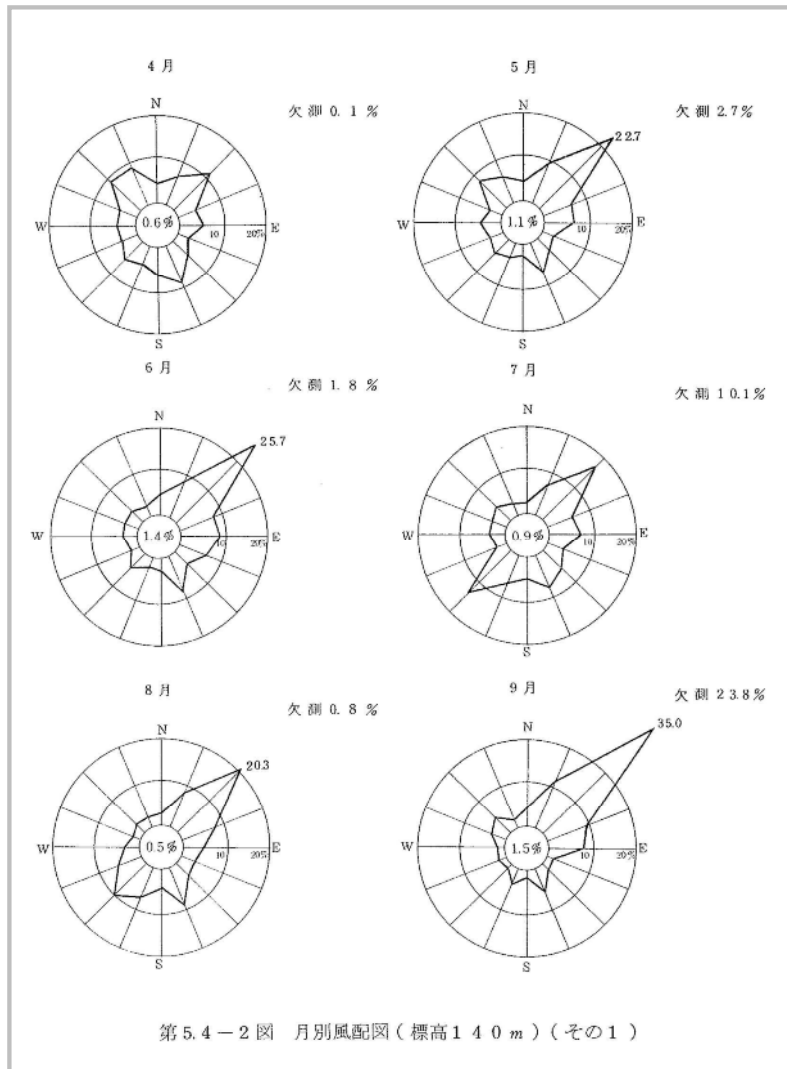
大潤率：0.3%

・①、③（先行プラントの記載を反映）

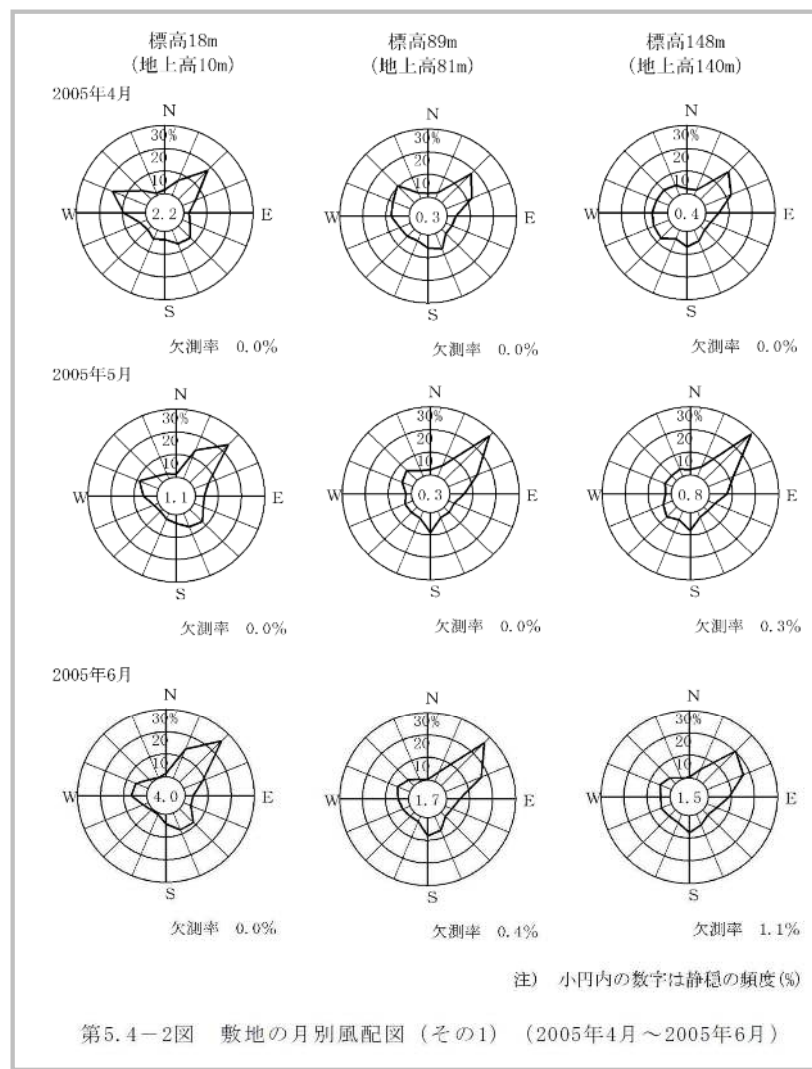
既許可申請書	変更 (案)	備考
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="212 231 571 790"> <p>観測日数 : 3 5 5 日 (観測5 年 4 月 ~ 2006 年 3 月) 観測時間 : 5 4 分 2 秒 観測回数 : 5 4 回 (0.5%) 欠測回数 : 2 8 9 回 (3.3%) 平均風速 : 3.9 m/s</p> <p>第 5.4-7 図 年間風速階別風配図 (標高 1.8 m)</p> </div> <div data-bbox="593 231 952 790"> <p>観測日数 : 3 5 5 日 (観測5 年 4 月 ~ 2006 年 3 月) 観測時間 : 5 4 分 4 秒 観測回数 : 4 8 回 (0.5%) 欠測回数 : 2 7 9 回 (3.3%) 平均風速 : 3.1 m/s</p> <p>第 5.4-8 図 年間風速階別風配図 (標高 7.1 m)</p> </div> </div> <div data-bbox="369 813 772 1396" style="text-align: center;"> <p>観測日数 : 3 5 5 日 (観測5 年 4 月 ~ 2006 年 3 月) 観測時間 : 5 5 分 3 秒 観測回数 : 5 5 回 (0.7%) 欠測回数 : 3 6 9 回 (4.1%) 平均風速 : 4.0 m/s</p> <p>第 5.4-1 図 年間風速階別風配図 (標高 14.0 m)</p> </div>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="1041 231 1265 526"> <p>標高 18m (地上高 10m)</p> <p>欠測率 : 0.3%</p> </div> <div data-bbox="1310 231 1534 526"> <p>標高 80m (地上高 81m)</p> <p>欠測率 : 0.3%</p> </div> <div data-bbox="1579 231 1803 526"> <p>標高 148m (地上高 149m)</p> <p>欠測率 : 0.9%</p> </div> </div> <div data-bbox="1086 670 1355 925" style="text-align: center;"> <p>第 5.4-1 図 敷地の年間風配図 (2005 年 4 月 ~ 2006 年 3 月)</p> </div> <div data-bbox="1500 638 1769 710" style="margin-top: 20px;"> <p>注) 1. 風向出現頻度 (%) 平均風速 (m/s) 2. 小円内の数字は静穏の頻度 (%)</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ① ・ ③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

① : 気象期間の変更, ② : 気象設備の変更及び追加, ③ : 記載の適正化, ④ : 周辺監視区域境界の変更

既許可申請書

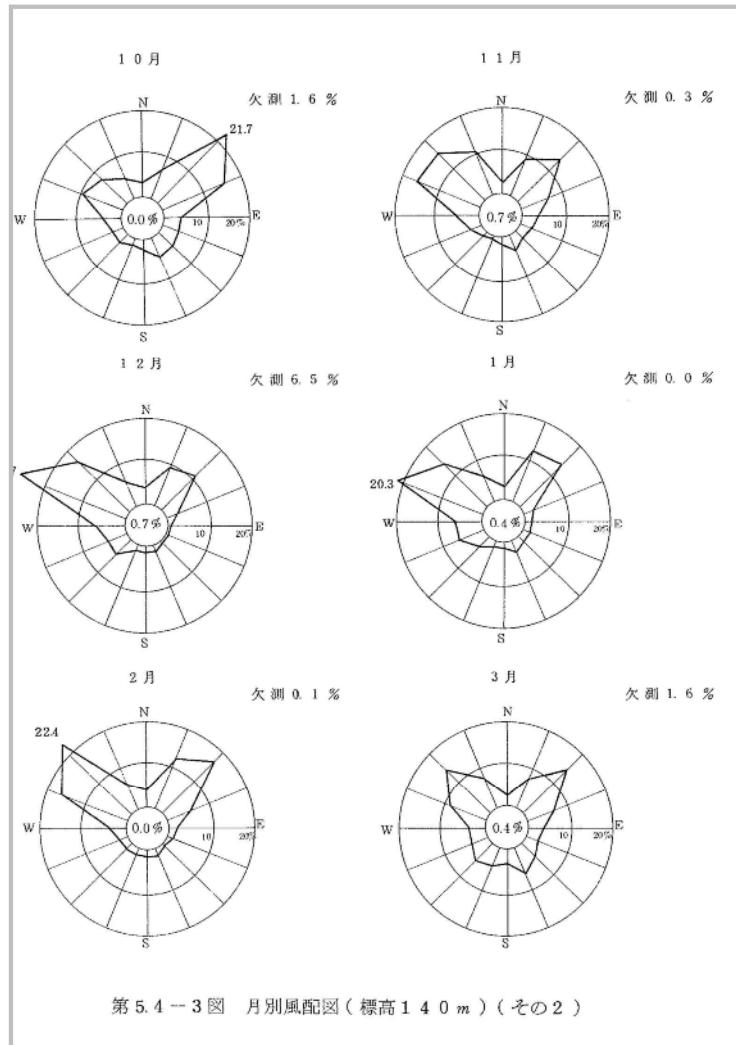


変更 (案)

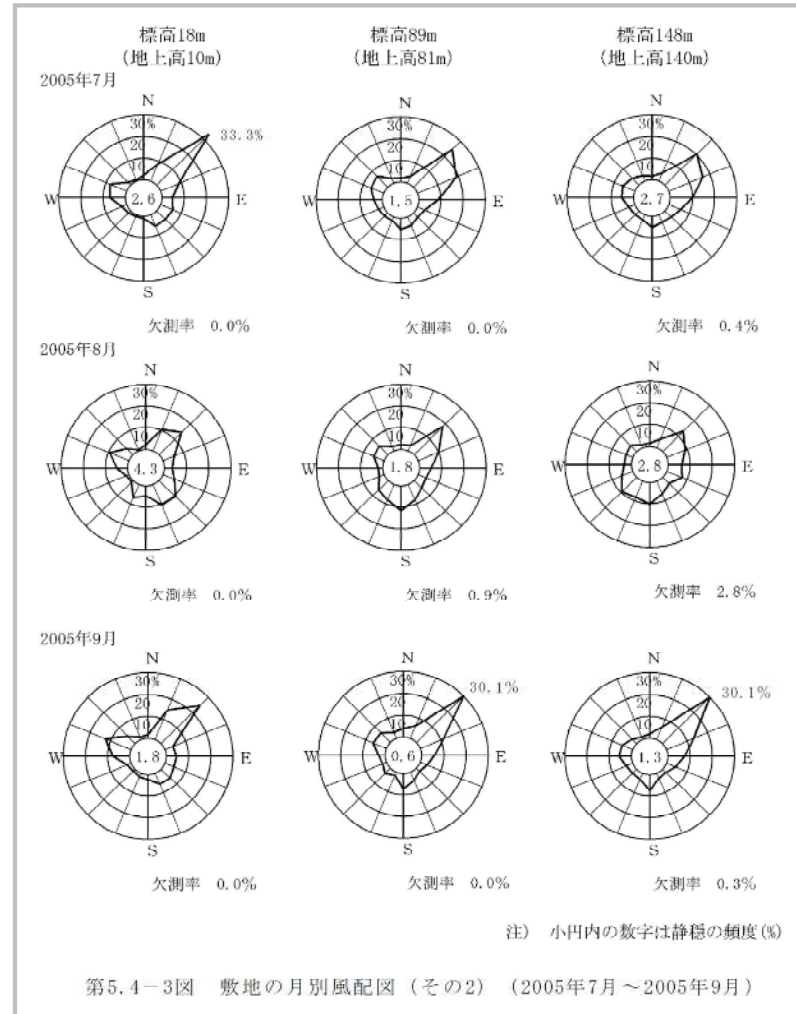


- ・①
- ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書



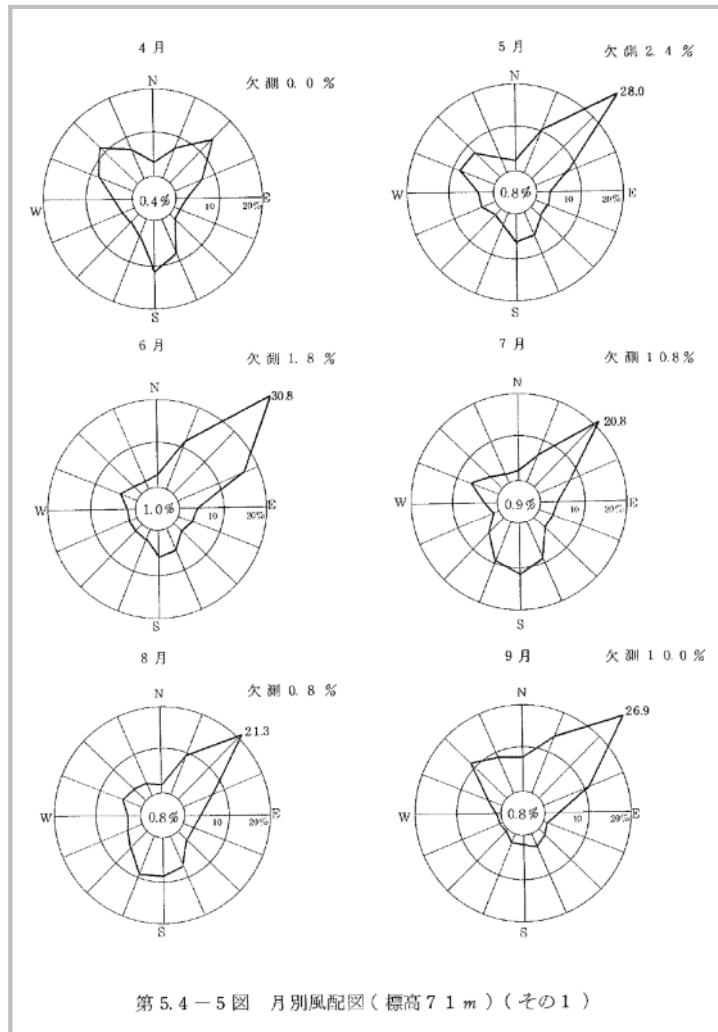
変更(案)



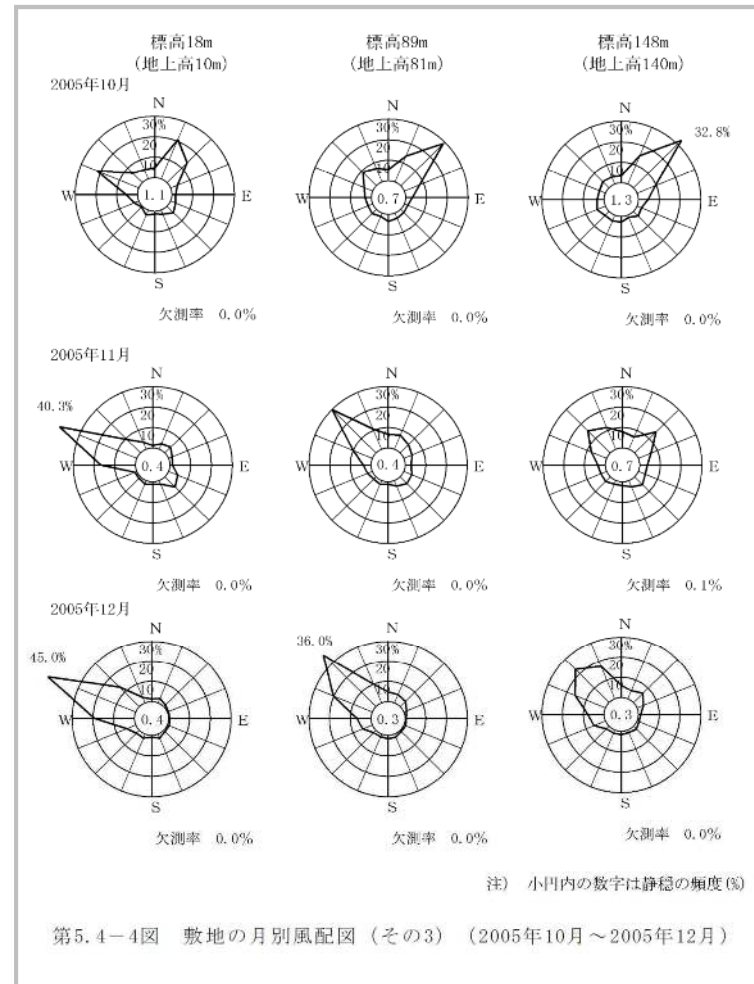
備考

- ・①
- ・③(先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計(排気筒風)からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書



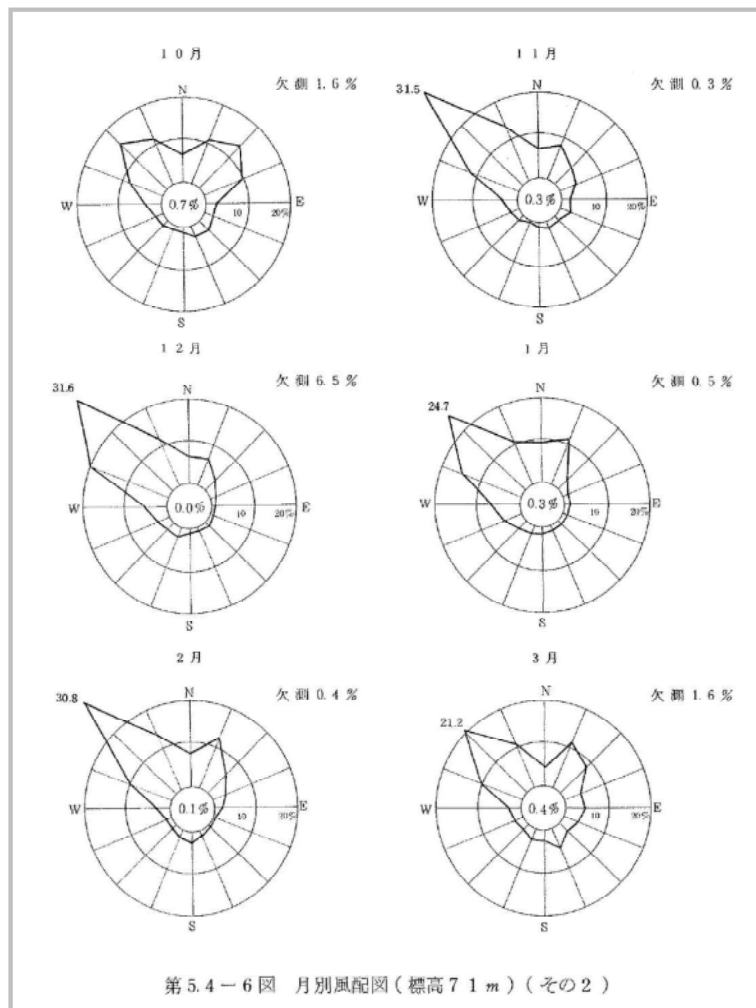
変更(案)



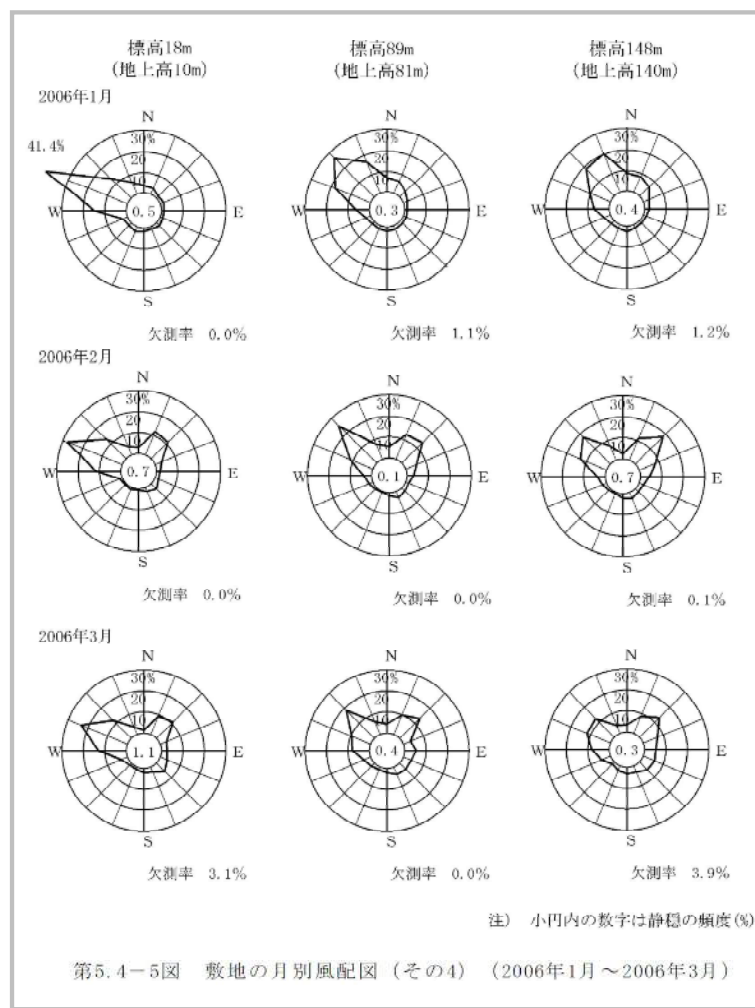
備考

- ・①
- ・③(先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計(排気筒風)からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書



変更(案)



備考

- ・①
- ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計(排気筒風)からドップラーソーダへ変更)

添付2-47

既許可申請書	変更 (案)	備考
<div data-bbox="197 228 952 1268" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p>4月 欠測 0.0% (中心: 0.7%, 最大: 23.6)</p> <p>5月 欠測 2.4% (中心: 0.4%, 最大: 23.6)</p> <p>6月 欠測 1.8% (中心: 0.7%, 最大: 29.6)</p> <p>7月 欠測 9.9% (中心: 1.2%, 最大: 29.6)</p> <p>8月 欠測 0.8% (中心: 0.3%, 最大: 21.8)</p> <p>9月 欠測 10.0% (中心: 0.5%, 最大: 29.0)</p> <p>第5.4-8図 月別風配図(標高18m)(その1)</p> </div>	<p>(第5.4-2図～第5.4-5図に記載)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・① ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計(排気筒風)からドップラーソーダへ変更)

添付2-48

既許可申請書	変更 (案)	備考
<div data-bbox="203 225 943 1236" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">第 5.4-6 図 月別風配図 (標高 71 m) (その 2)</p> </div>	<p>(第 5.4-2 図～第 5.4-5 図に記載)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・① ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

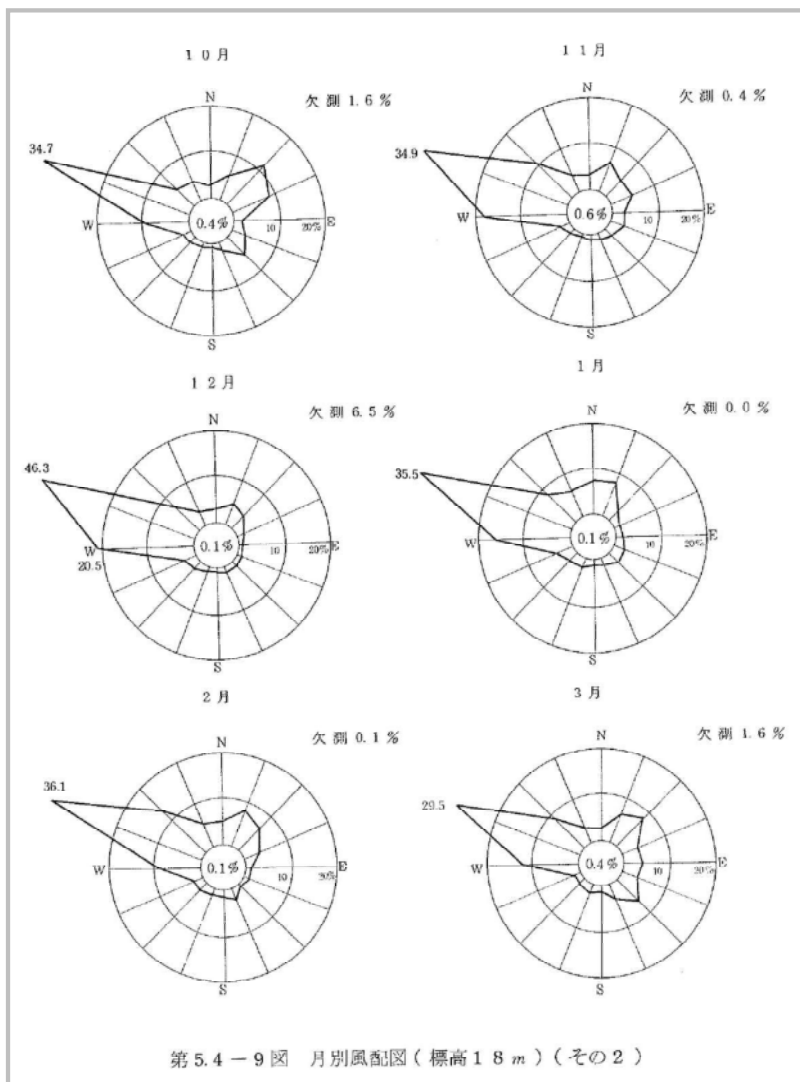
既許可申請書	変更 (案)	備考
<div data-bbox="165 228 965 1302" style="border: 1px solid black; padding: 10px;"> <p style="text-align: center;">第 5.4-8 図 月別風配図 (標高 18 m) (その 1)</p> </div>	<p>(第 5.4-2 図～第 5.4-5 図に記載)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・① ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

添付 2-50

既許可申請書

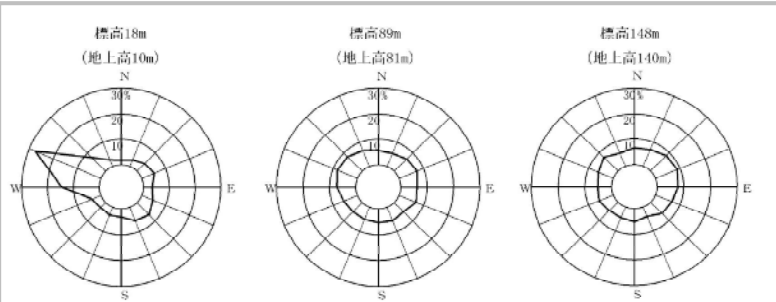
変更 (案)

備考



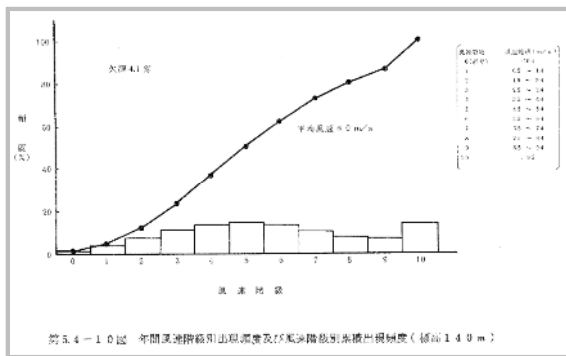
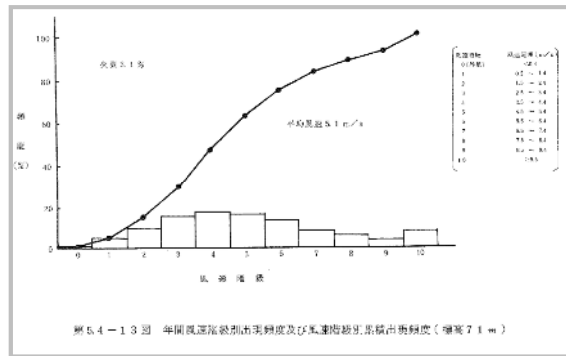
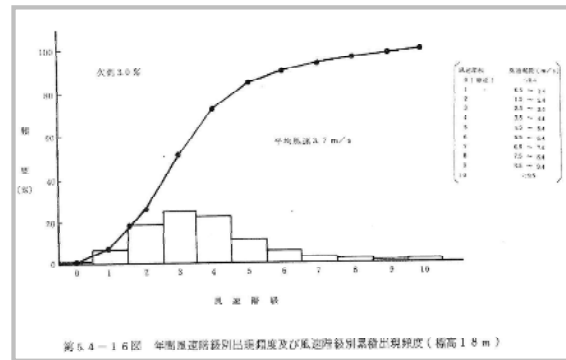
(第 5.4-2 図～第 5.4-5 図に記載)

- ・①
- ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

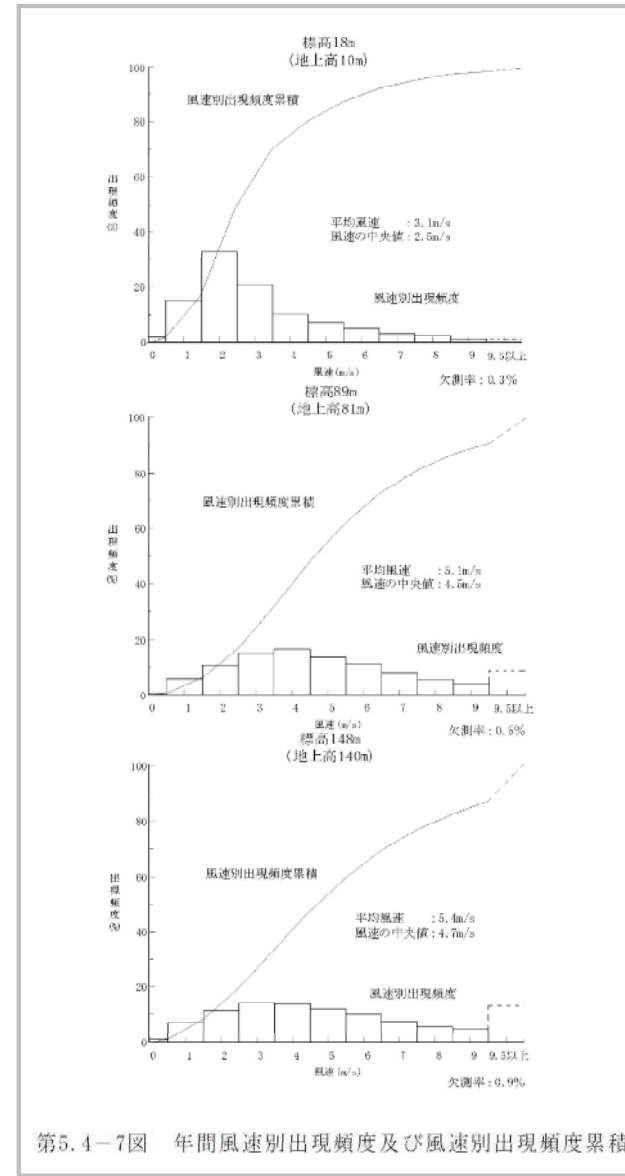
既許可申請書	変更 (案)	備考								
<p>(記載なし)</p>	<div style="text-align: center;">  <p>標高18m (地上高10m) 欠測率: 0.3%</p> <p>標高89m (地上高81m) 欠測率: 0.5%</p> <p>標高148m (地上高140m) 欠測率: 0.9%</p> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;"> <p>低風速 (0.5~2.0m/s) の出現頻度</p> <table border="1" data-bbox="1512 734 1803 845"> <thead> <tr> <th>観測点</th> <th>出現頻度 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>標高 18m</td> <td>33.1</td> </tr> <tr> <td>標高 89m</td> <td>11.5</td> </tr> <tr> <td>標高 148m</td> <td>13.6</td> </tr> </tbody> </table> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;"> <p>第5.4-6図 低風速(0.5~2.0m/s)時の年間風配図</p> </div>	観測点	出現頻度 (%)	標高 18m	33.1	標高 89m	11.5	標高 148m	13.6	<p>・①, ③ (先行プラントの記載に反映)</p>
観測点	出現頻度 (%)									
標高 18m	33.1									
標高 89m	11.5									
標高 148m	13.6									

添付2-52

既許可申請書



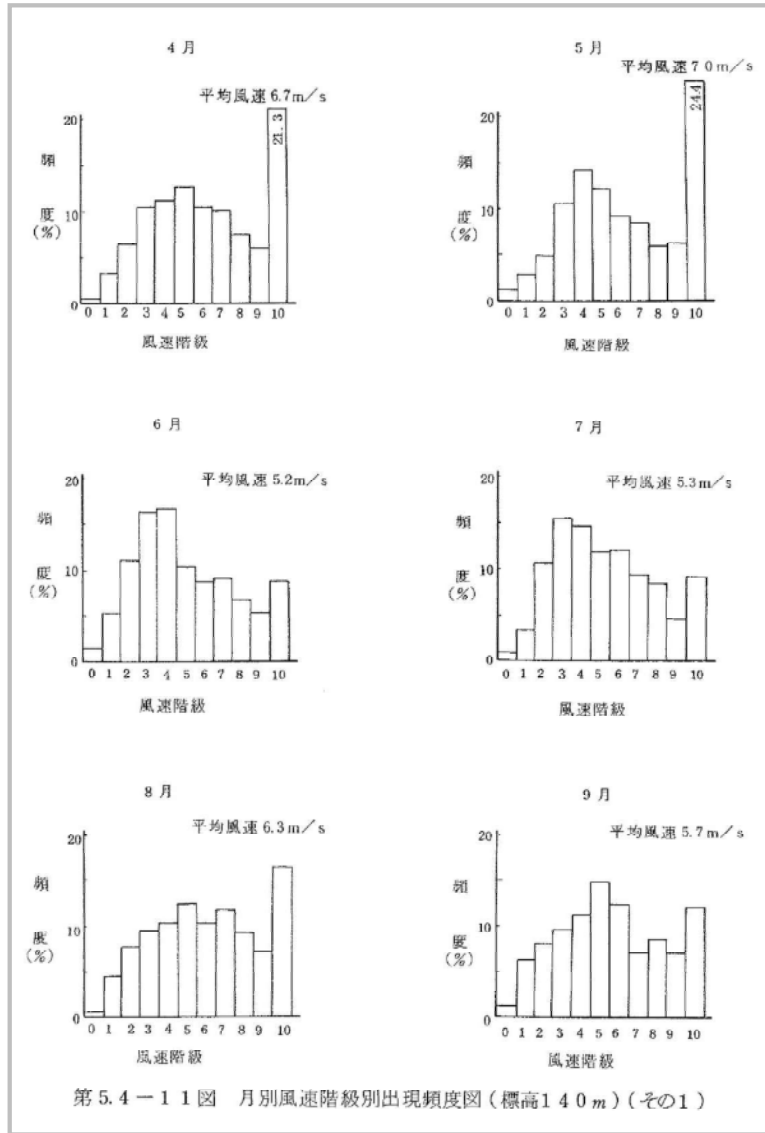
変更 (案)



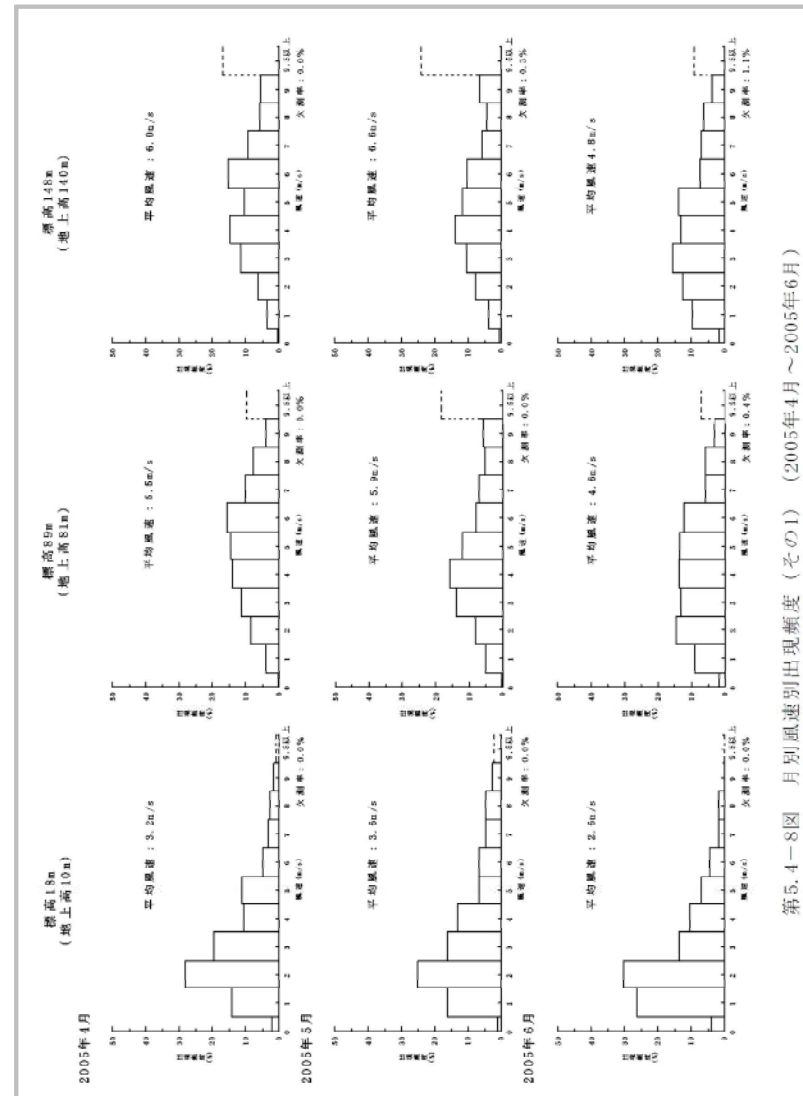
備考

- ①
- ③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書



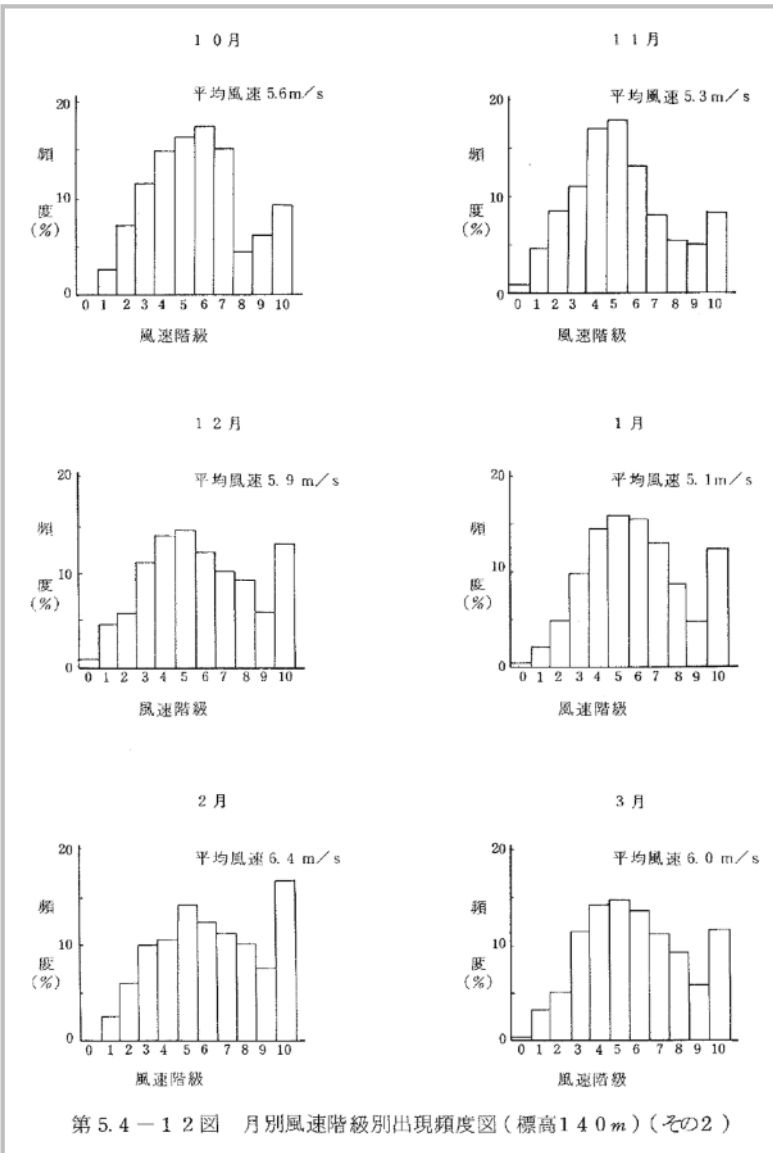
変更（案）



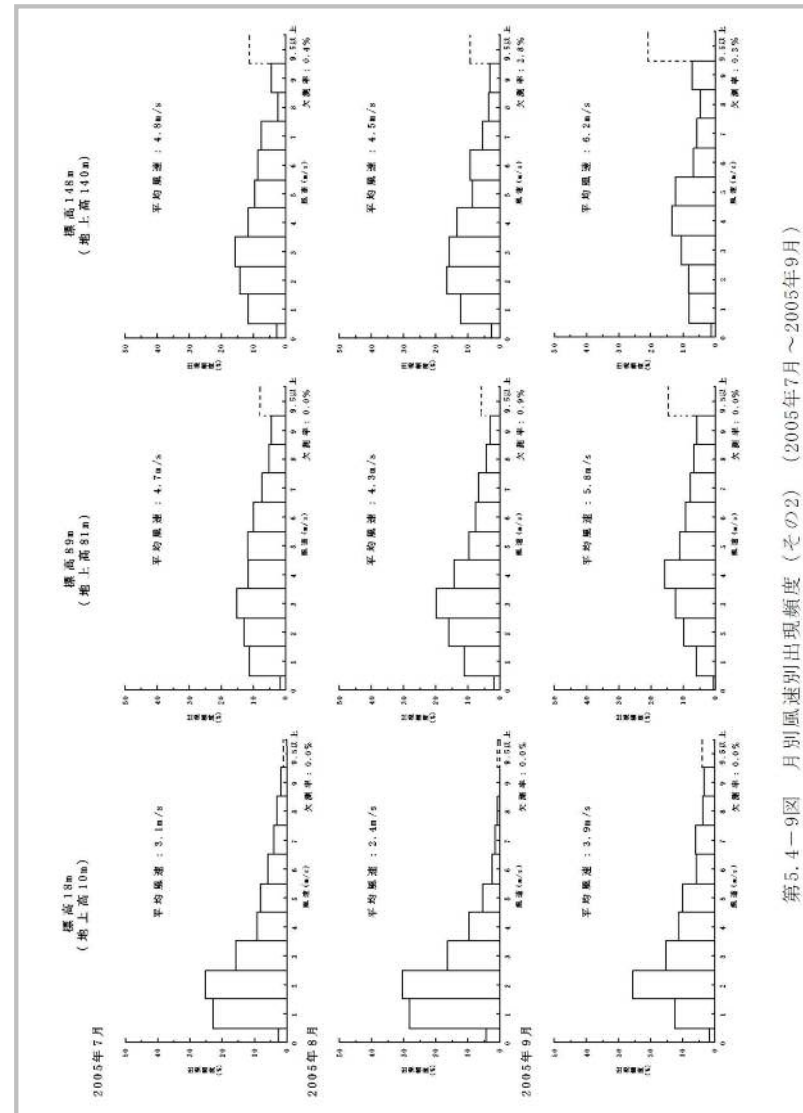
備考

- ・①
- ・③（先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計（排気筒風）からドップラーソーダへ変更）

既許可申請書



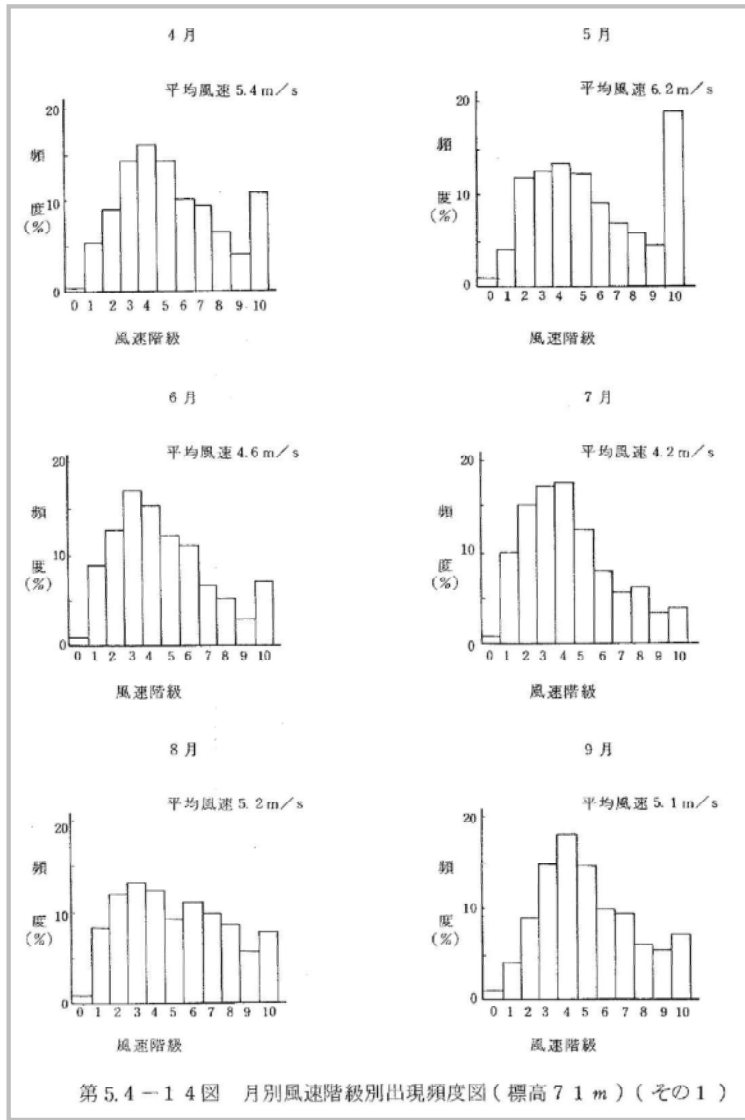
変更（案）



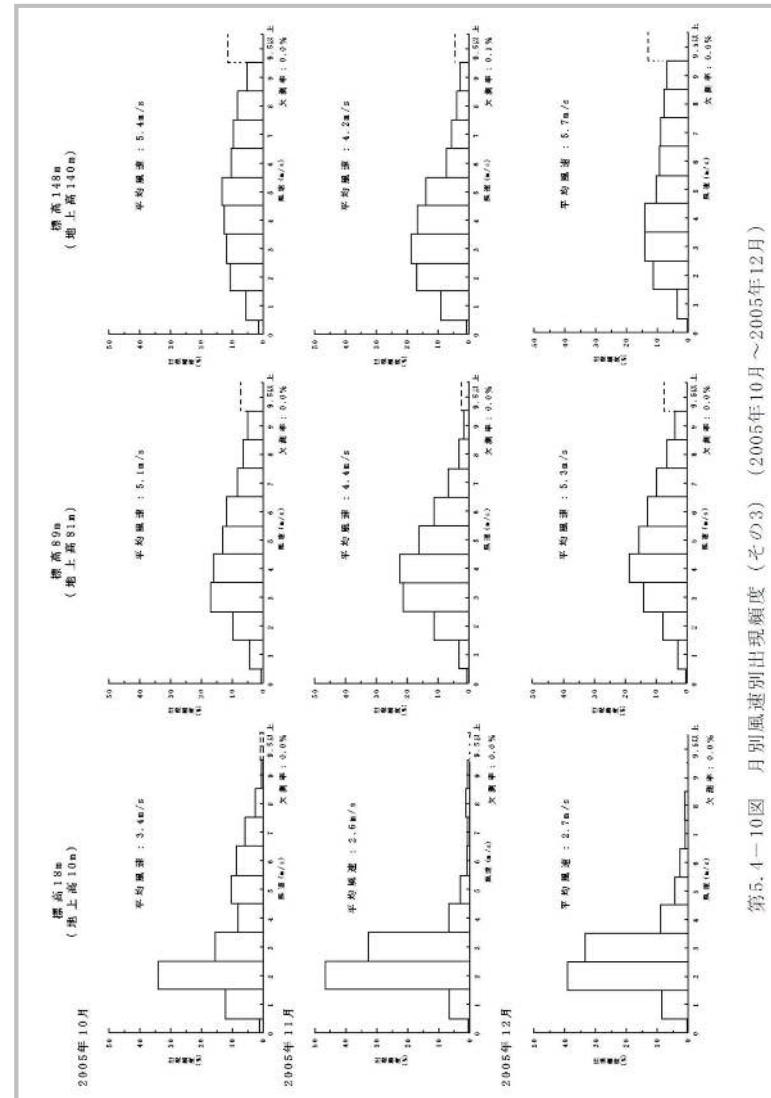
備考

- ・①
- ・③（先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計（排気筒風）からドップラーソーダへ変更）

既許可申請書



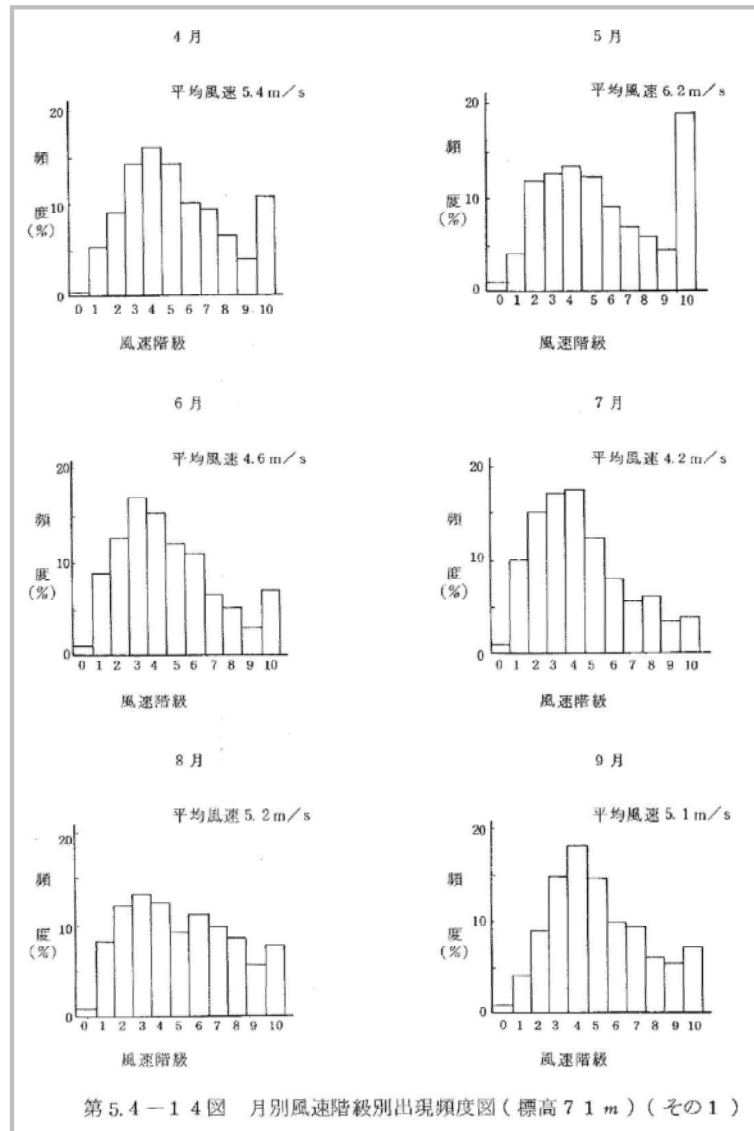
変更（案）



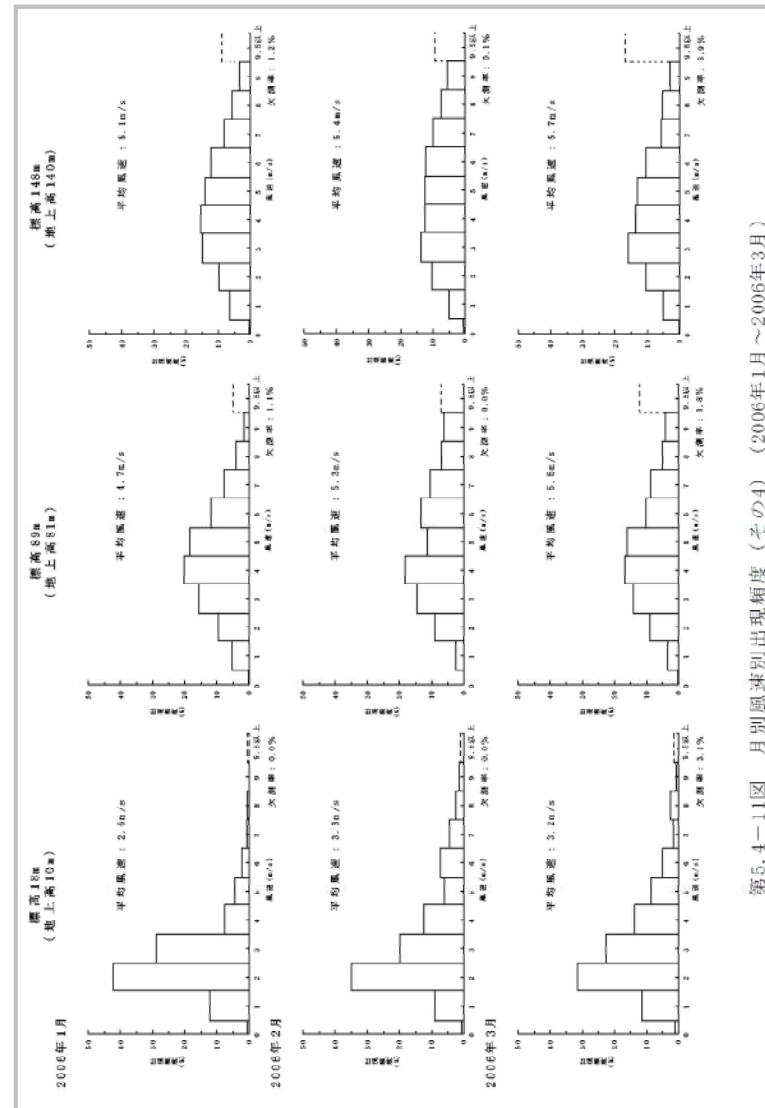
備考

- ・①
- ・③（先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計（排気筒風）からドップラーソーダへ変更）

既許可申請書



変更（案）



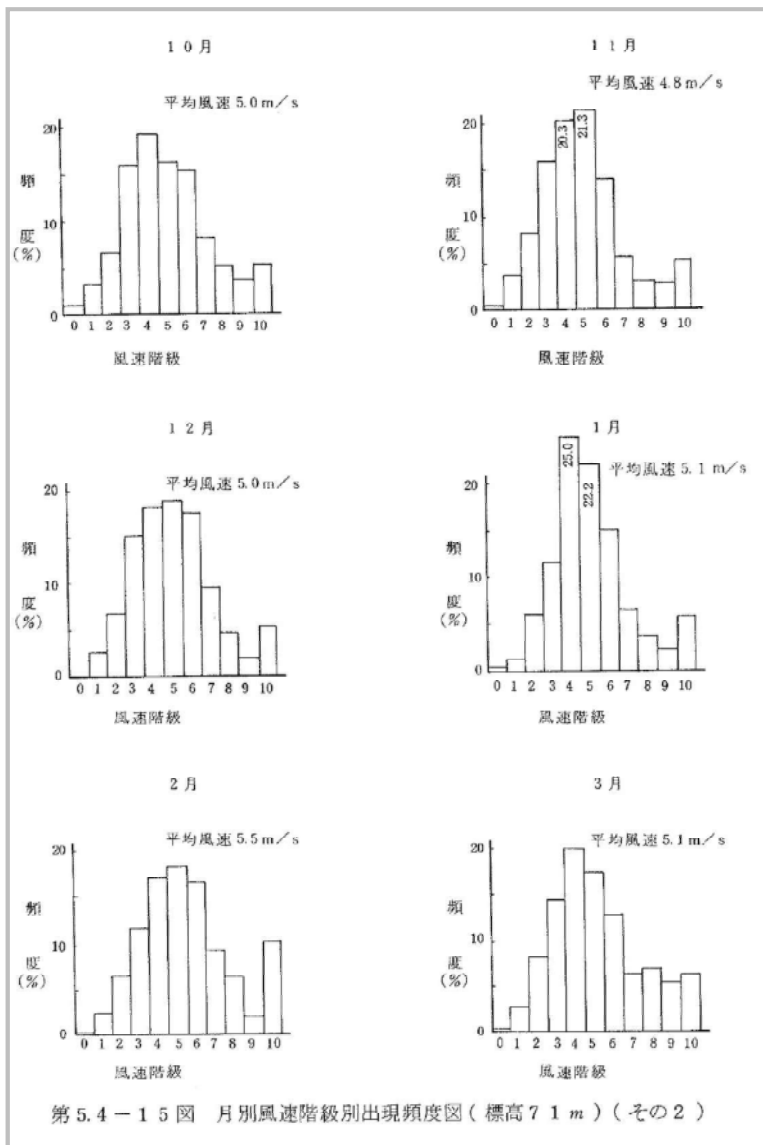
備考

- ・①
- ・③（先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計（排気筒風）からドップラーソーダへ変更）

既許可申請書

変更（案）

備考



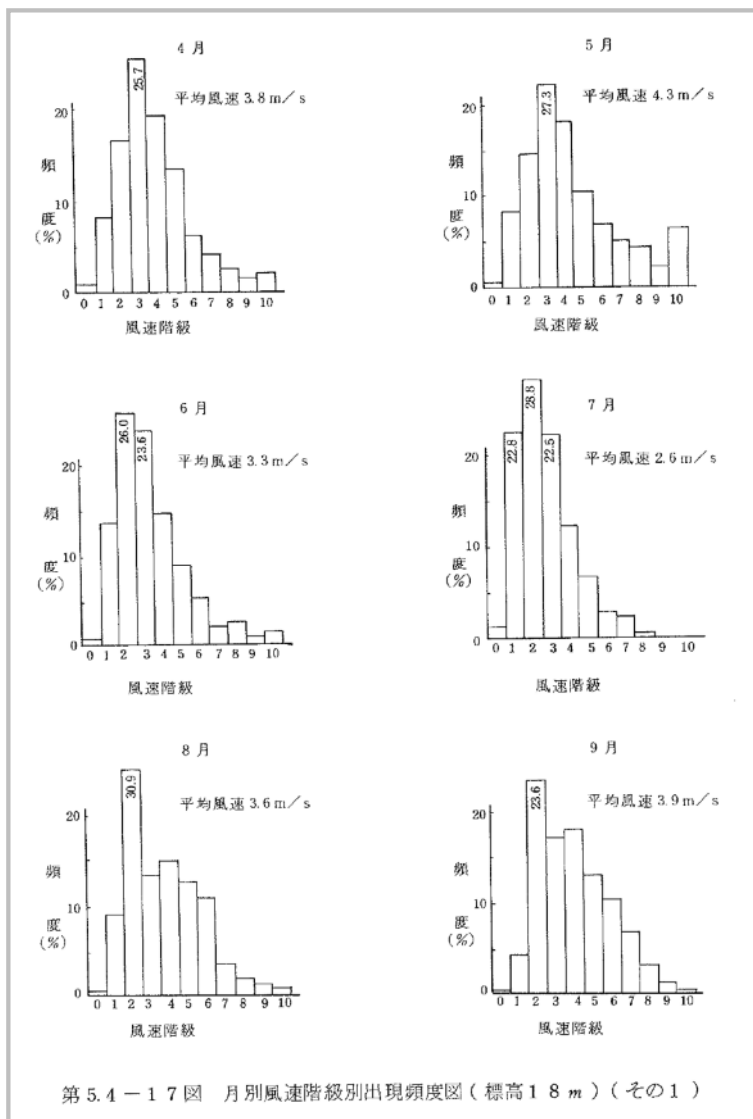
(第 5.4-8 図～第 5.4-11 図に記載)

- ・①
- ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計(排気筒風)からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書

変更 (案)

備考



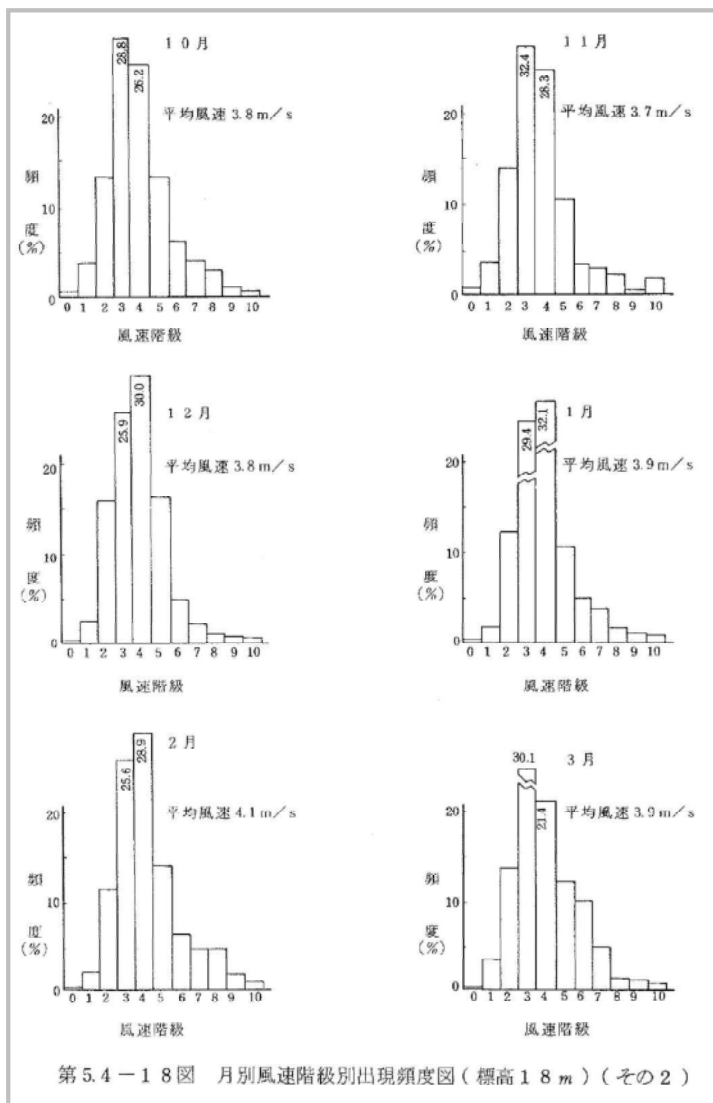
(第 5.4-8 図～第 5.4-11 図に記載)

- ・①
- ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書

変更 (案)

備考



(第 5.4-8 図～第 5.4-11 図に記載)

- ・①
- ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書	変更（案）	備考
<div data-bbox="293 220 857 762"> <p>第 5.4 - 1 9 図 年間静穏継続時間出現頻度（標高 140 m）</p> </div> <div data-bbox="293 775 857 1302"> <p>第 5.4 - 2 0 図 年間静穏継続時間出現頻度（標高 71 m）</p> </div>	<p>(削 除)</p>	<p>・③（先行プラントの記載を反映）</p>

添付2-61

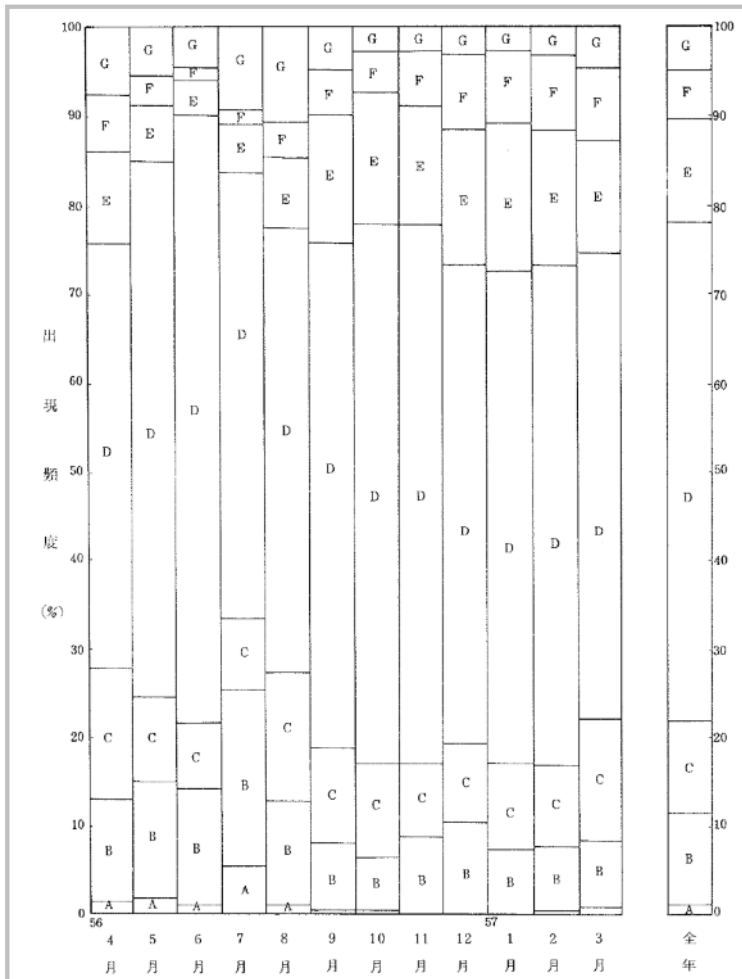
既許可申請書	変更（案）	備考																						
<div data-bbox="271 220 882 863" data-label="Figure"> <p>第 5.4-21 図 年間静穏継続時間出現頻度（標高 1.8 m）</p> <table border="1"> <caption>年間静穏継続時間出現頻度（標高 1.8 m）</caption> <thead> <tr> <th>継続時間 (h)</th> <th>出現頻度 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>95</td></tr> <tr><td>2</td><td>5</td></tr> <tr><td>3</td><td>0</td></tr> <tr><td>4</td><td>0</td></tr> <tr><td>5</td><td>0</td></tr> <tr><td>6</td><td>0</td></tr> <tr><td>7</td><td>0</td></tr> <tr><td>8</td><td>0</td></tr> <tr><td>9</td><td>0</td></tr> <tr><td>10</td><td>0</td></tr> </tbody> </table> </div>	継続時間 (h)	出現頻度 (%)	1	95	2	5	3	0	4	0	5	0	6	0	7	0	8	0	9	0	10	0	<p>(削 除)</p>	<p>・③（先行プラントの記載を反映）</p>
継続時間 (h)	出現頻度 (%)																							
1	95																							
2	5																							
3	0																							
4	0																							
5	0																							
6	0																							
7	0																							
8	0																							
9	0																							
10	0																							

添付2-62

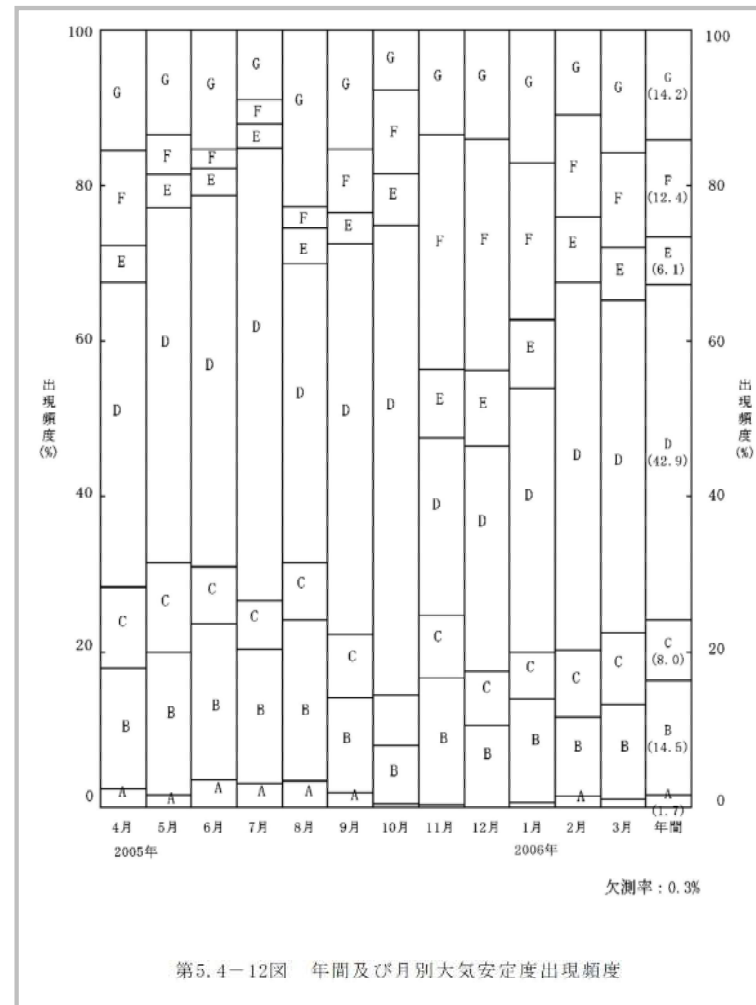
既許可申請書

変更(案)

備考

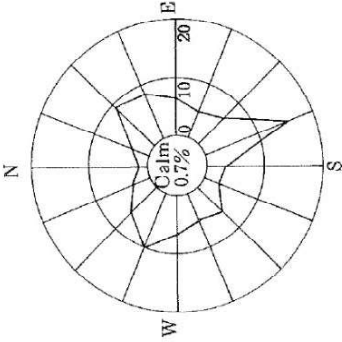
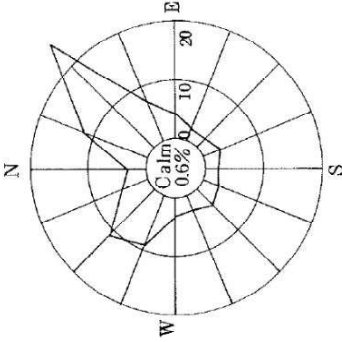
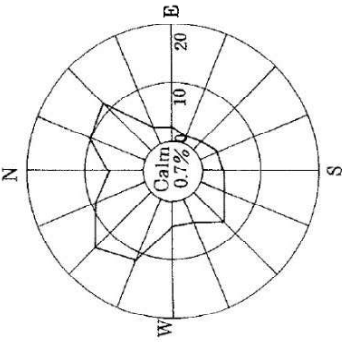
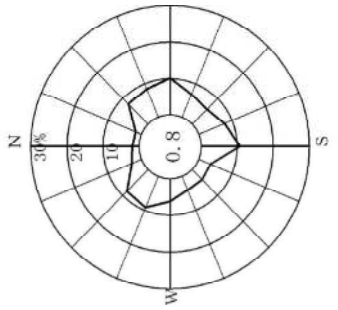
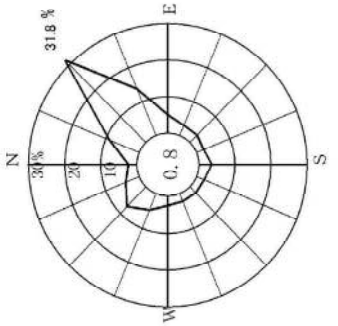
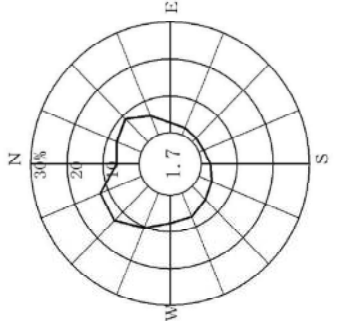


第5.4-22図 年間及び月別大気安定度出現頻度



第5.4-12図 年間及び月別大気安定度出現頻度

・①

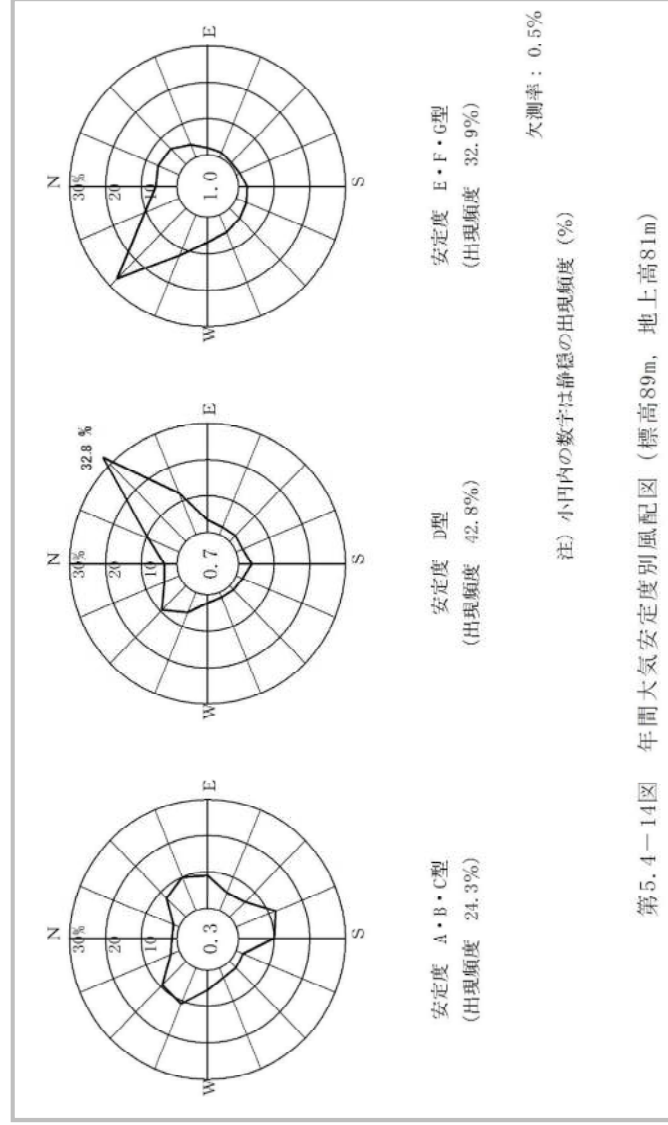
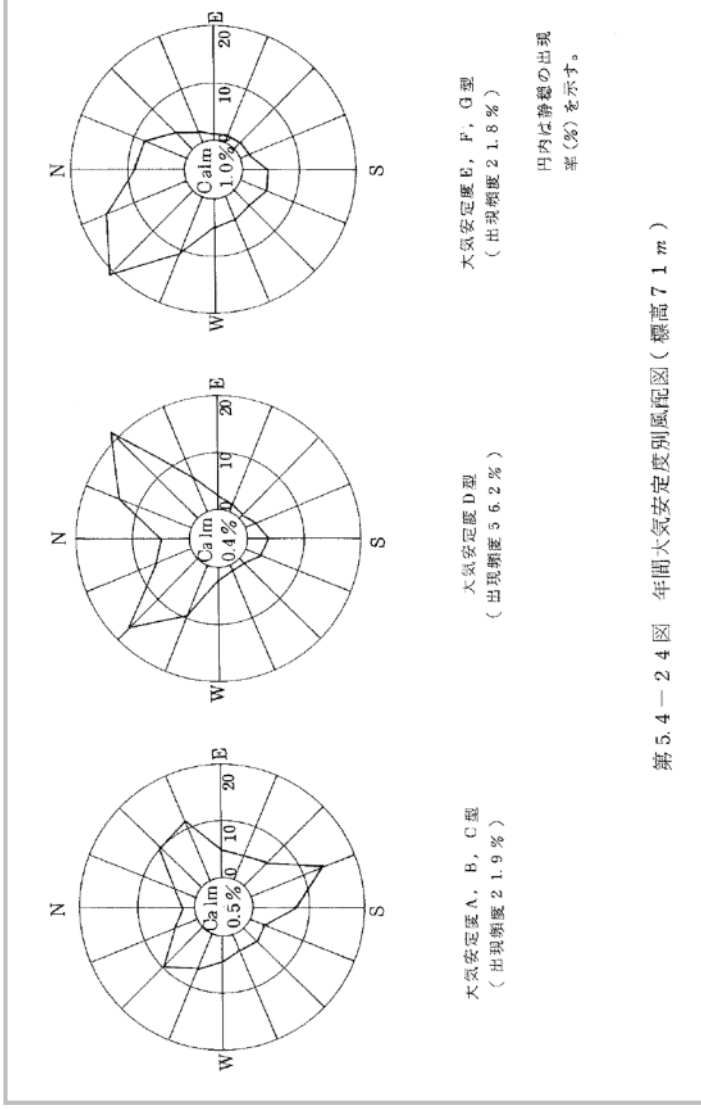
既許可申請書	変更 (案)	備考
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>大気安定度 A, B, C型 (出現頻度 21.8%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>大気安定度 D型 (出現頻度 56.6%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>大気安定度 E, F, G型 (出現頻度 21.6%)</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">円内は静穏の出現率(%)を示す。</p> <p style="text-align: center;">第 5.4-23 図 年間大気安定度別風配図 (標高 140 m)</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>安定度 A・B・C型 (出現頻度 24.2%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>安定度 D型 (出現頻度 42.8%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>安定度 E・F・G型 (出現頻度 33.0%)</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">欠測率: 0.9%</p> <p style="text-align: center;">注) 小円内の数字は静穏の出現頻度 (%)</p> <p style="text-align: center;">第 5.4-15 図 年間大気安定度別風配図 (標高 148m, 地上高 140m)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・① ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

①: 気象期間の変更, ②: 気象設備の変更及び追加, ③: 記載の適正化, ④: 周辺監視区域境界の変更

既許可申請書

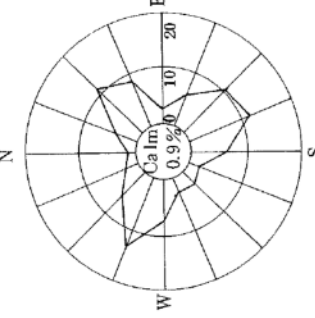
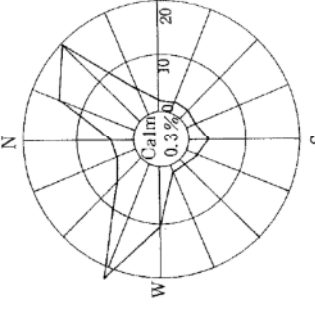
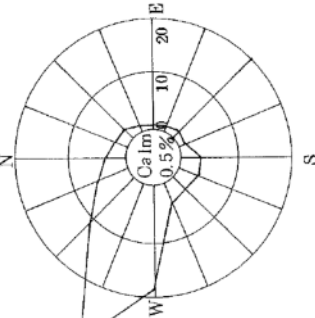
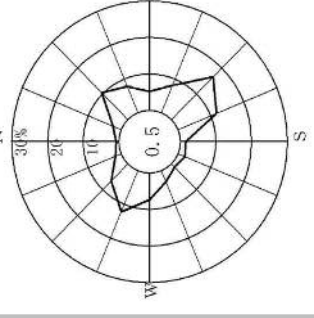
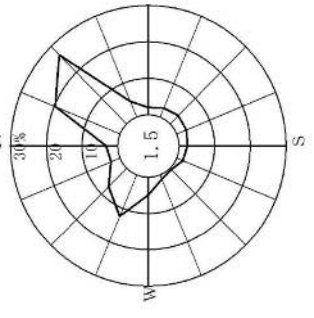
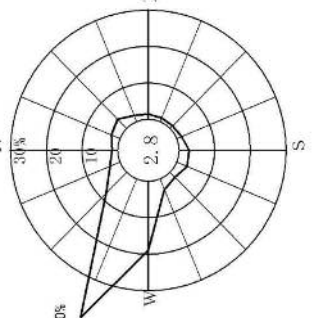
変更 (案)

備考



- ・①
- ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

①: 気象期間の変更, ②: 気象設備の変更及び追加, ③: 記載の適正化, ④: 周辺監視区域境界の変更

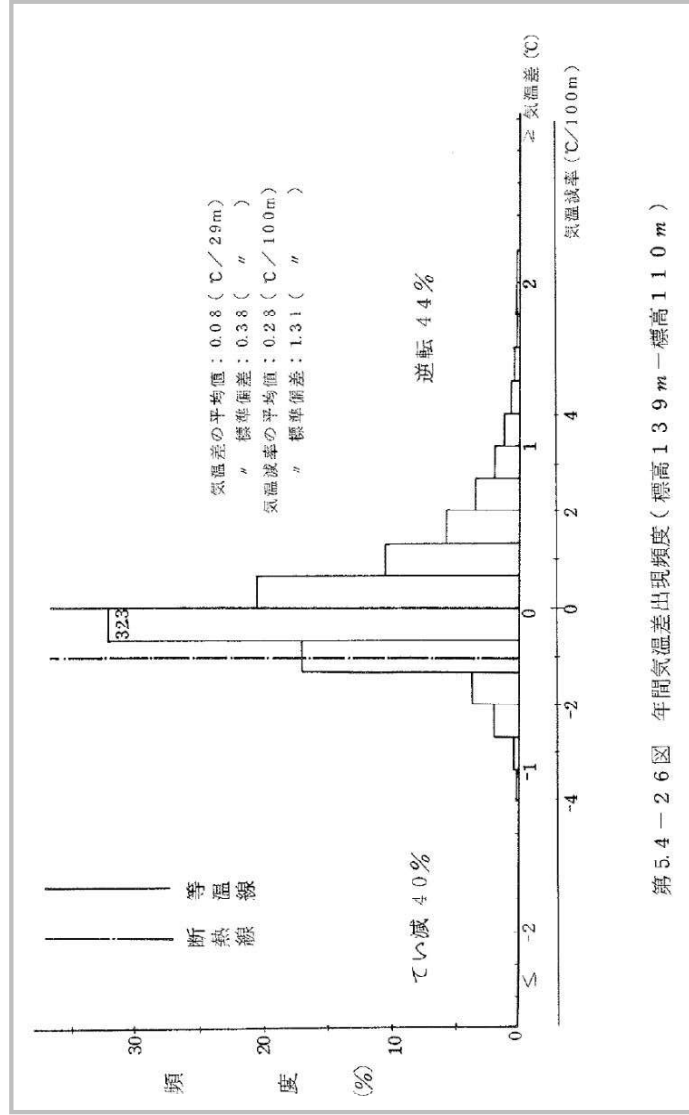
既許可申請書	変更(案)	備考
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>大気安定度 A, B, C 型 (出現頻度 21.9%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>大気安定度 D 型 (出現頻度 56.3%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>大気安定度 E, F, G 型 (出現頻度 21.8%)</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">第 5.4-25 図 年間大気安定度別風配図 (標高 18 m)</p> <p style="text-align: right;">円内は静穏の出現率 (%) を示す。</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>安定度 A・B・C 型 (出現頻度 24.3%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>安定度 D 型 (出現頻度 42.9%)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>安定度 E・F・G 型 (出現頻度 32.8%)</p> </div> </div> <p style="text-align: center;">第 5.4-13 図 年間大気安定度別風配図 (標高 18m, 地上高 10m)</p> <p style="text-align: right;">注) 小円内の数字は静穏の出現頻度 (%) 欠測率: 0.3%</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・① ・③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

①: 気象期間の変更, ②: 気象設備の変更及び追加, ③: 記載の適正化, ④: 周辺監視区域境界の変更

既許可申請書

変更(案)

備考



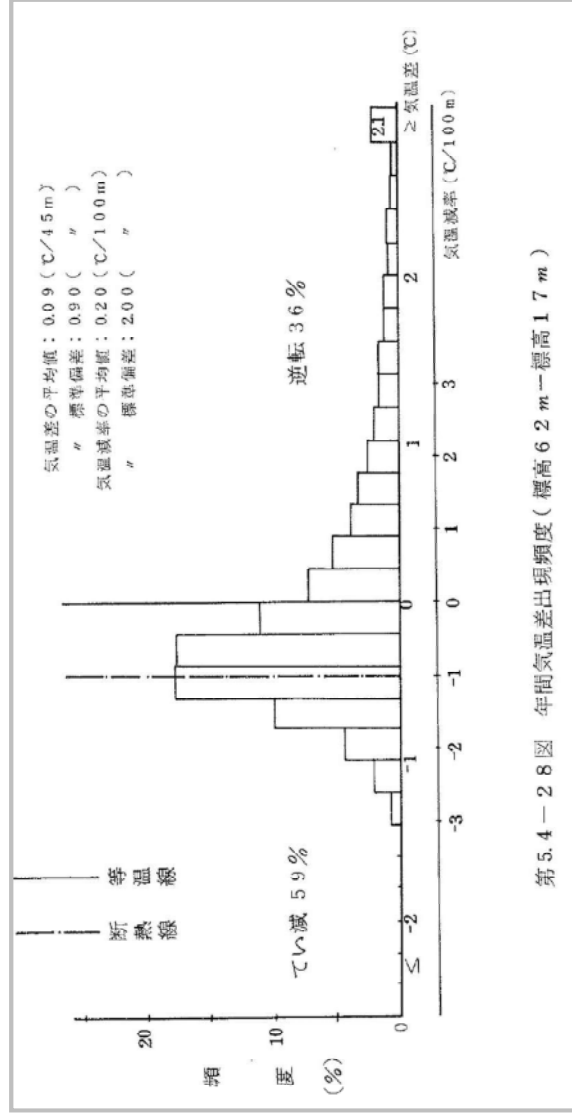
(削 除)

・②(気温差計の撤去(H6年に気象指針の観測項目から削除)

既許可申請書

変更(案)

備考



(削 除)

・②(気温差計の撤去 (H6 年に気象指針の観測項目から削除

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.5 - 1 表 異常年の棄却検定結果

統計年：昭和46年4月～昭和56年3月
検定年：昭和56年4月～昭和57年3月

「風向出現回数」

風向 地点	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	WSW	W	WNNW	NW	NNW	N	CALM
水戸	○	○	×	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
銚子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小名浜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	×

「風速階級出現回数」

風速 地点	0.0~0.4	0.5~1.4	1.5~2.4	2.5~3.4	3.5~4.4	4.5~5.4	5.5~6.4	6.5~7.4	7.5~8.4	8.5~9.4	9.5m/s~
水戸	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
銚子	○	○	×	○	○	○	○	×	○	○	○
小名浜	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

判定
○ 採択
× 棄却

(削 除)

・③（先行プラントの記載を反映）

17-乙102

第 5.5-2 表 異常年の棄却検定表

「風向出現回数」

観測場所：敷地内 A 点 (標高 89m, 地上高 81m)

観測年：昭和 46 年 4 月～昭和 57 年 3 月

統計年：昭和 46 年 4 月～昭和 57 年 3 月

検定年：昭和 55 年 4 月～昭和 57 年 3 月

地点：水戸地方気象台

風向	X46	X47	X48	X49	X50	X51	X52	X53	X54	X55	X56	F0	棄却限界
統計年	172	158	182	156	162	161	150	112	134	141	109	15.4	4.50
NNE	193	184	181	193	218	200	213	188	178	273	184	20.23	0.38
NE	258	229	241	260	230	248	253	205	192	281	313	23.87	7.26
E	201	186	209	268	225	196	215	187	201	199	260	20.87	4.15
ESE	84	73	84	89	94	58	66	68	47	69	81	7.82	0.25
SE	55	54	61	70	70	64	70	36	74	45	71	5.99	0.73
SSE	62	61	46	43	80	55	50	46	53	35	38	5.32	1.38
S	101	110	116	94	110	117	105	157	128	152	92	11.70	1.72
SSW	186	230	173	139	181	184	164	197	178	162	135	17.94	2.99
SW	123	132	160	114	132	113	103	128	121	77	97	12.12	1.18
WSW	86	84	92	90	61	81	67	61	83	73	75	7.80	0.05
W	60	80	99	54	59	87	72	66	66	86	87	7.69	0.45
WNW	73	75	74	79	45	78	69	57	85	67	77	7.03	0.29
NW	106	166	148	148	91	99	167	178	205	153	189	14.62	1.21
NNW	562	628	465	444	433	509	522	628	620	496	542	53.07	0.02
N	572	412	511	534	568	503	431	358	377	406	384	46.74	1.00
CALM	32	48	78	105	169	160	199	248	184	219	183	14.22	0.25

既許可申請書

「風速階級出現回数」

風速	X46	X47	X48	X49	X50	X51	X52	X53	X54	X55	X56	F0	棄却限界
統計年	59	80	123	165	286	291	345	424	324	389	277	24.85	0.04
0.0~0.4m/s	637	631	652	737	931	833	947	1064	991	984	925	84.09	0.24
0.5~1.4	901	906	868	918	744	843	737	628	735	674	853	79.54	0.28
1.5~2.4	590	567	531	486	461	454	432	433	452	407	444	48.03	0.31
2.5~3.4	349	330	353	304	267	280	260	212	237	259	250	28.81	0.49
3.5~4.4	171	178	200	172	143	127	111	97	108	112	99	14.19	1.29
4.5~5.4	102	112	111	71	43	61	65	37	36	65	45	7.08	0.74
5.5~6.4	57	63	50	45	22	21	22	13	22	21	19	3.44	0.61
6.5~7.4	27	24	20	15	15	3	9	6	10	5	4	1.36	1.26
7.5~8.4	20	11	7	4	5	2	2	4	7	0	2	6.3	0.51
8.5~9.4	15	13	5	2	5	0	0	2	5	3	1	5.1	0.58
9.5~													

変更 (案)

第 5.5-1 表 棄却検定表 (風向) (標高 89m, 地上高 81m)

観測場所：敷地内 A 点 (標高 89m, 地上高 81m)

風向	統計年	観測年											判定 ○採択 ×棄却		
		1994	1995	1996	1997	1998	2000	2001	2002	2003	2004	2005			
N	4.96	3.52	4.46	3.65	3.88	4.59	4.09	4.59	3.42	3.25	4.04	3.79	5.43	2.65	○
NNE	9.49	6.08	7.55	6.88	6.56	8.00	8.41	7.81	7.03	6.03	7.39	6.60	9.97	4.80	○
NE	14.38	13.14	15.36	16.64	18.08	15.04	17.97	21.91	21.50	17.51	17.15	17.88	21.00	10.31	○
E	6.25	6.72	7.37	11.07	10.86	8.86	7.76	8.22	9.86	7.84	8.46	8.95	12.38	4.54	○
ESE	2.77	2.72	2.63	3.02	2.93	2.62	2.40	2.79	2.47	2.75	2.71	2.77	3.16	2.26	○
SE	2.63	2.65	2.02	3.28	2.79	2.49	2.74	2.86	2.96	2.80	2.71	2.75	3.50	1.93	○
SSE	4.87	4.69	3.71	4.56	3.46	3.68	3.78	3.48	3.96	3.77	4.00	4.16	5.23	2.77	○
S	5.96	5.62	5.08	4.11	3.72	5.38	4.77	3.66	4.43	6.82	4.95	4.88	7.37	2.64	○
SSW	3.05	2.93	2.52	2.31	2.62	3.33	2.86	2.55	3.20	3.86	2.92	2.43	4.01	1.83	○
SW	2.07	2.43	2.17	2.88	3.08	3.19	3.26	3.62	3.42	3.63	2.98	2.64	4.34	1.62	○
WSW	2.19	2.85	2.74	3.12	2.61	3.01	3.32	3.33	3.11	3.09	2.94	3.08	3.76	2.11	○
W	2.65	4.18	4.33	4.95	4.19	4.45	4.53	4.08	4.57	4.17	4.21	4.58	5.65	2.78	○
WNW	7.76	8.57	10.96	11.06	10.26	7.67	8.29	7.52	8.02	9.03	8.91	9.14	12.15	5.88	○
NW	19.41	20.35	18.79	13.13	15.01	15.17	15.13	13.32	12.41	15.17	15.79	15.31	22.38	9.20	○
NNW	8.08	9.14	6.40	4.59	4.94	7.68	6.67	5.88	4.76	5.67	6.38	6.03	10.00	2.76	○
CALM	0.41	0.48	0.35	0.47	0.63	0.45	0.65	0.58	0.59	0.61	0.52	0.69	0.77	0.28	○

注) 1 統計年は当年4月から翌年3月までの期間
 2 1999年は欠測率が高かったため除外し、1994年を追加
 3 1996年9月までは超音波風向風速計の観測値

備考

- ①
- ③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)
- 観測地点を最寄りの気象官署から敷地内 (A 点) に変更

第5.5-3表 異常年の棄却検定表

地点：鏡子池地方気象台
 統計年：昭和46年4月～昭和56年3月
 検定年：昭和56年4月～昭和57年3月
 (危険率5%) 検定年：昭和56年4月～昭和57年3月

「風向出現回数」

統計年	X48	X47	X46	X49	X50	X51	X52	X53	X54	X55	X56	F0	棄却 × 棄却	棄却 × 棄却
区分	X48	X47	X46	X49	X50	X51	X52	X53	X54	X55	X56	F0	棄却 × 棄却	棄却 × 棄却
NNE	343	377	484	336	405	339	501	422	320	451	427	1008	0.17	○
N	463	342	237	453	439	440	373	233	320	343	415	3560	0.40	○
NNE	219	183	96	156	131	138	110	109	118	96	115	1316	0.8	○
E	99	83	75	57	71	63	53	64	74	76	94	725	2.69	○
ESE	36	10	63	74	71	56	62	72	93	58	92	750	0.83	○
S	102	80	91	99	128	88	89	65	101	64	89	907	0.01	○
SSE	95	95	100	102	144	88	97	100	99	73	91	993	0.20	○
S	191	230	221	162	191	196	196	220	179	167	175	1952	0.46	○
SSW	291	377	375	275	255	279	261	420	378	304	279	3255	0.63	○
SW	186	152	144	186	187	209	116	146	177	149	114	1562	2.94	○
WSW	96	49	86	80	99	93	73	72	77	72	56	745	2.05	○
W	53	55	52	31	35	31	35	73	54	63	41	544	1.25	○
WNW	144	247	288	128	98	175	184	159	179	195	171	1798	0.02	○
NW	236	241	284	315	246	324	293	306	293	278	247	2818	1.12	○
NNW	124	102	117	133	128	145	118	141	143	157	153	1308	1.69	○
N	192	331	205	243	214	247	279	286	244	313	312	2461	2.56	○
CALM	8	6	3	10	46	18	38	64	74	55	45	322	0.21	○

「風速超過出現回数」

統計年	X46	X47	X48	X49	X50	X51	X52	X53	X54	X55	X56	F0	棄却 × 棄却	棄却 × 棄却
区分	X46	X47	X48	X49	X50	X51	X52	X53	X54	X55	X56	F0 <td>棄却 × 棄却</td> <td>棄却 × 棄却</td>	棄却 × 棄却	棄却 × 棄却
0.0~0.4m/s	13	11	8	20	68	41	54	96	118	79	70	508	0.22	○
0.5~1.4	172	117	135	158	211	183	173	248	275	251	229	1933	0.40	○
1.5~2.4	382	347	372	383	411	377	372	397	365	431	470	3822	1.40	○
2.5~3.4	458	438	452	521	513	524	512	497	530	489	544	4834	2.13	○
3.5~4.4	482	540	480	459	465	507	553	463	480	466	508	4885	0.31	○
4.5~5.4	421	421	423	457	381	418	426	406	395	349	416	4105	0.03	○
5.5~6.4	339	319	356	358	309	320	324	275	286	275	283	3141	1.13	○
6.5~7.4	239	236	253	252	193	220	189	200	199	199	156	2152	6.60	○
7.5~8.4	170	193	174	149	130	113	130	156	132	157	115	1544	3.09	○
8.5~9.4	86	114	122	98	112	84	92	89	99	90	56	966	4.05	○
9.5~	168	184	150	135	133	82	95	83	89	124	53	1234	2.62	○

変更(案)

第5.5-2表 棄却検定表 (風速分布) (標高89m, 地上高81m)

統計年 風速 分布 (m/s)	観測場所：鏡池内A点 (標高89m, 地上高81m)											判定 ○検出 ×棄却				
	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004		2005	検定年 平均値 2005	棄却限界 (5%) 上限	下限
0.0~0.4	0.41	0.48	0.35	0.47	0.63	0.45	0.65	0.58	0.58	0.59	0.61	0.52	0.69	0.77	0.28	○
0.5~1.4	4.32	5.25	4.24	4.85	5.53	5.33	4.92	4.95	5.23	5.23	5.62	5.03	5.79	6.13	3.92	○
1.5~2.4	10.02	11.42	9.23	9.25	11.26	10.40	10.06	10.15	10.09	11.31	10.32	10.58	12.20	8.44	8.44	○
2.5~3.4	16.08	16.41	14.31	14.26	13.73	13.70	13.91	14.28	14.41	14.52	14.56	15.24	16.77	12.35	12.35	○
3.5~4.4	16.69	18.07	16.86	15.99	15.54	16.13	15.55	14.93	14.78	16.34	16.09	15.48	18.41	13.77	13.77	○
4.5~5.4	14.82	15.42	14.67	13.77	13.96	15.39	13.97	12.98	12.76	13.85	14.16	13.66	16.32	11.99	11.99	○
5.5~6.4	11.63	11.14	11.96	12.17	11.36	11.59	11.36	10.40	11.85	10.73	11.42	11.14	12.72	10.12	10.12	○
6.5~7.4	9.08	7.59	9.02	9.37	9.14	8.64	8.16	8.38	8.75	7.90	8.60	8.04	9.99	7.27	7.27	○
7.5~8.4	5.16	4.64	6.24	6.05	6.84	6.32	6.41	6.50	6.98	5.41	6.06	5.61	7.84	4.22	4.22	○
8.5~9.4	3.69	2.95	4.52	4.52	4.40	3.71	4.97	5.31	4.65	4.10	4.28	4.02	5.92	2.65	2.65	○
9.5以上	8.10	6.63	8.59	9.31	7.62	8.34	10.04	11.52	9.92	9.58	8.96	8.74	12.28	5.65	5.65	○

注) 1 統計年は当年4月から翌年3月までの期間
 2 1999年は欠測率が高かったため除外し、1994年を追加
 3 1996年9月までは超音波風向風速計の観測値

備考

- ①
- ③ (先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)
- ・観測地点を最寄りの気象官署から敷地内 (A点) に変更

既許可申請書

変更（案）

備考

第5.5-4表 棄却検定表（風速分布）（標高148m，地上高140m）

風速 分布 m/s	統計年	観測場所：敷地内A点（標高148m，地上高140m）													棄却限界（5%）		判定 ○採択 ×棄却
		1994	1995	1996	1997	1998	2000	2001	2002	2003	2004	平均値	検定年 2005	上限	下限		
0.0~0.4	0.50	0.92	0.28	0.50	0.59	1.16	1.24	0.65	0.75	0.76	0.73	1.10	1.45	0.02	○		
0.5~1.4	4.05	5.66	4.04	4.42	5.53	7.40	6.70	5.19	5.56	6.43	5.50	6.99	8.18	2.82	○		
1.5~2.4	8.34	9.43	7.83	7.85	8.73	11.19	10.58	8.92	9.61	11.42	9.39	11.28	12.49	6.29	○		
2.5~3.4	11.95	13.17	12.10	11.41	11.73	12.07	12.17	11.15	12.55	13.72	12.20	14.10	14.04	10.36	×		
3.5~4.4	12.58	13.80	13.44	13.93	12.62	13.02	12.57	12.25	12.80	13.58	13.06	13.85	14.45	11.66	○		
4.5~5.4	12.85	13.67	13.66	13.12	12.10	12.10	11.54	10.97	11.30	12.07	12.34	12.03	14.60	10.08	○		
5.5~6.4	11.48	10.99	11.22	10.99	11.36	11.19	10.66	9.62	10.10	9.68	10.73	9.92	12.37	9.09	○		
6.5~7.4	9.59	8.46	9.61	9.45	8.60	8.16	7.67	8.18	8.82	7.95	8.62	7.40	10.32	6.92	○		
7.5~8.4	7.20	6.85	7.04	7.77	7.84	6.65	6.17	7.68	7.35	5.34	6.96	5.51	8.85	5.13	○		
8.5~9.4	6.04	4.76	5.39	5.51	6.12	4.57	5.14	6.84	6.01	5.03	5.56	4.82	7.19	3.91	○		
9.5以上	15.41	12.58	15.38	15.05	14.80	12.39	15.56	18.54	15.15	14.02	14.89	13.00	18.98	10.80	○		

注) 1 統計年は当年4月から翌年3月までの期間
 2 1999年は欠測率が高かったため除外し，1994年を追加
 3 1996年9月までは超音波風向風速計の観測値

- ・①
- ・③（先行プラントの記載を反映及び超音波風向風速計（排気筒風）からドップラーソーダへ変更）
- ・観測地点を最寄りの気象官署から敷地内（A点）に変更

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.5 - 5 表 平常運転時用及び想定事故時用の放出源の有効高さ

単位：m

風下方位	平常運転時		想定事故時
	東海第二発電所	東海発電所	
NNE	145	75	95
S	160	95	100
SSW	130	70	85
SW	120	65	85
WSW	140	80	80
W	165	95	80
WNW	180	105	90
NW	155	85	95
NNW	155	75	110
N	160	75	105

（注1）主蒸気管破断事故（主蒸気隔離弁閉鎖後）の放出源の有効高さは、0 mとする。

（注2）平常運転時の場合、表中の方位以外（海側）の有効高さについては、上表の平常運転時の有効高さのうち最も低い値を使用する。

第5.5-5表 放出源の有効高さ

(m)

方位	通常運転時		設計基準事故時
	東海第二発電所	東海発電所	東海第二発電所
N	190	75	105
NNE	200	75	95
NE	195	—	—
ENE	—	—	—
E	—	—	—
ESE	—	—	—
SE	170	—	—
SSE	185	—	115
S	210	95	105
SSW	180	70	100
SW	150	65	110
WSW	195	80	110
W	205	95	115
WNW	205	105	105
NW	220	85	105
NNW	200	75	105

注）通常運転時の海側方位（—で示す方位）の有効高さについては、東海第二発電所は風洞実験を実施した陸側方向の13方位（海を隔てて比較的近距离に陸地が存在するSSE方位、陸側方向の方位に隣接するNE方位、SE方位を含む。）のうち、最低のものを有効高さとする。また、東海発電所は風洞実験を実施した陸側方向の10方位のうち、最低のものを有効高さとする。

なお、平常運転時の東海発電所の有効高さを求めるための風洞実験に当たっては、吹上げ高さの計算には、1981年4月から1982年3月までの風向別風速逆数の平均を使用している。

- ・①
- ・気象変更の伴う風洞実験結果を反映

既許可申請書

第 5.5 - 6 表(1) 風向別大気安定度別風速逆数の総和
 大気安定度観測地点：標高18m
 風向、風速観測地点：標高140m
 単 位： s/m

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F (注)
NNE	0.37	13.28	8.33	115.54	29.76	21.72
NE	0.94	16.22	25.11	195.58	31.00	25.71
ENE	4.23	27.14	20.82	80.21	12.42	11.73
E	5.77	25.67	16.54	67.55	11.01	14.08
ESE	4.81	31.82	8.15	42.70	5.13	11.50
SE	2.91	20.71	9.97	32.26	5.27	10.33
SSE	6.29	34.98	21.83	40.32	11.90	12.23
S	0.70	9.83	6.30	30.44	6.64	16.79
SSW	2.55	8.79	4.35	38.55	7.77	13.44
SW	3.78	23.42	7.56	54.33	17.47	21.70
WSW	4.04	20.28	8.38	40.98	12.69	19.32
W	1.80	38.13	12.26	53.72	14.67	13.98
WNW	1.65	28.72	22.38	91.44	29.91	19.15
NW	2.77	17.57	13.90	102.39	33.90	24.93
NNW	1.27	10.80	6.88	64.54	24.75	23.18
N	1.81	6.10	6.70	50.38	22.55	21.57

(注) 大気安定度 F は G を含む。

第 5.5 - 6 表(2) 風向別大気安定度別風速逆数の総和
 大気安定度観測地点：標高18m
 風向、風速観測地点：標高71m
 単 位： s/m

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F (注)
NNE	1.44	15.42	11.41	123.97	20.58	29.63
NE	2.42	25.18	28.17	177.43	9.81	19.99
ENE	7.64	40.74	26.05	86.86	6.22	18.95
E	6.61	30.89	7.72	35.54	3.58	10.79
ESE	6.86	33.03	5.14	30.75	0.92	23.27
SE	5.00	26.84	6.98	17.90	1.53	14.58
SSE	5.75	34.08	16.49	31.04	2.58	16.61
S	1.87	21.79	15.26	49.32	10.19	23.15
SSW	3.16	12.31	5.75	37.76	6.33	23.67
SW	2.43	18.62	7.04	29.51	7.55	29.60
WSW	1.03	22.12	7.25	18.87	11.89	19.95
W	0.80	32.88	10.58	38.62	15.62	25.47
WNW	0.98	23.00	23.28	118.45	31.36	49.00
NW	0.96	30.96	29.26	176.43	70.43	44.67
NNW	0.98	11.93	11.71	94.52	58.42	41.50
N	0.72	11.72	4.49	73.91	26.52	35.04

(注) 大気安定度 F は G を含む。

変更 (案)

第5.5-9表 風向別大気安定度別風速逆数の総和 (標高148m, 地上高140m)
 観測場所：敷地内A点 (標高148m, 地上高140m) (s/m)

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F
N	0.87	16.25	4.55	37.61	9.89	63.80
NNE	2.24	13.49	4.38	83.07	16.23	68.03
NE	6.03	18.32	21.78	185.23	22.49	82.60
ENE	6.89	32.36	19.96	120.26	13.65	69.80
E	9.87	54.23	17.38	65.00	9.12	40.76
ESE	13.27	38.83	7.53	46.44	8.42	39.56
SE	8.02	35.03	9.96	48.24	5.29	29.15
SSE	4.56	36.70	10.48	28.84	1.30	25.12
S	8.98	41.78	11.59	38.41	5.18	30.20
SSW	5.17	24.93	3.75	29.47	6.74	41.18
SW	1.93	28.05	2.98	31.49	3.90	45.45
WSW	5.73	21.46	3.37	35.03	6.34	65.97
W	2.08	34.83	5.36	31.55	4.29	69.43
WNW	6.30	44.31	9.85	44.87	11.69	84.81
NW	1.46	37.02	11.28	68.80	10.15	98.42
NNW	1.30	17.25	5.37	45.79	15.30	84.99

第5.5-6表 風向別大気安定度別風速逆数の総和 (標高89m, 地上高81m)
 観測場所：敷地内A点 (標高89m, 地上高81m) (s/m)

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F
N	1.53	11.97	2.54	50.08	12.16	52.48
NNE	0.11	10.86	4.01	80.37	17.76	42.01
NE	2.95	16.81	20.68	196.13	13.80	48.66
ENE	4.83	38.99	18.34	103.76	9.52	41.79
E	10.94	39.37	12.05	46.39	2.69	32.06
ESE	8.38	39.13	6.72	34.12	3.88	21.09
SE	15.54	35.25	7.35	34.72	2.01	10.92
SSE	14.25	52.10	12.74	29.15	1.44	20.83
S	3.78	42.74	9.29	42.29	3.46	31.38
SSW	1.28	15.55	2.39	30.53	1.36	35.81
SW	0.50	23.26	1.74	20.18	5.10	46.26
WSW	4.45	16.83	2.36	27.47	2.56	58.11
W	1.14	33.59	5.35	34.56	5.88	67.43
WNW	3.73	62.40	10.90	63.30	10.61	94.99
NW	1.85	32.29	18.33	85.02	23.82	176.06
NNW	0.74	17.35	6.47	55.97	13.52	82.51

- ・①
- ・③ (超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書

第5.5-7表(1) 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均
 大気安定度観測地点：標高18m
 風向、風速観測地点：標高140m
 単位：s/m

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F (注)	全安定度
NNE	2.00	0.52	0.25	0.20	0.25	0.30	0.23
NE	0.41	0.30	0.20	0.16	0.26	0.27	0.18
ENE	0.78	0.42	0.22	0.22	0.39	0.41	0.27
E	0.45	0.39	0.32	0.32	0.19	0.57	0.36
ESE	0.45	0.50	0.32	0.38	0.58	0.59	0.43
SE	0.31	0.28	0.24	0.30	0.62	0.30	0.30
SE E	0.32	0.22	0.18	0.23	0.47	0.28	0.23
S	0.61	0.35	0.18	0.25	0.23	0.35	0.27
SSW	0.59	0.36	0.18	0.24	0.27	0.21	0.25
SW	0.44	0.37	0.18	0.28	0.29	0.26	0.28
WSW	0.74	0.38	0.24	0.33	0.35	0.36	0.34
W	0.53	0.47	0.29	0.34	0.30	0.36	0.36
WNW	0.19	0.38	0.20	0.20	0.24	0.21	0.22
NW	0.63	0.37	0.20	0.19	0.23	0.24	0.21
NNW	1.02	0.48	0.20	0.26	0.24	0.32	0.27
N	1.40	0.78	0.42	0.32	0.35	0.50	0.38

(注) 大気安定度FはGを含む。

第5.5-7表(2) 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均
 大気安定度観測地点：標高18m
 風向、風速観測地点：標高71m
 単位：s/m

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F (注)	全安定度
NNE	1.30	0.47	0.28	0.19	0.26	0.40	0.23
NE	1.14	0.43	0.20	0.17	0.29	0.41	0.20
ENE	0.57	0.44	0.23	0.26	0.39	0.35	0.31
E	0.53	0.51	0.28	0.30	0.55	0.66	0.39
ESE	0.73	0.52	0.26	0.40	0.66	0.51	0.51
SE	0.40	0.38	0.23	0.35	0.35	0.60	0.38
SE E	0.29	0.23	0.18	0.27	0.41	0.66	0.26
S	0.38	0.32	0.18	0.25	0.28	0.44	0.27
SSW	1.01	0.41	0.19	0.24	0.22	0.34	0.28
SW	0.58	0.54	0.24	0.45	0.40	0.52	0.45
WSW	0.45	0.57	0.37	0.33	0.36	0.36	0.39
W	0.72	0.59	0.33	0.33	0.31	0.49	0.41
WNW	0.87	0.50	0.29	0.25	0.27	0.42	0.29
NW	0.86	0.44	0.26	0.21	0.23	0.40	0.25
NNW	0.46	0.49	0.24	0.28	0.30	0.41	0.31
N	0.65	0.64	0.31	0.30	0.31	0.44	0.34

(注) 大気安定度FはGを含む。

変更(案)

第5.5-10表 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均(標高148m, 地上高140m)

観測場所：敷地内A点(標高148m, 地上高140m) (s/m)

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F	全安定度
N	0.69	0.60	0.38	0.41	0.29	0.43	0.42
NNE	1.74	0.64	0.31	0.25	0.27	0.43	0.32
NE	0.82	0.45	0.18	0.15	0.28	0.46	0.21
ENE	0.51	0.40	0.23	0.23	0.29	0.39	0.30
E	0.60	0.42	0.24	0.34	0.36	0.68	0.40
ESE	0.54	0.41	0.25	0.40	0.39	0.93	0.47
SE	0.65	0.46	0.29	0.45	0.47	0.82	0.49
SSE	0.49	0.33	0.24	0.34	0.42	0.62	0.36
S	0.52	0.28	0.18	0.28	0.46	0.45	0.31
SSW	0.60	0.47	0.27	0.33	0.42	0.42	0.40
SW	0.46	0.44	0.17	0.36	0.23	0.33	0.35
WSW	0.43	0.37	0.24	0.40	0.30	0.36	0.36
W	0.49	0.35	0.19	0.33	0.20	0.35	0.33
WNW	0.61	0.34	0.18	0.25	0.25	0.33	0.30
NW	0.63	0.36	0.16	0.25	0.19	0.30	0.27
NNW	0.58	0.49	0.22	0.30	0.22	0.29	0.29

第5.5-7表 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均(標高89m, 地上高81m)

観測場所：敷地内A点(標高89m, 地上高81m) (s/m)

大気安定度 風向	A	B	C	D	E	F	全安定度
N	0.50	0.69	0.25	0.38	0.28	0.41	0.39
NNE	2.00	0.51	0.25	0.22	0.26	0.36	0.27
NE	0.58	0.49	0.16	0.16	0.23	0.42	0.19
ENE	0.46	0.36	0.20	0.22	0.26	0.55	0.28
E	0.43	0.35	0.22	0.35	0.24	0.68	0.37
ESE	0.52	0.50	0.28	0.40	0.30	0.68	0.46
SE	0.70	0.43	0.24	0.40	0.28	0.70	0.43
SSE	0.52	0.31	0.21	0.38	0.28	0.68	0.36
S	0.42	0.29	0.16	0.30	0.31	0.49	0.31
SSW	0.42	0.51	0.20	0.40	0.19	0.41	0.40
SW	0.48	0.52	0.16	0.34	0.39	0.44	0.41
WSW	0.40	0.39	0.29	0.48	0.25	0.41	0.41
W	0.37	0.37	0.20	0.40	0.27	0.39	0.37
WNW	0.46	0.38	0.19	0.28	0.21	0.32	0.31
NW	0.88	0.31	0.19	0.24	0.20	0.26	0.25
NNW	0.35	0.57	0.25	0.33	0.23	0.34	0.33

- ①
- ③ (超音波風向風速計(排気筒風)からドップラーソーダへ変更)

添付2-77

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.5 - 8 表 (1) 風向出現頻度及び風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度

風向, 風速観測地点: 標高 140 m

風 向	風向出現頻度 (%)	風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度(%)
NNE	9.5	5.8
NE	18.7	6.5
ENE	6.7	5.8
E	4.4	8.4
ESE	2.8	8.4
SE	3.1	3.5
SSE	6.2	4.7
S	3.0	3.3
SSW	3.5	3.6
SW	5.2	5.8
WSW	3.5	6.6
W	4.3	9.1
WNW	9.8	6.6
NW	10.5	7.3
NNW	5.5	6.5
N	3.2	8.0

第5.5-11表 風向出現頻度及び風速0.5~2.0m/sの風向出現頻度 (標高148m, 地上高140m)

観測場所: 敷地内A点 (標高148m, 地上高140m) (%)

風 向	風向出現頻度	風速0.5~2.0m/s の風向出現頻度
N	3.6	6.5
NNE	6.7	6.9
NE	18.5	8.4
ENE	9.9	8.8
E	5.6	7.8
ESE	3.7	6.7
SE	3.2	6.3
SSE	3.3	4.0
S	5.1	5.2
SSW	3.2	4.6
SW	3.7	4.7
WSW	4.3	5.7
W	5.1	5.1
WNW	7.7	6.0
NW	9.6	7.7
NNW	6.6	5.6

- ・①
- ・③ (超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.5 - 8 表(2) 風向出現頻度及び風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度

風向, 風速観測地点: 標高 71 m

風 向	風 向 出 現 頻 度 (%)	風 速 0.5~2.0m/s の 風 向 出 現 頻 度 (%)
NNE	10.3	7.1
NE	15.2	6.2
ENE	6.8	8.5
E	2.8	5.9
ESE	2.2	6.8
SE	2.2	3.6
SSE	4.7	3.2
S	5.1	5.3
SSW	3.6	3.2
SW	2.4	7.0
WSW	2.4	4.2
W	3.5	7.3
WNW	9.3	9.0
NW	16.4	8.3
NNW	8.1	7.3
N	5.1	7.1

第5.5-8表 風向出現頻度及び風速0.5~2.0m/sの風向出現頻度
(標高89m, 地上高81m)

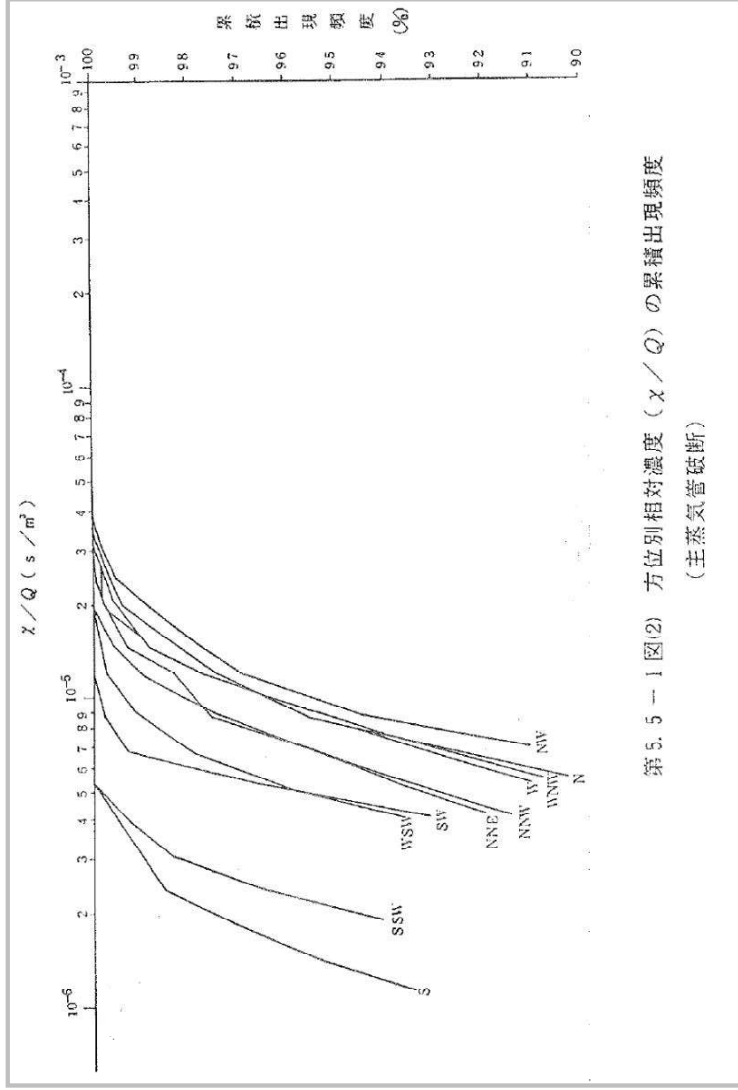
観測場所: 敷地内A点(標高89m, 地上高81m) (%)

風 向	風 向 出 現 頻 度	風 速 0.5~2.0m/s の 風 向 出 現 頻 度
N	3.8	5.6
NNE	6.6	5.5
NE	18.0	6.8
ENE	9.0	7.3
E	4.4	6.1
ESE	2.8	6.9
SE	2.8	5.1
SSE	4.2	5.6
S	4.9	5.3
SSW	2.5	5.0
SW	2.7	5.1
WSW	3.1	5.6
W	4.6	7.1
WNW	9.2	8.2
NW	15.4	8.0
NNW	6.1	6.7

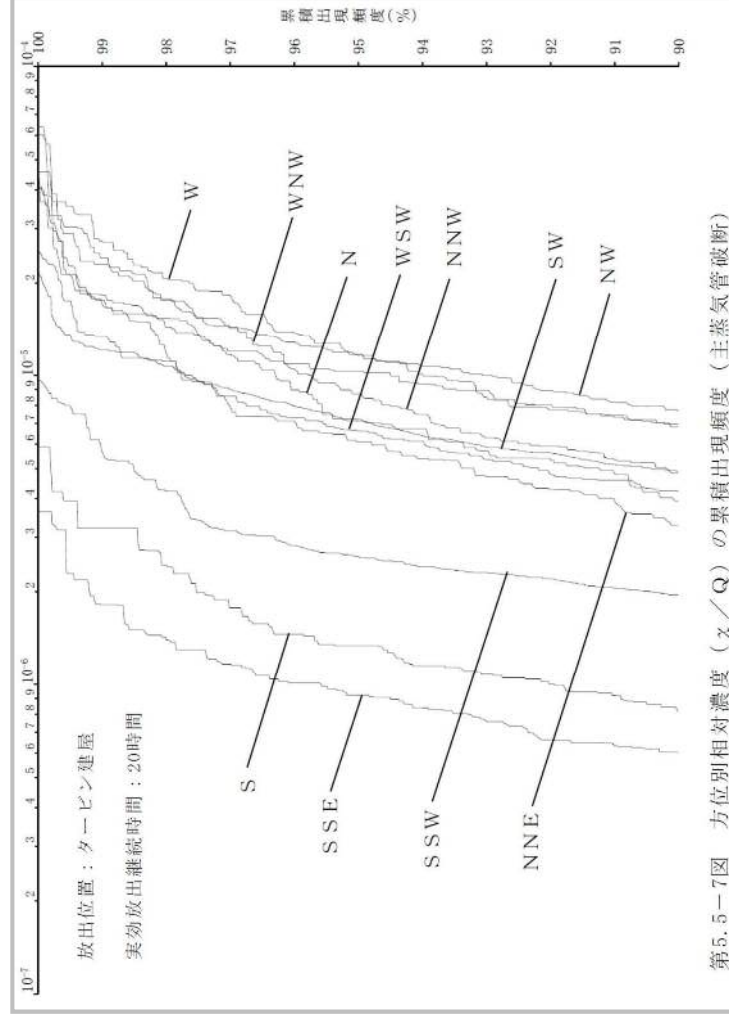
- ・①
- ・③ (超音波風向風速計 (排気筒風) からドップラーソーダへ変更)

既許可申請書	変更 (案)	備考																																																								
<p style="text-align: center;">第 5.5-9 表 想定事故時の線量当量評価に使用する相対濃度及び相対線量</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>相対濃度 (s/m^3)</th> <th>相対線量 (Gy/Bq)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1.1×10^{-6}</td> <td>4.9×10^{-20}</td> </tr> <tr> <td>—</td> <td>1.1×10^{-19}</td> </tr> <tr> <td>1.2×10^{-5}</td> <td>3.8×10^{-19}</td> </tr> <tr> <td>2.6×10^{-6}</td> <td>5.9×10^{-20}</td> </tr> <tr> <td>1.1×10^{-6}</td> <td>6.3×10^{-20}</td> </tr> </tbody> </table> <p style="text-align: center;">原子炉冷却材喪失 放射性気体廃棄物処理施設の破損 主蒸気管破断 (主蒸気隔離弁閉止後) 燃料集合体の落下 制御棒落下</p>	相対濃度 (s/m^3)	相対線量 (Gy/Bq)	1.1×10^{-6}	4.9×10^{-20}	—	1.1×10^{-19}	1.2×10^{-5}	3.8×10^{-19}	2.6×10^{-6}	5.9×10^{-20}	1.1×10^{-6}	6.3×10^{-20}	<p style="text-align: center;">第 5.5-12 表 安全評価に使用する相対濃度 (x/Q) 及び相対線量 (D/Q)</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">事故の種類</th> <th rowspan="2">放出位置</th> <th rowspan="2">実効放出継続時間 (h)</th> <th colspan="2">評価に使用する x/Q (s/m^3) 又は D/Q (Gy/Bq)</th> </tr> <tr> <th>x/Q</th> <th>D/Q</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">原子炉冷却材喪失</td> <td rowspan="2">非常用ガス処理系 排気筒</td> <td>24</td> <td>x/Q</td> <td>8.0×10^{-7}</td> </tr> <tr> <td>24</td> <td>D/Q</td> <td>4.5×10^{-20}</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">放射性気体廃棄物 処理施設の破損</td> <td rowspan="2">排気筒</td> <td>1</td> <td>D/Q</td> <td>8.5×10^{-20}</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>x/Q</td> <td>2.0×10^{-6}</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">燃料集合体の落下</td> <td rowspan="2">非常用ガス処理系 排気筒</td> <td>15</td> <td>D/Q</td> <td>5.1×10^{-20}</td> </tr> <tr> <td>24</td> <td>x/Q</td> <td>8.5×10^{-7}</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">制御棒落下</td> <td rowspan="2">排気筒</td> <td>12</td> <td>D/Q</td> <td>5.1×10^{-20}</td> </tr> <tr> <td>20</td> <td>x/Q</td> <td>1.4×10^{-5}</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">主蒸気管破断</td> <td rowspan="2">タービン建屋</td> <td>1</td> <td>D/Q</td> <td>4.4×10^{-19}</td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 1 排気筒又は非常用ガス処理系排気筒の有効高さは、吹上げ高さを考慮しない高さにおける風洞実験結果の値を使用する。 2 タービン建屋からの放出の場合は、放出源の有効高さを 0m とする。</p>	事故の種類	放出位置	実効放出継続時間 (h)	評価に使用する x/Q (s/m^3) 又は D/Q (Gy/Bq)		x/Q	D/Q	原子炉冷却材喪失	非常用ガス処理系 排気筒	24	x/Q	8.0×10^{-7}	24	D/Q	4.5×10^{-20}	放射性気体廃棄物 処理施設の破損	排気筒	1	D/Q	8.5×10^{-20}	5	x/Q	2.0×10^{-6}	燃料集合体の落下	非常用ガス処理系 排気筒	15	D/Q	5.1×10^{-20}	24	x/Q	8.5×10^{-7}	制御棒落下	排気筒	12	D/Q	5.1×10^{-20}	20	x/Q	1.4×10^{-5}	主蒸気管破断	タービン建屋	1	D/Q	4.4×10^{-19}	<p>備考</p> <p>①</p>
相対濃度 (s/m^3)	相対線量 (Gy/Bq)																																																									
1.1×10^{-6}	4.9×10^{-20}																																																									
—	1.1×10^{-19}																																																									
1.2×10^{-5}	3.8×10^{-19}																																																									
2.6×10^{-6}	5.9×10^{-20}																																																									
1.1×10^{-6}	6.3×10^{-20}																																																									
事故の種類	放出位置	実効放出継続時間 (h)	評価に使用する x/Q (s/m^3) 又は D/Q (Gy/Bq)																																																							
			x/Q	D/Q																																																						
原子炉冷却材喪失	非常用ガス処理系 排気筒	24	x/Q	8.0×10^{-7}																																																						
		24	D/Q	4.5×10^{-20}																																																						
放射性気体廃棄物 処理施設の破損	排気筒	1	D/Q	8.5×10^{-20}																																																						
		5	x/Q	2.0×10^{-6}																																																						
燃料集合体の落下	非常用ガス処理系 排気筒	15	D/Q	5.1×10^{-20}																																																						
		24	x/Q	8.5×10^{-7}																																																						
制御棒落下	排気筒	12	D/Q	5.1×10^{-20}																																																						
		20	x/Q	1.4×10^{-5}																																																						
主蒸気管破断	タービン建屋	1	D/Q	4.4×10^{-19}																																																						

既許可申請書



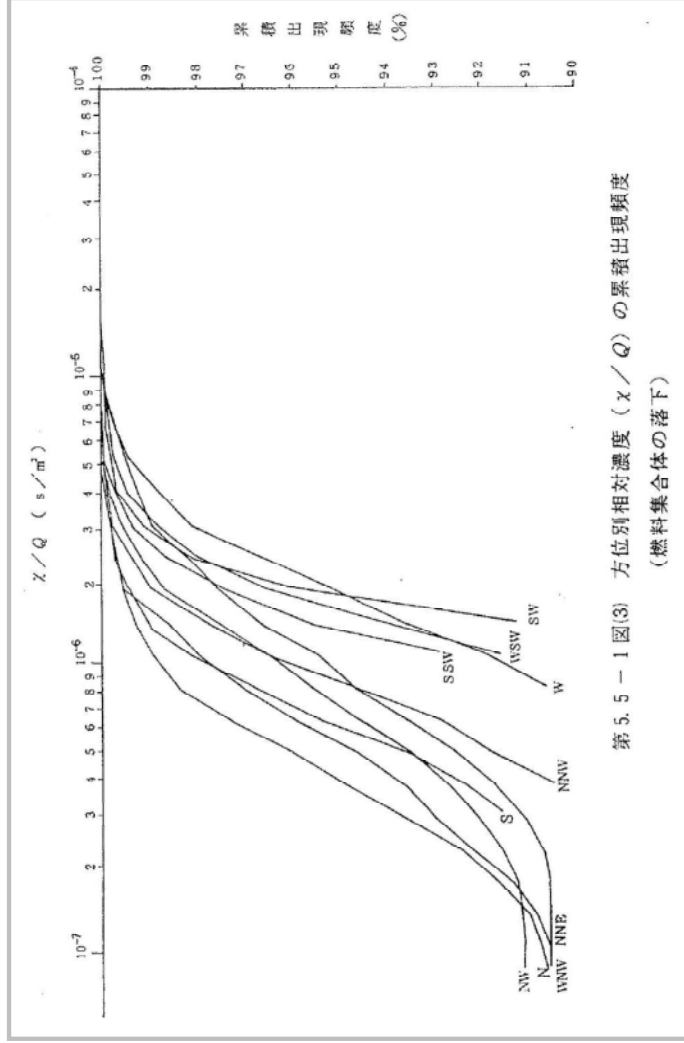
変更 (案)



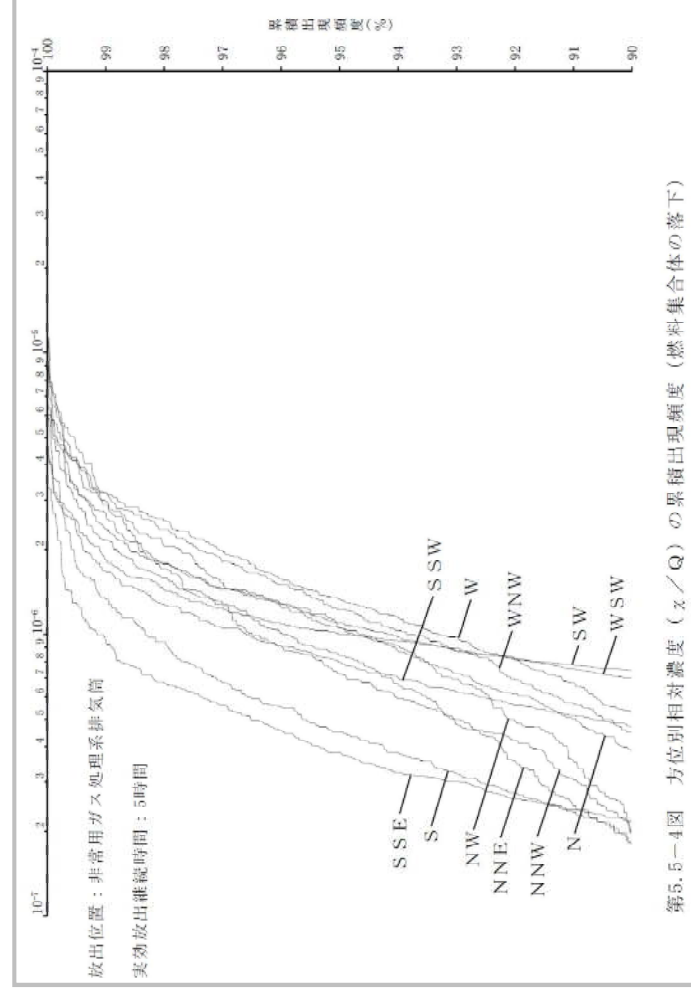
備考

- ・①
- ・④ (SW方位の周辺監視区域境界変更 (評価距離の変更) を反映)

既許可申請書



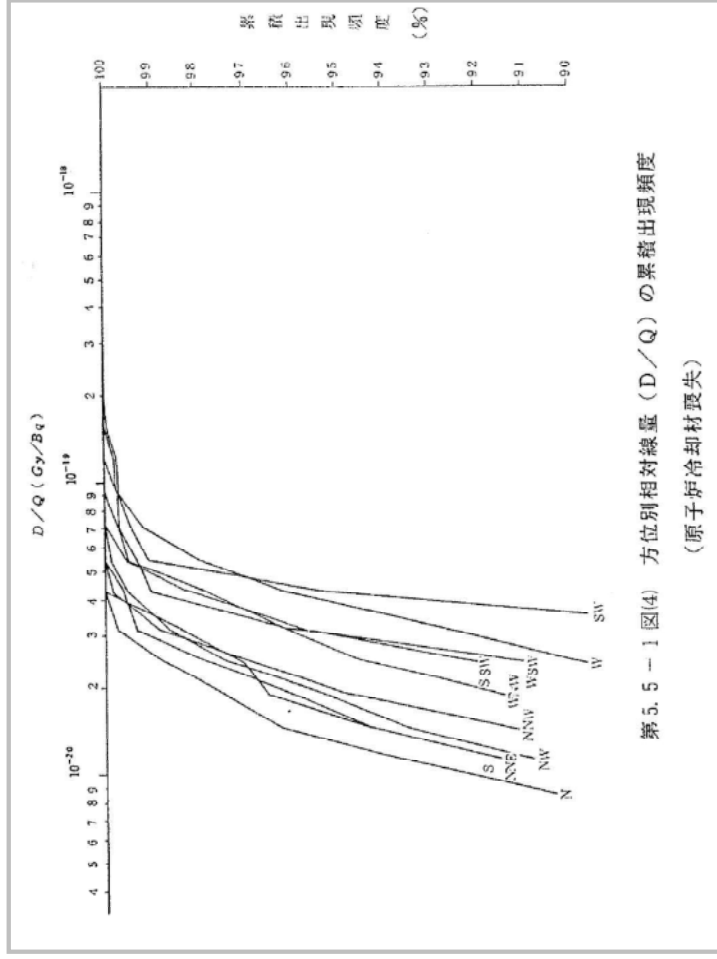
変更 (案)



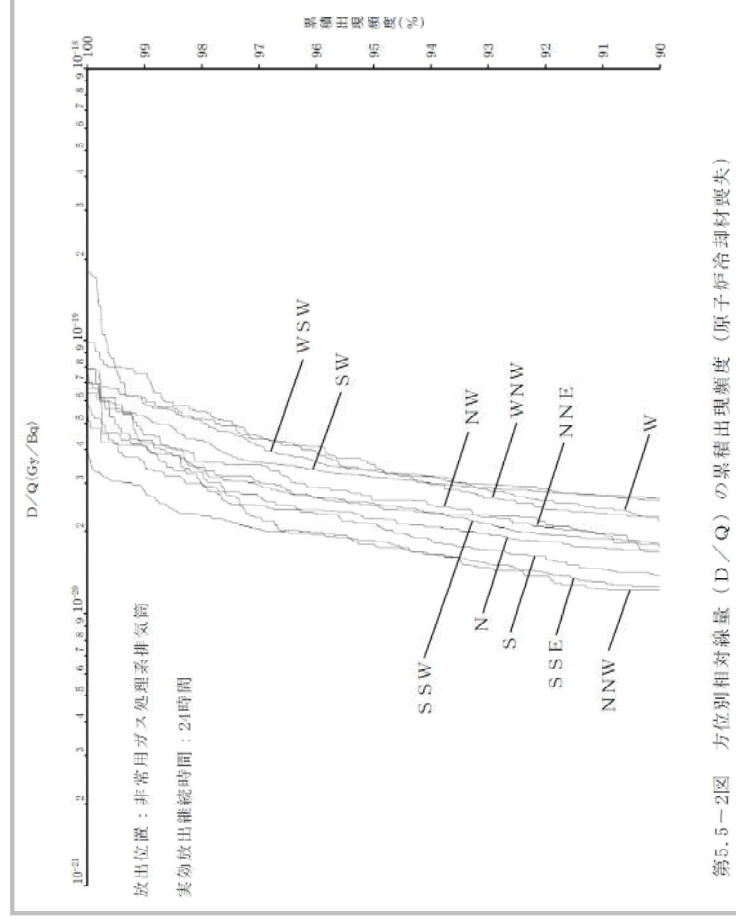
備考

- ・①
- ・④ (SW方位の周辺監視区域境界変更 (評価距離の変更) を反映)

既許可申請書

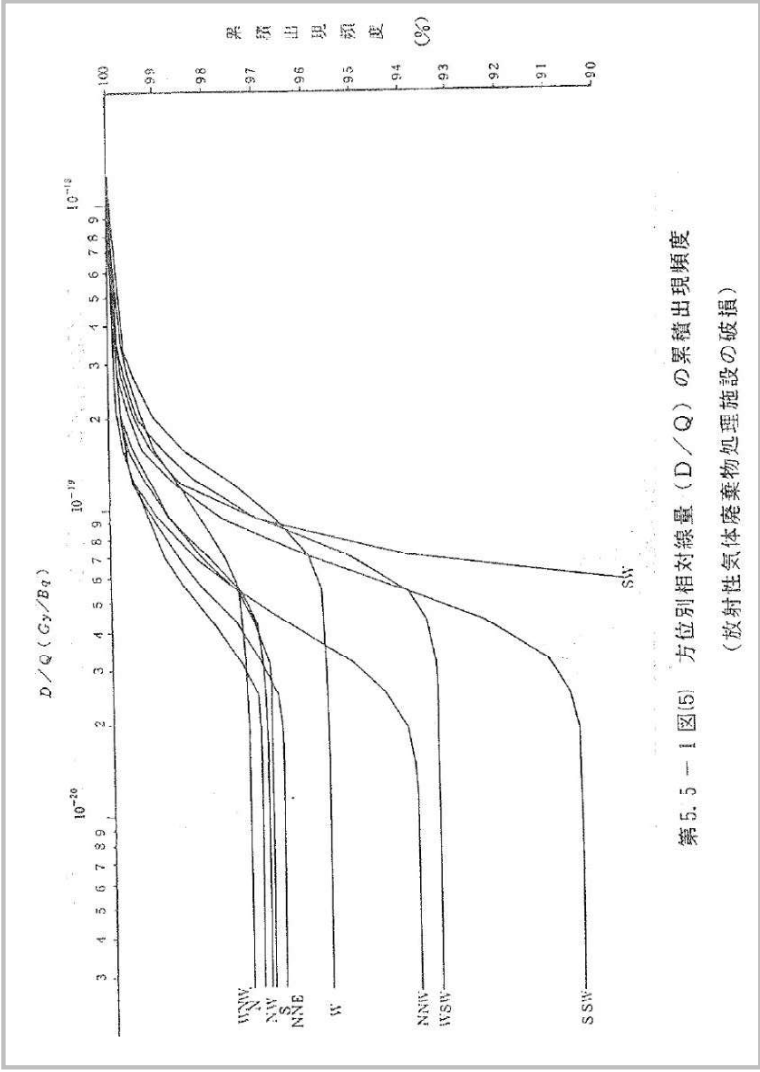
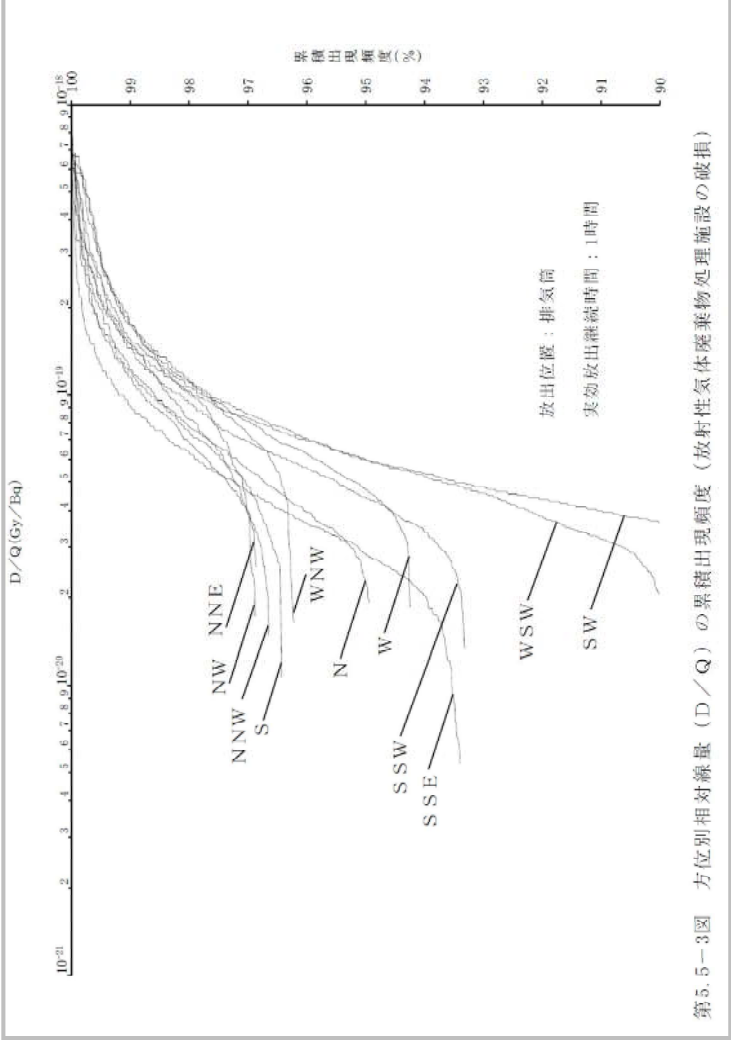


変更 (案)



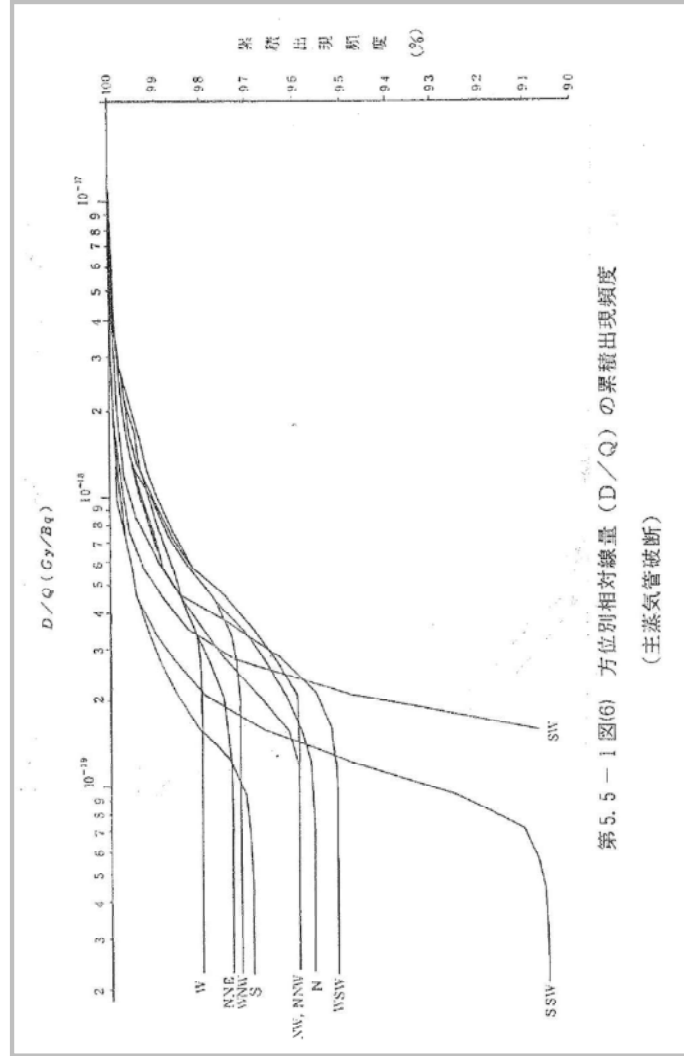
備考

- ・①
- ・④ (SW方位の周辺監視区域境界変更 (評価距離の変更) を反映)

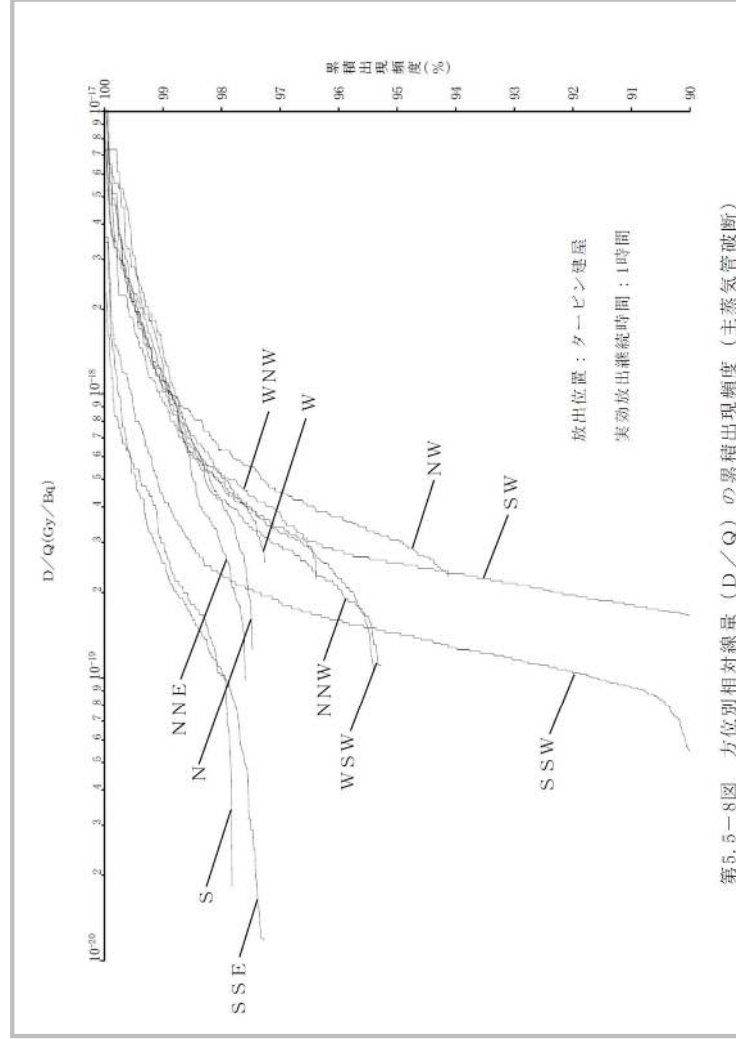
既許可申請書	変更 (案)	備考
 <p>第5.5-1 図(5) 方位別相対線量 (D/Q) の累積出現頻度 (放射性気体廃棄物処理施設の破損)</p>	 <p>第5.5-3 図 方位別相対線量 (D/Q) の累積出現頻度 (放射性気体廃棄物処理施設の破損)</p>	<p>備考</p> <ul style="list-style-type: none"> ① ④ (SW方位の周辺監視区域境界変更 (評価距離の変更) を反映)

①: 気象期間の変更, ②: 気象設備の変更及び追加, ③: 記載の適正化, ④: 周辺監視区域境界の変更

既許可申請書

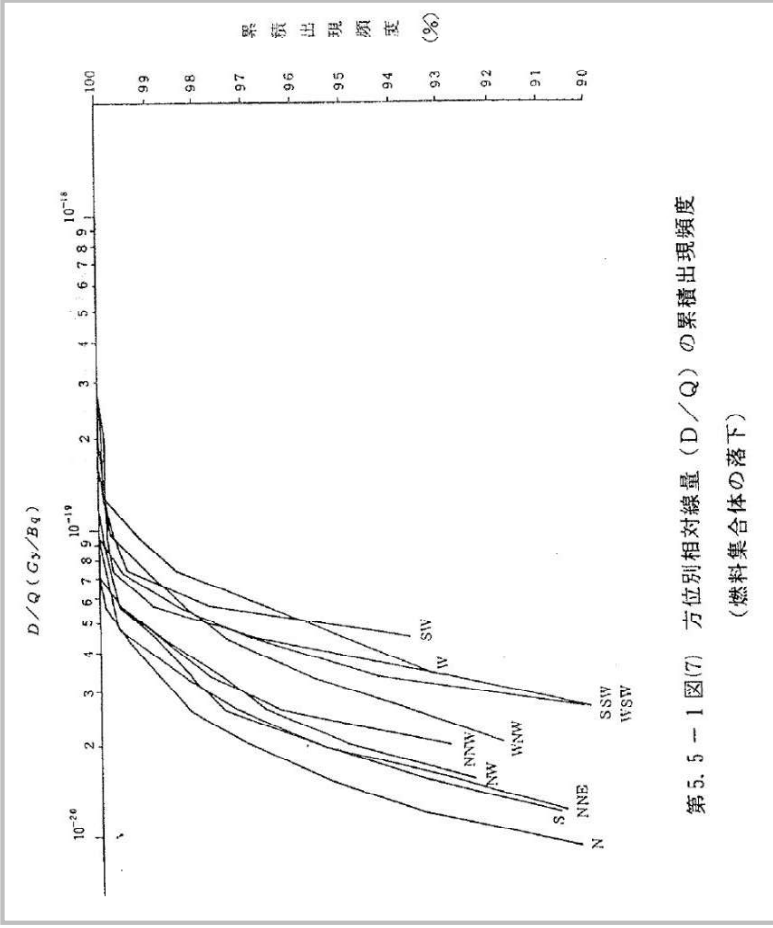
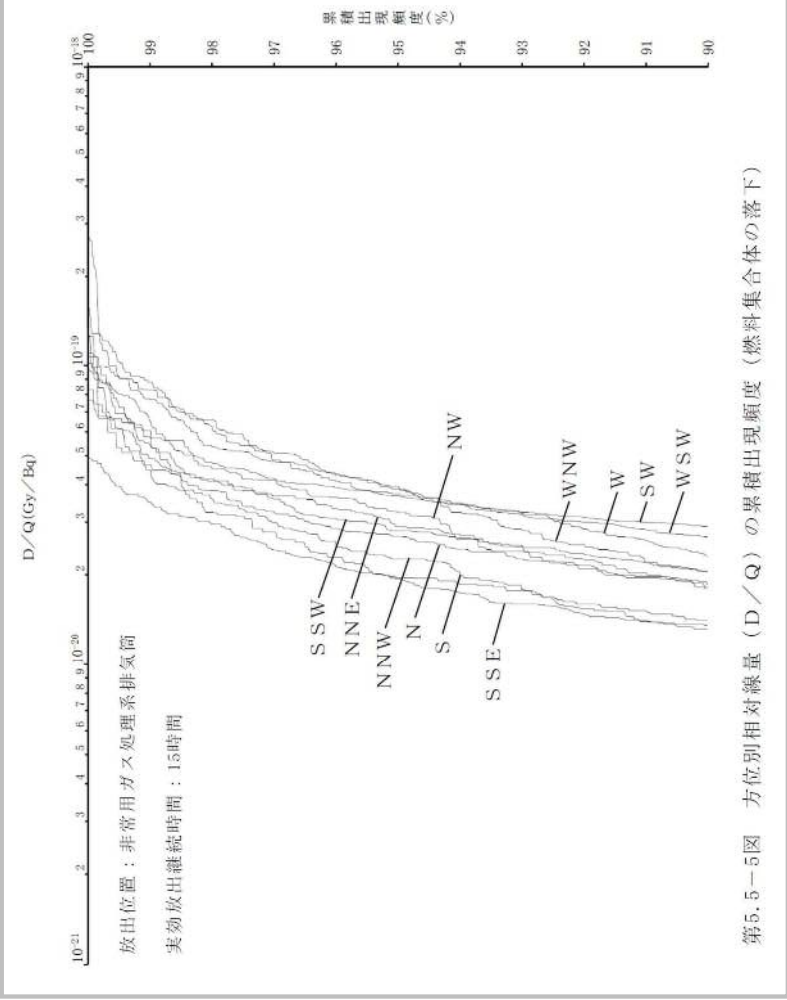


変更 (案)



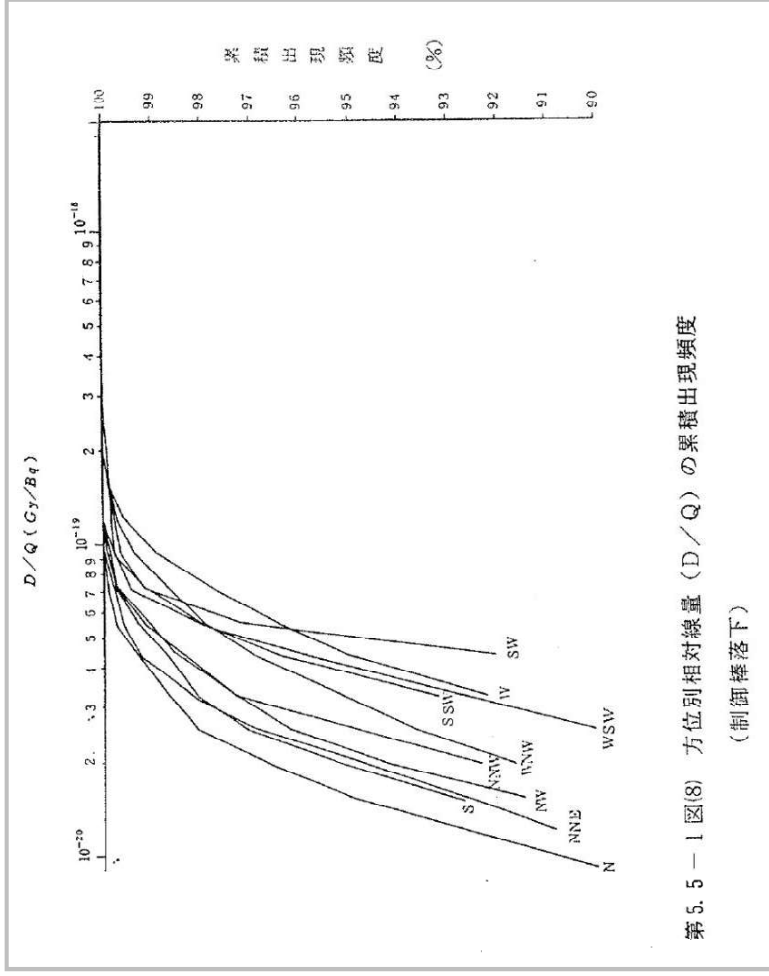
備考

- ・①
- ・④ (SW方位の周辺監視区域境界変更 (評価距離の変更) を反映)

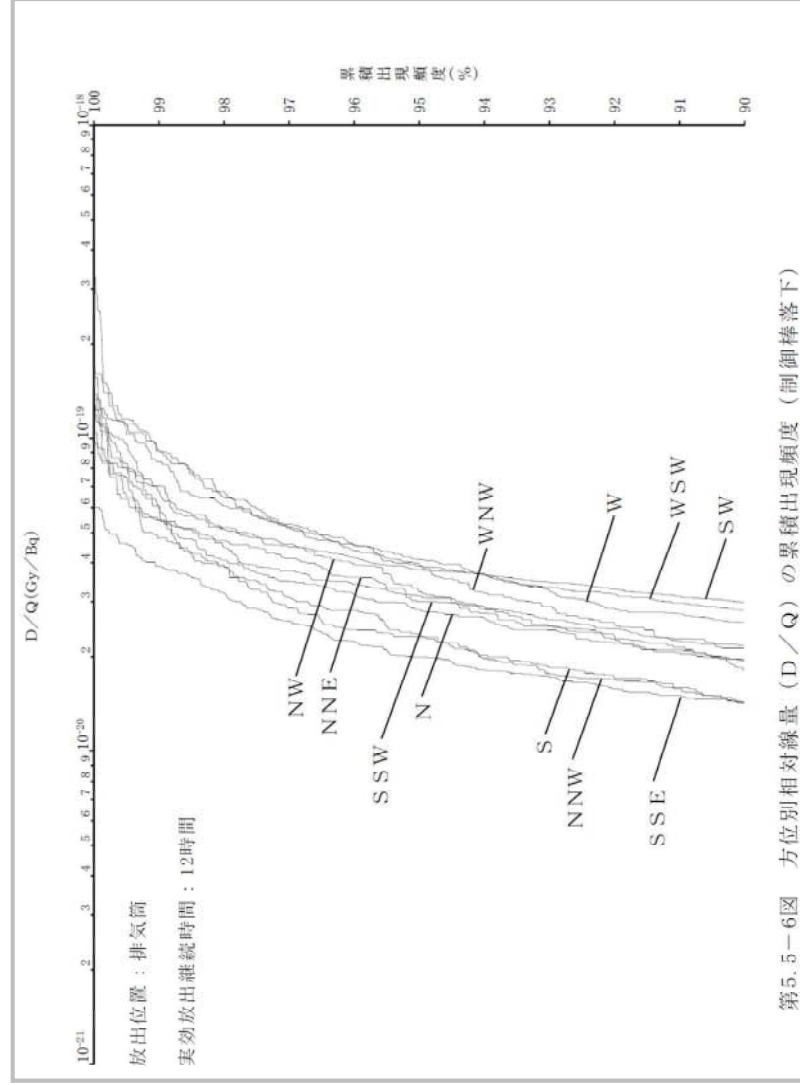
既許可申請書	変更 (案)	備考
 <p>第5.5-1図(7) 方位別相対線量 (D/Q) の累積出現頻度 (燃料集合体の落下)</p>	 <p>第5.5-5図 方位別相対線量 (D/Q) の累積出現頻度 (燃料集合体の落下)</p> <p>放出位置：非常用ガス処理系排気筒 実効放出継続時間：15時間</p>	<p>備考</p> <ul style="list-style-type: none"> ① ④ (SW方位の周辺監視区域境界変更 (評価距離の変更) を反映)

①：気象期間の変更，②：気象設備の変更及び追加，③：記載の適正化，④：周辺監視区域境界の変更

既許可申請書



変更 (案)



備考

- ①
- ④ (SW方位の周辺監視区域境界変更 (評価距離の変更) を反映)

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備 考
<p>1. 放射線防護に関する基本方針</p> <p>1.1 基本的考え方</p> <p>放射線の被ばく管理及び放射性廃棄物の廃棄に当たっては、「核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律」（以下「原子炉等規制法」という。）及び「労働安全衛生法」を遵守し、放射線業務従事者及び周辺監視区域外の公衆が、本発電所に起因する放射線被ばくから十分安全に防護されるように放射線防護対策を講じる。</p> <p>さらに、発電所周辺の一般公衆の受ける線量については、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」に基づき、合理的に達成できる限り低くすることとする。</p> <p>また、放射線の被ばく管理及び放射性廃棄物の廃棄の運用については、「原子炉等規制法」に基づき、保安規定にこれを定める。</p>	<p>1. 放射線防護に関する基本方針</p> <p>1.1 基本的考え方</p> <p>放射線の被ばく管理及び放射性廃棄物の廃棄に当たっては、「核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律」（以下「原子炉等規制法」という。）及び「労働安全衛生法」を遵守し、放射線業務従事者及び周辺監視区域外の公衆が、本発電所に起因する放射線被ばくから十分安全に防護されるように放射線防護対策を講じる。</p> <p>さらに、発電所周辺の一般公衆の受ける線量については、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」に基づき、合理的に達成できる限り低くすることとする。</p> <p>なお、放射線の被ばく管理及び放射性廃棄物の廃棄の運用については、「原子炉等規制法」に基づき、保安規定にこれを定める。</p>	<p>・記載の適正化（先行プラントの記載を反映）</p>

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>2. 遮蔽及び換気</p> <p>2.1 遮蔽</p> <p>2.1.1 遮蔽設計の基準</p> <p>遮蔽は、平常運転時、定期検査時等において、発電所敷地周辺の一般公衆及び放射線業務従事者等が受ける線量が経済産業省告示「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則の規定に基づく線量限度等を定める告示」（以下「線量限度等を定める告示」という。）に定める限度を十分下回るように設計する。</p> <p>また、原子炉施設からの直接線及びスカイシャイン線による人の居住の可能性のある地域における空気カーマが年間50μGy以下となるように設計する。</p> <p>2.1.2 遮蔽設計に際してとられる区域の区分</p> <p>建屋内の遮蔽は、放射線業務従事者の関係各場所への立入頻度、滞在時間等を考慮した上で、外部放射線に係る線量率が第2.1-1表の基準を満足する設計とする。</p> <p>なお、固体廃棄物作業建屋については、第2.1-2表の基準を満足する設計とする。遮蔽設計上の区域区分を第2.1-1図～第2.1-8図に示す。</p> <p>立入りに対する制限は、線量当量率、作業時間、個人の線量等を考慮して定める。また、中央制御室については、想定される事故時においても、中央制御室内にとどまり各種の操作を行う運転員が、過度な被ばくを受けないように遮蔽を行う設計とする。</p> <p>2.2 換気</p> <p>放射線業務従事者を空気中の放射性物質による内部被ばくから防護するため、換気空調設備は以下の条件を満足するように管理する。</p> <p>(1) 換気は系統ごとに行い、空気中の放射性物質による汚染の拡大を防止していること。</p> <p>(2) 各換気系統について空気の供給は清浄区域から行い、空気中の放射性物質による内部被ばくの可能性がある区域に向かって流れていること。</p> <p>(3) フィルタは、所定の性能を維持していること。</p> <p>(4) 各換気系統の容量は、各区域等の換気、除熱を行うのに十分であること。</p> <p>(5) 人が常時立ち入る場所は、空気中の放射性物質の濃度が濃度限度よりも十分低くなっていること。</p>	<p>2. 遮蔽及び換気</p> <p>2.1 遮蔽</p> <p>遮蔽は、通常運転時、施設定期検査時等において、発電所敷地周辺の一般公衆及び放射線業務従事者等が受ける線量が「核原料物質又は核燃料物質の製錬の事業に関する規則等の規定に基づく線量限度等を定める告示」（以下「線量限度等を定める告示」という。）に定められた限度を十分下回るように設計する。</p> <p>放射線業務従事者を外部被ばくから防護するため、遮蔽は関係各区域への立ち入りの頻度、滞在時間等を考慮して第2.1-1表のように管理区域を区分し、これらの基準に適合するよう遮蔽設計を行う。なお、遮蔽の具体的な説明は、添付書類八の「8.3 遮蔽設備」に示す。</p> <p>なお、固体廃棄物作業建屋については、第2.1-2表の基準を満足する設計とする。</p> <p>立入りに対する制限は、線量当量率、作業時間、個人の線量等を考慮して定める。</p> <p>2.2 換気</p> <p>放射線業務従事者を空気中の放射性物質による内部被ばくから防護するため、換気空調設備は次の条件を満足するように管理する。</p> <p>(1) 換気は系統ごとに行い、空気中の放射性物質による汚染の拡大を防止していること。</p> <p>(2) 各換気系統について空気の供給は清浄区域から行い、空気中の放射性物質による内部被ばくの可能性がある区域に向かって流れていること。</p> <p>(3) フィルタは、所定の性能を維持していること。</p> <p>(4) 各換気系統の容量は、各区域等の換気、除熱を行うのに十分であること。</p> <p>(5) 人が常時立ち入る場所は、空気中の放射性物質の濃度が濃度限度よりも十分低くなっていること。</p> <p>換気設備の具体的な説明は、添付書類八の「8.2 換気空調設備」に示す。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 遮蔽区分図（第2.1-1図～第2.1-8図）の記載を添付書類八へ移動したことによる記載の適正化（先行プラントの記載内容の反映） 法令の改正に伴う記載の適正化 記載の適正化（先行プラントの記載を反映） 中央制御室の遮蔽の記載は添付書類八へ移動（先行プラントの記載の反映） 記載の適正化（先行プラントの記載を反映） 記載の適正化（先行プラントの記載を反映）

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備 考
<div style="border: 1px solid black; height: 600px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 600px; width: 100%;"></div>	<p>・⑤及び管理区域の一部変更（緊急用海水ポンプピット設置に伴うドラム搬出口建屋の解体）</p>

添付3-3

既許可申請書	変更（案）	備 考
<div style="border: 1px solid black; height: 500px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 500px; width: 100%;"></div>	<ul style="list-style-type: none"> ・②（海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置を波の影響を受けない位置へ変更，南側の周辺監視区域境界は日本原子力研究開発機構との用地調整に伴う変更） ・⑤ <p><具体的な変更点></p> <ul style="list-style-type: none"> a: 波の影響を受けないように海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置を後退。 b: 波の影響を受けないように放水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。 c: 波の影響を受けないように取水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。 d: 高台部分（JAEAの土地）を東二敷地に変更することによる敷地境界の変更に伴う周辺監視区域境界の変更 e: 国道 245 号線拡幅工事に伴う発電所進入道路の変更による周辺監視区域境界の変更

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>3. 発電所内の区域区分</p> <p>3.2 管理区域内の管理</p> <p>管理区域については、「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則」（以下「実用炉規則」という。）（第78条）に従って、次の措置を講ずる。</p> <p>(1) 壁、柵等の区画物によって区画するほか、標識を設けることによって明らかに他の場所と区別し、かつ、放射線等の危険性の程度に応じて人の立入制限、鍵の管理等の措置を講ずる。</p> <p>(2) 放射性物質を経口摂取するおそれのある場所での飲食及び喫煙を禁止する。</p> <p>(3) 床、壁、その他人の触れるおそれのある物であって、放射性物質によって汚染されたものの表面の放射性物質の密度が、経済産業省告示「線量限度等を定める告示」（第5条）に定める表面密度限度を超えないようにする。</p> <p>(4) 管理区域から人が退去し、又は物品を持ち出そうとする場合には、その者の身体及び衣服、履物等身体に着用している物並びにその持ち出そうとする物品（その物品を容器に入れ又は包装した場合には、その容器又は包装）の表面の放射性物質の密度が(3)の表面密度限度の10分の1を超えないようにする。</p> <p>また、管理区域内は、場所により外部放射線に係る線量当量率、放射線業務従事者等の立入頻度等に差異があるので、これらのことを考慮して適切な管理を行う。</p> <p>3.4 周辺監視区域内の管理</p> <p>「実用炉規則」（第78条）の規定に基づき、周辺監視区域は人の居住を禁止し、境界に柵又は標識を設ける等の方法によって周辺監視区域に業務上立ち入る者以外の立入りを制限する。</p> <p>周辺監視区域の外部放射線に係る線量、空气中又は水中の放射性物質の濃度及び表面の放射性物質の密度は、経済産業省告示「線量限度等を定める告示」（第2条）に定める値以下に保つ。</p> <p>具体的には、外部放射線に係る線量については、管理区域の外側において3月間について1.3mSvを超えないよう管理する。空气中及び水中の放射性物質の濃度については、管理区域との境界を壁等によって区画するとともに、管理区域内の放射性物質の濃度の高い空気や水が容易に流出することのないよう換気系統及び排水系統を管理する。</p> <p>また、表面の放射性物質の密度については、「3.2 管理区域内の管理」に述べたように人及び物品の出入管理を十分に行う。</p> <p>これらの基準を満足していることを確認するために、管理区域外において、定期的に外部放射線に係る線量当量率及び外部放射線による線量当量の測定を行うとともに、必要に応じて、随時放射線サーベイを行う。</p> <p>なお、周辺監視区域外においては、経済産業省告示「線量限度等を定める告示」（第3条及び第9条）に定める線量限度及び濃度限度以下に管理するが、その方法については、</p>	<p>3. 発電所内の区域区分</p> <p>3.2 管理区域内の管理</p> <p>管理区域については、「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則」（以下「実用炉規則」という。）（第78条）に従って、次の措置を講ずる。</p> <p>(1) 壁、柵等の区画物によって区画するほか、標識を設けることによって明らかに他の場所と区別し、かつ、放射線等の危険性の程度に応じて人の立入制限、鍵の管理等の措置を講ずる。</p> <p>(2) 放射性物質を経口摂取するおそれのある場所での飲食及び喫煙を禁止する。</p> <p>(3) 床、壁、その他人の触れるおそれのある物であって、放射性物質によって汚染されたものの表面の放射性物質の密度が、「線量限度等を定める告示」（第4条）に定める表面密度限度を超えないようにする。</p> <p>(4) 管理区域のうち汚染又は汚染のおそれのある区域から人が退去し、又は物品を持ち出そうとする場合には、その者の身体及び衣服、履物等身体に着用している物並びにその持ち出そうとする物品（その物品を容器に入れ又は包装した場合には、その容器又は包装）の表面の放射性物質の密度が(3)の表面密度限度の10分の1を超えないようにする。</p> <p>また、管理区域内は、場所により外部放射線に係る線量当量率、放射線業務従事者等の立入頻度等に差異があるので、これらのことを考慮して適切な管理を行う。</p> <p>3.4 周辺監視区域内の管理</p> <p>「実用炉規則」（第78条）の規定に基づき、周辺監視区域は人の居住を禁止し、境界に柵又は標識を設ける等の方法によって周辺監視区域に業務上立ち入る者以外の立入りを制限する。</p> <p>周辺監視区域の外部放射線に係る線量、空气中又は水中の放射性物質の濃度及び表面の放射性物質の密度は、「線量限度等を定める告示」（第1条）に定める値以下に保つ。</p> <p>具体的には、外部放射線に係る線量については、管理区域の外側において3月間について1.3mSvを超えないよう管理する。空气中及び水中の放射性物質の濃度については、管理区域との境界を壁等によって区画するとともに、管理区域内の放射性物質の濃度の高い空気や水が容易に流出することのないよう換気系統及び排水系統を管理する。</p> <p>また、表面の放射性物質の密度については、「3.2 管理区域内の管理」に述べたように人及び物品の出入管理を十分に行う。</p> <p>これらの基準を満足していることを確認するために、管理区域外において、定期的に外部放射線に係る線量当量率及び外部放射線による線量当量の測定を行うとともに、必要に応じて、随時放射線サーベイを行う。</p> <p>なお、周辺監視区域外においては、「線量限度等を定める告示」（第2条及び第8条）に定める線量限度及び濃度限度以下に管理するが、その方法については、放射性気体廃棄物</p>	<p>・法令の改正に伴う記載の適正化</p> <p>・記載の適正化（先行プラントの記載を反映）</p> <p>・法令の改正に伴う記載の適正化</p> <p>・法令の改正に伴う記載の適正化</p>

添付3-5

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備 考
<p>放射性気体廃棄物は「4.2.3 放出管理」、放射性液体廃棄物は「4.3.3 放出管理」で述べる。</p> <p>また、その監視については、「6.4 発電所外に関する放射線監視」で述べる。</p>	<p>は「4.2.3 放出管理」、放射性液体廃棄物は「4.3.3 放出管理」で述べる。</p> <p>また、その監視については、「6.4 発電所外に関する放射線監視」で述べる。</p>	

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>4. 放射性廃棄物処理</p> <p>4.1 放射性廃棄物処理の基本的考え方</p> <p>放射性廃棄物処理施設の設計及び管理に際しては、「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則」を遵守するとともに、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」の考え方に基づくものとする。</p> <p>(1) 気体廃棄物については、その主要なものである蒸気式空気抽出器排ガスを30分減衰配管及び活性炭式希ガスホールドアップ装置に通し、排ガス中の放射能を十分減衰させ、監視しつつ排気筒から大気に放出する。</p> <p>また、他の排気については、下記の対策を講じることにより、排気中の放射性物質の低減を図った後、監視しつつ排気筒から大気に放出する。</p> <p>a. タービン軸封蒸気には復水貯蔵タンク水を加熱し蒸発させた放射性物質の濃度が十分低い蒸気を用いることにより、軸封部の戻り蒸気が流入するタービングランド蒸気復水器からの排ガス中の放射性物質を無視できる程度とする。</p> <p>b. 真空ポンプは原子炉の起動時、原子炉で発生した蒸気が復水器に流入するまで使用することとし、真空ポンプからの排ガス中の放射性物質濃度を十分低いものとする。</p> <p>c. 換気系の排気については、フィルタで処理することにより、排気中に含まれる粒子状放射性物質を無視できる程度とする。</p> <p>なお、雑固体廃棄物焼却設備及び雑固体減容処理設備からの排ガスは、フィルタで処理することにより、排気中に含まれる粒子状放射性物質を無視できる程度とする。</p> <p>(2) 液体廃棄物については、液体廃棄物処理系において濃縮等の処理を行い、原則として放射性物質の濃度がごく低い廃液を除いては環境放出を行わず、補給水として再使用する。</p> <p>(3) 固体廃棄物は、その種類に応じてタンク等に貯蔵するか、又はドラム缶等に詰めて固体廃棄物貯蔵庫又は固体廃棄物作業建屋の廃棄体搬出作業エリアに貯蔵保管する。また、必要に応じて、固体廃棄物を廃棄事業者の廃棄施設へ廃棄する。ただし、廃棄体搬出作業エリアには、固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管したドラム缶を含めて、固体廃棄物を詰めたドラム缶を、廃棄事業者の廃棄施設へ廃棄するための検査及び搬出までの間に限り、貯蔵保管する。原子炉冷却材浄化系及び燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩装置から発生する使用済粉末樹脂は、使用済粉末樹脂貯蔵タンクに貯蔵するか、又は貯蔵し放射能を減衰させた後、固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し貯蔵保管する。復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置から発生する使用済樹脂、液体廃棄物処理系助材型ろ過装置から発生する廃スラッジは貯蔵タンクに貯蔵するか、又は貯蔵し放射能を減衰させた後、雑固体廃棄物焼却設備で焼却し、焼却灰は不燃性雑固体廃棄物として処理するか、固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し貯蔵保管する。濃縮廃液は、濃縮廃液貯蔵</p>	<p>4. 放射性廃棄物処理</p> <p>4.1 放射性廃棄物処理の基本的考え方</p> <p>放射性廃棄物処理施設の設計及び管理に際しては、「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則」を遵守するとともに、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」の考え方に基づくものとする。</p> <p>(1) 気体廃棄物については、その主要なものである蒸気式空気抽出器排ガスを30分減衰配管及び活性炭式希ガスホールドアップ装置に通し、排ガス中の放射能を十分減衰させ、監視しつつ排気筒から大気に放出する。</p> <p>また、他の排気については、下記の対策を講じることにより、排気中の放射性物質の低減を図った後、監視しつつ排気筒から大気に放出する。</p> <p>a. タービン軸封蒸気には復水貯蔵タンク水を加熱し蒸発させた放射性物質の濃度が十分低い蒸気を用いることにより、軸封部の戻り蒸気が流入するタービングランド蒸気復水器からの排ガス中の放射性物質を無視できる程度とする。</p> <p>b. 真空ポンプは原子炉の起動時、原子炉で発生した蒸気が復水器に流入するまで使用することとし、真空ポンプからの排ガス中の放射性物質濃度を十分低いものとする。</p> <p>c. 換気系の排気については、フィルタで処理することにより、排気中に含まれる粒子状放射性物質を無視できる程度とする。</p> <p>なお、雑固体廃棄物焼却設備及び雑固体減容処理設備からの排ガスは、フィルタで処理することにより、排気中に含まれる粒子状放射性物質を無視できる程度とする。</p> <p>(2) 液体廃棄物については、液体廃棄物処理系において濃縮等の処理を行い、原則として放射性物質の濃度がごく低い廃液を除いては環境放出を行わず、補給水として再使用する。</p> <p>(3) 固体廃棄物は、その種類に応じてタンク等に貯蔵するか、又はドラム缶等に詰めて固体廃棄物貯蔵庫又は固体廃棄物作業建屋の廃棄体搬出作業エリアに貯蔵保管する。また、必要に応じて、固体廃棄物を廃棄事業者の廃棄施設へ廃棄する。ただし、廃棄体搬出作業エリアには、固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管したドラム缶を含めて、固体廃棄物を詰めたドラム缶を、廃棄事業者の廃棄施設へ廃棄するための検査及び搬出までの間に限り、貯蔵保管する。原子炉冷却材浄化系及び燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩装置から発生する使用済粉末樹脂は、使用済粉末樹脂貯蔵タンクに、また、非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジはクラッドスラリタンクに貯蔵する。復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置から発生する使用済樹脂及び液体廃棄物処理系助材型ろ過装置から発生する廃スラッジは貯蔵タンクに貯蔵するか又は貯蔵し放射能を減衰させた後、雑固体廃棄物焼却設備で焼却し、焼却灰は不燃性雑固体廃棄物として処理する。濃縮廃液は、濃縮廃液貯蔵タンクで放射能を減衰させた後、減容固化設備で乾燥・造粒固化後、容器に詰めて減容固化体貯蔵室に貯蔵するか、又は貯蔵した後、セメント混練固化装置でドラム</p>	<p>・記載の適正化</p> <p>・記載の適正化</p> <p>・記載の適正化（工認記載との適合）</p> <p>・固化装置（セメント固化式）を撤去するため</p>

添付3-7

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>タンクで放射能を減衰させた後、固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し貯蔵保管する。あるいは、放射能を減衰させた後、減容固化設備で乾燥・造粒固化後、容器に詰めて減容固化体貯蔵室に貯蔵するか、貯蔵した後、セメント混練固化装置でドラム缶内に固化材（セメント）と混練して固化し貯蔵保管する。可燃性雑固体廃棄物は、ドラム缶等に詰めて貯蔵保管するか、又は雑固体廃棄物焼却設備で焼却し、焼却灰は不燃性雑固体廃棄物として処理する。また、不燃性雑固体廃棄物は、仕分けし、圧縮可能なものは圧縮減容し、必要に応じて雑固体減容処理設備で溶融・焼却した後、ドラム缶等に詰めて貯蔵保管するか、固型化材（モルタル）を充填してドラム缶内に固型化し貯蔵保管する。なお、使用済制御棒等の放射化された機器は、使用済燃料プールに貯蔵した後、サイトバンカプールに貯蔵保管する。</p> <p>第6給水加熱器の取替えに伴い取り外した第6給水加熱器3基等は、給水加熱器保管庫に貯蔵保管した後に仕分け、切断し、不燃性雑固体廃棄物として処理する。</p> <p>4.3 液体廃棄物処理</p> <p>4.3.1 液体廃棄物の発生源</p> <p>液体廃棄物の主なものは、各建屋の機器からのドレン、各建屋の床ドレン、再生廃液等の化学廃液及び洗濯廃液である。これらの主要な廃液のほかには雑固体減容処理設備の排ガス洗浄廃液がある。液体廃棄物処理系の放射性物質濃度等説明図を第4.3-1図に示す。</p> <p>a. 機器ドレン廃液</p> <p>機器ドレン廃液は、ポンプ、弁等各機器からの漏えい水、サンプルラインの排出液等からなり、化学的純度は高く脱塩水に近いが放射能レベルは通常高い（約$3.7 \times 10^3 \text{Bq/cm}^3$）。</p> <p>これらは、液体廃棄物処理系の機器ドレン処理系で処理する。</p> <p>ろ過装置及び脱塩装置で処理した処理水（約$3.7 \times 10^1 \text{Bq/cm}^3$）は復水貯蔵タンクに回収し、再使用する。</p> <p>b. 床ドレン廃液</p> <p>床ドレン廃液は、原子炉建屋、タービン建屋、廃棄物処理建屋等で発生する。化学的純度は低く、放射能レベルは一定ではないが比較的低い（約$3.7 \times 10^2 \text{Bq/cm}^3$）。</p> <p>これらは、通常は液体廃棄物処理系の再生廃液処理系に送り濃縮処理する。濃縮装置で処理した処理水は原則として機器ドレン処理系に送り回収、再使用するが、脱塩装置で処理した後、環境に放出する場合もある。</p> <p>なお、放射能レベルの低い場合には、床ドレン処理系のろ過装置で処理した後、環境に放出することもある。</p> <p>c. 化学廃液</p> <p>化学廃液は、脱塩装置樹脂の再生廃液及び分析室ドレン等からなる。化学的純度は低く、酸性又はアルカリ性であることが多く、放射能レベルは一般的に高い（約$3.7 \times 10^3 \text{Bq/cm}^3$）。</p>	<p>缶内に固化材（セメント）と混練して固化し貯蔵保管する。可燃性雑固体廃棄物は、ドラム缶等に詰めて貯蔵保管するか又は雑固体廃棄物焼却設備で焼却し、焼却灰は不燃性雑固体廃棄物として処理する。また、不燃性雑固体廃棄物は、仕分けし、圧縮可能なものは圧縮減容し、必要に応じて雑固体減容処理設備で溶融・焼却した後、ドラム缶等に詰めて貯蔵保管するか又は固型化材（モルタル）を充填してドラム缶内に固型化し貯蔵保管する。なお、使用済制御棒等の放射化された機器は、使用済燃料プールに貯蔵した後、サイトバンカプールに貯蔵保管する。</p> <p>第6給水加熱器の取替えに伴い取り外した第6給水加熱器3基等は、給水加熱器保管庫に貯蔵保管した後に仕分け、切断し、不燃性雑固体廃棄物として処理する。</p> <p>4.3 液体廃棄物処理</p> <p>4.3.1 液体廃棄物の発生源</p> <p>液体廃棄物の主なものは、各建屋の機器からのドレン、各建屋の床ドレン、再生廃液等の化学廃液及び洗濯廃液である。これらの主要な廃液のほかには雑固体減容処理設備の排ガス洗浄廃液がある。液体廃棄物処理系の放射性物質濃度等説明図を第4.3-1図に示す。</p> <p>a. 機器ドレン廃液</p> <p>機器ドレン廃液は、ポンプ、弁等各機器からの漏えい水、サンプルラインの排出液等からなり、化学的純度は高く脱塩水に近いが放射能レベルは通常高い（約$3.7 \times 10^3 \text{Bq/cm}^3$）。</p> <p>これらは、液体廃棄物処理系の機器ドレン処理系で処理する。</p> <p>ろ過装置及び脱塩装置で処理した処理水（約$3.7 \times 10^1 \text{Bq/cm}^3$）は復水貯蔵タンクに回収し、再使用する。</p> <p>b. 床ドレン廃液</p> <p>床ドレン廃液は、原子炉建屋、タービン建屋、廃棄物処理建屋等で発生する。化学的純度は低く、放射能レベルは一定ではないが比較的低い（約$3.7 \times 10^2 \text{Bq/cm}^3$）。</p> <p>これらは、液体廃棄物処理系の再生廃液処理系に送り濃縮処理する。濃縮装置で処理した処理水は原則として機器ドレン処理系に送り回収、再使用するが、脱塩装置で処理した後、環境に放出する場合もある。</p> <p>c. 化学廃液</p> <p>化学廃液は、脱塩装置樹脂の再生廃液及び分析室ドレン等からなる。化学的純度は低く、酸性又はアルカリ性であることが多く、放射能レベルは一般的に高い（約$3.7 \times 10^3 \text{Bq/cm}^3$）。</p>	<p>・固化装置（セメント固化式）を撤去するため</p> <p>・助材型ろ過装置を撤去するため</p>

既許可申請書	変更（案）	備 考
<p>これらは、液体廃棄物処理系の再生廃液処理系で処理する。</p> <p>濃縮装置で処理した処理水は、原則として機器ドレン処理系に送り回収、再使用するが、脱塩装置で処理した後、環境に放出する場合もある。</p> <p>d. 洗濯廃液</p> <p>洗濯廃液は、防護衣類等を水洗いする際に生ずる廃液、手洗・シャワ廃液であり、化学的純度は低く、放射能レベルも低い（約$3.7 \times 10^{-2} \text{Bq/cm}^3$）。</p> <p>これらは、液体廃棄物処理系の洗濯廃液処理系で処理する。</p> <p>ろ過装置で処理した処理水は放射能濃度が低いことを確認した<u>うえ</u>で復水器冷却水と混合、希釈して環境へ放出する。</p> <p>なお、汚染の程度の比較的高い上着類については、原則として水洗いを行わない。</p> <p>e. 排ガス洗浄廃液</p> <p>排ガス洗浄廃液は、雑固体減容処理設備の排ガス処理装置の運転時に生ずる廃液であり、化学的純度は低く、放射能レベルも低い（$\sim 0 \text{Bq/cm}^3$）。排ガス洗浄廃液は、排ガス洗浄廃液サンプルタンクに移し、放射能濃度が低いことを確認した<u>うえ</u>で復水器冷却水と混合、希釈して環境へ放出する。</p>	<p>これらは、液体廃棄物処理系の再生廃液処理系で処理する。</p> <p>濃縮装置で処理した処理水は、原則として機器ドレン処理系に送り回収、再使用するが、脱塩装置で処理した後、環境に放出する場合もある。</p> <p>d. 洗濯廃液</p> <p>洗濯廃液は、防護衣類等を水洗いする際に生ずる廃液、手洗・シャワ廃液であり、化学的純度は低く、放射能レベルも低い（約$3.7 \times 10^{-2} \text{Bq/cm}^3$）。</p> <p>これらは、液体廃棄物処理系の洗濯廃液処理系で処理する。</p> <p>ろ過装置で処理した処理水は放射能濃度が低いことを確認した<u>上</u>で復水器冷却水と混合、希釈して環境へ放出する。</p> <p>なお、汚染の程度の比較的高い上着類については、原則として水洗いを行わない。</p> <p>e. 排ガス洗浄廃液</p> <p>排ガス洗浄廃液は、雑固体減容処理設備の排ガス処理装置の運転時に生ずる廃液であり、化学的純度は低く、放射能レベルも低い（$\sim 0 \text{Bq/cm}^3$）。排ガス洗浄廃液は、排ガス洗浄廃液サンプルタンクに移し、放射能濃度が低いことを確認した<u>上</u>で復水器冷却水と混合、希釈して環境へ放出する。</p>	<p>・記載の適正化</p>

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書					変更（案）					備考
第 4. 4-1 表 固体廃棄物推定発生量					第 4. 4-1 表 固体廃棄物推定発生量					・記載の適正化 ・記載の適正化（工認記載との適合） ・助材型ろ過装置を撤去するため
種類	年間推定発生量				種類	年間推定発生量				
	個数	体積 (m ³)	200L ドラム缶相当 (本)			個数	体積 (m ³)	200L ドラム缶相当 (本)		
使用済樹脂	原子炉冷却材浄化系フィルタ脱塩装置	—	約 7	—	使用済樹脂	原子炉冷却材浄化系フィルタ脱塩装置	—	約 7	—	
	燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩装置	—	約 2	—		燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩装置	—	約 2	—	
	復水脱塩装置	—	約 12	—		復水脱塩装置	—	約 12	—	
	液体廃棄物処理系脱塩装置	—	約 3	—		液体廃棄物処理系脱塩装置	—	約 3	—	
廃スラッジ	液体廃棄物処理系助材型ろ過装置	—	(約 1) *1	—	廃スラッジ	液体廃棄物処理系非助材型ろ過装置	—	約 16	—	
	液体廃棄物処理系非助材型ろ過装置	—	約 16	—		濃縮廃液	液体廃棄物処理系濃縮装置	—	約 200	(約 30m ³) *1
濃縮廃液	液体廃棄物処理系濃縮装置	—	約 200	(約 30m ³) *2	雑固体廃棄物	可燃性雑固体廃棄物焼却灰	—	約 8	約 40 *2 *3	
雑固体廃棄物	可燃性雑固体廃棄物焼却灰	—	約 8	約 40 *3 *4		不燃性雑固体廃棄物	—	約 300	約 1,500 *3	
	不燃性雑固体廃棄物	—	約 300	約 1,500 *4	使用済制御棒等	制御棒	約 19 本	—	—	
使用済制御棒等	制御棒	約 19 本	—	—		チャンネルボックス	約 200 個	—	—	
	チャンネルボックス	約 200 個	—	—		その他	発生量不定 *4	—	—	
その他	発生量不定 *5	—	—	—						

<p>* 1 通常における機器ドレン廃液の処理は非助材型ろ過装置で行うので、助材型ろ過装置からの廃スラッジの発生はないが、ここでは年間の機器ドレン廃液推定発生量の 1%程度を助材型ろ過装置で処理する場合を想定して発生量を推定した。</p> <p>* 2 減容固化体としての発生量である。セメント混練固化した場合は約 180 本/年となる。</p> <p>* 3 使用済樹脂（復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置）と廃スラッジ（液体廃棄物処理系助材型ろ過装置）を含む。</p> <p>* 4 雑固体廃棄物を雑固体減容処理設備で処理した場合は約 390 本/年となる。</p> <p>* 5 放射化された消耗部品等であり、定期的に発生するものではない。</p>	<p>* 1 減容固化体としての発生量である。セメント混練固化した場合は約 180 本/年となる。</p> <p>* 2 使用済樹脂（復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置）を含む。</p> <p>* 3 雑固体廃棄物を雑固体減容処理設備で処理した場合は約 390 本/年となる。</p> <p>* 4 放射化された消耗部品等であり、定期的に発生するものではない。</p>
--	---

添付3-10

既許可申請書	変更（案）	備考												
<p>5. 平常運転時における一般公衆の受ける線量評価</p> <p>5.1 東海第二発電所の放射性廃棄物により一般公衆の受ける線量評価</p> <p>5.1.1 線量の計算</p> <p>5.1.1.1 気体廃棄物中の希ガスのγ線に起因する実効線量</p> <p>5.1.1.1.1 連続放出の場合</p> <p>(1) 計算のための前提条件</p> <p>b. 放出源の有効高さ</p> <p>下表に、排気筒の地上高、出口直径及び吹出し速度を示す。</p> <table border="1" data-bbox="201 443 696 549"> <thead> <tr> <th>地上高 (m)</th> <th>出口直径 (m)</th> <th>吹出し速度 (m/s)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>約140</td> <td>約4.5</td> <td>約14</td> </tr> </tbody> </table> <p>放出源の有効高さは、排気筒の地上高に吹上げ高さを加算したものを風洞実験により補正した値（第5.1-1表に示す。）とする。</p> <p>なお、吹上げ高さは、下記の式により計算する。</p> $\Delta H = 3 \frac{W}{U} \cdot D$ <p>ここで、</p> <p>△H：吹上げ高さ（m）</p> <p>W：吹出し速度（m/s）</p> <p>D：排気筒出口直径（m）</p> <p>$\frac{1}{U}$：風向別年間風速逆数の平均（s/m）</p> <p>c. 気象条件</p> <p>気象条件は、現地における1981年4月から1982年3月までの観測による実測値を使用する。</p> <p>ただし、静穏（通常風速計で観測した風速が0.5m/s未満）の場合は、風速を0.5m/sとし、風速0.5～2.0m/sのときの風向出現頻度（第5.1-2表に示す。）に応じて各風向に比例配分する。</p> <p>年間平均濃度の計算には、第5.1-3表に示す風向別大気安定度別風速逆数の総和を、吹上げ高さの計算には、第5.1-4表に示す風向別風速逆数の平均を使用する。</p>	地上高 (m)	出口直径 (m)	吹出し速度 (m/s)	約140	約4.5	約14	<p>5. 平常運転時における一般公衆の受ける線量評価</p> <p>5.1 東海第二発電所の放射性廃棄物により一般公衆の受ける線量評価</p> <p>5.1.1 線量の計算</p> <p>5.1.1.1 気体廃棄物中の希ガスのγ線に起因する実効線量</p> <p>5.1.1.1.1 連続放出の場合</p> <p>(1) 計算のための前提条件</p> <p>b. 放出源の有効高さ</p> <p>下表に、排気筒の地上高、出口直径及び吹出し速度を示す。</p> <table border="1" data-bbox="1025 443 1520 549"> <thead> <tr> <th>地上高 (m)</th> <th>出口直径 (m)</th> <th>吹出し速度 (m/s)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>約140</td> <td>約4.5</td> <td>約16</td> </tr> </tbody> </table> <p>放出源の有効高さは、排気筒の地上高に吹上げ高さを加算したものを風洞実験により補正した値（第5.1-1表に示す。）とする。</p> <p>なお、吹上げ高さは、下記の式により計算する。</p> $\Delta H = 3 \frac{W}{U} \cdot D$ <p>ここで、</p> <p>△H：吹上げ高さ（m）</p> <p>W：吹出し速度（m/s）</p> <p>D：排気筒出口直径（m）</p> <p>$\frac{1}{U}$：風向別年間風速逆数の平均（s/m）</p> <p>c. 気象条件</p> <p>気象条件は、現地における2005年4月から2006年3月までの観測による実測値を使用する。</p> <p>ただし、静穏（通常風速計で観測した風速が0.5m/s未満）の場合は、風速を0.5m/sとし、風速0.5～2.0m/sのときの風向出現頻度（第5.1-2表に示す。）に応じて各風向に比例配分する。</p> <p>年間平均濃度の計算には、第5.1-3表に示す風向別大気安定度別風速逆数の総和を、吹上げ高さの計算には、第5.1-4表に示す風向別風速逆数の平均を使用する。</p>	地上高 (m)	出口直径 (m)	吹出し速度 (m/s)	約140	約4.5	約16	<p>備考</p> <p>・排気筒吹出し速度の変更（廃棄物処理建屋を増設のため換気量が増加）</p> <p>・①</p>
地上高 (m)	出口直径 (m)	吹出し速度 (m/s)												
約140	約4.5	約14												
地上高 (m)	出口直径 (m)	吹出し速度 (m/s)												
約140	約4.5	約16												

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料3】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>5.1.1.1.3 計算結果</p> <p>周辺監視区域の北側及び西側境界の6方位並びに参考として、原子力科学研究所の周辺監視区域と接する南側及び海となっている東側の10方位について希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.1-6表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、北側及び西側の周辺監視区域境界外で希ガスのγ線による実効線量の最大値は、排気筒の西南西約650mの地点において、約3.5μSv/yである。</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれ外側において、希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.1-7表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、周辺における将来の集落の形成を考慮した地点で希ガスのγ線による実効線量の最大値は、排気筒の南西約1,300mの地点において、約3.3μSv/yである。</p> <p>5.1.1.3 よう素に起因する実効線量</p> <p>5.1.1.3.1 気体廃棄物中に含まれるよう素に起因する実効線量</p> <p>5.1.1.3.1.1 年平均地上空気中濃度の計算</p> <p>(1) 計算のための前提条件</p> <p>d. 計算地点</p> <p>気体廃棄物中のよう素による被ばく経路は、吸入摂取、葉菜摂取及び牛乳摂取を対象とする。</p> <p>吸入摂取及び葉菜摂取による実効線量については、将来の集落の形成及び葉菜摂取による被ばく経路の存在を考慮し、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれ外側において、年平均地上空気中濃度が最大となる地点とする。</p> <p>発電所の周辺5km程度の範囲内における乳牛の飼養地としては、発電所の南南西方向の長砂、西方向の船場、北西方向の堅磐がある。</p> <p>牛乳摂取による実効線量については、これらの実在する乳牛飼養地点のうち年平均地上空気中濃度が最大となる地点とする。</p> <p>(3) 計算結果</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮した年平均地上空気中濃度が最大となる地点は、排気筒の南西約3,300mであり、この地点におけるよう素-131及びよう素-133の年平均地上空気中濃度の計算結果は、第5.1-11表に示すとおり、それぞれ約$1.2 \times 10^{-10} \text{Bq/cm}^3$及び約$1.8 \times 10^{-10} \text{Bq/cm}^3$である。</p> <p>また、実在する乳牛飼養地点のうち、年平均地上空気中濃度が最大となるのは、排気筒の南南西約4,400mの地点（長砂）であり、この地点におけるよう素-131及びよう素-133の年平均地上空気中濃度の計算結果は、第5.1-11表に示すとおり、それぞれ約$5.4 \times 10^{-11} \text{Bq/cm}^3$及び約$8.5 \times 10^{-11} \text{Bq/cm}^3$である。</p>	<p>5.1.1.1.3 計算結果</p> <p>周辺監視区域の北側及び西側境界の7方位並びに参考として、原子力科学研究所の周辺監視区域と接する南側及び海となっている東側の9方位について希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.1-6表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、北側及び西側の周辺監視区域境界外で希ガスのγ線による実効線量の最大値は、排気筒の西南西約640mの地点において、約3.2μSv/yである。</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれ外側において、希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.1-7表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、周辺における将来の集落の形成を考慮した地点で希ガスのγ線による実効線量の最大値は、排気筒の南西約1,280mの地点において、約2.8μSv/yである。</p> <p>5.1.1.3 よう素に起因する実効線量</p> <p>5.1.1.3.1 気体廃棄物中に含まれるよう素に起因する実効線量</p> <p>5.1.1.3.1.1 年平均地上空気中濃度の計算</p> <p>(1) 計算のための前提条件</p> <p>d. 計算地点</p> <p>気体廃棄物中のよう素による被ばく経路は、吸入摂取、葉菜摂取及び牛乳摂取を対象とする。</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれ外側において、年平均地上空気中濃度が最大となる地点とする。</p> <p>(3) 計算結果</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮した年平均地上空気中濃度が最大となる地点は、排気筒の南西約4,400mであり、この地点におけるよう素-131及びよう素-133の年平均地上空気中濃度の計算結果は、第5.1-11表に示すとおり、それぞれ約$6.2 \times 10^{-11} \text{Bq/cm}^3$及び約$9.8 \times 10^{-11} \text{Bq/cm}^3$である。</p>	<p>・②、③（周辺監視区域境界変更に伴うNNE方位評価点の追加）</p> <p>・①及び評価距離の見直し（詳細計測を反映）</p> <p>・①、②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮しSW方位の評価点の変更）</p> <p>・乳牛の飼養地がなくなったため変更（葉菜摂取及び吸入摂取と同様の最大の濃度地点で代表）</p> <p>・①及び吸入摂取、葉菜摂取、牛乳摂取の評価地点を陸側最大の濃度地点で評価</p>

添付3-12

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>5.1.1.3.1.3 計算結果</p> <p>吸入摂取、葉菜摂取及び牛乳摂取による実効線量の計算結果を第5.1-12表に示す。</p> <p>これによれば、気体廃棄物中のよう素の吸入摂取、葉菜摂取及び牛乳摂取による年間の実効線量は、<u>成人で約0.09 μSv/y</u>、<u>幼児で約0.4 μSv/y</u>、<u>乳児で約0.3 μSv/y</u>である。</p> <p>5.1.1.3.3 気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量</p> <p>(2) 計算結果</p> <p>計算結果を第5.1-13表に示す。これによれば、気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量は、海藻類を摂取する場合、<u>成人で約0.01 μSv/y</u>、<u>幼児で約0.06 μSv/y</u>、<u>乳児で約0.07 μSv/y</u>となる。</p> <p>また、海藻類を摂取しない場合は、<u>成人で約0.09 μSv/y</u>、<u>幼児で約0.02 μSv/y</u>、<u>乳児で約0.01 μSv/y</u>となる。</p> <p>5.1.2 線量の評価結果</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量、液体廃棄物中の放射性物質（よう素を除く。）による実効線量並びに気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量を評価した結果は、それぞれ<u>約3.3 μSv/y</u>、<u>約5.2 μSv/y</u>及び<u>約0.4 μSv/y</u>となり、<u>合計約9.0 μSv/y</u>である。</p> <p>この値は、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」に示される線量目標値50 μSv/yを下回る。</p>	<p>5.1.1.3.1.3 計算結果</p> <p>吸入摂取、葉菜摂取及び牛乳摂取による実効線量の計算結果を第5.1-12表に示す。</p> <p>これによれば、気体廃棄物中のよう素の吸入摂取、葉菜摂取及び牛乳摂取による年間の実効線量は、<u>成人で約0.06 μSv/y</u>、<u>幼児で約0.3 μSv/y</u>、<u>乳児で約0.3 μSv/y</u>である。</p> <p>5.1.1.3.3 気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量</p> <p>(2) 計算結果</p> <p>計算結果を第5.1-13表に示す。これによれば、気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量は、海藻類を摂取する場合、<u>成人で約0.01 μSv/y</u>、<u>幼児で約0.05 μSv/y</u>、<u>乳児で約0.07 μSv/y</u>となる。</p> <p>また、海藻類を摂取しない場合は、<u>成人で約0.07 μSv/y</u>、<u>幼児で約0.4 μSv/y</u>、<u>乳児で約0.3 μSv/y</u>となる。</p> <p>5.1.2 線量の評価結果</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量、液体廃棄物中の放射性物質（よう素を除く。）による実効線量並びに気体廃棄物中及び液体廃棄物中に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量を評価した結果は、それぞれ<u>約2.8 μSv/y</u>、<u>約5.2 μSv/y</u>及び<u>約0.4 μSv/y</u>となり、<u>合計約8.4 μSv/y</u>である。</p> <p>この値は、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」に示される線量目標値50 μSv/yを下回る。</p>	<p>・①及び吸入摂取、葉菜摂取、牛乳摂取の評価地点を陸側最大の濃度地点で評価</p> <p>・①及び吸入摂取、葉菜摂取、牛乳摂取の評価地点を陸側最大の濃度地点で評価</p> <p>・①、②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮しSW方位の評価点の変更）</p>

添付3-13

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-1 表 放出源の有効高さ

方位	有効高さ (m)
NNE	145
S	160
SSW	130
SW	120
WSW	140
W	165
WNW	180
NW	155
NNW	155
N	160

表中の方位以外の有効高さについては、上表の有効高さのうち最も低い値を使用する。

第 5.1-1 表 放出源の有効高さ

方位	有効高さ (m)
N	190
NNE	200
NE	195
SE	170
SSE	185
S	210
SSW	180
SW	150
WSW	195
W	205
WNW	205
NW	220
NNW	200

(注 1) 表中の方位以外の有効高さについては、上表の有効高さのうち最も低い値を使用する。

(注 2) 方位 SSE は海を隔てて比較的近距离のところに陸地が存在するため、有効高さを評価した。

- ・①及び吹出し速度の変更による風洞実験結果の変更
- ・③（周辺監視区域境界変更に伴う NNE 方位評価点の追加及び SSE 方位にある海を隔てた陸地（常陸那珂火力発電所）を評価点として追加）

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-2 表 風向出現頻度及び風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度

(%)

風向	風下方位	風向出現頻度	風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度
NNE	SSW	9.5	5.8
NE	SW	18.7	6.5
ENE	WSW	6.7	5.8
E	W	4.4	8.4
ESE	WNW	2.8	8.4
SE	NW	3.1	3.5
SSE	NNW	6.2	4.7
S	N	3.0	3.3
SSW	NNE	3.5	3.6
SW	NE	5.2	5.8
WSW	ENE	3.5	6.6
W	E	4.3	9.1
WNW	ESE	9.8	6.6
NW	SE	10.5	7.3
NNW	SSE	5.5	6.5
N	S	3.2	8.0

風向、風速観測点：標高 140m

第 5.1-2 表 風向出現頻度及び風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度

(%)

風向	風下方位	風向出現頻度	風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度
N	S	3.6	6.5
NNE	SSW	6.7	6.9
NE	SW	18.5	8.4
ENE	WSW	9.9	8.8
E	W	5.6	7.8
ESE	WNW	3.7	6.7
SE	NW	3.2	6.3
SSE	NNW	3.3	4.0
S	N	5.1	5.2
SSW	NNE	3.2	4.6
SW	NE	3.7	4.7
WSW	ENE	4.3	5.7
W	E	5.1	5.1
WNW	ESE	7.7	6.0
NW	SE	9.6	7.7
NNW	SSE	6.6	5.6

風向、風速観測点：標高 148m

・①

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-3 表 風向別大気安定度別風速逆数の総和

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F
NNE	SSW	0.37	13.28	8.33	115.54	29.76	21.72
NE	SW	0.94	16.22	25.11	195.58	31.00	25.71
ENE	WSW	4.23	27.14	20.82	80.21	12.42	11.73
E	W	5.77	25.67	16.54	67.55	11.01	14.08
ESE	WNW	4.81	31.82	8.15	42.70	5.13	11.50
SE	NW	2.91	20.71	9.97	32.26	5.27	10.33
SSE	NNW	6.29	34.98	21.83	40.32	11.90	12.23
S	N	0.70	9.83	6.30	30.44	6.64	16.79
SSW	NNE	2.55	8.79	4.35	38.55	7.77	13.44
SW	NE	3.78	23.42	7.56	54.33	17.47	21.70
WSW	ENE	4.04	20.28	8.38	40.98	12.69	19.32
W	E	1.80	38.13	12.26	53.72	14.67	13.98
WNW	ESE	1.65	28.72	22.38	91.44	29.91	19.15
NW	SE	2.77	17.57	13.30	102.39	33.90	24.93
NNW	SSE	1.27	10.80	6.88	64.54	24.75	23.18
N	S	1.81	6.10	6.70	50.38	22.55	21.57

大気安定度観測点：標高 18m

風向，風速観測点：標高 140m

第 5.1-3 表 風向別大気安定度別風速逆数の総和

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F
N	S	0.87	16.25	4.55	37.61	9.89	63.80
NNE	SSW	2.24	13.49	4.38	83.07	16.23	68.03
NE	SW	6.03	18.32	21.78	185.23	22.49	82.60
ENE	WSW	6.89	32.36	19.96	120.26	13.65	69.80
E	W	9.87	54.23	17.38	65.00	9.12	40.76
ESE	WNW	13.27	38.83	7.53	46.44	8.42	39.56
SE	NW	8.02	35.03	9.96	48.24	5.29	29.15
SSE	NNW	4.56	36.70	10.48	28.84	1.30	25.12
S	N	8.98	41.78	11.59	38.41	5.18	30.20
SSW	NNE	5.17	24.93	3.75	29.47	6.74	41.18
SW	NE	1.93	28.05	2.98	31.49	3.90	45.45
WSW	ENE	5.73	21.45	3.37	35.03	6.34	65.97
W	E	2.08	34.83	5.36	31.55	4.29	69.43
WNW	ESE	6.30	44.31	9.85	44.87	11.69	84.81
NW	SE	1.46	37.02	11.28	68.80	10.15	98.42
NNW	SSE	1.30	17.25	5.37	45.79	15.30	84.99

大気安定度観測点：標高 18m

風向，風速観測点：標高 148m

・①

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-4 表 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F	全安定度
風向								
NNE	SSW	2.00	0.52	0.25	0.20	0.25	0.30	0.23
NE	SW	0.41	0.30	0.20	0.16	0.26	0.27	0.18
ENE	WSW	0.78	0.42	0.22	0.22	0.39	0.41	0.27
E	W	0.45	0.39	0.32	0.32	0.49	0.57	0.36
ESE	WNW	0.45	0.50	0.32	0.38	0.58	0.59	0.43
SE	NW	0.31	0.28	0.24	0.30	0.62	0.30	0.30
SSE	NNW	0.32	0.22	0.18	0.23	0.47	0.28	0.23
S	N	0.61	0.35	0.18	0.25	0.23	0.35	0.27
SSW	NNE	0.59	0.36	0.18	0.24	0.27	0.21	0.25
SW	NE	0.44	0.37	0.18	0.28	0.29	0.26	0.28
WSW	ENE	0.74	0.38	0.24	0.33	0.35	0.36	0.34
W	E	0.53	0.47	0.29	0.34	0.30	0.36	0.36
WNW	ESE	0.49	0.38	0.20	0.20	0.24	0.21	0.22
NW	SE	0.63	0.37	0.20	0.19	0.23	0.24	0.21
NNW	SSE	1.02	0.48	0.20	0.26	0.24	0.32	0.27
N	S	1.40	0.78	0.42	0.33	0.35	0.50	0.38

大気安定度観測点：標高 18m
 風向，風速観測点：標高 140m

第 5.1-4 表 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F	全安定度
風向								
N	S	0.69	0.60	0.38	0.41	0.29	0.43	0.42
NNE	SSW	1.74	0.64	0.31	0.25	0.27	0.43	0.32
NE	SW	0.82	0.45	0.18	0.15	0.28	0.46	0.21
ENE	WSW	0.51	0.40	0.23	0.23	0.29	0.59	0.30
E	W	0.60	0.42	0.24	0.34	0.36	0.68	0.40
ESE	WNW	0.54	0.41	0.25	0.40	0.39	0.93	0.47
SE	NW	0.65	0.46	0.29	0.45	0.47	0.82	0.49
SSE	NNW	0.49	0.33	0.24	0.34	0.42	0.62	0.36
S	N	0.52	0.28	0.18	0.29	0.46	0.45	0.31
SSW	NNE	0.63	0.47	0.27	0.33	0.42	0.42	0.40
SW	NE	0.46	0.44	0.17	0.36	0.23	0.33	0.35
WSW	ENE	0.43	0.37	0.24	0.40	0.30	0.36	0.36
W	E	0.49	0.35	0.19	0.33	0.20	0.35	0.33
WNW	ESE	0.61	0.34	0.18	0.25	0.25	0.33	0.30
NW	SE	0.63	0.36	0.16	0.25	0.19	0.30	0.27
NNW	SSE	0.58	0.49	0.22	0.30	0.22	0.29	0.29

大気安定度観測点：標高 18m
 風向，風速観測点：標高 148m

・①

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-5 表 風向出現頻度（隣接方位も含む）及び間欠放出時の
3 方位に向かう合計回数

風 向	風向出現頻度 (%) (隣接方位も含む)	3 方位に向かう 合計回数
NNE	31.4	2
NE	34.9	2
ENE	29.8	2
E	13.9	1
ESE	10.3	1
SE	12.1	1
SSE	12.3	1
S	12.7	1
SSW	11.7	1
SW	12.2	1
WSW	13.0	1
W	17.6	1
WNW	24.6	2
NW	25.8	2
NNW	19.2	1
N	18.2	1

風向，風速観測点：標高 140m

第 5.1-5 表 風向出現頻度（隣接方位も含む）及び間欠放出時の
3 方位に向かう合計回数

風 向	風向出現頻度 (%) (隣接方位も含む)	3 方位に向かう 合計回数
N	16.9	1
NNE	28.8	2
NE	35.1	2
ENE	34.0	2
E	19.2	1
ESE	12.5	1
SE	10.2	1
SSE	11.6	1
S	11.6	1
SSW	12.0	1
SW	11.2	1
WSW	13.1	1
W	17.1	1
WNW	22.4	1
NW	23.9	2
NNW	19.8	1

風向，風速観測点：標高 148m

・①

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-6 表 周辺監視区域境界における希ガスのγ線に起因する
実効線量（東海第二発電所）

		東海第二発電所排気筒から計 算地点への方位及び距離 (m)		希ガスのγ線に起因する 実効線量 ($\mu\text{Sv}/\text{y}$)
		方位	距離	
周辺監視区域境界		WSW	650	約 3.5×10^0
		W	550	約 2.5×10^0
		WNW	600	約 1.7×10^0
		NW	660	約 1.6×10^0
		NNW	890	約 1.5×10^0
		N	860	約 1.1×10^0
参考 地点	海側	NNE	590	約 1.8×10^0
		NE	350	約 3.8×10^0
		ENE	280	約 4.7×10^0
		E	230	約 5.7×10^0
		ESE	240	約 7.3×10^0
		SE	280	約 6.9×10^0
	日本 原子力 研究所側	SSE	360	約 4.4×10^0
		S	330	約 3.9×10^0
		SSW	360	約 6.0×10^0
		SW	460	約 6.7×10^0

（注）計算地点については、第 5.1-1 図に示す。

第 5.1-6 表 周辺監視区域境界における希ガスのγ線に起因する
実効線量（東海第二発電所）

		東海第二発電所排気筒から 計算地点の方位及び距離 (m)		希ガスのγ線に起因する 実効線量 ($\mu\text{Sv}/\text{y}$)
		方位	距離	
周辺監視区域境界		WSW	640	約 3.2×10^0
		W	530	約 2.4×10^0
		WNW	600	約 1.8×10^0
		NW	660	約 1.4×10^0
		NNW	890	約 1.1×10^0
		N	850	約 1.3×10^0
		NNF	600	約 1.5×10^0
参考 地点	海側	NE	360	約 2.2×10^0
		ENE	270	約 3.4×10^0
		E	230	約 4.5×10^0
		ESE	250	約 4.8×10^0
		SE	290	約 4.6×10^0
	原子力科学 研究所側	SSE	350	約 3.0×10^0
		S	330	約 2.5×10^0
	SSW	350	約 4.3×10^0	
	SW	430	約 5.5×10^0	

（注）計算地点については、第 5.1-1 図に示す。

- ・①
- ・②（日本原子力研究開発機構との用地調整に伴う周辺監視区域境界の変更による SW 方位の評価距離の変更）
- ・③（海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置の変更による NNE 方位評価点を追加）
- ・評価距離の詳細計測反映（WSW 方位, W 方位, N 方位, NE 方位, ENE 方位, ESE 方位, SE 方位, SSE 方位, SSW 方位）

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-7 表 人の居住に着目した場合の希ガスの γ 線に起因する
実効線量（東海第二発電所）

計算地点 [東海第二発電所排気筒からの方位及び距離 (m)]			希ガスの γ 線に起因する実効線量 (μ Sv/y)
	方位	距離	
A	N	860	約 1.1×10^0
B	NNW	890	約 1.5×10^0
C	NW	660	約 1.6×10^0
D	WNW	600	約 1.7×10^0
E	W	660	約 2.1×10^0
F	WSW	930	約 2.4×10^0
G	SW	1,300	約 3.3×10^0
H	SSW	1,690	約 1.6×10^0
I	S	1,870	約 6.4×10^{-1}

(注) 計算地点については、第 5.1-2 図に示す。

第 5.1-7 表 人の居住に着目した場合の希ガスの γ 線に起因する
実効線量（東海第二発電所）

計算地点 [東海第二発電所排気筒からの方位及び距離 (m)]			希ガスの γ 線に起因する 実効線量 (μ Sv/y)
	方位	距離	
A	NNE	600	約 1.5×10^0
B	N	850	約 1.3×10^0
C	NNW	890	約 1.1×10^0
D	NW	660	約 1.4×10^0
E	WNW	600	約 1.8×10^0
F	W	660	約 2.1×10^0
G	WSW	930	約 2.3×10^0
H	SW	1,280	約 2.8×10^0
I	SSW	1,690	約 1.0×10^0
J	S	1,870	約 5.0×10^{-1}
K	SSE	2,900	約 4.8×10^{-1}

(注1) 計算地点については、第 5.1-2 図に示す。

(注2) 方位 SSE は、海を隔てて比較的近距离のところに陸地が存在するため、この陸地の海岸線を評価地点とした。

- ・①
- ・②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮し SW 方位の評価点の変更）
- ・③（周辺監視区域境界変更に伴う NNE 方位評価点の追加及び SSE 方位にある海を隔てた陸地（常陸那珂火力発電所）を評価点として追加）
- ・評価距離の詳細計測反映（N 方位）

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-11 表 よう素の年平均地上空気中濃度（東海第二発電所）

摂取経路	核種	年平均地上空気中濃度 (Bq/cm ³)		
		連続放出分	間欠放出分	合計
吸入	I-131	約 1.1×10 ⁻¹⁰	約 9.9×10 ⁻¹²	約 1.2×10 ⁻¹⁰
	I-133	約 1.7×10 ⁻¹⁰	約 9.9×10 ⁻¹²	約 1.8×10 ⁻¹⁰
葉菜	I-131	約 4.9×10 ⁻¹¹	約 5.0×10 ⁻¹²	約 5.4×10 ⁻¹¹
	I-133	約 8.0×10 ⁻¹¹	約 5.0×10 ⁻¹²	約 8.5×10 ⁻¹¹

第 5.1-11 表 よう素の年平均地上空気中濃度（東海第二発電所）

摂取経路	核種	年平均地上空気中濃度 (Bq/cm ³)		
		連続放出分	間欠放出分	合計
吸入	I-131	約 5.7×10 ⁻¹¹	約 5.3×10 ⁻¹²	約 6.2×10 ⁻¹¹
	I-133	約 9.3×10 ⁻¹¹	約 5.3×10 ⁻¹²	約 9.8×10 ⁻¹¹

第 5.1-12 表 気体廃棄物に含まれるよう素に起因する実効線量（東海第二発電所）

年齢グループ	摂取経路	実効線量 (μSv/y)		
		I-131	I-133	合計
成人	吸入	約 1.4×10 ⁻²	約 4.3×10 ⁻³	約 1.9×10 ⁻²
	葉菜	約 4.4×10 ⁻²	約 2.2×10 ⁻³	約 4.7×10 ⁻²
	牛乳	約 2.0×10 ⁻²	約 4.4×10 ⁻⁴	約 2.0×10 ⁻²
	合計	約 7.8×10 ⁻²	約 7.0×10 ⁻³	約 8.5×10 ⁻²
幼児	吸入	約 2.6×10 ⁻²	約 9.4×10 ⁻³	約 3.5×10 ⁻²
	葉菜	約 1.0×10 ⁻¹	約 6.2×10 ⁻³	約 1.1×10 ⁻¹
	牛乳	約 2.3×10 ⁻¹	約 6.1×10 ⁻³	約 2.4×10 ⁻¹
	合計	約 3.6×10 ⁻¹	約 2.2×10 ⁻²	約 3.8×10 ⁻¹
乳児	吸入	約 1.6×10 ⁻²	約 6.7×10 ⁻³	約 2.3×10 ⁻²
	葉菜	約 7.8×10 ⁻²	約 5.5×10 ⁻³	約 8.3×10 ⁻²
	牛乳	約 2.0×10 ⁻¹	約 7.4×10 ⁻⁴	約 2.0×10 ⁻¹
	合計	約 2.9×10 ⁻¹	約 1.3×10 ⁻²	約 3.0×10 ⁻¹

第 5.1-12 表 気体廃棄物に含まれるよう素に起因する実効線量（東海第二発電所）

年齢グループ	摂取経路	実効線量 (μSv/y)		
		I-131	I-133	合計
成人	吸入	約 7.6×10 ⁻³	約 2.3×10 ⁻³	約 9.9×10 ⁻³
	葉菜	約 2.4×10 ⁻²	約 1.2×10 ⁻³	約 2.5×10 ⁻²
	牛乳	約 2.3×10 ⁻²	約 5.1×10 ⁻⁴	約 2.3×10 ⁻²
	合計	約 5.4×10 ⁻²	約 4.0×10 ⁻³	約 5.8×10 ⁻²
幼児	吸入	約 1.4×10 ⁻²	約 5.0×10 ⁻³	約 1.9×10 ⁻²
	葉菜	約 5.5×10 ⁻²	約 3.3×10 ⁻³	約 5.9×10 ⁻²
	牛乳	約 2.6×10 ⁻¹	約 7.0×10 ⁻³	約 2.7×10 ⁻¹
	合計	約 3.3×10 ⁻¹	約 1.5×10 ⁻²	約 3.5×10 ⁻¹
乳児	吸入	約 8.5×10 ⁻³	約 3.6×10 ⁻³	約 1.2×10 ⁻²
	葉菜	約 4.1×10 ⁻²	約 2.9×10 ⁻³	約 4.4×10 ⁻²
	牛乳	約 2.3×10 ⁻¹	約 8.6×10 ⁻⁴	約 2.3×10 ⁻¹
	合計	約 2.8×10 ⁻¹	約 7.4×10 ⁻³	約 2.9×10 ⁻¹

・①及び吸入摂取、葉菜摂取、牛乳摂取の評価地点を陸側最大の濃度地点で評価

・①及び吸入摂取、葉菜摂取、牛乳摂取の評価地点を陸側最大の濃度地点で評価

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.1-13 表 気体廃棄物中及び液体廃棄物に含まれるよう素に起因する実効線量（東海第二発電所）

年令グループ	液体廃棄物に含まれるよう素に起因する実効線量 ($\mu\text{Sv}/\text{y}$)		気体廃棄物中及び液体廃棄物中 に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量 ($\mu\text{Sv}/\text{y}$)	
	海藻類を摂取する場合	海藻類を摂取しない場合	海藻類を摂取する場合	海藻類を摂取しない場合
成人	約 8.5×10^{-3}	約 8.3×10^{-3}	約 1.4×10^{-2}	約 9.3×10^{-2}
幼児	約 2.5×10^{-2}	約 1.9×10^{-2}	約 5.7×10^{-2}	約 4.0×10^{-1}
乳児	約 3.2×10^{-2}	約 1.5×10^{-2}	約 7.4×10^{-2}	約 3.2×10^{-1}

第 5.1-13 表 気体廃棄物中及び液体廃棄物に含まれるよう素に起因する実効線量（東海第二発電所）

年令グループ	液体廃棄物に含まれるよう素に起因する実効線量 ($\mu\text{Sv}/\text{y}$)		気体廃棄物中及び液体廃棄物中 に含まれるよう素を同時に摂取する場合の実効線量 ($\mu\text{Sv}/\text{y}$)	
	海藻類を摂取する場合	海藻類を摂取しない場合	海藻類を摂取する場合	海藻類を摂取しない場合
成人	約 8.5×10^{-3}	約 8.3×10^{-3}	約 1.2×10^{-2}	約 6.6×10^{-2}
幼児	約 2.5×10^{-2}	約 1.9×10^{-2}	約 5.4×10^{-2}	約 3.7×10^{-1}
乳児	約 3.2×10^{-2}	約 1.5×10^{-2}	約 7.1×10^{-2}	約 3.0×10^{-1}

- ・①による線量の変更
- ・②（海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置を波の影響を受けない位置へ変更、南側の周辺監視区域境界は日本原子力研究開発機構との用地調整に伴う変更）
- ・⑤

<具体的な変更点>

- a**：波の影響を受けないように海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置を後退。線量評価点の追加。
- b**：波の影響を受けないように放水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。（線量評価点に影響なし）
- c**：波の影響を受けないように取水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。（線量評価点に影響なし）
- d**：高台部分（JAEA の土地）を東二敷地に変更することによる敷地境界の変更に伴う周辺監視区域境界の変更。（線量評価点の評価距離の変更（SW 方位 460m→430m）
- e**：国道 245 号線拡幅工事に伴う発電所進入道路の変更による周辺監視区域境界の変更

既許可申請書	変更（案）	備考
<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 100%;"></div>	<ul style="list-style-type: none"> ・②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮し SW 方位の評価点の変更） ・③（周辺監視区域境界変更に伴う NNE 方位評価点の追加及び SSE 方位にある海を隔てた陸地（常陸那珂火力発電所）を評価点として追加） ・④, ⑤ ■a: 波の影響を受けないように海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置を後退。線量評価点の追加。 ■b: 波の影響を受けないように放水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。（線量評価点に影響なし） ■c: 波の影響を受けないように取水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。（線量評価点に影響なし） ■d: 高台部分（JAEA の土地）を東二敷地に変更することによる敷地境界の変更に伴う周辺監視区域境界の変更。（線量評価点の評価距離の変更（SW 方位 460m→430m）） ■e: 国道 245 号線拡幅工事に伴う進入道路の変更による周辺監視区域境界の変更 ■f: 国道 245 号線拡幅工事による日本原子力研究開発機構の周辺監視区域境界の変更（線量評価点の評価距離の変更（SW 方位 1300m→1280m）） ■g: 常陸那珂火力発電所の敷地が海を隔てた陸地となることから評価点を追加

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>5.2 東海発電所の放射性廃棄物により一般公衆の受ける線量評価</p> <p>5.2.1 気体廃棄物中の希ガスのγ線に起因する実効線量</p> <p>(1) 計算のための前提条件</p> <p>c. 気象条件</p> <p>気象条件は、現地における1981年4月から1982年3月までの観測による実測値を使用する。</p> <p>ただし、静穏（通常の風速計で観測した風速が0.5m/s未満）の場合は、風速を0.5m/sとし、風速0.5～2.0m/sのときの風向出現頻度（第5.2-2表に示す。）に応じて各風向に比例配分する。</p> <p>年間平均濃度の計算には、第5.2-3表に示す風向別大気安定度別風速逆数の総和を、吹上げ高さの計算には、第5.2-4表に示す風向別風速逆数の平均を使用する。</p> <p>(3) 計算結果</p> <p>周辺監視区域の北側及び西側境界の6方位並びに参考として、原子力科学研究所の周辺監視区域と接する南側及び海側10方位について希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.2-5表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、北側及び西側の周辺監視区域境界で、希ガスのγ線による実効線量の最大値は、東海第二発電所排気筒の西南西約650m（東海発電所排気筒の西約550m）の地点において、約8.4μSv/yである。</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれ外側において、希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.2-6表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、周辺における将来の集落の形成を考慮した地点で希ガスのγ線による実効線量の最大値は、東海第二発電所排気筒の南西約1,300m（東海発電所排気筒の南西約1,130m）の地点において約13μSv/yである。</p> <p>5.2.3 線量の評価結果</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量及び液体廃棄物中の放射性物質による実効線量を評価した結果は、それぞれ約13μSv/y及び約6.2μSv/yとなり、合計約19μSv/yである。</p>	<p>5.2 東海発電所の放射性廃棄物により一般公衆の受ける線量評価</p> <p>5.2.1 気体廃棄物中の希ガスのγ線に起因する実効線量</p> <p>(1) 計算のための前提条件</p> <p>c. 気象条件</p> <p>気象条件は、現地における2005年4月から2006年3月までの観測による実測値を使用する。</p> <p>ただし、静穏（通常の風速計で観測した風速が0.5m/s未満）の場合は、風速を0.5m/sとし、風速0.5～2.0m/sのときの風向出現頻度（第5.2-2表に示す。）に応じて各風向に比例配分する。</p> <p>年間平均濃度の計算には、第5.2-3表に示す風向別大気安定度別風速逆数の総和を、吹上げ高さの計算には、第5.2-4表に示す風向別風速逆数の平均を使用する。</p> <p>(3) 計算結果</p> <p>周辺監視区域の北側及び西側境界の7方位並びに参考として、原子力科学研究所の周辺監視区域と接する南側及び海側9方位について希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.2-5表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、北側及び西側の周辺監視区域境界で、希ガスのγ線による実効線量の最大値は、東海第二発電所排気筒の西南西約640m（東海発電所排気筒の西約540m）の地点において、約11μSv/yである。</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、北側については周辺監視区域境界、西側については国道245号線、南側については原子力科学研究所の南側周辺監視区域境界のそれぞれ外側において、希ガスのγ線による実効線量の計算を行った結果は、第5.2-6表に示すとおりである。</p> <p>これによれば、周辺における将来の集落の形成を考慮した地点で希ガスのγ線による実効線量の最大値は、東海第二発電所排気筒の南西約1,280m（東海発電所排気筒の南西約1,110m）の地点において約15μSv/yである。</p> <p>5.2.3 線量の評価結果</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮し、気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量及び液体廃棄物中の放射性物質による実効線量を評価した結果は、それぞれ約15μSv/y及び約6.2μSv/yとなり、合計約21μSv/yである。</p>	<p>・①</p> <p>・②</p> <p>・③（周辺監視区域境界変更に伴うNNE方位評価点の追加）</p> <p>・①及び評価距離の見直し（詳細計測を反映）</p> <p>・①、②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮しSW方位の評価点の変更）</p>

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.2-2 表 風向出現頻度及び風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度

(%)

風向	風下方位	風向出現頻度	風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度
NNE	SSW	10.3	7.1
NE	SW	15.2	6.2
ENE	WSW	6.8	8.5
E	W	2.8	5.9
ESE	WNW	2.2	6.8
SE	NW	2.2	3.6
SSE	NNW	4.7	3.2
S	N	5.1	5.3
SSW	NNE	3.6	3.2
SW	NE	2.4	7.0
WSW	ENE	2.4	4.2
W	E	3.5	7.3
WNW	ESE	9.3	9.0
NW	SE	16.4	8.3
NNW	SSE	8.1	7.3
N	S	5.1	7.1

風向、風速観測点：標高 71m

第 5.2-2 表 風向出現頻度及び風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度

(%)

風向	風下方位	風向出現頻度	風速 0.5~2.0m/s の風向出現頻度
N	S	3.8	5.6
NNE	SSW	6.6	5.5
NE	SW	18.0	6.8
ENE	WSW	9.0	7.3
E	W	4.4	6.1
ESE	WNW	2.8	6.9
SE	NW	2.8	5.1
SSE	NNW	4.2	5.6
S	N	4.9	5.3
SSW	NNE	2.5	5.0
SW	NE	2.7	5.1
WSW	ENE	3.1	5.6
W	E	4.6	7.1
WNW	ESE	9.2	8.2
NW	SE	15.4	8.0
NNW	SSE	6.1	6.7

風向、風速観測点：標高 89m

・①

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.2-3 表 風向別大気安定度別風速逆数の総和

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F
NNE	SSW	1.44	15.42	11.41	129.97	20.58	29.63
NE	SW	2.42	25.18	28.17	177.43	9.81	19.99
ENE	WSW	7.64	40.74	26.05	86.86	6.22	18.95
E	W	6.61	30.89	7.72	35.54	3.59	10.79
ESE	WNW	6.85	33.03	5.14	30.75	0.92	23.27
SE	NW	5.00	26.84	6.98	17.90	1.53	14.58
SSE	NNW	5.75	34.08	16.49	31.04	2.58	16.61
S	N	1.87	21.79	15.26	49.32	10.19	23.15
SSW	NNE	3.16	12.31	5.75	37.76	6.33	23.67
SW	NE	2.43	18.62	7.04	29.51	7.55	29.60
WSW	ENE	1.03	22.12	7.25	18.87	11.89	19.95
W	E	0.80	32.88	10.58	38.62	15.62	25.47
WNW	ESE	0.98	23.00	23.28	118.46	31.36	40.00
NW	SE	0.96	30.96	29.26	176.43	70.43	44.67
NNW	SSE	0.98	11.93	11.71	94.52	58.42	41.50
N	S	0.72	11.72	4.49	73.91	26.52	35.04

大気安定度観測点：標高 18m
風向，風速観測点：標高 71m

第 5.2-3 表 風向別大気安定度別風速逆数の総和

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F
N	S	1.53	11.97	2.54	50.08	12.16	52.48
NNE	SSW	0.11	10.86	4.01	80.37	17.76	42.01
NE	SW	2.95	16.81	20.68	196.13	13.80	48.66
ENE	WSW	4.83	38.99	18.34	103.76	9.52	41.79
E	W	10.94	39.37	12.05	46.39	2.69	32.06
ESE	WNW	8.38	39.13	6.72	34.12	3.88	21.09
SE	NW	15.54	35.25	7.35	34.72	2.01	10.92
SSE	NNW	14.25	52.10	12.74	29.15	1.44	20.83
S	N	3.78	42.74	9.29	42.29	3.46	31.38
SSW	NNE	1.28	15.55	2.39	30.53	1.36	35.81
SW	NE	0.50	23.26	1.74	20.18	5.10	46.26
WSW	ENE	4.45	16.83	2.36	27.47	2.56	58.11
W	E	1.14	33.59	5.35	34.56	5.88	67.43
WNW	ESE	3.73	62.40	10.90	63.30	10.61	94.99
NW	SE	1.85	32.29	18.33	85.02	23.82	176.06
NNW	SSE	0.74	17.35	6.47	55.97	13.52	82.51

大気安定度観測点：標高 18m
風向，風速観測点：標高 89m

・①

既許可申請書

変更（案）

備考

第 5.2-4 表 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F	全安定度
風向								
NNE	SSW	1.30	0.47	0.28	0.19	0.26	0.40	0.23
NE	SW	1.14	0.43	0.20	0.17	0.29	0.41	0.20
ENE	WSW	0.57	0.44	0.23	0.26	0.39	0.65	0.31
E	W	0.53	0.51	0.28	0.30	0.55	0.66	0.39
ESE	WNW	0.73	0.52	0.26	0.40	0.66	0.91	0.51
SE	NW	0.40	0.38	0.23	0.36	0.35	0.60	0.38
SSE	NNW	0.26	0.23	0.18	0.27	0.41	0.66	0.26
S	N	0.36	0.32	0.18	0.25	0.28	0.44	0.27
SSW	NNE	1.01	0.41	0.19	0.24	0.22	0.34	0.28
SW	NE	0.58	0.54	0.24	0.45	0.40	0.52	0.45
WSW	ENE	0.49	0.57	0.37	0.33	0.36	0.36	0.39
W	E	0.72	0.59	0.33	0.33	0.31	0.49	0.41
WNW	ESE	0.87	0.50	0.29	0.25	0.27	0.42	0.29
NW	SE	0.86	0.44	0.26	0.21	0.24	0.40	0.25
NNW	SSE	0.46	0.49	0.24	0.28	0.30	0.41	0.31
N	S	0.65	0.64	0.31	0.30	0.31	0.44	0.34

大気安定度観測点：標高 18m

風向，風速観測点：標高 71m

第 5.2-4 表 風向別大気安定度別風速逆数の平均及び風向別風速逆数の平均

(s/m)

大気安定度 風下方位		A	B	C	D	E	F	全安定度
風向								
N	S	0.50	0.69	0.25	0.38	0.28	0.41	0.39
NNE	SSW	2.00	0.51	0.25	0.22	0.26	0.36	0.27
NE	SW	0.58	0.49	0.16	0.16	0.23	0.42	0.19
ENE	WSW	0.48	0.36	0.20	0.22	0.26	0.55	0.28
E	W	0.43	0.35	0.22	0.35	0.24	0.68	0.37
ESE	WNW	0.52	0.50	0.28	0.40	0.30	0.68	0.46
SE	NW	0.70	0.43	0.24	0.40	0.28	0.70	0.43
SSE	NNW	0.52	0.31	0.21	0.38	0.28	0.68	0.36
S	N	0.42	0.29	0.16	0.30	0.31	0.49	0.31
SSW	NNE	0.42	0.51	0.20	0.40	0.19	0.41	0.40
SW	NE	0.48	0.52	0.16	0.34	0.39	0.44	0.41
WSW	ENE	0.40	0.39	0.29	0.48	0.25	0.41	0.41
W	E	0.37	0.37	0.20	0.40	0.27	0.39	0.37
WNW	ESE	0.46	0.38	0.19	0.28	0.21	0.32	0.31
NW	SE	0.88	0.31	0.19	0.24	0.20	0.26	0.25
NNW	SSE	0.35	0.57	0.25	0.33	0.23	0.34	0.33

大気安定度観測点：標高 18m

風向，風速観測点：標高 89m

・①

既許可申請書

第 5.2-5 表 周辺監視区域境界における希ガスのγ線に起因する実効線量（東海発電所）

	計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】		東海発電所排気筒から計算地点への方位及び距離(m)		希ガスのγ線に起因する実効線量 (μSv/y)	
	方位	距離	方位	距離		
	周辺監視区域境界	WSW	650	W		550
	W	550	WNW	540	約 6.6×10 ⁰	
	WNW	600	NW	660	約 5.6×10 ⁰	
	NW	660	NNW	790	約 6.6×10 ⁰	
	NNW	890	NNW	1,060	約 4.7×10 ⁰	
	N	860	N	1,060	約 5.6×10 ⁰	
参考地点	海側	NNE	590	NNE	800	約 5.9×10 ⁰
		NE	350	NNE	540	約 8.7×10 ⁰
		ENE	280	NE	440	約 1.1×10 ¹
		E	230	NE	350	約 1.3×10 ¹
		ESE	240	ENE	290	約 1.5×10 ¹
		SE	280	E	250	約 2.4×10 ¹
日本原子力研究所側	SSE	360	SE	230	約 5.0×10 ¹	
	S	330	SSE	140	約 4.6×10 ¹	
	SSW	360	SW	160	約 4.2×10 ¹	
	SW	460	WSW	300	約 2.4×10 ¹	

(注) 計算地点については、東海第二発電所排気筒を基準にしたものである。これらを第 5.1-1 図に示す。

変更(案)

第 5.2-5 表 周辺監視区域境界における希ガスのγ線に起因する実効線量（東海発電所）

	計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】		東海発電所排気筒から計算地点への方位及び距離(m)		希ガスのγ線に起因する実効線量 (μSv/y)	
	方位	距離	方位	距離		
	周辺監視区域境界	WSW	640	W		540
	W	530	WNW	520	約 8.6×10 ⁰	
	WNW	600	NW	660	約 7.5×10 ⁰	
	NW	660	NNW	790	約 7.8×10 ⁰	
	NNW	890	NNW	1,060	約 5.4×10 ⁰	
	N	850	N	1,050	約 5.9×10 ⁰	
	NNE	600	NNE	810	約 5.8×10 ⁰	
参考地点	海側	NE	360	NNE	550	約 8.7×10 ⁰
		ENE	270	NE	430	約 1.2×10 ¹
		E	230	NE	350	約 1.4×10 ¹
		ESE	250	ENE	300	約 1.8×10 ¹
		SE	290	E	260	約 2.7×10 ¹
		原子力科学研究所側	SSE	350	ESE	220
S	330		SSE	140	約 4.0×10 ¹	
SSW	350		SW	150	約 4.5×10 ¹	
SW	430		WSW	270	約 3.0×10 ¹	

(注) 計算地点については、東海第二発電所排気筒を基準にしたものである。これらを第 5.1-1 図に示す。

備考

- ・①
- ・②（日本原子力研究開発機構との用地調整に伴う周辺監視区域境界の変更による SW 方位の評価距離の変更）
- ・③（海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置の変更による NNE 方位評価点を追加）
- ・評価距離の詳細計測反映（WSW 方位, W 方位, N 方位, NE 方位, ENE 方位, ESE 方位, SE 方位, SSE 方位, SSW 方位）

既許可申請書

第 5.2-6 表 人の居住に着目した場合の希ガスのγ線に起因する
実効線量（東海発電所）

計算地点 [東海第二発電所排気筒からの方位及び 距離(m)]		東海発電所排気筒 から計算地点への 方位及び距離 (m)		希ガスのγ線に起因する 実効線量 ($\mu\text{Sv/y}$)	
方位	距離	方位	距離		
A	N	860	N	1,060	約 5.6×10^0
B	NNW	890	NNW	1,060	約 4.7×10^0
C	NW	660	NNW	790	約 6.6×10^0
D	WNW	600	NW	660	約 5.6×10^0
E	W	660	WNW	640	約 5.7×10^0
F	WSW	930	W	820	約 5.4×10^0
G	SW	1,300	SW	1,130	約 1.3×10^1
H	SSW	1,690	SSW	1,490	約 7.7×10^0
I	S	1,870	S	1,670	約 3.9×10^0

(注) 計算地点については、東海第二発電所排気筒を基準にしたものである。
これらを第 5.1-2 図に示す。

変更(案)

第 5.2-6 表 人の居住に着目した場合の希ガスのγ線に起因する
実効線量（東海発電所）

線量計算地点 [東海第二発電所排気筒からの方位及び 距離(m)]		東海発電所排気筒か ら線量計算地点への 方位及び距離(m)		希ガスのγ線に起因する 実効線量 ($\mu\text{Sv/y}$)	
方位	距離	方位	距離		
A	NNE	600	NNE	810	約 5.8×10^0
B	N	850	N	1,050	約 5.9×10^0
C	NNW	890	NNW	1,060	約 5.4×10^0
D	NW	660	NNW	790	約 7.8×10^0
E	WNW	600	NW	660	約 7.5×10^0
F	W	660	WNW	640	約 7.1×10^0
G	WSW	930	W	820	約 7.4×10^0
H	SW	1,280	SW	1,110	約 1.5×10^1
I	SSW	1,690	SSW	1,490	約 5.8×10^0
J	S	1,870	S	1,670	約 3.2×10^0
K	SSE	2,900	SSE	2,740	約 3.5×10^0

(注 1) 線量計算地点については、東海第二発電所排気筒を基準にしたもので
ある。これらを第 5.1-2 図に示す。
(注 2) 方位 SSE は、海を隔てて比較的近距离のところ陸地が存在するた
め、この陸地の海岸線を線量計算地点とした。

備考

- ・①
- ・②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮し SW 方位の評価点の変更）
- ・③（周辺監視区域境界変更に伴う NNE 方位評価点の追加及び SSE 方位にある海を隔てた陸地（常陸那珂火力発電所）を評価点として追加）
- ・評価距離の詳細計測反映（N 方位）

既許可申請書	変更（案）	備考																																																																																																																																																						
<p>5.3 東海第二発電所と東海発電所の放射性廃棄物により一般公衆の受ける線量評価</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮した地点における東海第二発電所と東海発電所の気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量の評価結果は、第5.3-1表に示すとおりである。これによれば、周辺における将来の集落の形成を考慮した地点で希ガスのγ線の実効線量の最大値は、東海第二発電所排気筒の南西約1,300mの地点（東海発電所排気筒の南西約1,130mの地点）において、約16μSv/yである。</p> <p>また、これに東海発電所の液体廃棄物中の放射性物質による実効線量及び東海第二発電所の気体廃棄物中に含まれるよう素を摂取する場合の実効線量を加算すると、合計で約23μSv/yとなる。</p> <div data-bbox="203 515 902 1257" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>第5.3-1表 人の居住に着目した場合の希ガスのγ線に起因する実効線量（東海第二発電所，東海発電所合算）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th colspan="3" rowspan="2">計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】</th> <th colspan="3">希ガスのγ線に起因する実効線量 (μSv/y)</th> </tr> <tr> <th>東海第二 発電所</th> <th>東海 発電所</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <th>方位</th> <th>距離</th> <th></th> <th></th> <th></th> <th></th> </tr> <tr> <td>A</td> <td>N</td> <td>860</td> <td>約1.1$\times 10^0$</td> <td>約5.6$\times 10^0$</td> <td>約6.6$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>NNW</td> <td>890</td> <td>約1.5$\times 10^0$</td> <td>約4.7$\times 10^0$</td> <td>約6.2$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>NW</td> <td>660</td> <td>約1.6$\times 10^0$</td> <td>約6.6$\times 10^0$</td> <td>約8.2$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>WNW</td> <td>600</td> <td>約1.7$\times 10^0$</td> <td>約5.6$\times 10^0$</td> <td>約7.4$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>E</td> <td>W</td> <td>660</td> <td>約2.1$\times 10^0$</td> <td>約5.7$\times 10^0$</td> <td>約7.9$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>WSW</td> <td>930</td> <td>約2.4$\times 10^0$</td> <td>約5.4$\times 10^0$</td> <td>約7.9$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>G</td> <td>SW</td> <td>1,300</td> <td>約3.3$\times 10^0$</td> <td>約1.3$\times 10^1$</td> <td>約1.6$\times 10^1$</td> </tr> <tr> <td>H</td> <td>SSW</td> <td>1,690</td> <td>約1.6$\times 10^0$</td> <td>約7.7$\times 10^0$</td> <td>約9.3$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>I</td> <td>S</td> <td>1,870</td> <td>約6.4$\times 10^{-1}$</td> <td>約3.9$\times 10^0$</td> <td>約4.6$\times 10^0$</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注) 計算地点については、東海第二発電所排気筒を基準にしたものである。これらを第5.1-2図に示す。</p> </div>	計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】			希ガスのγ線に起因する実効線量 (μ Sv/y)			東海第二 発電所	東海 発電所	合計	方位	距離					A	N	860	約1.1 $\times 10^0$	約5.6 $\times 10^0$	約6.6 $\times 10^0$	B	NNW	890	約1.5 $\times 10^0$	約4.7 $\times 10^0$	約6.2 $\times 10^0$	C	NW	660	約1.6 $\times 10^0$	約6.6 $\times 10^0$	約8.2 $\times 10^0$	D	WNW	600	約1.7 $\times 10^0$	約5.6 $\times 10^0$	約7.4 $\times 10^0$	E	W	660	約2.1 $\times 10^0$	約5.7 $\times 10^0$	約7.9 $\times 10^0$	F	WSW	930	約2.4 $\times 10^0$	約5.4 $\times 10^0$	約7.9 $\times 10^0$	G	SW	1,300	約3.3 $\times 10^0$	約1.3 $\times 10^1$	約1.6 $\times 10^1$	H	SSW	1,690	約1.6 $\times 10^0$	約7.7 $\times 10^0$	約9.3 $\times 10^0$	I	S	1,870	約6.4 $\times 10^{-1}$	約3.9 $\times 10^0$	約4.6 $\times 10^0$	<p>5.3 東海第二発電所と東海発電所の放射性廃棄物により一般公衆の受ける線量評価</p> <p>周辺における将来の集落の形成を考慮した地点における東海第二発電所と東海発電所の気体廃棄物中の希ガスのγ線による実効線量の評価結果は、第5.3-1表に示すとおりである。これによれば、周辺における将来の集落の形成を考慮した地点で希ガスのγ線の実効線量の最大値は、東海第二発電所排気筒の南西約1,280mの地点（東海発電所排気筒の南西約1,110mの地点）において、約18μSv/yである。</p> <p>また、これに東海発電所の液体廃棄物中の放射性物質による実効線量及び東海第二発電所の気体廃棄物中に含まれるよう素を摂取する場合の実効線量を加算すると、合計で約24μSv/yとなる。</p> <div data-bbox="1070 515 1657 1257" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>第5.3-1表 人の居住に着目した場合の希ガスのγ線に起因する実効線量（東海第二発電所，東海発電所合算）</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th colspan="3" rowspan="2">計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】</th> <th colspan="3">希ガスのγ線に起因する実効線量 (μSv/y)</th> </tr> <tr> <th>東海第二 発電所</th> <th>東海 発電所</th> <th>合計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <th>方位</th> <th>距離</th> <th></th> <th></th> <th></th> <th></th> </tr> <tr> <td>A</td> <td>NNE</td> <td>800</td> <td>約1.5$\times 10^0$</td> <td>約6.8$\times 10^0$</td> <td>約7.3$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>B</td> <td>N</td> <td>850</td> <td>約1.3$\times 10^0$</td> <td>約6.9$\times 10^0$</td> <td>約7.2$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>C</td> <td>NNW</td> <td>890</td> <td>約1.1$\times 10^0$</td> <td>約5.4$\times 10^0$</td> <td>約6.5$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>D</td> <td>NW</td> <td>660</td> <td>約1.4$\times 10^0$</td> <td>約7.8$\times 10^0$</td> <td>約9.2$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>E</td> <td>WNW</td> <td>600</td> <td>約1.8$\times 10^0$</td> <td>約7.5$\times 10^0$</td> <td>約9.3$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>F</td> <td>W</td> <td>660</td> <td>約2.1$\times 10^0$</td> <td>約7.1$\times 10^0$</td> <td>約9.2$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>G</td> <td>WSW</td> <td>930</td> <td>約2.3$\times 10^0$</td> <td>約7.4$\times 10^0$</td> <td>約9.7$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>H</td> <td>SW</td> <td>1,280</td> <td>約2.8$\times 10^0$</td> <td>約1.5$\times 10^1$</td> <td>約1.8$\times 10^1$</td> </tr> <tr> <td>I</td> <td>SSW</td> <td>1,690</td> <td>約1.0$\times 10^0$</td> <td>約6.8$\times 10^0$</td> <td>約7.8$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>J</td> <td>S</td> <td>1,870</td> <td>約5.0$\times 10^{-1}$</td> <td>約3.2$\times 10^0$</td> <td>約3.7$\times 10^0$</td> </tr> <tr> <td>K</td> <td>SSE</td> <td>2,900</td> <td>約4.8$\times 10^{-1}$</td> <td>約3.5$\times 10^0$</td> <td>約3.9$\times 10^0$</td> </tr> </tbody> </table> <p>(注1) 計算地点については、東海第二発電所排気筒を基準にしたものである。これらを第5.1-2図に示す。</p> <p>(注2) 方位SSEは海を隔てて比較的距離のところに陸地が存在するため、この陸地の海岸線を評価地点とする。</p> </div>	計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】			希ガスのγ線に起因する実効線量 (μ Sv/y)			東海第二 発電所	東海 発電所	合計	方位	距離					A	NNE	800	約1.5 $\times 10^0$	約6.8 $\times 10^0$	約7.3 $\times 10^0$	B	N	850	約1.3 $\times 10^0$	約6.9 $\times 10^0$	約7.2 $\times 10^0$	C	NNW	890	約1.1 $\times 10^0$	約5.4 $\times 10^0$	約6.5 $\times 10^0$	D	NW	660	約1.4 $\times 10^0$	約7.8 $\times 10^0$	約9.2 $\times 10^0$	E	WNW	600	約1.8 $\times 10^0$	約7.5 $\times 10^0$	約9.3 $\times 10^0$	F	W	660	約2.1 $\times 10^0$	約7.1 $\times 10^0$	約9.2 $\times 10^0$	G	WSW	930	約2.3 $\times 10^0$	約7.4 $\times 10^0$	約9.7 $\times 10^0$	H	SW	1,280	約2.8 $\times 10^0$	約1.5 $\times 10^1$	約1.8 $\times 10^1$	I	SSW	1,690	約1.0 $\times 10^0$	約6.8 $\times 10^0$	約7.8 $\times 10^0$	J	S	1,870	約5.0 $\times 10^{-1}$	約3.2 $\times 10^0$	約3.7 $\times 10^0$	K	SSE	2,900	約4.8 $\times 10^{-1}$	約3.5 $\times 10^0$	約3.9 $\times 10^0$	<p>備考</p> <ul style="list-style-type: none"> ・①、②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮し SW 方位の評価点の変更） ・① ・②（道路拡幅工事による周辺監視区域境界の変更に伴う人の居住を考慮し SW 方位の評価点の変更） ・③（周辺監視区域境界変更に伴う NNE 方位評価点の追加及び SSE 方位にある海を隔てた陸地（常陸那珂火力発電所）を評価点として追加） ・評価距離の詳細計測反映（N 方位）
計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】				希ガスのγ線に起因する実効線量 (μ Sv/y)																																																																																																																																																				
			東海第二 発電所	東海 発電所	合計																																																																																																																																																			
方位	距離																																																																																																																																																							
A	N	860	約1.1 $\times 10^0$	約5.6 $\times 10^0$	約6.6 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
B	NNW	890	約1.5 $\times 10^0$	約4.7 $\times 10^0$	約6.2 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
C	NW	660	約1.6 $\times 10^0$	約6.6 $\times 10^0$	約8.2 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
D	WNW	600	約1.7 $\times 10^0$	約5.6 $\times 10^0$	約7.4 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
E	W	660	約2.1 $\times 10^0$	約5.7 $\times 10^0$	約7.9 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
F	WSW	930	約2.4 $\times 10^0$	約5.4 $\times 10^0$	約7.9 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
G	SW	1,300	約3.3 $\times 10^0$	約1.3 $\times 10^1$	約1.6 $\times 10^1$																																																																																																																																																			
H	SSW	1,690	約1.6 $\times 10^0$	約7.7 $\times 10^0$	約9.3 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
I	S	1,870	約6.4 $\times 10^{-1}$	約3.9 $\times 10^0$	約4.6 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
計算地点 【東海第二発電所排気筒からの方位及び距離(m)】			希ガスのγ線に起因する実効線量 (μ Sv/y)																																																																																																																																																					
			東海第二 発電所	東海 発電所	合計																																																																																																																																																			
方位	距離																																																																																																																																																							
A	NNE	800	約1.5 $\times 10^0$	約6.8 $\times 10^0$	約7.3 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
B	N	850	約1.3 $\times 10^0$	約6.9 $\times 10^0$	約7.2 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
C	NNW	890	約1.1 $\times 10^0$	約5.4 $\times 10^0$	約6.5 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
D	NW	660	約1.4 $\times 10^0$	約7.8 $\times 10^0$	約9.2 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
E	WNW	600	約1.8 $\times 10^0$	約7.5 $\times 10^0$	約9.3 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
F	W	660	約2.1 $\times 10^0$	約7.1 $\times 10^0$	約9.2 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
G	WSW	930	約2.3 $\times 10^0$	約7.4 $\times 10^0$	約9.7 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
H	SW	1,280	約2.8 $\times 10^0$	約1.5 $\times 10^1$	約1.8 $\times 10^1$																																																																																																																																																			
I	SSW	1,690	約1.0 $\times 10^0$	約6.8 $\times 10^0$	約7.8 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
J	S	1,870	約5.0 $\times 10^{-1}$	約3.2 $\times 10^0$	約3.7 $\times 10^0$																																																																																																																																																			
K	SSE	2,900	約4.8 $\times 10^{-1}$	約3.5 $\times 10^0$	約3.9 $\times 10^0$																																																																																																																																																			

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>6. 発電所内外の放射線監視</p> <p>6.2 発電所内の放射線監視</p> <p>6.2.1 外部放射線に係る線量当量率の測定</p> <p>発電所内の外部放射線に係る線量当量率の測定は、放射線の種類、程度に応じた適切な測定器を用いて測定を行う。特に管理区域内については固定モニタと携帯用のサーベイ・メータとの組合せにより監視する。</p> <p>固定モニタであるエリア・モニタは、人の立ち入る場所で、運転状況により外部放射線に係る線量当量率が大きく変動する場所、パトロール等で頻繁に人が立ち入る場所等の管理区域の主要部分の外部放射線に係る線量当量率を監視する。</p> <p>例えば、人の常駐する中央制御室や廃棄物処理系制御室、立入り頻度の多い燃料取替床、タービン建屋主通路、タービン発電機運転床等に設置する。</p> <p>エリア・モニタは、放射線レベルがあらかじめ設定された値を超えた場合、中央制御室及び必要な箇所については現場において警報を発する。</p> <p>なお、警報は異常の発見を主目的とすることから、その警報設定点は、通常のバックグラウンド値を基にして定める。</p> <p>また、放射線業務従事者等が、特に頻繁に立ち入る箇所については、定期的及び必要の都度サーベイ・メータによる外部放射線に係る線量当量率の測定を行う。</p> <p>6.2.3 系統内の放射能測定</p> <p>原子炉施設が正常に運転されていることを確認するため、系統内の気体中及び液体中の放射性物質の濃度を添付書類八の「11.3.2 放出放射性廃棄物及び系統内の放射線監視設備並びに測定機器」に記述するプロセス・モニタにより測定する。</p> <p>プロセス・モニタは、系統内の気体中又は水中の放射性物質の濃度を常に監視し、そのレベルがあらかじめ設定された値を超えた場合は、中央制御室において警報を発し、適切な処置がなされるよう運転員の注意を喚起する。</p> <p>なお、警報は異常の発見を目的とすることから、その警報設定点は通常のバックグラウンド値を基にして定める。</p> <p>上記のモニタのほかに、主な系統は定期的及び必要の都度サンプリングし、放射性物質の濃度を測定する。</p> <p>6.3 放射性廃棄物の放出管理</p> <p>発電所外に放出される気体及び液体廃棄物は、次に述べるように厳重に管理を行い、周辺監視区域外の空气中及び水中の放射性物質の濃度が「経済産業省告示」線量限度等を定める告示（第9条）に定める値を超えないようにする。</p> <p>さらに、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」に基づき、発電所</p>	<p>6. 発電所内外の放射線監視</p> <p>6.2 発電所内の放射線監視</p> <p>6.2.1 外部放射線に係る線量当量率の測定</p> <p>発電所内の外部放射線に係る線量当量率の測定は、放射線の種類、程度に応じた適切な測定器を用いて測定を行う。特に管理区域内については固定モニタと携帯用のサーベイ・メータとの組合せにより監視する。</p> <p>固定モニタであるエリア・モニタは、人の立ち入る場所で、運転状況により外部放射線に係る線量当量率が大きく変動する場所、パトロール等で頻繁に人が立ち入る場所等の管理区域の主要部分の外部放射線に係る線量当量率を監視する。</p> <p>例えば、人の常駐する中央制御室や廃棄物処理系制御室、立入り頻度の多い燃料取替床、タービン建屋主通路、タービン発電機運転床等に設置する。</p> <p>エリア・モニタは、放射線レベルがあらかじめ設定された値を超えた場合、中央制御室及び必要な箇所については現場において警報を発する。</p> <p>なお、警報は異常の発見を主目的とすることから、その警報設定点は、通常のバックグラウンド値を基にして定める。</p> <p>また、放射線業務従事者等が、特に頻繁に立ち入る箇所については、定期的及び必要の都度サーベイ・メータによる外部放射線に係る線量当量率の測定を行う。</p> <p>サーベイ・メータとしては、次のものを使用する。</p> <p>β・γ線用サーベイ・メータ</p> <p>中性子線用サーベイ・メータ</p> <p>6.2.3 系統内の放射能測定</p> <p>原子炉施設が正常に運転されていることを確認するため、系統内の気体中及び液体中の放射性物質の濃度を添付書類八の「8.1.1.4.5 放出放射性廃棄物及び系統内の放射線監視設備並びに測定機器」に記述するプロセス・モニタにより測定する。</p> <p>プロセス・モニタは、系統内の気体中又は水中の放射性物質の濃度を常に監視し、そのレベルがあらかじめ設定された値を超えた場合は、中央制御室において警報を発し、適切な処置がなされるよう運転員の注意を喚起する。</p> <p>なお、警報は異常の発見を目的とすることから、その警報設定点は通常のバックグラウンド値を基にして定める。</p> <p>上記のモニタのほかに、主な系統は定期的及び必要の都度サンプリングし、放射性物質の濃度を測定する。</p> <p>6.3 放射性廃棄物の放出管理</p> <p>発電所外に放出される気体及び液体廃棄物は、以下に述べるように厳重に管理を行い、周辺監視区域外の空气中及び水中の放射性物質の濃度が「線量限度等を定める告示」（第8条）に定める値を超えないようにする。</p> <p>さらに、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量目標値に関する指針」に基づき、発電所</p>	<p>・記載の適正化（先行プラントの記載を反映）</p> <p>・記載の適正化（添付書類八の項目番号との整合）</p> <p>・記載の適正化（先行プラントの記載を反映）</p> <p>・法令の改正に伴う記載の適正化</p>

添付3-31

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類九）

【添付資料 3】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>から放出される放射性物質について放出管理の目標値を定め、これを超えないように努める。</p> <p>6.3.2 液体廃棄物</p> <p>放射性液体廃棄物は、放射性物質濃度のごく低いものを除き、原則として、環境には放出せずできる限り固化するか、処理後再使用する。</p> <p>液体廃棄物処理系から廃液を環境に放出する際には、あらゆる場合、一時サンプルタンクに貯留した後タンク内の廃液をサンプリングし、放射性物質濃度を測定して、排水口における放射性物質濃度が、経済産業省告示「線量限度等を定める告示」(第9条)に定める周辺監視区域外における水中の濃度限度を超えないようにするとともに、排水中の放射性物質の放出量について放出管理に関する目標値を超えないように努める。</p> <p>さらに、放出される液体中の放射性物質の濃度は、液体廃棄物処理系排水モニタ又は雑固体減容処理設備排水モニタによって監視する。この液体廃棄物処理系排水モニタ及び雑固体減容処理設備排水モニタの測定結果は、中央制御室又は廃棄物処理建屋操作室に指示・記録するとともに、放射性物質濃度が予め設定された値を超えた場合は警報を出し、適切な処置がなされるよう運転員の注意を喚起する。</p> <p>液体廃棄物処理系排水モニタ及び雑固体減容処理設備排水モニタの警報設定点は、通常のバックグラウンド値を基にして定める。</p> <p>7. 放射線業務従事者の被ばく管理</p> <p>7.3 管理区域への出入管理</p> <p>管理区域への出入管理の基本方針は、次のとおりとする。</p> <p>(1) 管理区域には、あらかじめ指定された者以外の立入りを原則として禁止する。</p> <p>(2) 管理区域に立ち入る者に対しては、電子式個人線量計の着用を確認させる。</p> <p>(3) 管理区域内の汚染管理区域及び特別立入制限区域（高放射線，高汚染）に対しては立入制限を行う。</p> <p>(4) 汚染管理区域への立入りは、必要に応じて適切な防護具を着用させる。</p> <p>(5) 汚染管理区域から退出する場合には、退出モニタ等により、表面汚染検査を行わせる。汚染が認められた場合には手洗い、シャワ等により除染を行わせる。</p>	<p>から放出される放射性物質について放出管理の目標値を定め、「発電用軽水型原子炉施設における放出放射性物質の測定に関する指針」に基づく測定を行い、これを超えないように努める。</p> <p>6.3.2 液体廃棄物</p> <p>放射性液体廃棄物は、放射性物質濃度のごく低いものを除き、原則として、環境には放出せずできる限り固化するか、処理後再使用する。</p> <p>液体廃棄物処理系から廃液を環境に放出する際には、あらゆる場合、一時サンプルタンクに貯留した後タンク内の廃液をサンプリングし、放射性物質濃度を測定して、排水口における放射性物質濃度が「線量限度等を定める告示」(第8条)に定める周辺監視区域外における水中の濃度限度を超えないようにするとともに、排水中の放射性物質の放出量について放出管理に関する目標値を超えないように努める。</p> <p>さらに、放出される液体中の放射性物質の濃度は、液体廃棄物処理系排水モニタ又は雑固体減容処理設備排水モニタによって監視する。この液体廃棄物処理系排水モニタ及び雑固体減容処理設備排水モニタの測定結果は、中央制御室及び廃棄物処理建屋操作室に指示・記録するとともに、放射性物質濃度が予め設定された値を超えた場合は警報を出し、適切な処置がなされるよう運転員の注意を喚起する。</p> <p>液体廃棄物処理系排水モニタ及び雑固体減容処理設備排水モニタの警報設定点は、通常のバックグラウンド値を基にして定める。</p> <p>7. 放射線業務従事者の被ばく管理</p> <p>7.3 管理区域への出入管理</p> <p>管理区域への出入管理の基本方針は、次のとおりとする。</p> <p>(1) 管理区域には、あらかじめ指定された者以外の立入りを原則として禁止する。</p> <p>(2) 管理区域に立ち入る者に対しては、電子式個人線量計の着用を確認させる。</p> <p>(3) 管理区域内の汚染管理区域及び特別立入制限区域（高放射線，高汚染）に対しては立入制限を行う。</p> <p>(4) 汚染管理区域への立入りは、必要に応じて適切な防護具を着用させる。</p> <p>(5) 汚染管理区域から退出する場合には、退出モニタ等により、表面汚染検査を行わせる。汚染が認められた場合には手洗い、シャワ等により除染を行わせる。</p> <p>(6) 放射性物質を経口摂取するおそれのある場所での飲食及び喫煙を禁止する。</p> <p>(7) 異常事態の発生又はそのおそれのある事象を発見した場合は、直ちに必要箇所へ連絡させ、その指示に従わせる。</p>	<p>・記載の適正化（先行プラントの記載を反映）</p> <p>・法令の改正に伴う記載の適正化</p> <p>・記載の適正化（先行プラントの記載を反映）</p> <p>先行プラントを反映した記載の見直し</p>

東海第二発電所 新規規制基準適合性確認比較表（添付書類十）

【添付資料 4】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>[その5-9×9燃料が装荷されたサイクル以降]</p> <p>3. 事故解析</p> <p>3.4 環境への放射性物質の異常な放出</p> <p>3.4.1 放射性気体廃棄物処理施設の破損</p> <p>3.4.1.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.1.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提</p> <p>大気中に放出される希ガスは換気空調系の作動を考慮するので排気筒から放出されるものとする。放出された希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>3.4.2 主蒸気管破断</p> <p>3.4.2.4 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.2.4.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提</p> <p>大気中へ放出される核分裂生成物は、タービン建屋から地上放散するものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。</p> <p>a. 主蒸気隔離弁閉止前に放出された核分裂生成物を含む冷却材は、高温低湿状態の外気中で完全蒸発し、半球状の蒸気雲を形成するものとする。この場合、蒸気雲が小さいほど実効線量が高くなり、外気条件として温度が高く、相対湿度が低いほど蒸気雲は小さくなる。本評価では、蒸気雲の大きさを求めるに当たり、温度として33℃、相対湿度として40%を用いる。</p> <p>b. この半球状の蒸気雲は、短時間放出を考慮して風下方向に1m/sの速度で移動するものとする。</p> <p>c. 主蒸気隔離弁閉止後、主蒸気隔離弁を通して大気中へ放出される核分裂生成物による非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>d. また、非居住区域境界外での希ガス及びハロゲン等によるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガス及びハロゲン等の全放出量を乗じて求める。</p> <p>3.4.3 燃料集合体の落下</p> <p>3.4.3.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.3.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提</p> <p>大気中へ放出される核分裂生成物は、排気筒から放出されるものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。</p> <p>a. 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>b. 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当</p>	<p>[その5-9×9燃料が装荷されたサイクル以降]</p> <p>3. 事故解析</p> <p>3.4 環境への放射性物質の異常な放出</p> <p>3.4.1 放射性気体廃棄物処理施設の破損</p> <p>3.4.1.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.1.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提</p> <p>大気中に放出される希ガスは換気空調系の作動を考慮するので排気筒から放出されるものとする。放出された希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>3.4.2 主蒸気管破断</p> <p>3.4.2.4 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.2.4.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提</p> <p>大気中へ放出される核分裂生成物は、タービン建屋から地上放散するものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。</p> <p>a. 主蒸気隔離弁閉止前に放出された核分裂生成物を含む冷却材は、高温低湿状態の外気中で完全蒸発し、半球状の蒸気雲を形成するものとする。この場合、蒸気雲が小さいほど実効線量が高くなり、外気条件として温度が高く、相対湿度が低いほど蒸気雲は小さくなる。本評価では、蒸気雲の大きさを求めるに当たり、温度として33℃、相対湿度として40%を用いる。</p> <p>b. この半球状の蒸気雲は、短時間放出を考慮して風下方向に1m/sの速度で移動するものとする。</p> <p>c. 主蒸気隔離弁閉止後、主蒸気隔離弁を通して大気中へ放出される核分裂生成物による非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>d. また、非居住区域境界外での希ガス、ハロゲン等によるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガス及びハロゲン等の全放出量を乗じて求める。</p> <p>3.4.3 燃料集合体の落下</p> <p>3.4.3.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.3.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提</p> <p>大気中へ放出される核分裂生成物は、排気筒から放出されるものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。</p> <p>a. 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。</p> <p>b. 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用</p>	<p>・②（添付書類六の項目の変更）</p> <p>・②（添付書類六の項目の変更）</p> <p>・②（添付書類六の項目の変更）</p>

添付4-1

①：気象期間の変更、②記載の適正化

東海第二発電所 新規規制基準適合性確認比較表（添付書類十）

【添付資料 4】

既許可申請書	変更（案）	備考
<p>量評価に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>(3) 評価結果 上記の評価方法に基づき非居住区域境界外での実効線量を評価した結果は、第 3.4.3-2 表のとおり約 $2.1 \times 10^{-2} \text{mSv}$ である。 上記の値から判断して、本事故による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。</p> <p>3.4.4 原子炉冷却材喪失</p> <p>3.4.4.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.4.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提 大気中へ放出される核分裂生成物は、排気筒から放出されるものとし、これによる実効線量並びに原子炉建屋内の核分裂生成物からの直接線及びスカイシャイン線による実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。 a. 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。 b. 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。 c. 直接線及びスカイシャイン線による実効線量は、原子炉建屋内の核分裂生成物によるγ線積算線源強度を用い、原子炉建屋の「遮蔽」効果を考慮して求める。</p> <p>(3) 評価結果 上記の評価方法に基づき非居住区域境界外での実効線量を評価した結果は、第 3.4.4-3 表のとおり約 $2.7 \times 10^{-4} \text{mSv}$ である。 上記の値から判断して、本事故による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。</p> <p>3.4.5 制御棒落下</p> <p>3.4.5.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.5.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提 大気中へ放出される核分裂生成物は、排気筒から放出されるものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。 a. 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。 b. 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.4 想定事故時の線量当量評価に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>(3) 評価結果 上記の評価方法に基づき非居住区域境界外での実効線量を評価した結果は、第 3.4.5-2 表のとおり約 $4.0 \times 10^{-3} \text{mSv}$ である。</p>	<p>用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>(3) 評価結果 上記の評価方法に基づき非居住区域境界外での実効線量を評価した結果は、第 3.4.3-2 表のとおり約 $1.8 \times 10^{-2} \text{mSv}$ である。 上記の値から判断して、本事故による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。</p> <p>3.4.4 原子炉冷却材喪失</p> <p>3.4.4.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.4.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提 大気中へ放出される核分裂生成物は、排気筒から放出されるものとし、これによる実効線量並びに原子炉建屋内の核分裂生成物からの直接線及びスカイシャイン線による実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。 a. 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。 b. 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。 c. 直接線及びスカイシャイン線による実効線量は、原子炉建屋内の核分裂生成物によるγ線積算線源強度を用い、原子炉建屋の「遮蔽」効果を考慮して求める。</p> <p>(3) 評価結果 上記の評価方法に基づき非居住区域境界外での実効線量を評価した結果は、第 3.4.4-3 表のとおり約 $3.2 \times 10^{-4} \text{mSv}$ である。 上記の値から判断して、本事故による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。</p> <p>3.4.5 制御棒落下</p> <p>3.4.5.3 核分裂生成物の放出量及び線量の評価⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾⁽³³⁾</p> <p>3.4.5.3.2 線量の評価</p> <p>(1) 評価前提 大気中へ放出される核分裂生成物は、排気筒から放出されるものとし、これによる実効線量の計算は、次の仮定に基づいて行う。 a. 非居住区域境界外での地表空气中濃度は、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対濃度に核分裂生成物の全放出量を乗じて求める。 b. 非居住区域境界外での希ガスによるγ線空気カーマは、添付書類六の「5.5.3 大気拡散の計算に使用する気象条件」に記述する相対線量に希ガスの全放出量を乗じて求める。</p> <p>(3) 評価結果 上記の評価方法に基づき非居住区域境界外での実効線量を評価した結果は、第 3.4.5-2 表のとおり約 $3.2 \times 10^{-3} \text{mSv}$ である。</p>	<p>・②（添付書類六の項目の変更）</p> <p>・①</p> <p>・②（添付書類六の項目の変更）</p> <p>・コンクリート密度変更に伴う直接線及びスカイシャイン線の線量評価結果の変更</p> <p>・②（添付書類六の項目の変更）</p> <p>・①</p>

添付4-2

①：気象期間の変更、②記載の適正化

既許可申請書	変更（案）	備 考								
<p>上記の値から判断して、本事故による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。</p> <p>第3.4.1-2表 放射性気体廃棄物処理施設の破損時の実効線量</p> <table border="1" data-bbox="331 339 792 448"> <tr> <td>実効線量 (mSv)</td> </tr> <tr> <td>約6.7×10^{-2}</td> </tr> </table> <p>第3.4.2-2表 主蒸気管破断時の核分裂生成物放出量 (事故)</p> <p>第3.4.2-4表 主蒸気管破断時の実効線量 (事故)</p> <p>第3.4.3-2表 燃料集合体の落下時の実効線量</p> <table border="1" data-bbox="331 684 792 793"> <tr> <td>実効線量 (mSv)</td> </tr> <tr> <td>約2.1×10^{-2}</td> </tr> </table> <p>第3.4.4-1表 原子炉冷却材喪失時の核分裂生成物放出量 (事故)</p>	実効線量 (mSv)	約 6.7×10^{-2}	実効線量 (mSv)	約 2.1×10^{-2}	<p>上記の値から判断して、本事故による周辺の公衆に与える放射線被ばくのリスクは十分に小さいものと考えられる。</p> <p>第3.4.1-2表 放射性気体廃棄物処理施設の破損時の実効線量</p> <table border="1" data-bbox="1151 339 1612 448"> <tr> <td>実効線量 (mSv)</td> </tr> <tr> <td>約5.3×10^{-2}</td> </tr> </table> <p>第3.4.2-2表 主蒸気管破断時の核分裂生成物放出量</p> <p>第3.4.2-4表 主蒸気管破断時の実効線量</p> <p>第3.4.3-2表 燃料集合体の落下時の実効線量</p> <table border="1" data-bbox="1151 684 1612 793"> <tr> <td>実効線量 (mSv)</td> </tr> <tr> <td>約1.8×10^{-2}</td> </tr> </table> <p>第3.4.4-1表 原子炉冷却材喪失時の核分裂生成物放出量</p>	実効線量 (mSv)	約 5.3×10^{-2}	実効線量 (mSv)	約 1.8×10^{-2}	<p>・①</p> <p>・②</p> <p>・②</p> <p>・①</p> <p>・②</p>
実効線量 (mSv)										
約 6.7×10^{-2}										
実効線量 (mSv)										
約 2.1×10^{-2}										
実効線量 (mSv)										
約 5.3×10^{-2}										
実効線量 (mSv)										
約 1.8×10^{-2}										

既許可申請書	変更（案）	備考																																																																																																																																																																																	
<p>第3.4.4-2表 原子炉冷却材喪失時のエネルギー群別 γ線積算線源強度（事故）</p> <table border="1" data-bbox="280 248 840 834"> <thead> <tr> <th>代表エネルギー (MeV)</th> <th>エネルギー範囲 (MeV)</th> <th>γ線積算線源強度 (Photons)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>0.5</td><td>E ≤ 0.5</td><td>約2.3×10¹³</td></tr> <tr><td>0.6</td><td>0.5 < E ≤ 0.6</td><td>約8.2×10¹³</td></tr> <tr><td>0.7</td><td>0.6 < E ≤ 0.7</td><td>約1.3×10¹³</td></tr> <tr><td>0.8</td><td>0.7 < E ≤ 0.8</td><td>約6.6×10¹³</td></tr> <tr><td>0.9</td><td>0.8 < E ≤ 0.9</td><td>約1.9×10¹³</td></tr> <tr><td>1.0</td><td>0.9 < E ≤ 1.0</td><td>約1.6×10¹³</td></tr> <tr><td>1.25</td><td>1.0 < E ≤ 1.25</td><td>約9.7×10¹⁴</td></tr> <tr><td>1.5</td><td>1.25 < E ≤ 1.5</td><td>約1.6×10¹³</td></tr> <tr><td>1.75</td><td>1.5 < E ≤ 1.75</td><td>約8.6×10¹⁴</td></tr> <tr><td>2.0</td><td>1.75 < E ≤ 2.0</td><td>約2.0×10¹⁴</td></tr> <tr><td>2.2</td><td>2.0 < E ≤ 2.2</td><td>約1.4×10¹⁵</td></tr> <tr><td>2.5</td><td>2.2 < E ≤ 2.5</td><td>約2.2×10¹⁵</td></tr> <tr><td>2.75</td><td>2.5 < E ≤ 2.75</td><td>約1.5×10¹⁴</td></tr> <tr><td>3.0</td><td>2.75 < E ≤ 3.0</td><td>約1.2×10¹³</td></tr> <tr><td>3.5</td><td>3.0 < E ≤ 3.5</td><td>約4.1×10¹²</td></tr> </tbody> </table>	代表エネルギー (MeV)	エネルギー範囲 (MeV)	γ線積算線源強度 (Photons)	0.5	E ≤ 0.5	約2.3×10 ¹³	0.6	0.5 < E ≤ 0.6	約8.2×10 ¹³	0.7	0.6 < E ≤ 0.7	約1.3×10 ¹³	0.8	0.7 < E ≤ 0.8	約6.6×10 ¹³	0.9	0.8 < E ≤ 0.9	約1.9×10 ¹³	1.0	0.9 < E ≤ 1.0	約1.6×10 ¹³	1.25	1.0 < E ≤ 1.25	約9.7×10 ¹⁴	1.5	1.25 < E ≤ 1.5	約1.6×10 ¹³	1.75	1.5 < E ≤ 1.75	約8.6×10 ¹⁴	2.0	1.75 < E ≤ 2.0	約2.0×10 ¹⁴	2.2	2.0 < E ≤ 2.2	約1.4×10 ¹⁵	2.5	2.2 < E ≤ 2.5	約2.2×10 ¹⁵	2.75	2.5 < E ≤ 2.75	約1.5×10 ¹⁴	3.0	2.75 < E ≤ 3.0	約1.2×10 ¹³	3.5	3.0 < E ≤ 3.5	約4.1×10 ¹²	<p>第3.4.4-2表 原子炉冷却材喪失時のエネルギー群別 γ線積算線源強度</p> <table border="1" data-bbox="1097 240 1671 1174"> <thead> <tr> <th>代表エネルギー (MeV)</th> <th>エネルギー範囲 (MeV)</th> <th>γ線積算線源強度 (Photons)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>0.01</td><td>E ≤ 0.01</td><td>約1.8×10¹³</td></tr> <tr><td>0.02</td><td>0.01 < E ≤ 0.02</td><td>約3.3×10¹¹</td></tr> <tr><td>0.03</td><td>0.02 < E ≤ 0.03</td><td>約1.0×10¹⁴</td></tr> <tr><td>0.045</td><td>0.03 < E ≤ 0.045</td><td>約1.4×10¹¹</td></tr> <tr><td>0.06</td><td>0.045 < E ≤ 0.06</td><td>0</td></tr> <tr><td>0.07</td><td>0.06 < E ≤ 0.07</td><td>0</td></tr> <tr><td>0.075</td><td>0.07 < E ≤ 0.075</td><td>0</td></tr> <tr><td>0.1</td><td>0.075 < E ≤ 0.1</td><td>約9.0×10¹⁷</td></tr> <tr><td>0.15</td><td>0.1 < E ≤ 0.15</td><td>約4.1×10¹³</td></tr> <tr><td>0.2</td><td>0.15 < E ≤ 0.2</td><td>約6.9×10¹⁵</td></tr> <tr><td>0.3</td><td>0.2 < E ≤ 0.3</td><td>約6.8×10¹⁶</td></tr> <tr><td>0.4</td><td>0.3 < E ≤ 0.4</td><td>約1.1×10¹⁶</td></tr> <tr><td>0.45</td><td>0.4 < E ≤ 0.45</td><td>約8.8×10¹⁴</td></tr> <tr><td>0.51</td><td>0.45 < E ≤ 0.51</td><td>約5.2×10¹⁴</td></tr> <tr><td>0.512</td><td>0.51 < E ≤ 0.512</td><td>約4.4×10¹³</td></tr> <tr><td>0.6</td><td>0.512 < E ≤ 0.6</td><td>約7.8×10¹⁵</td></tr> <tr><td>0.7</td><td>0.6 < E ≤ 0.7</td><td>約1.3×10¹⁶</td></tr> <tr><td>0.8</td><td>0.7 < E ≤ 0.8</td><td>約6.7×10¹⁵</td></tr> <tr><td>1.0</td><td>0.8 < E ≤ 1.0</td><td>約3.3×10¹⁵</td></tr> <tr><td>1.33</td><td>1.0 < E ≤ 1.33</td><td>約1.5×10¹⁵</td></tr> <tr><td>1.34</td><td>1.33 < E ≤ 1.34</td><td>約6.6×10¹²</td></tr> <tr><td>1.5</td><td>1.34 < E ≤ 1.5</td><td>約1.0×10¹⁵</td></tr> <tr><td>1.66</td><td>1.5 < E ≤ 1.66</td><td>約7.5×10¹⁴</td></tr> <tr><td>2.0</td><td>1.66 < E ≤ 2.0</td><td>約3.3×10¹⁴</td></tr> <tr><td>2.5</td><td>2.0 < E ≤ 2.5</td><td>約3.5×10¹⁵</td></tr> <tr><td>3.0</td><td>2.5 < E ≤ 3.0</td><td>約1.5×10¹⁴</td></tr> <tr><td>3.5</td><td>3.0 < E ≤ 3.5</td><td>約4.1×10¹²</td></tr> <tr><td>4.0</td><td>3.5 < E ≤ 4.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>4.5</td><td>4.0 < E ≤ 4.5</td><td>0</td></tr> <tr><td>5.0</td><td>4.5 < E ≤ 5.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>5.5</td><td>5.0 < E ≤ 5.5</td><td>0</td></tr> <tr><td>6.0</td><td>5.5 < E ≤ 6.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>6.5</td><td>6.0 < E ≤ 6.5</td><td>0</td></tr> <tr><td>7.0</td><td>6.5 < E ≤ 7.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>7.5</td><td>7.0 < E ≤ 7.5</td><td>0</td></tr> <tr><td>8.0</td><td>7.5 < E ≤ 8.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>10.0</td><td>8.0 < E ≤ 10.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>12.0</td><td>10.0 < E ≤ 12.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>14.0</td><td>12.0 < E ≤ 14.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>20.0</td><td>14.0 < E ≤ 20.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>30.0</td><td>20.0 < E ≤ 30.0</td><td>0</td></tr> <tr><td>50.0</td><td>30.0 < E ≤ 50.0</td><td>0</td></tr> </tbody> </table>	代表エネルギー (MeV)	エネルギー範囲 (MeV)	γ線積算線源強度 (Photons)	0.01	E ≤ 0.01	約1.8×10 ¹³	0.02	0.01 < E ≤ 0.02	約3.3×10 ¹¹	0.03	0.02 < E ≤ 0.03	約1.0×10 ¹⁴	0.045	0.03 < E ≤ 0.045	約1.4×10 ¹¹	0.06	0.045 < E ≤ 0.06	0	0.07	0.06 < E ≤ 0.07	0	0.075	0.07 < E ≤ 0.075	0	0.1	0.075 < E ≤ 0.1	約9.0×10 ¹⁷	0.15	0.1 < E ≤ 0.15	約4.1×10 ¹³	0.2	0.15 < E ≤ 0.2	約6.9×10 ¹⁵	0.3	0.2 < E ≤ 0.3	約6.8×10 ¹⁶	0.4	0.3 < E ≤ 0.4	約1.1×10 ¹⁶	0.45	0.4 < E ≤ 0.45	約8.8×10 ¹⁴	0.51	0.45 < E ≤ 0.51	約5.2×10 ¹⁴	0.512	0.51 < E ≤ 0.512	約4.4×10 ¹³	0.6	0.512 < E ≤ 0.6	約7.8×10 ¹⁵	0.7	0.6 < E ≤ 0.7	約1.3×10 ¹⁶	0.8	0.7 < E ≤ 0.8	約6.7×10 ¹⁵	1.0	0.8 < E ≤ 1.0	約3.3×10 ¹⁵	1.33	1.0 < E ≤ 1.33	約1.5×10 ¹⁵	1.34	1.33 < E ≤ 1.34	約6.6×10 ¹²	1.5	1.34 < E ≤ 1.5	約1.0×10 ¹⁵	1.66	1.5 < E ≤ 1.66	約7.5×10 ¹⁴	2.0	1.66 < E ≤ 2.0	約3.3×10 ¹⁴	2.5	2.0 < E ≤ 2.5	約3.5×10 ¹⁵	3.0	2.5 < E ≤ 3.0	約1.5×10 ¹⁴	3.5	3.0 < E ≤ 3.5	約4.1×10 ¹²	4.0	3.5 < E ≤ 4.0	0	4.5	4.0 < E ≤ 4.5	0	5.0	4.5 < E ≤ 5.0	0	5.5	5.0 < E ≤ 5.5	0	6.0	5.5 < E ≤ 6.0	0	6.5	6.0 < E ≤ 6.5	0	7.0	6.5 < E ≤ 7.0	0	7.5	7.0 < E ≤ 7.5	0	8.0	7.5 < E ≤ 8.0	0	10.0	8.0 < E ≤ 10.0	0	12.0	10.0 < E ≤ 12.0	0	14.0	12.0 < E ≤ 14.0	0	20.0	14.0 < E ≤ 20.0	0	30.0	20.0 < E ≤ 30.0	0	50.0	30.0 < E ≤ 50.0	0	<p>・コンクリート密度変更に伴う直接線及びスカイシャイン線のγ線積算線源強度のエネルギー群数の変更</p>
代表エネルギー (MeV)	エネルギー範囲 (MeV)	γ線積算線源強度 (Photons)																																																																																																																																																																																	
0.5	E ≤ 0.5	約2.3×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
0.6	0.5 < E ≤ 0.6	約8.2×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
0.7	0.6 < E ≤ 0.7	約1.3×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
0.8	0.7 < E ≤ 0.8	約6.6×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
0.9	0.8 < E ≤ 0.9	約1.9×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
1.0	0.9 < E ≤ 1.0	約1.6×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
1.25	1.0 < E ≤ 1.25	約9.7×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
1.5	1.25 < E ≤ 1.5	約1.6×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
1.75	1.5 < E ≤ 1.75	約8.6×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
2.0	1.75 < E ≤ 2.0	約2.0×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
2.2	2.0 < E ≤ 2.2	約1.4×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
2.5	2.2 < E ≤ 2.5	約2.2×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
2.75	2.5 < E ≤ 2.75	約1.5×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
3.0	2.75 < E ≤ 3.0	約1.2×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
3.5	3.0 < E ≤ 3.5	約4.1×10 ¹²																																																																																																																																																																																	
代表エネルギー (MeV)	エネルギー範囲 (MeV)	γ線積算線源強度 (Photons)																																																																																																																																																																																	
0.01	E ≤ 0.01	約1.8×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
0.02	0.01 < E ≤ 0.02	約3.3×10 ¹¹																																																																																																																																																																																	
0.03	0.02 < E ≤ 0.03	約1.0×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
0.045	0.03 < E ≤ 0.045	約1.4×10 ¹¹																																																																																																																																																																																	
0.06	0.045 < E ≤ 0.06	0																																																																																																																																																																																	
0.07	0.06 < E ≤ 0.07	0																																																																																																																																																																																	
0.075	0.07 < E ≤ 0.075	0																																																																																																																																																																																	
0.1	0.075 < E ≤ 0.1	約9.0×10 ¹⁷																																																																																																																																																																																	
0.15	0.1 < E ≤ 0.15	約4.1×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
0.2	0.15 < E ≤ 0.2	約6.9×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
0.3	0.2 < E ≤ 0.3	約6.8×10 ¹⁶																																																																																																																																																																																	
0.4	0.3 < E ≤ 0.4	約1.1×10 ¹⁶																																																																																																																																																																																	
0.45	0.4 < E ≤ 0.45	約8.8×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
0.51	0.45 < E ≤ 0.51	約5.2×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
0.512	0.51 < E ≤ 0.512	約4.4×10 ¹³																																																																																																																																																																																	
0.6	0.512 < E ≤ 0.6	約7.8×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
0.7	0.6 < E ≤ 0.7	約1.3×10 ¹⁶																																																																																																																																																																																	
0.8	0.7 < E ≤ 0.8	約6.7×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
1.0	0.8 < E ≤ 1.0	約3.3×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
1.33	1.0 < E ≤ 1.33	約1.5×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
1.34	1.33 < E ≤ 1.34	約6.6×10 ¹²																																																																																																																																																																																	
1.5	1.34 < E ≤ 1.5	約1.0×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
1.66	1.5 < E ≤ 1.66	約7.5×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
2.0	1.66 < E ≤ 2.0	約3.3×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
2.5	2.0 < E ≤ 2.5	約3.5×10 ¹⁵																																																																																																																																																																																	
3.0	2.5 < E ≤ 3.0	約1.5×10 ¹⁴																																																																																																																																																																																	
3.5	3.0 < E ≤ 3.5	約4.1×10 ¹²																																																																																																																																																																																	
4.0	3.5 < E ≤ 4.0	0																																																																																																																																																																																	
4.5	4.0 < E ≤ 4.5	0																																																																																																																																																																																	
5.0	4.5 < E ≤ 5.0	0																																																																																																																																																																																	
5.5	5.0 < E ≤ 5.5	0																																																																																																																																																																																	
6.0	5.5 < E ≤ 6.0	0																																																																																																																																																																																	
6.5	6.0 < E ≤ 6.5	0																																																																																																																																																																																	
7.0	6.5 < E ≤ 7.0	0																																																																																																																																																																																	
7.5	7.0 < E ≤ 7.5	0																																																																																																																																																																																	
8.0	7.5 < E ≤ 8.0	0																																																																																																																																																																																	
10.0	8.0 < E ≤ 10.0	0																																																																																																																																																																																	
12.0	10.0 < E ≤ 12.0	0																																																																																																																																																																																	
14.0	12.0 < E ≤ 14.0	0																																																																																																																																																																																	
20.0	14.0 < E ≤ 20.0	0																																																																																																																																																																																	
30.0	20.0 < E ≤ 30.0	0																																																																																																																																																																																	
50.0	30.0 < E ≤ 50.0	0																																																																																																																																																																																	
<p>第3.4.4-3表 原子炉冷却材喪失時の実効線量（事故）</p> <table border="1" data-bbox="333 1294 788 1401"> <thead> <tr> <th>実効線量 (mSv)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>約2.7×10⁻⁴</td> </tr> </tbody> </table>	実効線量 (mSv)	約2.7×10 ⁻⁴	<p>第3.4.4-3表 原子炉冷却材喪失時の実効線量</p> <table border="1" data-bbox="1158 1294 1612 1401"> <thead> <tr> <th>実効線量 (mSv)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>約3.2×10⁻⁴</td> </tr> </tbody> </table>	実効線量 (mSv)	約3.2×10 ⁻⁴	<p>・② ・① ・コンクリート密度変更に伴う直接線及びスカイシャイン線の線量評価結果の変更</p>																																																																																																																																																																													
実効線量 (mSv)																																																																																																																																																																																			
約2.7×10 ⁻⁴																																																																																																																																																																																			
実効線量 (mSv)																																																																																																																																																																																			
約3.2×10 ⁻⁴																																																																																																																																																																																			

東海第二発電所 新規制基準適合性確認比較表（添付書類十）

【添付資料 4】

既許可申請書	変更（案）	備 考				
<p data-bbox="407 212 716 231">第3.4.5-2表 制御棒落下時の実効線量</p> <table border="1" data-bbox="336 272 790 379"> <tr> <td data-bbox="336 272 790 344"> <p data-bbox="499 280 627 300">実 効 線 量</p> <p data-bbox="539 316 586 335">(mSv)</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="336 344 790 379"> <p data-bbox="517 352 609 371">約4.0×10^{-3}</p> </td> </tr> </table>	<p data-bbox="499 280 627 300">実 効 線 量</p> <p data-bbox="539 316 586 335">(mSv)</p>	<p data-bbox="517 352 609 371">約4.0×10^{-3}</p>	<p data-bbox="1229 212 1538 231">第3.4.5-2表 制御棒落下時の実効線量</p> <table border="1" data-bbox="1146 272 1624 379"> <tr> <td data-bbox="1146 272 1624 344"> <p data-bbox="1319 280 1447 300">実 効 線 量</p> <p data-bbox="1359 316 1406 335">(mSv)</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="1146 344 1624 379"> <p data-bbox="1337 352 1429 371">約3.2×10^{-3}</p> </td> </tr> </table>	<p data-bbox="1319 280 1447 300">実 効 線 量</p> <p data-bbox="1359 316 1406 335">(mSv)</p>	<p data-bbox="1337 352 1429 371">約3.2×10^{-3}</p>	<p data-bbox="1816 347 1850 367">・①</p>
<p data-bbox="499 280 627 300">実 効 線 量</p> <p data-bbox="539 316 586 335">(mSv)</p>						
<p data-bbox="517 352 609 371">約4.0×10^{-3}</p>						
<p data-bbox="1319 280 1447 300">実 効 線 量</p> <p data-bbox="1359 316 1406 335">(mSv)</p>						
<p data-bbox="1337 352 1429 371">約3.2×10^{-3}</p>						

添付4-5

①：気象期間の変更，②記載の適正化

周辺監視区域変更及びコンクリート密度変更に伴う
設置許可基準規則第二十九条(工場等周辺における直接ガンマ線等からの防護)
への影響について

1. 周辺監視区域変更の影響

今回、周辺監視区域が変更される国道 245 号線からの進入道路入口付近については、平常時の直接線量及びスカイシャイン線量の評価地点を設定している。今回の周辺監視区域境界の変更後の各建屋からの距離は表 1 のとおりであり、過去の線量評価に用いた評価距離はそれ以下となっており、線量評価結果への影響はない。

表 1 各建屋の評価距離及び周辺監視区域変更後の距離の比較

発電所	建屋名	線量評価値 ^{※1} (μ Gy/年)	評価距離 (m)	周辺監視区域変更後の 距離 (m)
東海第二 発電所	原子炉建屋	< 0.1	500	503
	タービン建屋	13	450	455
	廃棄物処理建屋	< 0.1	580	585
	固体廃棄物貯蔵庫 A	0.1	600	631
	固体廃棄物貯蔵庫 B	0.5	600	617
	使用済燃料乾式貯蔵建屋	1.5	550	552
	給水加熱器保管庫	< 0.1	700	700
	固体廃棄物作業建屋	0.5	630	648
	合計	16	—	—
	評価基準値	50	—	—
(参考) 東海発電所		7 ^{※2}	660	678

※1：固体廃棄物作業建屋の工事計画認可申請書より引用した。評価地点については図 1 を参照

※2：固体廃棄物作業建屋の工事計画認可申請書では 3μ Gy/年であるが、最新の廃止措置計画認可申請書の値を記載した。

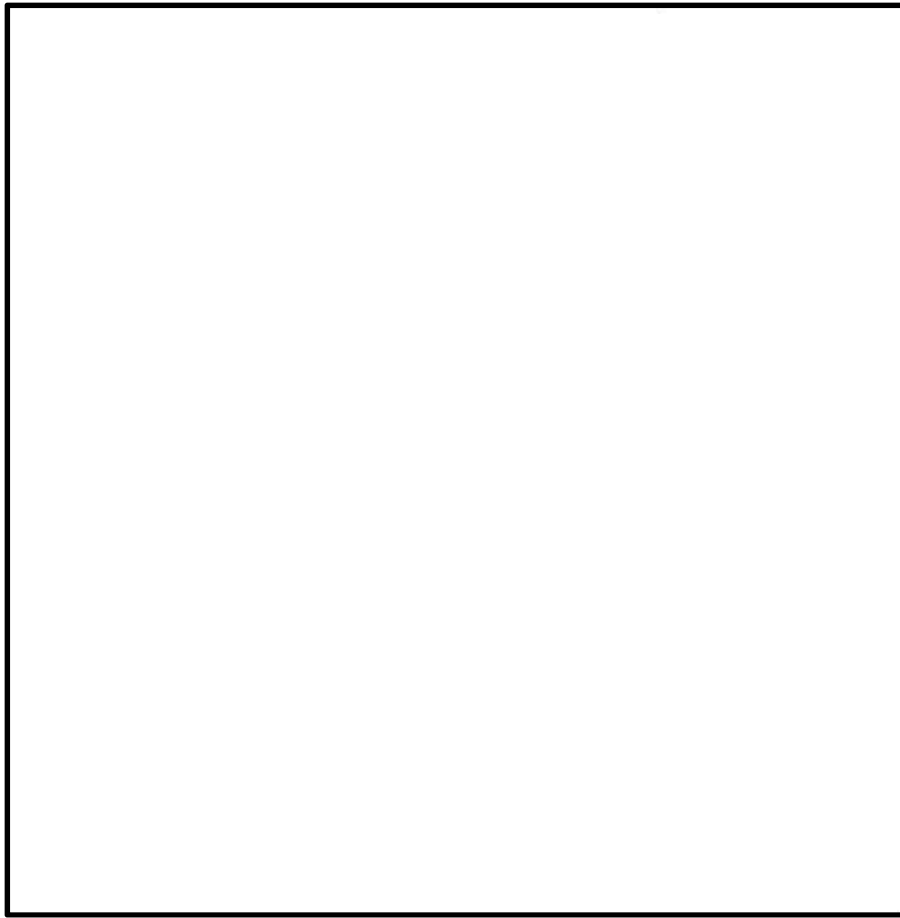


図1 評価地点図

2. コンクリート密度変更の影響

1. に示す評価対象建屋において、今回のコンクリート密度変更の影響を受けるのは、原子炉建屋、タービン建屋である。

原子炉建屋について、コンクリート密度を $2.23\text{g}/\text{cm}^3$ から $2.00\text{g}/\text{cm}^3$ とした場合の直接線量及びスカイシャイン線量を簡易計算すると、 $<0.1\mu\text{Gy}/\text{年}$ で変化はない。

タービン建屋について、コンクリート密度を $2.23\text{g}/\text{cm}^3$ から $2.00\text{g}/\text{cm}^3$ とした場合の直接線量及びスカイシャイン線量を簡易計算すると、約 $21\mu\text{Gy}/\text{年}$ で合計値については $24\mu\text{Gy}/\text{年}$ となるが、東海発電所分を加算しても基準値である $50\mu\text{Gy}/\text{年}$ は満足している。

なお、これまでの運転中の建屋内外の定期的な線量率の測定結果、従事者の被ばく線量の確認により、遮蔽能力を有することを実測値で確認されているため改めて詳細評価は行わない。

以上

被ばく評価に用いた気象資料の代表性

1. はじめに

新規規制基準適合性に係る設置変更許可申請に当たっては、東海第二発電所敷地内で 2005 年度に観測された風向、風速等を用いて線量評価を行っている。本補足資料では、2005 年度の気象データを用いて線量評価することの妥当性について説明する。

2. 設置変更許可申請において 2005 年度の気象データを用いた理由

新規規制基準適合性に係る設置変更許可申請に当り、添付書類十に新たに追加された炉心損傷防止対策の有効性評価で、格納容器圧力逃がし装置を使用する場合の敷地境界における実効線量の評価が必要となった。その際、添付書類六に記載している 1981 年度の気象データの代表性について、申請準備時点の最新気象データを用いて確認したところ、代表性が確認できなかった。このため、平常時線量評価用の風洞実験結果（原子炉熱出力向上の検討の一環で準備）[※]が整備されている 2005 年度の気象データについて、申請時点での最新気象データにて代表性を確認した上で、安全解析に用いる気象条件として適用することにした。これに伴い、添付書類九（通常運転時の線量評価）、添付書類十（設計基準事故時の線量評価）の安全解析にも適用し、評価を見直すこととした（別紙 1 参照）。

※： 線量評価には「発電用原子炉施設の安全解析に関する気象指針」（以下、気象指針という。）に基づき統計処理された気象データを用いる。また、気象データのほかに放射性物質の放出量、排気筒高さ等のプラントデータ、評価点までの距離、排気筒有効高さ（風洞実験結果）等のデータが必要と

なる。

風洞実験は平常時、事故時の放出源高さで平地実験、模型実験を行い排気筒の有効高さを求めている。平常時の放出源高さの設定に当たっては、吹上げ高さを考慮しており、吹上げ高さの計算に2005年度の気象データ（風向別風速逆数の平均）を用いている。

これは、2011年3月以前、東海第二発電所において、次のように2005年度の気象データを用いて原子炉熱出力の向上について検討していたことによる。

原子炉熱出力向上に伴い添付書類九の通常運転時の線量評価条件が変更になること（主蒸気流量の5%増による冷却材中のよう素濃度減少により、換気系からの気体状よう素放出量の減少等、別紙2参照）、また、南南東方向（常陸那珂火力発電所方向）、北東方向（海岸方向）の線量評価地点の追加も必要であったことから、中立の大気安定度の気流条件での風洞実験を新たに規定した「(社)日本原子力学会標準 発電用原子炉施設の安全解析における放出源の有効高さを求めるための風洞実験実施基準：2003」に基づき、使用済燃料乾式貯蔵建屋、固体廃棄物作業建屋等の当初の風洞実験（1982年）以降に増設された建屋も反映し、2005年度の気象データを用いて風洞実験（別紙3参照）を実施した。

東海第二発電所の添付書類九では、廃止措置中の東海発電所についても通常運転状態を仮定した線量評価を行っている。この評価においては、1981年度と2005年度の気象データから吹上げ高さを加えて評価した放出源高さの差異が、人の居住を考慮した線量評価点のうち線量が最大となる評価点に向かう風向を含む主要風向において僅かであったため、従来の風洞実験（1982年）の結果による有効高さをを用いることにした（別紙4参照）。

3. 2005年度の気象データを用いて線量評価することの妥当性

線量評価に用いる気象データについては、気象指針に従い統計処理された1年間の気象データを使用している。気象指針（参考参照）では、その年の気象がとくに異常であるか否かを最寄の気象官署の気象資料を用いて調査することが望ましいとしている。

以上のことから、2005年度の気象データを用いることの妥当性を最新の気象データと比較し、以下の(1)(2)について確認する。

- (1) 想定事故時の線量計算に用いる相対濃度
- (2) 異常年検定

4. 想定事故時の線量計算に用いる相対濃度と異常年検定の評価結果

(1) 想定事故時の線量計算に用いる相対濃度の最新の気象との比較

想定事故時の線量計算に用いる相対濃度について、線量評価に用いる気象（2005年度）と最新の気象（2015年度）との比較を行った。その結果、2005年度気象での相対濃度※は $2.01 \times 10^{-6} \text{ s/m}^3$ 、2015年度気象では $2.04 \times 10^{-6} \text{ s/m}^3$ である。2005年度に対し2015年度の相対濃度は約1%の増加（気象指針に記載の相対濃度の年変動の範囲30%以内）であり、2005年度の気象データに特異性はない。

※：排気筒放出における各方位の1時間毎の気象データを用いた年間の相対濃度を小さい方から累積し、その累積頻度が97%に当たる相対濃度を算出し、各方位の最大値を比較

(2) 異常年検定

a. 検定に用いた観測記録

検定に用いた観測記録は第1-2-1表のとおりである。

なお、参考として、最寄の気象官署（水戸地方気象台、小名浜特別地域気象観測所）の観測記録についても使用した。

第 1-2-1 表 検定に用いた観測記録

検定年	統計年 ^{※1}	観測地点 ^{※2}
2005 年度： 2005 年 4 月 ～ 2006 年 3 月	① 2001 年 4 月～2013 年 3 月 (申請時最新 10 年の気象データ)	・敷地内観測地点 (地上高 10m, 81m, 140m)
	② 2004 年 4 月～2016 年 3 月 (最新 10 年の気象データ)	・敷地内観測地点 (地上高 10m, 81m, 140m) <参考> ・水戸地方気象台 ・小名浜特別地域気象 観測所

※1：2006 年度は気象データの欠測率が高いため統計年から除外

※2：敷地内観測地点地上 81m は東海発電所の排気筒付近のデータであるが、気象の特異性を確認するため評価

b. 検定方法

不良標本の棄却検定に関する F 分布検定の手順により異常年検定を行った (別紙 5 参照)。

c. 検定結果 (①～⑯ 棄却検定表参照)

検定結果は第 1-2-2 表のとおりであり、最新の気象データ (2004 年 4 月～2016 年 3 月) を用いた場合でも、有意水準 (危険率) 5% での棄却数は少なく、有意な増加はない。また、最寄の気象官署の気象データにおいても、有意水準 (危険率) 5% での棄却数は少なく、2005 年度の気象データは異常年とは判断されない。

第 1-2-2 表 検定結果

検定年	統計年※1	棄却数				
		敷地内観測地点			参 考	
		地上高 10m	地上高 81m※2	地上高 140m	水戸地方 気象台	小名浜特 別地域気 象観測所
2005 年度	①	1 個	0 個	3 個	—	—
	②	3 個	1 個	4 個	1 個	3 個

※1：①：2001 年 4 月～2013 年 3 月（申請時最新 10 年の気象データ）

②：2004 年 4 月～2016 年 3 月（最新 10 年の気象データ）

2006 年度は気象データの欠測率が高いため統計年から除外

※2:敷地内観測地点地上 81m は東海発電所の排気筒付近のデータであるが、
気象の特異性を確認するため評価

5. 異常年検定による棄却項目の線量評価に与える影響

異常年検定については、風向別出現頻度 17 項目，風速階級別出現頻度 10 項目についてそれぞれ検定を行っている。

線量評価に用いる気象(2005 年度)を最新の気象データ(2004 年 4 月～2016 年 3 月)にて検定した結果，最大の棄却数は地上高 140m の観測地点で 27 項目中 4 個であった。棄却された項目について着目すると，棄却された項目は全て風向別出現頻度であり，その方位は E N E，E，E S E，S S W である。

ここで，最新の気象データを用いた場合の線量評価への影響を確認するため，棄却された各風向の相対濃度について，2005 年度と 2015 年度を第 1-2-3

表のとおり比較した。

E N E, E, E S Eについては2005年度に対し2015年度は0.5~0.9倍程度の相対濃度となり、2005年度での評価は保守的な評価となっており、線量評価結果への影響を与えない。なお、S S Wについては2005年度に対し2015年度は約1.1倍の相対濃度とほぼ同等であり、また、S S Wは頻度が比較的 low 相対濃度の最大方位とはならないため線量評価への影響はない。

第1-2-3表 棄却された各風向の相対濃度の比較結果

風向	相対濃度* (s/m ³) (2005年度) : A	相対濃度* (s/m ³) (2015年度) : B	比 (B/A)
E N E	1.456×10^{-6}	1.258×10^{-6}	0.864
E	1.982×10^{-6}	1.010×10^{-6}	0.510
E S E	1.810×10^{-6}	1.062×10^{-6}	0.587
S S W	1.265×10^{-6}	1.421×10^{-6}	1.123

※：燃料集合体落下事故を想定した排気筒放出における、各方位の1時間毎の気象データを用いた年間の相対濃度を小さい方から累積し、その累積頻度が97%に当たる相対濃度を算出

6. 結 論

2005年度の気象データを用いることの妥当性を最新の気象データとの比較により評価した結果は以下のとおり。

- (1) 想定事故時の線量計算に用いる相対濃度について、線量評価に用いる気象(2005年度)と最新の気象(2015年度)での計算結果について比較を行った結果、気象指針に記載されている相対濃度の年変動(30%以内)の範囲に収まり、2005年度の気象データに特異性はない。

- (2) 2005年度の気象データについて申請時の最新気象データ（2001年4月～2013年3月）及び最新気象データ（2004年4月～2016年3月）で異常年検定を行った結果、棄却数は少なく、有意な増加はない。また、気象指針にて調査することが推奨されている最寄の気象官署の気象データにおいても、2005年度の気象データは棄却数は少なく、異常年とは判断されない。
- (3) 異常年検定にて棄却された風向の相対濃度については、最新気象データと比べて保守的、あるいは、ほぼ同等となっており、線量評価結果への影響を与えない。

以上より、2005年度の気象データを線量評価に用いることは妥当である。

① 棄却検定表（風向）（標高148m）

観測場所：敷地内A地点（標高148m，地上高140m）（%）

統計年 風向	2001	2002	2003	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
N	3.96	5.85	3.78	3.40	5.01	4.27	4.11	4.62	4.43	4.50	4.39	3.52	6.02	2.77	○
NNE	8.89	8.15	6.91	6.22	11.41	13.51	18.30	14.74	15.31	14.20	11.76	6.67	21.42	2.11	○
NE	19.71	24.49	23.29	18.45	18.06	20.80	16.75	14.99	14.71	13.60	18.49	18.41	27.13	9.84	○
ENE	8.31	8.38	10.04	8.97	7.09	6.97	5.51	5.25	5.40	4.10	7.00	9.80	11.55	2.46	○
E	4.39	3.76	4.56	4.42	4.59	4.14	3.49	3.17	3.13	1.70	3.74	5.55	5.88	1.59	○
ESE	2.79	2.86	2.93	2.99	2.32	2.85	2.26	2.26	2.22	2.20	2.57	3.66	3.37	1.76	×
SE	2.90	2.61	2.95	2.66	2.15	2.85	2.59	2.74	2.82	3.00	2.73	3.09	3.31	2.14	○
SSE	3.35	3.34	3.74	3.54	3.69	3.73	4.18	4.89	4.68	5.50	4.06	3.32	5.80	2.33	○
S	5.00	4.13	5.02	6.63	6.33	5.38	5.19	6.03	5.83	7.00	5.65	4.99	7.72	3.59	○
SSW	3.79	3.56	4.35	5.02	4.54	4.55	4.43	5.35	4.76	5.70	4.61	3.13	6.15	3.06	○
SW	4.32	4.90	4.93	5.16	3.92	3.40	4.53	5.16	5.76	5.40	4.75	3.67	6.44	3.06	○
WSW	4.38	4.09	3.53	4.31	4.66	3.29	4.11	4.67	4.07	4.70	4.18	4.25	5.31	3.05	○
W	5.44	4.16	4.23	4.65	3.89	3.81	4.47	5.55	4.26	4.40	4.49	5.13	5.88	3.09	○
WNW	5.95	5.05	6.19	6.71	5.87	6.13	6.26	6.05	6.37	6.30	6.09	7.65	7.12	5.06	×
NW	7.95	7.42	7.60	9.12	9.02	8.06	7.95	7.99	8.94	10.10	8.42	9.54	10.41	6.42	○
NNW	7.63	6.60	5.19	6.97	7.03	5.86	4.90	5.27	5.98	6.60	6.20	6.53	8.35	4.05	○
CALM	1.24	0.65	0.75	0.76	0.42	0.39	0.98	1.26	1.32	1.2	0.90	1.10	1.73	0.06	○

注1) 1996年9月までは超音波風向風速計，1996年10月からはドップラーソーダの観測値である。

注2) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し，2001年度を追加した。

② 棄却検定表（風速）（標高148m）

観測場所：敷地内A地点（標高148m，地上高140m）（%）

統計年 風速(m/s)	2001	2002	2003	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
0.0~0.4	1.24	0.65	0.75	0.76	0.42	0.39	0.98	1.26	1.32	1.20	0.90	1.10	1.73	0.06	○
0.5~1.4	6.70	5.19	5.56	6.43	5.00	4.91	6.14	6.91	6.97	7.40	6.12	6.99	8.26	3.98	○
1.5~2.4	10.58	8.92	9.61	11.42	8.63	9.44	10.82	11.16	10.43	11.00	10.20	11.28	12.53	7.87	○
2.5~3.4	12.17	11.15	12.55	13.72	11.36	12.24	11.61	12.66	12.49	12.40	12.24	14.10	13.99	10.48	×
3.5~4.4	12.57	12.25	12.80	13.58	12.63	13.41	13.26	12.52	12.24	12.10	12.74	13.85	13.97	11.51	○
4.5~5.4	11.54	10.97	11.30	12.07	13.08	12.09	12.67	13.40	12.60	11.00	12.07	12.03	14.11	10.03	○
5.5~6.4	10.66	9.62	10.10	9.68	11.98	10.33	10.78	10.64	10.24	10.00	10.40	9.92	12.02	8.79	○
6.5~7.4	7.67	8.18	8.82	7.95	8.74	8.28	8.19	8.89	8.08	8.60	8.34	7.40	9.30	7.38	○
7.5~8.4	6.17	7.68	7.35	5.34	6.97	7.05	5.91	6.39	6.28	7.30	6.64	5.51	8.40	4.89	○
8.5~9.4	5.14	6.84	6.01	5.03	5.60	4.77	5.03	4.82	5.52	6.00	5.48	4.82	7.03	3.92	○
9.5以上	15.56	18.54	15.15	14.02	15.61	17.08	14.61	11.35	13.84	13.00	14.88	13.00	19.70	10.05	○

注1) 1996年9月までは超音波風向風速計，1996年10月からはドップラーソーダの観測値である。

注2) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し，2001年度を追加した。

③ 棄却検定表（風向）（標高89m）

観測場所：敷地内A地点（標高 89m，地上高 81m）（%）

統計年 風向	2001	2002	2003	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
N	4.09	4.59	3.42	3.25	4.84	4.64	4.84	5.88	5.68	5.5	4.67	3.79	6.79	2.56	○
NNE	8.41	7.81	7.03	6.03	10.15	12.15	17.45	14.51	16.54	14.50	11.46	6.60	21.28	1.64	○
NE	17.97	21.91	21.50	17.51	16.08	19.04	16.64	13.25	12.20	11.40	16.75	17.88	25.36	8.14	○
ENE	7.76	8.22	9.86	7.84	6.78	7.22	5.33	4.72	3.74	3.30	6.48	8.95	11.52	1.44	○
E	3.34	3.80	4.30	4.02	4.35	4.18	3.00	2.48	2.26	1.80	3.35	4.32	5.55	1.16	○
ESE	2.40	2.79	2.47	2.75	2.29	2.79	2.30	2.05	1.83	1.70	2.34	2.77	3.26	1.42	○
SE	2.74	2.86	2.96	2.80	2.21	2.96	2.89	2.53	2.99	3.20	2.81	2.75	3.47	2.16	○
SSE	3.78	3.48	3.96	3.77	3.74	3.90	4.83	5.80	4.88	6.10	4.42	4.16	6.63	2.22	○
S	4.77	3.66	4.43	6.82	5.76	4.74	4.64	5.94	5.42	5.70	5.19	4.88	7.35	3.03	○
SSW	2.86	2.56	3.20	3.86	3.40	3.06	3.59	4.46	4.16	4.30	3.55	2.43	5.07	2.02	○
SW	3.26	3.62	3.42	3.63	3.07	2.30	2.96	3.33	4.04	4.10	3.37	2.64	4.63	2.11	○
WSW	3.32	3.33	3.11	3.09	3.28	2.75	3.08	3.37	3.10	3.80	3.22	3.08	3.87	2.58	○
W	4.53	4.08	4.57	4.17	4.04	3.59	4.13	5.19	4.29	4.40	4.30	4.58	5.30	3.30	○
WNW	8.29	7.52	8.02	9.03	7.66	7.81	8.17	8.29	8.59	8.70	8.21	9.14	9.34	7.08	○
NW	15.13	13.32	12.41	15.17	15.33	12.82	10.66	11.34	13.08	14.10	13.34	15.31	17.17	9.50	○
NNW	6.67	5.88	4.76	5.67	6.32	5.42	4.60	5.65	6.05	6.30	5.73	6.03	7.32	4.15	○
CALM	0.65	0.58	0.59	0.61	0.68	0.65	0.90	1.21	1.14	1.10	0.81	0.69	1.41	0.21	○

注1) 1996年9月までは超音波風向風速計，1996年10月からはドップラーソーダの観測値である。

注2) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し，2001年度を追加した。

④ 棄却検定表（風速）（標高89m）

観測場所：敷地内A地点（標高 89m，地上高 81m）（%）

統計年 風速(m/s)	2001	2002	2003	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
0.0~0.4	0.65	0.58	0.59	0.61	0.68	0.65	0.90	1.21	1.14	1.10	0.81	0.69	1.41	0.21	○
0.5~1.4	4.92	4.95	5.23	5.62	4.89	5.08	6.94	7.56	7.82	7.80	6.08	5.79	9.13	3.03	○
1.5~2.4	10.06	10.15	10.09	11.31	9.38	10.83	12.09	12.36	12.35	12.90	11.15	10.58	14.05	8.25	○
2.5~3.4	13.91	14.28	14.41	14.52	13.35	14.11	14.46	16.20	14.86	14.10	14.42	15.24	16.19	12.65	○
3.5~4.4	15.55	14.93	14.78	16.34	14.98	15.93	15.47	15.05	15.26	14.60	15.29	16.48	16.57	14.01	○
4.5~5.4	13.97	12.98	12.75	13.85	14.76	13.52	13.42	13.75	12.61	12.80	13.44	13.66	15.04	11.84	○
5.5~6.4	11.36	10.40	11.85	10.73	11.54	10.67	10.40	10.51	9.52	10.40	10.74	11.14	12.35	9.13	○
6.5~7.4	8.16	8.38	8.75	7.90	8.66	7.72	7.14	7.22	7.49	8.10	7.95	8.04	9.29	6.62	○
7.5~8.4	6.41	6.50	6.98	5.44	6.25	5.74	5.23	5.40	6.17	6.10	6.02	5.64	7.35	4.70	○
8.5~9.4	4.97	5.31	4.65	4.10	4.85	4.30	4.12	3.20	4.43	4.40	4.43	4.02	5.81	3.06	○
9.5以上	10.04	11.52	9.92	9.58	10.65	11.45	9.84	7.54	8.37	7.80	9.67	8.74	12.98	6.36	○

注1) 1996年9月までは超音波風向風速計，1996年10月からはドップラーソーダの観測値である。

注2) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し，2001年度を追加した。

⑤ 棄却検定表（風向）（標高18m）

観測場所：敷地内A地点（標高 18m，地上高 10m）（%）

統計年 風向	2001	2002	2003	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
													上限	下限	
N	3.29	3.24	2.85	2.50	2.57	2.17	2.52	2.81	2.62	2.40	2.70	2.15	3.54	1.85	○
NNE	12.39	12.29	12.11	10.30	7.29	9.57	11.21	9.18	11.62	8.50	10.45	9.93	14.64	6.26	○
NE	12.70	15.12	17.57	13.28	15.17	17.51	16.15	12.25	12.18	11.60	14.35	15.15	19.68	9.02	○
ENE	3.27	3.57	3.90	3.74	5.42	6.41	5.52	5.07	4.14	6.40	4.74	4.49	7.52	1.97	○
E	2.51	2.86	2.84	2.62	3.05	2.44	2.85	2.19	1.78	1.80	2.49	2.60	3.55	1.43	○
ESE	3.04	3.68	3.30	3.81	3.44	3.44	3.98	3.36	3.25	2.30	3.36	3.49	4.46	2.26	○
SE	5.14	5.79	5.80	5.63	4.29	4.37	4.59	5.21	4.53	4.60	5.00	5.73	6.40	3.59	○
SSE	4.00	3.66	3.99	5.62	5.03	4.47	4.63	6.32	5.73	6.00	4.95	4.59	7.16	2.73	○
S	2.41	2.22	2.63	3.85	3.68	3.79	3.25	4.55	3.54	4.20	3.41	2.31	5.25	1.57	○
SSW	3.52	3.26	3.07	3.20	3.19	2.35	3.28	3.64	3.38	3.40	3.23	2.36	4.06	2.40	×
SW	1.37	0.79	1.35	1.08	1.53	1.09	1.06	1.00	1.12	1.30	1.17	1.22	1.68	0.66	○
WSW	2.94	2.70	2.48	2.15	1.44	1.25	2.47	2.66	2.34	1.90	2.23	2.40	3.54	0.92	○
W	12.93	11.05	10.01	11.71	4.73	4.55	6.91	6.99	7.88	6.30	8.31	10.13	15.30	1.31	○
WNW	19.82	18.95	18.46	19.53	24.91	22.81	21.72	22.62	22.60	22.90	21.43	21.68	26.45	16.42	○
NW	6.86	6.86	6.03	6.52	9.65	8.87	6.09	7.67	8.35	10.90	7.78	7.42	11.65	3.91	○
NNW	2.97	2.92	2.33	2.61	3.51	3.10	2.43	2.87	3.04	3.50	2.93	2.65	3.87	1.99	○
CALM	0.82	1.03	1.29	1.85	1.11	1.82	1.35	1.6	1.9	2.00	1.48	1.69	2.46	0.49	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2001年度を追加した。

⑥ 棄却検定表（風速）（標高18m）

観測場所：敷地内A地点（標高 18m，地上高 10m）（%）

統計年 風速(m/s)	2001	2002	2003	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
													上限	下限	
0.0~0.4	0.82	1.03	1.29	1.85	1.11	1.82	1.35	1.60	1.90	2.00	1.48	1.69	2.46	0.49	○
0.5~1.4	12.24	12.79	13.24	14.96	14.40	15.93	13.88	15.83	15.92	16.70	14.59	15.14	18.20	10.98	○
1.5~2.4	30.43	30.39	28.56	31.22	32.03	33.39	32.69	32.91	33.15	31.40	31.62	32.77	35.24	28.00	○
2.5~3.4	22.23	21.48	21.80	22.97	21.70	21.95	23.48	23.08	23.60	21.90	22.42	20.88	24.29	20.55	○
3.5~4.4	10.85	10.91	11.31	9.77	10.95	10.88	10.69	11.19	10.19	10.70	10.74	10.16	11.83	9.66	○
4.5~5.4	7.69	8.16	9.27	6.25	6.89	6.66	7.22	6.75	6.01	7.10	7.20	7.09	9.49	4.91	○
5.5~6.4	5.21	6.40	6.23	4.34	4.69	4.15	3.91	3.58	4.17	4.50	4.72	4.79	6.97	2.46	○
6.5~7.4	4.20	4.07	3.92	3.30	3.31	2.25	2.60	2.02	2.44	2.60	3.07	3.01	4.96	1.18	○
7.5~8.4	2.84	2.51	2.18	2.34	2.24	1.20	1.70	1.39	1.25	1.60	1.93	2.29	3.28	0.57	○
8.5~9.4	1.77	1.12	1.07	1.33	1.24	0.86	1.20	0.72	0.60	0.70	1.06	1.09	1.90	0.22	○
9.5以上	1.70	1.13	1.13	1.67	1.45	0.90	1.30	0.94	0.75	0.80	1.18	1.10	1.99	0.36	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2001年度を追加した。

⑦ 棄却検定表（風向）（標高148m）

観測場所：敷地内A地点（標高148m，地上高140m）（%）

統計年 風向	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
N	3.40	5.01	4.27	4.11	4.62	4.43	4.50	4.48	4.38	5.20	4.44	3.52	5.60	3.28	○
NNE	6.22	11.41	13.51	18.30	14.74	15.31	14.10	11.42	14.59	20.56	14.02	6.67	23.32	4.72	○
NE	18.45	18.06	20.80	16.75	14.99	14.71	13.66	15.68	13.11	13.60	15.98	18.41	21.91	10.05	○
ENE	8.97	7.09	6.97	5.51	5.25	5.40	4.16	5.74	5.59	4.95	5.96	9.80	9.21	2.72	×
E	4.42	4.59	4.14	3.49	3.17	3.13	1.65	3.02	3.06	3.04	3.37	5.55	5.40	1.34	×
ESE	2.99	2.32	2.85	2.26	2.26	2.22	2.17	2.00	2.36	2.20	2.36	3.66	3.10	1.62	×
SE	2.66	2.15	2.85	2.59	2.74	2.82	2.98	2.99	2.79	2.26	2.69	3.09	3.36	2.01	○
SSE	3.54	3.69	3.73	4.18	4.89	4.68	5.52	4.76	5.29	5.12	4.54	3.32	6.23	2.85	○
S	6.63	6.33	5.38	5.19	6.03	5.83	6.96	6.48	5.87	5.76	6.04	4.99	7.36	4.73	○
SSW	5.02	4.54	4.55	4.43	5.35	4.76	5.68	6.07	4.89	5.45	5.08	3.13	6.37	3.78	×
SW	5.16	3.92	3.40	4.53	5.16	5.76	5.38	4.94	4.64	5.05	4.79	3.67	6.46	3.13	○
WSW	4.31	4.66	3.29	4.11	4.67	4.07	4.63	4.81	5.16	4.10	4.38	4.25	5.62	3.14	○
W	4.65	3.89	3.81	4.47	5.55	4.26	4.40	4.64	5.07	4.24	4.50	5.13	5.74	3.26	○
WNW	6.71	5.87	6.13	6.26	6.05	6.37	6.29	6.75	7.56	5.62	6.36	7.65	7.65	5.07	○
NW	9.12	9.02	8.06	7.95	7.99	8.94	10.14	8.95	9.69	6.99	8.68	9.54	10.90	6.47	○
NNW	6.97	7.03	5.86	4.90	5.27	5.98	6.57	6.52	5.08	4.81	5.90	6.53	7.92	3.88	○
CALM	0.76	0.42	0.39	0.98	1.26	1.32	1.21	0.75	0.88	1.04	0.90	1.10	1.68	0.12	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し，2004年度を追加した。

⑧ 棄却検定表（風速）（標高148m）

観測場所：敷地内A地点（標高148m，地上高140m）（%）

統計年 風速(m/s)	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
0.0~0.4	0.76	0.42	0.39	0.98	1.26	1.32	1.21	0.75	0.88	1.04	0.90	1.10	1.68	0.12	○
0.5~1.4	6.43	5.00	4.91	6.14	6.91	6.97	7.32	5.92	6.20	6.78	6.26	6.99	8.18	4.33	○
1.5~2.4	11.42	8.63	9.44	10.82	11.16	10.43	10.94	10.58	9.76	10.98	10.42	11.28	12.50	8.33	○
2.5~3.4	13.72	11.36	12.24	11.61	12.66	12.49	12.38	12.89	12.13	13.45	12.49	14.10	14.24	10.75	○
3.5~4.4	13.58	12.63	13.41	13.26	12.52	12.24	12.12	14.22	13.05	13.51	13.05	13.85	14.64	11.47	○
4.5~5.4	12.07	13.08	12.09	12.67	13.40	12.60	11.01	12.52	12.25	11.78	12.35	12.03	13.95	10.75	○
5.5~6.4	9.68	11.98	10.33	10.78	10.64	10.24	10.01	10.35	11.29	9.51	10.48	9.92	12.23	8.73	○
6.5~7.4	7.95	8.74	8.28	8.19	8.89	8.08	8.62	8.57	9.22	7.47	8.40	7.40	9.61	7.19	○
7.5~8.4	5.34	6.97	7.05	5.91	6.39	6.28	7.32	7.01	6.63	5.89	6.48	5.51	7.98	4.98	○
8.5~9.4	5.03	5.60	4.77	5.03	4.82	5.52	6.08	5.01	5.14	4.97	5.20	4.82	6.17	4.22	○
9.5以上	14.02	15.61	17.08	14.61	11.35	13.84	12.98	12.18	13.45	14.63	13.97	13.00	17.90	10.05	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し，2004年度を追加した。

⑨ 棄却検定表（風向）（標高89m）

観測場所：敷地内A地点（標高 89m，地上高 81m）（%）

統計年 風向	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
N	3.25	4.84	4.64	4.84	5.88	5.68	5.50	5.04	5.05	6.22	5.09	3.79	7.05	3.14	○
NNE	6.03	10.15	12.15	17.45	14.51	16.54	14.50	11.55	14.10	19.46	13.64	6.60	22.84	4.45	○
NE	17.51	16.08	19.04	16.64	13.25	12.20	11.40	14.95	13.31	12.28	14.67	17.88	20.77	8.56	○
ENE	7.84	6.78	7.22	5.33	4.72	3.74	3.30	5.73	4.21	4.52	5.34	8.95	8.97	1.71	○
E	4.02	4.35	4.18	3.00	2.48	2.26	1.80	2.89	2.33	2.47	2.98	4.32	5.11	0.85	○
ESE	2.75	2.29	2.79	2.30	2.05	1.83	1.70	2.17	2.07	1.91	2.19	2.77	3.04	1.33	○
SE	2.80	2.21	2.96	2.89	2.53	2.99	3.20	2.56	3.40	2.60	2.81	2.75	3.64	1.98	○
SSE	3.77	3.74	3.90	4.83	5.80	4.88	6.10	4.79	5.78	5.58	4.92	4.16	7.03	2.81	○
S	6.82	5.76	4.74	4.64	5.94	5.42	5.70	5.01	4.67	4.87	5.36	4.88	7.03	3.68	○
SSW	3.86	3.40	3.06	3.59	4.46	4.16	4.30	4.07	3.53	4.25	3.87	2.43	4.95	2.79	×
SW	3.63	3.07	2.30	2.96	3.33	4.04	4.10	3.45	3.38	3.56	3.38	2.64	4.63	2.13	○
WSW	3.09	3.28	2.75	3.08	3.37	3.10	3.80	3.50	4.06	3.23	3.33	3.08	4.23	2.42	○
W	4.17	4.04	3.59	4.13	5.19	4.29	4.40	4.66	4.76	4.26	4.35	4.58	5.39	3.31	○
WNW	9.03	7.66	7.81	8.17	8.29	8.59	8.70	9.54	10.05	7.43	8.53	9.14	10.51	6.54	○
NW	15.17	15.33	12.82	10.66	11.34	13.08	14.10	13.28	12.90	10.98	12.97	15.31	16.82	9.11	○
NNW	5.67	6.32	5.42	4.60	5.65	6.05	6.30	5.80	5.54	5.08	5.64	6.03	6.90	4.38	○
CALM	0.61	0.68	0.65	0.90	1.21	1.14	1.10	1.01	0.86	1.29	0.95	0.69	1.53	0.37	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

⑩ 棄却検定表（風速）（標高89m）

観測場所：敷地内A地点（標高 89m，地上高 81m）（%）

統計年 風速(m/s)	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
0.0~0.4	0.61	0.68	0.65	0.90	1.21	1.14	1.10	1.01	0.86	1.29	0.95	0.69	1.53	0.37	○
0.5~1.4	5.62	4.89	5.08	6.94	7.56	7.82	7.80	7.41	6.47	7.60	6.72	5.79	9.42	4.01	○
1.5~2.4	11.31	9.38	10.83	12.09	12.36	12.35	12.90	12.41	11.84	13.06	11.85	10.58	14.46	9.24	○
2.5~3.4	14.52	13.35	14.11	14.46	16.20	14.86	14.10	15.47	15.34	15.31	14.77	15.24	16.74	12.80	○
3.5~4.4	16.34	14.98	15.93	15.47	15.05	15.26	14.60	15.94	15.26	14.65	15.35	16.48	16.71	13.98	○
4.5~5.4	13.85	14.76	13.52	13.42	13.75	12.61	12.80	12.85	13.64	12.56	13.38	13.66	15.00	11.75	○
5.5~6.4	10.73	11.54	10.67	10.40	10.51	9.52	10.40	10.94	10.49	9.78	10.50	11.14	11.84	9.16	○
6.5~7.4	7.90	8.66	7.72	7.14	7.22	7.49	8.10	7.38	8.49	7.34	7.74	8.04	9.01	6.48	○
7.5~8.4	5.44	6.25	5.74	5.23	5.40	6.17	6.10	4.94	5.67	5.51	5.64	5.64	6.66	4.63	○
8.5~9.4	4.10	4.85	4.30	4.12	3.20	4.43	4.40	4.20	3.89	4.42	4.19	4.02	5.22	3.16	○
9.5以上	9.58	10.65	11.45	9.84	7.54	8.37	7.80	7.44	8.05	8.47	8.92	8.74	12.21	5.63	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

⑪ 棄却検定表（風向）（標高18m）

観測場所：敷地内A地点（標高 18m，地上高 10m）（%）

統計年 風向	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
													上限	下限	
N	2.50	2.57	2.17	2.52	2.81	2.62	2.39	2.26	2.16	2.70	2.47	2.15	2.99	1.95	○
NNE	10.30	7.29	9.57	11.21	9.18	11.62	8.49	8.24	8.84	11.06	9.58	9.93	12.98	6.18	○
NE	13.28	15.17	17.51	16.15	12.25	12.18	11.58	12.60	12.33	13.45	13.65	15.15	18.32	8.98	○
ENE	3.74	5.42	6.41	5.52	5.07	4.14	6.39	7.34	6.61	7.12	5.78	4.49	8.65	2.90	○
E	2.62	3.05	2.44	2.85	2.19	1.78	1.78	2.84	2.14	3.40	2.51	2.60	3.79	1.23	○
ESE	3.81	3.44	3.44	3.98	3.36	3.25	2.38	3.01	3.47	2.82	3.30	3.49	4.40	2.19	○
SE	5.63	4.29	4.37	4.59	5.21	4.53	4.58	4.04	4.56	4.03	4.58	5.73	5.76	3.40	○
SSE	5.62	5.03	4.47	4.63	6.32	5.73	6.01	4.96	4.74	5.63	5.31	4.59	6.81	3.82	○
S	3.85	3.68	3.79	3.25	4.55	3.54	4.20	3.69	3.42	3.50	3.75	2.31	4.66	2.84	×
SSW	3.20	3.19	2.35	3.28	3.64	3.38	3.39	3.47	3.14	3.32	3.23	2.36	4.05	2.42	×
SW	1.08	1.53	1.09	1.06	1.00	1.12	1.27	1.47	1.34	1.78	1.27	1.22	1.88	0.67	○
WSW	2.15	1.44	1.25	2.47	2.66	2.34	1.91	1.97	2.52	1.97	2.07	2.40	3.16	0.97	○
W	11.71	4.73	4.55	6.91	6.99	7.88	6.34	5.87	6.41	5.74	6.71	10.13	11.52	1.91	○
WNW	19.53	24.91	22.81	21.72	22.62	22.60	22.88	22.63	24.11	20.77	22.46	21.68	26.09	18.83	○
NW	6.52	9.65	8.87	6.09	7.67	8.35	10.93	9.78	9.37	7.93	8.51	7.42	12.10	4.93	○
NNW	2.61	3.51	3.10	2.43	2.87	3.04	3.49	4.17	3.20	3.09	3.15	2.65	4.32	1.98	○
CALM	1.85	1.11	1.82	1.35	1.60	1.90	2.00	1.68	1.64	1.70	1.66	1.69	2.30	1.03	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

⑫ 棄却検定表（風速）（標高18m）

観測場所：敷地内A地点（標高 18m，地上高 10m）（%）

統計年 風速(m/s)	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
													上限	下限	
0.0~0.4	1.85	1.11	1.82	1.35	1.60	1.90	2.00	1.68	1.64	1.70	1.66	1.69	2.30	1.03	○
0.5~1.4	14.96	14.40	15.93	13.88	15.83	15.92	16.73	15.60	15.63	16.08	15.50	15.14	17.51	13.48	○
1.5~2.4	31.22	32.03	33.39	32.69	32.91	33.15	31.38	32.64	33.04	31.24	32.37	32.77	34.35	30.39	○
2.5~3.4	22.97	21.70	21.95	23.48	23.08	23.60	21.94	22.79	24.23	23.94	22.97	20.88	25.05	20.88	×
3.5~4.4	9.77	10.95	10.88	10.69	11.19	10.19	10.67	11.34	11.65	11.54	10.89	10.16	12.28	9.49	○
4.5~5.4	6.25	6.89	6.66	7.22	6.75	6.01	7.06	7.04	6.89	7.48	6.83	7.09	7.87	5.79	○
5.5~6.4	4.34	4.69	4.15	3.91	3.58	4.17	4.48	3.78	3.36	4.17	4.06	4.79	5.04	3.09	○
6.5~7.4	3.30	3.31	2.25	2.60	2.02	2.44	2.63	2.19	1.59	1.93	2.43	3.01	3.75	1.10	○
7.5~8.4	2.34	2.24	1.20	1.70	1.39	1.25	1.55	1.37	0.94	1.05	1.50	2.29	2.62	0.39	○
8.5~9.4	1.33	1.24	0.86	1.20	0.72	0.60	0.72	0.71	0.47	0.49	0.83	1.09	1.58	0.09	○
9.5以上	1.67	1.45	0.90	1.30	0.94	0.75	0.84	0.86	0.56	0.37	0.96	1.10	1.91	0.01	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

⑬ 棄却検定表（風向）（水戸地方気象台）

観測場所：水戸地方気象台(%)

統計年 風向	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
N	15.34	17.09	18.48	14.84	16.36	17.58	14.82	13.31	12.53	11.75	15.21	13.38	20.47	9.95	○
NNE	6.78	6.87	8.19	7.57	7.63	7.52	7.05	7.07	6.68	7.83	7.32	6.68	8.51	6.13	○
NE	6.22	6.14	8.14	9.37	6.51	7.25	6.82	6.01	6.65	8.23	7.13	7.36	9.76	4.51	○
ENE	8.70	8.79	9.94	10.20	7.40	7.33	7.71	9.20	8.31	8.81	8.64	9.50	10.97	6.30	○
E	9.92	9.38	10.94	9.26	8.55	7.28	6.49	9.98	8.95	8.87	8.96	10.92	12.05	5.87	○
ESE	4.37	3.22	5.08	3.38	4.19	3.72	4.02	3.43	3.79	3.81	3.90	4.41	5.21	2.60	○
SE	3.11	3.02	3.38	3.05	2.99	3.05	3.74	2.82	2.95	3.07	3.12	2.91	3.74	2.50	○
SSE	1.30	1.50	1.12	1.15	1.29	1.47	1.36	1.10	1.28	1.17	1.27	1.43	1.61	0.94	○
S	2.99	2.43	1.56	2.49	2.82	2.74	2.98	2.96	2.17	2.47	2.56	1.96	3.62	1.50	○
SSW	5.32	5.83	4.64	5.28	6.78	6.32	6.22	5.78	5.79	6.40	5.84	4.24	7.34	4.33	×
SW	5.47	4.84	3.40	3.77	4.86	5.08	4.00	4.01	3.92	3.97	4.33	4.20	5.93	2.73	○
WSW	2.97	3.28	2.61	2.74	3.62	2.91	3.41	3.21	3.66	3.56	3.20	3.26	4.09	2.31	○
W	3.18	2.86	2.83	2.84	3.49	3.07	3.70	3.27	4.34	2.82	3.24	3.81	4.40	2.08	○
WNW	2.75	2.57	2.17	1.72	1.84	2.24	2.89	2.56	2.54	1.59	2.29	3.17	3.35	1.22	○
NW	6.63	5.69	3.15	4.59	4.86	4.11	6.10	6.47	7.06	5.48	5.41	7.67	8.34	2.49	○
NNW	13.20	14.77	12.63	16.29	15.44	16.86	17.84	17.99	18.01	19.29	16.23	13.36	21.45	11.01	○
CALM	1.75	1.73	1.74	1.45	1.36	1.47	0.83	0.85	1.38	0.87	1.34	1.74	2.22	0.46	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

⑭ 棄却検定表（風速）（水戸地方気象台）

観測場所：水戸地方気象台(%)

統計年 風速(m/s)	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
	上限		下限												
0.0~0.4	1.75	1.73	1.74	1.45	1.36	1.47	0.83	0.85	1.38	0.87	1.34	1.74	2.22	0.46	○
0.5~1.4	33.41	35.08	36.96	37.22	32.05	33.83	31.50	32.61	32.82	26.35	33.18	35.02	40.51	25.85	○
1.5~2.4	29.63	29.88	30.31	28.20	30.41	29.79	31.92	31.80	30.66	35.10	30.77	29.14	35.18	26.36	○
2.5~3.4	16.75	17.72	16.28	15.96	17.80	16.66	16.03	16.83	16.86	17.36	16.83	16.52	18.36	15.29	○
3.5~4.4	9.81	9.42	8.08	8.85	9.43	9.50	9.63	9.81	10.24	11.26	9.60	10.01	11.57	7.63	○
4.5~5.4	4.93	3.73	3.76	4.08	4.11	4.18	5.29	4.44	4.23	4.93	4.37	4.93	5.61	3.13	○
5.5~6.4	2.05	1.30	1.53	2.14	2.59	2.17	2.47	1.80	1.97	2.78	2.08	1.84	3.18	0.98	○
6.5~7.4	0.96	0.63	0.51	1.14	1.19	1.13	1.25	0.82	1.14	0.98	0.98	0.46	1.57	0.38	○
7.5~8.4	0.41	0.26	0.31	0.46	0.53	0.56	0.67	0.39	0.43	0.20	0.42	0.19	0.76	0.08	○
8.5~9.4	0.18	0.15	0.18	0.21	0.29	0.37	0.24	0.21	0.18	0.08	0.21	0.09	0.40	0.02	○
9.5以上	0.11	0.11	0.34	0.30	0.25	0.34	0.16	0.43	0.08	0.09	0.22	0.06	0.52	0.00	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

⑮ 棄却検定表（風向）（小名浜気象観測所）

観測場所：小名浜気象観測所(%)

統計年 風向	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
													上限	下限	
N	15.61	18.08	19.49	16.90	17.05	16.58	16.86	16.92	16.52	18.76	17.28	14.97	20.03	14.53	○
NNE	9.51	9.46	11.94	13.36	9.44	11.36	9.70	10.37	9.91	12.46	10.75	9.71	14.14	7.36	○
NE	5.07	5.21	5.40	6.15	5.19	4.83	5.89	5.79	5.13	5.70	5.41	4.45	6.44	4.43	○
ENE	1.70	2.19	2.22	2.20	2.22	1.88	2.00	2.43	2.69	2.79	2.23	1.89	3.03	1.43	○
E	2.15	2.92	2.36	2.48	2.38	2.37	1.90	2.42	2.68	2.52	2.42	2.17	3.07	1.76	○
ESE	1.32	1.95	2.02	1.75	1.78	1.60	1.68	2.15	2.14	1.88	1.83	1.77	2.44	1.22	○
SE	2.96	2.68	2.94	2.19	2.64	2.86	2.81	2.98	2.96	2.60	2.76	3.36	3.35	2.18	×
SSE	5.80	4.93	4.51	4.91	5.09	5.79	5.05	4.80	4.77	4.66	5.03	6.02	6.07	3.99	○
S	11.32	9.73	8.58	9.45	11.91	10.63	10.26	8.92	9.93	12.47	10.32	10.33	13.33	7.31	○
SSW	7.56	5.71	5.88	6.43	7.42	6.79	7.04	7.74	6.28	7.56	6.84	4.77	8.59	5.09	×
SW	2.13	1.79	1.58	2.68	2.70	2.29	2.70	2.79	3.04	1.79	2.35	1.69	3.55	1.15	○
WSW	0.95	0.82	1.05	1.13	0.97	0.97	1.18	1.11	1.07	1.15	1.04	0.95	1.30	0.78	○
W	1.80	1.70	1.58	1.70	1.44	1.71	1.50	1.42	1.75	1.46	1.61	1.89	1.94	1.27	○
WNW	4.70	4.69	3.84	3.98	3.98	4.36	4.28	4.43	4.94	2.88	4.21	6.05	5.60	2.82	×
NW	9.27	8.70	7.85	7.77	7.62	8.06	10.22	9.14	9.83	6.42	8.49	10.63	11.23	5.75	○
NNW	15.51	17.31	16.04	14.80	15.83	15.60	16.16	16.05	15.40	13.91	15.66	16.88	17.78	13.54	○
CALM	2.64	2.15	2.73	2.11	2.33	2.34	0.80	0.56	0.94	1.00	1.76	2.47	3.74	0.00	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

⑯ 棄却検定表（風速）（小名浜気象観測所）

観測場所：小名浜気象観測所(%)

統計年 風速(m/s)	2004	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	平均値	検定年 2005	棄却限界(5%)		判定 ○採択 ×棄却
													上限	下限	
0.0~0.4	2.64	2.15	2.73	2.11	2.33	2.34	0.80	0.56	0.94	1.00	1.76	2.47	3.74	0.00	○
0.5~1.4	21.92	21.13	22.45	22.79	22.30	22.11	16.85	18.40	18.83	18.49	20.53	20.97	25.64	15.41	○
1.5~2.4	28.61	30.72	31.17	29.65	30.58	28.79	30.61	29.38	32.17	31.56	30.32	30.33	33.13	27.52	○
2.5~3.4	17.92	18.99	17.19	18.04	20.06	19.71	21.00	20.11	20.21	20.27	19.35	18.36	22.32	16.38	○
3.5~4.4	11.69	11.62	10.66	12.27	11.79	12.18	12.28	13.73	12.06	12.35	12.06	10.84	13.89	10.23	○
4.5~5.4	7.47	7.33	6.90	7.80	7.11	6.84	7.96	7.82	7.11	7.86	7.42	7.32	8.42	6.42	○
5.5~6.4	5.06	3.87	4.62	3.81	3.73	3.96	5.41	5.02	3.85	4.28	4.36	4.91	5.83	2.89	○
6.5~7.4	2.45	2.43	2.27	1.93	1.32	2.23	2.79	2.55	2.47	2.17	2.26	2.56	3.22	1.30	○
7.5~8.4	1.11	1.08	0.99	0.96	0.48	1.03	1.21	1.45	1.37	1.05	1.07	1.14	1.70	0.45	○
8.5~9.4	0.75	0.34	0.70	0.43	0.15	0.50	0.59	0.45	0.63	0.60	0.51	0.72	0.94	0.09	○
9.5以上	0.39	0.34	0.32	0.21	0.15	0.31	0.50	0.54	0.37	0.36	0.35	0.39	0.63	0.07	○

注1) 2006年度は標高148mのデータにノイズの影響があったため除外し、2004年度を追加した。

「発電用原子炉施設の安全解析に関する気象指針」の解説 X. での記載

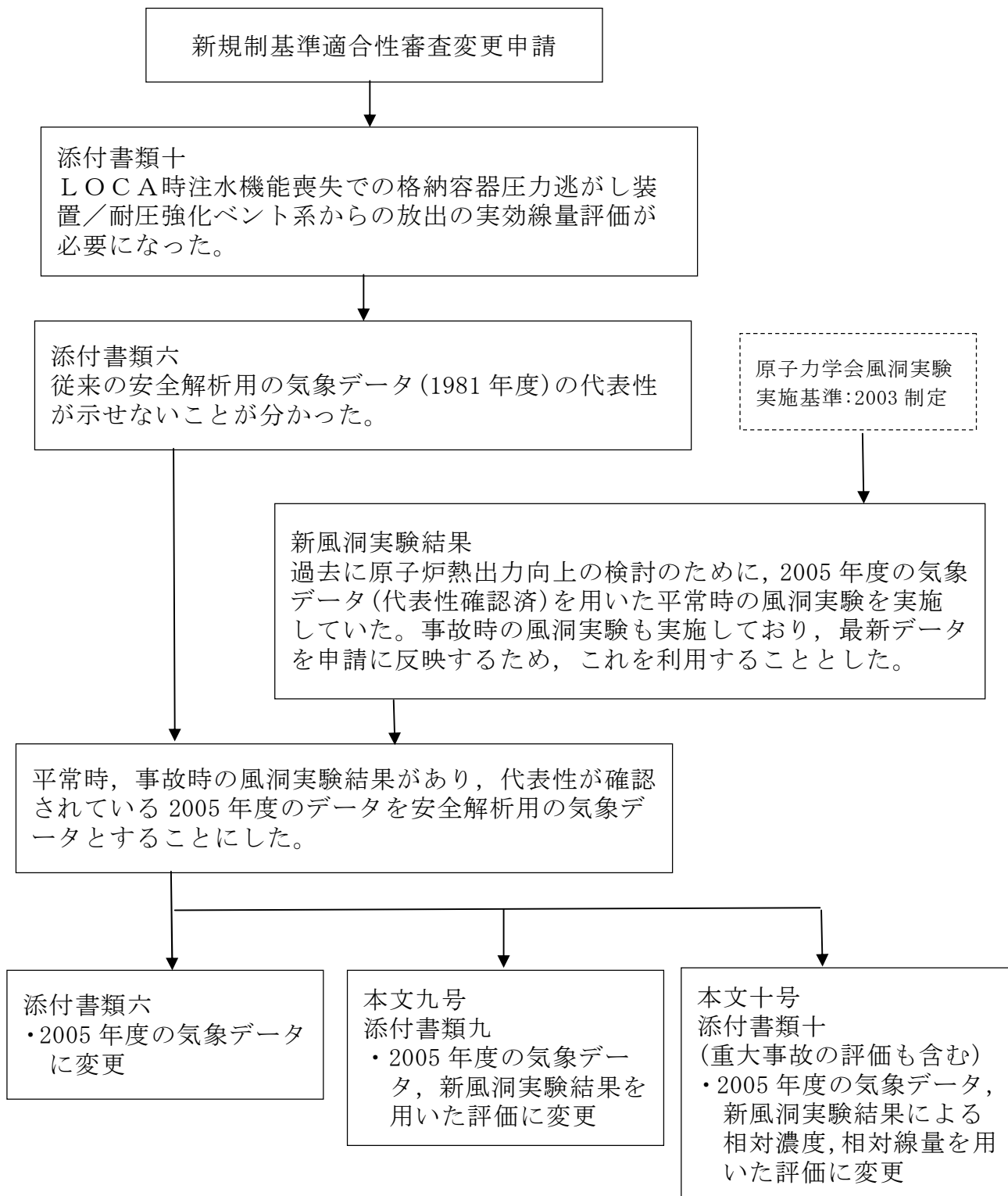
1. 気象現象の年変動

気象現象は、ほぼ1年周期でくり返されているが、年による変動も存在する。このため、想定事故時の線量計算に用いる相対濃度についてその年変動を比較的長期にわたって調査してみると、相対濃度の平均値に対する各年の相対濃度の偏差の比は、30%以内であった。

このことから、1年間の気象資料にもとづく解析結果は、気象現象の年変動に伴って変動するものの、その程度はさほど大きくないので、まず、1年間の気象資料を用いて解析することとした。

その場合には、その年がとくに異常な年であるか否かを最寄の気象官署の気象資料を用いて調査することが望ましい。また、2年以上の気象資料が存在する場合には、これを有効に利用することが望ましい。

安全解析用気象データ及び風洞実験結果変更経緯について



平常時の気体状よう素放出量について

平常時の気体状よう素放出量の主要な放出経路である換気系からの放射性よう素放出量は、「発電用軽水型原子炉施設周辺の線量月標値に対する評価指針」に基づき、換気系の漏えい係数に冷却材中の放射性よう素濃度を乗じて求めている。

一方、冷却材中の放射性よう素濃度は、次式により求めている。例えば、ここで主蒸気流量 $F S$ が増加した場合 γ が増加するため、放射性よう素濃度は減少する。

$$I_i = 2.47 \cdot f \cdot Y_i \cdot \lambda_i^{0.5}$$

$$A_i = \frac{I_i}{M(\lambda_i + \beta + \gamma)}$$

I_i : 核種 i の炉心燃料からの漏えい率 (Bq/s)

f : 全希ガス漏えい率 (1.11×10^{-10})

Y_i : 核種 i の核分裂収率 (%)

λ_i : 核種 i の崩壊定数 (s^{-1})

A_i : 核種 i の冷却材中濃度 (Bq/g)

M : 冷却材保有量 (g)

β : 原子炉冷却材浄化系のよう素除去率 (s^{-1})

$$\beta = \left(1 - \frac{1}{DF}\right) \cdot \frac{FC}{M}$$

DF : 原子炉冷却材浄化系の除染係数

FC : 原子炉冷却材浄化系流量 (g/s)

γ : よう素の主蒸気への移行率 (s^{-1})

$$\gamma = CF \cdot \frac{FS}{M}$$

CF : よう素の主蒸気中への移行割合

FS : 主蒸気流量 (g/s)

前述の換気系の漏えい係数は変わらないため、放射性よう素濃度の減少に伴い気体状よう素放出量は減少する。

東海第二発電所風洞実験結果の概要について

風洞実験結果は、参考文献「東海第二発電所大気拡散風洞実験報告書」（平成 25 年 12 月，三菱重工業株式会社）で公開している。風洞実験結果の概要を以下に示す。

なお，風洞実験は「（社）日本原子力学会標準 発電用原子炉施設の安全解析における放出源の有効高さを求めるための風洞実験実施基準」（2003 年 6 月，社団法人 日本原子力学会）に基づき実施している。

その後，風洞実験実施基準：2003 は改訂され風洞実験実施基準：2009 が発刊されているが，実験の要求事項は変更されておらず，複雑地形の発電所で風洞実験で求めた有効高さを用いて大気拡散評価を行う際の留意点，野外拡散実験結果と野外拡散条件を模擬した風洞実験結果を用いて平地用の基本拡散式（ガウスプルーム拡散式）で評価した結果の比較等の参考事項が追加されたもので，2005 年に実施した風洞実験結果は風洞実験実施基準：2009 も満足している。

1. 実験手順

- (1) 大気安定度で中立（C～D）^{（注）}に相当する条件になるように風洞実験装置（図 1 参照）内の気流（風速分布，乱流強度分布）を調整する（図 2 参照）。
- (2) 排気筒有効高さを決定するスケールを作成するため，風洞実験装置内に縮尺模型を入れなくて高度を変えて模型排気筒からトレーサガス（ CH_4 ）を放出し，地表濃度を測定する平地実験を実施する（図 3 参照）。
- (3) 風洞実験装置内に縮尺模型（1/2,000，風下 10Km）を入れ，所定の高度の模型排気筒からトレーサガスを放出し，地表濃度を測定する模型実験

を行い平地実験結果と照合し、排気筒源有効高さを求める（図4参照）。
 これにより、建屋、地形の大気拡散に及ぼす影響を把握する。

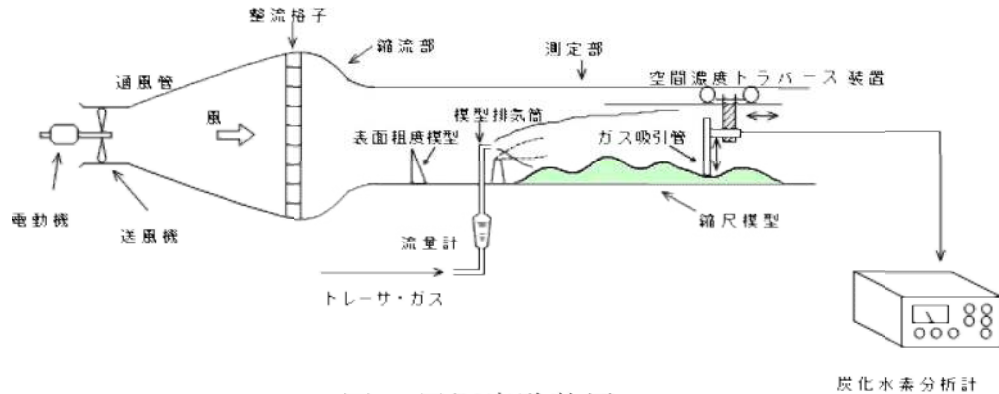


図1 風洞実験装置

(注) 風洞実験の気流条件を大気安定度で中立相当にする効果について

風洞実験装置内の気流は、風洞測定部入口付近に設置した表面粗度模型で調整している。初期の風洞実験では、アングル鋼等を用いて気流の乱れを与えており、中立よりも安定側の気流状態になっていたが、風洞実験の知見が蓄積されるに従い専用の表面粗度模型（スパイア）が製作、採用されるようになり、風洞実験実施基準を制定した時期には中立相当の気流状態に調整できるようになった。

このため、放出源高さが同じ事故時の排気筒有効高さを比較すると、1987年の風洞実験の80～110mに対し、今回は95～115mと高く評価されている。今回の風洞実験では中立の大気安定度（C～D）を再現したため、建屋模型がない平地の気流の乱れが大きくなり、建屋模型の追加により生じる気流の乱れの影響が相対的に小さく、見掛け上の放出源高さの減少が小さくなったためと推定される。前回は、D～Eの大気安定度に相当する気流の乱れであり、建屋模型の追加で生じる気流の乱れが大きく作用して、見掛け上の放出源高さの減少が大きくなったと考えられる。

一方、平常時の排気筒有効高さを比較すると、1987年の風洞実験の120～180mに対し、今回は150～220mと高く評価されている。これは、上記の気流の調整方法の違いによる影響に加え、気象データの変更及び吹出し速度の増加(14m/sから16m/sに増加)により模型実験時の放出源高さが大きくなった影響によると推定される。

図5及び図6に1987年の平地実験の結果、模型実験結果の一例を示す。

2. 放出源高さ

放出源高さは、事故時は通常の換気系は運転されないと想定し、排気筒実高 $H_{01}=H_s$ 、平常時は換気系の運転による吹上げ効果を考慮し、次式のように排気筒実高に吹上げ高さを加えた放出高さ H_{02} とする。ここで、 $1/U$ には、2005年度の気象データを用いた。表1に風洞実験の放出源高さを示す。

$$H_{02} = H_s + \Delta H$$

$$\Delta H = 3 \frac{W}{U} D$$

- H_s : 排気筒実高 (m)
 D : 排気筒出口の内径 (m)
 W : 吹出し速度 (m/s)
 $1/U$: 風速逆数の平均 (s/m)

表1 放出源高さ

風向	着目方位	風速逆数の平均 (s/m)	吹上げ高さ(m)	放出源高さ (GL m)	
				事故時	平常時
N	S	0.42	90.7	140	231
NNE	SSW	0.32	69.1	140	209
NE	SW	0.21	45.4	140	185
ENE	WSW	0.30	64.8	140	205
E	W	0.40	86.4	140	226
ESE	WNW	0.47	101.5	140	242
SE	NW	0.49	105.8	140	246
SSE	NNW	0.36	77.8	140	218
S	N	0.31	67.0	140	207
SSW	NNE	0.40	86.4	140	226
SW	NE	0.35	75.6	—	216
WSW	ENE	—	—	—	—
W	E	—	—	—	—
WNW	ESE	—	—	—	—
NW	SE	0.27	58.3	—	198
NNW	SSE	0.29	62.6	140	203
排気筒出口の内径 (m)				4.5	
吹出し速度 (m/s)				16.0	
排気筒高さ (GL) (m)				140.0	

*1 風速逆数の平均 (2005年4月~2006年3月)

*2 排気筒設置位置標高: EL 8m

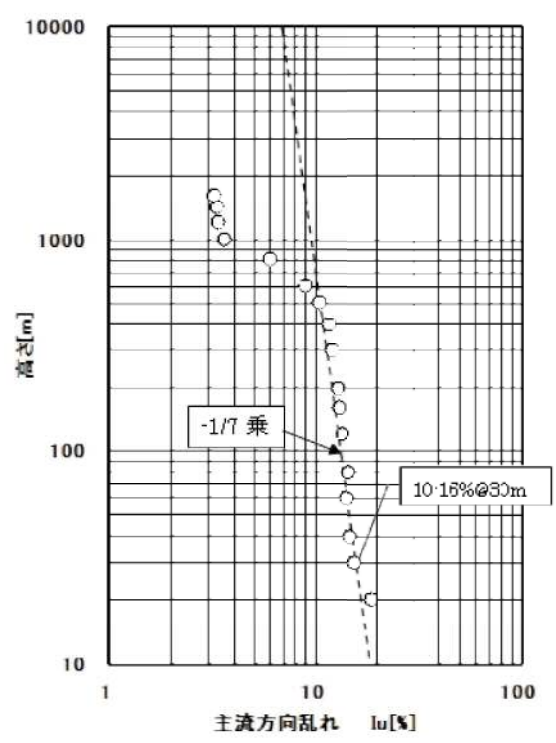
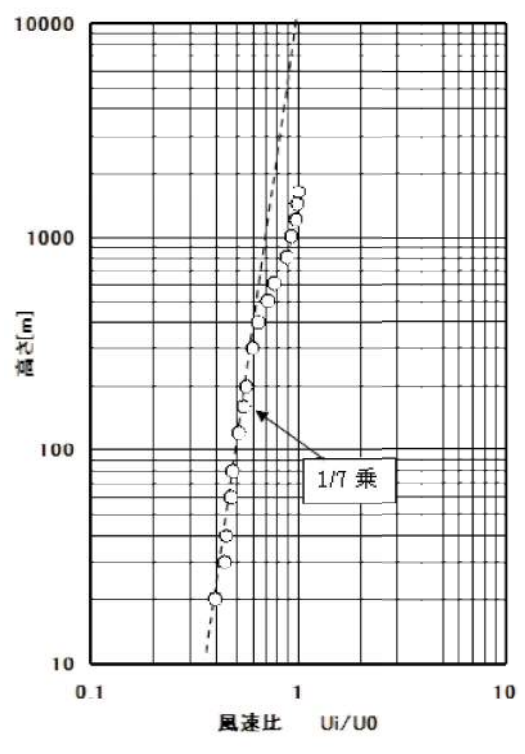
3. 排気筒有効高さ

縮尺模型を入れない平地実験と縮尺模型を入れた模型実験（平常時及び事故時）の結果から、図4のように求めた排気筒有効高さを表2に示す。

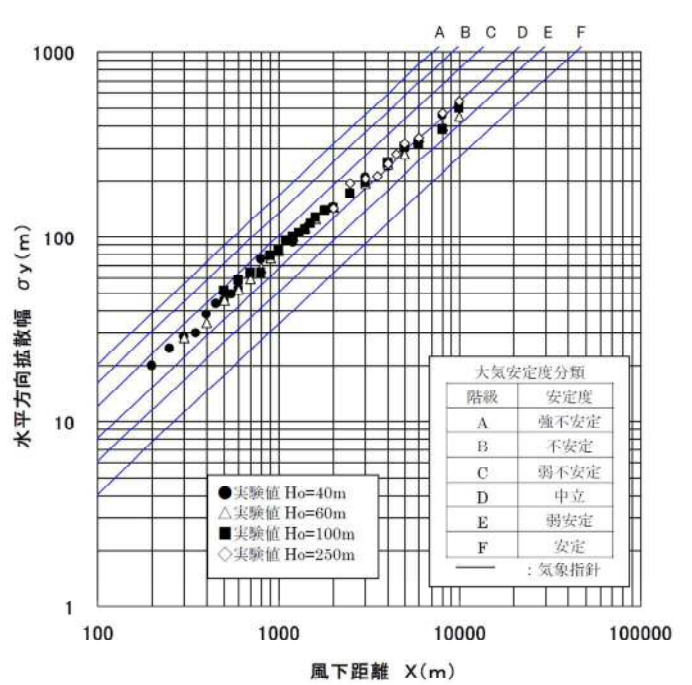
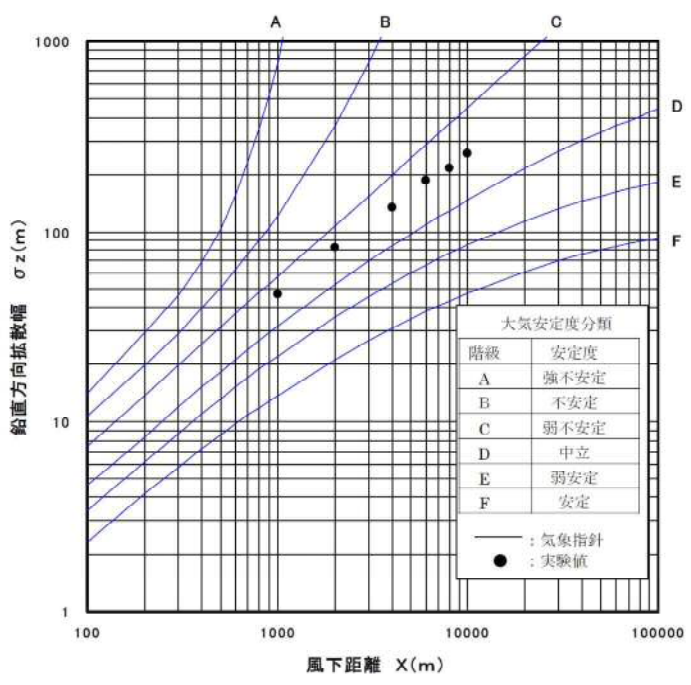
表2 排気筒有効高さ

風向	着目方位	平常時			事故時		
		評価地点 (m)	放出源高さ (m)	有効高さ (m)	評価地点 (m)	放出源高さ (m)	有効高さ (m)
N	S	330	231	210	1870	140	105
NNE	SSW	350	209	180	1690	140	100
NE	SW	460	185	150	1300	140	110
ENE	WSW	640	205	195	930	140	110
E	W	530	226	205	530	140	115
ESE	WNW	600	242	205	600	140	105
SE	NW	660	246	220	660	140	105
SSE	NNW	890	218	200	890	140	105
S	N	850	207	190	850	140	105
SSW	NNE	600	226	200	600	140	95
SW	NE	360	216	195	—	—	—
WSW	ENE	—	—	—	—	—	—
W	E	—	—	—	—	—	—
WNW	ESE	—	—	—	—	—	—
NW	SE	290	198	170	—	—	—
NNW	SSE	350	203	185	2900	140	115

U_i : 各高度の風速
 U_0 : 一樣流中の風速



*1 野外の相当高さで 400m までは風速分布, 乱れ分布を再現する。



*2 鉛直方向拡散幅は大気安定度が中立に相当する値(C~D)になっている。水平方向拡散幅もほぼ大気安定度が中立に相当する値(C~D)になっている。

図2 気流条件調整結果

記号	Ho(m)	記号	Ho(m)
◆	0	+	100
■	20	◇	150
▲	40	□	200
○	60	△	250
×	80		

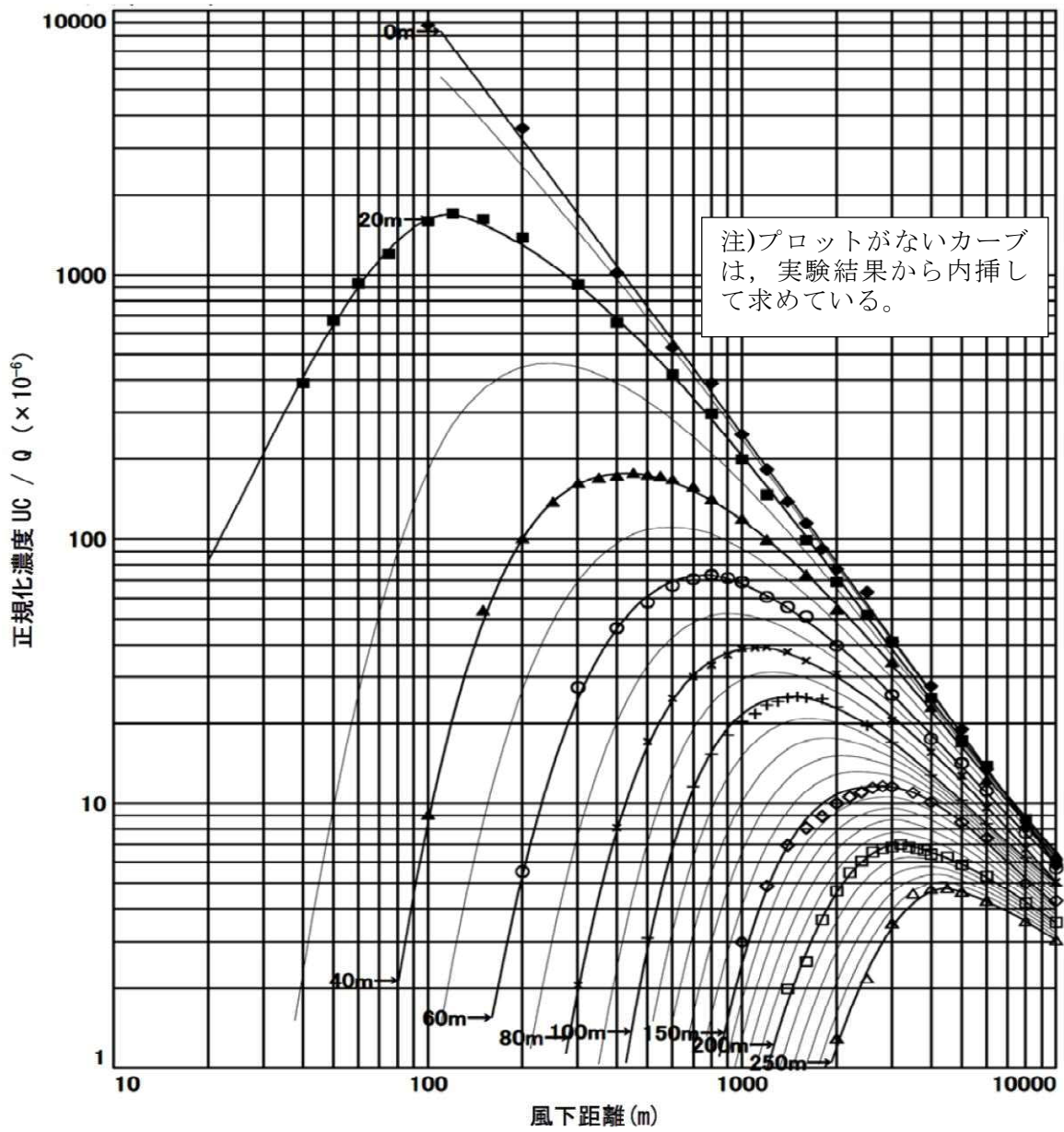


図 3 平地実験結果

風向	S
△	平常時 Ho=207m
—	平地
評価距離	850m

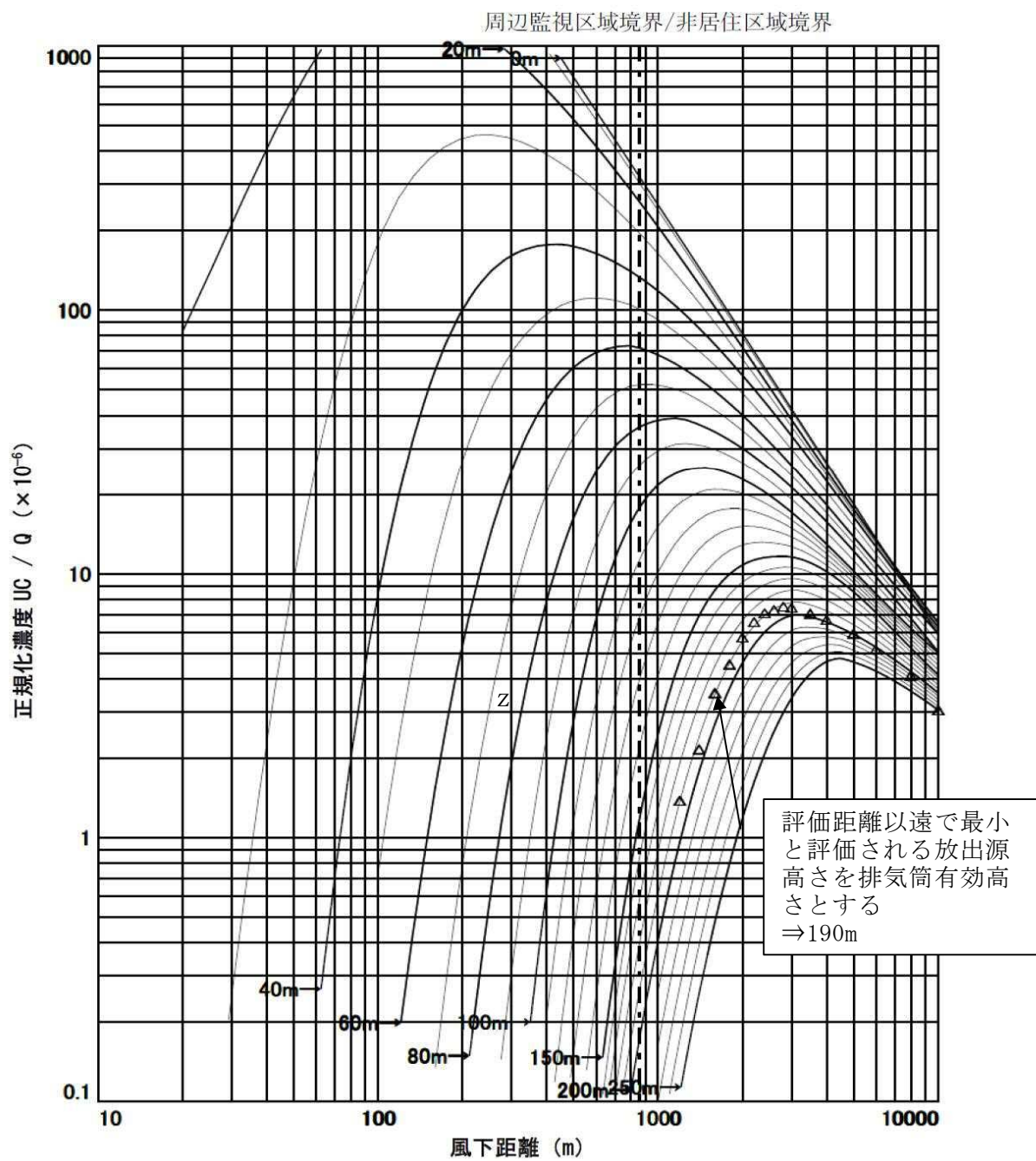
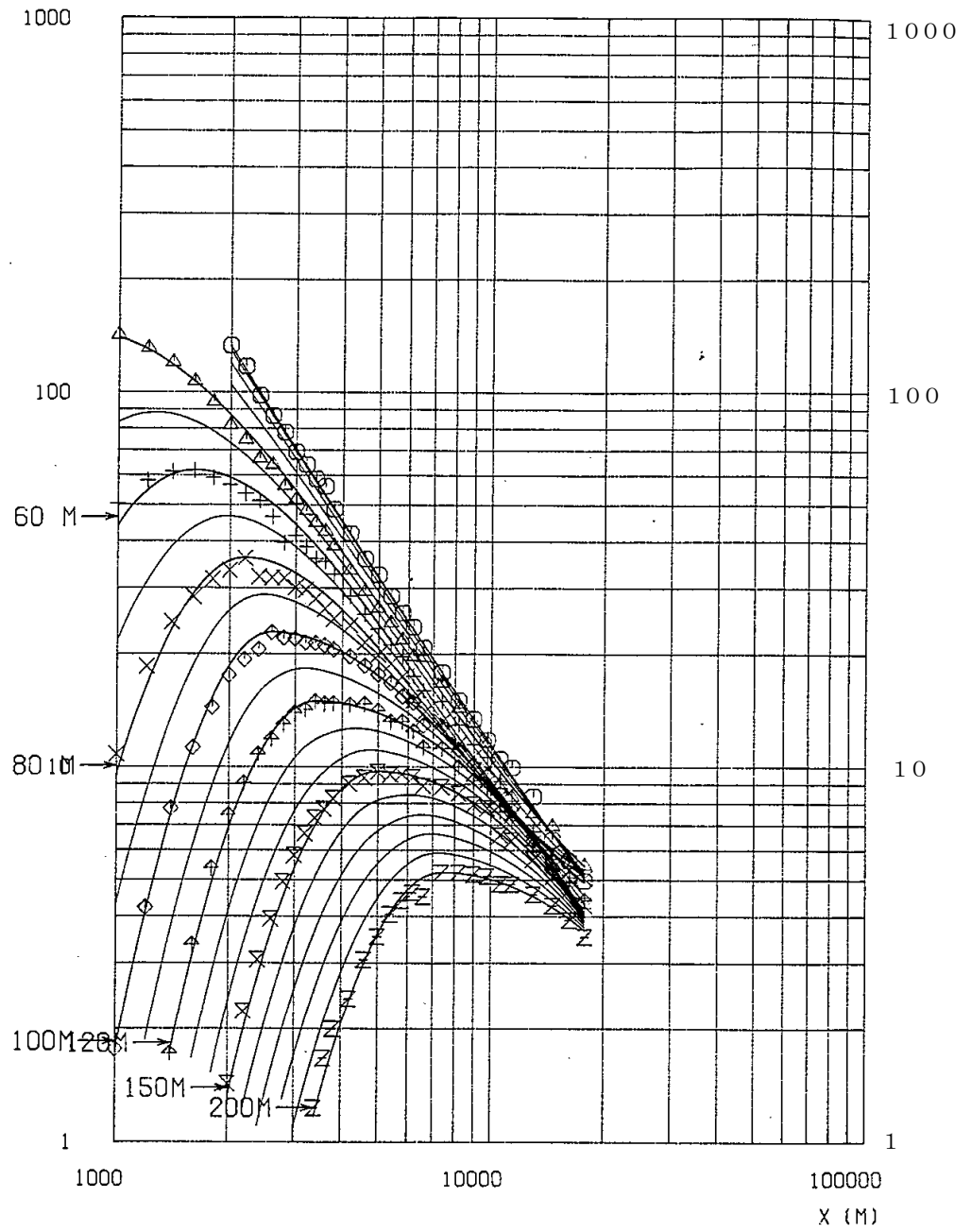


図4 排気筒有効高さの求め方 (風向: S, 平常時の例)

$U \times C/Q * 0.000001$

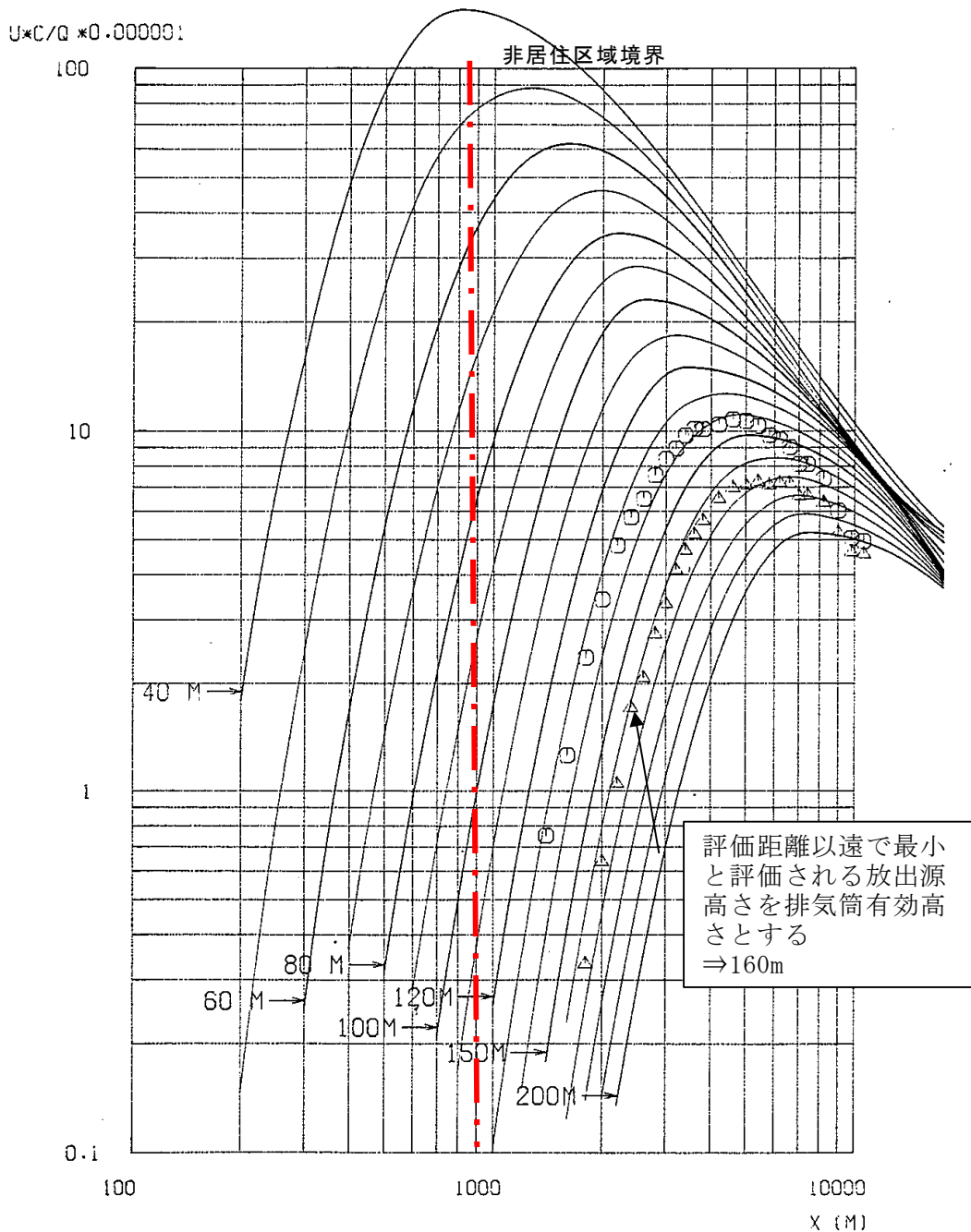
— は近似曲線



- GENDEN-6Δ30-HEI-0(1)
 - GENDEN-HEI-40(3)
 - GENDEN-HEI-60(1)
 - GENDEN-D-HEI-80(1)
 - GENDEN-D-HEI-100(1)
 - GENDEN-D-HEI-120(1)
 - GENDEN-D-HEI-150(1)
 - GENDEN-D-HEI-200(1)
- △ + × ◇ ♣ Z

図5 1982年風洞実験の平地実験結果

風下 方位	風 向	放出高度 H _o m	有効高さ H _e m	評価地点 X _p Km	符 号
N	S	166	135~135	0.86	○
		191	160		△



注) ○は参考評価

図 6 1982 年風洞実験の模型実験結果の一例 (風向: S, 平常時の例)

東海発電所の排気筒有効高さについて

東海第二発電所の添付書類九では、廃止措置中の東海発電所についても通常運転状態を仮定した線量評価を行っている。ここでは、排気筒有効高さは1982年に実施した風洞実験結果を使用している。

風洞実験実施基準:2003の解説「2. 原子炉増設の際の実験の必要性について」^{※1}では、建屋配置から増設建屋の影響が大きいと考えられる、既設・増設建屋の並びに直角な風向と、既設排気筒と増設建屋を結ぶ風向で風洞実験を行い、有効高さの変動が10%以内であれば従来の風洞実験結果を継続使用できるとしている。これを参考に、平常時の線量評価にあたり人の居住を考慮した希ガスによる線量評価点のうち線量が最大となる評価点(SW方向)に向かう風の風向を含む主要風向において、風洞実験で用いる放出源高さを1981年度と2005年度気象データから求め比較した結果+5~-3%と変動が10%以内であった。放出源高さとは有効高さはほぼ比例である^{※2}ため有効高さの変動も10%以内に収まると推定されることから、1987年に実施した風洞実験結果を用いることにした。これに対し、東海第二発電所は+6~+14%と10%を超えていた。

風向	着目方位	1981年度データ (1982年風洞実験)		2005年度データ		放出高さ 変動割合 (%)	風向頻度(%) (2005年度)
		吹上げ高さ (m)	放出高さ (m)	吹上げ高さ (m)	放出高さ (m)		
N	S	45	126	51	132	5	3.79
NNE	SSW	30	111	35	116	5	6.60
NE	SW	26	107	25	106	-1	17.88
ENE	WSW	40	121	36	117	-3	8.95
E	W	51	132	48	129	-2	4.32
ESE	WNW	66	147	60	141	-4	2.77
SE	NW	49	130	56	137	5	2.75
SSE	NNW	34	115	47	128	11	4.16
S	N	35	116	40	121	4	4.88
SSW	NNE	36	117	52	133	13	2.43
排気筒直径(m)		2.7		←			
		16		←			
(参考)		81		←			

東海第二発電所

風向	着目方位	1981年度データ (1982年風洞実験)		2005年度データ (2007年風洞実験)		放出高さ 変動割合 (%)	風向頻度(%) (2005年度)
		吹上げ高さ (m)	放出高さ (m)	吹上げ高さ (m)	放出高さ (m)		
N	S	73	213	91	231	8	3.52
NNE	SSW	43	183	69	209	14	6.67
NE	SW	34	174	45	185	6	18.41
ENE	WSW	51	191	65	205	7	9.80
E	W	69	209	86	226	8	5.55
ESE	WNW	81	221	102	242	10	3.66
SE	NW	56	196	106	246	26	3.09
SSE	NNW	44	184	78	218	18	3.32
S	N	51	191	67	207	8	4.99
SSW	NNE	47	187	86	226	21	3.13
排気筒直径(m)		4.5		←			
吹出し速度(m/s)		14		16			
排気筒高さ(m)		140		←			

※ 1 風洞実験実施基準:2003 解説抜粋

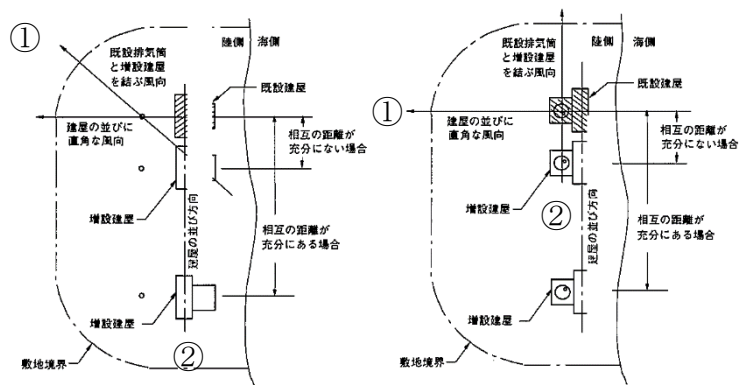
2. 原子炉増設の際の実験の必要性について

- a) 本体の「既設排気筒に対する増設建屋の影響が著しくないと予想される場合」とは、放出源近傍の地形が増設により極端に変化しない場合であって、かつ、既設排気筒高さが増設建屋の高さの2.5倍以上ある場合、または相互の距離が十分ある場合をいう。

ただし、このうち増設建屋の影響については、上記の条件が満たされない場合でも、次のように取り扱うことができる。

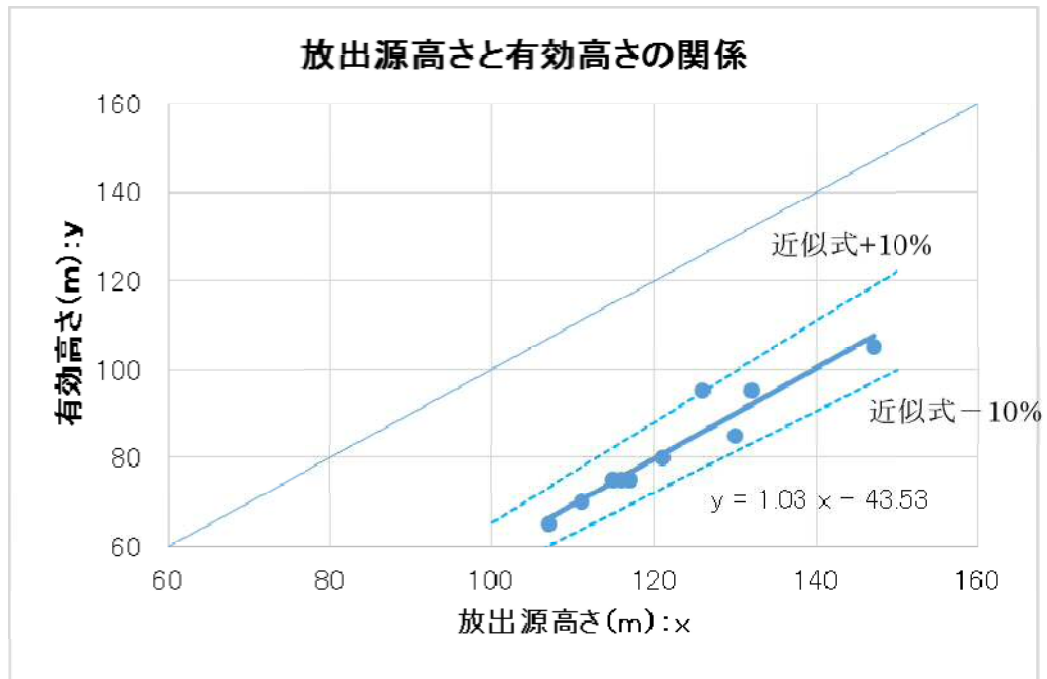
- 1) 既設、増設建屋配置により、①建屋の並びに直角な風向、②既設排気筒と増設建屋を結ぶ風向を求め、既設建屋のみで実施した既存の実験風向のうち、最も①、②に近い2風向を選定して増設建屋を加えた実験を行い、その結果が既存の実験結果と比較してあまり変わらない場合*は、既存の実験結果をそのまま使用できる(解説図2-1参照)。

* ここで、あまり変わらない場合とは、有効高さの変化が10%以内であり、かつ、線量目標値、めやす線量等を下回ることが明らかな場合である。



※2 1982年東海発電所風洞実験時の放射源高さとう効高さの関係

平常時風洞実験時の放射源高さとう効高さは、下図のようにほぼ比例関係にあると認められる。これから、放射源高さが10%変動したとしても、有効高さの変動は10%以内に収まると推定される。



異常年検定法の概要について

F分布検定の手順により異常年検定を行った。

この検定方法は、正規分布をなす母集団から取り出した標本のうち、不良標本と見られるものを X_0 (検定年)、その他のものを $X_1, X_2, X_3, \dots, X_i, \dots, X_n$ (比較年) とした場合、 X_0 を除く他の n 個の標本の平均を $\bar{X} = \sum_{i=1}^n X_i/n$ として、標本の分散から見て X_0 と \bar{X} との差が有意ならば X_0 を棄却とする方法である。検定手順を以下に示す。

- (1) 仮説: 不良標本 X_0 と他の標本 (その平均値) \bar{X} との間に有意な差はないとする。

$$H_0: X_0 = \bar{X} (\bar{X} = \sum_{i=1}^n X_i/n)$$

- (2) 分散比 F_0 を計算する。

$$F_0 = \frac{(n-1)(X_0 - \bar{X})^2}{(n+1)S^2}$$

$$S^2 = \sum_{i=1}^n (X_i - \bar{X})^2/n$$

- (3) 検定年は 1 年、比較年は 10 年、有意水準 (危険率) は 5% として、F 分布表の F 境界値 ($F_9^1(0.05) = 5.12$) を求める。
- (4) F_0 と F 境界値を比較して、 $F_0 < F$ 境界値であれば仮説は採択する。具体的には、次のように棄却限界の上限値と下限値を求め、その範囲に検定年 X_0 が収まっているかを確認して検定している。

$$\bar{X} - S \sqrt{\frac{(n+1)}{(n-1)} F_{\text{境界値}}} < X_0 < \bar{X} + S \sqrt{\frac{(n+1)}{(n-1)} F_{\text{境界値}}}$$

設計基準事故時等の周辺監視区域の変更に伴う線量評価への影響について

設計基準事故時及び重大事故に至るおそれがある事故について別紙 1 に示す周辺監視区域の変更に伴う線量評価への影響を確認した。

その結果、本文十号及び添付書類十に記載のある線量評価結果に影響がないことを以下のとおり確認した。

1. 設計基準事故の線量評価への影響の確認

設計基準事故の線量評価点を別紙 2 及び別紙 3 に示す。設計基準事故において周辺監視区域の変更による非居住区域境界の線量評価点までの距離に影響があるのは、日本原子力研究開発機構の国道 245 号線沿い（S W 方位）の線量評価点であるが、線量が最大となる方位に変更はないため本文十号及び添付書類十に記載している線量評価結果は変わらない。

なお、東海第二発電所進入道路境界付近（W N W 方位）について、周辺監視区域縮小による放出源中心からの非居住区域境界までの距離の変化を確認したところ、第 1 表のとおり変更前後で距離の変化はわずかで現状の線量評価点の代表性への影響はない。また、その他の周辺監視区域変更範囲については海側方位又は非居住区域境界ではない方位のため影響はない。

第1表 放出源中心から東海第二発電所進入道路境界付近までの距離

事故事象	放出源	周辺監視区域設定	距離	近接する線量評価点の評価距離※
主蒸気管破断	タービン建屋	変更前	506m	500m (W N W 方位)
		変更後	504m	
主蒸気管破断以外の事故	排気筒	変更前	603m	600m (W N W 方位)
		変更後	601m	

※線量評価に当たっては1桁目を切捨てした距離を設定

2. 重大事故に至るおそれがある事故

重大事故に至るおそれがある事故の線量評価点を別紙4及び別紙5に示す。重大事故に至るおそれがある事故において周辺監視区域の変更に伴い非居住区域境界の線量評価点に影響があるのは、格納容器圧力逃がし装置によるベントの評価では、東海第二発電所進入道路境界付近（W N W 方位）及び日本原子力研究開発機構の国道245号線沿い（S W 方位）の線量評価点であるが、第2表のとおり評価距離の変更に伴う影響は小さく、最大線量（N W 方位）を下回ることを確認している。

また、耐圧強化ベント系によるベントの評価では、日本原子力研究開発機構の国道245号線沿い（S W 方位）の線量評価点であるが、第3表のとおり評価距離の変更に伴う影響は小さく、最大線量（W 方位）を下回ることを確認している。なお、東海第二発電所進入道路境界付近（W N W 方位）については、周辺監視区域縮小による放出源中心から非居住区域境界までの距離の変化を確認したところ、第4表のとおり変更前後で距離に変更はなく、現状の線量評価点の代表性に影響はない。また、その他の周辺監視区域変更範囲については海側方位又は非居住区域境界ではない方位のため影響はない。

第2表 格納容器圧力逃がし装置によるベントの公衆の線量評価結果

評価方位		評価距離※	線量	備考
NW	—	600m	1.6×10^{-1} mSv	線量が最大となる方位（本文十号及び添付書類十記載値）
WNW	変更前	550m	1.2×10^{-1} mSv	東二進入道路境界付近の線量評価点
	変更後	540m	1.3×10^{-1} mSv	
SW	変更前	1200m	1.3×10^{-1} mSv	日本原子力研究開発機構の国道245号線沿いの線量評価点
	変更後	1190m	1.3×10^{-1} mSv	

※評価距離は、実測値の1桁目を切捨てした距離を設定している。

第3表 耐圧強化ベント系によるベントの公衆の線量評価結果


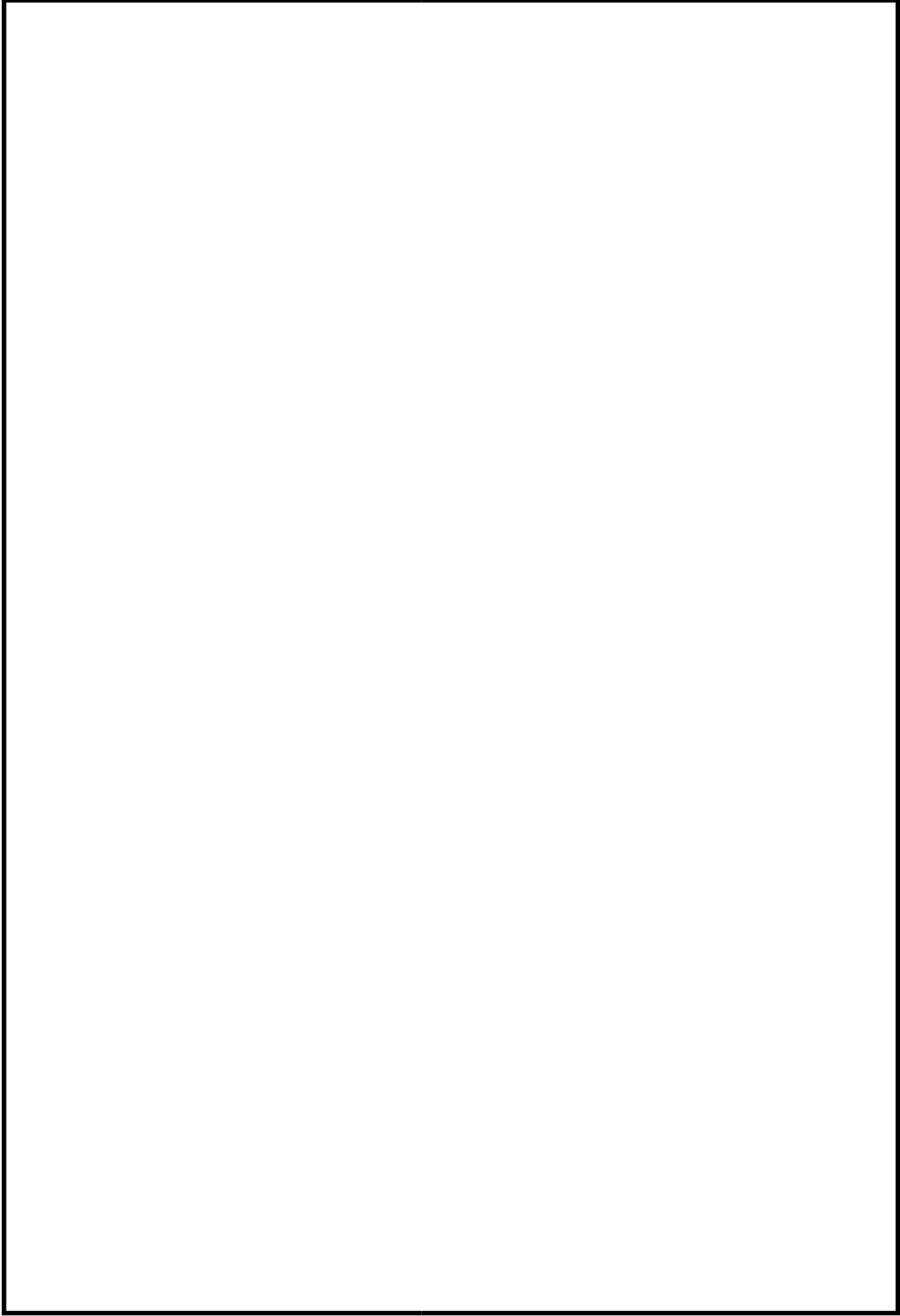
評価方位		評価距離※	線量	備考
W	—	600m	6.2×10^{-1} mSv	線量が最大となる方位（本文十号及び添付書類十記載値）
SW	変更前	1300m	5.3×10^{-1} mSv	日本原子力研究開発機構の国道245号線沿いの線量評価点
	変更後	1280m	5.3×10^{-1} mSv	

※評価距離は、実測値の1桁目を切捨てした距離を設定している。

第4表 放出源から東海第二発電所進入道路境界付近までの距離

放出源		距離	近接する線量評価点の評価距離※
耐圧強化ベント系によるベント（排気筒放出）	変更前	603m	600m (WNW方位)
	変更後	601m	

※評価距離は、実測値の1桁目を切捨てした距離を設定している。

変更前	変更後	備考
		<p>a: 波の影響を受けないように海岸沿いのフェンス（周辺監視区域境界）の位置を後退。線量評価点の追加。</p> <p>b: 波の影響を受けないように放水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。（線量評価点に影響なし）</p> <p>c: 波の影響を受けないように取水口付近のフェンス（周辺監視区域境界）の位置を変更。（線量評価点に影響なし）</p> <p>d: 高台部分（JAEA の土地）を東二敷地に変更することによる敷地境界の変更に伴う周辺監視区域境界の変更。（線量評価点の評価距離の変更（SW 方位 460m→430m））</p> <p>e: 国道 245 号線拡幅工事に伴う発電所入口の変更に伴う横断歩道設置による周辺監視区域境界の変更（数 m の位置変更のため図面上の変更はなし。線量評価点に影響なし）</p> <p>f: 国道 245 号線拡幅工事による日本原子力研究開発機構の周辺監視区域境界の変更（線量評価点の評価距離の変更（SW 方位 1300m→1280m））</p>





東海第二発電所

休止状態設備の撤去による廃棄物処理

及び貯蔵への影響について

休止状態設備の撤去による廃棄物処理及び貯蔵への影響について

1. 概 要

原子炉建屋廃棄物処理棟内に新規 SA 設備（格納容器圧力逃がし装置及び電気盤等）を設置するスペースを確保するため、現在休止状態となっている設備（固化装置（セメント固化式）及び助材型ろ過装置。以下「休止設備」という。）を撤去することから、休止設備の撤去により、廃棄物処理及び貯蔵への影響がないことを確認した。

2. 固体廃棄物処理系における処理の変更

液体廃棄物処理系濃縮装置から発生する濃縮廃液，原子炉冷却材浄化系及び燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩器から発生する使用済樹脂，液体廃棄物処理系助材型ろ過装置*及び非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジは，図 1 に示すように処理する。

以下に，廃棄物種類毎の処理の変更について示す。

※：プリコート型のフィルタを用いてろ過する装置を助材型ろ過装置という（フィルタのプリコート材を助材という）。反対に，プリコート型のフィルタ以外を用いてろ過する装置を非助材型ろ過装置という。

（1）液体廃棄物処理系から発生する濃縮廃液

濃縮廃液に関しては，次の 2 種類の取り扱い(a)及び(b)につい

て許可されている。今回、固化装置（セメント固化式）（図 2，6-1，6-2 及び 6-3 参照）を撤去するため、(b)に示す処理・貯蔵保管を削除するが、(a)に示す処理・貯蔵保管が可能である。

(a) 濃縮廃液貯蔵タンク（二十七条設備）で放射能を減衰させた後、減容固化設備（二十七条設備）で、乾燥・造粒後、容器に詰めて減容固化体貯蔵室（二十七条設備）に貯蔵するか、貯蔵した後、セメント混練固化装置（二十七条設備）でドラム缶内に固化材（セメント）と混練して固化し保管廃棄施設（以下「固体廃棄物貯蔵庫」という。）（二十八条設備）に貯蔵保管する。…【変更なし】

(b) 濃縮廃液貯蔵タンク（二十七条設備）で放射能を減衰させた後、固化装置（セメント固化式）（二十七条設備）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫（二十八条設備）に貯蔵保管する。…【削除】

（２）使用済樹脂（粉末，粒状）

① 原子炉冷却材浄化系及び燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩器から発生する使用済粉末樹脂に関しては、次の２種類の取扱い(a)及び(b)について許可されている。今回、固化装置（セメント固化式）を撤去するため、(b)に示す処理・貯蔵保管を削除するが、(a)に示す貯蔵が可能である。

(a) 使用済粉末樹脂貯蔵タンク（二十八条設備※）に貯蔵する。…【変更なし】

(b) 使用済粉末樹脂貯蔵タンク（二十七条設備※）に貯蔵し放射能を減衰させた後、固化装置（セメント固化式）（二十

七条設備) で固化材(セメント) と混合してドラム缶内に
固化し固体廃棄物貯蔵庫(二十八条設備)に貯蔵保管する。

…【削除】

※：処理過程の途中で貯蔵する場合は二十七条設備，最終段階
で貯蔵する場合は二十八条設備。

※：使用済粉末樹脂は(a)に示す貯蔵をするが，処分先(埋設
施設)の設計に応じて，処分方法を確立し，処理設備を設
置する。

② 復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置から発生する使
用済粒状樹脂に関しては，次の3種類の取扱い(a)，(b)及び(c)
について許可されている。今回，固化装置(セメント固化式)を
撤去するため，(c)に示す処理・貯蔵保管を削除するが，(a)に示
す貯蔵及び(b)に示す処理が可能である。

(a) 使用済樹脂貯蔵タンク(二十八条設備)に貯蔵する。

…【変更なし】

(b) 使用済樹脂貯蔵タンク(二十七条設備)に貯蔵し放射能
を減衰させた後，雑固体廃棄物焼却設備(二十七条設備)
で焼却する。…【変更なし】

(c) 固化装置(セメント固化式)で固化材(セメント)と混合
してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫(二十八条設備)
に貯蔵保管する。…【削除】

(3) 廃スラッジ

① 非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジに関しては，次の

2種類の取扱い(a)及び(b)について許可されている。今回、固化装置（セメント固化式）を撤去するため、(b)に示す処理・貯蔵保管を削除するが、(a)に示す貯蔵が可能である。

(a) クラッドスラリタンク（二十八条設備※）に貯蔵する。

…【変更なし】

(b) クラッドスラリタンク（二十七条設備※）に貯蔵し放射能を減衰させた後、固化装置（セメント固化式）（二十七条設備）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫（二十八条設備）に貯蔵保管する。

…【削除】

※：処理過程の途中で貯蔵する場合は二十七条設備，最終段階で貯蔵する場合は二十八条設備。

※：非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジは(a)に示す貯蔵をするが，処分先（埋設施設）の設計に応じて，処分方法を確立し，処理設備を設置する。

② 助材型ろ過装置（機器ドレン処理系）（図3，5及び6-3参照）から発生する廃スラッジに関しては，次の3種類の取扱い(a)，(b)及び(c)について許可されている。今回，固化装置（セメント固化式）を撤去するため，(c)に示す処理・貯蔵保管を削除するが，(a)に示す貯蔵及び(b)に示す処理が可能である。

(a) 廃液スラッジ貯蔵タンク（二十八条設備※）に貯蔵する。

…【変更なし】

(b) 廃液スラッジ貯蔵タンク（二十七条設備※）に貯蔵し放射能を減衰させた後，雑固体廃棄物焼却設備（二十七条設

備) で焼却する。…【変更なし】

- (c) 固化装置(セメント固化式)(二十七条設備)で固化材(セメント)と混合してドラム缶内に固化し、固体廃棄物貯蔵庫(二十八条設備)に貯蔵保管する。

…【削除】

※：処理過程の途中で貯蔵する場合は二十七条設備，最終段階で貯蔵する場合は二十八条設備。

- ③ 助材型ろ過装置(床ドレン処理系)(図4, 5及び6-3参照)から発生する廃スラッジに関しては，次の3種類の取扱い(a), (b)及び(c)について許可されている。今回，固化装置(セメント固化式)を撤去するため，(c)に示す処理・貯蔵保管を削除するが，(a)に示す貯蔵及び(b)に示す処理が可能である。

- (a) 床ドレンスラッジ貯蔵タンク(二十八条設備※)に貯蔵する。…【変更なし】

- (b) 床ドレンスラッジ貯蔵タンク(二十七条設備※)に貯蔵し放射能を減衰させた後，雑固体廃棄物焼却設備(二十七条設備)で焼却する。…【変更なし】

- (c) 固化装置(セメント固化式)(二十七条設備)で固化材(セメント)と混合してドラム缶内に固化し，固体廃棄物貯蔵庫(二十八条設備)に貯蔵保管する。

…【削除】

※：処理過程の途中で貯蔵する場合は二十七条設備，最終段階で貯蔵する場合は二十八条設備。

3. 液体廃棄物処理系における処理の変更

液体廃棄物のうち、機器ドレン廃液の処理を図 3 に、床ドレン廃液の処理を図 4 に示す。以下に、それぞれの処理の変更について示す。

(1) 機器ドレン廃液の処理

機器ドレン廃液に関しては、次の 2 種類の処理 (a) 及び (b) について許可されている。今回、助材型ろ過装置 (図 3 参照) を撤去するため、(b) に示す処理を削除するが、(a) に示す処理が可能である。

(a) 電磁ろ過器及び超ろ過器 (透過膜式) からなる非助材型ろ過装置 (二十七条設備) で処理する。…【変更なし】

(b) 助材型ろ過装置 (二十七条設備) で処理する。…【削除】

(2) 床ドレン廃液の処理

床ドレン廃液に関しては、次の 2 種類の処理 (a) 及び (b) について許可されている。今回、助材型ろ過装置 (図 4 参照) を撤去するため、(b) に示す処理を削除するが、(a) に示す処理が可能である。

(a) 再生廃液処理系 (二十七条設備) に移送して、濃縮処理する (図 4, 9 及び 10 参照)。…【変更なし】

(b) 助材型ろ過装置 (二十七条設備) で処理する。…【削除】

4. 休止設備の撤去による安全性への影響について

(1) 固化装置 (セメント固化式)

固化装置 (セメント固化式) の撤去による廃棄物の貯蔵に関して、安全性に支障がないことを以下のとおり確認した。

① 濃縮廃液

濃縮廃液を減容固化設備及びセメント混練固化装置により処理し、製作したセメント固化体を埋設処分していること、並びに減容固化体貯蔵室（貯蔵容量約 1,400 m³ に対し、平成 28 年度末時点で 283 m³ 貯蔵）及び固体廃棄物貯蔵庫（貯蔵保管容量約 73,000 本に対し、平成 28 年度末時点で 62,579 本貯蔵）の空き容量は十分である。

また、濃縮廃液の年間発生量約 200 m³ に対する処理能力は次のとおりであり、一年分の発生量を十分に処理可能である。

- ・撤去する固化装置（セメント固化式）：

セメント固化体約 2000 本/年を製作することができる。

- ・減容固化設備以降：

約 200 m³/年の濃縮廃液を約 30 m³/年の減容固化体に処理し、セメント混練固化装置によってセメント固化体約 180 本/年とすることが可能。セメント混練固化装置は一日当たり 10 本のセメント固化体を製作することができる。

以上より、固化装置（セメント固化式）の撤去による廃棄物の処理・貯蔵に関して安全性に支障がない。

② 使用済粉末樹脂

使用済粉末樹脂は、性能劣化に応じて交換する際に発生し、使用済粉末樹脂貯蔵タンクに貯蔵保管する。プラント起動後は震災までの実績から約 3.6 m³/年で発生、現状は至近 5 年の平均発生量より約 0.8 m³/年で発生するものとした場合、このタンク

への長期貯蔵が可能（図 11 及び 12 参照）であり，固化装置（セメント固化式）の撤去による廃棄物の貯蔵に関して安全性に支障がない。

また，使用済粉末樹脂の処分先（埋設施設）の設計に応じて，処分方法を確立し，処理設備を設置する。

なお，タンクが満杯であっても，タンク周辺通路での線量率は遮蔽設計区分における線量率よりも十分低くなるように設計されているため，従事者の被ばくへの影響はない。

③ 使用済粒状樹脂

使用済粒状樹脂には，復水脱塩器樹脂，機器ドレン処理系脱塩器樹脂，凝縮水脱塩器樹脂があり，樹脂の劣化を考慮し，それぞれ， $70 \text{ m}^3 / 5 \text{ 年}$ ， $7 \text{ m}^3 / 5 \text{ 年}$ ， $0.5 \text{ m}^3 / \text{年}$ 程度の量が発生し，使用済樹脂貯蔵タンクに貯蔵中の樹脂は満杯になる前に， $24 \text{ m}^3 / \text{年}$ の処理能力を有する雑固体焼却設備で焼却することから，このタンクへの長期貯蔵が可能であり（図 13 及び 14 参照），固化装置（セメント固化式）の撤去による廃棄物の貯蔵に関して安全性に支障がない。

なお，タンクが満杯であっても，タンク周辺通路での線量率は遮蔽設計区分における線量率よりも十分低くなるように設計されているため，従事者の被ばくへの影響はない。

④ 廃スラッジ

- ・ 助材型ろ過装置（機器ドレン処理系及び床ドレン処理系）から発生する廃スラッジ

助材型ろ過装置（機器ドレン処理系及び床ドレン処理系）から発生する廃スラッジは、廃液スラッジ貯蔵タンク及び床ドレンスラッジ貯蔵タンクに貯蔵しているが、各貯蔵タンクは十分な空き容量があるため（図 15, 16, 17 及び 18 参照）、固化装置（セメント固化式）の撤去による廃棄物の貯蔵に関して安全性に支障がない。

また、今回、助材型ろ過装置（機器ドレン処理系及び床ドレン処理系）を撤去する計画であり、撤去後、廃スラッジは発生しない。

なお、タンクが満杯であっても、タンク周辺通路での線量率は遮蔽設計区分における線量率よりも十分低くなるように設計されているため、従事者の被ばくへの影響はない。

- ・ 非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ

非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジについては、プラント起動後は震災までの実績から約 0.09 m^3 / 年で発生、起動までは至近 5 年の平均発生量より約 0.001 m^3 / 年で発生するものとした場合、このタンクへの長期貯蔵は十分可能であり（図 19 及び 20 参照）、固化装置（セメント固化式）の撤去による廃棄物の貯蔵に関して安全性に支障がない。

また、非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジの処分先（埋設施設）の設計に応じて、処分方法を確認し、処理設備を設置する。

なお、タンクが満杯であっても、タンク周辺通路での線量率は遮蔽設計区分における線量率よりも十分低くなるように設

計されているため、従事者の被ばくへの影響はない。

(2) 機器ドレン廃液

機器ドレン廃液を助材型ろ過装置の代替となる非助材型ろ過装置により処理する。機器ドレン廃液の発生量約 $180 \text{ m}^3/\text{d}$ に対する処理能力は次のとおりであり、一日分の発生量を十分に処理可能である。

- ・撤去する助材型ろ過装置の処理能力：約 $50 \text{ m}^3/\text{h}$
- ・非助材型ろ過装置の処理能力：約 $40 \text{ m}^3/\text{h}$

以上より、助材型ろ過装置（機器ドレン処理系）を撤去しても廃棄物処理に支障はなく、安全性に影響はない。

(3) 床ドレン廃液

床ドレン廃液を助材型ろ過装置の代替となる再生廃液処理系により処理する。床ドレン廃液の発生量：約 $40 \text{ m}^3/\text{d}$ に対する処理能力は次のとおりであり、一日分の発生量を十分に処理可能である。

- ・撤去する助材型ろ過装置の処理能力：約 $50 \text{ m}^3/\text{h}$
- ・再生廃液処理系の処理能力：約 $6.8 \text{ m}^3/\text{h}$

以上より、助材型ろ過装置（床ドレン処理系）を撤去しても廃棄物処理に支障はなく、安全性に影響はない。

5. 休止設備の撤去による固体廃棄物の発生量について

休止設備の撤去により発生する廃棄物については、容器（ドラム缶等）に収納し、固体廃棄物貯蔵庫（貯蔵容量約 73,000 本（200 L ドラ

ム缶相当)) に貯蔵保管する。発生する廃棄物量は、ドラム缶 100 本程度である。また、震災前 5 年間の固体廃棄物貯蔵庫の貯蔵保管量の増加（東海第二発電所分）は平均 2,042 本/年（平成 18 年度から 1,333 本, 957 本, 2,263 本, 3,361 本, 2,299 本発生）となっており、休止設備の撤去により発生する廃棄物量は年間発生量の 5 %程度となる。休止設備の撤去により発生する廃棄物量を今後の固体廃棄物貯蔵庫の貯蔵保管量の推定（図 21）に加えても固体廃棄物貯蔵庫における貯蔵保管への影響及び休止設備の撤去による廃棄物処理の安全性への影響はない。

以 上

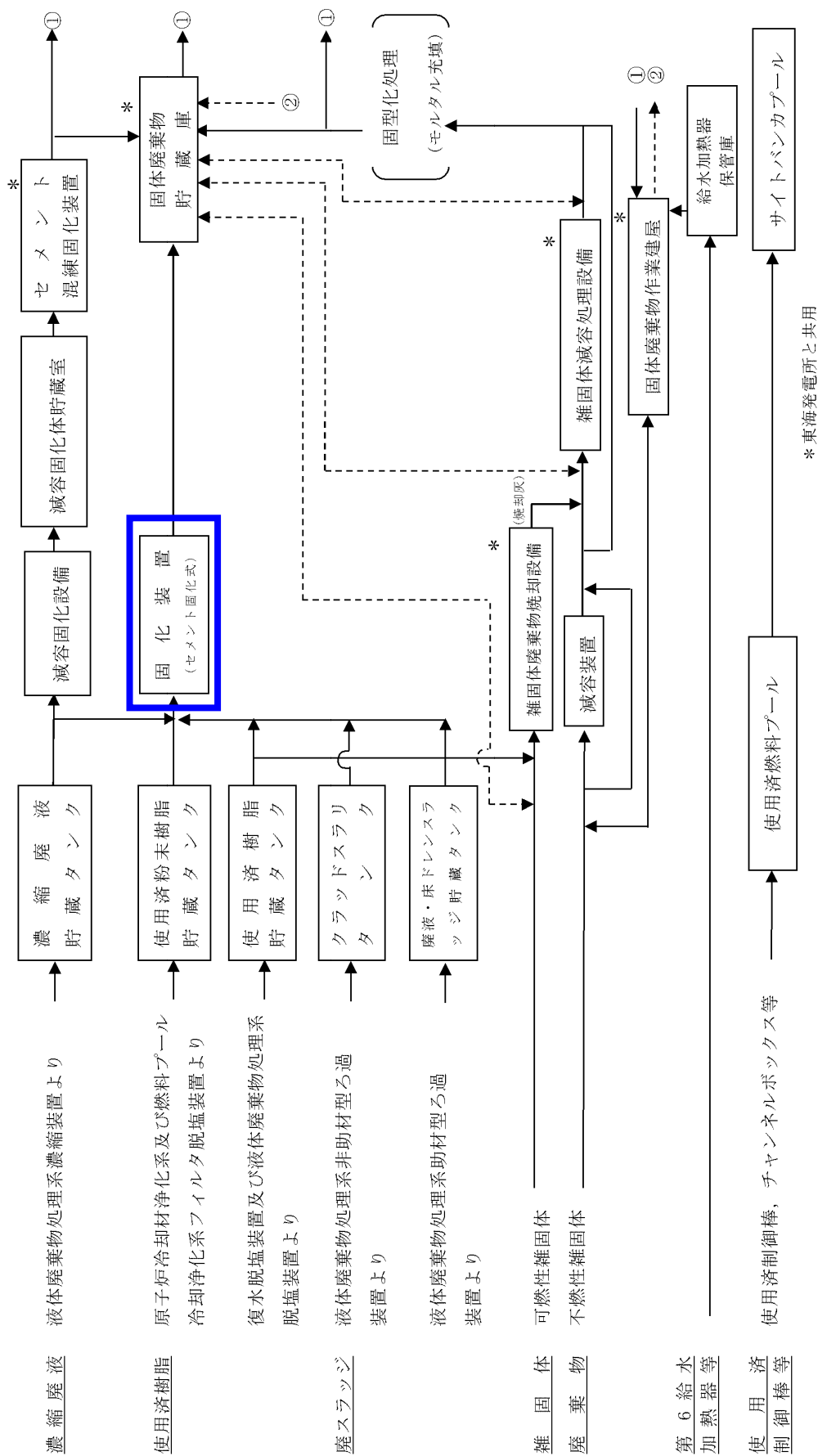


図 1 固体廃棄物処理系統概要図 (設置許可申請書 第 10.3-1 図)

固化装置（セメント固化式）

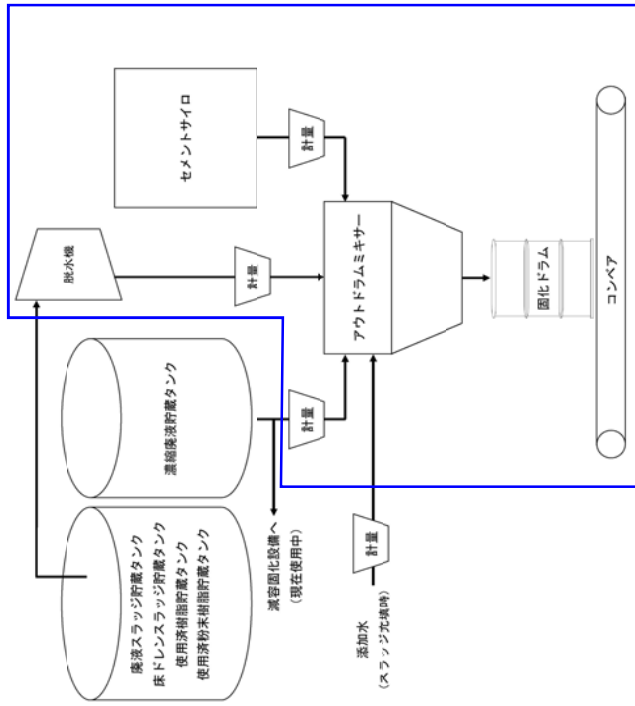


図 2 固化装置（セメント固化式）概略図

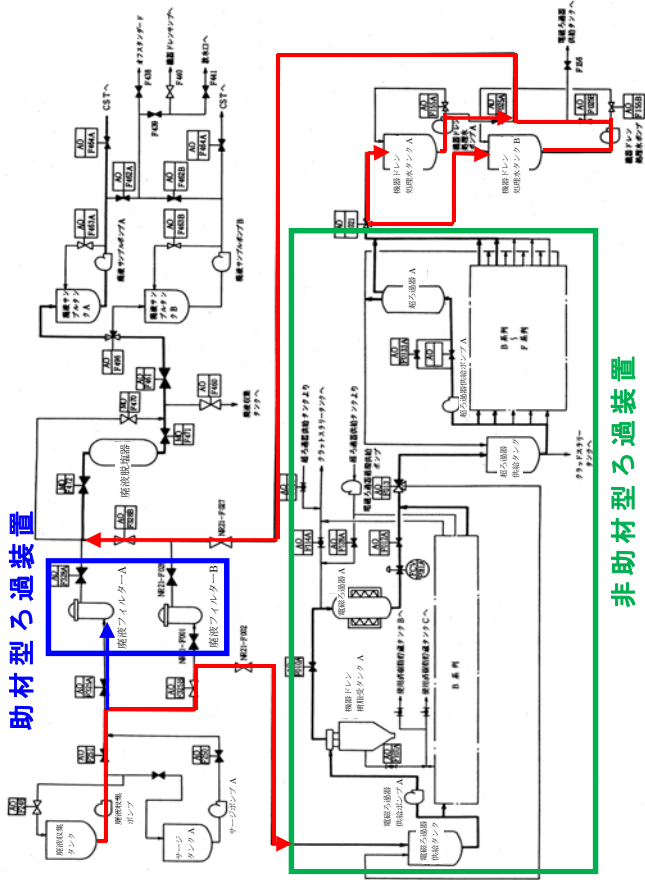


図 3 機器ドレン処理系統図

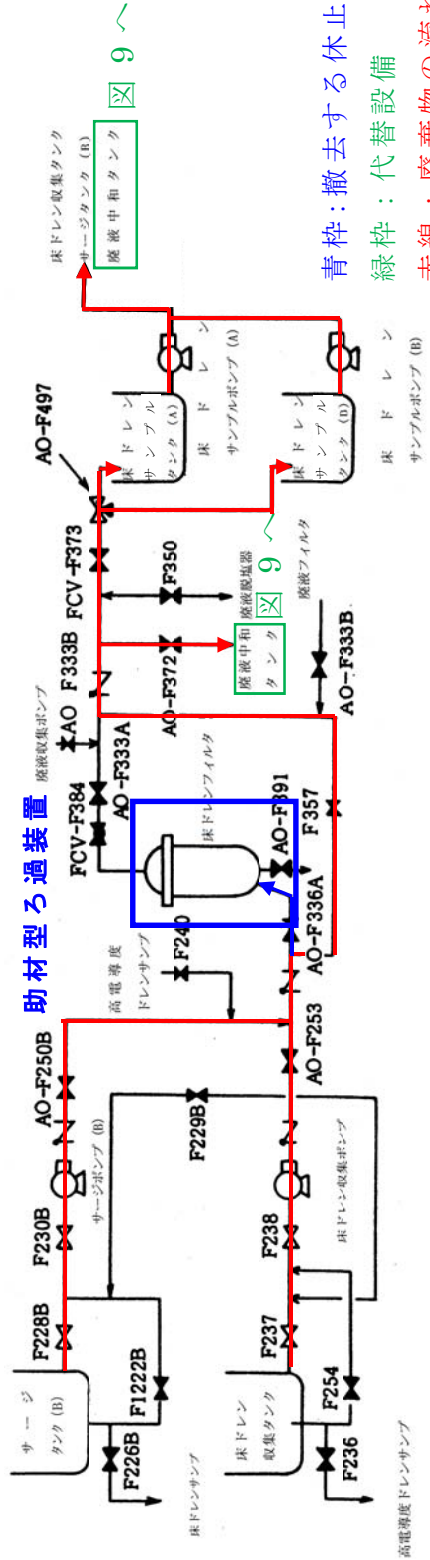
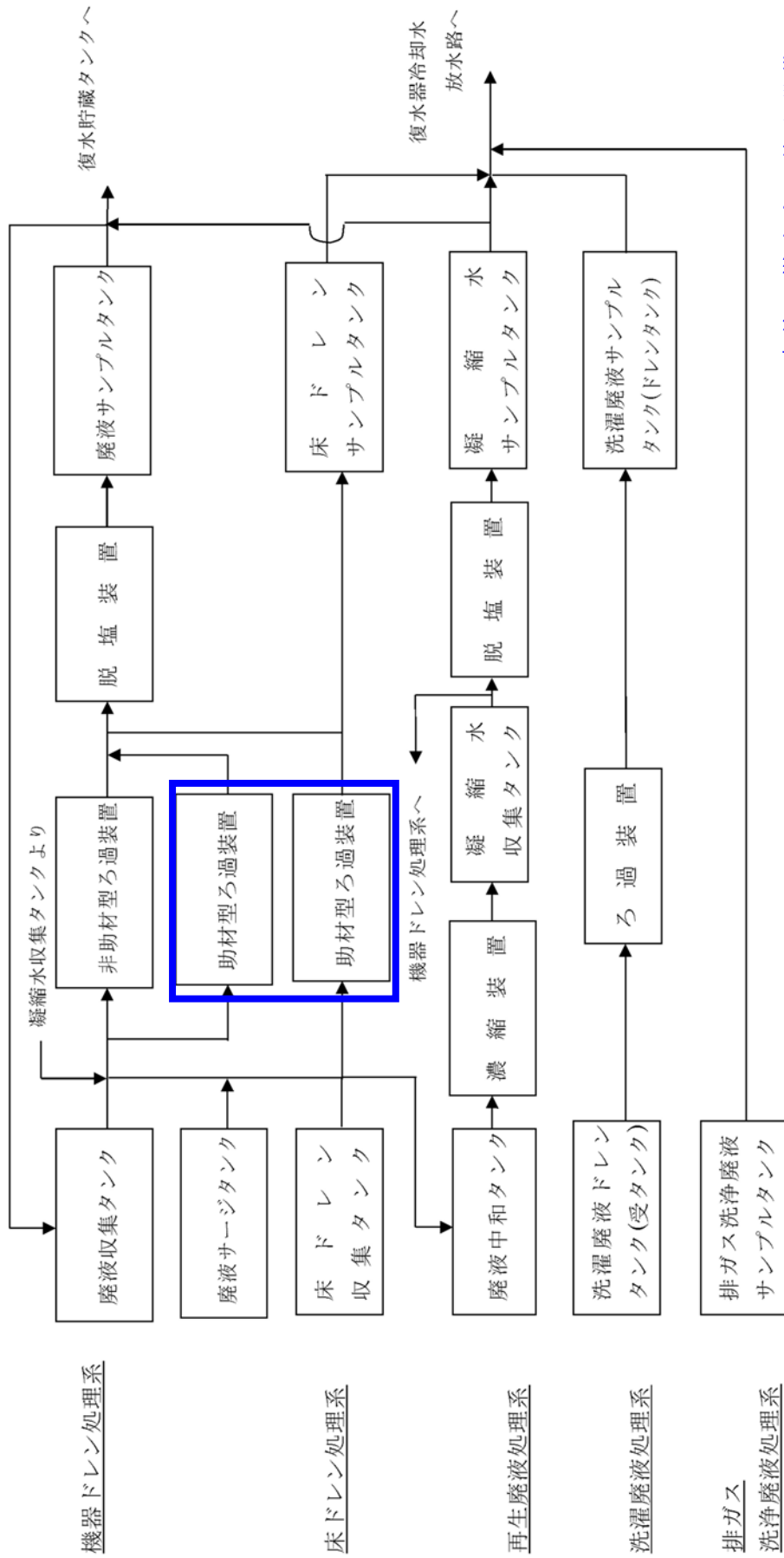


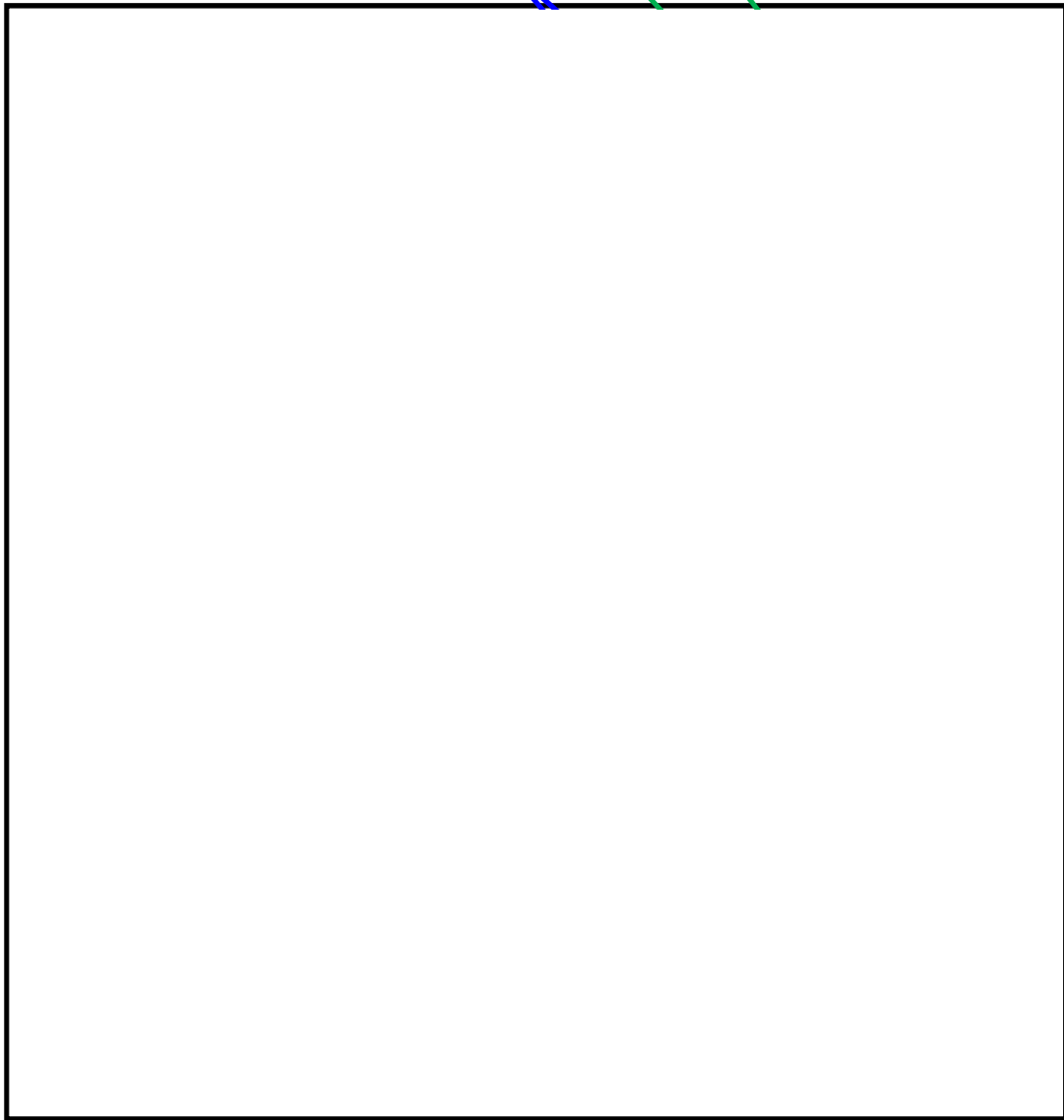
図 4 床ドレン処理系統図

青枠：撤去する休止設備
 緑枠：代替設備
 赤線：廃棄物の流れ



青枠：撤去する休止設備

図 5 液体廃棄物処理系統概要図（設置許可申請書 第 10.2-1 図）



セメントサイロ（屋外）

格納容器圧力逃がし装置

第二弁操作室

格納容器圧力逃がし装置

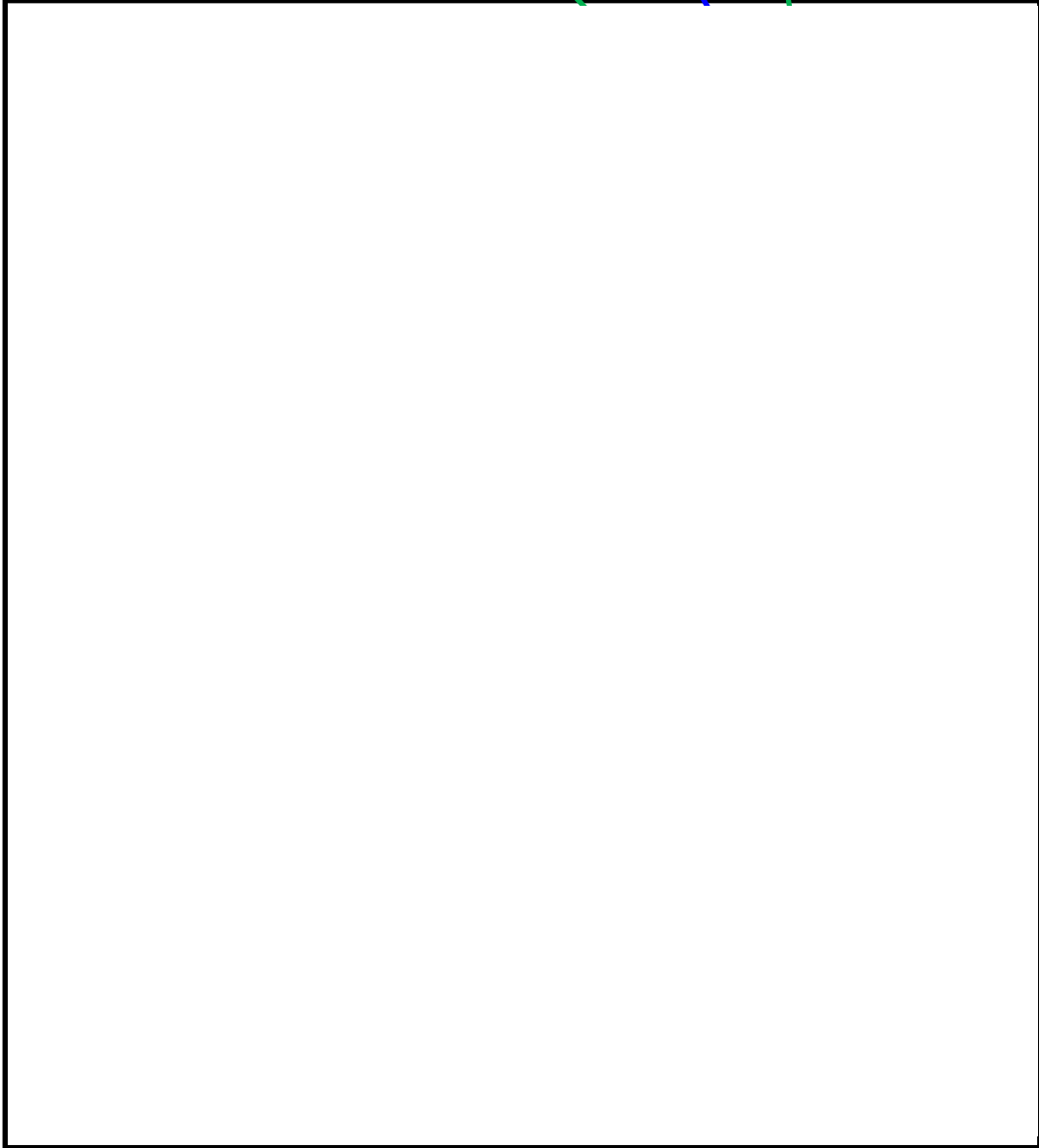
フィルタ装置入口水素濃度

青：撤去する

固化装置（セメント固化式）

緑：撤去後に新設する重大事故等
対処施設

図 6-1 撤去対象設備の設置場所



格納容器圧力逃がし装置
第二弁操作室空ポンベユニット

アウトドラムミキサー
スラッジコンベア

緊急用直流 125V MCC

青：撤去する

固化装置（セメント固化式）

緑：撤去後に新設する重大事故等
対処施設

図 6-2 撤去対象設備の設置場所

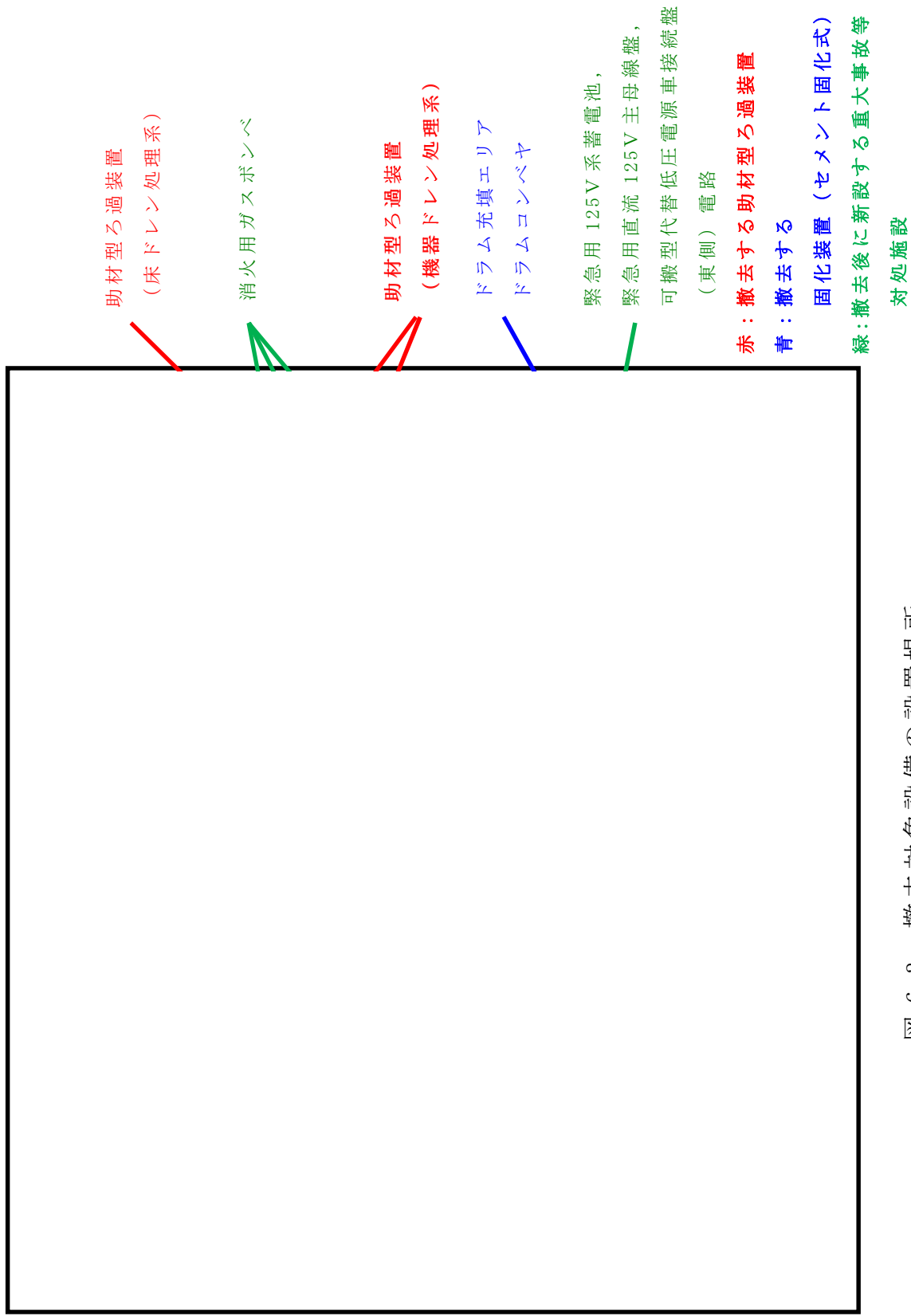


図 6-3 撤去対象設備の設置場所

表 1 休止設備によるこれまでの処理実績と現在の状況

休止設備	処理対象廃棄物	処理実績	現在の状況
固化装置 (セメント固化式)	機器ドレン廃液及び床ドレン廃液を処理した際に発生する濃縮廃液	処理実績あり (セメント固化体を製作)	処理方法：減容固化設備にて処理 セメント混練固化装置にて処理 処理状況：処理中
	原子炉冷却材浄化系及び燃料プールの冷却浄化系フィルタ脱塩器から発生する使用済粉末樹脂	処理実績なし	処理方法：使用済粉末樹脂貯蔵タンクに移送し貯蔵 貯蔵状況：貯蔵中
	非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ（クラッドスラリー）	処理実績なし	処理方法：クラッドスラリータンクに移送し貯蔵 貯蔵状況：貯蔵中
	復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置から発生する使用済粒状樹脂	処理実績なし	処理方法：使用済樹脂貯蔵タンクに移送し貯蔵 満杯になる前に雑固体廃棄物焼却設備にて焼却 貯蔵状況：貯蔵中
	助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ	処理実績なし	処理方法：廃液・床ドレンスラッジ貯蔵タンクに移送し貯蔵 満杯になる前に雑固体廃棄物焼却設備にて焼却 貯蔵状況：貯蔵中

休止設備	処理対象廃棄物	処理実績	現在の状況
助材型ろ過装置 (機器ドレン処理系)	機器ドレン廃液	処理実績あり (廃スラッジを廃液スラッジ貯蔵タンクに貯蔵)	処理方法：非助材型ろ過装置にて処理 処理状況：処理中
助材型ろ過装置 (床ドレン処理系)	床ドレン廃液	処理実績あり (廃スラッジを床ドレンスラッジ貯蔵タンクに貯蔵)	処理方法：再生廃液処理系にて処理 処理状況：処理中

休止設備を撤去することに関する規制要求事項への適合性に関する説明

休止設備撤去後の状態において、次の各号に掲げる規則に定められた要求事項を満足することを表 2～4 により確認した。

- ・ 実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則（表 2）
- ・ 実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則（表 3）
- ・ 実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則（表 4）

表 2 「実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則」における休止設備に関する確認結果

実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則 (工場又は事業所において行われる廃棄)	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>第九十条 法第四十三条の三の二十二第一項の規定により、発電用原子炉設置者は、発電用原子炉施設を設置した工場又は事業所において行われる放射性廃棄物の廃棄に関し、次の各号に掲げる措置を講じなければならない。</p> <p style="text-align: center;">〔第一号～第五号 省略〕</p> <p>六 液体状の放射性廃棄物は、次に掲げるいずれかの方法により廃棄すること。</p> <p>イ 排水施設によって排出すること。</p> <p>ロ 障害防止の効果を持った廃液槽に保管廃棄すること。</p>	<p>第六号はいずれかの方法による廃棄を要求しているが、「休止設備」を撤去しても、代替の処理がなされるため、要求を満足している。</p> <p>・ 休止設備の撤去に伴い、東海第二設置許可申請書の次の記載における下線部を削除する変更をしても、第六号ロの要求を満足している。 <u>「濃縮廃液は、濃縮廃液貯蔵タンクに貯蔵した後、固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。あるいは、減容固化設備で乾燥・造粒して容器に詰め減容固化体貯蔵室に貯蔵するか、貯蔵した後、セメント混練固化装置でドラム缶内に固化材（セメント）と混練して固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。」</u></p>

実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>ハ 容器に封入し、又は容器と一体的に固型化して障害防止の効果を持った保管廃棄施設に保管廃棄すること。</p> <p>ニ 障害防止の効果を持った焼却設備において焼却すること。</p> <p>ホ 障害防止の効果を持った固型化設備で固型化すること。</p>	<p>「原子炉冷却材浄化系及び燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩器から発生する使用済粉末樹脂は使用済粉末樹脂貯蔵タンクに、また、非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジはクラッドスラリタンクに貯蔵するか、又は貯蔵し放射能を減衰させた後、<u>固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置から発生する使用済粒状樹脂並びに助材型ろ過装置から発生する廃スラッジは、使用済樹脂貯蔵タンク、廃液スラッジ貯蔵タンク若しくは床ドレンスラッジ貯蔵タンクに貯蔵するか、又は貯蔵し放射能を減衰させた後、雑固体廃棄物焼却設備で焼却するか、<u>固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。</u>」</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 休止設備「<u>固化装置（セメント固化式）</u>」の撤去に伴い、固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管せず、第六号ロの要求を満足する各タンクに貯蔵する。このため、第六号の要求「液体状の放射性廃棄物は、次に掲げるいずれかの方法により廃棄すること。」を満足している。なお、濃縮廃液については、「<u>濃縮廃液貯蔵タンクに貯蔵した後、<u>固化装置（セメント固化式）</u>で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。あるいは、<u>減容固化設備で乾燥・造粒して容器に詰め減容固化体貯蔵室に貯蔵するか、貯蔵した後、セメント混練固化装置でドラム缶内に固化材（セメント）と混練して固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。</u>」ことから、下線部の休止設備「<u>固化装置（セメント固化式）</u>」を撤去しても、第六号ハの要求を満足している。</u> ・ 濃縮廃液については、「<u>濃縮廃液貯蔵タンクに貯蔵した後、<u>固化装置（セメント固化式）</u>で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵</u>

実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>七 前号イの方法により廃棄する場合は、排水施設において、ろ過、蒸発、イオン交換樹脂法等による吸着、放射能の時間による減衰、多量の水による希釈等の方法によって排水中の放射性物質の濃度をできるだけ低下させること。この場合、排水口又は排水監視設備において排水中の放射性物質の濃度を監視することにより、周辺監視区域の外側の境界における水中の放射性物質の濃度が原子力規制委員会の定める濃度限度を超えないようにすること。</p> <p>八 第六号ロの方法により廃棄する場合において、当該保管廃棄された放射性廃棄物の崩壊熱等により著しい過熱が生じるおそれがあるときは、冷却について必要な措置を講ずること。</p> <p>九 第六号ハの方法により廃棄する場合において、放射性廃棄物を容器に封入して行うときは、当該容器は、次に掲げる基準に適合するものであること。</p> <p>イ 水が浸透しにくく、腐食に耐え、かつ、放射性廃棄物が漏れにくい構造であること。</p> <p>ロ き裂又は破損が生じるおそれがないものであること。</p> <p>ハ 容器のふたが容易に外れないものであること。</p> <p>十 第六号ハの方法により廃棄する場合において、放射性廃棄物を容器と一体的に固型化して行うときは、固型化した放射性廃棄物と一体化した容器が放射性廃棄物の飛散又は漏れを防止できるものであること。</p>	<p>庫に貯蔵保管する。あるいは、減容固化設備で乾燥・造粒して容器に詰め減容固化体貯蔵室に貯蔵するか、貯蔵した後、セメント混練固化装置でドラム缶内に固化材（セメント）と混練して固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。」ため、代替設備があることから、第六号ホの要求を満足している。</p> <ul style="list-style-type: none"> 第六号の要求「液体状の放射性廃棄物は、次に掲げるいずれかの方法により廃棄すること。」を満足している。 第七号は、排水中の放射性物質の濃度を低下させるための処理を要求している。休止設備の「助材型ろ過装置」（機器ドレン処理系及び床ドレン処理系）の撤去に伴い、この設備に係る記載を削除する変更に伴い、「非助材型ろ過装置」（機器ドレン処理系）及び「再生廃液処理系」（床ドレン処理系）の設計を変更せず、代替することから、要求を満足している。 液体状の放射性廃棄物及び固体状の放射性廃棄物において、著しい過熱が生じるおそれがないことから、第八号の要求は該当しない。 第九号は濃縮廃液貯蔵タンクに貯蔵した濃縮廃液の処理（セメント混練固化装置による固化）時の容器に対する要求となっており、従前からのドラム缶に収納し、廃棄する設計を変更しないため、要求を満足している。 第十号の要求の対象とする廃棄は、ドラム缶内に固型化処理することであり、従前からの固型化処理を変更しないため、要求を満足している。

実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>十一 第六号ハの方法により廃棄する場合において、放射性廃棄物を障害防止の効果を持った保管廃棄施設に保管廃棄するときは、次によること。</p> <p>イ 放射性廃棄物を容器に封入して保管廃棄する場合は、封入された放射性廃棄物の全部を吸収できる材料で当該容器を包むこと、封入された放射性廃棄物の全部を収容できる受皿を設けること等当該容器にき裂又は破損が生じた場合の汚染の広がりの防止について必要な措置を講ずること。</p> <p>ロ 当該保管廃棄された放射性廃棄物の崩壊熱等により著しい過熱が生じるおそれのある場合は、冷却について必要な措置を講ずること。</p> <p>ハ 放射性廃棄物を封入し、又は固型化した放射性廃棄物と一体化した容器には、放射性廃棄物を示す標識を付け、かつ、当該放射性廃棄物に関して第六十七条の規定に基づき記録された内容と照合でききような整理番号を表示すること。</p> <p>ニ 当該保管廃棄施設には、その目につきやすい場所に管理上の注意事項を掲示すること。</p> <p>十二 固体状の放射性廃棄物は、次に掲げるいづれかの方法により廃棄すること。</p> <p>イ 障害防止の効果を持った焼却設備において焼却すること。</p> <p>ロ 容器に封入し、又は容器と一体的に固型化して障害防止の効果を持った保管廃棄施設に保管廃棄すること。</p> <p>ハ ロの方法により廃棄することが著しく困難な大型機械等の放射性廃棄物又は放射能の時間による減衰を必要とする放射性廃棄物については、障害防止の効果を持った保管廃棄施設に保管廃棄すること。</p> <p>十三 前号ロに規定する方法により廃棄する場合において、放射性廃棄物を容器に封入して行うときは、第九号及び第十一号（イを除く。）に規定する例によること。</p> <p>十四 第十二号ロに規定する方法により廃棄する場合において放射性廃棄物を容</p>	<p>・第十一号の要求の対象とする保管廃棄は、固体廃棄物貯蔵庫への貯蔵保管のことであり、従前からの貯蔵保管を変更しないため、要求を満足している。</p> <p>・第十二号の要求の対象となる固体状の放射性廃棄物は、使用済樹脂貯蔵タンクに貯蔵した使用済粒状樹脂、廃液スラッジ貯蔵タンクに貯蔵した廃スラッジ及び床ドレンスラッジ貯蔵タンクに貯蔵した廃スラッジであり、従前からの変更をしていないため、要求を満足している。</p> <p>・第十二号ハの要求に該当する保管廃棄はないことから、適合性の確認を要しない。</p> <p>・第十三号が要求する廃棄とは、固体状の放射性廃棄物の廃棄に係る要求内容であり、第九号及び第十一号（イを除く。）の要求に対応する運用と同じであるため、要求を満足している。</p> <p>・第十四号が要求する廃棄とは、固体状の放射性廃棄物の固型化に係る要求内容</p>

<p>実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則</p> <p>器と一体的に固型化して行うときは、第十号及び第十一号（イを除く。）に規定する例によること。</p> <p>十五 第十二号ハに規定する方法により廃棄する場合には、第十一号ロ及びニに規定する例によること。</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p> <p>であり、第九号及び第十一号（イを除く。）の要求に対応する運用と同じであるため、要求を満足している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休止設備撤去に関する適合性の確認において、第十二号ハの要求に該当する保管廃棄はないことから、第十五号への適合性確認を要しない。
--	---

表3 「実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則」における休止設備に関する確認結果

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p> <p>(放射性廃棄物の処理施設)</p> <p>第二十七条 工場等には、次に掲げるところにより、通常運転時において放射性廃棄物（実用炉規則第二項第二号に規定する放射性廃棄物をいう。以下同じ。）を処理する施設（安全施設に係るものに限る。以下この条において同じ。）を設けなければならない。</p> <p>一 周辺監視区域の外の空気中及び周辺監視区域の境界における水中の放射性物質の濃度を十分に低減できるよう、発電用原子炉施設において発生する放射性廃棄物を処理する能力を有するものとする。</p> <p>二 液体状の放射性廃棄物の処理に係るものにあつては、放射性物質を処理する施設から液体状の放射性廃棄物が漏えいすることを防止し、及び工場等外へ液体状の放射性廃棄物が漏えいすることを防止できるものとする。</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・機器ドレン廃液の処理 <ul style="list-style-type: none"> 機器ドレン廃液に関しては、次の2種類の処理(a)及び(b)について許可されている。今回、助材型ろ過装置(図3参照)を撤去するため、(b)に示す処理を削除するが、(a)に示す処理が可能であるため、第一号の基準への適合性に影響を及ぼさない。また、(b)に示す助材型ろ過装置を設置した区画内において、液体状の放射性廃棄物を処理しないため、漏えい防止に係る設備(漏えい検出器及び設備周辺の堰)を撤去するとともに、助材型ろ過装置と接続した液体状の放射性廃棄物の移送配管は、切断撤去(必要に応じて部分的に切断撤去)及び開口部を閉止する。なお、(a)に示す処理における漏えい防止
--	---

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p> <p>に係る設備（漏えい検出器，独立した区画内での設置，設備周辺の堰等）の設計を変更するものではない。このため，第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p> <p>(a) 電磁ろ過器及び超ろ過器（透過膜式）からなる非助材型ろ過装置（二十七条設備）で処理する。</p> <p>(b) 助材型ろ過装置（二十七条設備）で処理する。</p> <p>・床ドレン廃液の処理</p> <p>床ドレン廃液に関しては，次の2種類の処理(a)及び(b)について許可されている。今回，助材型ろ過装置（図4参照）を撤去するため，(b)に示す処理を削除するが，(a)に示す処理が可能であるため，第一号の基準への適合性に影響を及ぼさない。また，(b)に示す助材型ろ過装置を設置した区画内において，液体状の放射性廃棄物を処理しないため，漏えい防止に係る設備（漏えい検出器及び設備周辺の堰）を撤去するとともに，助材型ろ過装置と接続された液体状の放射性廃棄物の移送配管は，切断撤去（必要に応じて部分的に切断撤去）及び開口部を閉止する。なお，(a)に示す処理における漏えい防止に係る設備（漏えい検出器，独立した区画内での設置，設備周辺の堰等）の設計を変更するものではない。このため，第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p> <p>(a) 再生廃液処理系（二十七条設備）に移送して，濃縮処理する（図4，9及び10参照）。</p> <p>(b) 助材型ろ過装置（二十七条設備）で処理する。</p>
--	--

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p>
<p>三 固体状の放射性廃棄物の処理に係るものにおいては、放射性廃棄物を処理する過程において放射性物質が散逸し難いものとすること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・液体廃棄物処理系から発生する濃縮廃液 <ul style="list-style-type: none"> 濃縮廃液に関しては、次の2種類の取扱い(a)及び(b)について許可されている。今回、固化装置(セメント固化式)(図2、6-1、6-2及び6-3参照)を撤去するため、(b)に示す処理・貯蔵保管を削除するが、(a)に示す処理・貯蔵保管が可能であるため、第一号及び第三号の基準への適合性に影響を及ぼさない。また、(b)に示す固化装置(セメント固化式)を設置した区画内において、液体状の放射性廃棄物を処理しないため、漏えい防止に係る設備(漏えい検出器及び設備周辺の堰)を撤去するとともに、固化装置(セメント固化式)と接続された液体状の放射性廃棄物の移送配管は、切断撤去(必要に応じて部分的に切断撤去)及び開口部を閉止する。なお、(a)に示す処理における漏えい防止に係る設備(漏えい検出器、独立した区画内での設置、設備周辺の堰等)の設計を変更するものではない。このため、第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。 <ul style="list-style-type: none"> (a) 濃縮廃液貯蔵タンクで放射能を減衰させた後、減容固化設備で、乾燥・造粒後、容器に詰めて減容固化体貯蔵室に貯蔵するか、貯蔵した後、セメント混練固化装置でドラム缶内に固化材(セメント)と混練して固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。(二十七条、二十八条設備) (b) 濃縮廃液貯蔵タンクで放射能を減衰させた後、固化装置(セメント固化式)で固化材(セメント)と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。(二十七条、二十八条設備) ・使用済樹脂(粉末、粒状)

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p>
	<p>① 原子炉冷却材浄化系及び燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩器から発生する使用済粉末樹脂に関しては、次の2種類の取扱い(a)及び(b)について許可されている。今回、固化装置(セメント固化式)を撤去するため、(b)に示す処理・貯蔵保管を削除することから、二十七条にて対象とする設備はなくなる。また、二十八条対象施設である使用済粉末樹脂貯蔵タンクに貯蔵するため使用済粉末樹脂の取扱いに問題はない。また、(b)に示す固化装置(セメント固化式)を設置した区画内において、液体状の放射性廃棄物を処理しないため、漏えい防止に係る設備(漏えい検出器及び設備周辺の堰)を撤去するとともに、固化装置(セメント固化式)と接続された液体状の放射性廃棄物の移送配管は、切断撤去(必要に応じて部分的に切断撤去)及び開口部を閉止する。</p> <p>(a) 使用済粉末樹脂貯蔵タンクに貯蔵する。(二十八条設備)</p> <p>(b) 使用済粉末樹脂貯蔵タンクに貯蔵し放射能を減衰させた後、固化装置(セメント固化式)で固化材(セメント)と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。(二十七条、二十八条設備)</p> <p>② 復水脱塩装置及び液体廃棄物処理系脱塩装置から発生する使用済粒状樹脂に関しては、次の3種類の取扱い(a)、(b)及び(c)について許可されている。今回、固化装置(セメント固化式)を撤去するため、(c)に示す処理・貯蔵保管を削除するが、(b)に示す処理が可能であり、第一号及び第三号の基準への適合性に影響を及ぼさない。また、(c)に示す固化装置(セメント固化式)を設置した区画内において、液体状の放射性廃棄物を処理しないため、漏えい防止に係る設備(漏えい検出器及び設備周辺の堰)を撤去す</p>

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p> <p>るとともに、固化装置（セメント固化式）と接続された液体状の放射性廃棄物の移送配管は、切断撤去（必要に応じて部分的に切断撤去）及び開口部を閉止する。なお、(b)に示す処理における漏えい防止に係る設備（漏えい検出器、独立した区画内での設置、設備周辺の堰等）の設計を変更するものではない。このため、第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p> <p>(a) 使用済樹脂貯蔵タンクに貯蔵する。（二十八条設備）</p> <p>(b) 使用済樹脂貯蔵タンクに貯蔵し放射能を減衰させた後、雑固体廃棄物焼却設備で焼却する。（二十七条、二十八条設備）</p> <p>(c) 固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。（二十七条、二十八条設備）</p> <p>・廃スラッジ</p> <p>① 非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジに関しては、次の2種類の取扱い(a)及び(b)について許可されている。今回、固化装置（セメント固化式）を撤去するため、(b)に示す処理・貯蔵保管を削除することから、二十七条にて対象とする設備はなくなる。なお、非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジの取扱いに問題はない。また、(b)に示す固化装置（セメント固化式）を設置した区画内において、液体状の放射性廃棄物を処理しないため、漏えい防止に係る設備（漏えい検出器及び設備周辺の堰）を撤去するとともに、固化装置（セメント固化式）と接続された液体状の放射性廃棄物の移送配管は、切断撤去（必要に応じて部分的に切断撤去）及び開口部を閉止する。</p> <p>(a) クラッドスラリタンクに貯蔵する。（二十八条設備）</p>
--	--

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p> <p>(b) クラッドスラリタンクに貯蔵し放射能を減衰させた後、固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。（二十七条、二十八条設備）</p> <p>② 助材型ろ過装置（機器ドレン処理系）（図3、5及び6-3参照）から発生する廃スラッジに関しては、次の3種類の取扱い(a)、(b)及び(c)について許可されている。今回、固化装置（セメント固化式）を撤去するため、(c)に示す処理・貯蔵保管を削除するが、(b)に示す処理が可能であり、第一号及び第三号の基準への適合性に影響を及ぼさない。また、(c)に示す固化装置（セメント固化式）を設置した区画内において、液体状の放射性廃棄物を処理しないため、漏えい防止に係る設備（漏えい検出器及び設備周辺の堰）を撤去するとともに、固化装置（セメント固化式）と接続された液体状の放射性廃棄物の移送配管は、切断撤去（必要に応じて部分的に切断撤去）及び開口部を閉止する。なお、(b)に示す処理における漏えい防止に係る設備（漏えい検出器、独立した区画内での設置、設備周辺の堰等）の設計を変更するものではない。このため、第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p> <p>(a) 廃液スラッジ貯蔵タンクに貯蔵する。（二十八条設備）</p> <p>(b) 廃液スラッジ貯蔵タンクに貯蔵し放射能を減衰させた後、雑固体廃棄物焼却設備で焼却する。（二十七条、二十八条設備）</p> <p>(c) 固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し、固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。（二十七条、二十八条設備）</p>
--	---

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p>
<p>(放射性廃棄物の貯蔵施設)</p> <p>第二十八条 工場等には、次に掲げるところにより、発電用原子炉施設において発生する放射性廃棄物を貯蔵する施設（安全施設に係るものに限る。）を設けなければならない。</p> <p>一 放射性廃棄物が漏えいし難いものとすること。</p> <p>二 固体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備を設けるものにあつては、放射性廃棄物による汚染が広がらないものとすること。</p>	<p>③ 助材型ろ過装置（床ドレン処理系）（図4、5及び6-3参照）から発生する廃スラッジに関しては、次の3種類の取扱い(a)、(b)及び(c)について許可されている。今回、固化装置（セメント固化式）を撤去するため、(c)に示す処理・貯蔵保管を削除するが、(b)に示す処理が可能であり、第一号及び第三号の基準への適合性に影響を及ぼさない。また、固化装置（セメント固化式）を撤去するが、漏えい防止に係る設備（漏えい検出器、独立した区画内での設置、設備周辺の堰等）の設計を変更するものではなく、固化装置（セメント固化式）と接続された廃スラッジの移送配管は、切断撤去（必要に応じて部分的に切断撤去）及び開口部を閉止するため、第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p> <p>(a) 床ドレンスラッジ貯蔵タンクに貯蔵する。（二十八条設備）</p> <p>(b) 床ドレンスラッジ貯蔵タンクに貯蔵し放射能を減衰させた後、雑固体廃棄物焼却設備で焼却する。（二十七条、二十八条設備）</p> <p>(c) 固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し、固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。（二十七条、二十八条設備）</p> <p>八条設備)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・使用済粉末樹脂及び非助材型ろ過装置からの廃スラッジは、今後も以下に示す各タンクに貯蔵し、設計を変更しないため、第一号及び第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。 使用済粉末樹脂：使用済粉末樹脂貯蔵タンク（二十八条設備） 非助材型ろ過装置からの廃スラッジ：クラッドスラリタンク（二十八条設備）

<p>実用発電用原子炉及びその附属施設の位置、構造及び設備の基準に関する規則</p>	<p>休止設備の撤去に関する適合性確認結果</p> <ul style="list-style-type: none"> • 基準の解釈により、本条における貯蔵は、「将来的に発電用原子炉施設から発生する放射性固体廃棄物の発生量及び搬出量を考慮して放射性固体廃棄物を貯蔵及び管理できること」としている。撤去した設備は、ドラム缶等の容器に収納することから放射性物質が漏えいし難く、且つ放射性物質による汚染が広がらない。また、これらの廃棄物を固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管しても、貯蔵容量以下に管理できることから、第一号及び第二号の基準への適合性に影響を及ぼさない。 • 固体廃棄物貯蔵庫 A（東海発電所と共用） • 固体廃棄物貯蔵庫 B（東海発電所と共用）
--	---

表 4 「実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則」における休止設備に関する確認結果

実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>(廃棄物処理設備等)</p> <p>第三十九条 工場等には、次に定めるところにより放射性廃棄物を処理する設備（排気筒を含み、次条及び第四十三条に規定するものを除く。）を施設しなければならぬ。</p> <p>一 周辺監視区域の外の空气中及び周辺監視区域の境界における水中の放射性物質の濃度が、それぞれ原子力規制委員会の定める濃度限度以下になるように発電用原子炉施設において発生する放射性廃棄物を処理する能力を有するものであること。</p> <p>二 放射性廃棄物以外の廃棄物を処理する設備と区別して施設すること。ただし、</p>	<p>• 第一号は、排水中の放射性物質の濃度を低下させるための処理を要求している。休止設備の「助材型ろ過装置」（機器ドレン処理系及び床ドレン処理系）の撤去後も、「非助材型ろ過装置」（機器ドレン処理系）及び「再生廃液処理系」（床ドレン処理系）で処理することから、第1項第一号の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p> <p>• 「非助材型ろ過装置」（機器ドレン処理系）及び「再生廃液処理系」（床ドレン処</p>

実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>放射性廃棄物以外の流体状の廃棄物を流体状の放射性廃棄物を処理する設備に導く場合において、流体状の放射性廃棄物が放射性廃棄物以外の廃棄物を取り扱う設備に逆流するおそれがない場合は、この限りでない。</p>	<p>理系) の設計を変更しないことから、第1項第二号、第三号、第五号及び第六号の基準への適用性に影響を及ぼさない。</p>
<p>三 放射性廃棄物が漏えいし難い構造であり、かつ、放射性廃棄物に含まれる化学薬品の影響その他の負荷により著しく腐食しないものであること。</p>	
<p>四 気体状の放射性廃棄物を処理する設備は、第四十三条第三号の規定に準ずるほか、排気筒の出口以外の箇所において気体状の放射性廃棄物を排出しないこと。</p>	
<p>五 流体状の放射性廃棄物及び原子炉冷却材圧力バウンダリ内に施設されたものから発生する高放射性の固体状の放射性廃棄物を工場等内において運搬するための容器は、取扱中における衝撃その他の負荷に耐え、かつ、容易に破損しないものであること。ただし、管理区域内においてのみ使用されるものについては、この限りでない。</p>	
<p>六 前号の容器は、内部に放射性廃棄物を入れた場合に、放射線障害を防止するため、その表面の線量当量率及びその表面から一メートルの距離における線量当量率が原子力規制委員会の定める線量当量率を超えないよう、遮蔽できるものであること。ただし、管理区域内においてのみ使用されるものについては、この限りでない。</p>	
<p>2 流体状の放射性廃棄物を処理する設備が設置される放射性廃棄物処理施設(流体状の放射性廃棄物の漏えいが拡大するおそれがある部分に限る。以下この項において同じ。)は、次に定めるところにより施設しなければならない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 機器ドレン廃液及び床ドレン廃液を処理する「助材型ろ過装置」(機器ドレン処理系及び床ドレン処理系)を撤去するが、漏えい防止に係る設備(漏えい検出器、独立した区画内での設置、設備周辺の堰等)の設計を変更するものではなく、助材型ろ過装置に接続された機器ドレン廃液及び床ドレン廃液の移送配管の切断撤去(必要に応じて部分的に切断撤去)及び開口部を閉止するため、第2項第一号、第二号、第三号及び第四号の基準への適合性に影響しない。
<p>一 放射性廃棄物処理施設内部の床面及び壁面は、流体状の放射性廃棄物が漏えいし難い構造であること。</p> <p>二 放射性廃棄物処理施設内部の床面は、床面の傾斜又は床面に設けられた溝の</p>	

実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>傾斜により流体状の放射性廃棄物が排液受け口に導かれる構造であり、かつ、流体状の放射性廃棄物（気体状のものを除く。以下同じ。）を処理する設備の周辺部には、流体状の放射性廃棄物の漏えいの拡大を防止するための堰が施設されていること。</p> <p>三 放射性廃棄物処理施設外に通じる出入口又はその周辺部には、流体状の放射性廃棄物が放射性廃棄物処理施設外へ漏えいすることを防止するための堰が施設されていること。ただし、放射性廃棄物処理施設内部の床面が隣接する発電用原子炉施設の床面又は地表面より低い場合であって、放射性廃棄物処理施設外へ漏えいするおそれがない場合は、この限りでない。</p> <p>四 工場等外に排水を排出する排水路（湧水に係るものであって放射性物質により汚染するおそれがある管理区域内に開口部がないもの並びに排水監視設備及び放射性物質を含む排水を安全に処理する設備を施設するものを除く。）上に放射性廃棄物処理施設内部の床面がないよう、施設すること。</p> <p>3 第一項第五号の流体状の放射性廃棄物を運搬するための容器は、第二項第三号に準じて流体状の放射性廃棄物の漏えいの拡大を防止するように施設しなければならぬ。ただし、管理区域内においてのみ使用されるもの及び漏えいするおそれがない構造のものは、この限りでない。</p> <p>(廃棄物貯蔵設備等)</p> <p>第四十条 放射性廃棄物を貯蔵する設備は、次に定めるところにより施設しなければならない。</p> <p>一 通常運転時に発生する放射性廃棄物を貯蔵する容量があること。</p>	<p>・移送水と混合され流体状の放射性廃棄物となっている廃スラッジを処理する休止設備の固化装置（セメント固化式）を撤去するが、漏えい防止に係る設備（漏えい検出器、独立した区画内での設置、設備周辺の堰等）の設計を変更するものではなく、固化装置（セメント固化式）に接続された移送配管の切断撤去（必要に応じて部分的に切断撤去）及び開口部を閉止するため、第2項第一号、第二号、第三号及び第四号の基準への適合性に影響しない。</p> <p>・休止設備の撤去に伴い、液体状の放射性廃棄物を運搬する運用を採用しないことから、第3項の基準への適合性に影響しない。</p> <p>・濃縮廃液は、「濃縮廃液貯蔵タンクに貯蔵した後、固化装置（セメント固化式）で固化材（セメント）と混合してドラム缶内に固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。あるいは、減容固化設備で乾燥・造粒して容器に詰め減容固化体貯</p>

実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>二 放射性廃棄物が漏えいし難い構造であること。</p> <p>三 崩壊熱及び放射線の照射により発生する熱に耐え、かつ、放射性廃棄物に含まれる化学薬品の影響その他の負荷により著しく腐食しないこと。</p> <p>2 固体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備が設置される発電用原子炉施設は、放射性廃棄物による汚染が広がらないように施設しなければならない。</p>	<p>蔵室に貯蔵するか、貯蔵した後、セメント混練固化装置でドラム缶内に固化材（セメント）と混練して固化し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管する。」ため、下線部の設備によって処理し固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵保管していることから、通常運転時に発生する濃縮廃液を貯蔵する容量を増加させる必要はなく、第一号の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p> <ul style="list-style-type: none"> 使用済粒状樹脂は、使用済樹脂貯蔵タンクに貯蔵し、放射能を減衰させた後、雑固体廃棄物焼却設備で焼却するため、休止設備「固化装置（セメント固化式）」の撤去に伴って、通常運転時に発生する使用済粒状樹脂を貯蔵する容量を増加させる必要がないことから、第一号の基準への適合性に影響を及ぼさない。 使用済粉末樹脂貯蔵タンク、クラッドストラスラタンクについては、これまでの発生実績を踏まえた貯蔵量予測により、貯蔵する十分な空き容量があることを確認したため、第一号の基準への適合性に影響を及ぼさない。 廃液スラッジ貯蔵タンク及び床ドレンスラッジ貯蔵タンクについては、貯蔵量が少なく、また、休止設備「助材型ろ過装置」（機器ドレン処理系及び床ドレン処理系）の撤去により廃棄物を新たに受け入れないことから、貯蔵する十分な空き容量があることを確認したため、第一号の基準への適合性に影響を及ぼさない。 濃縮廃液貯蔵タンク、使用済粉末樹脂貯蔵タンク、使用済樹脂貯蔵タンク、クラッドストラスラタンク、廃液スラッジ貯蔵タンク及び床ドレンスラッジ貯蔵タンク的设计を変更しないことから、第二号及び第三号の基準への適合性に影響を及ぼさない。 固体廃棄物貯蔵庫に貯蔵する固体状の放射性廃棄物はドラム缶等に詰めていること、使用済粉末樹脂を貯蔵する使用済粉末樹脂貯蔵タンク及び非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジを貯蔵するクラッドストラスラタンクを設置する施設

実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則	休止設備の撤去に関する適合性確認結果
<p>3 前条第二項の規定は、流体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備が設置される放射性廃棄物処理施設について準用する。この場合において、「流体状の放射性廃棄物を処理する設備」とあるのは「流体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備」と読み替えるものとする。</p>	<p>は、漏えい拡大防止のための設備（漏えい検出器，独立した区画内での設置，設備周辺の堰等）設置しているため，第2項の基準への適合性に影響を及ぼさない。</p>

休止設備の撤去後，残存する主な設備の概要

1. 減容固化設備及びセメント混練固化装置の概要

(1) 減容固化設備（図 7 参照）

濃縮廃液を，乾燥装置により水分を除去し乾燥させた後，造粒装置によって粒状に圧縮成形し，減容固化体（ペレット）に処理するための設備。

(2) セメント混練固化装置（図 8 参照）

減容固化設備で製作した減容固化体（ペレット）を粒径約 1mm～2mm 程度に粉碎し，セメント及び添加水とともにドラム缶に供給し，ドラム缶内で混練して均質固化体を製作するインドラムミキシング方式の固化装置。

2. 非助材型ろ過装置（機器ドレン処理系）の概要（図 3 参照）

非助材型ろ過装置は，電磁ろ過器及び超ろ過器（透過方式）で構成されている。

廃液収集タンクから，電磁ろ過器供給タンクへ機器ドレン廃液を受け入れた後，電磁ろ過器で磁性懸濁物を除去する。その後超ろ過器供給タンクに送り，廃液中に含まれる微細懸濁物を除去し，超ろ過膜により清澄な処理水だけが透過する。

3. 再生廃液処理系への移送（床ドレン処理系）の概要（図 4， 9， 10 参照）

再生廃液処理系へ移送し，廃液中和タンクにて中和した廃液を濃縮，蒸留処理する。

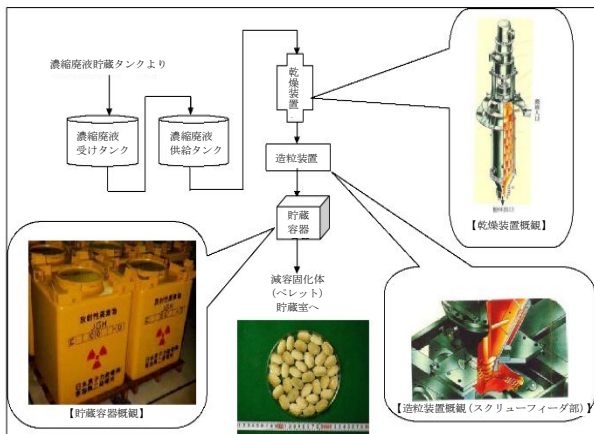


図7 減容固化設備の概要図

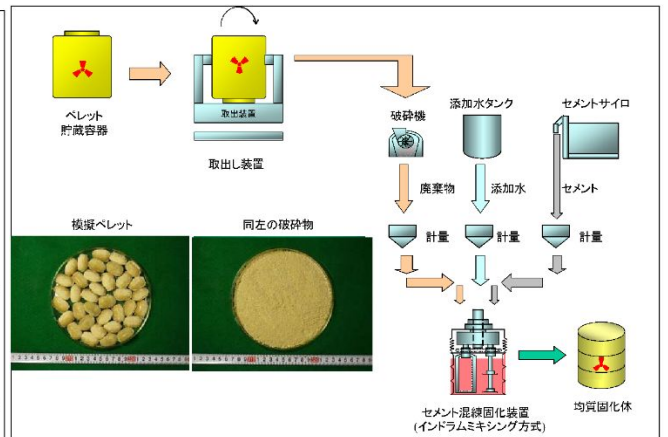


図8 セメント混練固化装置の概要図

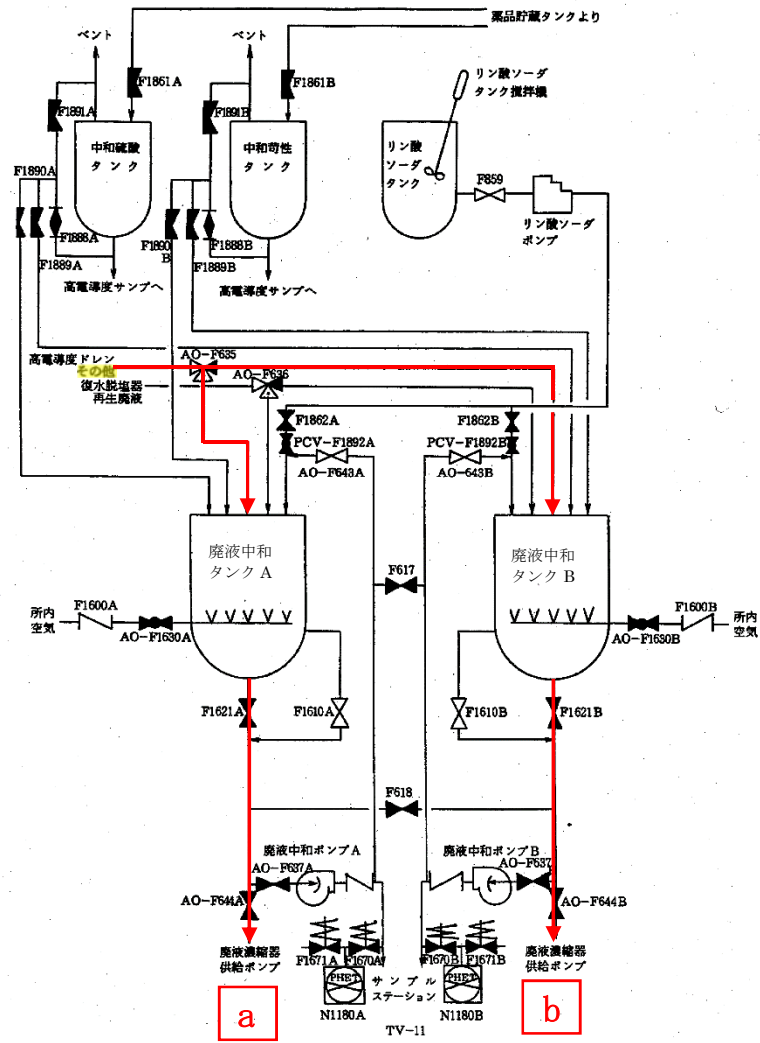
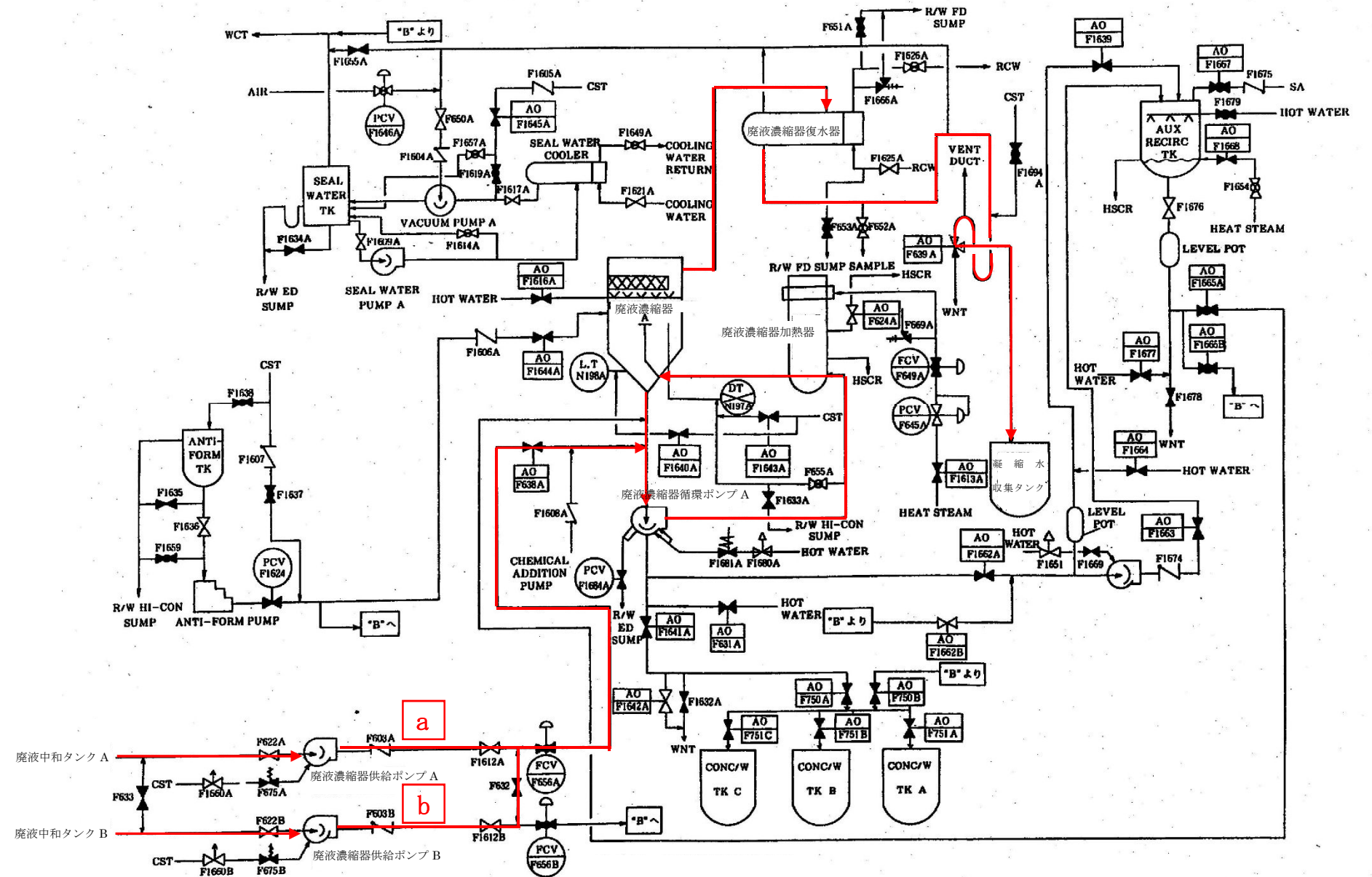


図9 床ドレン処理系（高電導度ドレン系）系統図



赤線：床ドレン廃液の流れ

図10 床ドレン処理系（再生廃液処理系）系統図

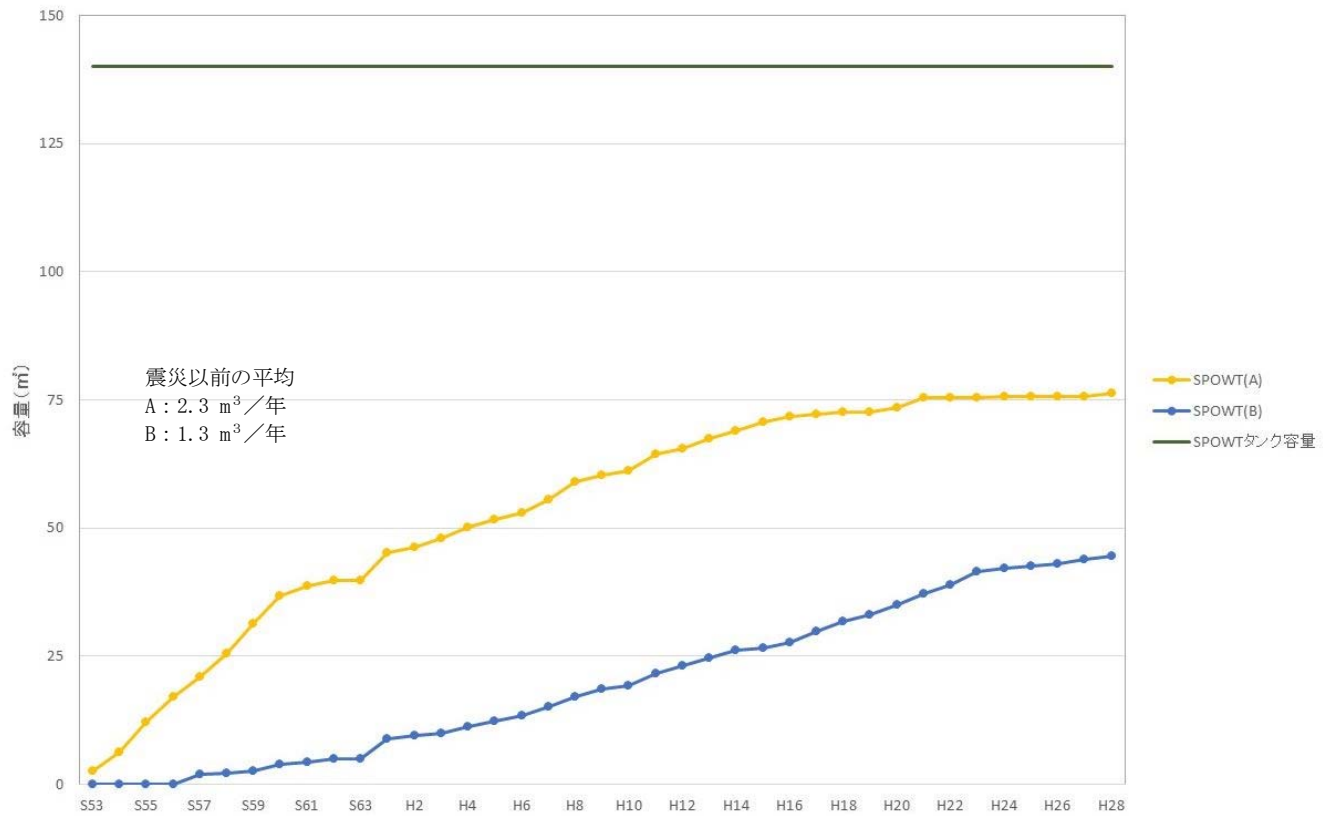


図 11 使用済粉末樹脂貯蔵タンク受入れ実績

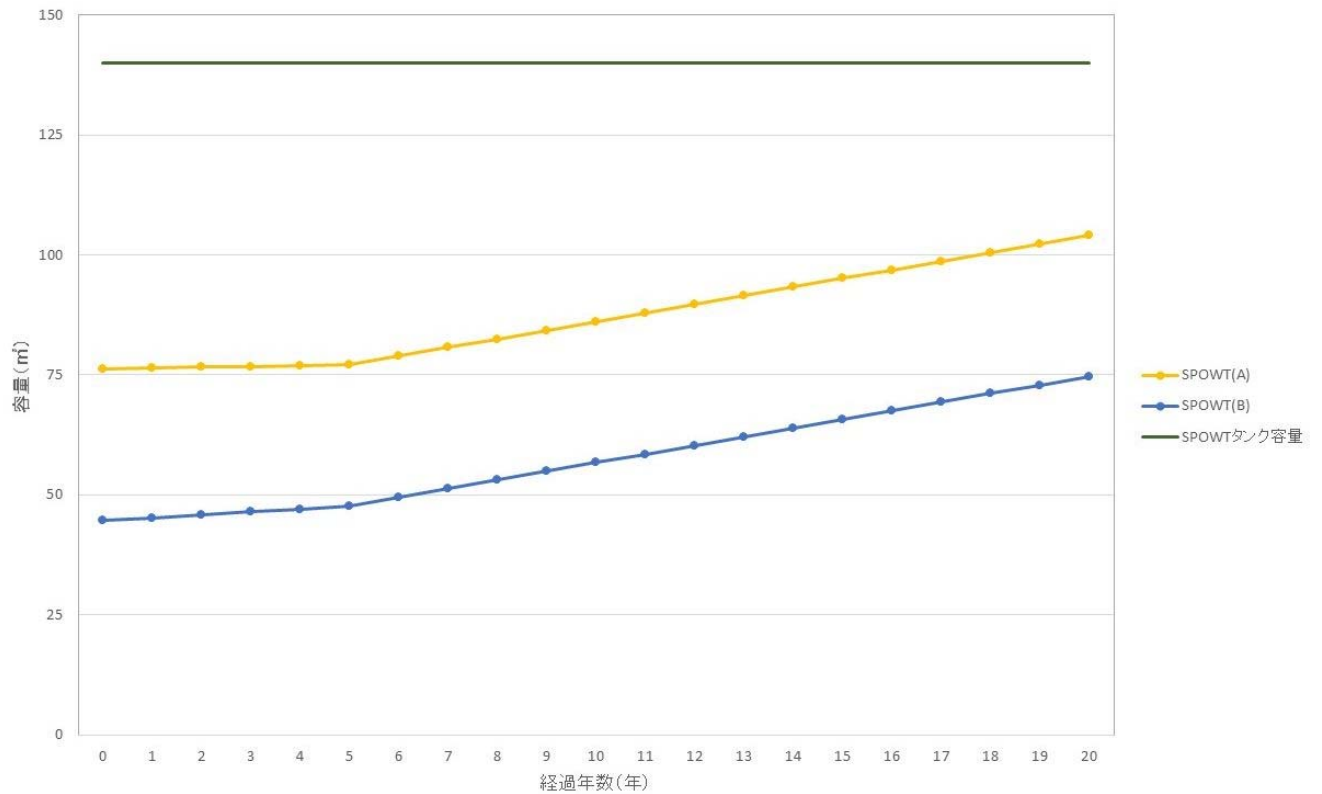


図 12 使用済粉末樹脂貯蔵タンク貯蔵量予想

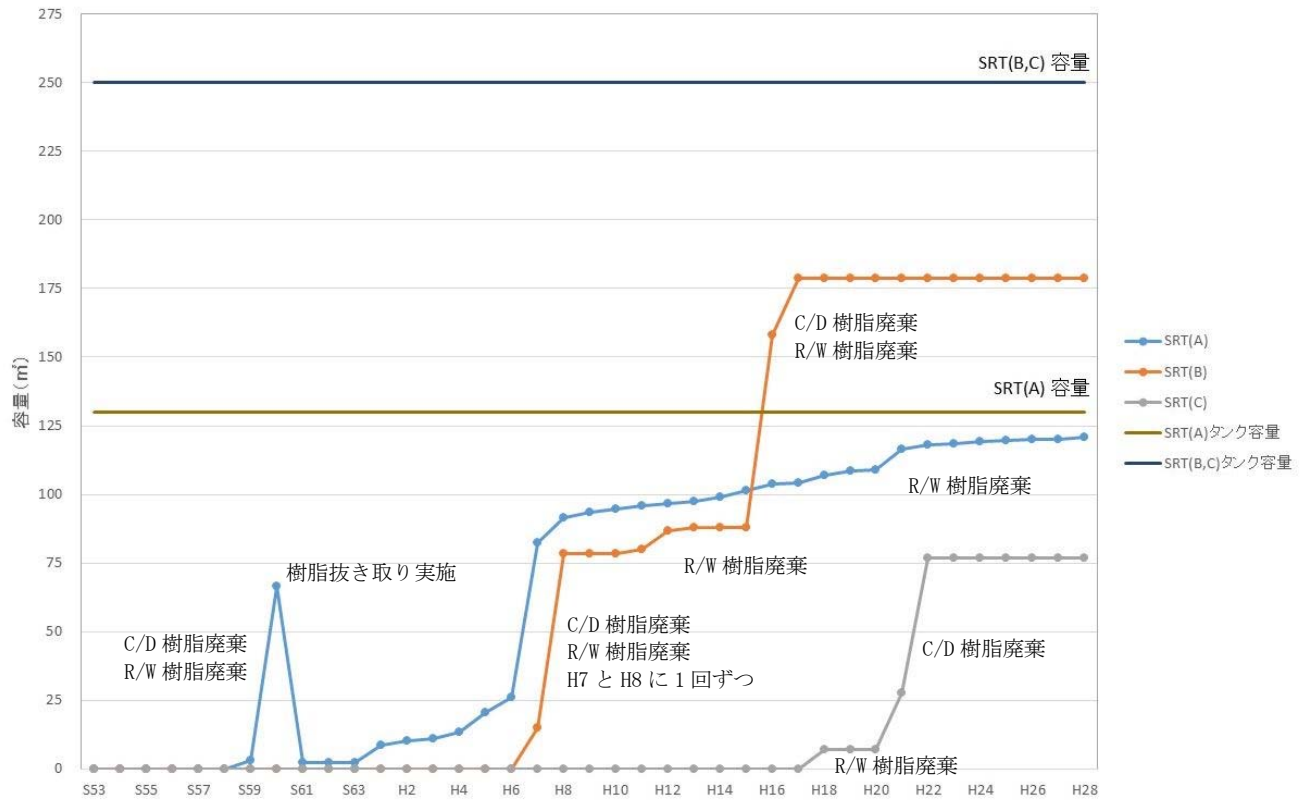


図 13 使用済樹脂貯蔵タンク受入れ実績

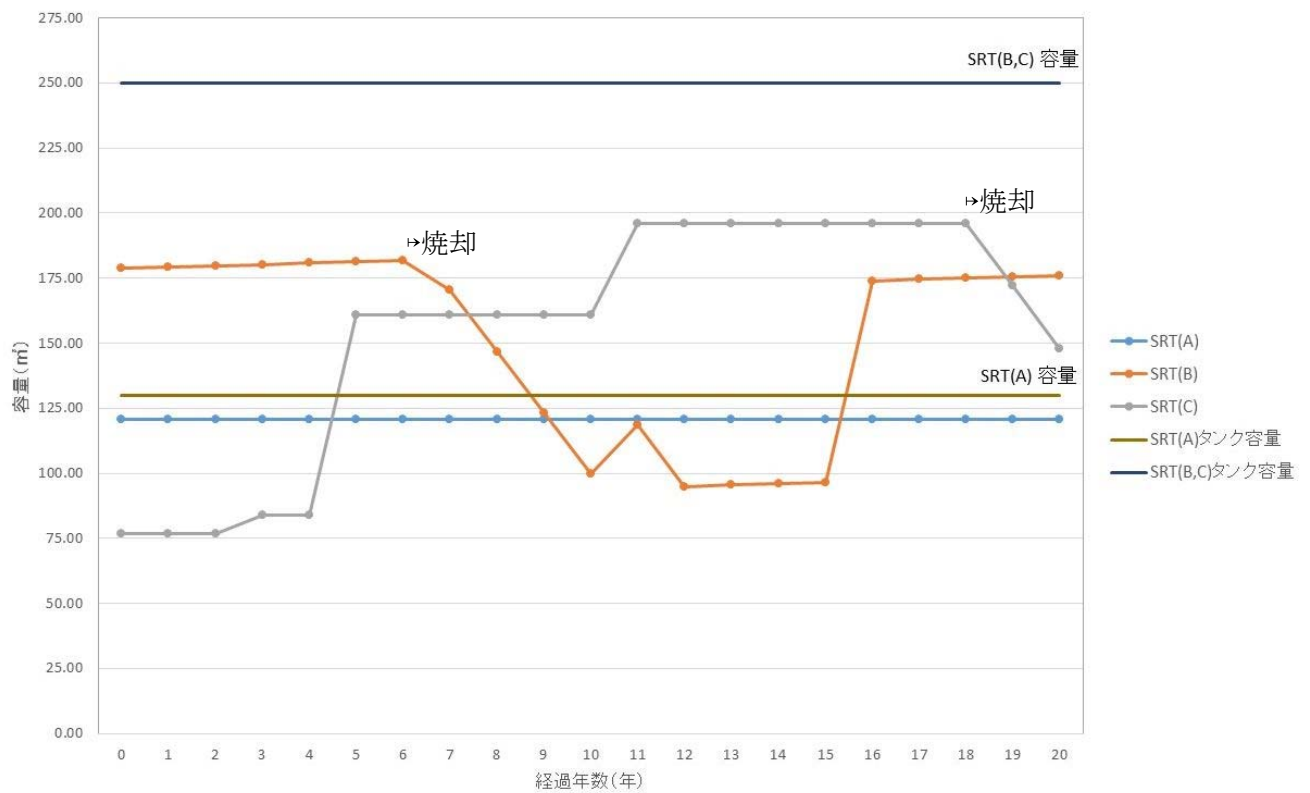


図 14 使用済樹脂貯蔵タンク貯蔵量予測

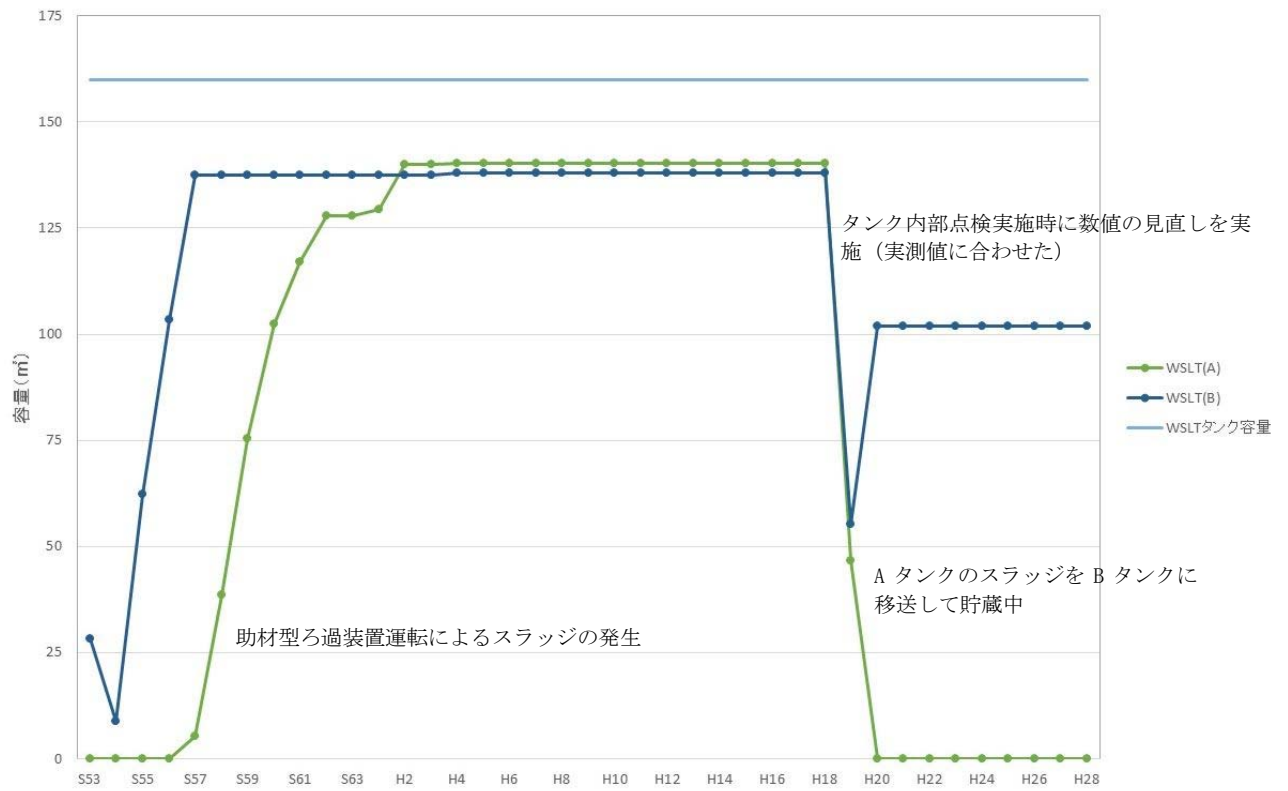


図 15 廃液スラッジ貯蔵タンク受入れ実績

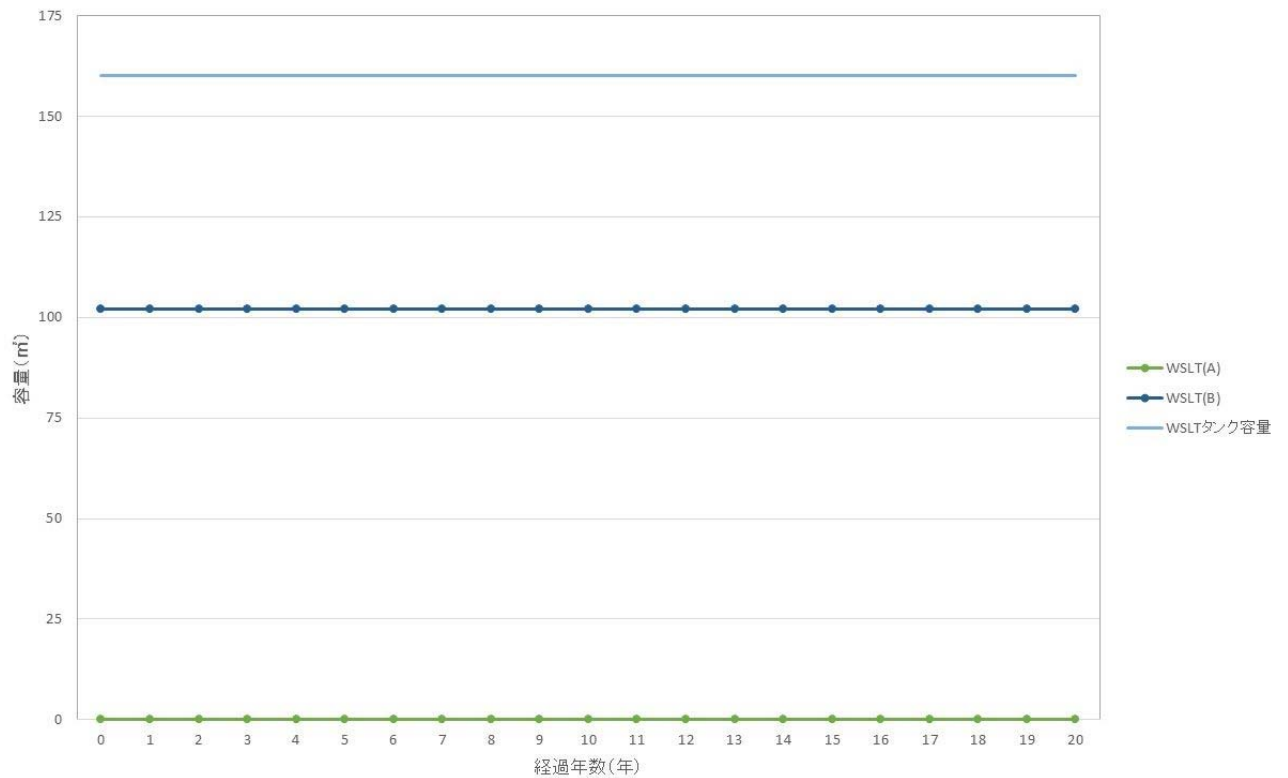


図 16 廃液スラッジ貯蔵タンク貯蔵量予測

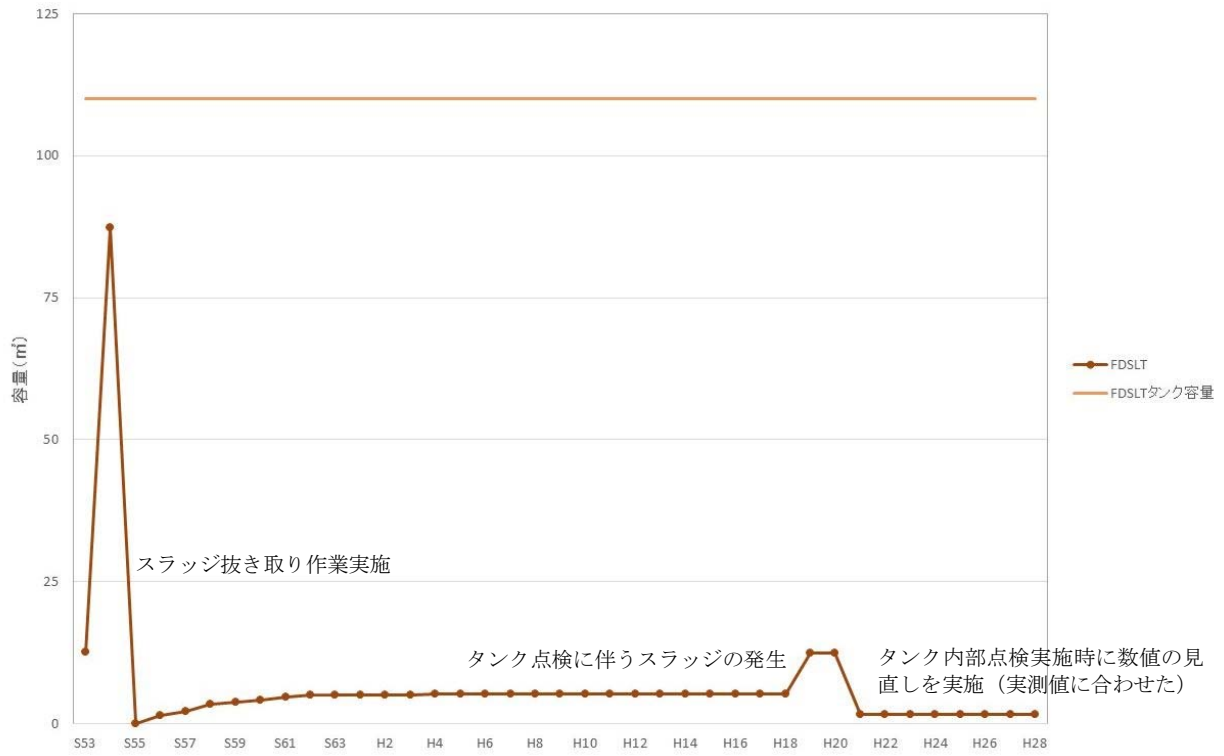


図 17 床ドレンスラッジ貯蔵タンク受入れ実績

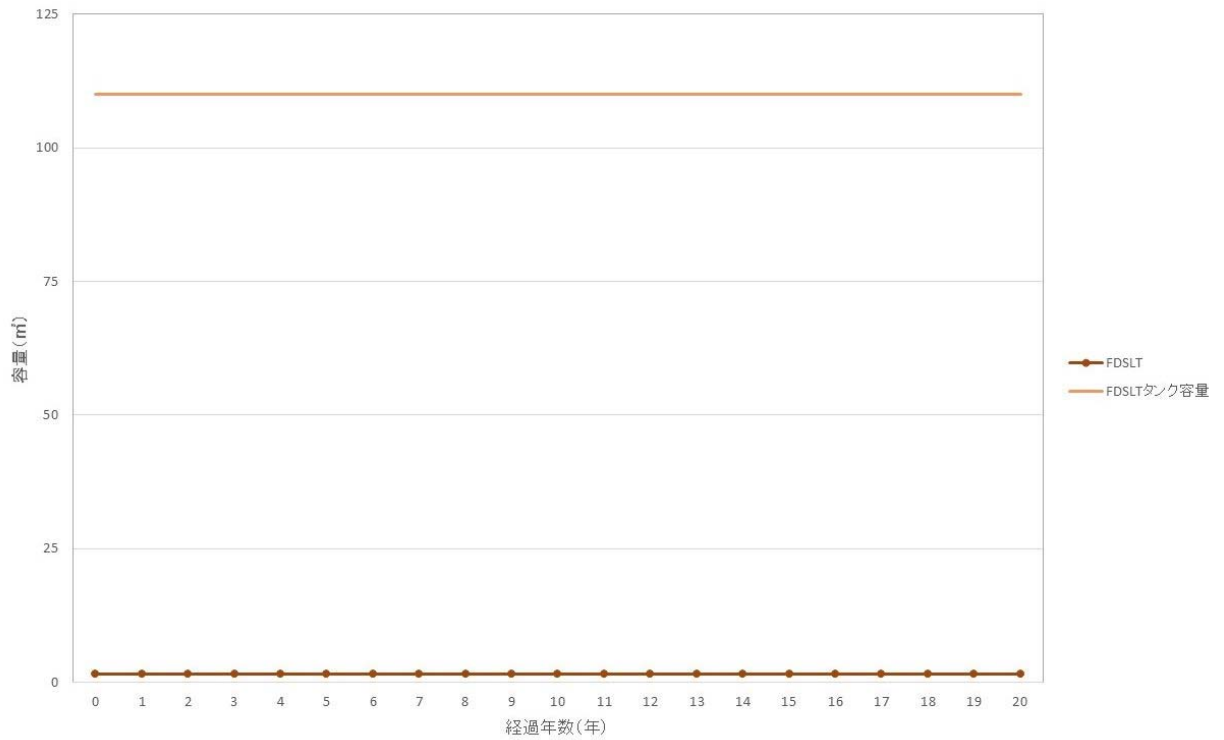


図 18 床ドレンスラッジ貯蔵タンク貯蔵量予測

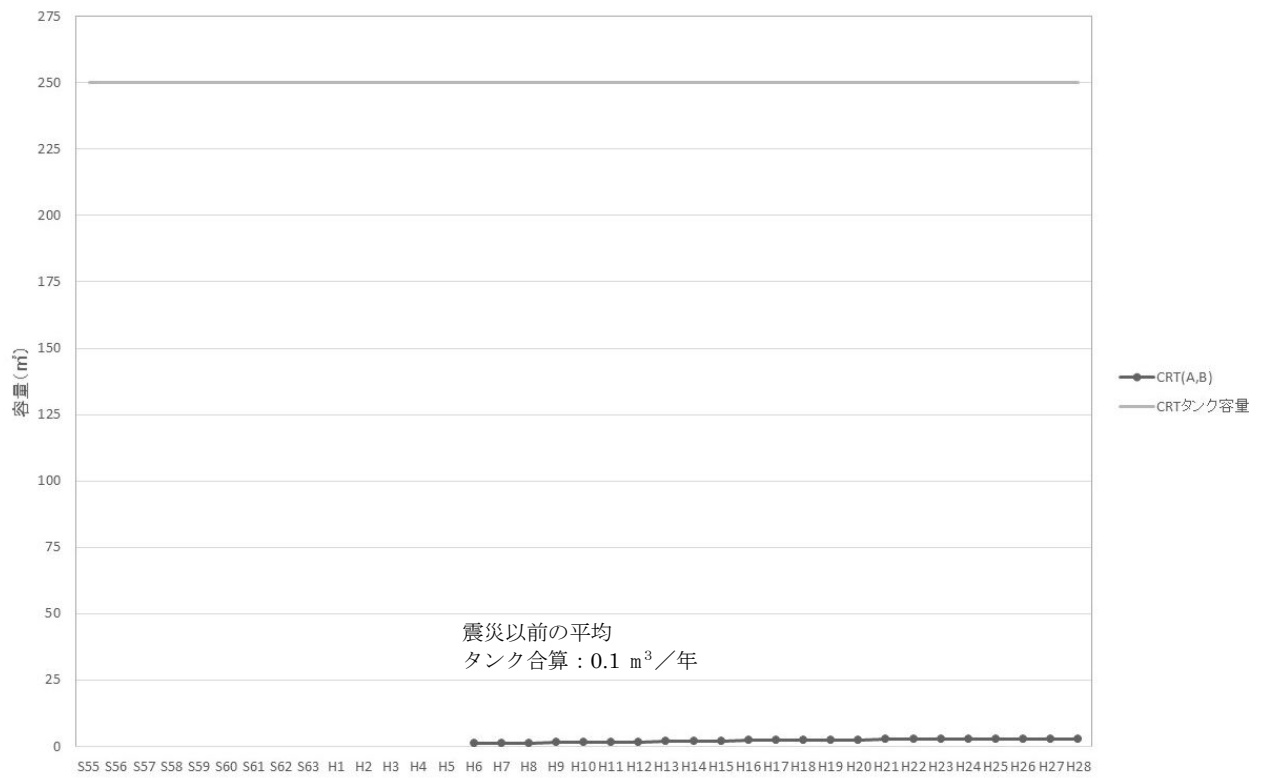


図 19 クラッドスラリタンク受入れ実績

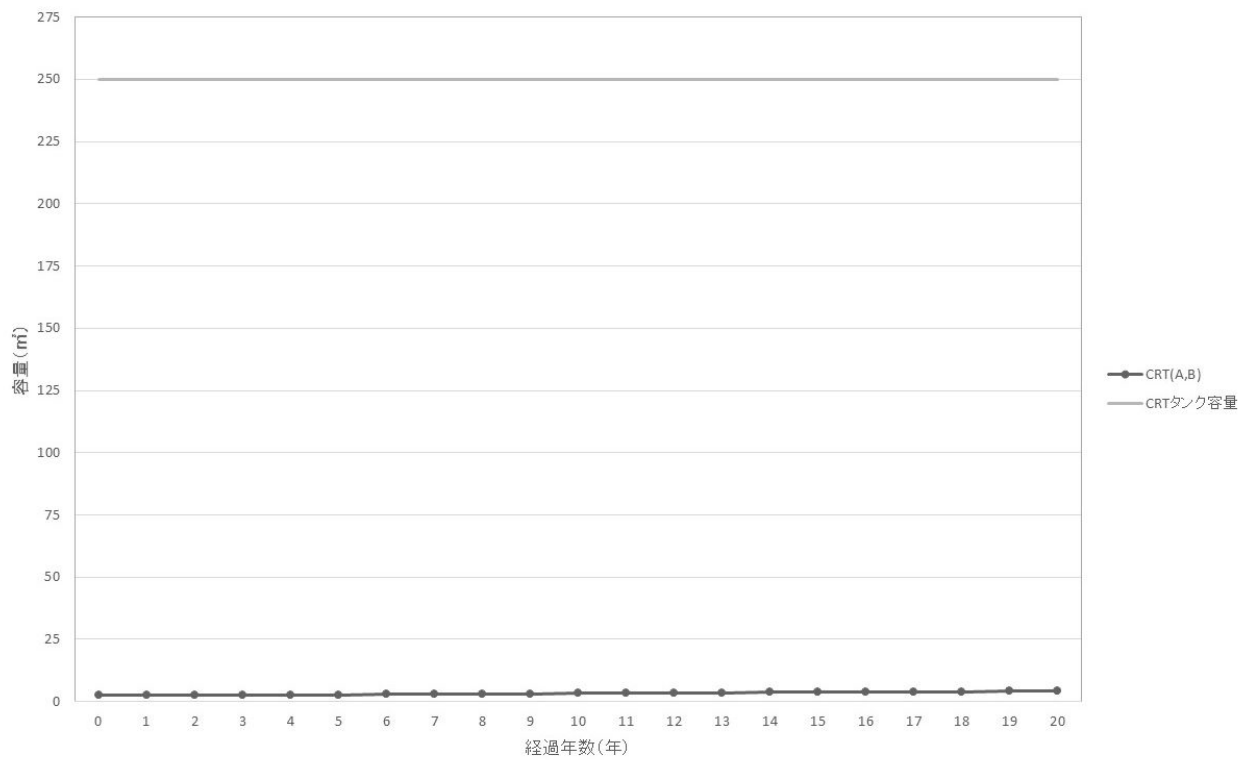


図 20 クラッドスラリタンク貯蔵量予測

表5 各タンクの容量と廃棄物発生量

タンク	略称	タンク容量 (m ³)	保管廃棄物	今後の発生予想量
使用済樹脂貯蔵タンク (A)	SRT (A)	約 130	<ul style="list-style-type: none"> ・復水脱塩器から発生する使用済粒状樹脂 	<p>約 70 m³ / 5 年 (復水脱塩器 10 塔分)</p> <p>樹脂の性能劣化を考慮し約 5 サイクルで交換する計画。</p>
使用済樹脂貯蔵タンク (B)	SRT (B)	約 250	<ul style="list-style-type: none"> ・機器ドレン処理系脱塩器から発生する使用済粒状樹脂 	<p>約 7 m³ / 5 年</p> <p>樹脂の性能劣化を考慮し約 5 サイクルで交換する計画。</p>
使用済樹脂貯蔵タンク (C)	SRT (C)	約 250	<ul style="list-style-type: none"> ・凝縮水脱塩器から発生する使用済粒状樹脂 	<p>約 0.5 m³ / 年</p> <p>樹脂の性能劣化に伴い交換。過去実績より算出。</p>
使用済粉末樹脂貯蔵タンク (A)	SPOWT (A)	約 140	<ul style="list-style-type: none"> ・原子炉冷却材浄化系及び燃料プール冷却浄化系フィルタ脱塩器から発生する使用済粉末樹脂 	<p>約 3.6 m³ / 年</p> <p>樹脂の性能劣化に伴い交換。過去実績より算出。</p>
使用済粉末樹脂貯蔵タンク (B)	SPOWT (B)	約 140	<ul style="list-style-type: none"> ・助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ 	<p>助材型ろ過装置 (機器ドレン系) の撤去により発生しない</p>
廃液スラッジ貯蔵タンク (A)	WSLT (A)	約 160	<ul style="list-style-type: none"> ・助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ 	<p>助材型ろ過装置 (床ドレン系) の撤去により発生しない</p>
廃液スラッジ貯蔵タンク (B)	WSLT (B)	約 160	<ul style="list-style-type: none"> ・助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ 	<p>助材型ろ過装置 (床ドレン系) の撤去により発生しない</p>
床ドレンスラッジ貯蔵タンク	FDSLT	約 110	<ul style="list-style-type: none"> ・非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ 	<p>約 0.09 m³ / 年</p> <p>非助材型ろ過装置性能低下に伴い洗浄。過去実績より算出。</p>
クランプドスラリタンク (A)	CRT (A)	約 250	<ul style="list-style-type: none"> ・非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ 	<p>約 0.09 m³ / 年</p> <p>非助材型ろ過装置性能低下に伴い洗浄。過去実績より算出。</p>
クランプドスラリタンク (B)	CRT (B)	約 250	<ul style="list-style-type: none"> ・非助材型ろ過装置から発生する廃スラッジ 	<p>約 0.09 m³ / 年</p> <p>非助材型ろ過装置性能低下に伴い洗浄。過去実績より算出。</p>

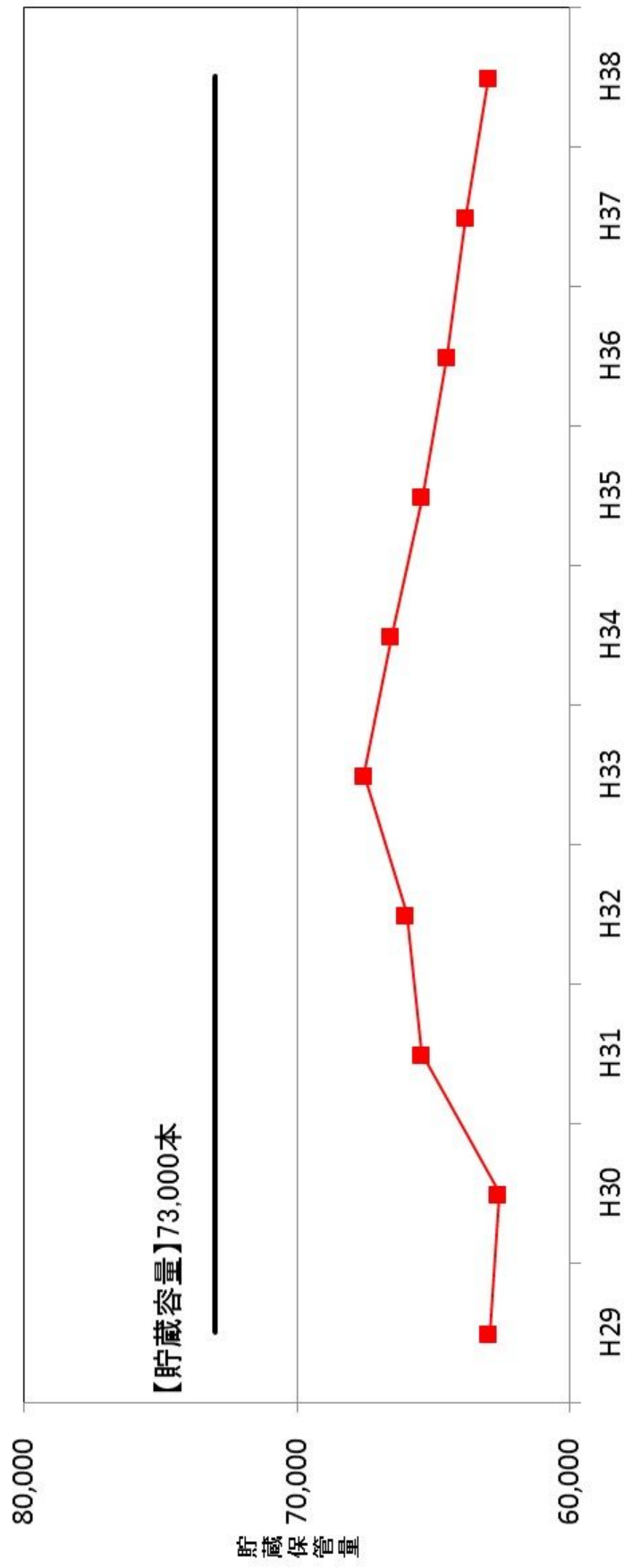


図 21 固体廃棄物貯蔵庫（東海発電所と共用）の貯蔵保管量予測